真剣で王に恋しなさい！

兵隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で王に恋しなさい！

【Ｎコード】
Ｎ８３２１Ｌ

【作者名】
兵隊

【あらすじ】
天上天下唯我独尊な少年――霧夜王貴が往く物語。
そんな少年が他人に触れてどう考えを変えるのか。

主人公は王様キャラです！
あと、最強キャラなので『まじこいのくせに男なのに最強キャラとはこれいかに』と思われるかと思いますがよろしくお願いします！

※ご感想、ご指摘随時受け付けておりますのでよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

小説書くのは初心者です。
作者の筆力向上、並びにこの作品をより良い物にするため、皆様の忌憚ない意見をお待ちしております。

プロローグ

「グッ……！」

スーツを着た屈強な男の苦悶の声が聞えた。

場所は路地裏。空を見ると、真っ暗な事から真夜中である事が分かる。

「ガッ……！ッ……」

体が痛みに訴える中、路地裏の壁に向かって男は這う。腕に走る痛みに耐えながら、背に走る痛みに耐えながら、足に走る痛みに耐えながら。

壁に向かうまでかかった時間は十数秒。しかし、男にとっては数十分はかかったと錯覚させるには十分すぎる時間だった。

男は息絶え絶えながら体を預けるかのように壁に背持たれる。

そして、辺りを見回した。

その光景は男から見たら地獄のような光景だった。

そこには男と同じようなスーツを着た者。動きやすい服装な者。全身を鎧のような重装備で固めた者と、様々な者達が無様に倒れていた。中には女性のような体型のような者までいた。

地面には剣やら槍やら青龍刀やら色々な武器が刺さっており、壁にもボールアクションのようなモノや様々な武器が刺さっていたり、めり込んでいたりとここで戦争でもおきたのかような有様だった。

その者達をみて男は震える両手で覆いながら思う。

（どうしてこうなった……）と。

自分と同じように、倒れている連中も大金で雇われた者たちなのだろう。

男は殺し屋だった。

ある日、男のもとにスーツを着た男性と女性が現れる。

彼らが持ちかけられた依頼はこうだった。

『少年を始末してくれ。報酬はいくらでも払おう』

男も最初は怪しく思った。それはそうだろう。少年を一人始末するだけでいくらでも報酬を払うと言うのだ。しかし、そこは金の魔力なのだろうか。男は欲望に目がくらみ依頼を承諾してしまった。

そして、指定された場所に向かった。

そこには男の他に１０名ほどの者たちがいた。皆、一癖二癖あるようなヤツらで男にはすぐにこいつらも雇われたヤツらなのだとわかった。

それを見つつ、どう探そうか考えるも、

標的はすぐに見つかった。

金色の頭髪にルビーのような赤い瞳。そして、整った顔つき。黒いライダースーツのような格好をしていた。

男は少年を見てハーフなのだろうか？と疑問を持ったが、どうせ始末するのだ。そんな事気にしても意味は無いだろうと疑問を切り捨て、始末する準備に取り掛かった。

男が取り出したのは小型の拳銃。戦争をしにいくのではないのだから簡単な拳銃でいいだろうと言うのが男の考え。

多額の報酬で雇われた男たちは標的を見つけたが、誰も行動に移そうとしなかった。

場所が場所だったからだ。標的が居るのは比較的人が多く存在する大通り。標的が動かない限り、殺し屋たちは待たなくてはならない。

しかし、殺し屋達に焦りは無い。彼ら、彼女らにとってこの仕事は初めてではないのだ。焦ってしまっては怪しまれることは熟知している。中には、早く帰って撮っているドラマの続きを早く見たい。と考えている者までいる始末。

数分後。

標的の少年はすぐに動いた。

そのまま大通りを行くのではなく、路地裏に歩いて行く。

（近道のつもりで通ったのだろうか？）

男は疑問に思う。しかし、何かが変だった。

――――さっきまで確かに歩いていた人間がいなくなっていた。

男以外にも、殺し屋達も疑問に思ったのか。誰も少年が入っていった路地裏に足を向けようとしない。むしろ、人としての、動物としての本能が行く事を拒否する。

――行ってはならない、と――殺される、と

真っ暗で先が見えない路地裏。その光景は男にとって化け物が口を開いて待っている様な錯覚に陥る。

男の頬に嫌な汗が伝う。足も地面にしっかり着いているのだろうか。足の力が入らない。手に握っている拳銃も落ちそうになる。

無限に続くと思われたその時。殺し屋の1人が少年の入っていった路地裏に足を踏み入れた。

――行くな！

男が声を上げようとするが、震えて声が上手くでない。

そんな男を無視するかのように、次々と路地裏に足を踏み入れる殺し屋達。男も不安に思う心を振り切るかのように路地裏に足を踏み入れた。

（そうだよ。ガキ一匹殺してそれでお終いじゃねぇか。何を怖がる事がある。楽勝だ……、いつも通り殺して終わり……）

男は念仏のように自分に言い聞かせる。

しかし、

「よく来たな。屑共」

突然の声に、男は体をビクッと震わせる。

その声の方向に視線を向けると、

「遅かったではないか。王（オレ）待たせるな。無礼者共が」

標的の少年が堂々と立っていた。しかし、こちらを見ていない。空だけを、正確に言えば月を見ながら堂々と立っている。

少年を見て男はすぐに理解した。この意味不明な恐怖の原因を。この体からにじみ出る変な汗の正体が。

この少年には誰も勝てない。人間である以上この少年に勝つのは不可能。そう思わせるには充分なオーラを少年は纏っていた。

「オレ達に気付いてったて事か？」

「くだらん謀よ。そうまでして王（オレ）を消したいか」

少年は喉を鳴らす様にして笑う。殺し屋達の事を視野に入れていないかのように、初めから聞いていないのかのように。

それが癪に障ったのか、無視された殺し屋は持っていた拳銃の銃口を少年に向けながら、

「テメェ、自分の立場分かってんのかっ！」

そこで初めて少年はようやく殺し屋達に視線を向ける。

少年の瞳には怒りの一色。まるで、道端に落ちている汚物を見てしまった。と言うかのような視線。

「屑風情が王（オレ）に口を聞くか……」

そう言うと少年は片手をポケットに突っこんだまま、もう片方の腕を軽く上げる。

そして、その片腕を振り下ろす。

「――――――――っ！！？？？」

それだけの動作で、銃口を向けていた男の腕に何かが刺さり、そのまま貫通していた。

それは剣だった。なんの装飾もされていない剣。それはまるでお前程度ではそれでお似合いとでも言っているかのようなものだった。

さっきまでの威勢はどこにいったのか。銃口を向けていた男は腕を手で押さえながらその場に蹲った。

その前にどこから剣をだしたのか？どうして腕に刺さったのか？という疑問すら許さないかのように、

「さぁ、開演を赦すぞ屑ども」

少年は愉快そうに口を開く。

そして、両手を広げて歓迎するかのように、

「道化の芸が王（オレ）に届くか否か。時間を割いてやろうではないか」

こうして、一方的な虐殺が始まった――

誰も抗うこと無く、誰も届く事無く、虐殺は幕を閉じた。

「うぅ……がっ……！」

男は震える。恐怖で、純粋な恐怖で泣きながら体を震わせた。
しかし、同時に心の底で自分は助かったのでないか？と、思い始める。
暴力の象徴だった少年はもういない。そして、自分は生きている。

そうだ。このまま警察に駆け込んで自首しよう。罪を償おう。こんな職業から足を洗おう。
男は夢のように思い描く、

「ほう、まだ生き残りがいたか」

この言葉に現実に引き戻された。
声のした方向を男はゆっくりとした動作で慎重に視線を向ける。

「流石屑だ。しぶといな？」

暴力の象徴が立っていた。
少年はゆっくりとした動作で、男に堂々と歩みを進める。殺される立場と殺す立場。狩る側と狩られる側が一気に逆転した。

――殺される。
男は素直にそう思った。それだけの力を少年は持ってたからだ。
しかし、男の想像とは違った行動を少年は行った。

少年は男の前に立つと、持っていたナニかを男に放り投げる。

それは小型の拳銃。男の唯一の生きる術の武器だった。
ここにきてどうしてこんなものを渡してきたのだろうか？少年がその気になれば、意図も容易く男は死ぬのに。男は受け取りながら混乱する。

そんな混乱でさえ少年にとって娯楽なのだろうか、愉快そうに、

「いずれは世界の王となる王（オレ）に手を上げた罪は重い。故に考えるまでもなく死刑。……なのだが、それでは一方的すぎて面白味もない」

故に、と少年は言葉を区切る。すると、両手を広げた。まるでそれは何も抵抗しないと言っているかのように、

「一撃だけ、王（オレ）に刃向かう権利をやろう」

男は少年の言葉に呆然とする。
ここに来て少年の言う事に理解できない。自分は目の前にいる少年に勝てない。それは決まりきっている事だ。しかし、万が一という事もある。もし、何かの冗談で今男の手にある拳銃が少年を妥当してしまった――。もし、万が一、男が他の武器を所有していたとしたら――。
少年にとって自分の命でさえ娯楽に入ってしまうのだろうか……。

「どうした？　よもや、刃向かう気すらないと？　生き延びる好機すら貴様は逃すと言うのか？」

嗜虐の笑みを浮かべ、少年は男のの様子を興味深そうに見つめる。
男はこの笑みに全てを理解した。
少年にとってこの行為は、自分の命でさえ娯楽に入っているから

であっての行為ではない。殺されないという自信があるから、絶対の自信があるからの行為だった。
そして、何故男に拳銃を渡したか。それは男の反応を楽しむ為の、それだけの行為だった。まさに少年の気まぐれで男は生かされていた。

少年の娯楽の為に生かされている。その事実に男は怒りに震える訳でも無く、絶望する訳でも無く、ただ、当たり前のように受け入れる。
実際に、自分がここでつまらないことを言葉にすれば目の前の少年は当たり前のように、呼吸をするかのような自然さで自分を殺すだろう。

だったら自分がやる事は一つだ。

「ほう？」

銃口を少年に向ける。
絶え絶えだった呼吸音も、体中に走っていた震えも止まっていた。
これが悟りの極致なのだろうか。と、男は他人事のようにぼんやりと思いながら、

――引き金に掛かった指を引いた。

路地裏に、うっすらと漂う硝煙の特有の匂いが充満した。空の薬莢が地面に落ち、甲高い音が遅れて響く。
確実に、発砲された。拳銃から確実に、銃弾が発砲された。そのまま弾丸は、少年の肉と骨を貫き、絶命させる――、

「よいぞ、屑らしい見事な抵抗であった」

筈だった――。

距離、銃口の角度と少年の頭を狙った筈だったが少年は五体満足。どこか怪我をしているそぶりすらない。
どうやって防いだのか？何故生きているのか？と疑問に思うが、男はすぐに考えるのをやめた。
どうせ死ぬのだ。考えても意味が無い。男はそう考えたのだ。

しかし、

「フム、気が変わった」

少年はそう言うと、男に背を向け歩き始める。
その少年の行動に驚いたのは男本人だった。

「俺を殺さないのか……？」

「圧倒的な力を示した王（オレ）の前で貴様は抵抗してみせた。その褒美に王（オレ）に刃向かった事を赦そう」

それに、と言葉を区切り。

「明日は学校がある」

そう言うと、金色紅眼の少年は闇へと溶けるかのように路地裏から姿を消した。

残ったのは男と、殺し屋だった者達のみである。

（霧夜め。そこまでして王（オレ）を恐れるか……）

路地裏から去った金色紅眼の少年――霧夜王貴は摩天楼の一角に立ちながら眼下に広がる光景を見降ろしていた。

先程の殺し屋達は十中八九霧夜の者たちが差し向けた者達。それでも昔よりは数も減ってきているが。

この下にはどれだけの屑達がいるのだろうか。と、王貴は考えるが、直ぐに思考を違う事に向けた。どんな人間がいようと、どれだけだけの人間がいようが彼にとってそんな事はどうでもいいことだからだ。

（川神学園か……。精々王（オレ）を楽しませて貰おうか）

プロローグ（後書き）

名前のネーミングセンスの無い。どうも作者です。
偉そうな名前を考えた結果「王貴」って意味不明な名前に。

初投稿ですがよろしくおねがいします。

第1話　王の編入

「フム……」

川神学園。学長室で一人川神鉄心は息を吐いた。重苦しく、悩みを孕んだものだった。

鉄心の机には一枚の紙が一枚。正確に言えば、ある人物の事がのっている資料が一枚。その人物は鉄心も知っている人物ならなおさらだった。

名前は“霧夜王貴”

霧夜カンパニーの嫡男。

他者を圧倒する存在感と圧倒的な力を有する少年だ。まさに王として生まれべくして生まれた少年。

しかし、性格が傲慢で傲岸。いや、これはなるようにしてなってしまった性格だった。

鉄心は少年を哀れに思う。

何せ少年が生まれて十数年。家族の愛情とうものに少年は触れた事が無かったからだ。

少年は刺客から狙われる毎日。暗殺される毎日だった。家族は恐れていたのだ。少年の存在を。少年の力を。

人は自分の理解できないと感じた際にとる行動は二つだ。恐ろしいモノなら逃げ惑い、そうでないのなら認めない。

霧夜の連中は愚かにもこの後者を選んでしまったのだ。

それからの少年の生活は一変する。

欲望と憎しみが交差する闇の世界へと堕ちていった。

少年も最初は抗おうとしただろう。他人を信じようとしただろう。だが、それは全て無駄に終わる。裏切られ、傷つかれる毎日。

そのうち少年は――他人を信じる事を止め、自分だけを信じる様になった。

第三者が聞いたら哀れに思うだろう。だが、事情を知っている鉄心にとって第三者が思うよりも哀れに思う。

鉄心も最初は何とかしようと考えたが、――時はすでに遅し。

それに鉄心は最強の武道家といっても、ただの人間だ。財力では霧夜カンパニーには到底勝てない。故にどうしようも無かったのだった。

しかし、少年はこの学園へとやって来る。ある人物の計らいで少年はこの川神学園へとやってくる。何とかしてやりたい。何かをしてあげたい。

「むう……」

だがしかし、冴えた手が思い浮かばない。

当たり前だ。体も心も一日にして成らず。そしてそれは、鉄心自身ですら知っている。人の心と言うものはそう簡単には変われない。それが幼い頃から染みついてるのならばなおさらだ。

少年のの孤独を癒すことが出来るだろうか。妙案がまったく見つからない。見つけられない。

「何ともならんものかの……」

言葉にすると、驚くほど素直にその感情は鉄心の胸にしみこんでいた。鉄心にとって少年は昔から知っている者。それと同時にもう一人の孫のような存在であったからだ。

そして、同時に脳裏に浮かんだもう２人の孫娘の姿。

そうすると、コンコンと、学園長室をノックする音が聞えた。

来たか。と、鉄心は心の中で呟き、机に出しっぱなしだった資料を机の中にしまう。

「開いておるぞ」

彼がそう言うと、扉が開く。

そこには２人の人物がいた。１人は緑色のジャージに身を包んだ川神院の師範代でもあるルー・リー。

もう１人は金髪紅眼と特徴的な少年。霧夜王貴が威風堂々とそこにいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

…………………………………………………………

……………………………………………………………

「王貴、よく来たの」

鉄心は少年に向かって気軽に話しかける。しかし、少年はそれに応じない。

王貴はそれを無視するかのように学園長室にずかずかと歩みを進める。それはまるで自分の部屋に入るかのような自然さだった。

そして、そのまま自然すぎる動作で来客用のソファーに深々と座りこみ、正面にあった長机に足を乗せ付ける。

そうして初めて少年は鉄心に視線を向ける。

他者には自分を直視するな。と怒る少年も鉄心には怒らない。それだけで少年と鉄心は赤の他人ではないことが分かってしまう。

「中々いい部屋ではないか。貴様の部屋にしては勿体ないほどだ」

傲岸不遜に言い放つ少年に鉄心は、相変わらずじゃのう。と苦笑いをする。

ルーはそんな少年を観察するかのように視線を向ける。

ルーは一流の、その中でも超一流といってもいい格闘家だ。その

格闘家から見ても今偉そうに、傲岸に座っている少年は同贔屓目しても凄まじい腕前とは言えなかった。しかし、只者ではない事が分かる。一般人とは異質の雰囲気を少年は持っていた。
それに危うさも持っている。どんなとは上手く言えないが、とにかく危うさを持っている。
どうして師範代はこの少年と知り合いなのだろうか？といった疑問がルーにあった。

――その時。

「屑よ、観察は終わったか？」

と、自分を観察していたルーに言い放つ。だが、視線はルーを見ていない。それは直視する事態勿体ないと言うかのようだった。
しかし、ジーっと少年を見ていた自分にも非があるだろうと、

「スマナイ。気に触れたのなら謝ろウ」

「よい、そのような視線には“慣れている”。此度は初犯ということもあるので不問にふす。だが屑よ、心得ておけよ。王（オレ）に2度目は無い」

少年の言葉の真意を読み取ったのか、ルーはそれ以上言葉を出さなかった。
2度目は無い。言葉通りの意味だろう。もし2度も同じ事をすれば命は無い。もし、口にしたら最後、殺し合いが始まるからだ。

「さて、王（オレ）にここまで足を運ばせた理由は何だ？」

「なに、お前にクラスを伝えようと思っての」

「……何だ、その理由は？」

心底どうでもいい理由に少年は眉唾だったのだろうか、傲岸不遜に笑みを浮かべていた少年がここで初めて年相応な表情を見せる。

しかし、直ぐにそんな表情は消え失せる。

そしてそのまま鉄心から視線をずらし部屋辺りを見回す。

「ところで王貴よ。どうしてお前がここに編入させられたかわかるかの？」

「そのような問答に何の意味があると言うのだ？」

「答えてくれんかの……」

少年はふーっとため息を吐くと、鉄心に視線を向けた。

その視線には憎しみや怒りなどと言った負の感情が込められていない。ただただ、魂まで凍えさせる冷然なる眼差しで鉄心を見据えていた。

人はどうやったらこんな視線が出来るのだろうか、そんな視線で王貴は下らないと言うかのように言い捨てる。

「簡単な事だ。霧夜の連中が王（オレ）を恐れここに編入させた。そんな理由だろう。つくづく下らん理由だ。だが、王（オレ）にはどうでもいい話ではある」

家族から、身内から厄介者とされている者がどうしてそのような眼が出来るのか鉄心にはわからない。いや、悲しむことすら慣れてしまったのだろう。

本当に本当に哀れな少年だった。

それに少年は誤解している。

何故この学園に少年を編入させたのか、何故この少年を遠ざけたのか。

ここに少年を編入させてくれ、と頼み込んだ女性の真意を少年は誤解していた。それがなんと悲しい事か。女性から口止めされている鉄心からは言えない。そういう約束だったから。

「それで？　王（オレ）はどこのクラスなのだ？」

少年には悟られてはいけない。故に鉄心は感情にふたを閉め、自然な素振りで、

「そうじゃの、お前のクラスは――――」

願わくば、この誤解が早く解けるように、と鉄心には祈る事しか出来ない――。

第1話　王の編入（後書き）

頻繁に更新しようと頑張ります。どうも作者です。

皆さんのご要望、感想がありましたらなにか気軽にお願いします。

第2話　2年S組にて

「ふっはははははははは！　みなのもの、おはよう！　九鬼英雄である！」

川神学園の朝の教室。2年S組から1人の男性の声が聞えた。

その名前は九鬼英雄
九鬼財閥の嫡男で、2年S組の委員長をやっている男だ。
銀髪の髪を逆立てており、その額には×印の傷が特徴的な男。
その瞳からは強い意志が見える。

その英雄の横に控える様に立っている女性が1人。
名前を忍足あずみ。
英雄の専用の従者で、メイド服に身を包んだ女性だった。

「みなさーん♪　英雄さまが挨拶をしているのですよ～？　拍手拍手～」

と、あずみは一歩前へ出ると2年S組の面々に拍手をするように施す。
いや、それは“命令”だった。

あずみは笑顔で言っているが、英雄の見えていない角度で一本の短刀を出しながら言っている。それはもう「オラッ、拍手しねェとこの短刀でお前等の喉笛カッ切るぞ？」と脅している様なモノだった。

そして、2年S組の面々はあずみの性格を知っている。彼女は英雄の為なら何でもやる。そんな女性だった。

そんなあずみの脅しに屈するほど彼らはヘタレで――、

「英雄くんおはよう！」

「あっ、あぁ！　英雄くんおはよう！」

「いい朝だね英雄君！」

――あった。

顔を青くしながらも英雄に朝の挨拶をする2年S組の面々。

英雄もうんうんと、頷き、

「ふはは！　元気だな貴様ら！　だがしかし顔が青いぞ？　ちゃんと睡眠をとるがいい。我は毎日ばっちり8時間睡眠である！」

「キャーッ！　流石です、英雄さまー！」

それを心の底から絶賛するかのように言うあずみ。しかし、彼女のこれは演技でも無く本物。それほどまでに彼女は英雄に心酔していた。

「相変わらずだよなお前ら……」

と、そこに弁髪ヘアー（ようするにハゲ）の男性が近づく。

名前を井上準。

２年Ｓ組のツッコミ役で、勉強もこなし、スポーツもできて、趣味は料理と中々の完璧超人っぷりな人物だ。親も葵紋病院のＮｏ．２と将来の有望株。さらには、周囲に「ハゲ」呼ばわりされてもハイハイとすましてしまうほどの心の広さっぷり。

しかし、彼にはそれらすらもマイナスにしてしまう秘密がある。

「むっ？　ロリコンではないか」

「あぁそうだよロリコンだよ！　ロリコンの何が悪いんだよっ！　謝れ！　全国のロリコンさんに心の底から謝罪しろ！」

そう、彼はロリコンなのだ。このせいでプラスマイナスゼロ。むしろマイナスにしてしまっている。

時々ノーマルな女子生徒から告白されているが、この性癖なためか全て断っている。

そして、本人が言うには「俺は女の子（ロリ）とお風呂に入りたいだけだ！　ただそれだけの、純粋な粉雪な心なんだ！」と言っている辺り尚更たちが悪い。

「準冷静になって下さい。別に英雄はロリコンを悪く言っていませんよ？」

「そうだぞー。ハゲハゲー♪」

「あぁそうだな、スマン若。あと、ユキ？　人の頭をハンカチでキュッキュッ擦るの止めなさい」

準に若と呼ばれた色グロの眼鏡をかけた男性の名前は葵冬馬。そして、ユキと呼ばれた準の頭をハンカチで擦っている、白い髪色でロングヘアー。肌も色白の女性。名前は榊原小雪。

冬馬は学年で成績一位の優秀者で、川神市一の大病院『葵紋病院』の１人息子。

おまけに外人とのハーフでルックスも良く、知的な雰囲気と紳士的な振る舞いも相まってか女性からモテる。実際彼その事を自覚してか女性を口説いたりしている。

そして、あの俺様至上主義の九鬼英雄が唯一の友と認めているあたり只者ではない事が分かる。

２年Ｓ組の軍師的存在でもある。

小雪はいつも１人でフラフラしているのが特徴な女性だ。

容貌も美少女の部類に入るらしく、男から言い寄られるがまったく相手にしない。そして、一人称も僕と珍しい。天然と言うより電波。突発と言うより突然といった言葉の似合う女性だ。そのためか何に楽しんでいるのか、何に悲しんでいるのか感情が読めない。

しかし、冬馬と準にはそれが分かるらしい（ちにみにそれは学

園の7不思議の1つとして数えられている）。それもこの3人が幼馴染だからだろう。
そんな訳のわからない彼女だがお菓子が好きであり、特にマシュマロが大好物のようだった。

「それより英雄知っていますか？」

「何がだトーマ？　許す申せ」

「何やら今日この2年S組に転校生が来るらしいのです」

冬馬の発言に英雄は「なに？」と1つ思案する。

他のクラスならまだしも、2年S組に転校生などありえない事だ。2年S組は定期試験で上位30名までの者だけが入れるクラス。言わば特進クラスだ。そのクラスに転校生など異例中の異例。
それに数日前に2年F組に転校生が来たばかりである。こんな短期間で転校生が来るなんてありえない。

「トーマよ。何か情報は無いのか？」

「まったくありません。何やら学園側が隠蔽したいのか何も掴めませんでした……」

英雄も少し驚く。あの冬馬が何も情報が掴めていないのだ。これは完全に学園側は何かを隠している事になった。

謎は深まるばかりである。

と、そこに。

２年Ｓ組のドアが開いた。

そこから顎に髭を生やした、中年の男性が現れる。

名前は宇佐美巨人。２年Ｓ組の担任である。

「オラァー、お前ら座れー」

宇佐美は教室の教壇の上に上がると、バンバンと日誌を叩きながらめんどくさそうに言う。

しかし、流石２年Ｓ組と言ったところだろう。宇佐美がそう言うと文句を言わずに、瞬時に自分の席に座る。２年Ｆ組のように武力行使でも無いのに、だ。

生徒たちが席に座ったのを確認すると、宇佐美は自分の頭をポリポリとこれまためんどくさそうに掻きながら、

「お前等に連絡だぁ。なんとこの２年Ｓ組に転校生が来るぞー。んじゃ、入れ」

宇佐美もさっさと終わらせたいのか有無を言わさず転校生を招き入れる。

宇佐美が入ってきた開きっぱなしのドアから１人の金髪紅眼の

少年が入ってきた。
ネクタイをしていなく、第2ボタンまで開け、その上から川神学園のブレザーを着こなす少年。

その少年に英雄は見覚えがあった。いや、それはよく知る人物だった。
昔、それは少年がまだ他人を信じれた頃。英雄を“兄”と慕ってくれていた少年。

あまりの唐突な登場に英雄は思わず少年を見て固まる。

そんな英雄を知らずに宇佐美は黒板に少年の名前を書きなぐるようにして書いていく。
そして、黒板に書かれた文字は4文字。

“霧夜王貴”だった――。

第2話　2年S組にて（後書き）

王貴が2年S組に転校した理由は次の話に書いて行きたいと思います。

では、皆さんのご意見ご感想をお待ちしております。

第3話　2人の王2つの王道

鉄心が王貴を2年S組に編入させたのは至極簡単な理由だった。

個性の塊。いや、個性の爆弾のような王貴を1年生が扱いきれるわけがない。

ならば3年生ならいいのではないかと、疑問があるだろうがそれも同じ。川神百代以外に3年生に目立つ存在など、鉄心には心当たりがまったくなかったのだ。

そう言う理由で2年F組か2年S組のどちらかに王貴を編入させようと鉄心は考えた。

しかし、2年F組と王貴の相性はすこぶる悪いだろう。いや、悪いってモノではない。それはもう、水と油のような関係と言っても言い。

そのため、鉄心は王貴を2年S組に編入させたのだ。

しかし、それでも鉄心は心配だった。

何せ2年S組だ。

定期試験で上位30名だけが入れる特進クラス。そのためかほとんどの者達がプライドが高い。そんな場所に王貴を入れる。それがどれほどの事か、鉄心は考えるだけで身震いする。

何はともあれ、

「宇佐美のヤツ……。大丈夫かのう……？」
2年S組の担任。宇佐美巨人の心配をする鉄心だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

朝のホームルームが終わった2年S組。
その教室の中で宇佐美巨人はどこか疲れた表情で教卓の上に突っ伏していた。
何が原因か？それは簡単。突如この2年S組に転入してきた少年、霧夜王貴が原因だった。

普通の転校生ならこれからの学園生活を有意義にするために、愛想をフルに振舞って何とかクラスに溶け込もうと努力するだろう。

しかし、王貴の取った行動はそれとは見事に逆。愛想よく笑わないし、クラスに溶け込もうと努力すらしない。

さらには「王(オレ)を直視するな」と怒る始末。

そんな事を言われて黙っているプライドの高いエリート集団、2年S組では無い。だが、何も言わなかった。

それは王貴の雰囲気が言わせなかったのである。そこには宇佐美も感心した。常日頃手を焼かされているエリート集団を黙らせたのだ。

そして、王貴の紹介が終わるとこれ以上めんどくさい事になってたまるか、と言わんばかりに宇佐美は王貴の席の場所を教えるも、王貴はそれを無視し、教室から出ていった。転校初日にやるような行動ではない。

それからと言うもの、2年S組の教室の空気は最悪。

ある者はブツブツと独り言を言ったり、ある者は不機嫌そうに指を机にトントンと叩き、またある者は眉間に皺を寄せてひたすら舌打ちしている者までいる始末。

(最悪だ)

宇佐美は改めて心の中で呟く。

早くこの教室を出て、愛しの愛しの梅先生に会いたい。そして、朝のホームルームでストレスが溜まりに溜まってしまったこの心を

潤したい。
そんな事を考えているが、

（あん、待てよ？）

王貴のような生意気な人間を激しく嫌う筈の“アイツ”が王貴にいちゃもんをつけていないと宇佐美は思う。
朝の王貴の雰囲気にやられたか、と言えば宇佐美ははっきりＮＯと断言するだろう。
“アイツ”は確かに頭が良い。２年Ｓ組に在籍しているのだ。馬鹿ではない、馬鹿である筈がない。だが、行動が“バカ”なのだ。
そんな、２年Ｆ組を『山猿』とバカにするアイツが、王貴にいちゃもん付けない筈が無い。

宇佐美はそう考えると、ダルそうに教卓に突っ伏していた頭を、これまたダルそうに起こす。

その人物は宇佐美の目の前にいた。

２年Ｓ組には個性的な者達が居る。中でも学園指定の制服を着ないヤツらなんて数えるしか居なかった。
その中にいるのが、着物を着た少女――不死川心である。
由緒正しい家柄に生まれた事もあってか、周囲の者たちを庶民と心の底から見下し、選民思考である２年Ｓ組を象徴するかのような人物。それが不死川心だった。

だが、それも今は違った。

いつもの不死川心では無い。
担任である宇佐美巨人でなくても解る。不死川心はいつもと様子がおかしい。心はどこか嬉しくもある半面、どこか悲しそうにしており、どこか不安定な状態だった。
その状態で心は口を開いた。

「のう、ヒゲ。あやつは本当に『霧夜王貴』なのじゃな？」

「あぁ、そう言ったろ。と言うか、朝のホームルームお前何を聞いてたんだよ、マジで」

宇佐美は軽口気味で言う。
いつものならここで「此方になんたる口をきくのじゃ！」と普段の心なら言うだろう。しかし、心は何か考え事をしているのか自分の足元を見て黙っているままだ。

ここで宇佐美の目が光った。キュピーンと効果音がつくような音を出しながら、
そして、口元をニヤーっとだらしなく歪ませながら、

「……男か」

「――――っ！？　違うわ無礼者っ！　無礼者ヒゲ！」

「いいねー。青春してるねー。いやー、おじさん羨ましいわ」

「違うと言っておる！　王貴とは、そのぅ……昔馴染みじゃ……。それ以上でもそれ以下でも無い！　無いのじゃ！　断じてない！」

「あるぇー？　おかしいなぁ？　おじさん転入生のこと何て一言もいってないけどなー？」

「にょわぁぁぁぁぁぁっ！？　違う！　あやつの事ではない！　間違い、間違いなのじゃ！」

顔を真っ赤にして両手をバタバタと振る心を見て、宇佐美はひたすら、ただひたすらニヤニヤしている。いつもの鬱憤をここで解消してるのだろうか、かなり良い笑顔だった。

とそこに、

「ねーねー。霧夜王貴どこに行ったのー？」

榊原小雪が会話（“会話”と言っていいのだろうか疑問に思うが）に入ってきた。

両手には大好きなマシュマロが入った袋があった。どうみてもその量は1人では食べきれない。それを持って王貴を探しているあたり、彼に分けようとしているらしい。

「なんじゃ？　ユキはあやつに用でもあるのか？」

心は疑う様な目線で小雪を見る。その目線は夫の浮気を疑う妻のような目線だと宇佐美は思う。

しかしそんな視線をモノともせず、小雪は嬉しそうなのか悲しそ

うなのか分からない笑顔で、

「僕とアイツ似てそうだから話しかけてみようかなーって思ったんだよー。ブンブーン」

マシュマロが入った袋を振り回しながらそう言った――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

王貴が来たのは学園の屋上だった。
ここに来た理由は無い。ただブラブラと彷徨いここに着いたのだ。
2年S組に戻らないのは、ホームルームの途中で出てきてしまったから気まずいとかそんなセンチメンタルな可愛い理由ではない。
ただ、戻る理由が無いからだ。
戻っても意味が無い。だから、少年は教室に戻らない。

王貴は屋上から見える学園のグランドを見下ろした。
そこには体育の授業でも始まるのだろうか、生徒たちがジャージを着て準備体操をしている。その中で、一緒に準備体操をしたり、おにごっこらしき遊びをしたり、いきなり腕立て伏せでもしていたりと各々自由に好き勝手行動していた。

王貴はそれを何を思う訳でもなく、ただ黙って見ていた。
どうして準備体操をしているんだろう?どうして鬼ごっこをしているのだろう?どうして腕立て伏せをしているのだろう?と言った疑問は無い。彼らが何をしていようが、王貴には関係ないし、興味が無いからだ。たとえ、ここでいきなり銃を持ったテロリストが校庭にいる生徒たちを皆殺しにしてもこのスタンスは変わらないだろう。
勝手に生き、勝手に死ね。それが王貴のスタンスである。

と、その時、

「ここにいたのか王貴よ」

後ろから聞き覚えのある声が聞えたので、王貴は声のした方向に体を向けた。

その人物に王貴は見覚えあった。

それは自分が小さい頃。まだ身内に、『霧夜』に愛されていた頃に出会った。

「九鬼……英雄か」

額に×印の傷が特徴的な人物。九鬼英雄がいた。

その5歩後ろにはメイド服を着た従者らしき人物が立っている。

だが、ただ立っているだけではなく王貴を油断なく警戒しながら観察をしていた。

王貴はそれを承知で皮肉気に口元を歪ませる。その笑みは、新しい玩具を見つけた子供の様で、それとは比べるまでもなく危険な笑みだった。

「九鬼家の嫡男が王（オレ）に何の用だ？　まさか、挨拶だけではあるまい？」

「王貴よ。本当に変わってしまったのだな……」

「何だ、昔話でもしに来たのか？　ならば他を当たるがいい。王（オレ）に

はまったくない」

それとな、と言葉を区切り、口元を引き裂くようにして笑う。正確に言えば英雄の従者忍足あずみを見ながら、

「そこな野卑に見つめる従者をどうにかしろ。そんな目で見つめてくると、――思わず殺したくなる」

殺意を込めた一言。

その一言だけであずみを動かすのには充分だった。

あずみは一瞬にして英雄の前に立ち、護るようにして小刀二刀を構える。その顔は焦りと恐怖で色々混じり、冷や汗まで出ていた。

あずみは心象は化け物と対峙しているような感覚だった。

これでもあずみは傭兵部隊だった女だ。そんじょそこらの者達とは胆力が違うと自負と自信がある。しかし、目の前の少年はその自負、自信ですらも吹っ飛ばし、あずみを恐怖させた。こいつには勝てない、と。殺される、と。

どんな生活を送ったらこんな風になるのか、あずみはそんな事を考えていると、

「あずみ、下がれ」

主から命令が出される。

英雄は王貴から視線を逸らさずに、もう一言、

「あずみ、下がれ。我の命令だ、聞えんのか？」

「――っ！　ハッ、英雄さま！」

あずみは英雄の言う通り下がる。

あずみは主の素晴らしさを再確認した。あんな化け物と正面から対峙ししながら、堂々と、しかも眼を逸らさずにだ。自分がこんな体たらくにも関わらずに。

やはり英雄さま素晴らしい。そうあずみは再確認した。

そんな事ですらも彼の娯楽に入るのだろうか。

王貴は口元を愉快気に歪ませる。

「よい忠臣を持ったな？　王（オレ）の殺意を前にして正気を保つ奴などそうはおらん」

「うむ、我の自慢の臣下だ」

その一言に王貴は体を震わせながら、

「今、なんと言った？」

「あずみこそ我が最高の臣下だと言った」

その一言で震わせながらも我慢していたモノがはじけ飛んだ。
それは凶笑。
淫らに、限りなく下品に、ありとあらゆるモノを足蹴にするかのように何の戸惑いもない笑み。
金色紅眼の少年は笑いに息切れしながらも途切れ途切れに言葉を漏らす。

「――貴様――昔、九鬼帝を制し――世界の商業を占めると言ったな？――それはもはや世界の――王と言っても過言ではない。そんな者が、王（オレ）の前でほざきおった男が臣下だと？　こいつは傑作だ！　九鬼英雄！　お前は極上の道化だな！」

もはや抑えが利かぬと言わんばかりに笑う王貴。
笑いすぎたのだろうか、目尻に涙を溜め、それを笑いながら指で拭く。

「戯けた事を。王とは孤高であるべき存在。絶対者にして君臨者の事を人は“王”と言う。そこに臣下などと言った不純物は不要」

「孤独の王道か……。なぁ、王貴よ。何がお前をそこまで変えた。誰がそこまでお前を変えたと言うのだ……！」

英雄は悔しそうに顔を歪ませ、拳をグッと握る。握りしめすぎているのか、指の部分が白くなってきている。
そんな英雄を見て、何を思う訳でも無く、ただ愉快気に表情を変えながら、

「ハッ！　王（オレ）は何も変わってはおらん。目覚めたのだ。この下らん世界の理にな。その点で言えば、『霧夜』に感謝せねばなるまい」

そう言うと、王貴は傲岸に踵を鳴らしながら歩み始める。
英雄の立っている場所を通り過ぎると、

「王たる者は2人もいらぬ。九鬼英雄、貴様はこの王（オレ）が手ずから殺す。精々首を洗って待っているがいいぞ」

傲岸に、不遜に、傲慢にそう言うと、王貴は屋上から出ていった。
そこに残ったのは主とその従者のみである――。

第3話　2人の王2つの王道（後書き）

王貴と英雄の過去話しをいつか載せたいと思います。
王貴のキャラが全然違いますが引かないで下さいね。

皆さまからのご要望、ご感想などなどありましたらお願いします。
それが僕のガソリンとなって原動力となりますのでｗｗ

第４話　王と風間ファミリー（前書き）

主人公なのに悪役とはこれいかに？

第４話　王と風間ファミリー

学校は必ず死角がある。
それが体育館裏であったり、非常階段のせまい所であったりと様々だ。
もちろん、それには川神学園にもあった。――それが体育館裏。

そこに１人の少年と、１０人の少年たちがいた。皆が皆川神学園の制服を着ている辺りこの学園の生徒だろう。
３年生の男子生徒１０人で１人の少年を囲むようにして立っている。その１０人が１０人とも目が血走っており、今から何をやらかすか見当もつかない。

１０人の少年たちの手には鉄パイプや警棒、木刀にメリケンサックであったりと様々だ。それは破壊力は抜群の武器だった。しかし、使い慣れてる感は無く、拾ってきたもしくは買ってきたばかりの新品という印象はぬぐえない。だが、殺人なり人を怪我させるといったモノに使える事に間違いはないだろう。
むしろ、一流の武術家が扱うよりも、それとはまたと違う別種の危険が孕んでいると言ってもいいだろう。

１０人の少年たちは皆眼が血走っていた。
だがそれでも、囲まれている金髪紅眼の１人の少年は威風堂々とポケットに手を突っこんだまま動じない。それは恐怖して体が動かないのではなかった。むしろ金髪赤眼の少年は退屈といった表情を

しており、こんな遊びとっとと終わらせたいと思っている事だろう。

ウオラァ！　という背後からの絶叫。

そんな少年――霧夜王貴に苛立ちを覚えのか、王貴を囲んでいる1人の鉄パイプを片手に背後から突っ込んできた。

だが、王貴は振り向きもしない。視線すら向けない。その態度は視線を向ける事すら価値が無いと言うかのようだった。

王貴の無防備の背中に、突っ込んできた男は鉄パイプを振りかぶり、思いっきり上から下へと振り下ろす。

このまま鉄パイプを振り下ろせば、王貴の頭からは血が流れ、致命傷を与えるだろう。

それを見た、王貴を囲んでいる者達は一同あっけないと思った。

彼らが王貴を襲撃した理由は、気に入らない生意気な2年生をボコろうといった心底どうでもいい理由だった。

当初は10人素手でリンチにしようと思っていたが、王貴の纏っている雰囲気がそれを許さず、今のように武器を持つと言う選択をしたのだ。

得体のしれない雰囲気を纏っていたがたいしたことなかった。一同はそう思い、どこか安堵するが――。

ガキン！　と言った甲高い音が王貴の背後から聞えた。

もちろんそれは王貴の体が壊れる音では無い。王貴に向けて振り下ろした鉄パイプが『見えない何かに阻まれた音』だった。

一同は何が起きたか解らず視線を凝らして見る。王貴の背後には2mほどの壁のようなモノができ、それで鉄パイプの攻撃を防いでいた。

鉄パイプで攻撃した男子生徒がどう力をいれても、王貴を守る『壁』はビクともしない。そのうち痺れを切らした男子生徒が一同に「やれ！」と命令する。

その一言に誘爆するように、王貴を囲んでいた者たちが一斉に襲いかかってきた。

しかし、それでも王貴は身動き一つしない。ただ、ポケットに両手を突っ込み立っているだけである。

次々と雄たけびを上げながら振われる鉄パイプや警棒。そして、その度に王貴を守るようにしてそり立つ『壁』。その壁と凶器がぶつかり合う度に、ガキン！　と言った甲高い音が鳴り響く。

それを何度も何度も繰り返す。襲撃した者たちがこの行為は意味があるのか、と疑問が浮かんだ直後。

ここで初めて王貴がアクションを起こした。

それは、歩く。

王貴は傲岸に踵を鳴らしながら歩み始める。そこで囲んでいた者達は攻撃を止める。そして、思い知らされた。少年たちは最初から相手にされていないのだと、取るに足りない存在だったのだと。

少年たちの包囲から突破した王貴はポケットに突っ込んでいた右手をゆっくりとした動作で上げる。指揮者のような動作で軽く掲げ、

その右手で指を小気味よく鳴らした。
その直後、王貴の背後からけたたましい音が何度も鳴り響く。発破をかけられたかのように地面が吹き飛び、土が粉塵となって舞い上がり視界を覆い尽くす。
王貴はそのまま視線を向けずに歩み続けた。そうして、立ち去った。

それから数十秒。視界を覆っていた土煙が晴れた。
王貴を勝手に取り囲んでいた襲撃者たちは、これまた勝手に地面が抉れて出来たクレータの上でのびていた。のびていた、と穏便な言葉で表現するには辺りに血が飛び散り過ぎていたが、少なくとも死者はいない。

そうして、襲撃は終わった。
呆気なく、直ぐに、迅速に終わりを告げた――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

怠惰に川神学園に続く多馬大橋を歩く王貴。
時間は放課後。放課後と言うこともあってか多馬大橋には多くの学生が居た。
道端に座って喋っていたり、立ったまま喋っていたりと様々だ。
そのダベっている連中の話題も様々。最近のファッションの話だったり、オリコンチャートの話だったり、最近流れているアニメの話だったりなどだ。
その中、王貴は異彩の雰囲気を放ちながら怠惰に歩みを進める。

霧夜王貴は退屈していた。

英雄との問答から3日がたった。
この3日間あったのは先の襲撃者や英雄や得体のしれない白い髪の女子生徒話しかけてくるばかり。
最初は襲撃者の存在に興が乗った。何せ、彼に挑んでくるのは『霧夜』が金で雇った刺客ばかりで、素人と戦った事が無かったからだ。
だが、それも一回で飽きてしまった。所詮は素人。これなら刺客の方が楽しめたからだ。

「つまらん……」

言葉に出すが、それで何が変わると言うわけでも無い。
ただ『退屈』といった二文字が現実に突き付けられただけである。
つまらない日常が始まり、くだならい日常が終わる。こうして一日が終わっていく。

と、その時

「よーしっ！　もう一本！」

少年の耳に明るく、天真爛漫な声が聞える。それは多馬大橋の下の土手から聞えてきた。
王貴は視線を土手に向ける。
そこには男女9人の若者がいた。
さっきの声の主はタイヤをひいて走っているポニーテールの少女のようだった。
しかし、王貴の興味を惹いているのはその少女ではない。
その9人の中で、土手で寝そべりポニーテールの少女を見ている、黒髪のロングヘアーの女性に王貴は興味をしめしていた。
異彩中の異彩のオーラを纏っている黒髪の女性。しかも、その人物を王貴は知っている。

――名を川神百代

王貴はニヤリと口元を皮肉気に曲げる。その笑みは新しい玩具を見つけた、と言わんばかりの笑みだった。
そうして、王貴は歩みを進める。彼らに接触しようと歩みを進めた。
——これが王貴の価値観、生き方を変えるとも知らずに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

川神学園には風間ファミリーと言う仲のいい集団が居る。
風間ファミリーのリーダー風間翔一。ファミリーの軍師直江大和。ツッコミ&驚き役の師岡卓也。力仕事担当の島津岳人。ファミリーのマスコット的存在川神一子。大和ゾッコンの椎名京。そして、最

強の川神百代。
以前はこの7人だったが、ここにクリティアーネ・フリードリヒと黛由紀江が加わり9人構成となった。

その風間ファミリーがいるのは大馬大橋の土手。
何をしているかと言えば、川神一子がタイヤをひいて走り、それを皆で見たり、手伝ったりしていた。要するに一子の修行を見たり、手伝ったりしているのだ。

「ふぅ、休憩～」

一子はヘトヘトになりながらも土手の芝生に体を預ける。何十分タイヤをひいて走っていたのか、顔中に汗が流れ体操服も濡れている。

そこに大和とクリスと由紀江が近づいて来る。

「お疲れワン子、ほらタオルだ」

「ありがとう、大和！」

そう言うとワン子は顔をタオルで拭く。
どこか、大和の匂いがすると思ったあたり、自分がワン子と呼ばれる原因でもあるだろうと感じる。

「タイムも落ちてきてるしな。これ以上走るのは不味いだろう」

「一子さん、お疲れ様です」

「いや～速かったぜ～。馬のオラでもびっくりの速さだぜ」

ストップウォッチを片手に言うクリス。

由紀江が労いの声をかけ、由紀江の持つストラップである松風が絶賛する。もちろんストラップが話す訳ではない。全て由紀江の腹話術である。

「そう言えばさ、２年Ｓ組に転校生来たよね」

師岡卓也がそう発言した。

２年Ｓ組の転校生。それは２年Ｆ組はおろか、全学年に噂が持ちきりだった。

「今日なんて３年生が１０人で囲んだっていうのにのに返り討ちにしたってハナシじゃねぇか」

島津岳人が腕を組みながら言うと、

「スゲェよなー。でも珍しいな、モモ先輩が喧嘩売りに行かないなんてさ」

風間翔一が川神百代に視線を向けて言う。
当人の百代は考え事していたのか、上の空で「あぁ」と返事をするのみだ。

翔一は大和に近づき、耳打ちをする。

「（おい大和。モモ先輩どうなってんだよ？）」

「（分からない。キャップ、心当たりは？）」

「（ な い ！ ）」

「（そんな自信満々に言うなよ……）」

そう言うと、２人はチラッと百代を見る。やはり上の空で考え事をしている。
あの傍若無人の百代がこうなるとはおかしい。風間ファミリーは心配する。
そして、百代が口を開きかけるが、

「おい、そこな屑ども。こんな所で何をしている？」

とある、人物に阻まれた。

一同は声のした方に視線を向ける。
　そこには土手の上から、こっちを見下ろすような形で金髪で紅眼をした川神学園の男子生徒が腕を組みながら立っていた。
　驚くのはその男子生徒存在感だ。異彩の雰囲気を醸し出し、それはまるで川神学園最強の川神百代と対峙しているような感覚だった。いや、百代よりも達が悪い。とにかく、異質だったのだ。
　そして、瞬時に理解した。こいつが２年Ｓ組の転校生なのだと。

「王貴……」

「久しいな、川神百代」
　そうして、王貴は百代に皮肉気に口元を歪ませた――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さて、もう一度問おう。ここで何をしている？」

王貴は再度問を投げかける。

この問を答えねば殺す。風間ファミリーはそう言われているような感じがした。

それほど王貴には威圧感があったのだ。

「しゅ、修行よ！」

一子がどもりながらも答える。王貴の纏う雰囲気が一子をどもらせたのだろう。

その一言に何を思ったのか、王貴は端正な顔を歪ませ訝しめながら、

「修行だと……？」

「そうよ、修行よ！」

「何故修行などしている？」

「川神院の師範代になりたいからよ！」

その一言に、王貴は、

「ク――ハハ、ハハハハハハハハハハハ！！！！」

一笑をもって切り捨てる。

「正気か貴様？　川神院の師範代に、貴様如きがなれると本気で思っているのか？　川神院師範代というのは選ばれた人間、才能のある人間にしかなれぬ。貴様のような小娘には程遠いモノよ。なぁ、川神百代？」

そこで王貴は百代に視線を向ける。

しかし、それに応じたのは百代では無い。

「おい、撤回しろ……」

「む？」

「さっきの言葉撤回しろこの野郎！」

翔一だった。

彼は一子がどれだけ自分の夢に打ち込んでいるか知っている。どれだけ川神院の師範代になりたいか知っている。

それ故に、一子の夢を笑った金髪紅眼の少年が許せなかった。だから、翔一は怒る。仲間の夢が笑われたから怒った。

そんな翔一の心情を知っていながらも、王貴は愉快気に唇を歪ませる。

「屑め、誰に口を聞いているか分かっているのか？」

――その一言で翔一が王貴に刃向かうのは充分だった。

翔一は王貴の下へと駆け上がる。
右手の拳を堅く握り、この拳であの金髪紅眼の少年に一撃をくらわせる為に。

しかし、王貴は構えない。
ただ腕を組み翔一を見下ろすだけだった。
このままいけば翔一は王貴の下へとたどり着く。
誰もがそう思ったいたが、

翔一と王貴の間に“ナニ”かが落ちて来た――。
それは剣だった。２ｍ程のある大きな大剣。

翔一はその衝撃の余波で吹き飛び、駆け上がっていた場所から転がり落ちた。

王貴は吹っ飛んだ翔一を見て、改めて風間ファミリーの面々を見下ろす。

そこには百代、由紀江、大和、卓也以外の者たちが臨戦態勢で構えていた。仲間の夢を笑われ、仲間を吹き飛ばされそれを笑って許すほど彼らは大人ではない。構えていない者達も王貴を睨みつける様に見る。

それを見て王貴は笑う。面白いと、笑う。

「良いぞ、刃向かう事を許す。掛かって来るがいい」

その一言で戦いの火ぶたは切って落とされた。

「行くぜ！　ガクト、ワン子！」

「おうよ！」

「うんっ！」

吹き飛ばされたが瞬時に体勢を整えて先行する翔一を先頭に、一子、岳人が王貴の下へと駆け上がる。

実質これで３対１だ。

だが、これでも王貴の余裕の態度は消えない。

「屑どもめ……」

王貴はここで初めて腕組を解く。そして、片手を上げて、

「天を仰ぎ見るべきこの王（オレ）と同じ土俵に立とうとは、身の程を知るがいい！」

指を小気味よく鳴らす。

すると、“何”かが飛来し、翔一達に襲いかかる。

体の大きいガクトが、翔一とワン子を何とか守ろうとするが守り切れず、３人まとめて吹き飛ばされる。

翔一達に向かって飛来したのは武器だった。それが剣だったり槍だったり戟だったりと統一性のない。

「その程度で王（オレ）に挑むとはな。身の程知らずにも程がある」

王貴は背後に剣、槍、鎌、戟、ナイフ、といったの武器を漂わせながらそう告げる。その数１０。

それは異質だった。自分の拳で戦うのでもなく、気弾を放っている訳でも無い。ただ、武器を射出してぶつける戦闘スタイル。しかも、一撃一撃が必殺の威力を誇っている。

それは今、少年の背後で武器が兵で。少年が全てを指示する王であるようだった。

しかし、あの武器はなんだ？そんな疑問を、

「アイツは自分の気を使って武器を作れるんだ……」

百代が変わりに応えた。

「『気を使って武器を創る』聞えるには簡単だが実際にやるのは難しい。武器を創るにしてもしっかりイメージしないと出来ないし、たとえ出来たとしてもあそこまでの威力を引き出すには膨大な気が必要になる。飛ばすにしても計算して撃たなければならないからな……」

「それで、どうすると言うのだ川神百代？」

「今のお前と、変わり果てたお前と戦いたくなかった。面白くないからな。だが――、」

「だが、何だ？」

「気が変わったよ。妹の夢を笑われて、仲間がやられて黙っていられるほど私は大人ではないからな！」

「是非もあるまい。貴様が刃向かい、王（オレ）が裁く。さぁ、来い。貴様の全てを以て王（オレ）を打倒してみせよ！！」

百代が構え、王貴が武器の矛先を百代に向ける。１０挺あった武

具だが、その数は３２挺を超えており、まだまだ増え始めている。
２つの異質、２つの最強がぶつかり合うと思ったその時、

「待った！」

１人の声が待ったをかけた。
百代は声の主に驚き、王貴は邪魔されたと不機嫌そうに見つめる。

「キャップ……」

京が驚きながら声を上げる。京だけではない。皆が皆、翔一を驚きの表情で見つめた。今まで翔一は気絶していたと思っていたからだろう。現に一子と岳人はまだ気絶している。
しかし、翔一も無事という訳でも無い。まさに満身創痍。傷だらけだった。

翔一は王貴を睨みつけながら、

「お前に決闘を申し込むぜ！　霧夜王貴！」

そう告げた――。

第４話　王と風間ファミリー（後書き）

アレ？主人公なのに凄い悪役っぽい？むしろキャップが主人公っぽい？おかしいですねこれ。

なにはともあれキャップＶＳ王貴です。

それではみなさん。ご意見ご感想がありましたら遠慮なくおねがいします！

第5話　王の慢心（前書き）

長くなったので分けました。

第5話　王の慢心

川神学園は、川神市を代表と言ってもいい学園だ。
生徒それぞれの個性を重んじているための自由な校則。ユニークな行事、授業。それが川神学園の人気の秘密とも言えるだろう。

中でもユニークと言えるのが“決闘”というシステムがある。
生徒の自主性、競争意識を尊重する為に作られたのがこの“決闘”システム。
お互いの合意があれば、白黒つけて戦う事が許される。それはもちろん学校側でも許可しており、違法でも何でもない。
形式は喧嘩でもスポーツでも論戦でも何でもいい。さらには、決闘中の怪我は合法となり、問題にならない。
しかし、いくつか規則があり、

一．肉体を使用する決闘の場合、事前に決闘方を明記し教師に届け教員会での了承が必要。
二．決闘に立会人を望む場合は、教師がそれを担当し公平な立場でジャッジする。
三．肉体を使用する決闘の場合、必ず教師2人以上の立ち合いが必要。
四．決闘による結果で、遺恨を残さない事。
五．偽りの決闘、出来レースは提案したの者を制裁の上、退学処分。

と言った、五つだ。五つと言ってもこれらは守る事が簡単だろう。
要するに汚い事をしなければいいのだ。

その決闘をしようと二人の者たちがいた。
それが風間翔一と霧夜王貴である。
片方は、川神学園で有名とされるグループ『風間ファミリー』のリーダーとして有名な人物。もう片方は最近2年S組に転校してきた正体不明な少年。
この2人が決闘しようと言うのだ。川神学園生徒が騒がない訳が無い。
この2人の決闘の話は川神学園で持ちきりだった。
しまいには賭け事をする者までいる始末。
それほどまでに、今の川神学園は熱気と、活気に満ち溢れていた――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翔一から決闘を申し込まれてから1日が経った。

今王貴が居るのは学園長室。
そこの来客用のソファーに腰を深々と下ろし、正面にある長机に足を乗せて自分の家のようにくつろぐ。片手にはぶ厚い本。どうやらそれは経済学書のようだった。そして、少年が足を乗せている長机の横には何冊も何冊も積み重なって、これまたぶ厚い本が塔のようにして出来あがっていた。それは統一性が無く、武器の図鑑だったり、医学書だったり色々なジャンルの本がそこにあった。
これらの本、すべてが王貴のモノだ。
どうやって学園長室にあるかは不明。ただ言える事は、学園長室を我が者顔で使用し、いつのまにか王貴の本があったと言う事だけ。

堂々と我が者顔で学園長室に居座り、これまた堂々と本を読み漁る王貴を見て、鉄心は呆れとも関心とも言える表情をしながら、

「コラ、王貴。お前授業はどうした？」

「休講だ」

読んでいる本から視線を逸らさずに言い切る王貴。
そこに申し訳なさなど無い。

「“自主休講”じゃろうが……」

そこで王貴はふんと鼻を鳴らし、片手で読んでいた本を閉じる。

しおりなど挟まないあたり、もう読んでしまったモノをもう一度読んでいたのだろう。

「それにしても……」

「ん？　なんじゃ」

「王（オレ）とあの屑との決闘。えらく手際が良く決まったな？」

王貴は笑う。それはまるで何もかも分かっている、とでも言っているかのような笑みだった。

先にも言ったが、肉体を使用する決闘の場合、つまり喧嘩の場合。事前に決闘方を明記し教師に届け教員会での了承が必要となる。喧嘩をする場合、手間がかかる手続きを踏まなければならない。それをたった1日、しかも朝のホームルーム前に済ませてしまったのだ。この自体は異例中の異例である。

鉄心は何事もなかったかのように自分の顎から生えている、長いひげを片手で撫でながら、

「はて？　なんのことかのう？」

「狸め、王（オレ）を前にしてしらを切ると言うのか？」

王貴が訝しげに鉄心を見るも、鉄心はホッホッホと笑うばかり。
これが『川神院総代』の貫録と言うのだろうか。王貴の探る視線にもまったく反応を見せない。ただ、人の良さそうに笑っているのみである。

風間翔一と霧夜王貴の決闘。
その決闘を異例中の異例のスピードで推し進めた人物が、何を隠そう川神鉄心である。
鉄心が強引に推し進めたのにもただ理由が無い話でも無いし、面白そうと言う訳でも無い。
――――その理由こそが霧夜王貴だ。
確かに王貴はこの世界の王となるための力がある。人の上に立つ為の器、カリスマと言ってもいいモノがある。まさにこの世の王となるべくして生まれた人物と言ってもいいだろう。
だが、王貴は王である以前に、人として大事な『モノ』が欠落している。その『モノ』こそ、人として、王として最も必要な『モノ』といってもいいだろう。
前は『それ』を持っていただろう。大事に抱えていただろう。だが、王貴は『それ』を失った。王貴を囲んでいた環境、日常が『それ』を捨てねばならなかった。捨てねば、生きてはいけなかった。
『それ』を取り戻す為の決闘。それが風間翔一と戦わせる理由だった。

自分や川神百代が決闘すればいいという問題でも無い。
王貴が屑と蔑んで止まない人物と戦わせる、という事実に意味があった。
鉄心が翔一と王貴を戦わせると言う事に気が引かなかった、と言

えば嘘になるだろう。鉄心の目から見ても、どう贔屓目から見ても勝つのは霧夜王貴だ。無様に地に伏すのが風間翔一で、それを見下ろすのが霧夜王貴という構図は揺るぎないものだろう

だが、その為の七日間の猶予。その為の川神百代だ。

それに王貴には弱点がある――――、致命的な、王としての瑕が。

「それにしても、お主はいいのか？」

「何がだ？」

「風間はお主との決闘の為に松笠にある“烏賊島”に行ったそうじゃぞ？　お主は何もせんのか？」

「あのような屑を相手する程度に王（オレ）がわざわざ労力を懸けると？　クックッ、面白い冗談だな。しかし、このままでは王（オレ）の蹂躙で終わってしまう。それでは面白くない故、王（オレ）は自分自身にハンデをかけるとしよう」

王貴はイイ事を思いついたかのような、子供のような笑みで笑う。

これこそ、王貴の弱点。

格下の人物を侮る最高最悪の悪い癖だ。現に、王貴は翔一を舐めきっている。これがある限り、翔一にも勝率があるだろう。

「ハンデか……、それは本当に少しでも面白くしようと思っての事かの？」

「当然だ。それ以外に何がある」

「フム。……お主、本当は違う理由なのではないか？」

「……貴様、何が言いたい？」

紅色の目を閉じながら静かに言い放つ。

見た目はかなり静かに静寂を保って見える。だが、雰囲気は違った。

“これ以上言えば殺す”。と、王貴を纏う雰囲気が、空気が、オーラがそう語っている。

だが、そんな空気ですらも鉄心を怯ませるには足りないのだろう。

王貴を纏う雰囲気を気にせず、鉄心は口を開く。

「お主が、ハンデを己に科すのは“面白い”という理由だけではない。本当の理由は――――、」

その瞬間。

「戯れはそこまでにしておけ、屑」

――――学園長室の空気が死んだ。

王貴の紅色の目が、鉄心を射抜くような視線で見つめる。そして、王貴の気で作りだした武器群が鉄心に刃先を向けて漂い始める。その数はもはや百を超え始め、まだまだ増え始める。

王貴の視線にはありったけの殺気、気が狂うほどの殺意を乗せていた。常人が、その視線で見つめられれば、間違いなく気絶。最悪気が狂ってしまいかねない程の視線を鉄心は正面から受け止める。
鉄心の表情、様子に変化は無かった。流石、日本が誇る最強の武神といったところだろう。

今から殺し合いが始まる。と、思いきや。

「――――まぁいい、」

学園長室に籠っていた重苦しい殺気が四散した。
王貴は本を持っていない片方の手を軽く上げ、それを軽く下げる。
その動作だけで、王貴の作りだした武器群が消えていった。
そして、長机に乗せていた足を下ろし立ち上がる。そのまま片手に持っていた本を長机に放り投げながら、

「貴様が何を企んでいるかは知らんがこれだけは言っておいてやろう。王(オレ)は変わる心情など持ち合わせておらん。その事を努々忘れるな」

王貴はそのまま学園長室を出ようとするが、

「待つのじゃ王貴」

と、鉄心が待ったをかける。
王貴は振り向く。それを同時に一枚の紙が飛んできた。
それは本当に一枚の紙で、特別な力なんてない。
それを王貴は難なく掴むと、内容を見る。そして、固まった。それは比喩では無く、顔の表情、体、雰囲気が一斉に固まり、凍りつく。

「――――何だこれは？」

「お前がやった小テストの答案じゃよ。呼び出そうと思ったんじゃが、お前が自分から来てくれて助かったわい。まったく、慢心と油断するからそうなるのじゃ」

答案にある数字。それは紛れもなく『０』。
あろう事か王貴は回答を一問ずらして書いてしまい、結果『０点』と言った不名誉の点数を叩きだしてしまった。しかも驚く事に、ずらして書いてなかったら『１００点』だったことから益々驚きだ。

「……」

「……」

ジト目で王貴を見る。
肝心の王貴は冷や汗を止めどなく流れ、視線も泳がせる。

「……こ、細かい事を気にしないのが王の証」

「うるさいわ、バカめ。これから3日間お前は補習じゃ」

「おのれぇぇぇっ……！」

王貴は悔しそうに眉間に皺を寄せ、怒りに体を震わせる。

そのまま何もしないという人間ではないのが霧夜王貴と言う人物。

自分が回答を一つずらして書いたのが原因にもかかわらず、八つ当たりで学園長室のソファー（十万円）と長机（一五万円）を破壊した――――――――。

第5話　王の慢心（後書き）

どうも皆さん、兵隊です。
長くなったので分けてみました。

それではご指摘、ご感想ありましたらよろしくお願いします！

第6話　風間ファミリー特訓紀　天国編（前書き）

長くなったので分けてみました。

第6話　風間ファミリー特訓紀　天国編

空は晴天快晴。雲ひとつない空だった。
日差しは厳しく、気温も高い。

そんな中、風間ファミリーがいるのは松笠市にある松笠公園。
今日は学校が休みなのか？　と言えば、今日はバリバリ平日で、今日はバリバリ登校日だ。ならばなぜ松笠に風間ファミリーが居るのか。
それは風間翔一と霧夜王貴の決闘が原因だ。
このまま、翔一が王貴に挑んでも、十中八九翔一が負けるだろう。
その事実を覆す為に風間ファミリーと風間翔一は松笠公園から見える烏賊島へと修行しに行くのだ。

「アレが烏賊島か。……結構遠いな」

「ここからかなり離れてるね。泳いでいくには難しいかも」

「本当ですね……」

「まゆっちなら余裕だけどな」

大和と京と由紀江と松風（ストラップ）が烏賊島を見ながら言う。
肉眼から認識でき見えるものの、常人が泳いでいける距離ではないだろう。

「山籠りならぬ島籠りってヤツだな？」

「世俗から離れて、文明から遠ざけて修行ってわけねぇ」

岳人が自分で上手い事言った、と自信満々に言うが皆からは無視される。一子に至っては“修行”という言葉に心ときめかせていた。

そんな中、卓也が嫌な予感を感じながら、

「ねぇ、モモ先輩。あそこまでどうやって行くの？」

「それは泳いで行くに決まっているだろう」

「わー、もう文明から遠ざかってるよ……」

卓也は青い顔になりながら言う。

彼にとって“烏賊島に泳いで行く”と言う事は死活問題だ。途中で溺れる自信がある。

そんな卓也に、

「心配するなモロ」

大和が卓也の肩を軽くたたき気さくな表情で、

「俺もあそこまで泳ぎきる自信が無い……」

その瞬間、卓也は晴れやかな顔つきに変わる。
泳ぎきれない貧弱マンは自分だけじゃないことが分かったからだ。
それは大和も同じ。だが、考え方が違った。泳ぎきれずに溺れてしまったら、自分よりも逞しい女性陣に助けてもらおうと考え。そんな考えを思いつくあたり情けなく感じるが、しょうがない。自分よりも女性陣の方が強いのだ。

その二人に百代はくすくす笑う。

「冗談だ、冗談。お前たちを泳がせる訳ないだろう」

その言葉に卓也は安心し、大和は疑問に思う。
泳いでいかないのならどうやってあそこまで行くのだろうか、と言う疑問に。
だが、そんな疑問も次の百代の発言に解決される。

「そこで、あそこまで連れて行ってくれるのが、あの烏賊島の所有者である“橘平蔵”さんだ」

「うむ、儂が協力してやろう」

百代に紹介されると同時に一人の大男が現れる。長髪に顎にもみあげと繋がっている長いヒゲ。目に傷の男。明らかに武術をやっているであろう逞しい体つき。身長もでかい、１８５ｃｍはあるだろう。それよりも彼の存在が只者ではない事がわかる。

「橘平蔵！？」

「橘平蔵！？」

百代の橘平蔵、と言う言葉に食らいついたのが、一子とクリスだ。翔一が一子とクリスに、

「知ってるのか？　ワン子、クリス」

「うん、武術家では有名な人よ？　『生まれるのが遅すぎた龍』と言う異名を持っていたり、『道場破りをして集めた看板でイカダを作り、太平洋を横断した』事があるって言われてりしてるわ」

「自分は父様から聞いた事がある。『彼が戦争に参加していれば、日本は勝っていた』と言われるほどのＳＡＭＵＲＡＩだとか……」

「何だ、娘たちよ。儂のファンか？　ならば、サインでもやろう」

平蔵はどこからか色紙とペンを取り出し、さらさらと慣れた手つきで書き始める。そして、一子とクリスに手渡した。

一子とクリスも目をキラキラと光らせ、それを、やったー！！

と両手に持って喜んだり、父様に自慢しようと嬉しそうに抱える。
まったくもって嬉しそうで何よりだ。

「百代から聞いたが、お前は自分より力量が上の者を相手に決闘を申し込んだと聞く。その気持ちに偽りはないか？」

平蔵が試すような目線で、翔一を見つめる。
生まれたのが遅すぎた竜とも言われる人物の視線を真っ向から受けながら、翔一は堂々と臆せず、

「当たり前だ！　アイツは俺が倒すさ！」

「そ の 心 意 気 や よ し ！ ！」

と、両目を光らせながら言う平蔵。
彼がそう発言した瞬間、彼を中心に風が轟！　と渦巻く。

「やはり漢（おとこ）はそうでなくてはいかん。お前のような漢（おとこ）は竜鳴館に欲しいものだ」

かんらかんらと平蔵は笑う。
橘平蔵と言う男は古いタイプの人間だ。日本の若者の軟弱さに嘆いており、『侠　義　漢』この３つのうち、何か１つ単語でも入っていたら、どのような陳情でも認める恐ろしい男。それが橘平蔵だ。

そんな男故に、風間翔一のような男も漢（おとこ）として認める。そんな男だ。

「館長」

そんな平蔵を呼ぶ声が聞えた。
平蔵はその声の方を振り向く。

「おう、来たか霧夜。忙しい所呼んでスマンな。仕事の方はいいのか？」

「ええ、よっぴーに任せているので」

平蔵に霧夜と呼ばれた女性。黒色のスーツに身を包み、金髪蒼目の女性。整った容姿で髪型は長い髪を結んだポニーテール。
大和はその人物を見て違和感を感じた。性格には平蔵が『霧夜』と呼んでいる事に違和感を覚えた。

大和の様子を感知したのか、百代が大和だけではなく、全員に聞える様に、

「王貴の姉ちゃんだ」

風間ファミリー一同が「えぇぇぇぇぇっ！？」と驚く。

だが、確かに似たようなモノがあった。高飛車そうな所とか、高飛車そうなところとか、高飛車そうなところとか、あと高飛車そうなところとか。

「霧夜エリカよ。それで、貴方があの子と決闘する男？」

「おう！」

元気よく答える翔一を、ふーんと言いながらじろじろと見るエリカ。

顔に視線を向け、下から上へと視線を向け。足に視線を向けたらそれからまた下から上へと視線を上げる様にして見る。

それからため息。

「悪い事は言わないわ。あの子と戦うの止めなさい。貴方程度じゃ勝てないから」

「なんだとぉ！？」

「事実だもの。もう一度言うわ。これは忠告ではなく警告よ？　――あの子と、戦うのは、止めなさい」

最後を一区切り、一区切り、出来の悪い生徒に言い聞かせる様にして言うエリカ。

だが、翔一が言う前に、

「そうでもないさ。私がいるからな」

百代が否定する。
エリカは百代に視線を向け、

「川神百代……」

「平蔵さん。こいつらを烏賊島に連れて行ってくれませんか？　私は話があるので」

「うむ、わかった」

「それからキャップー。お前は泳いでいくんだぞー？」

「えっー？　俺だって平蔵さんのクルーザー乗りたいぜー！！」

ふくれっ面になにながら言う翔一。
百代もそれを予想していたのか、

「王貴に勝ちたくないのか？」

「泳いで行くぜぇ！！」

直ぐに百代の言葉に従う翔一。その間０．１秒。

返答したや否や服を脱いで、着水する。
翔一以外は平蔵のクルーザーに乗り込むが、一子とクリスの姿が見えない。どうやらまた競争しているのだろう。現に烏賊島まで泳いでいる人影が、翔一のほか二名ほどいる。

百代以外の風間ファミリーがクルーザーに乗り込んだのを確認すると、

「さて、聞かせてもらそうか。王貴はどうしてあんなに変わった？」

百代がそう切り出した。
その視線は真剣そのもので、いつものようにふざけているかのような視線では無い。
川神学園最強。いや、世界最強の視線を受けてもエリカは動じない。

そのまま数分が経つ。
エリカはため息を吐きながら、

「いいわ。ただし、条件がある」

「条件？」

「えぇ。あの子に決闘を挑む子が勝ったら教えてあげる」

翔一が王貴に勝ったら王貴に何があったから教えると言う事。
百代は呆気にとられる。百代がここに居るのは翔一を勝たせるためだったからだ。元々から勝ちにいっているのに、賞品に王貴の過去とはかなり予想外だった。

「……そんな事でいいのか」

「あら？　あの子に勝つのがそんな事で済ませるの？」

「元々勝たせる為に私が居るからな。そんな条件を付けられるなんて、俄然やる気が出てきたってヤツだ」

「……ま、精々頑張りなさい。あ、これは忠告よ。あの子を、霧夜王貴をナメない事ね。あの子は最凶なんだから」

そう言ってエリカは去っていった。
弟と戦う人物を見て、彼女が何を思ったのか。それを知るのは彼女だけである――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

風間翔一が烏賊島にたどり着いたのは夕方の事だった。
三時から松笠公園から出発してその間三時間半。
彼はずっと海を泳いでここまで来たのだ。
翔一は仰向けに寝そべりながら、空を見る。嫌ってほどオレンジ色で、憎たらしいほど綺麗だった。

「大丈夫キャップー？」

「大分疲れている様だな……」

そんな翔一に声をかける人物が二名。
一子とクリスである。二人の格好は水着で、約三時間前まで来ていた普段着では無い。それもそのはずで、彼女たちも泳いでこの烏賊島に来たのだ。勿論、翔一を置いて。
他の風間ファミリーは食料を採るために島を散策しており、ここにはいない。平蔵もクルーザーで帰ってしまって、五日後の夕方に向かいに来るてはずだ。

「よーし、王貴対策をするぞー。キャップー起きろー」

と、百代が声をかける。

百代も水着で、アレから泳いで翔一に追いついたのだ。それから一応翔一が溺れない様に後ろからついてきたのだ。とはいっても、翔一の横でクルーザーが並走していたので、溺れる心配もなかったのだが。

翔一は疲れた体に鞭をうつかの心境で、力を振り絞って起き上がる。

百代はそんな翔一を見て、よしよしと頷いた。

「アイツの攻撃方法は知っているな？」

「おう！　武器を飛ばして攻撃してたっけ？」

「あぁ、そうだ。前にも言ったが、『気を使って武器を創る』聞えるには簡単だが、実際にやるのは難しい。武器を創るにしてもしっかりイメージしないと出来ないし、たとえ出来たとしてもあそこまでの威力を引き出すには膨大な気が必要になる。飛ばすにしても計算して撃たなければならない」

「お姉さまでも無理なの？」

「無理だ。あそこまでしっかりとしたイメージが出来ないし。私の場合、自分の拳で攻撃した方が強い」

一子の質問に、百代が答える。

確かに百代の場合、気で武器を作るより拳で攻撃した方が断然強いだろう。

「それよりも厄介な事に、王貴は気で障壁を張って攻撃を防ぐ事が出来る。それもとびっきり頑丈なのをだ」

恐る恐るクリスが、

「モモ先輩が造るよりもか？」

「あぁそうだ。私よりもアイツの方が気を使う事に数段も長けているからな」

「打つ手なしじゃないか……」

クリスがそう言うと、百代が首を横に振る。

「いや、そうでもない。さっきじじぃから連絡が来てな。王貴の奴、自分にハンデを科すそうだ。要するにキャップを舐めきってる」

それに憤慨するのが一子とクリスだ。

「真剣勝負にハンデだと！？　アイツは決闘をなんて思ってるんだ！！」

「ホントよ！！　馬鹿にしてるわ！！」

「言わせておけよ」

言われた翔一は静かにそう言う。だが、表情はナメられて悔しいと言うよりかは、王貴の自信をどうブチ壊してやろうか考えているワクワクしたような表情で、

「最後には勝つのは俺だ。アイツには最初から全力で来なかった事を後悔させてやるさ！！」

「そんなキャップに問題だ。王貴の攻撃を防ぎ倒すにはどうしたらいいでしょうかー？」

百代の質問に翔一は考える。うーんと頭を捻って考える。

そして、先程言っていた百代の言葉を思い出す。

武器を創るにしてもしっかりイメージしないと出来ない。威力を引き出すには膨大な気が必要。飛ばすにしても計算して撃たなければならない。

そこで翔一は頭の上に豆電球でもでたかのようにひらめく。

「気が無くなるまで粘る！」

「その前にキャップがハチの巣だ。次ー」

「武器をイメージするのを邪魔をする！」

「それやっても勝てないだろう。次ー」

「九九の段とか言って、計算を邪魔をする！」

「そんな事無意味。次ー」

「あーと、えーと。……わかりません」

「ハァ……。正解は“武器を避けながら接近戦に持ち込む”だ」

ため息を吐きながら言う百代。
それをクリスが口元に手を当てながら、

「待ってくれモモ先輩。それではヤツの作り出す障壁が邪魔をして接近戦に持ち込めなのでは？」

「アイツは自分にハンデを科すって言ってただろう？　恐らくアイツは障壁を張らない」

「それにお姉さま。接近戦って言ってたけど、接近戦も強かったらどうするの？」

それに百代は、あー、と気まずそうにしながら頭をポリポリと掻きながら、

「それは心配ない。アイツは接近戦凄い弱いから」

翔一、一子、クリスは首を傾ける。

頭の上には大きなクエスチョンマークでもあるかのようだった。

「私が風間ファミリーに入る前、王貴は川神院に来た事が有ったんだよ。その時組み手したんだがな？……凄い弱かったんだ。こっちが申し訳ないと感じさせるぐらい。身体能力は馬鹿高い癖に……」

そう言うと昔の事を少し思い出す。

あの頃は楽しかった。本当に楽しかった。

『モモヨは強いね。僕じゃ勝てそうにないよ』

『はっはっはっはっは！！　そうだろうそうだろう。私はさいきょーだからな！！　というか、おうき。お前ほんきでこい。あのけんとかとばすやつ。アレに私は一回まけたからな』

『えー、アレやるの？　疲れるけどいいよ、相手してあげる。僕も負けっぱなしじゃいられないからね』

『よーし、こい！！　こんどこそ私がかつぞ！」

そんな会話を思い出しながら頭を振う。

王貴はあの時の王貴では無い。

百代は話を戻す。

「今のアイツは努力して何とかするタイプじゃない。だから殴り合

いじゃキャップに分があるだろう」

そう言い放つ。

あの頃を取り戻す為に、あの頃の王貴を取り戻す為に――――――。

第6話　風間ファミリー特訓紀　天国編（後書き）

どうも皆さん、兵隊です。
長くなったので分けてみました。

それではご指摘、ご感想ありましたらよろしくお願いします！

主人公紹介　Ｆａｔｅｖｅｒ　まじこいｖｅｒ

Ｆａｔｅ　ｖｅｒ
霧夜王貴
身長：１６５ｃｍ
体重：５２ｋｇ
誕生日：１２月２４日
血液型：ＡＢ
イメージカラー：金
好きな物：権力、武具、犬、猫
嫌いなもの：絆、友情と言った言葉。絆、友情と言った存在。芸術（美的センスはゼロ）
天敵：霧夜エリカ、鉄乙女

混沌・悪（通常時）
筋力：Ｂ
耐久：Ｄ
敏捷：Ｂ
気力：Ａ＋＋
幸運：Ａ

黄金率：Ａ
　身体の黄金比ではなく人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。大富豪でもやっていける成金ぶり。一生金には困らない。

カリスマ：Ｄ（Ａ）
　軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において自軍の能力を向上させる。稀有な才能。性格に問題があるせいかランクダウンしている。

心眼（偽）：Ａ
　直感・第六感による危険回避。視覚妨害による補正への耐性。第六感、虫の報せとも言われる天性の才　能による危険予知。

心眼（真）：Ｂ
　修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、活路を見出　す“戦闘論理”。王貴によるこれは修行・鍛練ではなく、何度も命を狙われて培ったモノ。

慢心：Ａ＋
　王貴が格下相手だと認識した時に発動。全てのステータスを2段階下げ、スキルを3段階下げる。

混沌・悪（慢心スキル発動時）
筋力：Ｄ
耐久：Ｅ－（これ以上下がらない）
敏捷：Ｄ
気力：Ａ＋
幸運：Ｃ

黄金率：Ｄ（Ａ）
　身体の黄金比ではなく人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。慢心スキルが発動しているためか下がっている。

カリスマ：－（Ａ）
　軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において自軍の能力を向上させる。稀有な才能。慢心スキル、性格が問題があるためか無くな

っている。

心眼（偽）：Ｄ（Ａ）
　直感・第六感による危険回避。視覚妨害による補正への耐性。慢心スキルが発動しているため下がっている。

心眼（真）：Ｅ（Ｂ）
　修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、活路を見出　す“戦闘論理”。慢心スキルが発動しているためか下がっている。

慢心：Ａ＋
　王貴が格下相手と認識した時に発動。全てのステータスを2段階下げ、スキルを3段階下げる。

まじこいｖｅｒ
霧夜王貴
ｃｖ：無し（皆さんの脳内再生にお任せします）
身長：１６５ｃｍ
体重：５２ｋｇ
血液型：ＡＢ
誕生日：１２月２４日
一人称：王（オレ）
あだ名：なし
武器：自らが造り出した武具
職業：川神学園２年Ｓ組
家庭：父健在。母は幼いころに病死。異母姉が一人
好きな食べ物：チョコレート

嫌いな食べ物：なし（嫌いな食べ物を食べた事が無い）
趣味：読書、経済状況を調べる
特技：殲滅、お金持ち
大切なもの：自分自身、？？？
苦手なもの：絆、友情と言った言葉。絆、友情と言った存在（これらは嫌悪のレベル）
芸術（美的センスはゼロ）
尊敬する人：なし（強いてあげるなら自分自身）

主人公紹介　Ｆａｔｅｖｅｒ　まじこいｖｅｒ（後書き）

ゴルゴさんからＦａｔｅ風のステータスがリクエストにあったので書いてみました。調子に乗ってまじこい風も書いてしまいました。姉に似かよった場所もありますね。

ゴルゴさん、こんなもんでいいでしょうか？
期待に添えれば幸いです

第7話　風間ファミリー特訓紀　地獄編（前書き）

ボンバドゥール夫人の笑顔と言う色は本当にあります。

第7話　風間ファミリー特訓紀　地獄編

――――午後2時30分――――

風間ファミリーが烏賊島に島籠りしてから3日が経った。
3日続いて憎らしいほど青空で、嫌ってほど日差しが強い烏賊島。
普通の人ならば、太陽さん少し休んでもいいんじゃない？　と言った気持ちになるだろうが、烏賊島にいる彼らは関係ない。
何せ熱ければ海に入ればいいのだ。それはもうマリー・アントワネットが如く、熱ければ海に入ればいいじゃない理論。

と、言う事で。
ただいま、風間ファミリーは水着を着て海に入っている。
川神百代と風間翔一を除いて――――。

浜辺にうつ伏せで倒れ伏す男が一人。
頭にはバンダナ。両手首に5kgの重りがついているリストバンド、両足首に同じ様に、5kgの重りがついているアンクルのようなモノを付けて倒れている男性。
体も傷だらけで、痛々しい。
それこそ風間ファミリーのキャップこと、風間翔一だ。

翔一は身動きとらずにそこに突っ伏している。

体の全身を投げ出し、うつ伏せで倒れている辺りどざえもんとなって漂流している漂流者のようだった。
特訓の相手の百代の姿はない。どうやら休憩時間のようだった。
と、そこに――――。

「どうした、キャップ？　おねむの時間にはまだ早いぜぇ？」

暑苦しい笑顔とともに、これまた暑苦しい筋肉とともに岳人がどざえもん（翔一）に近寄る。
ちなみに岳人が着用している水着の種類はブーメランパンツ。その姿はとても暑苦しい。そして、この情報、まさに“誰得”である。

「おい、キャップー。どうしたー？　疲れてんのかー？　だったら、これだ！」

おもむろに、どこからかから2リットル入りのペットボトルを取り出す岳人。
中身には何かよく分からない液体が入っている。色はボンバドゥール夫人の笑顔色。たしかに一見イチゴ味のような色で美味しそうだが、何か得体のしれない雰囲気があり、迂闊に飲む事はおろか触れる事すら出来ない。
どこから出した？　というツッコミは無し。ちなみに岳人が着用しているブーメランパンツからではないのは確かだ。

「“岳人様特製超筋肉増強栄養エクサザイザー（肉味）”！　辛い時はこれを飲め！」

大層な名前だが、要するにプロテイン。
命名は風間ファミリー軍師『直江大和』。
ハイセンスな名前だ。岳人様特製超筋肉増強栄養エクサザイザー（肉味）。

「まだ味見してねぇけど、大丈夫だろ！　ほら、キャップこれを――――――――――キャップ？」

そこで、岳人はふと違和感を覚える。
岳人の足元にはモノを言わない翔一が一人。これに岳人は違和感を覚えた。
そして、その違和感を払拭しようと翔一の肩を掴んで揺する。
揺する、揺する、揺する、揺する、揺する、揺する――――――。

翔一は何の反応も見せない。
岳人は一旦翔一を離し、不自然なぐらいの大量の汗を顔に掻きながら、震える右手の人差指と中指で翔一の首筋をあてがう。
そして、
劇画チックの顔つきになりながら一言――――――。

「――――――――――死んでる」

「死んでないでしょ！？　気絶してるキャップで遊ばないでよ！　あと、ガクトみたいな脳筋に刑事ドラマみたいな脈の測り方出来る訳ないでしょ！！」

切れ味のいいツッコミが海にいる卓也から飛んでくる。

「まいったなー……」

「いや、褒めてないから！　そんな照れたように頭を掻かないでよ！　と言うか何その反応、熱さで脳がやられたの？」

「ま、ガクトの頭がアボーンしてるのは置いといて、」

そう言いながら、発現主である大和は視線を誇らしげにしている岳人から、浜辺に倒れ伏している翔一に視線を向ける。

これだけ馬鹿騒ぎをしているにもかかわらず、体をピクリともせず倒れ伏したままである。

「キャップを釣るためのこの『みんなで遊んでいる所を見せびらかせてヤル気を維持させ続けよう作戦』が失敗に終わりそうだな……」

大和は静かにそう呟く。

風間ファミリーが海に入って遊んでいるのは、何も熱いと言う理由だけではない。

風間翔一と言う男は、いい意味でも悪い意味でも子供のような男だ。
そんな男が、みんなが遊んでいる所を見て黙っている訳が無い。
みんなと遊ぶために、早く修行を終わらせようとやる気を出すだろう。
現に、一日目二日目とこの作戦でモチベーションを維持してきた。
だが、そんなドーピング的なモノも真の疲労からは意味を為さない。
あの風間翔一を、遊びの事に命すら描ける男である風間翔一が何の反応も見せないのだ。それほどこの修行がつらい事が分かる。

「キャップさん大丈夫でしょうか……？」

「流石のオラもアレにはビビったぜ～。正に嵐（ストーム）って感じ」

大和の様子を見て、由紀江と松風（ストラップ）が横に来て話しかける。
松風（ストラップ）が言う“アレ”とは百代との修行風景の事だ。
ちなみに、一子、クリス、京は素潜り競争をしているためここにはいない。

百代を仮想王貴と見立てて攻撃をかわす修行。
対王貴戦を意識してか、百代は自分の周りに氣で造り上げたボーリングの球くらいの球体を漂わせ、翔一を攻撃する。
そして、それを翔一はかわす。
と、言う簡単な修行なのだが。
百代の氣で造り上げた球体をかわせず。翔一の顔、腕、足と体のいたる所に当たる。面白いように当たる。

その数にして一〇〇〇は超えているだろう。
そして、翔一は意識を失い、結果はご覧の有様。岳人ではないが、死んでいるかのように気絶する翔一が出来上がり。

「……確かに、アレは恐ろしい。むしろ、姉さんが恐ろしい」

一度想像して、大和の体に震えが走る。
あんなものを3日間続けているとは、しかも重りつけながらなんて、キャップ……凄い男だ。と、心の中で称賛する。

だが、

「……アレ？」

ふと疑問に思い、大和は由紀江の方に体を向ける。
そこには純白色のワンピース型水着に身を包んだ由紀江がそこに居る。
後ろから見たら、何だかラインとかが凄そうだが今は関係ない。

「松風っぽい声がしたけど松風どこ？　確か松風って寝泊まりしてる場所に置いて来たよね？」

「それは、そのぅ……。て、テレパシーでしゅ！！」

噛んだ。見事に噛んだ。
あうあうあう～と、由紀江は顔はおろか、耳まで真っ赤に染め上げる。
普通の人物なら聞き流すが、ドSに定評のある大和が聞き流す訳が無い。
追撃しようと、意地の悪い笑みを顔に張り付けて――――、

「――――――――――っ！」

ビクっと、体を震わせる。
その発症元は後ろからだ。

「ちょっと、京さん？　どうして俺の内側の太股を撫でているのん？」

「まゆっちが大和となんかイイ空気を作っていた事に嫉妬半分」

「もう半分は……？」

「既成事実を作ろうと……、」

「まゆっち、今すぐ警察呼んで。もしくはポリス。またはキングス。クリミナルポリツァイでも可」

「クールに対処する大和も素敵～♪　……でも、残念。ここは圏外」

「天は我を見放したと言うのか……！　――――取り合えず、離れ

てくれ京。俺の息子がエロ展開でマッハでヤバい」

「……わかった」

京は渋々と言った感じに大和から離れる。

しかし、目はまだ衰えておらず、虎視眈々とスキを狙っている獣の目だ。

大和もそれが分かっているのか、何かを考える。京対策を考えているのか、目が真剣（マジ）だ。

由紀江は由紀江で、あうあうあう～と、顔全体を真っ赤に染め上げる。正に、『顔から火が出る』を通り越して『顔から血潮が噴き出る』にランクアップしたかのようだった。

と、その時――――、

「休憩時間終わりー。ほら、キャップ起きろー」

百代が帰還する。

両手には木の実やらキノコやら抱えていた。

これを見るに休憩するついでに今日の晩御飯でも採ってきたのだろう。

両手に抱えていたそれを、修行の邪魔にならない場所に置きながら、

「１０秒数える。それでも起きなければこいつらをぶつけるぞー？

はーい、１――、２――、３――、」

そして、現れたのは翔一にぶつけていたボーリングの球のサイズの氣で造り上げた球。

それが何個も何個も何個も現れる。その数１３。威力も、数も何だか不吉だった。

「４――、５――、６――」

どんどんと数えられる。

だが、翔一はピクリともしない。

９まで数えられてようやく、

「ぐぬぬぬぬぬぬぅ……！」

翔一が起きる。

片手を膝にやり、両足をガクガクと震わせながらも、起きる。

ボロボロなその姿を一目で見ても、限界だと言う事が直ぐ分かるだろう。

しかし、ボロボロなのは体だけではない。顔も大きく腫れあがり、酷い状態だった。

それでも、翔一は起きる。無理をしても起きる。そうでもしないと霧夜王貴には勝てないと分かっているから。

「おっ、ようやく立ったか。遅いじゃないかキャップ」
「悪い悪い。んじゃ続けようぜ、モモ先輩！」

そうして、地獄の修行が始まった。
百代を仮想王貴と見立てて攻撃をかわす修行。
百代の氣で造り上げた氣弾を翔一がかわそうとするが、満身創痍の体で避けられる筈が無い。
案の定、翔一は氣弾を喰らい吹き飛ぶ。

そこで大和がまた違和感を感じる。
翔一が攻撃をかわして接近戦に持ち込む。それはわかる。そのために修行をしているのだから。
だが、どうして最初から、
————翔一が反応出来ない速度で氣弾を飛ばしているのだろうか？

…………………………………
…………
……………………………
…………………

――――午後5時45分――――

放課後の川神学園。
校舎にはあまり生徒が見られない。授業も全て終わっているから当然と言えば当然だろう。
夕陽に染まったグランドには運動部や拳法部が汗を流し、日々精進している。

そんな川神学園の2年S組の教室に五人の人影があった。

一人は壇上の上にあがっている2年S組の担任である宇佐美巨人。
宇佐美はどこか疲れた顔で、自分の目の前に並んで座っている生徒を見る。

左から井上準、葵冬馬、榊原小雪、そして霧夜王貴。

彼らがここに居る理由は、とても簡単。補習を受けに来たのだ。
小雪は自作の紙芝居を造るのに夢中になってしまい、勉強を満足に出来ずに小テストに挑んだ結果、点数が足りずに補習。
王貴は、小テストの回答を一問一問ずらしてしまうと言うううっかりをやらかしてしまい補習。
冬馬と準がいる理由は小雪の手伝いとして補習を受けいる。

補習組に視線を向けると、それから宇佐美は上に視線を泳がし、深いため息を吐く。

そして、一言。

「なぁ、おじさんの話し聞いてくれない？　いや、マジで」

それを素直に聞くヤツらではない。
冬馬と準は談笑し。
小雪は画用紙に可愛らしい絵を描いている。どうやら、新しい紙芝居の絵のようだ。鼻歌交じりに書くその姿は世間一般的に可愛い部類に入るだろうが、とぎれとぎれに「馬の目無くなった♪」やら「亀の首首ちょんぱ♪」やら「犬の鼻そぎ落とせ♪」やらとても怖い事を口ずさんでいる。電波と言うより、怖い。
王貴に至っては自分の好物であるチョコレートを食べながら、本を読んでいる始末。その題名も『陰陽師で学ぼう！【五行思想編】～超上級者～』だ。彼は陰陽師でもなるつもりなのだろうか？

王貴は片手で器用にページをめくり、もう片方の手でチョコレートの入った箱に指を入れる。
だが、何も掴めない。
チョコレートが無いからだ。

「む？　チョコが切れたか。おい、そこな頭が残念な事になっている屑。今からゴディバチョコレートスウィートハート2粒x30セット買ってくるがいい。無論、ダッシュでだ」

「それ俺の事かコノヤロー？　つか、素直にハゲって言ってくれない？　その言い方は地味に傷つく」

「ハゲー、焼そばパン買ってこいよー。あと、ジャンプもなー」

「コラ雪。変な影響受けるんじゃありません」

「モテモテですねぇ、ジュン？　ちょっと妬けますよ」

「こんな奴隷みたいなモテ方嬉しくねぇよ！」

カオス。正にカオスだった。とても補習を受けている生徒たちとは思えない。
宇佐美も「もう、いいや」と匙を投げる始末。

そんな中、王貴は本を片手に黙って読む。

彼が呼んでいるのは『五行思想』がメインに書かれている本だ。

そもそも五行思想とは、この世界を構成する、隠れ法則のうちの1つと言われているモノだ。

古代中国に端を発する自然哲学の思想で、万物は木・火・土・金・水の5種類の元素からなるという説である。また、5種類の元素は『互いに影響を与え合い、その生滅盛衰によって天地万物が変化し、循環する』という考えが根底に存在する。

この世界は5つの元素で満たされていると考えられ、それぞれ『木行』『火行』『土行』『金行』『水行』と呼ばれる。

西洋の四大元素説（四元素説）と比較される思想である。

5つの元素も司るモノが違っている。

『木行』は植物や風、雷を司り。『火行』は炎を司る。『土行』は大地や石を司り。『金行』は金属を司り。『水行』は水や冷気を司っている。

これらにも相容れないモノが有るとされている。

たとえば、『木行』は『火行』に弱く、『火行』は『土行』に弱いといったようにだ。

そして、王貴は考える。

これらの相容れない属性、すなわち『五行』全てを融合させた武具を造ったらどうなるのだろうか、と。

『五行』が反発しあい、武具がはじけるか。はたまた属性全て混ざり合い、また新しい属性を生むか。

論より証拠。やってみたら分かるだろう。
王貴は右手に氣を集め、『五行』が込められて武具を造り出そうとする。
そして、一振りの剣が現れる。

それを見て王貴は怪訝な表情を浮かべてその一本の剣を見る。
それは、なんら特別の力が備わっている訳でもないただの一本の剣だった。
だが、王貴が怪訝そうにしているのはそれではない。

「何だ、この剣は？」

思わず言葉に出す。自分が想像し設計図を立てて造り出した剣はこんなものではない。
いきなり剣を造り出した王貴に、準が驚きツッコミを入れているが知った事ではない。

王貴は自分が造り出した剣を注意深く見つめる。
それを剣と言ってもいいのだろうか？
柄も鍔も金色。刃渡りはおおよそ長剣程度。
だが、肝心の刀身に当たる部分が、刃物として形状を逸脱しすぎている。三段階に連なって出来ている円柱。その色は黒色。そして、赤色の線のようなモノが入っている。その切っ先には螺旋状に捻くれた鈍い刃。
どう見ても人を斬るという概念がない剣。

だが、王貴にはそれが見覚えがあった。
どんな武器の図鑑にも載っていないそれを王貴は確かに見た記憶がある。
まるでこの“剣”を生前の頃から知っているかのような気持ちに、王貴は戸惑うばかり。

「一体なんだ、この剣は……？」

言葉に出しても誰も答えてくれない。
ただ、空中に溶け、消えるのみである――――――――。

第8話　風間ファミリー特訓紀　来世編

ＰＭ１５：４５

日差しが烏賊島を容赦なく照りつける。
風間ファミリーが烏賊島に来てから5日が経った。
今日で烏賊島の島籠り最終日。
浜辺には風間ファミリーの面々が居た。
水着など着ておらず、翔一と百代の修行風景を固唾をのんで見守っている。

「行くぞ、キャップ！」

「よし、来いやァああっ！！」

気合一閃。
翔一が己を奮いたたさんと吼える。
その直後。百代の造り出した氣弾が翔一を襲いかからんと飛んでくる。
その数１５０を超えている。

それに翔一は恐れず突っ込んで行く。

いや、恐れずと言うのは違う。
この5日間死ぬほど味わった百代の氣弾。痛いし速かった百代の氣弾。それを恐れない訳が無い。
だが、前に進まなければ、霧夜王貴には勝てない。

翔一は氣弾を受け止めず、必要最小限の動きでかいくぐる。
顔をかすめ、腕をかすめ、足をかすめ、頭をかすめる氣弾。
正に、寿命が縮むかのような気持ちだった。

「いいぞ、そのまま避け続けて来い！」

百代が何かを言っているが、翔一にそれを返す余裕はない。
当たれば、激痛に襲われ足を止められる。
全神経を回避に回さなければ八つ裂きだからだ。

氣弾は翔一に容赦なく襲いかかる。
そのあり様は正に嵐。
縦横無尽に駆け巡り、翔一に襲いかからんと向かってくる。
翔一がかわした氣弾は標的からはずれ、浜辺に墜ちる。そして、鉄球でも落ちたかのような音ともに出来あがるクレーター。
それだけで、百代の氣弾の力が分かる。

何とか氣弾をかわし続けているが、

「――――ッ！」

腕に激痛。
どうやら氣弾が腕に当たった様だった。
だが、翔一はそれを口を固く閉ざして耐える。
今は、悲鳴を言う暇さえ無い。そんなものに神経を使っていてはこの嵐のような攻撃はかわせない。かわし続ける事なんて不可能。

百代は言った。王貴の武具投擲攻撃は私のこれよりも強い、と。
この嵐のような攻撃よりも、王貴の投擲は強いと言うのか。
こんなにも痛いと言うのに強いと言うのか。

その思わずしてしまった思考が仇になったのか、翔一の体に氣弾が次々と当たってしまう。
顔に、頭に、腕に、足に次々と当たる氣弾。
だが、翔一は倒れない。激痛が体を駈け廻っても倒れない。この5日間、嫌ってほど喰らっているのだ。耐性もついてしまうだろう。

だが、耐性を付けても痛いモノは痛い。
翔一は何とかかわそうとするが、

「ガ……！　くそ……！」

かわせない。
翔一の両手両足に付いている７ｋｇの重り。それが邪魔をして、

翔一は満足に動けない。
翔一の事情を何て知った事ではないと言わんばかりに、氣弾の嵐は翔一に襲いかかる。その数５０。

「ち、くしょう！」

最小限の動きでかわし続けてきたしてきた翔一が、ここで『転がる』と言う最大限の動きで氣弾の嵐をかわそうとする。
正に、必死の動き。
そのおかげもあってか、５０の氣弾は標的を失って浜辺に墜ちていく。その瞬間、発破をかけたかのようなけたたましい音が聞え、また新たなクレータを作りだす。

だが、翔一にはそんな事を気にしている余裕はない。
直ぐに体勢を整えようと、転がりながらも立とうとする。
アレをかわしても、何ら解決にも至ったないし、攻略も出来ていないからだ。
直ぐに、氣弾が来る。

故に、翔一は立とうとするが、

「避けたら直ぐに立て、次が来るぞ！」

百代がそれを許さない。
百代はは翔一がかわす事を読んでいたかのような動きで、直ぐに翔一の下に新たな氣弾を撃ち込む。その数３０。

それを翔一はかわそうと動くが、動けない。
いつもの翔一にならいざ知らず、今は重りと言う枷が翔一の邪魔をする。

かわせないと判断した翔一は、身を小さくし自分の両腕を顔の前にクロスするかのように守り、氣弾の攻撃を防ごうとするが、

「ごばっ！？」

防御など意味が無いとばかりに、氣弾の嵐は翔一を吹き飛ばす。
数十m吹き飛ばされただろう。
翔一は背中から落ちる。落下した場所が柔らかい浜だったからか、落下による痛みは無い。
だが、問題はそれじゃない。
氣弾が当たった場所は激痛が走る。まるでハンマーで殴られたかのような激痛。いや、それ以上の痛みが翔一の体に走る。

だが、そんな痛みを感じても――――、

「グッ……、くそ……」

翔一は立ち上がる。
膝は震え、腕も満足に上がらない。
それでも、翔一は立ち上がった。そうでもしなければ勝てる相手ではない事が分かっているから。

「それじゃ、続けるぞ？」

「あぁ、頼むぜ！　モモ先輩！」

そして、また翔一は百代に向かって走りだす。
愚直なまでに走りだす――――――。

「キャップ凄い耐久ついたな……」

そう呟いたのはクリスだ。
視線は翔一と百代の修行風景を見つめたまま。

「うん、動きも最初よりも大分よくなったしね」

京が言う
視線は修行風景を見たまま。

確かに耐久はついた。
だが、それが何故か大和には妙な気がした。
王貴の攻撃をかわす為の特訓ならば、重りも付ける必要もないし、最初から翔一の反応速度以上の氣弾を撃ち込む必要もないだろう。
だが、百代は翔一の反応速度以上のスピードで氣弾を撃ちこんでいる。
それに重りも、翔一がかわさないために着けて足かせのように感じる。

（姉さんにも考えがあると思うけど……）

大和は考える。
だが、どう考えても答えは一つしか浮かばなかった。
百代が翔一に重りを科して、翔一の反応速度以上に撃ち込む理由。

（と言う事は、こうでもしないと、霧夜王貴には勝てないってことか）

大和は静かに、ただ静かに、驚愕した――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ＰＭ２１：００

川神市親不孝通り。
川神市で最もアンダーグランドの場所に王貴はいた。
人の少ない路地裏。
少年の足元には３人の男たちが、倒れている。その体には武器が串刺しになって刺さっている。息も、してない。
王貴はそれに視線を向けない。
ただ、空を見上げているだけである。空は雲ひとつなく、この惨

状とはにつかない、満点の星空が浮かんでいた。
そこでようやく足元に視線を向ける。
そこには人間だった者が3人。

（川神に来てから刺客が少なくなってきている……）

そう思うと、それは当然か。と、結論付ける。
『武神』川神鉄心がいる土地だ。そんなホイホイと刺客を放てる訳もないし、道理もない。
そう考えると、また空を見上げる。

少年の頭には風間翔一との決闘など入っていなかった。
考えるのは『刃が円柱の剣』。それはどう考えても見た覚えが無いし、図鑑でも見た事が無い。
なのにもかかわらず、『五行』全てを組み合わせようとすると決まってあの剣が出てくる。そして、『五行』すべて組み合わされない。

（もう少しで出来そうな気がするのだがな……）

何はともあれ。
先ずは決闘と言う児戯をこなすとしよう。
そう考えると、少年は路地裏から消える。
残っているのは、モノを言わない3つの物体だけである――――。

第9話　翔一と王貴

風間ファミリーが烏賊島から帰って来てから2日が経った。
つまり、今日が決闘の日。
だが、島津寮の朝はいつもとかわらない。

「ゲンさーん。おかわりー！」

「風間テメェ今日決闘する日だろうが。食うのはもうやめとけ。吐いちまうぞ」

「えっ、ゲンさん俺の心配してくれんの？　優しいなー」

「バカが、決闘中に吐かれてる姿見ても気持ち悪くなるだけだからだ。お前の心配なんざしてねぇ。勘違いしてんじゃねぇぞ」

「京醤油とって」

「ん」

「京さん？　俺醤油とってって言ったんだけど……。これどうみても七味だよな？」

「大和にも七味の素晴らしさを知ってもらおうと思って……」

「どう考えて、魚に七味をかけようとするアホが居るんだよ」

「まゆっち、おわかりだ」

「ハイ、クリスさん」

「クリ吉はよく食うな～。そんなに食うとメタボリックシンドロームになっちまうぜ～？」

「心配ない松風。自分はまだ3杯しか食べていない」

このようにいつもと変わらない。

その中で、寮母であり岳人の母親である島津麗子が翔一に話しかける。

「翔一ちゃん今日は決闘があるんだってね？　負けるんじゃないよ？」

「おう！　任しといてくれよ麗子さん！」

顔中シップだらけになった翔一は少年のような笑顔でそう返す。

いや、顔だけでは無い。腕にも太股にも体中に湿布を貼っていた。

嵐のような百代の氣弾をくらっていたのだ。湿布を貼って直さないとベストコンディションで決闘には望めない。

源忠勝はハァっとため息を吐くと、

「オラ、漬物やるからそれで最後にしとけ」

「おっ、有難うゲンさん！」

「勘違いすんな。テメェのためじゃねぇ。俺が腹いっぱいになって食えなくなっただけだ」

そう言うと、忠勝は席を立ち、島津寮の食堂から出て行く。

翔一は忠勝からもらった漬物を口に運び、しっかり噛みしめる。こりこりとした触感で、とても美味かった――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

朝ごはんを食い終わり、洗面台で身だしなみを整えた翔一は自分

の部屋に居た。シップはもう貼っていない。
そこには自分だけではなく、1人（？）のロボが居た。
その名前はクッキー。
九鬼財閥が作り上げた人工頭脳を備えたロボ。英雄が一子にプレゼントしたものだが、一子が「いらない」と大和に誕生日プレゼントとして送りつけた。以後はクッキーのことが気に入った翔一をマイスターとし、主に翔一の部屋に居る。秘密基地の管理の他、様々な世話を焼く。用途に合わせて3段階に変形することが出来るらしい。
らしいと言うのは、2段階までの変身なら見た事があるが、3段階までの変形は誰も見た事が無いからだ。
クッキーは心配そうな声色で翔一に話しかける。
「マイスター……」
「心配すんなよクッキー。余裕に勝ってくるさ！」
翔一はいつもと同じ少年のような笑顔でクッキーに言う。
それで安心したのかクッキーは、
「うん、ちゃんと勝ってきてよね。負けた時には――――、」
そう言葉を区切ると、機械音と共にクッキーが変形する。
普段のクッキーとは違い、スマートになったクッキーが現れる。
これこそクッキー第2形態。クッキーの戦闘モードだ。

クッキーは自身の持つ光る剣を片手に、

「クッキーダイナミックを全力で繰り出すからそのつもりでいるがいい」

「うぇっ、おっかねぇな」

「私のマイスターと言うのならば敗北は許さん」

「わかったわかった。んじゃ、行ってくるわ」

「うむ、吉報を期待している」

クッキーの激励を受け、翔一は自分の部屋を出る。

島津寮の玄関を出ると、風間ファミリーの面々が居た。
翔一は目を閉じる。
そして、直ぐに目を力強く開け、

「風間ファミリー出陣だ！　行くぜぇー！」

と、鼓舞するかのように言う。
もはや、言葉は不要。風間ファミリー全員で力を合わせて、霧夜王貴を打倒するのみである――――。

霧夜王貴はマンションに住んでいる。
マンションは川神市に至る所にあった。
その中で王貴の住んでいるマンションがある場所は親不孝通りにある。
その場所は治安が悪い事で有名だった。だが、王貴には関係ない。
逆らうものは武力を以て組み伏せ、蹂躙するのみである。
王貴がマンションから出る。

風間翔一と違って王貴を待っている者はいない。
だが、王貴は「それがどうした」と言って鼻で笑うだろう。

孤高こそ王。王であるが故の孤高。それが王貴のあり方であり、

王貴の王道であるからだ。

そうして、王貴は傲慢に歩みを進んる。
王に逆らう愚か者を組み伏せ、蹂躙するために。王貴は川神学園に歩みを進めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『今より第1グランドにて、決闘が行われます。内容は武器ありの戦闘。見学者は第1グランドにてお集まりください』
朝の川神学園にアナウンスが流れる。
だが、そのアナウンスよりも早く川神学園の生徒たちは集まって

いた。
それもそうだろう。有名な風間ファミリーのリーダーである風間翔一と、ある意味有名な2年S組の編入生である霧夜王貴が決闘をしようとするのだ。
有名な2人が決闘をする。集まらない訳が無い。
今か今かと騒がしくなるギャラリー。
商売をしている者たち。

今、グランドの中央には風間翔一と川神鉄心の姿が有った。
霧夜王貴の姿は無い。

その様子を見て、グランドの外から見ていた大和が声を上げる。

「霧夜王貴のヤツどうしたんだ、もう少しで時間だぞ？」

「アレじゃねぇか？　キャップが怖くなって逃げ出したとか」

「どう考えてもそんなキャラじゃないと思うけど……」

岳人がバカにしたかのような声で言い、卓也がどこか落ち着きの無い様子でツッコム。

あと5分で開始だと言うのに王貴は現れない。
まさか、本当に翔一に恐れをなして逃げたと言うのだろうか。

そう思ったその時、

グランドを輪を囲むように集まっていたギャラリーの一方向が、突如として割れる。

そしてそこから、金髪紅眼の少年がゆっくりと歩み出てきた。

その途端、騒がしかった周囲ピタリと止む。

少年より放たれる無言の威圧が、それ以上騒ぐことを彼らに許さなかった。

そのまま少年は傲岸に踵を鳴らしながらグランドの中央へと歩みを進める。

その表情は、余裕。これから決闘をする者とは思えない表情だった。

そして、王貴はグランドの中央で止まる。

翔一と王貴の距離はおおよそ５０ｍ。

両者の様子を見て、鉄心が、

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！　勝負がつくまで、何があっても止めぬ。だ、勝負がついたにも関わらず攻撃を行おうとした瞬間。ワシが介入させてもらう、良いな？」

「おう！」

「フン……」

２人とも、それぞれ反応する。
鉄心がその反応を見て頷き、始めと言おうとした瞬間。

「待て」

王貴が待ったをかける。
王貴は視線を翔一からずらさず、真っ正面から堂々と見つめたまま傲岸に言い放つ。

「この決闘に王（オレ）は自身にハンデをかけよう」

周囲がそれにざわつくが、王（オレ）には関係ないと言わんばかりに、王貴は言い放つ。

「１つ目は障壁を張らない。２つ目武具を造りだすのは１００までとする。これを破ったのなら王（オレ）の負けでよい」

「お前……！」

ハンデをされても吠え面をかかせる。言った翔一にも怒りを覚える内容だった。

ナメてる。完全にナメ切られている。

翔一の怒りの表情を受けてなお、王貴は愉快気に口元を曲げる。

「わかるか屑よ？　これでようやく貴様は王（オレ）の足元だと言うのだ。貴様と王（オレ）の間にはこれ以上の開きがある事を忘れるな。では、よいぞ開始の宣言をせよ」

そう言うと、王貴はポケットに手を入れる。

その瞬間。王貴の背後に１２挺もの武具が現れた。

少年は本気で１００本の武具だけで翔一を倒そうとしているらしい。

翔一はいつでも動ける様に、身を低く沈める。

絶対倒すと、心の中で誓いながら。

そして、鉄心から、

「いざ尋常に、はじめぃっっ！！！」

開始の宣言がなされ、風間翔一と霧夜王貴の決闘が始まった――――――――。

第9話　翔一と王貴（後書き）

ようやく次回からキャップＶＳ貧弱王の戦闘です。
戦闘シーンなんて初めてなので変な点もあると思いますがよろくです。

ご感想、ご指摘ありましたらよろしくおねがいします。

第１０話　王ＶＳ風　前篇（前書き）

長いのでカットカットカットカットカット！！　しました。

第１０話　王ＶＳ風　前篇

霧夜王貴は確かに強いが、今の王貴は絶対無敵の強さでは無い。
無慈悲なまでに武具を造りだして、それを雨霰と投擲する戦闘スタイル。それを全て避け切り接近しても、少年の絶対守護の障壁がそれを阻む最強の守り。
普通ならば、武道四天王クラスでなければ、彼に太刀打ちする事すら出来ないだろう。正に、手も足も出ずに戦いは終了する。

だが、今回は違う。
一つは、造る武器は１００まで。
二つは、障壁を張らない。
これらを破ったのなら、無条件で敗北にしていい。
少年は自分にこの２点のハンデを付けた。
故に、少年は絶対無敵では無くなる――――――――。

翔一は周囲の状況を見る。
辺り一面、サッカーの試合ができるぐらいの広さを持ったグランド。
隠れる場所もない平面に対峙しているのは風間翔一と霧夜王貴。
王貴の背後には十二挺もの武器が浮かんで、主の命令を待っていた。

翔一と王貴の間にある距離は大体５０メートル前後。今の翔一の

脚力をもってすれば、走れば、直ぐに王貴の下へと詰め寄れる距離だ。

翔一は息を止め、全身のバネを縮める様にして、わずかに身を低く沈め、

「が、――――――ァあああっ！」

まるで爆発するように、王貴目掛けて勢いよく駈け出す。

だが、王貴は構えようとすらしない。

ただ、軽く片腕を上げて、人を嘲笑った笑みを浮かべたまま、

「足掻いて見せろ道化――――。なに、刃は潰してあるが故、刺さる心配はない。もっとも、当たれば死ぬほど痛い目にあうのだろうがな！」

軽く上げていた片腕を、翔一に向けて指さす。

それに応じて彼の背後の武器が翔一を襲いかからんと放たれる。

その数六。

数こそ少ないが、それでもその破壊力は絶大であった。まるで発破をかけらたかのように地面が吹き飛び、それが粉塵となって視野を覆い尽くす。

それでも翔一は、体と武器がギリギリ当たるかどうかのところで避ける。必死の回避運動。当たれば自身は吹き飛び、接近戦なんて持ち込めない。

「く……そっ！」

何とか武器の五つを避けて、少しでも接近しようと前へと走りだす。

しかし、翔一は忘れていた。放たれた武器の数は六艇。その内、翔一が必死に避けた数は五艇。明らかに数が足りない。

だが、それを忘れている翔一は王貴に向かって駈け出す。自身の今持ちうる、全力を以て王貴目掛けて勢いよく駈け出す。

そして、翔一の右側から聞えてきた風切音。

人としての本能がそうさせたのか、翔一は右腕を曲げ、顔の右側を庇う様にして守ろうとする。

その瞬間、

「ガ――――ッ！」

右腕に激痛。

その激痛とあまりの衝撃に、翔一の足は地面からふわりと離れる。それと同時に、翔一の体が勢いよく左へと吹き飛ばされた。ゴロゴロと転がる翔一は、何メートルも左方に吹き飛ばされてようやく止まる。

「フン、あの時よりは疾くなったが、」

激痛に眩む翔一の意識に割り込むようなにして、愉快気な声色の声が響く。

翔一は直ぐに立ち、体勢を立て直す。

直ぐ近くには大鎌が刺さっていた。どうやら先程の風切音はこの大鎌からのようだ。不規則に軌道を描く大鎌を、丁度よく翔一に当てる。それすらも金髪紅眼の少年にとって計算通りだと言うのか。

「その程度の速度では王（オレ）には届かん」

嗜虐の笑みを浮かべ翔一を見据える王貴。

少年は明らかに楽しんでいた。背後に漂う六挺の武器、その武器と合わさって新しく出来た一七挺の武器を一斉に放てば、今の翔一に防ぐ手段は無い。

だと言うのに、それをせず限界を試すかのように手を抜いている。

「ハァ――、ハァ、クッ！」

だが、それが幸いして翔一はまだ立っている。

息を整える翔一に、

「ククククッ、そら、休んでいる暇は無いぞ」

愉快気に唇を曲げて、背後に漂わせていた一七挺の武器のうち、五艇を翔一に向けて放つ。

右腕は痺れ、息も絶え絶え。
今の翔一にそれらを避けながら近づくと言う事が出来ない。

翔一は慌てて地面を転がるように、必死に跳ね跳ぶようにその場を離れる。
直後、放たれた武器がついさっきまで翔一が居た場所に武器が突き刺さっていた。

（よし、これで何とか……！）

そう思った翔一だったが、放たれた武器は突き刺さった瞬間。突き刺さった地面にクレータを作り上げる。
その瞬間、武器は衝撃を生み、翔一の全身へと襲いかかった。
胸を打つような衝撃に、肺の中から全ての酸素を吐き出される。

「ごっ……、ガハ……ッ！」

それでも何とか転がりながらも、体勢を整えようと立ち上がる。
そんな翔一を、

「せっかく王（オレ）に刃向かう権利をくれてやったと言うのに……。これでは前回の焼き回しではないか。まったく、もう少しばかり足掻いて見せろ道化」

転がりまわる翔一を気に入ったのか、少年は愉しげに笑う。
だが、翔一は今はそれでいいと思う。王貴が本気で仕留めにいけば翔一が手も足も出せずに終わる。こうして油断してくれているだけましだ。

だが、それでも。王貴が本気になっていなくても、翔一は近づけない。
転がり続けて、回避し続けるしかない。そうして、武器の直撃を無様にも避け続けるしかできない。
どうすればいいのか。どうすればヤツに近づけられる。大和の策の通り、もう“外した”方がいいのだろうか？
そう考えるも、

「――――ほう、王（オレ）を前にして考え事とは、随分と余裕だな」

王貴から嘲笑が入り混じった声が聞える。
視線を向ければ、必死な翔一とは逆に余裕ある表情の王貴がそこに立っていた。

「王（オレ）に接近戦をどう持ち込もうか考えていたのだろうが、無駄な考

えだ」

「どう……して……？」

「舐めるな。衆愚の考えすら見抜けずして、何が王か。貴様の浅はかな企みなど、それこそ手に取るように判る」

その言葉に翔一は不意をつかれる。

無限に武具を精製するこの王は、人の表情や雰囲気を見ただけで何もかも把握しているというのか。

「では、その解答といこう。――――もっとも、いかに正解に近かろうが、王（オレ）に接近などさせんがな――――！」

「クソ……ッ！！」

翔一の反応が遅れる。

王貴の言葉に気を取られていたタイムラグ。その僅かな時間さえも、王貴の前では致命的な隙となった。

王貴の背後から放たれる十二挺の武器。それらが翔一に容赦なく雪崩れ込む。

そららを翔一は、なんとかその脅威から逃れようと、横に転がって回避しよとしたが、

「――――――――！？」

翔一の動きを読んでいたかのように、左右に五挺ずつの武器が突き刺さり邪魔をする。
退路が絶たれた。
硬直する翔一。そこに一片の容赦なく、二艇の武器が襲いかかるまずい、と後方に下がろうと動こうとするがもう遅い。

「ガッ！！」

腹部、胸部にそれぞれ一艇ずつあたり、翔一はなすすべなく吹き飛ばされる。
まるで以前に百代に殴られた。いやそれ以上の衝撃と激痛が体中を駈けめぐる。
そのままゴロゴロと、死体のように地面を転がる。手足を投げ出したまま何メートルも転がった翔一は仰向けの大の字になってようやく止まった。
翔一は身動き一つしない。

「そこまでか……。存外にもった方ではあったな。王（オレ）の計算では最初の一撃で貴様は倒れていた」

強かった。霧夜王貴は本当に強かった。
何をしようとして、やる前に全て完封される。風間翔一の行動を計算に入れながら、武器を造りだし攻撃する。
川神百代は言った。『気を使って武器を創る』聞えるには簡単だ

が実際にやるのは難しい。武器を創るにしてもしっかりイメージしないと出来ないし、たとえ出来たとしてもあそこまでの威力を引き出すには膨大な気が必要になる。飛ばすにしても計算して撃たなければならない、と。

となれば、一つの頭に複数の事を計算していることになる。

ああ、強い。化け物だった。

「ハハッ」

翔一は笑う。

敵は強大。強さも化け物ときてる。

だが、悲観する事は無い。

ヤツも人間。同じ人間なら、負ける筈が無い――――――！

手を使わずに、腹筋だけの力だけで起き上がる。

それに驚いたのは王貴だ。

常人なら、アレだけで終わってた。

現に前に戦った時はあの程度で翔一は終わっていたのだ。だというのに立ち上がった。ありえない。七日程度修行したからと言って立ち上がるなどあり得ない――――。

「お前ホントに強ぇなぁー」

翔一は不敵に笑う。
そして、自分の両方の手首に着いてあったリストバンド、両方の足に着いていたアンクルをとり、放り投げながら。

「だから、俺も本気で行く」

翔一が付けていたリストバンド、アンクルが地面に落ちた瞬間。
ゴトン！　と言った重い音が聞えた。

「貴様、それは……」

「一つ七キロの重りだ。最初はこれでいけっかなーって思ったけどさ。やっぱり無理だ。お前強すぎるんだよなー」

屈伸したり、腕を伸ばしたりと体の調子を確かめながら言う翔一。
決闘を見ていた周囲がざわつく。
重りを付けてなお、七キロの重りを付けてなおあのような動きが出来たのかと。周囲に驚く者もいれば、流石風間だと感心する者まで現れ始める。

そんな周囲の驚きや感心するよりも、王貴にとって怒りが先立ったらしい。
端正な整った顔からあらゆる表情が削げ落ちて、眉間に皺が集ま

り、憤怒の表情に変わる。

「慢心というものは、王にのみ許される代物だ。貴様のような屑風情が使っていい代物ではない。故に、その不敬は万死に値する。そこな屑よ、腕の一本や二本で済むと思わぬ事だ!!」

怒りのあまり、紅蓮に燃えるかのような紅眼を翔一に向けながら吼える。

そして、王貴の背後に現れる武器の群れ。その数二十二艇。

風間翔一を蹂躙するには十二分の数の武器。

だが、翔一は不敵に笑う。

「お前が最初に俺を舐めてるからこうなるんだ。俺を、俺達風間ファミリーを舐めんなよ?」

「ハッ、屑風情が思い上がるなと言うのだ――――――――!!」

その一言に応じて、王貴の背後に漂っていた二十二挺の武器が翔一に放たれる――――。

第１１話　王ＶＳ風　後篇

「弟、アレはお前の策か？」

翔一と王貴の決闘を見ていた百代が大和に聞く。
百代がアレと言うのは翔一が付けていた重りの事を言っているのだろう。烏賊島からの修行後、翔一は重りを確かに外していた。その外した瞬間も、百代は目撃している。
だと言うのにも関わらず、翔一の両方の手首と両方の足首に重りを付けていた。これは翔一自身が付けた訳ではないだろう。
こう言う策を思いつくのは風間ファミリーの軍師である直江大和しか居ない。

「うん、そうだよ」

臆面もなく言い放つ大和。
重りを付けながら戦っていた。そんな事王貴に知れれば怒りだすに決まっている。そんな事大和も充分に把握している。
だが、大和が翔一に重りを付けたまま戦わせたのにも理由があった。
スポーツにおいても戦いにおいても相手を怒らせる事は大事な事

だ。怒れば冷静な判断力を失い、自分はおろか周りすら見れなくなる。
　現に今の霧夜王貴は怒りに身を任せ、冷静な判断が出来ずにいる。
　狡い策ではあるが、翔一を勝たせるためにはこんな事でもさせないと霧夜王貴には勝てない。こんな事、正々堂々を地で行くクリスに知られれば何を言われるか分からないが、今はしのごの言ってる場合じゃない。

「これが吉と出るか、凶と出るか。まだなんとも言えないか。何せキャップは修行の全てを出している訳じゃないからな」

　百代が意味深な事を言う。
　どういう意味か聞こうとするが、周囲から歓声が上がる。
　何事なのか、と大和がグランドを見た――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

王貴の造り出した二十二挺の武器が翔一を襲う。先程のような精密に計算しながら様々な角度から小さな標的を狙うような射出ではなく、彼を含むその一帯を絨毯爆撃するかのような射出。

二十二挺の武器の雨。それぞれが必殺の威力を誇るそれを、翔一は先程のような直線状の動きでは無く、蛇行するようにして避ける。

はたして、翔一のそれは避けると言っていいのだろうか？

先程のようなギリギリの攻撃を先読み、何とかそれに体を合わせて避けると言う避け方ではない。むしろ、相手に合わせる事もないと言わんばかりの縦横無尽に駆け巡る。

「そんな直線状の攻撃！　モモ先輩に嫌ってほどやられてんだよ！」

最初とは違い、直線状の感情むき出しな攻撃。

それは烏賊島で五日間嫌ってほど百代にやられた攻撃そっくりだった。ならば、避けられる。重りが無い今なら避けられる。

「ええい、ちょこまかと――――！」

王貴の背後に新たな武器が現れる。その数は十。
それらは全て、剣や短剣。槍や戟と言った直線状にしか動かない。武器だった。
怒り心頭。王貴の憤怒は臨界にまで達したのだろう。翔一を見つめる視線には怒り一色。紅蓮の燃えるかのような如き双眸を翔一に向ける。

大和の策に王貴は見事にはまったのだ。
今の王貴は怒りに我を忘れ、冷静な思考が出来ていない。普段の王貴なら考えれないが、屑と見下している者に自身の方が実力が上にもかかわらず舐められたのだ。それを怒らない王貴ではない。

再度放たれる十の武器の雨。
それらも翔一は避ける、避ける、避ける、避ける。
そして、ようやく翔一は王貴との距離を２０メートルにまで詰めた。

「おのれ、調子に、」

王貴の目の前に横一列に展開される五つの武器。
それを、

「乗るなと言うのだ、下朗――――！」

一斉に放たれる。
だが、それも翔一は飛びこむようにして転がって回避する。
ここまで翔一の戦い方は決してかっこいいものではない。転がったり、吹き飛ばされたりとされた結果真っ白だった制服も茶色に変色し、顔も傷だらけだ。
しかし、それでもようやく王貴の下へとやってこれた。

「ちぃ！」

王貴も接近された以上、武器の投擲は出来ないと考えたのか、右手には自身が造り上げた剣が握られている。
それを一文字に凪払う様にして翔一を斬りつけようとするが、翔一はそれを、身を低くしかわし、腹部へ拳を突き刺す。

「ぐぅっ！　この――――！」

今度は右手の武器を捨て、左手に長槍を造り出し、それを勢いよく突き刺すが。翔一が大きく左に動いてかわし、虚空をつく。
左に大きく動いたせいか少し距離が開いたが、それを一気に距離を詰める。
これ以上離れるつもりは、ない。離れたが最後、翔一は今度こそ手も足も出ずに負けるからだ。

左手に持っていた長槍を捨てて、両手に大鎌を持ち、水平に斬りつけるが。身を低くしてかわし、再度同じ腹部に拳を突き刺す。

（この屑め！　同じ場所を！）

同じ個所を攻撃され、王貴は怯む。しかもそこは腹部だ。怯みもするだろう。
その怯んだタイムラグを翔一は見逃さない。
翔一は右手の拳を握る。石よりも堅く拳を握る。

（こやつめ、また同じ場所か！）

王貴は両手に持っていた大鎌を捨てて、両腕を腹部を庇う様にして守る。
だが、それはフェイントだった。
翔一の拳は腹部で止まったかと思えば、ジャブのような鋭さを以て王貴の顔面を殴りつける。

「ガッ!?　この、痴れ者がァあああああっ!!」

「確かにお前は強い、化け物みてぇに強い。でも喧嘩じゃ負けねぇ!」

王貴は右手に剣を造り出し、大ぶりに縦に振るう。
しかし、それを避ける。
攻撃を外した、王貴にカウンターを決める様に懐に潜り込み、拳を突き刺す。

王貴は『戦闘』は負け知らずだが、『喧嘩』をした事が無い。対し、翔一は『戦闘』の経験は無いが、『喧嘩』は慣れている。
両者の差はそこに集約していた。

霧夜王貴の戦い方は拳を使った『喧嘩』ではない。一方的に武器

を造り上げて射出する『戦闘』での殲滅だ。武器を造り、遠くから射出する。その才能がある故に彼は接近戦なんてものをやる必要がなかったのだ。故に、彼は接近戦がやったことのない素人。

刺客の中にもその武器の雨を掻い潜り、接近戦に持ち込ませようとする輩もいたが、それらすべてを障壁で阻まむ。障壁で阻めれるのなら接近されても対策も企てなくてもいい。だが、今回の決闘は障壁が使えない。いや、使わないよう自分から言ったのだ。

加えて、彼は武術家ではない。

武術家であろうと、そうでなかろうと、己を超えようと、もしくは弱い部分を補おうと鍛練するだろ。努力するだろう。

だが、彼はそれをしない。技術や努力とは、言ってみれば弱い人間が力を補うためのものだ。

あらゆる敵を殲滅できるのならば、上手く敵を倒す技術を磨く必要もない。

あらゆる攻撃を防げるのならば、敵の攻撃を見切り防ぐ努力を積む必要もない。

努力や技術など、王(オレ)以外の者どもが勝手にやればいい、と言った傲慢な考えが彼にとって致命傷だった。

だが、身体能力は王貴の方が勝っている。大きく後退すれば翔一との距離は容易く開けるだろう。

しかしそれすらも王貴のプライドが許さなかった。

後退すると言う事は、敵の脅威を認めたと言う事。もっと分かりやすく言えば、自身が蔑んでいた屑を自分の脅威だと認めると言う事。

それこそ否。断じて否である――――――。

「おのれぇ――――、おのれ、おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ……！　貴様風情にぃ……！　貴様のような屑風情にこの王（オレ）が――――――！」

「うるせぇ！　もうここは、俺の距離だ！」

そう言うと、翔一は左拳を腹部へと放つ。

翔一が放っている拳は体重を乗せている者ではない。ボクシングで言う所のジャブ、殴る時よりも引き戻す時の方に力を入れるような、牽制の為の攻撃でしかない。

そんな攻撃でも、王貴には重く突き刺さる。

翔一は言った。「俺を、俺達風間ファミリーを舐めるなよ」と。

ならば、この男は9人分。翔一の拳が9人分の重さ。9対1の戦いになる。

だが、王貴はそれがどうした。と、嗤う。

1人だろうが、9人分だろうがまとめて組み伏せて蹂躙してやる。

今までもそうしてきた。そして、これからも――――！

王貴の腹部に拳が突き刺さるのと同時に、翔一の脳天目掛けて剣を振り下ろす。

接近戦で勝てないのなら、相打ちを狙ったのだ。

翔一もこればかりはよけられず、殴っていない方の腕。右腕で頭を庇う。

「――――――――ッ！！」

右腕からゴキッと、嫌な音が聞えた。その瞬間、右腕に激痛が走る。

その瞬間、翔一は理解する。右腕が折れた――――と。

だが、口から悲鳴を上げないよう、一文字にきつく閉ざし、

「おァあああああっ！！！」

気合一閃。

先程まで放っていた相手を牽制するジャブのような攻撃ではなく、体重を乗せて、腰で撃つような重い攻撃を、本気の攻撃を左拳に乗せて王貴の顔面へと放つ。

王貴はそれに反応できず、後ろへ大きくブッ飛んだ。

「グッ……！　おのれ、このような……！」

ノロノロと立ち上がる。

顔に走る激痛。

全ての攻撃を障壁で防いできた王貴にとって、この痛みは未知の感覚だった。以前、幼いころに川神百代と組み手をしていた時に感じたモノだが、もはや忘れてしまうぐらい痛みなど感じていなかった。

そもそも、痛みなど感じていたら死ぬ日常に王貴は居たのだ。

「貴様風情にこの『力』を使う事になろうとは……！」

顔を片手で覆いながら、もう片方の手に造り出した一本の短剣。

それは装飾華美で、みるからに名剣と言ってもいい代物だった。

王貴は何かをするつもりだが、そんな事させる翔一ではない。

翔一は駈け出す。一気に詰め寄り、再度接近戦に持ち込む――――！

しかし、王貴は構えようとしない。

片手に短剣を持ったまま、それを真横に持ってくる。

そして、無造作に横一文字に凪払う。

それだけで、出来あがった、

“風”

轟！！　と音を立てて風の流れが渦を巻く。

翔一の表情が変わった。
だが、今更危機感を持っても遅い。すでに王貴の目の前にはまるで空間に穴が開いた様な大気の渦が、球形の形で砲弾のように待機している。
グランドの砂が舞い上がり、直径数十メートルに及ぶ巨大な大嵐（タイラン）の渦が巻き上がる。

そして、再度自身の真横に短剣を持って行き、
一言。

「殺せ――――――――」

五行思想の中の『木行』で造った巨大な大嵐（タイラン）が風を切り、
風速１２０メートル――――。自動車すら簡単に舞い上げるほどの烈風の槍と化して、翔一に襲いかかる。それに為す術もなく、容易く翔一の体を吹き飛ばした――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それに絶句したのは川神百代だ。
今、王貴が使ったのは五行思想の中の『木行』。その中で風の属性。
あんなモノまで使えるとは聞いていない。
彼の姉。エリカの言葉を思いだす。
『……ま、精々頑張りなさい。あ、これは忠告よ。あの子を、霧夜王貴をナメない事ね。あの子は最凶なんだから』
舐めていた訳じゃない。侮っていた訳じゃない。だから、修行をした。だから、あんな“隠し玉”を用意させた。
それは耐久と言う名の隠し玉。
だから、翔一の機動力を封じ、五日間で一万発以上の氣弾をブチ込んだ。結果得たのは素早さと、常人以上のタフネス。
でも、予想以上だった。
王貴はあまりにも強すぎた――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

風が死に、音が死に、大気が死んだ。
王貴は自分が作り上げた惨状を見渡す。
グランドの地面を覆っていた砂利や砂は風の塊に舞い上げられ、所々に土の地面が見え隠れしていた。周囲のギャラリーも静まり返っている。２０メートルも高々と上空に吹き飛ばされた、自分と対峙していた者は背中から落ちたのか仰向けに手足を投げ出しピクリとも動かない。生きていることかどうか疑わしい状態だ。
王貴の片手にはもう、短剣は握られていない。

その惨状を目にしても霧夜王貴という少年は。

「クーーーーハハ、ハハハハハハハハハ！！！！」

嗤っていた。
その有り様は、全ての頂点に君臨する暴君のようだった。

「屑が努力しようが王（オレ）との力の差は埋まらぬ！　これが持って生まれた才能、王である王（オレ）と屑である貴様の違いだ！　いかに友情だ絆だと言おうがそれら全て綺麗事にすぎん！　俺達風間ファミリーを舐めるなだと？　ハッ、身の程を知るがよい屑め」

無様に倒れている翔一が気に入ったのか、少年は嗜虐の笑みを浮かべる。

「ああ、そう言えば貴様の中にも川神院の師範代になるとほざいていた女がいたな？　たわけた女だ。川神院師範代という代物は選ばれた者、才能のある者にしかなれぬ。あの程度の女が師範代になろうなど、よくもまぁ思い上がれたものだ」

そうして、王貴は笑う、嘲笑う。

その瞬間、王貴の正面から、何か物音が聞えた。

王貴がそこに視線を向ける。
そこに信じられない光景があった。風速１２０メートルもの暴風で上空に吹き飛ばされ、地面に背中から落ちた筈の男が、ゆっくりと立ち上がる所だった。
男の体に無数の傷がある。
その体にはもうまともな力が入らず、両足はガクガクと震え、右腕は曲がらない方向に曲がっており、左腕はぶらりと垂れ下っている。
それでも、男は倒れない。
絶対、倒れない。

しかし、王貴は信じられない光景を目にしても、

「――――――良く立った。それで？　その後はどうするつもりなのだ？」

余裕の表情を崩さない。
自分と対峙していた男なら、生命力だけはあった男なら立つだろうと思っていたから。
王貴は驚かない。

「――――――んじゃねぇ……」

「ん？」

「――――――ワン子の、夢を、嗤ってんじゃねぇ！」

どうやら、この目の前にいる男は、友の夢を嗤われて必死に起きたらしい。

ならば、その執念もろとも、組み伏せて蹂躙してやる――――――。

「ならば、貴様の威を以て王（オレ）を黙らせてみせよ」

そうして、王貴の背後に浮かび上がる二十二挺の武器。

遊びは終わりだと言わんばかりに、そのすべての剣先が翔一へと向けられる。

翔一はただ、左腕を庇う様にして顔の前まで持っていき、身を低くして致命傷になる部分を隠す。

対して、王貴は片腕を軽く上げて、

「これで終演としよう。王（オレ）もこの児戯には飽きを覚えていた所でな！！」

そうして、翔一を指さす。
その瞬間、翔一目掛けて武器の雨が一斉に雪崩れ込む――――！

剣が頭にあたり、翔一の自慢であるバンダナが破られ、そこから血が噴き出る。
槍が左腕にあたり、骨にひびでも入った様な大きく腫れあがる。
大鎌が横から襲いかかり、アバラを1、2本砕く。
戦斧が太股にあたり、足に大きな痣が出来上がる。
そして、体の至る所に剣、槍、大鎌、剣、短剣、刀、大槍、ボールアクション、鎌、斧、戦斧が当たる。

それでも、翔一は、倒れない。
頭から血を吹き出そうが、左腕の骨にひびが入ろうが、アバラを1、2本砕かれようが一歩一歩力強く踏みしめ王貴に近づいて来る。

その身はすでに満身創痍。
押せば倒れるし、もう少し攻撃を強めれば倒せるだろう。
だが、

（何だ貴様は……）

霧夜王貴の目には。

「何だと言うのだ、貴様は！」

これまで会ってきた者たちの中で、一番脅威に映った。
何故倒れない、何故諦めない、何故立ちあがる。
何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故――――――――――。

冷静に対処すれば勝てる、と理性は訴えている。
だが、それ以外の何かが、アレに、あの男を近づけさせる事を危険視する。

「ちぃ！　動くだけの的が、今だ王（オレ）に近づこうとするか！」

そうして、再度造り出され、放たれる二十二艇もの武器。
面白いように当たるが、男は歩みを止めない。
一歩一歩力強く、今までよりも力強く歩みを進める。

そして、知らず知らず。王貴は重心が後方へと下がり、一歩下がる。
驚きの表情と共に、王貴は自身の一歩下がった足元へと視線を向

ける。

（何故、王（オレ）は一歩下がる！　まさか、あの男を脅威だと思ったと言うのか？！）

そんな事認めん。断じて認めん。

屑風情に脅威を感じたなど断じて否、断じて否である――――――！

「よう……」

正面から声が聞える、

「ようやく着いた……」

その声の主は、少年のような笑みで、王貴の前に立っていた――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翔一はボロボロの体を動かして一歩前へ進む。
少しでも動かすだけで意識が飛んでしまいそうな感覚。加えて、自身へと襲いかかる武器の雨。
それでも、翔一は前へ歩を進める。
意識が朦朧としている翔一は、今の状況が理解できていない。王貴が何を言っているのか、どうして自分が立っているのか。そう言った大事な事が意識からすっぽり抜けるほどに、心はもうボロボロだった。
だが、仲間をバカにする声が聞えた。
仲間の夢をバカにする声が聞えた。
それだけ分からば、十分だった。立ち上がる理由としては、十二分だった。

「よう……」

そうして、ようやくたどり着いた。武器の雨に撃たれながらもようやくたどり着いた。

「ようやく着いた……」

「貴様……っ！」

例の短剣。

王貴は『木行』の属性を纏った短剣を造り出そうとするが、体が硬直する。

そう、さっきの二十二艇の武器で、丁度百挺撃ってしまったからだ。

翔一は自身の左拳を握りしめる。左腕の骨にひびがはいっていようが関係ない。

「歯を喰いしばれ、王様――――――」

武器も造れず為す術が無くなった王貴に、翔一は子供のような笑顔と共に、
拳を――――――――、

「これが、お前の蔑んできた屑の拳だっ！！！！」

瞬間。
風間翔一の拳が、霧夜王貴の顔面へと、突き――――――――、

“刺さらなかった”。

翔一は拳を王貴へと突きだすも、そこで気を失い、王貴と交差するようにして倒れる。
王貴は気を失った翔一を呆然と見下ろす。
その瞬間。

「それまで、勝者霧夜王貴！！！」

川神鉄心の声がグランド中に聞える。

（ふざけるな……）

王貴は静かに心の中で、

（ふざけるな！！）

叫ぶ。

このような勝利王の勝利ではないと叫ぶ。第三者から見れば、ズタボロになっている翔一と比較的無傷の王貴。傍からみれば王貴の圧勝だろう。

だが、王貴には納得がいかない。

屑如きに脅威を感じた事が納得いかない。自分をあと一歩で追い詰めた所が納得いかない。なにより、友が理由にこの男が起き上がってきたのが納得いかない――――――――！

「テッシン」

「何じゃ王貴？」

テキパキと翔一を川神院へ搬送するように指示する鉄心に王貴は話しかける。

そして、傲慢に一言。

「この決闘、王（オレ）の負けでよい」

「……よいのか？」

「二度は言わん。それとな、その男に伝えるが良い。『王（オレ）を倒し、貴様は友の名誉を守った。誇るがいい』と」

そう言い残し、表情の何もかも殺して、王貴は去って行く。

最初に現れたように、傲岸に踵を鳴らしながら、堂々とグランドから去っていった。

第１１話　王ＶＳ風　後篇（後書き）

ようやく終わりましたＯＰ的な物。
長かった。本当に長かった。
初めての戦闘シーン疲れますね。拙い文章でスミマセンです！

ちなみに、王貴とまゆっちが戦えば、相性でまゆっちが勝ちます。
本編でまゆっち気が切れるチート性能持ちなので、どう足掻いても
貧弱王じゃ勝てませんｗ
乖離剣（仮）を完成させれば……どうでしょう？

それでは、ご感想ご指摘ありましたらよろしくお願いします！！

第１２話　王とは何たるや　前篇（前書き）

エリカの過去編はいつかやります

第１２話　王とは何たるや　前篇

ＡＭ　０１：００　日曜日

深夜の親不孝通りの路地裏から、絶叫と悲鳴と何かが壊れるかのような音が炸裂した。

コンクリートとコンクリートに阻まれた、広く長い直線状のような場所だった。おそらく両サイドを阻んでいるのはオフィスビルだろう。

そこで、１０人ぐらいの少年たちが倒れている。蹲っていたり、仰向けで倒れていたり、うつ伏せで倒れていたりと色々だ。

それを見下ろす１人の人影。

霧夜王貴は興味が無さそうな視線と共に、少年たちを見下ろす。白を強調した川神学園の制服ではなく、黒を強調した七分丈のシャツとレザーパンツを着こなしている。

無様に倒れ伏している者たちから視界をそらし、曇りがかった空を見ながらふと思う。

――――――――あの、風間とか言う男との一戦にはどれほどの意

味があったのか。

少年が、あの彼の仲間の夢を馬鹿にし嘲笑った結果。決闘を申し込まれ、それに敗北した。

少年の敗北は、少年の世界に対してどのような変化を与えたのか。

決闘をしてから数日が経った。少年はその日、あの男に負けたその日から『最凶の王』ではなくなったらしい。

彼が武道四天王に匹敵する力がある事も、氣で武器を造り出しそれを敵に投擲し殲滅する事も、障壁を張り強固の守りを造り出せる事も変化は無いのに。何より、少年とあの男の戦いは結果的に見れば少年の負けだが、内容は少年が圧勝しているのにも関わらず、だ。

あの戦いを境に、少年は昼夜問わず多くの者に襲撃されるようになった。

元より、少年は親不孝通りに住居を構えている。そして、親不孝通りは治安が悪く不良などがわんさかいる。それに加え、少年は偉そうなオーラを纏っている。結果、親不孝通りを闊歩している連中にとって少年は目障りだ。

最初は少年を襲撃していたのだが、返り討ちに合ってからそれもなくなっていった。

だが、その少年が。圧倒的な力を誇っていた少年が見知らぬ男子高校生に負けたと言う情報が親不孝通りを縄張りにしている者達の耳に入った。

それから、少年は襲撃されるようになった。“少年を破った男を倒して名を上げる”よりも“少年から舐めさせられた数々の苦渋を返す”こと優先したのだろう。そうして少年は襲撃される。

あの『最凶の王』という壁が粉々に壊された。そんな事を、本気で信じてしまった者達によって。

だが、そう言った者は例外もなく、即座に気付く。

少年と対峙し、必殺の威力を以て武器を投擲された時点で。『最凶の王』は健在である事に。

だが、それでも襲撃は終わらない。

何度、襲撃者たちを組み伏せ蹂躙しようが、まとめて薙ぎ払おうが少年が風間翔一に負けた結果は変わらない。

少年は思案する。

風間翔一率いる風間ファミリーが関わった戦いを境に、霧夜王貴の何が変わったと言うのだろう？

霧夜王貴が弱くなったのか、強くなったのか。何を取り戻し、何を失ったのか。

ふと、視線を襲撃者たちに戻す。

呼吸していた。呼吸はしているが、辺りに血が飛び散っており穏やかな状況ではない。少なくとも死者は出てないし、大怪我も負っていない。これで大怪我と言えるなら、決闘終了時の翔一は死人レベルだ。

王貴がこの者達に襲撃され、返り討ちにする。この行為ですら彼にとって『戦闘』とすら感じ取れなかった。ただの『戯れ』。深夜に暇だったので散歩に出かけ、その帰る途中だった。――――程度にしか認識しかない。

路上に倒れ伏している襲撃者たちにトドメを刺そうとも思わなかった。

彼らは襲撃者たちであって、霧夜の送りこんだ刺客ではないからだ。それでもいつもの王貴ならば、腕の一本や足の一本は問答無用で折っていくだろう。だが、その気にならない。その気になれない。

「王（オレ）が変わったと言うのか……？　ありえん、王（オレ）は万夫不当の王であるぞ」

王貴は切り捨てるかのように言う。

それと同時に、忌々しげに舌打ちをしながらその場を去った――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

路地裏を抜けて、人気の少ない大通りに出た。

王貴は何となく夜空を見上げながら歩く。障害物に気に留める必要はない。この道が人気が少ない事を彼は知っているからだ。
そんな王貴のすぐ後ろに、何者かがピッタリと張り付きながら着いて来る。本当にピッタリと張り付きながら。言葉の例えではなく、本当にピッタリと張り付いていた。

「……」

王貴は歩きながら肩越しに背後を見る。
白い髪。白い肌。赤い瞳。そして、白を強調した衣服を身にまっとっている榊原小雪が何が楽しいのかニコニコと笑いながらそこに居た。
小雪は王貴からほんの5センチあるかないか距離に居た。歩くたびにその胸が王貴の背中に当たるが彼は気にしない。
王貴を知る者がその光景を見ればどう思うだろうか？　引きずってでも王貴から離そうとするだろうか、もう手遅れだと諦めるだろうか、笑い転げるだろうか。

王貴はこれでもかと言うほど顔を顰める。
そして、急停止する。その瞬間彼の背後から、わぷっ！　と言う声が聞えてくるが彼は気にせず振り向いた。

「また貴様か……」

「急に止まるとか酷いよー」

王貴が“また”と言ったのは、小雪が彼に着き纏っているのはこれが初めてではないからだ。王貴が編入してから数週間。彼女はこうして王貴に着き纏っている。彼女なりに何かを感じ取ったのだろう。

「何故貴様がここにいる」

「んー、暇だったから散歩してたんだー。オーキはー？」

「フン、貴様には関係なかろうよ」

「んじゃ僕が当てて見せるよー。んーと、えーと。……あーわかった！　散歩だねー」

「……チッ」

「アレー？　どこ行くのー？」

舌打ちをして歩き始める王貴とそれを追いかけるかのように着いて行く小雪。

王貴は小雪が苦手だった。顔や性格や姿とかではない。声が苦手だったのだ。彼の姉に似た声の少女、というよりもそっくりの声。この声が原因で小雪を苦手としていた。

「今日は多かったねー」

少年の後ろを歩きながら小雪はそう呟く。
何が？　と、聞くまでもない。小雪が言っているのは、襲撃者の事だ。何故彼女が襲撃者の数を知っているのかという疑問は王貴にはない。小雪があの現場を覗き見していた事を知っていたからだ。
加えて、小雪が少年が襲撃されている現場を見たのはこれが初めてではない。何度も何度も目撃している。あろう事か、霧夜の刺客と戦っている現場も、彼女は何度も何度も見ている。

小雪が初めて霧夜の刺客を返り討ちにしていった言葉が、
「お疲れさまー」だ。
近くには、王貴の造り出した武器で串刺しにされて死んでいる刺客が居るのにも関わらず、だ。
流石の王貴もこれには驚いた事を覚えている。
王貴は小雪の言葉を無視して歩みを進めた。
小雪もそれに着いて行こうと歩く――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

大通りから脇道に逸れて、さらに細い路地を何本か通り抜けると、7階建のマンションが現れた。周りにある15階建てビルや5階建てのマンションにまったく負けていない金持ちオーラを滲みだして建っているマンション。それが王貴のマンションだ。

例えるなら、周りの建物が灰色なら、このマンションは金色。いわゆる高級マンションだ。

「おぉー、カッコイイー！」

背後を歩いている小雪がマンションを見ながら目をキラキラ光輝かせて言っているが、王貴はそれを無視するかのようにマンションの中に入っていく。

そして、エレベーターの前に立つ。

エレベーターには上か下か決めるボタンのほかに、指紋を調べるためのスキャナのようなモノがあった。

このエレベーターは住人の登録した指紋以外は開閉もしないし、操業しない。そう言う事から、このマンションに住む際にはまずめ

んどくさい住民登録しなければならない。治安の悪い親不孝通りでこのマンションに住むのにはとても安心だ。とはいっても、家賃はバカ高いのだが。

王貴はエレベーターを指紋認証で開けて、小雪に振り向き一言。

「貴様、いつまで着いて来るつもりだ？」

「お世話になりまーす♪」

「……」

絶句。

王貴は口をポカンと開ける。普段の彼からこのような表情はレア中のレアだろう。

彼女がお世話になると言ったからには、今日泊めろと言いたいのだろう。ふざけるな、と王貴は思う。

小雪を睨みつけ右手に真っ赤な槍を造り出しながら、

「貴様に選ぶ権利をやろう。それは、今来た道をを引き返すかこの槍で貫かれるかの2択だ。さぁ、選ぶがよい。今すぐ選べ」

「やーだよー。もう、決めたもーん」

王貴の額に青筋が浮かぶ。

本当にこの女は苦手だ、と王貴は思う。声が苦手だと言ったが、この能天気な空気の読めていない所も苦手になった。今なった。
恐らく、いや絶対彼女と姉以外なら有無を言わさず追い払っただろう。それはもう、殺してでも追い払っただろう。
「王が庶民と一緒になど一夜を共にするなど出来るか！　王とは天上に住む者。王(オレ)と一夜を共にするなど、８４年早い！」
「えー？　けちけちするなよー。もういいから行こうよー」
そう言うと、小雪は勝手に7階のボタンを押す。
そこは奇しくも、王貴の住む階だった――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

エレベーターが7階に到着した。
マンションは外見だけではなく、中まで金持ちオーラを漂わせている。いわゆるセレブ的な何か。色で例えるなら金。
その7階の廊下を白色の少女と金色の少年が歩く。
少女は機嫌よさそうに歩き、少年は不機嫌そうに歩く。それも仕方ないだろう。少年は他人に調子を乱される事を嫌っている。それも、苦手としている人物の声ならなおさらだ。少年の機嫌はとてつもなく悪い。

「ねー、部屋何号室ー？」

そんな王貴に、能天気に嬉しいのか悲しいのかどちらともとれる笑顔で言う小雪。それを無視して進む王貴。だが、無視されても小雪はめげない。ねーねーねーねー、と何度も何度も何度も王貴の肩をゆすりながら話しかける。
王貴は、ブチっと音が聞えるかのような青筋を立てながら、

「五月蠅いぞ下朗！　屑の分際で王（オレ）に触れるとは何事か！」

「屑じゃないよー。僕には榊原小雪って名前があるんだＹＯ！」

「王（オレ）の武具に串刺しされたくなければ黙るがいい屑」

「あー、また屑って言ったー！」

わーわーぎゃーぎゃー、と言い争う2人。
王貴はうるさいと言ったが、この2人の方がうるさいだろう。それだけの大声で言い争っていた。加えて、今は真夜中。近所迷惑にも程がある。

そうこうしている内に、王貴の部屋の前に来た。
表札には７６５室の文字がある。
王貴は不機嫌そうに、インターホンの下らへんにある指紋認証をするスキャナに人差指を当てる。鍵は使わず、指紋認証のみで開ける事からどれだけこのマンションが成金マンションなのか分かってしまう。

王貴の部屋の玄関を開けると、我先にと小雪が入る。
玄関から居間までの長い廊下がそこにあった。その距離は大体４メートル。その途中には浴室も物置もない。マンションにしては珍しい長い廊下だ。
王貴はその廊下の電気を付ける。玄関には小雪の履いていた靴がある事からもう、居間に行った事が分かる。

居間のドアを王貴が開けると、そこに待っているのは４ＬＤＫとベットの上で跳ねて遊んでいる小雪。一人で住むには４ＬＤＫは広くどう考えても家族向けで、一生かけてローンを払い続ける規模の部屋だ。
フローリングのリビングは、一人暮らしというイメージに反して小奇麗に整えられていた。高校生が飲むものではない液体が入ったビンやグラスなどが棚の中に飾られていて、新聞と言った紙類なども専用のラックに収められている。テレビもプラズマテレビで１００インチはあるような大きさだ。エアコン、コンポ、録画デッキな

どのリモコンはテーブルの角に並べて置いてある。ソファの上のクッションの一つ一つまで丁寧に位置取りしてある。

小雪はベッドの上で跳ね跳びながら、

「綺麗な部屋だねー。ホコリ1つないよー？」

「たわけめ、家政婦を雇っているから当然であろう。それとだ、」

そう言って言葉を区切り、

「そこから降りるがいい屑。王（オレ）のベッドに悪臭がつくであろう」

空間から1本の鎖が小雪の首に巻き付き、そのままベッドから引きずりおろす。小雪がグエッと言った声を発するが、王貴は気にしない。

むしろ、王の寝所を荒しておいてそれで済んだ事を感謝しろと言わんばかりだ。

小雪はノロノロと立ち上がる。尻から着地してしまったのか、尻を痛そうに擦っている。

そして、そのまま王貴を恨めしそうに少し睨み、頬を膨らませながら、

「痛いよー……」

「たわけが、その程度に済んだ事を感謝するがいい」

そう言うと、王貴はそのままベッドに腰かける。
そして、小雪を睨みつけながら、

「貴様、いつまでここにいるつもりだ？」

「今日までかなー？」

「……ほう、よっぽど死にたいと――――、」

「一人はね怖いんだ」

「む？」

顔をうつ伏せながら、王貴の言葉を遮るようにして言う小雪に、
王貴は眉を潜ませる。
小雪は続ける。

「今日僕の家誰も居ないんだ。トーマもジュンも用事でいないの。
……一人は嫌だよぅ」

そう言うと両手で衣服の裾を握りしめる。
小雪の過去に何があったのか王貴は知らない。知ろうとも思わな

いし、興味もない。だが、一人になる怖さは少しだが、ほんの少しだが理解できる。

信じられた者から裏切られ、孤独なる怖さ。何年も前にそれを彼は嫌ってほど味わった。当時、どんな気持ちだったのか、どう感じていたのかなんて彼は覚えていない。ただ、思った事は怖かったと言う事だけ。

「……チッ」

王貴は忌々しげに舌打ちをすると、ベッドに寝っ転がる。

「勝手にするがいい」

「えっ？」

「ただし、床で寝るのだな。そこのソファは絶対に使うな。屑の匂いがつく」

そう言うと、王貴は小雪の顔を見ない様にして寝返りをうつ。

小雪は嬉しそうに、満面の笑みで、

「ありがとー、オーキ！」

小雪がそう言うと、居間に点いていた明かりが消える。小雪が消したのだろう。

何が嬉しいのか、床で寝る事を許可しただけではないか、と王貴はそう思いながら目を閉じる。暗闇の中、もそもそと小雪の動く音が聞える。床で寝る事に慣れているのだろうか、その音は直ぐに聞えなくなった。

王貴はやけに全身に疲労が溜まっている様な気がした。

その理由を考え、やがて1つの答えを導き出す。

（そう言えば――――――――――、）

優しい闇のまどろみの中、睡魔に囚われた幼い子供のようにぼんやりと、

（――――――考えてもみれば、戦闘以外でこんなに会話したなぞ何年ぶりだろうか）

そう思った――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

小雪が王貴の家に転がり込んだのには理由がある。
1人が怖いのもその理由だ。だが、まだ理由があった。その理由は単純明快で簡単な事だった。霧夜王貴と自分は同じだと思ったからだ。
小雪の獣じみた嗅覚がそう感じとったのだろう、2人共身内から忌み嫌われ、標的の対象となった過去。
当然ながら小雪は王貴の過去は知らない。これぽっちも知らない。だが、感じ取った。シンパシーとでも言うのだろうか。

小雪はもそもそと起き上がる。床で寝るなんて何年振りだろうか、と思いながら起き上がる。
そして、静かに。細心の注意を払いながら静かに王貴が寝ているベッドに近づく。
疲れていたのだろうか、王貴は寝ていた。静かに規則正しい呼吸音が聞える。寝顔も歳相応の顔だった。いつものような、王様（オレ）フェ

イスではない。

それを見ながら、小雪はぼんやりと、

（うん、同じだ）

にっこりと笑いながら、

（僕と同じだー）

嬉しそうにそう思った。

そうして、小雪は小さな声で「お邪魔しまーす」と、王貴のベッドに入り、目を閉じる。

ちなみに、この後。小雪は直ぐ寝たのだが、寝返りをうった王貴に蹴り飛ばされ床で寝る事になる――――――。

第１３話　王とは何たるや　中編

ＰＭ１２：１２　日曜日

霧夜王貴は空腹と雑音で目が覚める。
壁に引っかかっている時計を見るれば、昼の１２時過ぎ。この時間帯になれば家政婦が来る時間帯か、と王貴はぼんやりと思いながら起き上がる。

テレビが点けっ放しになっていてた。おそらくその音で音が覚めたのだろうと思うが、
王貴自身テレビを付けた覚えはない。では、誰の仕業だと考えるが、答えは直ぐに出た。

（あの女か……）

今日の夜中に王の部屋に転がり込んで来て、あろう事か王と一夜を共にした女、確か名前は、……はて、なんだったか、と王貴は頭を捻る。
そうして、巨大プラズマテレビに目をやった。そこには、

『良い子のみんな！　ちゃんと宿題やったかな？　くずもちまんブラックだ！』

『恋しているかぁ～？　黄粉の数は夢の数！　くずもちまぁ～んイエロォー！！』

『街の平和と経済を守るため、今日も自分を切り売りしている川神市のマスコット！』

『そんな健気な妖精が俺達！　『くずもちまん』だ！』

「妖精……なのか……？」

王貴はそれを見て一言呟く。

くずもちまんとか言う妖精。それはどう見ても妖精の類では無かった。筋肉モリモリで餅のような仮面をつけるマッチョマン。こんなマッチョマンが妖精とは、ティンカーベルに謝れ状態。どちらかと言うと、戦隊シリーズに出てくるヒーロー的な何か。

『今日は俺たちが、みんなの疑問を何でも答えようと思う！』

『それじゃ、お便り一通目ェ！』

お便りよりも王（オレ）の疑問に答えろ。貴様らは本当に妖精か？　と王貴は思う。

だが、王貴の疑問も届かず、くずもちまんイエロォーはお便りを読み上げる。

『「正直言ってその筋肉が寒いです。僕は可愛いマスコットが良かったです」』

『何言ってるんだこいつは？　黒蜜虫歯に流し込むぞ！』

『ホォント何言ってるんだ～、風呂上がりの体に黄粉撒き散らすぞぉ！』

『可愛いマスコットなんてそこら辺に転がってるだろう？　そんなんじゃ埋もれちまうんだ！』

『世の中は全て話題性！　勉強になったかな僕ゥ～？　それでは、二通目ェ！』

確かに言っている事は正しいのかもしれない。だが、くずもちまんは無いだろう。主に体が無い。そして、それを妖精と言っている所が無い。そして、主に体がキモイ。あと、嫌がらせが半端ない。何だろうか、その黒蜜虫歯に流し込むとか、風呂上がりの体に黄粉撒き散らすとか。ハタ迷惑にも程がある。

くずもちまんイエロォーがお便りを読み上げる。

『「くずもちまんの体に惚れ惚れしします」』

『住所書いてこい！　夜中2時頃行ってやるから！』

『俺たちは可愛がられるマスコットじゃなくてぇ……、可愛がるマ

スコットだからァ！』

「何言ってるんだこいつらは？」

ぼそりと王貴は呟く。

しかも、段々とくずもちまんをカッコよく思ってきている自分がいる。これ以上洗脳されてたまるか、と王貴はチャンネルを変えようとリモコンを手に取るが、

「あー！　くずもちまんだー！」

玄関の方から声が聞えた。

そこに視線を向けると、小雪の姿があった。どうやらこの意味不明な妖精（餅）をしっているらしい。顔もどこか嬉しそうにテレビを見ている。

王貴は眉を潜ませ、テレビをリモコンで指さしながら、

「女、これが何たるか知っているのか？」

「うん、くずもちまんだよー？　川神市のマスコット。知らないの？」

「知らん」

テレビにもう一度視線を向ける。

そこにはくろもちまんブラックが「中に人など居ない」とか言っ

ていた。それはどう言う事だ、と。王貴は思う。浦安見たいな掟があるのだろうか？

そして、直ぐにチャンネルを変え、トーク番組に変わる。王貴も適当にボタンを押しただけなのでこれが見たいと言う訳でも無い。

テレビにはサングラスの男が明日も来てくれるかな～？　と、電話で尋ねていた。

王貴は娯楽というものをあまり知らない。ゲームも知らなければ、バラエティー番組もあまり見ない。興味がないからだ。これまで彼が暇つぶしに見ていた物と言えば、本などを読むのみ。年頃の少年がそんな物しか読まないとはありえないが、王貴はそれらしか見た事が無い。

故に、テレビもニュースぐらいしか見ない。

そのためか、今テレビに映っているトーク番組がとても興味をそそった。

王貴はテレビを食い入るように見ながら、

「貴様、一体何をしていたのだ？」

「えっ？　チャイムが鳴ったから出たんだよー？」

「何？」

そこで、食い入るように見ていた王貴はテレビから小雪に視線をずらす。小雪は楽しいのか悲しいのか分からない笑みを浮かべてい

る。
　おかしい、と思った。王貴の部屋を尋ねてくるモノ好きはあまりいない。いや、まったくいない。そもそも、このマンションはエレベーターを使わなければ、部屋にはいけない。しかもこのマンションのエレベーターは住人の登録した指紋以外は開閉もしないし、操業しない。
　と言う事は、だ。
　登録していた者が来たと言う事。だが、王貴は予想通り、近所付き合いが悪い。これでもかというほど悪い。そんな者の部屋など尋ねるだろうか。
　王貴は部屋を見渡し、気付く。家政婦が居ない事に。
　あの家政婦は、時間に遅れる事は無い。となれば――――――、
「そやつはどうした？」
「んー？　帰ってもらったよー？」
「な――――――――――に？」
　王貴が固まる。表情も雰囲気も体も。
　ここで言う所。自慢ではないが、王貴は自分で料理が出来ない。料理を作るなどそれは王の仕事ではない。と、言ってこれまでキッチンにですら立った事が無いのだ。
　要するに、ご飯が無い。

王貴は忌々しげに舌打ちをすると、テレビの電源を消して立ちあがる。
空腹であるが、とりあえずこの女を捨ててこようと玄関に向かって歩き出す。ついでに、外の娯楽も堪能するのもまた一興、と考えながら、
「屑よ、王（オレ）を飯屋に連れていく権利をやろう。疾く案内せよ」
「屑じゃないよー、小雪だよー！」
小雪はプンスカと怒りながら言うが、王貴には知った事ではない。
それを無視して、玄関から出る。小雪はプンスカ怒りながらその背中を追いかける――――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

親不孝通りの表通りには人気が無かった。
この通りが活気づくのは夜になってからだ。今は昼の時間帯、人が居ないのも仕方がないだろう。もっとも、学生である小雪と王貴には関係ない話である。

それから、表通りを抜けて、川神市の商店街についた。
不機嫌そうに歩く王貴と笑顔でその隣を歩く小雪。正反対な2人だった。

「オーキってハーフなのー？」

大手外食店系列のファミレス近くで、小雪はそんな事を王貴に聞いてみた。

「何？」

「トーマが言ってたんだー。オーキはハーフだって。どうなのー？」

無視しても良かったが、そうすると小雪がまた騒ぎ出しそうなので適当に応える事にした。飯屋に案内させればこの女を適当に道端に捨てるなりすればいい。そう考え、これが最後と思えば多少無礼でも我慢する事が出来た。

「アメリカ人とのハーフらしいな。異母姉ではあるが、姉もアメリカ人とのハーフだ」

が、思いのほか、王貴の口から自然と会話が出来た。戦闘中も減らず口を叩いていたし、自分が思っているよりも会話が好きなのかもしれない。そう思ったが、真っ先に切り捨てる。それは無いと。

「へー、そうなんだー」

と、小雪は相槌を打つ。

そこで、王貴はやはり自分は何かが変わったらしい、と思う。こんな会話が出来るとは思っていなかったからだ。王貴がしてきた事は一方的に見下した言葉と他人を嘲笑う会話のみ。そもそも、屑と会話する事自体選択肢になかった行為だ。

小雪が自身が苦手としている人物の声にそっくりだと言っても、ここまで会話が成り立っただろうか。

やはり、あの戦いで自分は変わったのだろうか、と王貴は考える。

変わったとしたら、何が。

一体、何が原因。

一体、何が変わってしまったのだろうか。

「ねー着いたよー」

小雪が覗きこむかのように、王貴を見つめる。
会話は、成立していた。
王貴の見えない何かが変わりつつあるようだった。それが、王としての王貴を変えるのか、はたまた人としての王貴を変えるのか。
それはまだ分からない――――――。

…………………………………

……………………………

…………………

PM12：46

「いらっしゃいませー。2名様でよろしいですか？」

若い女のウェイトレスが笑顔で迎え入れる。その顔は笑顔だ。笑顔であるが、どこか引きつっており、少々ぎこちない。どうやらアルバイトらしい。

小雪と王貴は窓際の席に座る。時間帯も昼時のせいか、梅屋は混んでいた。家族連れ、学生、友人、カップルと色々な人たちがそこで食事をしたり、談笑したりしている。

そんな中、王貴はぼんやりと窓の外へ目を向けると、こちらの動向をうかがっている男たちが4名ぐらい見つける。手にはバットや鉄パイプなどの凶器も見え隠れする。

「ぬ？」

こちらの視線に気付くと、電気が走ったように体をビクッと震わせると、脅えて一目散に逃げるようにして散っていて行く。

「またか……、馬鹿は死なんと分からんと見える」

「うぃ？　どうしたのー？」

王貴が忌々しげに呟くと、小雪がメニューから顔を上げて聞いて来る。

王貴がなんでもない、と言うと小雪もそう、とメニューへ視線を戻した。

今王貴が見た４人の少年たち。あれはどう見ても王貴を狙う不良たちだ。何やら見覚えがあるが何時彼らを返り討ちにしたのかは覚えていない。刺客ならまだしもあのような不良たちまで覚える筋合いなど王貴にはないからだ。

食べるモノを決まったのか小雪はもうメニューを見ていない。

王貴もメニューを見るが何が美味くて、何が不味いのかなんて王貴に分からない。そもそもこの『らーめん』とはなんだ、と王貴は思う。『らーめん』と言うからには麺なのだろう。だが、この『らー』とは何だ？　ラー油のラー？

何もかもちんぷんかんぷんだった。

「貴様は何を頼む？」

「僕は豚丼。単品にとろろかなー？　知り合いのおじさんがね、この豚丼美味いって言ってたんだー♪」

屑の味覚とは言え、美味いと言う事は美味いのだろうと、王貴は思い自分もそれにする事にした。
だが、待っても料理は来ない。と言うより、どう注文するのか分からない。
そう考えていると、水を運んできたさっきのウェイトレスに向かって、料理を持ってくるように言う。すると、ウェイトレスは「かしこまりましたー」と言うと、そのまま厨房らしき場所に下がっていった。どうやらこれが正解か、と王貴は思うと運んできた水を口に含む。キンキンに冷えていた。
すると、ふと正面に座っている小雪から奇妙な視線を向けられている事に気付く。

「何だ？」

「律儀に注文するんだねー」

「どう言う意味だ」

「普通に店に入りこんで、そのまま食べ物を全部食べて、とんずらすると思った小雪なのでしたー」

何かと思えば、と王貴は呆れながらため息を吐く。

「そんなものただの盗人や賊のする事よ。王であるこの王（オレ）がする事ではない」

「そんな王様にしつもーん」

「言いたい事はあるが、許す申せ」

「風間翔一に負けて悔しくないのですかー？」

王貴は苦虫を噛み殺したかのような渋い顔になた。

悔しくないと言えば嘘になる。屑と見下していた男に負けたのだ。悔しくない訳が無い。だが、不思議とやり返してやろうという気持ちすら起きなかった。王として屑の挑戦を受け、王として戦い、王として負けたあの戦。ならば、今の自分は何者だろうか？　王として負けたのだから王ではないのだろうか。

考えても考えても、答えは見つからない。

もし仮に、王ではないのなら。

――――――自分は、何者だ？

「いただきまーす」

目の前から聞えてくるこの声に、王貴の思考は中断される。

王貴の目の前には、豚丼と単品のとろろがあった。先程の声は小雪だったようだ。彼女は美味しそうに運ばれてきた豚丼を美味しそうに食べる。

「ねーねー」

豚丼を食べながら小雪が話しかける。

食うか喋るかどちらかにしろと言う為に、口を開きかけるが、

「オーキって負けたかったの？」

この一言で、口を閉じる。

理解不能だった。

どうして、そんな言葉が出てくる。どうして、そんな結論になる。

どうして、そう思う。

王貴はの心なんて知らずに小雪は続ける。

「だっておかしいよー。戦ってる時、オーキはいつも戦ってる人をけなしてたでしょー？　どうして怒らせる事を言うの？　それに、戦う時どうしていっつも人気の少ない路地裏とかなの？　これって人を巻き込みたくないからだよねー？」

そんなものはただの気まぐれだ。ただの退屈な殲滅行為を愉しくするためだ。だって、そうすればみんなみんな考えもしない行動をする。だから、挑発をする。だから、貶す。

人気の少ない所を選ぶのもそうだ。人がいればメンドクサイ事になる。

だが、はたして本当にそうだろうか、と王貴は考える。

自分を愉しませるのなら違う手段もあった筈だ。どうして、そん

な自分を危険にさらしてまでそんな行動をする。分からない。まったく分からない。霧夜の刺客にしてもそうだ。どうして、見逃したりしている。逆上して、自分をつけねらう輩もいるかもしれないのにどうして見逃したりしている。

そんなもの、気まぐれですまされるものではない。

『一撃だけ、王(オレ)に刃向かう権利をやろう』

『どうした？　よもや、刃向かう気すらないと？　生き延びる好機すら貴様は逃すと言うのか？』

『圧倒的な力を示した王(オレ)の前で貴様は抵抗してみせた。その褒美に王(オレ)に刃向かった事を赦そう』

『是非もあるまい。貴様が刃向かい、王(オレ)が裁く。さぁ、来い。貴様の全てを以て王(オレ)を打倒してみせよ！！』

『あのような屑を相手する程度に王(オレ)がわざわざ労力を懸けると？　クックッ、面白い冗談だな。しかし、このままでは王(オレ)の蹂躙で終わってしまう。それでは面白くない故、王(オレ)は自分自身にハンデをかけるとしよう』

『わかるか屑よ？　これでようやく貴様は王(オレ)の足元だと言うのだ。貴様と王(オレ)の間にはこれ以上の開きがある事を忘れるな。では、よいぞ開始の宣言をせよ』

『屑が努力しようが王(オレ)との力の差は埋まらぬ！　これが持って生まれた才能、王である王(オレ)と屑である貴様の違いだ！　いかに友情だ絆だと言おうがそれら全て綺麗事にすぎん！　俺達風間ファミリーを舐めるなだと？　ハッ、身の程を知るがよい屑め』

『ああ、そう言えば貴様の中にも川神院の師範代になるとほざいていた女がいたな？　たわけた女だ。川神院師範代という代物は選ばれた者、才能のある者にしかなれぬ。あの程度の女が師範代になろうなど、よくもまぁ思い上がれたものだ』

思い返してみれば、おかしい。何故ハンデを付ける。何故挑発する。何故刃向かった事を許した。何故王を打倒してみせろと言った。

それらを王として霧夜王貴は気まぐれだと言う。だが、人としての霧夜王貴はそうではないと叫ぶ。

それはそうなのかもしれない。

この身は、王である以前に人なのだから――――――――――。

『お主が、ハンデを己に科すのは“面白い”という理由だけではない。本当の理由は――――――、』

だから、川神鉄心はそんな事を言ったのだろう。あの男は何もかもお見通しだったのか。

「やっぱり、オーキって誰かに負け――――――、」

「五月蠅い。黙るがいい、女。その首切り落とすぞ」

小雪をの言葉を遮るように、低く、聞けば皆凍えるかのような平坦な声でそう呟く。

右手には王貴の身長ぐらいの大きな大鎌が握られており、刃は小雪の首裏に当てている。店内は直ぐにパニックになった。それはそうだろう、いきなり凶器を出して、少女の首裏に当てて脅しているのだ。少年が少しでも大鎌を引けば、少女の首は飛び、店内は惨劇となるだろう。

だが、そうなっても王貴には関係ない。
目の前にいる女が死のうが、苦手としている声の主に似ていようが関係ない。
それ以上に少女は少年を怒らせた。自分が負ける事を望んでいた？　王が負ける事を良しとしていた？　否。ありえない話だ。不敬千万。今すぐにでも目の前にいる女を殺したかったが、

――――――――小雪は、笑っていた。

自分の命が危ないというこの状況下でも、小雪はニコニコと微笑んでいた。悲しいのか楽しいのか分からないいつもの表情で笑っていた。王貴の殺意を真っ正面から受けて尚彼女は笑っていた。
そこで王貴は気付く。

――――――――この女、もうすでに壊れている、と。

過去に何かあったのだろう。小雪は笑う事で、自分の身を守っていたのだろう。自分と同じ、傲慢になる事で自分の身を守ると同じ――――。

王貴は舌打ちをする。
忌々しいが、壊れ物（ジャンク）風情に怒りを覚えるなど王の沽券に関わると言うもの。そう思った王貴は大鎌を消して、席を立つ。もうこの場に、用は無い。

「アレ？　それいらないのー？」

小雪は一口も付けていない王貴の豚丼を指さしながら言う。

王貴はそれを嘲笑う様にして、

「いらぬ。貴様にくれてやろう、壊れ物（ジャンク）」

と、言い放つと、テーブルに１万円札を置いて、梅屋を出た——

————。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

PM20：21

アレから小雪と別れた王貴は、何事もなく帰宅し。やってきた家政婦に飯を作らせ、暇だったので散歩に出かけていた。

空は曇り1つ無く、星空が夜の空に浮かんでいる。

アレから、何事もなくなかった。梅屋の中から見えた不良たちは何もしてこなかったし、姿すら見えなかった。ようやく無駄だと分かったのか、と王貴はそう思うと。

「む？」

突然、ポケットから携帯が鳴り出した。

王貴は携帯に掛って来るほど知り合いがいるとう人間ではない。むしろ、掛かって来る事自体稀であり、奇跡に等しかった。

スライド式の携帯をポケットから取り出し画面を見ても、見知らぬ番号。

王貴は通話ボタンを押し、耳に当てる。

「誰だ？」

『こんばんは、王貴君。葵冬馬です』

はて？　誰だったかと思案するが、思い出せない。どこかで聞いた事のある名前ではあるが思い出せなかった。

「その葵冬馬が何の用だ？」

『ユキがそちらに行ってませんか？』

ユキ？　と、王貴は首を傾げる。
今度は聞いた事のない名前だった。
冬馬もあぁ、と言うと直ぐに訂正する。

『榊原小雪です。そちらに行っていると聞いたのですが』

「知らんな。昼頃に別れたきりだ」

『そうですか……』

「どうした？　何かあったのか？」

王貴は愉快気に言う。
冬馬は黙り、しばらくしてから。

『ユキが、家に帰っていないんです……』

そう呟いた――――――――。

第１４話　王とは何たるや　後編

冬馬は言った。小雪が帰ってきていないと。どうやら、門限も決まっているらしく、８時には帰って来るようにいつも言っているようだった。だが、今回だけは帰ってきていない。いつもはちゃんと門限前には帰って来ていたのにも関わらずだ。

王貴と梅屋から別れてから何があったのか。どうして家に帰っていないのか。王貴にはどうでもいい事だった。興味もない。

――――――だから、どうして、

「王（オレ）は、ここにいるというのだ？」

梅屋の前でそう王貴は呟いた。

あんな壊れ物知（ジャンク）った事ではない。興味もわかない。何のにもかかわらずここに自然と足を運んでいた。こんな事、王としてありえん。そう思っていたが、ハッと思いつき、王貴は顔を顰める。

（まさか、人としての王（オレ）がここに来させたのか？）

数年前に捨てた筈の人としての部分。完全なる王になるために捨

てた筈の不要な心。それが今になって現れると言うのか。
忌々しい、と王貴は舌打ちをする。
本当に不要なモノだった。
そう思うと、王貴は梅屋の店の中に入っていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

利益になる情報は無かった。
情報が得られたとすれば、１３時半頃店を出たと言う事だけ。この程度の情報では人探し何て出来る筈がない。そこな道端を歩く屑にでも話を聞くしかあるまい、と結論付けると。
ポケットの中から、携帯の着信音が鳴り響く。

携帯をポケットから取り出し画面を見ると、葵冬馬の文字がディスプレイに表示されていた。
王貴は通話ボタンを押し、耳に当てる。

「何だ？」

『ユキは見つかりましたか？』

どうして、自分が榊原小雪を探している事が分かったのか。王貴は疑問に思うが、今はどうでも良く捨て置いても問題ない疑問だった。
いや、と簡潔に言うと。冬馬は『そうですか』と明らかに落胆している声色で言う。

「あの女が向かう所はないのか？」

『分かりません。ユキは行動範囲が凄く広いので……』

「知り合いの家は？」

『私とジュンと貴方の家以外知りませんね……』

舌打ちをする。
完全なる手詰まり。だが、先ず誘拐は無いと考えていいだろう。誘拐ならそろそろ身代金の交渉などが始まってもいい時間帯だ。だが、それが無い今。どう考えても誘拐は無い。ならばもうそろそろ

自分の家に帰っているのではないか？　王貴はそう考えるが、

（いや、待て）

自分の考えに待ったをかける。
思い出すのは昼間見た不良たち４人組。あの標的が自分ではなく、関係のない第３者の小雪ならばどうだ。現に、アレから自分とあの４人組はあっていない。

『どうしました？』

黙った王貴を不審に思ったのか、冬馬は声をかける。
王貴はいや、と答えると。

「貴様はそのまま探し回るがいい。王（オレ）は心当たりがある場所へと向かう」

ニヤリと、口元を左右を引きつるような笑みで、邪悪な笑みを携えて歩く。
向かう先は、親不孝通りの路地裏。
かつて、王貴が不良共を叩き潰した場所だった。

…………

……………………………………

…………………………………………………………………………………

………………………………………………………

　随分と昔の事を、少年は歩きながら思い出す。
　霧夜王貴と呼ばれるその人物は、最初から自分を王と名乗っていた訳ではない。
　最初は周りよりも、能力が優れた人物であるという認識しかなかった。それは頭脳でも運動でもあらゆる面で人より優れていた。
　だが、出る杭という物は打たれる。
　彼の不幸は、彼が自分で思うよりも有能な人間だったと言う事だろう。少年の力を恐れた親族は少年を抹殺するべく刺客を送り込む。
　最初はそれを辛くも撃退したが、またも刺客が襲いかかって来る。
　刺客の他にも彼の親族は、少年の心を壊すべく、少年を信じさせて、

絶望させた。それを何度も何度も何度も何度も何度も繰り返す。
少年はただ、怖く恐れた。
裏切られるのが怖く、人が死んで行くのを恐れた。
7歳の子供にとってそれはしごく当たり前の反応とも言える。
だが、結果この様。
自分が死ぬのが怖く刺客を返り討ちにして、敵が増えるばかり。
もう裏切られたくないから人を信じなくなった結果、自分の周りには敵ばかり。
そうして、少年は気付く。幼いながらも気付いてしまう。
自分がいるからみんなこうして自分を殺しに来る、と。自分が死ねば丸く収まる。だが、死ぬのも怖い。しかしこのままでは自分は殺される。体も心も殺される。
ならば、簡単だ。人に感情を向けなければいい。人を人と思わなければいい。そうすれば、体も心も壊されない。他人が死ぬのも怖がらずに済む。
そう考えるが、少年はその時点で間違っていた。
それは裏を返せば『他人がどうなっても何とも思わなくなる』氷の人間となってしまうと言う事。つまり、他人の人生など全く興味がない人間になると言う事。

こうして少年は辛うじて自身の滅びを回避した。
それから少年は人の事を信じず己の身を信じ、向かってくる敵を殲滅するただの人形みたいな少年になる。そうした、意思のないクラゲのように漂う少年の意識は、やがてもう一つの解決策を導き出す。
他人と争うのが怖いのなら、他人を傷つける事を恐ろしく思うなら、争う事ですら馬鹿馬鹿しいと思えるほどの力を手に入れればいい。
『人』ではなく『王』となればいい。
絶対的な支配を以てすれば誰とも争わず、誰も傷つかなくて済む。

そうして、彼は王を目指した。
その考えが、後に多くの人を傷つけてしまう事にも気付かずに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「フン…………」

柄にもなく昔の事を思い出した。
くだらない、つくづく下らない。何が王だ。こんなのただの張りぼての城。裸の王ともいえるではないか。

そして、何より。あの不良たちが一番気に入らない。
王貴はここにきて、一番腹を立てていた。
自分が狙いならば、自分を標的にすればいいのにそれをせず、第3者を巻き込むその腐った性根がまったくもって解しがたく思う。
何故こんなに自分が苛ついているのか、王貴には全く分からなかった。他人を気遣うなんて感情などとうの昔に捨てた。だと言うのに自分は苛ついている。

だが、しばらくして王貴は結論付けた。この意味不明な苛つきに納得が言った。
親不孝通りの路地裏に着く。

「溝鼠らしい場所よな…………」

そう皮肉気に口元を釣り上げると路地裏に入っていく――――――――。

……………………………

……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

親不孝通りの路地裏。

そこに４人の不良たちが輪になって集まっていた。皆が皆、額に汗を掻いておりどこか焦った表情でその場にいる。

そして、４人の輪の中には一人の白い少女。榊原小雪が気絶するようにして意識を失っている。

「こいつが霧夜の女か……」

４人の中の１人の男がそう呟いた。

その男の呟きと同時に、視線を小雪に向ける。白い長い髪に、染み１つない純白の肌。顔も一般的に可愛い部類に入る。

４人の中の１人からゴクリ、と。唾を飲み込むような音が聞える。

「な、なぁ。ちょっと味見してもいいよな……？」

「あぁ、ちょっとぐらいかまわねェだろ」

「へへへ、俺最近溜まってんだよなー」

「おいおい、ほどほどにしとけよー？」

４人共、各々好きな事を言っている。共通していることと言えば、嫌らしく野蛮な笑みを携えている事のみ。

４人の手が、小雪の衣服をはぎとろうと手を伸ばしたその時――

――――――。

「――――――戯れはそこまでにしておけよ、屑め」

声が聞えた。万人を嘲笑うかのような、支配者のような声。

それは奥から聞えた。

一同そこに視線を向ける。

一同、顔から血の気が引いた。眼球の黒眼がぐらぐらと揺らぎ、全身を薄い膜で覆う様に汗が噴き出て、指先がカチカチと震える

４人の視界には、１人の少年が映っていた。

その少年はゆっくりと迫るように歩いて来る――――――。

王貴はいかにも怯えていますと言わんばかりの少年たちを嘲笑うような笑みで眺める。
そうして、空間に一本の剣を造りだし、１人の少年の足元に投擲する。
威力は無く、ただ剣はそこに突き刺さった。翔一との戦いで見せた必殺の威力は無い。

だが、それだけでも不良たちにとって脅威に思ったのか、ひぃ！と喉から変な音が漏れだしたかのような声が聞える。
それが愉快だったのか、王貴は顔をさらに深く深く嘲笑う様にして笑う。
そして、造り出した３挺の武器。１つは鎌。１つは長剣。最後は槍と言った武器を造り出し３人に投擲する。
３人は避ける動作もせず、面白言う様に当たり吹き飛んで行った。ピクリとも動かない辺り気絶でもしたのだろう。

そうして、最後に残った男に視線を向けながら、

「最後は貴様だ。せめて祈れ。生きている間に貴様が出来るのはそれだけだ」

殺すつもりはないが、脅しをかけておく。
だが、男はあろう事か足元で気を失っている小雪を抱え、その首元にナイフを当てる。

「ハハ。ハハハハ！　これで形勢逆転ってヤツだ糞ガキィ！」

本気で形勢が逆転したと思っているのか。不良は思いっきり笑う。下品に、ゲラゲラと笑う。

「テメェは自分の女を助けに来たのかもしれねェが、馬鹿だぜお前！　人質がいるのにも関わらずノコノコ来やがってよォ！」

王貴は黙っているのみ。

挑発するようにして不良が言っても、王貴は嘲笑うような笑みを止めない。

舐められた、と解釈した不良は大声で下品に、

「……ッ！　何か言いやがれ糞ガキ！　黙ってんじゃねェ気持ちが悪ィんだよ！」

「何を勘違いしているのか知らんが、王（オレ）はその女を助けに来たのではない、」

そう言うと、ゆっくりとした動作で片腕を上げる。ゆっくりとただゆっくりと上げ、

「――――――貴様を裁きに来たのだ」

指をパチンと小気味良く鳴らす。
その瞬間、空間から無数の鎖が不良の体を絡め取り、捕縛した。

「な、何だこれは!??」

「――――王の鎖。対象の気が多ければ多いほど強度が上がる戒めの鎖よ。貴様には勿体ない代物であったか?」

あの正体不明の“円柱の剣”同様。この鎖も安易に造り出す事が出来た。どこか記憶のある鎖。
どうして、この鎖の記憶があるのか今はどうでもいい。
王貴の鎖が小雪を絡め取ると、自身の下に引き戻す。そうすると、ぶっきらぼうに小雪を地面に下ろすと、少年は無数の鎖に捕縛された不良の下へと歩みよる。

「さて、貴様は王(オレ)の法の下裁くとしよう」

「テメェが法だと?」

「然り。この王(オレ)が王(オレ)自身に敷いた王(オレ)の法だ」

「ハッ、テメェが正義とかいいたいのか」

悪態つくようにして少年は言うが、王貴はゆるりと首を横に振る。

「王（オレ）の言葉が聞えなかったのか？　王（オレ）が王（オレ）“自身”に敷いた王（オレ）の法だと。何が正しく何が正しくないかなどを考える事など後の歴史家の仕事よ」

あの男は風間翔一とか言う男は言った。「俺を、俺たち風間ファミリーを舐めるなよ」と。これはあの男が9人分の人間を背負い。自分と戦っていた事になる。ならば自分は、王を名乗るのであれば『この世全ての人間』を背負おう。それが出来ずして何が王か、なにが支配者か。

そして、自分の敷いた法の通り、自身は黒い闇に染まることになろうとも、おだやかな光の世界に生きる人間が闇の世界に住む人間の犠牲になることを許さず、闇を喰らい続ける『暴君』となろう。

故に一般人の犠牲が出る事態は当然のように阻止し、自分同様に闇にいる人間には一切の容赦をしない。

聞えは良いが、その考えは傲慢で傲岸な考えだった。

どんな理由であれ、闇の世界に住む人間が光の世界に生きる人間を食い物にする事を許さないと言う。仕方なく、そうする人間いようとも等しく王貴は罰すると言う。

それはあまりにも傲慢で、あまりにも不遜な考えだった。

だが、王貴はそれでも良いと思う。もし、自分が間違っていても、誰かが自分を止めに来る。自分と戦ったあの男のように。そして、自分はそれを迎え撃とう。王であるが故に。

仮にも王を名乗っている、名乗ってしまったのだ。
今度こそ王として君臨する。迷いは、捨てた。

「では、裁くとしよう。それとな、あの女は王(オレ)の女ではない」

そう、王貴は告げる。

「腕の一本や二本で済まされると思わぬ事だ――――――――!!」

……………………………

……

………………………………

……………………

それを一部始終見ていた二人の人影が有った。
丁度、王貴達がいた路地裏が見えるビルの屋上。

「うへぇ、あの小僧。強いなァー」

「彼が霧夜王貴です。どうですか、釈迦堂さん。彼に勝てますか？」

そう尋ねる、1人の人影。
釈迦堂と言う男は顎をポリポリと掻きながら、

「どうでしょうなぁ？　今の俺じゃキツイかもな」

と、嬉しそうに答えた。
釈迦堂形部。川神院の元師範代の男。その人物は暴力の塊ともいえる人物だ。
もう一度路地裏を見ると、霧夜王貴と榊原小雪はもういない。
いるのは倒れ伏している四人の不良だ。

「それにしても、榊原の嬢ちゃんは何で捕まったのかねェ」

「ユキは私がいいと言わないと戦いませんから」

「そりゃまた。躾がなってるねェ、大将」

そう言うと、大将と呼ばれた人物は釈迦堂に、

「それでは、あの屑の制裁をお願いします。私の家族であるユキを攫ったんですから。当然の報いでしょう」

「りょーかい。それで大将はどこに行くんだ？」

「そろそろ、“彼”から連絡が来ると思うので準備をしてきます。それではよろしくお願いしますよ釈迦堂さん」

そう言うと正体不明の人物は去っていった。
残されたのは釈迦堂のみ。
釈迦堂はぼんやりと空を見上げながら、

「折角見つけた獲物だ。とことん殺り合ってもらおうかぁ、霧夜王貴君。まぁ、殺し合う前に俺も修行し直さなきゃなぁ」

男は愉快気にヒヒヒ、と笑う。
修行する前に一先ず、あの屑どもを制裁するとしよう――――――。

第１４話　王とは何たるや　後編（後書き）

王貴再出発ッて感じで終わりました。
ＲＰＧ風に言うなら『傲慢度が上がった！協調性が下がった！』と言った所でしょうか。

そして、釈迦堂さんとマロードさんに目を付けられる貧弱王。

釈迦堂さんも本編と違い魔改造されると思いますがご容赦ください。

それではご意見、ご感想ありましたらよろしくお願いします！

おまけ

不良「……ッ！！　何とか言えやァ気持ち悪ィんだよ！」

貧弱王「何とか」

第１５話　王（オレ）初めての旅行（前書き）

王貴の呼び名レベル

【最低】屑→あだ名→名前【最高】

でも、名前まで持っていくのが至難の業。

第１５話　王（オレ）初めての旅行

５月４日　ＡＭ９：００

ここは川神駅。
ゴールデンウィークと言う事もあってか、川神駅は大層なにぎわいを見せていた。それもその筈、今日は黄金週間ともいえる。だからこそのゴールデンウィーク。それは川神駅もにぎわいを見せるだろう。
家族連れ、カップル、老人、はたまた芸能人と様々な人種が乱れる川神駅に、一組の男女グループの姿があった。
それが風間ファミリー。

風間翔一をリーダーとし、男女９人グループで結成されている一組の集団。
彼らは目立つ。リーダーの風間翔一を筆頭に個性的な集団。中でも、女子のレベルが高い。そのためか、道行く人の目を引いてしまい、否が応でも目立ってしまう。
今居ない川神百代を除いて８人がそこにいた

その中で、

「全員いるかー！」

風間翔一が風間ファミリー全員いるか呼びかける。

翔一の右腕には白いモノが巻かれている多。ギプスだ、それが首から吊るすような形で巻かれているそれを、何やら嬉しそうな笑顔でブンブンと振りまわしている。旅行に行くのがそんなに嬉しいのだろうか。

彼が右腕にギプスをしている理由。それはとある少年と決闘をしたのが理由だ。

数週間前、彼はとある少年、――――――霧夜王貴と決闘をした。その決闘は翔一から考えれば『とてつもない死闘』の一言で片付いてしまう戦いを繰り広げた。戦いが終わった時には、翔一の体はボロボロで見るも無残な姿だった。当時の怪我の内容から考えて、折れた右腕以外完治（それでも全快ではない）したのは上出来といってもいいだろう。それぐらいの怪我の内容だった。

決闘には勝ったが、翔一が何故自分が勝っている事になっているかよく覚えていない。

何せ、最後の辺りが覚えていないのだ。もっと詳しく言うと、王貴が短剣を出してもの凄い風を出した辺りから覚えていない。

後々、大和に聞いた話では、王貴が「負けでいい」と、宣言したらしい。

それが翔一には納得できなかった。あの決闘で明らかに自分は負けていた。それは断言してもいい。何せ、途中から記憶が飛んでいるし体もボロボロ。これで勝利だと思っているのは馬鹿か阿呆しか

いない。

だが、翔一は取り合えずこの気持ちは置いておく事にした。
今は旅行を楽しもう。

「姉さん以外いるぞ」

「お姉さま、まだかなー」

大和が時計を見ながら言い、一子がピョンピョンと飛びながら百代を探している。

先も言ったが、この場に百代の姿は無い。
遅刻でも無いし、用事があって来れないと言う訳でも無かった。
百代がいない理由それは、とある人物を回収するためだ。
何故、百代が回収しなければならないのかと言えば、百代でなければ回収できないからだ。それほどの人物とは誰なのだろうか。

しばらくして、風間ファミリーのまわりにいる人たちがざわつき始める。
川神駅にいる皆がそれに視線を向ける。それは風間ファミリーも例外ではない。
凄まじい賑わいを見せていた川神駅の人垣が割れる。その中央から悠然と風間ファミリーに歩いて来る人影。

川神百代だ。

百代が上機嫌に歩いて来る。それはもう、笑顔で。とてつもない笑顔（スマイル）で。今なら百代に喧嘩を売っても、ワンパンチで許してもらえるだろう。それぐらい今の百代は機嫌が良かった。

だが、着ている衣服はボロボロ。胸の部分が破れ、ブラジャーらしきものが見え隠れしている。ジーパンの太股の部分も破れており、健康な脚が見えている。まわりにいる男たちがそれをチラチラと見ている。岳人に至ってはガン見だ。穴が開くかのような視線を送っている。

そうして、風間ファミリー一同（岳人以外）は百代から視線をずらして、彼女が腋に抱えている物体に視線をずらす。

金髪の頭髪、ルビーのような輝きを放つ両目、端正に整った容姿、そして不機嫌な顔。

霧夜王貴の姿がそこにあった。

王貴を川神駅に連れてくるのがどれだけ骨の折れる仕事だったかは、今の百代が証明しているだろう。正に、死闘でもあったような感じだ。現に、百代の顔は満足と言ったようにニコニコしている。いや、理由はそれだけではないと思うが……。

そこで、王貴は不機嫌そうに、これでもかと言うほど顔を顰めながら、

「おい百代。これは一体何の真似だ？」

「ん？　何ってお前を旅行に誘ったんじゃないか。言ってなかったか？」

「言っておらぬわ！　貴様はいきなり王（オレ）の部屋に入り込み、尚且襲ってきたではないか！」

「うん。あの時のお前の驚いた顔は最高だったな。何せあの時の悲鳴が『ほ――――」

「ええい、黙れ下朗！　最早許さぬ！　ここいら一帯まとめて薙ぎ払ってくれるっ！」

王貴がそう言うと百代の腕の中で暴れ始める。
だが、相手は川神百代。いくら身体能力の高い王貴だが、百代の腕の中から抜け出せる訳が無い。
しばらくジタバタジタバタ、と暴れるがビクともしない。
急に静かになるが、

「ふ――――――ふふふふ。殺そう。すぐ殺そう。すごく殺そう」

そう王貴がニッコリと微笑みながら言う。だが、その微笑みに慈愛の「じ」の字すら見えない。殺意１００％の一番搾りとはこの事を言うのだろう。
この怒りにいち早く察した大和が行動に移す。人望と策謀が武器と言って憚らない直江大和が、王貴の怒りを感じ取れない訳が無い。
大和の行動は速かった。恐らく、川神百代が現れた辺りから行動に移していただろう。
王貴を指さしながら、

「ワン子ＧＯ！」

大和が叫ぶように言い、一子がそれを合図に王貴目掛けて飛びだす。

大和が一子に指示した内容は至って簡単。
自分が合図したらそこ目掛けて飛び出せ、そしてなだめて来い。
という単純明快な指示。これはバカでも分かるだろう。
現に一子は大和の指示通り、王貴目掛けて走っている。

一子は一気に百代と王貴との距離を詰める。
流石スピードを売りにしている事のだけはある。一瞬とはこの事だろう。到着するのに2秒もかからなかった。

アワアワと一子は少し慌てながら、

「お、落ち着いて。落ち着いてね～。どうどう」

「ぬぅ！？」

「うぇ！　に、睨むなよ～」

王貴の睨みつけられたのが怖かったのか、一子は涙目になる。
だが、王貴には誰が涙目になってようが関係ない。一子を睨みつ

けながら、

「何だ貴様は？　王（オレ）に話しかけるとは――――――――――――――――！！！！？？？？？？」

顔を怒り一触に染めていた王貴の顔が、今度は衝撃一色に染まる。
王貴の背後で、雷のエフェクトでも使われたかのような衝撃だった。
目を見開きながら、一子を見る。

霧夜王貴と言う人物は人間だ。彼にも好きなものはある。
その中でもチョコレート。そして猫。次に武具全般。最後に、『犬』。
そして、川神一子は自他とも認める、『犬属性』。
もうおわかりだろう。
王貴の史上最悪の相性の持ち主がここにいた――――――！

「な、なるほど。愛い奴め。王（オレ）がお菓子を買ってあげよう。ほ～れ、王（オレ）は怖くないゾ～」

「うぃ？　もう怒ってないの？」

「うむ。王（オレ）は怒っておらぬ」

「良かったわ～」

「――――――――――！！！？？？？」

ズキューンと、何かを撃ち抜く音が聞えた。
それは今まさしく。王貴が一子の笑顔に撃ち抜かれる音だった。
ここで言う所の撃ち抜かれると言う証言。これは別に王貴が一子に恋をしたという訳ではない。今の言葉で言う所の『萌えた』といった表現が正しい。

それを見て、百代は悪い笑顔で大和にグッと親指を立てる。大和もこれまた悪い笑顔でグッと親指を立て返す。

そもそも王貴の好き嫌いなどリサーチ済みだったのだ。
それも彼の実の姉から聞いたのだから間違いない情報。知っていなければ、『王貴の部屋から無理やり連れ出してくる』なんて強硬手段に出ないだろう。いかに川神百代でも旅行に行く当日に王貴とガチで殺り合うのは気が乗らない。

そもそも、霧夜王貴を風間ファミリーの旅行に同行させるのはとある理由があった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「アイツを旅行に誘おうぜ！」

いきなり翔一がこんな事を言ってきた。

場所は廃ビルの中にある、風間ファミリー秘密基地の中。メンバーも全員がそろっていた。その秘密基地内部も中々のもので、正に秘密基地と言ってもいい内部構造だった。

一同は目が点になる。

翔一が突拍子も無く発言するのはこれで初めてじゃないが、今回

は余りにも突拍子が無さ過ぎる。

「えっと、いきなりどうしたキャップ？」

みんなより復活の速かった大和が翔一に問いかける。
発言者の翔一は至極楽しそうに、子供のような笑顔で、

「だーかーらー、俺ら旅行に行くだろ？」

「うん。キャップがくじ引きで当ててきた箱根でしょ？　確か1泊2日の泊りだったよね？」

師岡卓也がそう言うと、翔一は「そうだ！」と力強く頷く。

「あ、ちなみにまだ5月に入ってないのかよ。って言うツッコミはナンセンスだぜぇ？　昨今時間が消し飛んでるってコンセプトも珍しくねぇからよぉ～」

松風と言うストラップが喋っているがみんなスルー。
ストラップに話しかけている下級生などみんな慣れている。慣れとは怖いと思う今日この頃。

クリスは首を傾げながら、

「では、アイツとは誰だ？　源殿か？」

この風間ファミリーで親しいと言えば、源忠勝しか思い浮かばない。それはクリスだけではなくみんなそうだった。翔一も忠勝をメンバーに誘っていたし、アイツとは忠勝だろうとみんながみんな思ったのだが、

「いいや違う」

翔一が首を横に振り、忠勝ではない事が分かった。

では誰なのだろうか？

風間ファミリーは閉鎖的なグループだ。お世辞にも、みんながみんなを受け入れるグループとは言えない。だが今、翔一は誰かを旅行に誘おうとしている。

それは誰なのだろうか？

翔一は笑顔で、嬉しそうに、

「王貴だよ、王貴！」

王貴？はて誰だ？　と百代以外のメンバーが首を傾げる。

王貴何て偉そうな名前何処かで聞いた事が有った。風間ファミリーと一悶着でも起こしているかのような名前だ。というより、王貴なんて名前『霧夜王貴』しか思いつかない。

一子が恐る恐る、

「王貴って……、霧夜王貴の事……？」

「おう！」

その瞬間。

廃ビルから「なにいいいいいいいいいい！！！！」と言った絶叫にも似た声が聞えた。

一同、翔一を正気かこいつは、といった目線を送る。

霧夜王貴と言えば、翔一本人をボロボロにした張本人だ。しかも、一子の夢も嘲笑った男。確かに一子本人、気にもしていないが翔一をボロボロにしたのは変わりはない。現に、今でも右腕をギプスで固めている。

「何だよ、俺は本気だぞ？　アイツ結構いい奴だって！」

何を根拠にそんな事を言っているのだろうか。

同贔屓目で見ても、霧夜王貴という人物は『いい奴』ではないだろう。もし、翔一の言う通り『いい奴』だったら翔一をここまでボロボロにしないだろう。ましてや、本当に『いい奴』だったら一子

の夢を嘲笑う事なんてしない。

大和はどこか疲れたかのように片手を顔で覆いながら、

「根拠は？」

「戦ってて思ったんだけだ。こいついい奴だって。んでもって仲間にする予定だ」

一同絶句。

あの戦いで翔一が王貴の何を分かったのかは知らないが、第3者から見てそれはあり得ない。

大和は片手で覆いながらも、翔一を盗み見する。

翔一は機嫌よさそうに笑っているが、ふざけてい言っている訳ではない。長年翔一に付き合っていて分かる。あの男は本気だと――――。

呆れながらも、大和は顔を覆っていた片手を取りながら、

「じゃ、多数決を取ろう。京」

「反対。言うまでも無いでしょ。ここにアイツはいらない」

「モロ」

「同じく」

「ガクト」

「俺様も反対だ。男はいらん」

「まゆっち」

「私は、その、賛成です……」

「クリス」

「自分は反対だ。あの相手を舐めきった態度が気に入らない」

「ワン子」

「んー、キャップがいい奴って言うなら賛成。戦って分かるとか素敵よね！」

「……姉さん」

「賛成だ。私も思う所がある」

これで４対４。

大和は心の中でため息を吐く。

京と卓也が反対したのは予想通り。岳人もこれ以上男が増えるのは嫌がっていたので予想通りだ。真っすぐなクリスが反対したのも予想通り。

由紀江が賛成したのは、心優しい彼女の事だ仲良くなりたいから

だろう。一子も翔一に信頼を置いているので、賛成したのだろう。
あと、理由だ。戦って相手を分かるとか、いかにも彼女が好きそうな感じ。大和が分からなかったのは百代だ。彼女が何をもって賛成したのか分からない。彼女は幼いころから王貴を知っているようだったし何か知っているのだろう。と、大和は解釈する事にした。

「大和はどうなの？」

京が呼んでいた本を閉じて、大和に視線を送る。
そこに一切もふざけていない。彼女にとって風間ファミリーは大事なモノだ。これ以上増やしたくないのだろう。ましてや入る予定なのが霧夜王貴だ。翔一や一子はもう気にしていないが、仲間に危害を与えた人間を入れる事をしたくないのだろう。

そう思うと、今度は翔一に視線を向ける。
彼も真剣だった。ああなった翔一を止めるのは至難な技だ。そんな事、大和が良く知っている。嫌ってほど良く知っている。

だから、

「俺は中立。アイツが問題起こしたら切り捨てればいい。京もキャップもいいだろ？」

有無を言わさずに告げる。

翔一は「おう！」と笑顔で言うが、京は納得のいかないと言った表情になる。
それを大和は仕方ないと思う事にした。

「よーし！　旅行は５月４日だからな！　覚えておけよー！」

「待てキャップ、５月３日は何もないな？」

「これと言って無いけど、どうしたんだよモモ先輩」

「いや、５月３日は大事な用があるんだ。大事な大事な……」

百代が意味深な事を呟くが、大和は気にかけなかった。
人それぞれ、大事な事がある。今は取り合えず、むくれている京の機嫌を直す事にした――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

１０時半。予定通り箱根に着いた。

今風間ファミリー＋１がいるのは箱根にある旅館。特急踊り漢で箱根に着くや否や、旅館まで競争しだしたクリスと一子。外に散歩に出かけた岳人と由紀江。旅館の部屋でまったりとしている京と翔一。同じく部屋でゲームをしている卓也と百代。

王貴だけが１人で別行動をとっている。どこに行ったかは不明。旅館に着いたらフラっと何処かに消えていたのだ。

「さて、どうするかな」

大和は１人呟く。

頭の中にある選択肢は

ガクトやまゆっちと外に行ってみる。

クリスとワン子が走って来るのを待っている。

キャップや京とまったりと過ごす。

百代やモロとゲームで遊ぶ。

この４つだ。

ま、ここは無難にキャップや京とまったりと過ごすとしよう。と、大和は部屋を目指して歩き始める。そう『部屋』を目指して歩き始めた――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「フハハハハハハ！　これが箱根か。中々良い所ではないか！」

「あるぇ～？」

大和が気付いたら、外に出ていた。そして目の前には高笑いして、箱根に広がる絶景を腕を組みながら堂々と見物する王貴の姿。

おかしい。何かがおかしい。自分は明らかに翔一や京とまったりと過ごすとしよう部屋目指して歩いて行った筈。なのにも関わらず、今居るのは外で、目の前にいるのは霧夜王貴。おかしい、まるで宇宙の謎の意思でも働いたかのようだった。

「ちゃんとカーソルを『キャップや京とまったりと過ごす』に合わせたんだけどなぁ？」

大和が両肩を落として呟く。

視線は高笑いしている少年に向け思う。

霧夜王貴に宇宙の謎の意思が働きかけられているのではないか、と。

「む？」

大和の呟きが聞えたのか、王貴は高笑いを止め大和に振り向いた。

そして、良い所に来た。と、ニヤリと笑う。

「誰かと思えばあの男の保護者か。まったくもって、良い所に来たではないか屑。よし、今から王(オレ)を箱根に案内する事を許す。疾く王(オレ)を案内せよ！」

そうしてふはははは！　と高笑いを始める。いや、もうこれは爆笑の類だろう。

王貴のあの男というのは翔一の事だろう。大和は誰が保護者だ、と反論しようと口を開くが直ぐに閉じる。思えばいつも翔一の尻拭いというか、フォローというか。そんな事をやっていたのは大和だったからだ。成程、保護者とは中々言い当てていると感心する。

それよりも今の問題は王貴のテンションだ。

明らかにハイテンション。今が少年の最高にハイってヤツだろう。

行きの列車では一子の『ワン子大作戦』もあってか、怒りはしなかったがどこか不機嫌そうだった。だが、今はどうだ。めっさ機嫌がいい。

「あー、お前どうしたの？」

「何がだ、屑よ」

「テンションというか、何と言うか。キャラ違くないか？」

「む、王(オレ)とした事が王のあるまじき振る舞いであったか。なに、旅行など生まれて初めての経験でな。少しばかり気分が昂ぶってしま

ったわ！」

はっはっは、と爽やかに、居丈高に笑う王様（オレ）。

大和は王貴を見て、こいつ行事ごととか大好きなタイプだ、と感じた。

実際に王貴は退屈を嫌っているので、大和の推測は合っているのだが。

「お前さ、高い所とか巨大な建造物とか好きだろ？」

「良く分かっているではないか。やるな保護者！」

「保護者言うな！　つか、それあだ名か？」

「貴様など、あの男の保護者であろう」

大和は反論する気が無い。というより、出来ない。これまで保護者まがいの事をしてきたのだ。今更それを否定する気が起きない。

だが、今はどうでもいい。

大和が今気にかけているのはそれではないからだ。

「なぁ、王貴ってキャップに仕返ししてやろうとか無いのか？」

そう、大和が一番気にかけているのはそこだった。負け宣言した

のが王貴だといえど、負けは負けだ。彼が何を思って敗北宣言したのかは大和は知らない。それでも、この手のプライドの高いヤツらは仕返ししてやろうと考えるだろう。

もし、この場でこの旅行中で仕返しを考えているなら、百代を使ってでも、いや仲間全員で止めてやる。

そう大和は意気込むが、

「無いな」

この一言でその気持ちが消える。

「いや、無いと言えば嘘になるな。いずれは借りを返す。だが、それは今ではない。“然る時”に、“機会があれば”それは自ずとやってこよう。それは今ではない」

「何でだ？」

「忌々しいが、あの戦いは王（オレ）が王として挑んだもの。故に、あの敗北も王（オレ）に落ち度はない」

「落ち度がないって……。お前、明らかに慢心してたのにか？」

「星の巡りでも悪かったのだろうよ。何度も言うが王（オレ）に落ち度はない。慢心せずして何が王か」

臆面もなく言い放つ王貴。
その揺るぎないモノにどこかかっこいいと思っている大和がいる。
王貴はもう一度箱根に広がる絶景を見る。

大和は少しだけ、目の前にいる男の印象が変わった。
凄い傲慢で、かなり不遜な男だが。性根は腐っていないらしい。
もし、性根も腐っててひん曲がっている奴なら今ここで絶景を見て高笑いなんてしていないだろう。
それに、どこか翔一と百代が合わさって出来たかのような雰囲気が王貴から出ているのを感じる。何をされても許せるというか、しょうがないというか、そんな雰囲気。限度にもよるが、何故か許してしまうそんなカリスマを放っていた。

「では行くぞ、保護者。疾く王（オレ）を案内せよ」

「はいはい、わかりましたよ」

王貴は一足先に歩いて行き、それを大和が駆け足で追いかける。
どこか、この傲慢な少年と仲良くやっていける気がした――――。

そうして日は沈み、箱根は夜になった。
空に雲は無い。これでもかというほどの星空が浮かんでいる。

「女子も入ってきたか」

岳人がにんまりと、何やら下品に笑う。
場所は旅館の大浴場にある露天風呂。夕食も食べて、彼らは風呂に入りに来ている訳だ。
女湯にからは聞き覚えのある声が聞えてくる。
言わずもながら、百代たちだ。

岳人は鼻の下を伸ばしながら、

「なぁなぁ、ちょっと覗いて見ねぇか？」

「無理無理、止めとこうよ」

卓也が止める。

確かに、覗いてもバレるのが関の山だろう。

「チキン・オブ・チキンのモロは置いといて、ちょっとした出来心で覗いてみねぇか？」

「興味無いからパス」

「死にたくないからパス」

翔一が心底興味が無いと言った感じに言い、大和がどうでもいいと言った感じに答える。だが、視線はチラチラと女湯の仕切りを見ており、興味はあるようだ。

と――――、

「たわけめ」

王貴が口を挟む。
すると彼は、おもむろに立ち上がり、

「覗くなど盗人のするモノよ。王であるならば――――――――――、」

ニヤリ、と。不敵に笑いながら。

「――――――――正面から堂々と、だ」

「ストップストップー！　それ犯罪だから！」

卓也が必死に止める。
この男なら平気でやりそうだからだ。惜しげもなく、躊躇もなく、堂々と。

「ええい、何を止める！　行くぞ駄筋！（駄目な筋肉の略称）」

「おうよ！　話が分かるなお前！」

「だから待って！　ガクトも行かないでよ！　というか、王貴絶対興味無いよね？！」

卓也は自分の両手で王貴と岳人の片腕を掴んで止める。

そう、明らかに霧夜王貴という人物は女に興味はないだろう。それは翔一と同じく本当に興味が無いだろう。

そんな人間がどうして、女風呂を覗こうなんて思い立ったのか。

王貴は不思議そうな顔で、

「露天風呂に入りやることと言ったら覗きなのだろう？」

「誰が言ったのさ！」

「百代だ」

あの先輩は何を少年に教えたのだろうか。

取り合えず、間違いを正すとしよう。

「それ嘘だから？」

「なにぃ？　嘘だと？」

「それは知らなかったぜ」

「ガクトは知ってたでしょ！」

卓也はぜぇーぜぇー、と肩で息をする。ツッコミはかくもここまで疲労するモノだというのか。

大和はそれを見て一言。

「大変だなーモロ」

そう、呟いた――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、何やかんやあって就寝時間。
彼らが部屋を借りられたのは1部屋。つまり、男女人部屋で雑魚寝をするしかみんなが寝れない。
男女同じ部屋。
それはつまり、男が寝ている女を襲う事があるかも知れなければ――――――、

「こんばんは、夜這いしに来ました」

「帰って下さい」

その逆もまた然りという事――――――。

京はそう言うと、問答無用で大和の布団の中に入って来る。大和は抵抗しようとしたが、時間が時間だ。それに、いま下手に動いて皆を起こせば、あら不思議。既成事実が出来あがってしまう。
それこそ京の思うつぼだ。

「オイコラ！　布団の中に入るなって！」

もぞもぞ、と。少し抵抗してみせうるが、それも徒労に終わってしまう。
京は大和に覆いかぶさるようにして現れる。顔には艶やかな笑み。

大和は一瞬その笑みにドキっとするが、直ぐに自分を取り戻す。

「いいから、布団から出て行って下さいよぉ、京さん」

「だが断る。それに、布団にもぐりこんでるの私だけじゃないんだよ？」

と、京は指さした。

大和はその方向に視線を向ける。向けた瞬間、京が変な行動を起こさない様に注意深く。

するとそこには、

「ぬぅぅぅ……！」

「ふ、ふふ、ふふふふふ」

うなされている霧夜王貴とめちゃくちゃご機嫌な川神百代がいた。

百代は王貴の体に脚をからめるようにして、しっかり固定している。あれは解けれないだろう。

王貴も王貴で「ましゅまろが襲ってくるだとぉ……。ええい、我が剣で薙ぎ払ってくれるぅ……」と悪夢のようで、最高の夢のような夢を見ている。顔が顰めて言う他、歯ぎしりまでしているので彼基準で悪夢だという事が分かる。

大和はそれを見て、姉さん王貴に気があったのか。と、思う前に

うわぁといった声しか出てこない。アレでは蛇とマングースみたいなものだ。絞殺されるのではなかろうか。

取り合えず今は、

京という悪魔から逃れる術を考えるとしよう――――――。

第１５話　王（オレ）初めての旅行（後書き）

どうも、兵隊です。

まず、誰だテメェというツッコミが来ると思います。ええ、自分もそう思いました。誰だこの貧弱王。

ほとんどのヒロインが好感度マイナススタートとか聞いたことないないです。

数字で表すなら

百代　９０％
ワン子　１０％
京　－１２０％
クリス　－５０％
まゆっち　－１０％

もう、笑うしかないですねｗｗ

王貴もまた戦闘シーンがある予定。そのころには乖離剣（仮）も完成……してたらいいなー。

それではご感想、ご意見などありましたらよろしくお願いします！

第１６話　王（オレ）初めての旅行～水難編～（前書き）

王貴「弾幕はパワーだぞ！！」

エリカ「アンタ、何言ってんの？」

第16話　王（オレ）初めての旅行～水難編～

風間ファミリー＋1箱根旅行2日目。今日が旅行最終日だ。
今日の主な予定は、昼まで魚釣りをし、午後からは箱根観光といった予定だ。
空は快晴。日差しも強く、風も程良く吹いており、絶好の釣り日和&観光日和と言えるだろう。

時刻は9時を回っている。
大和、翔一、岳人、卓也、王貴が今居るのは九鬼財閥が経営する旅館のロビーだ。
九鬼財閥はこうして世界のあちこちに、こういった旅館を経営しているため、旅館の内部も同じような作りになっている。だが、どの旅館も綺麗な内装なので、流石九鬼財閥と言えるだろう。ここで言うと、キリヤカンパニーも九鬼財閥と対抗してホテルを世界のあちこちで経営している。
ちなみに、女性陣は着替えているので今はいない。

「ぬぅ……。何故か首が痛む」

そう発言したのは王貴だ。
眉を顰めながら言っている辺り、本当に痛むのだろう。

「寝違えたんだじゃないのか？」

「いや、それはない。ハッキリとは言えんが、何かこう、首がもの凄い力で絞められていたというか、そんな感じの痛みなのだ」

岳人と王貴がそんな感じの会話をしていた。

その内容に大和は心当たりがあった。

それは昨日の夜の事、王貴に絡みつく百代の姿。いや、アレは絡みつくと言った可愛いモノじゃない。

絡み絞殺すと言った方が正しいだろう。それほどの力で、百代は王貴に抱きついていたのだ。もし、自分がやられたらと考える自体ゾッとする。

というよりも大和にしてみたら、あの怪力の百代に絞殺される勢いで絡みつかれて、『首が痛い』だけで済んだ王貴の方が驚きだった。

だが、大和が気になるのはそれではない。

大和が気になるのは、

「む、どうした？」

大和の訝しむ視線に気付いた王貴。

ゴミでも付いているか？　と服装をチェックする。

「何だ、おかしな所など微塵もないではないか」

「いや、そうなんだけどよ……」

どうやら、訝しむ視線を送っているのは大和だけではないようだ。岳人も同じような表情で視線を送っている。

彼らが訝しむように見ているのは服装とか格好ではない。

もっとシンプルで、素朴な疑問だった。

大和が口を開く。

「お前が着てるのは何だ？」

「黒のライダースーツジャケットだが？　それがどうした保護者」

「何でお前だけ、昨日と違う服装なんだよ……」

今度は岳人が何故か悔しそうに恨めしげに口を開く。

王貴の昨日の服装は、今着ているようなライダースーツジャケットではない。昨日の格好は、大きく胸元の開いた白い七分のシャツと黒いレザーパンツだ。両腕には、紅い宝石のような腕輪と、同色の首飾りをしていた。そこはかとなく、いや思いっきり成金チックな格好だったが、恐ろしく似合っていて恐ろしく感じただろう。

それに比べ、今は昨日よりも質素と言えるだろう。昨日“よりも”だが……。

だが、先にも言った通り。大和と岳人が訝しむように見ているのは服装ではない。
もっと簡単でシンプルな理由。

「何でお前は、俺様たちのように同じ服じゃない！」

「お前だけで立ち絵が何枚作られると思ってるんだ！　確認されてるだけで４枚だぞ！　これで夏に入ったら何枚になる事か……！！」

「俺様何て、夏用秋用の立ち絵合わせて４枚だってぇのに！！」

「ガクトはまだいいさ。俺なんて立ち絵すらない……」

岳人はうがー！と、両手で頭を抱えて怒りだし、大和はそこら辺の隅っこで体育座りでイジケ始める。

彼らが言っているのは、原作的な問題。何よりも異次元的な話だった。
場は混沌に包まれ、カオスな状況だった。本来、このような事態になる前に、卓也が切れ味のいいツッコミをしてくれるのだが、翔一とともにロビーにあったパズルを没頭しているため、卓也のツッコミは期待できないだろう。
よって、収集がつかない。

王貴は居丈高に腰に片手を当てて、ニヤリと不敵な笑みと共に、

「異次元的な発言でよく分からんが、これが王（オレ）と貴様らの差というヤツだ。身に染みたであろう？」

よく分かっていないのにも関わらず、自信満々にそう告げる王貴。流石と言った所だろう。よくも、訳も解らず自信満々に言えたものだと感心するばかり。

何一つ解決しない。場の混沌が加速するばかりである。

「うっし、パズル完成したぜーっ！」

そうして、翔一はパズルをしていた席から勢いよく立ち上がる。もう、右腕にギプスしてようがお構いなしだ。ちなみに卓也はまだパズルに没頭している。アレがこーで、それであーで、アレ―？とか言っている辺りまだ完成しないだろう。

最初は、パズルが解けて嬉しかったのか。笑顔だった翔一だったが、次第に不思議そうな顔つきになり、首を傾げる。

「なぁ、大和とガクトのヤツどうしたんだ？」

「なに、王（オレ）とヤツらとの超える事の出来ない壁が有る事を再認識したのだろうよ」

「そーなのかー？　おいおい、駄目だぜ２人とも！　壁ってヤツは

超える為にあるんだ。超えられなければ壊して行け！」

翔一は何か勘違いをしているらしく、大和と岳人に鼓舞するかのよう言う。どうも目が燃えている辺り、本格的に何か勘違いをしているようだ。

今、翔一の頭の中で描いているモノは恐らくスポ魂のような熱い展開なのだろう。だが、実際はそんなモノではなく、もっと違うモノ。つまり、翔一がそこまでして燃えるモノではないと言える。

現に2人共「ほっといてくれよー」と、イジケながら言う。

だが、王貴はそんな二人の気持ちなど露知らず、腕組みをしイライラとしながら、

「まだ行かぬのか、道化」

彼の言う道化とは誰の事なのだろうか。

翔一は王貴の方を振り向くが、その視線は真っすぐと翔一を見つめている事から自分の事だという事が分かった。そう言えば、決闘の最中も自分の事を道化と言っていたなーと思いながら、

「女性陣が来たら出発だ。あともうちょっとじゃないか？」

「チッ、おいて行ってもよかろう。こんな所で長居することもなかろうよ」

「駄目だ！　みんなで行くんだ！」

王貴はその一言にイラッとする。そして「そこでも仲間ごっこか」と馬鹿にしたように鼻で笑いながら言おうと口を開きかけるが、直ぐに口を閉じる。

その仲間ごっこに負けたのが自分だからだ。この風間ファミリーを仲間ごっこと蔑むように言えば、自分を馬鹿にした事になる。腹立たしい事だが、黙っていた方が良さそうだ。

そう思うと、王貴は舌打ちをしながら翔一から視線を外す。

それからしばらくして、卓也もパズルを完成させ女性陣も着替え終え、ロビーに風間ファミリーが全員集合する。

そして、彼らは釣りをするために川へ向かった――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

歩く事数十分。
風間ファミリー＋1は箱根の山の中にある川へ着いた。
やはり山の中だからか、周りには木々が生い茂りのどかな自然を演出していた。
川の水面も綺麗で、太陽からの光が水面で反射しキラキラと光っている。
正に大自然とも言える光景。
「んじゃ、早速釣りをしようぜー！」

ひゃっほー！　と、翔一が我先にと釣り竿を持って、川へと走り出す。
右腕にギプスを巻いていようが、関係ないと言った感じに問題なく釣りをしていた。

現に、今も「ヤマメフィッシュゥゥゥ！！」と大喜びである。

その翔一を見て、風間ファミリーが各々好き勝手に行動を始める。
ちなみに、一子と京は百代に稽古を付けて貰っているため、今はここにいない。おそらく山の中にでも入ってのだろう。

「フン、これでオケラ共を釣り上げるのか」

と、王貴が片手に釣り竿を持ちながらブンブンと縦に振りまわす。
普通の棒を振り回すなら問題ないのだが、王貴が振りまわしているのは釣り竿。先端には糸が付いており、さらにその先端には針がついている。

そんなモノを振りまわすのだから、

「あだだだだ！！　俺様を釣り上げてどうする！　魚を釣れ、魚を！」

王貴の持っている、釣り竿の針が岳人の口の端に引っ掛かり、岳人が王貴に釣り上げられたかのような構図が出来上がってしまった。
だが、王貴は岳人が今そんな事になっていおうが気を止めない。

それよりも、初めての釣りを速くやりたいのだろう。
どこか、ワクワクしているかのようなテンションだ。
そんなテンションだ。岳人に謝りもする筈が無い。ましてや、天上天下唯我独尊を地で行く王貴だ。今のようなワクワクしている状態じゃなくても他人に謝る筈が無いと言える。

そんな王貴が気に入らないのか、岳人は額に青筋を立てながら自分の持つ釣り竿の先端を王貴にビシッと勢いよく向けて、

「もう我慢ならね！　おい、王貴。俺様と勝負をしやがれ！」

「ほう。貴様が王（オレ）に挑むのか？　よかろう、一時戯れてやる。それで？　勝負方法は何だ？」

「コレだよコレ！　男なら黙って釣り勝負だろ！」

「フン、いいだろう。死力を尽くして王（オレ）に挑んでくるがいい……！」

王貴と岳人。両者が不敵に笑う。
もはや待ったなし。
両者の死闘（釣り勝負）が幕が開けた――――――――――！

そんな彼らに、

「それよりガクト。その刺さった針を抜こうよ……」

ツッコミ名人、師岡卓也が冷静に的確にツッコミをいれた――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それから20分後。

王貴が釣り竿を右手に、左手をポケットに入れて立っている。
目線は水面に、そこには丁度王貴の釣り竿の糸が垂れていた。そして、少年の足元には水の入った水色のバケツ。釣り上げた魚を入れるためのモノだ。
だが、その中には魚が1匹も入っていない。

王貴はチッ！　と大きく舌打ちをする。その音に、隣で釣りをしていた由紀江が驚いたのか体をビクッと揺らすが、王貴の知った事ではない。

少年は明らかに苛ついていた。
魚が釣れないのもその理由の一つだが、少年が苛ついている理由はそれだけではない。

「フゥゥゥゥ！　6匹目フィッシュ！　おいおい、面白いように魚が釣れるぜー。ところでそこの貧弱王子、今何匹目だよ？　んー？　アレー？　まさかのぼうずぅ？　おいおい、マジかよ」

「五月蠅いぞ、駄筋！　串刺しにされたいか！」

「おいおい、魚釣れないからって俺様に当たるなよ～。おっと悪ぃな、と、7匹目フィィィィィッシュ！」

ひゃっほー！　と、その大きな体いっぱいで喜びをあらわにする岳人。王貴に勝っている事がそんなに嬉しいのだろうか、表情もニヤケっぱなしだ。

これが王貴の苛ついている理由だった。
王貴の隣に由紀江。右の方に岳人が釣りをしている構図だ。

ちなみに、何故岳人が釣り用語の『ぼうず』を知っているかというと、前日に女性陣に良い所を見せようと釣り用語を必死に覚えてきたからである。

王貴は怒りをあらわにしながら体を震わせる。今の少年の心の中を表すなら『屈辱』の二文字一色。
奥歯を噛みしめ、悪鬼のような表情になりながら、

「ええい、何故釣れぬというのだ！」

「そんなに怒るなって。けど、変だな。岳人があんなに釣れて、王貴が釣れてないとか。お前餌付けている？」

王貴がギロッと大和に視線を向ける。勿論、悪鬼の表情で。
うん、怖い。大和からしてみたらとても怖かった。

「餌だと？　何だ、それは？」

「餌付けてなかったの？　それは釣れない筈だよ」

今度は卓也が呆れながら言った。

対して王貴は餌？　と首を傾げて自分の竿を川から引く。本当に知らないようだ。現に、今の王貴の針にはほんとうに針のみ。餌のえの字もない。これでは釣れない筈である。

「おいおい、ぼっちゃん。ホントに餌知らなかったのかよ～。何つー箱入りっぷり。マジパネェ」

「こ、コラ駄目ですよ松風。そんな言い方しては」

「む？　何だ貴様。腹話術師か何かか？」

「どうするまゆっち？　オラ達目付けられちまったぜ？」

「い、いえ。腹話術とかじゃなくてですね？　松風には九十九神が宿っているんですよ……」

「ほう、中々面白いではないか腹話術師。この王（オレ）に対してその駄馬の言動。度し難いにも無礼であったが、貴様の芸に免じ今回だけは特別に許す」

「わーお。何だかオラ達気に入られたみたいだぜぇ～？」

「それに松風が1頭の馬として認識されてますよ！？　ストラップではなく！」

わーい、と。嬉しそうに飛び跳ねる由紀江。もう釣りなんてそっちのけで、松風と一緒に嬉しそうに飛び跳ねる。飛んで着地すると同時に揺れる豊かな胸に男性陣（王貴以外）は釘付け。大和と卓也

はさりげなく、見ているのだが。岳人に至ってはもはやガン見。隠す気すらない。

「おい、話がそれてるぞ。まったく、仕方ないな。自分がどこに餌があるのかおしえてやろう」

クリスが得意げに胸を張りながら言う。

そして、王貴に説明をし始めた――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おっ、楽しそうだなー！」

翔一がリヤカーを押しながら、岳人ＶＳ王貴の釣り勝負を見て一言。

リヤカーの中には、食材とバーベキューの食材やコンロ。焼き網や炭といったいわゆるバーベキューをやるようなモノ一式が乗せられていた。

自分の釣った魚と交換でもしていたのだろう。

「キャップ。何だそれは？」

山の中から現れた百代が不思議そうな顔でそう問いかける。

何故百代が山の中から現れたかというと、京と一子の稽古を付けていたからだろう。

「釣った魚と交換してきた。いやぁー昼飯が楽しみだぜ！」

「ほー、どれどれって。肉まであるじゃないか。やるなー、キャップ」

リヤカーに積んである荷物を見て、感心したように声を上げる百代。

昼は焼き魚だと思っていた百代にとってバーベキュー何て予想外だったのだろう。顔が少し嬉しげだった。

「所で京とワン子は？」

「組み手だ。ほら、キャップはどいてろ」

そう言うと、翔一をどかして百代がリヤカーを押す。

怪我人の翔一にリヤカーを引かせるのは気が引けたのだろう。

翔一もその好意に素直に聞き入れる。

「あっ、悪い。所でモモ先輩。ちょっと聞いていいか？」

「ん？　何だ？」

「3日大事な用があるってどこに行ってたんだ？」

翔一はそんな事を聞いた。

旅行の数週間前。
秘密基地で王貴を旅行に連れて行き仲間に入れようと提案した日。
百代は5月3日に用事があると言った。こう言ってはなんだが、百代はいつも暇している様な人物だ。そんな人物が用事があるという。
翔一は少し興味があった。

「あぁ、王貴のねーちゃんに会ってたんだ」

「へー。王貴のねーちゃんか……」

翔一は頭の中でその人物を思い出す。

烏賊島へ行く時に確かあった人物。
名前は霧夜エリカ。
王貴と同じ金色の頭髪に、王貴と真逆の蒼色の目だった。
髪型は赤いリボンでポニーテールにしていた。見た目や雰囲気、性格も王貴そっくり。どこが似ているかというと、主に傲慢な所。
次に傲慢な所。最後に傲慢な所だ。

多分、お嬢様笑いとか似合いそうだなー。と、翔一は思いながら、

「何かあったのか？」

「いや、ちょっと聞きたい事があったんだよ」

「ふーん。……？」

隣からクスクスと笑みを漏らすかのような声が聞えてくる。
とはいっても、翔一の隣には百代しか居ないのだから直ぐに誰が笑っているのか分かるのだが。

「何を笑ってんだよ、モモ先輩？」

「連休明けが楽しみだなーって思ってな。いやー、アイツの驚く顔が目に浮かぶ」

そう言って再度、クスクスと笑いだす百代。
アイツとは十中八九王貴の事だろう。と、翔一は思う。

傍若無人を地で行く王貴が驚く事とは何だろうか。翔一は疑問に思うが。
それよりも、

「何か川の流れ速くない？」

「あー、多分それ私のせいだ。新技の試し打ちでどこかの防壁を壊したらしい」

「何だ、ＭＯＭＯ先輩か」

ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　と、翔一と百代が笑い合う。

百代が何かをしでかすのはもう慣れている。
川の流れが速いなんてレベルでは無くなっている事も、もはや川が激流になっていることも、川神百代なら仕方ないと割り切る。そうでなくては、百代と一緒に行動するなんて出来ないからだ。

そう、もう慣れてしまったのだ。
だから、ちょっとやそっとでは驚かない自身がある。

――――今、激流の中に霧夜王貴らしき人物の姿があろうと――――

「うぇ！？」

翔一は奇声を上げながら、今ものすごい速度で流れていったであろう人物を見る。
普段の翔一なら、すっげー！　面白そー！　とか思うかもしれないがその人物で目が点になる。
辛うじて見えたあの金髪、黒いライダースーツジャケット。間違いない。流れていったのは霧夜王貴だ。
今も「ぬわぁぁぁぁぁぁぁぁ……――――――」と、王貴の悲鳴のようなモノがドップラー現象のように声が消えていく。

「モモ先輩。今流れていったの王貴だよな？」

「ん？　そんな訳ないだろ」

そう言うと、百代は流れていった人物を見る。
翔一の目からはもう遥か彼方に流され見えないが、百代の眼なら問題ない。
そして、バッチリと確認できた。
百代の口から一言。

「王貴だった」

「だろ？」

「うん」

「…………」

「…………」

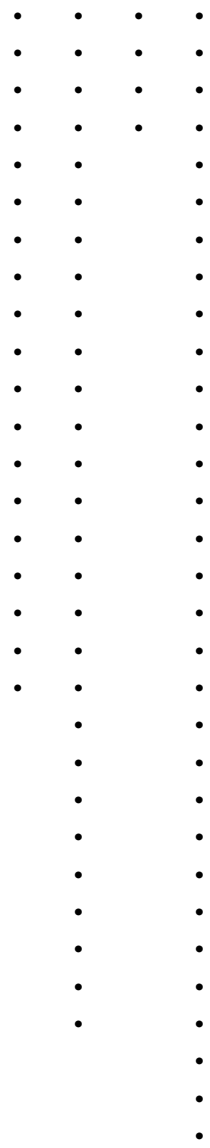
「――――――――――――――――――――、」

「――――――――――――――――――――、」

「回収してくる」

「いってらっしゃい」

そう言うと、百代は文字通り。
消えるかのように、移動した――――――――。



「うわぁ、我ながら凄まじいな……」

下流までやってきて、百代は顔を引きつらせながらそう呟いた。
アレから流された王貴を追って、急いで追ってきたのだが下流まで流されてしまったようだ。
そんな状況を作りだした自分に引いてしまう。

王貴が流された理由も何となく見当がついていた。一般だったら川の流れが激流だったからなのだろうが、王貴の場合は違うと言える。大方うっかり足を滑らして、そのまま流されたのだろう、と百代は考える。

そう言う所は昔から変わらないな、と思いながら、

「おーい、王貴ー！　どこだー！　いたら返事をしろー！」

大きな声を上げながら探すが直ぐに見つける事が出来た。

「おのれぇ……」

不機嫌そうに歩いて来る王貴。
だが、不思議な事に衣服は濡れていない。濡れていないのは衣服だけではなかった。髪も、靴も、体も何もかもが濡れていなかった。

とても流されて人物とは思えない。
濡れていない理由も百代は察しがついていた。

「『水行』で水を制御して濡れないようにしていたのか」

「その通りだ。それよりも、何だあの激流は！　もう少しで駄筋に勝てていたものを！」

青筋を立てながら激怒する王貴。
“濡れないように”水を制御で来たのなら、“流されない様に”水を制御出来ただろう。とか、あの激流の原因は私だ。とか、お前小さいころよりもうっかりスキルパワーアップしてないか。とか言わない。
言ったら最後。王貴が怒りだすのは目に見えているからだ。
良い女というのは黙っているもの。

「フン、それよりも気付いているか？」

王貴が不機嫌そうに山を見つめながら百代に問いかける。
何に気付いているのか。百代には直ぐに分かった。

「あぁ、山の中に誰かいるな。数は３０人程。しかもこっちを見ているときてる」

山の中から感じる視線。
こちらを誰かが監視するような感じだった。しかも、それらは素人ではない。おそらく軍隊。もしくはそう言った裏の職業の者だろう。
百代は山を見ながら、
「王貴、どう思う？」
「さてな。屑の考える事など王（オレ）の知った事ではない」
だが、と。言葉を区切りながら、
「王である王（オレ）を直視するこの愚行。身の程を教えてやる必要があるようだ」
「んー、じゃ私はワン子達を回収してくるか」
その言葉に不思議に思うのは王貴だ。
百代は大の戦闘大好き。そんな百代が、これから戦闘するというの食らいついてこない。
不思議に思った王貴は、怪訝な顔で、
「どういうつもりだ？」

「お前と箱根（ここ）に来る前に戦り合っただろ？　そのせいか戦闘衝動が起きないんだ」

つまりは戦闘意欲がわかないという事。
それまで、百代と王貴との戦闘は凄まじいモノだったというのだろうか。

百代は不敵に笑いながら、

「狩るのはお前の仕事。回収してくるのは私の仕事だ。いいな？」

それに王貴は鼻で笑う様にして答える。
そうして、２人は山の中に入っていった――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

百代が一子と京を見つけた時には、風間ファミリーがそろっていた。
どうやら、山の中が騒がしく思い気になって来たらしい。
もっとも、今騒ぎ暴れているのは百代ではなく王貴なのだが。

クリスと話している2人の人物を見る。
軍服を着ている男性。同じく軍服を着ている長髪で赤い髪色をした眼帯の女性。
それを見て百代は、以前大和がクリスの家系は軍人だと言っていた事を思い出した。恐らくアレがクリスの家族なのだろうと思った。

「あっ、姉さん。お疲れ」

大和が百代に話しかける。
大和が言う「お疲れ」というのは、恐らく先程まで山の中で響いていた爆音の事を言っているのだろう。だが、生憎今回暴れている

のは王貴。百代ではない。

「弟～。今回私は何もしていないぞ？」

「えっ？　んじゃさっきの音は……」

「王貴だ。アイツがさっきまで暴れていたんだろ。あー、そこの軍人２人」

百代がめんどくさそうに軍服を着た２人の人物に話しかける。

「あ、モモ先輩」

クリスが上機嫌にそう呟いた。家族と会話出来て嬉しかったのだろう。顔がニコニコと笑っている。

と、軍服を着た男性が、

「モモ？　……そうか、君が最強と名高い川神百代か」

軍服の男は一つ、頷くようにすると、

「私の名前はフランク・フリードリヒ。見ての通り、クリスの父だ。そしてこっちが私の部下の、」

「マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい」

これからもクリスをよろしく頼む、と。フランクはにこやかに百代に片手を差し出し、握手を求めた。

百代もそれに応じながら、

「速く部下を回収した方がいいぞ？　多分山の中で転がっているから」

「む？　君がやったのかね？」

「いや、私じゃない。それよりも早く回収しろ」

百代はめんどくさそうにそう言った。もう握手をしていない。

フランクは直ぐにマルギッテに確認させる。

マルギッテはトランシーバーらしきものを取り出し確認するが、

「……中将。連絡が取れません」

トランシーバーからはノイズが流れるばかり。

マルギッテの呼びかけに誰も応じなかった。

誰も連絡が取れないようでは意味が無いと、マルギッテはトランシーバーのスイッチを切ろうとするが、

『――――――――！　――――――――』

声が聞えてきた。
それに一同。耳を澄ませて聞くと。

『ハァーッハッハッハッハッハ！！　これが軍人だと？　この程度で気絶するとは。まるで紙のようではないか！』

声高々に、上機嫌に高笑いをしている声が聞えた。
言うまでもない。それは霧夜王貴のモノだった。
王貴は続けて、

『退屈よなぁ……。王（オレ）が手を下すまでもなかったわ』

「何か、スミマセン」

「いや、こちらもマルギッテが襲いかかったと聞いている。お互い、これで遺恨を無しにしよう」

大和が疲れたかのような顔になりながら謝り、フランクは帽子をかぶり直しながらそう言う。

「では、部下を回収するとしよう。ではなクリス。君達も娘を頼む」

そう言うと、フランクとマルギッテは足早に去っていく。
そうして、しばらくするとまた山の中で爆音が鳴り響いた。おそらく王貴とマルギッテが戦っているのだろう。

しばらくすると、王貴が釣りをしていた場所に戻ってきた。
その顔は不機嫌。マルギッテと一戦交えたというのにも関わらず、どこにも傷は無く衣服にも汚れが無い。

翔一は笑いながら、大和は呆れながら、

「お前軍人と喧嘩するとか面白いヤツだな！」

「キャップ笑っている場合じゃないから。下手したらこれ国際問題だぞ？」

「フン、王（オレ）を直視する方が悪い。王に平伏し平伏するのが本来の姿であろう？」

と、王貴はニヤリと不敵に笑う。
直視するだけで軍人と喧嘩をするのだから、王貴もかなりブッ飛んでいた。

「それにしても、あの赤髪の屑め。舐めた真似をしてくれる」

「マルギッテの事か？　何やらかしたんだアイツ？」

「王（オレ）相手に力を抑えながら戦いおった。だが直ぐに、身の程を教えてやったがな」

フフン、と。得意げに胸を張りながら言う王貴。

何度も言うが、王貴は無傷。服にも汚れがまったくない。そんな状態を見るに、王貴の圧勝だったのだろう。

大和は改めて、王貴の力を再認する。

こうして、午前の魚釣りは終わりを告げた――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

空は赤色に染まり、太陽が沈みかけていた。
風間ファミリーが今居るのはバス停。これで駅まで行き、それから列車に乗り帰るようだ。

皆が皆何処か疲れた顔をしているが、満ち足りた表情をしていた。
それほどまでにこの箱根旅行が楽しかったのだろう。

そんな面々に、

「もし、そこの輝きを放つお二方。少しいいですかな？」

1人の老人が話しかける。
テーブルの前に座る老人。目深くローブを着ており、どこか占い師のようだった。老人のテーブルの前にはタロットカードのようなモノがあり、これで占うようだ。

岳人はマッスルポーズを決めながら得意げに、

「ん？　俺様の事か？」

「身の程を知れ駄筋。王（オレ）に決まっているだろう」

「落ち着きなよ！　複数形でしょ。それでお爺さん、誰の事なの？」

卓也が人の良さそうな笑みを浮かべながら言う。

そうして、占い師が指さしたのは翔一と王貴。岳人はがっくりと肩を落とす。

「え？　俺？」

「やはり王（オレ）か。やはり黙してもこの王気（オーラ）だけは抑えきれぬという事か」

自分を指さしながら言う翔一と得意げになりながら言う王貴。

まったくもって正反対な2人だった。

占い師はホッホッホと笑いながら、

「お二人とも素晴らしい人相の持ち主だ。それに魅力がある。どうですかな？　この私めに皆さまの運命を占わせてもらえませんか」

その言葉に王貴はニヤリと笑いながら、

「占い師よ。そのような当たり前の事を言っても王（オレ）の気は引けぬぞ。しかし、その嗜好は良し。何度でも占う事を許そう」

「ちょ、ちょっと！　そんな時間ないから。と言うか、もうバス着ちゃってるから！」

「む？」

卓也の言葉に王貴は視線をずらして、バス停の方を見る。
確かにバスはもう来ていた。
それからしばらくして、

「待ってもらえ」

「はいはい、我がまま言うなー。ほら行くゾー」

「ええい、保護者と道化め！　王（オレ）に触れるとは何事か！」

「スミマセン。そう言う訳で」

王貴の両腕を持つようにして、大和と翔一は無理矢理バスに連れ込む。

そうして、風間ファミリー全員がバスの中に入る。そうして、バスは発進した。

「フム、残念だ」

占い師は、ポツリそう言うと。
タロットカードをシャッフルすると占い始める。本来無断で占う事はしないのだが、そこまで彼らの事が気になったのだろう。
カードを置くとおもむろにめくり始める。

９枚のカードをめくった。
その内１枚引かれていたが、彼らの結束があれば何とかなるだろう。

残り１枚のカード。
これはあの紅眼金髪の少年の運勢を表すカードだった。
あの少年ならどんな困難も何とかするだろうと占い師は思う。占うだけ杞憂だが一応カードをめくる。
だが、結果は占い師の思っている者とは真逆のモノだった。

「こ、これは……！？」

これまで占ってくきて、こんな結果は生まれて初めてだった。
紅眼金髪の少年の運命。それは良いモノではなくとてつもなく悪いモノ。先程の引かれている者よりも悪いモノだった。いや、悪すぎると言ってもいい。

この占いが杞憂に終わればいいが。と、占い師はそう思いながら紅眼金髪の少年が乗っているバスから視線をそらさず見送った――――――――――――。

第１６話　王（オレ）初めての旅行～水難編～（後書き）

最近になってＰＶの読み方が分かった兵隊です。
見てみたらＰＶ何と２０万越え！　いやー、これも皆さんのおかげです！本当にありがとうございました！
何か記念的な事をやりたいと思っているのですが、何が良いですかね？
王貴の過去編はいつかやるとして、そう言う事はまったく思いつかない。何かありましたら遠慮せずによろしくお願いします！

それにしても、この連休明けに王貴を待っているのは何か！！

それではアドバイス、ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします！！

～おまけ～

王貴「貴様何を見ている？」

卓也「学園黙示録っていうアニメだよ。最近始まったんだ」

百代「何だそれ？　ラブコメ？」

卓也「全然違うよ。うーん、簡単に言ってみればゾンビと戦う物語かな？　それにしても怖いよねー。いきなりゾンビが現れるとか。質問、いきなりゾンビが現れたらどうする？」

百代「ぬっ殺す」

王貴「見敵必殺（サーチ&デストロイ）」

卓也「うん、そうだと思ったよ。王貴とモモ先輩なら高笑いしながら殲滅してそうだ」

百代「あぁ、私がお前たちを守ってやるさ」

王貴「そもそもだ。ゾンビとやらが出現する事を王（オレ）が許すものか。現れる前に蹂躙してやる」

百代「まぁ、仮に現れたとして、だ。王貴は油断して噛みつかれて死んでそう」

卓也「あー、確かにね」

王貴「――――――――――ほう？　死にたいようだな貴様ら」

第17話　姉、襲☆来！（前書き）

エリカ「姉より優れている弟は存在しねー！」

王貴「貴様は何を言っておるのだ？」

第17話　姉、襲☆来！

一週間近く合った5月の連休が終わった。
連休明けだからか、川神の街に人々が歩いていた。仲良く談笑しながら歩く学生。時計を見ながら必死に走るサラリーマン。ゲッ、また迷惑メール？　と、携帯を見ながら嫌そうに顔をしかめるＯＬ。ガラの悪い少年少女が道端にたむろう。
それが川神市の連休明けの日常だった。

そんな中、親不孝通りの高級マンションの一室。７６５号室に住んでいる1人の少年が目を覚ます。
霧夜王貴だ。

王貴の部屋に目覚まし時計などといった眠りを妨げるモノは置いていない。
どうやら彼は、部屋の中に差し込む日差しの強さで目を覚ましたようだ。

「……、」

王貴は状態を起こし、片方の指で瞼を擦る。
そして、ボーっと時計を見る。時刻は午前7時。今から学校へ行く用意をすれば余裕で間に合う時刻だ。
そうして、今日は登校日か、とぼんやりと考える王貴。

そう考えると、王貴は再び身を布団に預け瞼を閉じる。
元々、霧夜王貴が学校へ行くメリットは無い。勉学も１０歳の頃には一通り終えているからだ。故に学校に行く必要が無い。行っても学び舎としての機能を為さないから。

だが、王貴はバッと勢いよく体を起こし居間を見る。
その行動は急いで支度して、学校へ行く為の行動ではない。もっと違う、何かだ。

「……、何だこれは？」

眉を顰めながら、ポツリと言葉を漏らす。
王貴の居間は広い。寝室など造らなくても寝れるぐらい広い。そんな居間の中央に１５個ぐらいの積み重なって出来た段ボールが置いてあった。
おかしいと思った。それは昨夜、王貴が寝所に着いた時にはこんなモノはなかったからだ。という事はつまり、王貴が寝ている間にこのダンボールが運ばれたという事になる。

王貴はベッドから起き上がると、そのダンボールの山に近づいた。
そして、近くにあったダンボールを無造作に片手で引っ張り出す。
その拍子にダンボールの山が崩れるが、彼の知った事ではない。自分の物でも無いのだから、気にかける必要なんてないからだ。

王貴は乱暴にダンボールを開ける。

「？」

中身は女物の服だった。

ちなみにこの少年に女装の趣味は無い。という事は、彼以外の荷物になる。

部屋を間違えたか？　と考えるが、その考えを一瞬で切り捨てる。

ここは霧夜王貴の部屋だ。ここに住む時に、キリヤカンパニーの関係者という事で厳重なセキリュティにさせたのを覚えている。一般の者には、ましてや一介の荷物運びには破られない厳重なセキリュティを、だ。

だが、現に荷物が有るという事は、誰かに入られたという事。

この部屋に入られる可能性。彼以上の特権を持っており、彼と同姓の者という可能性しかない。

そう考えると、彼の顔が、不機嫌そうにしてい顔つきから、目を見開き冷や汗らしきものが止めどなく流れ始める。

何かの間違いだ、と。ありえない、と。

少年の細胞一つ一つが訴える。だが、現実を見るとそれは間違いではないしありえる。

このダンボールの中の荷物は、彼がもっとも苦手としている、もはや天敵と言ってもいい人物の荷物だった――――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

王貴は、川神学園へ向かう為、変態の橋を歩いていた。ここで言う所の変態の橋というのは、川神にある多摩大橋のことだ。かなり長く、立派な橋なのだが。川神学園の生徒のせいで変態の橋と名付けられたとてもとても可哀相な橋。それが多摩大橋だ。

制服も夏使用に切り替えてある。

王貴はそれを第二ボタンまで開けて、大きく胸元を開いているかのように制服を着こなしている。

王貴が学校へ行こうとしているのも、ただの気分転換。
あのダンボールの中身の持ち主と会いたくないという訳ではない。
……と思う。

王貴は不機嫌そうに歩く。
その理由が、

「ん～、今週のジャソプは面白ぇな。特にトラブルン。この闇ちゃんとミカンちゃんが何とも……！」

「ジュンは相変わらずロリコン何だねー」

「流石ジュン。そこに痺れる憧れます」

王貴の後ろを歩いている仲良し三人組。葵冬馬、井上準、榊原小雪の三人組のせいだ。
ただ、偶然後ろを歩いているのなら王貴もこんなにイライラしなかっただろう。だが、この三人組はあろうことか王貴の住んでいるマンションの前で待っているかのように立っていて、そのまま着いて来る形で歩いてきているのだ。

どうしてここにいる、と聞くも。

「若に着いてきた」

「ユキに着いてきました」
「オーキと学校に行きたいと思いました！」
と、答えるばかり。
あぁ、煩わしい。王貴はそう考え黙々と歩く。
「そう言えば、今日転校生と新しい先生がやってくるらしいですよ？」
「おいおい、随分と急な話だな。というか、また転校生か」
「えぇ、王貴君。何か知っていますか？」
冬馬がいきなり王貴に話を振る。
王貴の背後にいるので、冬馬の表情が分からないがおそらくいつも通りの胡散くさい笑みで聞いてきているのだろう、と思いながら、
「知らぬ」
「そうですか。新しい先生の方は何でも貴方と縁のある人らしいですよ？」
「……なに？」

王貴は振り向いて冬馬に視線を向け、眉を顰める。冬馬はやはり胡散くさい笑みをしていた。
今の王貴に縁のある者なんてそうはいない。何せこの性格だ。縁を造る方が難しい。
という事はつまり、昔の王貴の知り合いになる。

そうして、王貴の表情が強張る。
心当たりがある。王貴に縁のある人物がやってくる。そして、朝のダンボール。
冷や汗まで出てきた。

「おい、どうした。そんな青い顔して」

準が心配するかのような顔で王貴に聞いて来る。
尋常でない王貴の様子に、これは一大事と思ったらしい。小雪も「大丈夫？」と、涙目になりながら上目遣いで王貴を見る。

あぁ、本当に逃げ場が無い。
王貴は人生初めて、生まれて初めて、“詰んだ”と思った――――――。

王貴は億劫な気持ちだった。

彼の推測が正しければ、新しい先生とやらはあの女だ。

その人物こそ、王貴の部屋にあったダンボールの持ち主。そして、彼の天敵とも言える人物。そもそも、どうしてあの女がここに来るのか。仕事はどうした。王貴の心を占めるのはそんな疑問ばかり。

王貴は不機嫌そうに舌打ちをする。
近くにいた生徒数名がビクッと肩を揺らすが、いつも通り気にしない。
今の王貴は機嫌が悪い。万人が聞いても万人がそう答えるだろう。
そんな王貴に、

「どうしたのだ、元気が無いぞ王貴！」

九鬼英雄が笑いながら。晴れやかなにそう言う。
英雄の服装も夏使用なのか、いつも着ている上着を脱いでいる。
だが、何故か王貴は英雄に違和感を感じた。そして、その違和感の正体が直ぐに分かった。

「貴様、従者はどうした？」

「うむ、今屋上に向かわせている。何やら川神学園を囲んでいる者たちがいるらしいぞ」

英雄がそう言うと、王貴は窓の外を見る。王貴の席は窓際。安易に外の様子が見れた。
確かに、川神学園を囲むような気配を感じた。この気配に王貴は見覚えがある。五月の連休で山の中で戦闘した軍隊のモノだった。
あの時の報復か？　と王貴は思い、愉快気に唇を曲げるが、

「何でも、このクラスに転入してくる者に関係あるらしい。軍隊を率いてくるとは面白き者よ！」

そう言うと、英雄は「フハハハハハハ！！」と笑い始める。

王貴はそれを聞くと、王貴は興味を無くしたようにつまらなそうな表情に変わり、軍隊から興味を無くした。

彼は一度倒した相手に興味が湧かない。あの軍隊は箱根で叩き潰した。完膚なきまでに、言い訳が出来ないほどに。それ故に、今囲んでいる軍隊に王貴は興味が湧かない。軍隊が川神学園を襲ってくるのなら話は別になってくるが、それは無いだろう。

「何の話をしているのじゃ？」

今度は不死川心が話しかけてくる。

心の格好はいつもの着物。夏であろうが、冬であろうが心は着物を着続けるだろう。

英雄が腕を組みながら、

「うむ、王貴が元気なさそうなので我が元気づけようと思ったのだ」

「ほうそうなのか？　では、此方の舞で元気づけてやるのじゃ」

「要らぬ。疾く去ね」

「何じゃとぉ！　此方がせっかく元気づけてやろうとしておるのに！」

「だから、要らぬといっているであろう」

「むきぃぃぃぃぃ！　腹が立つのじゃ！」

「フハハハハハハ！！」

「お前も急に笑うでないわ！」

英雄が急に笑いだし、心がそれをツッコム。高貴なる者と自分を自称している心だが、今の行動と高貴と真逆に位置する事を気付いているのだろうか。恐らく気付いていないだろう。

英雄は嬉しそうな笑顔を浮かべながら、

「ウム、久しぶりにこの3人で会話するのが楽しくてな。我も思わず笑ってしまったわ！」

その言葉に、心は確かにと頷き、王貴は鼻を鳴らし窓の外を見る。

3人は幼い頃からから社交界でいつも顔を合わせていた。言わば、幼馴染のようなものだ。

昔はお互いの家を行ききしていた仲だったのだが、歳を重ねるにつれてそれが無くなっていった。だが、何の因果かこの川神学園に

集まってこうして会話出来ている。

英雄はそれが嬉しいのだろう。

それからしみじみと、

「後は姉上と、エリカ殿がそろえば完璧なのだがな」

「いや、要らぬ」

「うむ、要らぬな」

王貴と心が素早くそう言った。その間1秒もかからない。

この2人にそこまで言わせるとは、霧夜エリカは過去に何をしでかしたのか。

2人の様子に英雄は首を傾げるが、

「オラー、ホームルームを始めるぞ。席に着けー！」

ヒゲこと、宇佐美巨人の登場でその話題に触れる事はなかった――――――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あー、知ってるヤツも居ると思うが、今日は転入生が来てるぞー」

宇佐美巨人はかったるそうに頭を掻きながらそう言った。

そして続けて、

「ちなみに女だ。喜べ男ども」

その一言で2年S組の教室が騒がしく――――――なる訳が無い。2Sの生徒たちは興味が無いといった感じに宇佐美を見る。いや、むしろ速く終われとでも言いたげな目つきだった。無駄にプライドが高いと定評のある2年S組だ。そんな反応なのも仕方ないと思う。

だが、宇佐美としてはもっと反応が欲しかったのだろう。どこか顔が残念そうだ。

「んじゃ入ってこーい」

宇佐美の声に従い、教室の入口の引き戸がガラガラと音を立てて開かれる。

そこから、1人の女性が教室に入ってきた。

その女性に生徒の目は釘づけになる。燃えるような赤色の長髪に左目に着けた眼帯。何より生徒たちの目を引いたのは女性の着ている服だ。それは軍服。軍隊にでも所属しているかのようだった。

その女性に王貴は見覚えがあった。それは箱根の山の中で戦った者だった。

女性は背筋を伸ばし堂々と歩く。生徒たちの視線などお構いなしだ。

そして、教壇に上り、宇佐美の隣まで立つと正面を向き生徒達に視線を向ける。

いや、正確に言えば、霧夜王貴に視線を向ける。

「マルギッテ・エーベルバッハです。よろしくお願いする」

完結的に自己紹介を済ませた。

だが、視線は王貴に向けたまま。その視線には敵意が向けられていた。だが王貴は特に気分を害した様子もなく、楽しそうな笑みを浮かべていた。

そして、頬づえをつきながら口パクで、

（くやしいか、狗？）

その瞬間、マルギッテの片眉がぴくっと一瞬釣り上るが、それ以降何も無い。訓練されているのか、王貴の挑発に全く乗らなかった。

王貴はそれにつまらないと言わんばかりに、そのまま視線をグランドに向ける。

グランドでは体育が行われており、生徒たちが整列していた。その前で、体育教師らしき人物が隣で立っている“ショートヘアーの青い髪をした女性”紹介していた。

アレが冬馬の言っていた新しい先生なのだろうか。

（あの女、中々強いな）

王貴は“ショートヘアーの青い髪をした女性”を見ながらそう思

った。
そして、視線を空へ向ける。空は珍しく曇り。だが、雨が降るというほど曇ってはいなかった。

「――――――――次に副担任を紹介するぞー」

宇佐美の言葉に視線を前へ戻す。
マルギッテが座っている事を考えると、マルギッテの紹介はすんだのだろう。

何となく、王貴は嫌な予感がした。
第六感と言えるのだろうか。今から直ぐにでも教室からでなければ、嫌な事になると彼のカンがそう告げていた。
今すぐにでも教室を出たい。この学園を破壊してでも良いから逃げたい。だがそんな事をしては、いけないと長年培ってきた“戦闘論理”が待ったをかける。

「霧夜センセー。お願いしまーす」

宇佐美がそう言うと、マルギッテが入って来て開けっぱなしだったドアから1人の女性が教室に入って来る。
王貴と同じく金髪で、王貴と同じく偉そうで、王貴と正反対な瞳色の女性。
そして、いかにも女教師といったような服装だった。

「今日から皆さんの副担任になります、霧夜エリカです。どうぞよろしくお願いします」

そして、ニッコリと人の良さそうに微笑む。

その笑顔に、何人かの生徒が顔を赤らめるが、王貴は逆に顔を青くする。

予想外と言えばあまりに予想外で、予想内と言えばあまりに予想内な展開に王貴は思考が真っ白になる。

何人かが『霧夜』の名字に困惑したのか、霧夜って霧夜王貴の親族か？　という感じなヒソヒソ話があっという間に教室中を駆け巡る。

そんな中、不死川心が取り乱すかのように立ち上がりながら、

「な、何故お前がここにおるのじゃ！」

エリカに指さしながら大声で言う。

心もエリカがここに来るとは予想外だったのだろう。えらい取り乱しようだ。

「人に指さすとかどうかと思うわよ？」

「む。コレはすまぬ――――――――じゃなくて！　此方の問いに答えよ！　何故お前がここにおるのじゃ！」

「うっさいわねー。後で説明してあげるから今は黙ってなさい。黙ってないと――――――――あの秘密ばらすわよ？」

エリカがそうサディスティックに笑う様にして言うと、心は瞬時に口を閉じ、素早く席に座る。

そして、ガタガタと震えだした。そんなに嫌な事があったのだろうか。少し目に涙が溜まっている。

それを見て、クラス中の生徒たちが思う。

間違いない、アレは霧夜王貴の関係者だ、と。

心の様子に満足したのか。エリカは視線を心から王貴にずらす。

「元気そうね、王貴」

「あ、姉上もお変わりなく」

顔を引きつらせながら王貴がそう言った。

エリカに対する恐怖で顔を引きつらせているのか。もしくは、敬語らしきものを使っている自分に気持ち悪さを覚えているのか。おそらく後者だろう。

そのまま、顔を引きつらせながら。

「何故姉上がここに？」

「あら？　モモっちに聞いてないの？」

「ももっち？」

「あぁ、百代よ。川神百代。それで、聞いてないの？」

不思議そうにエリカが言う。

はたして、5月3日の2人の対面に何があったのか。とてつもない何かがあったのだろう。何か無かったら愛称なんかで呼ばない。

王貴は5月3日に2人が会っている事なんて知らないのだが。

王貴は不機嫌そうに、

「聞いておらぬ。それで何故姉上がここにいるというのだ？」

「まったく、昔みたいに『お姉さん』って呼んでもいいのに」

と、呆れながら言うが「まぁいいわ」と言葉を区切る。

「――――――弟ともっと親交を深めろってモモっちに怒られたからよ」

「そうか。それでは――――――もう良いのか？」

「ええ、もう良いわ。ありがとう」

エリカがそう言うと、そうか、と王貴は顔を窓の外をずらす。

この姉弟の間にあったやりとりは何だったのか。何が良かったのか。それは何も分からない。

ただ言える事は。この姉弟には他人が見れない“絆”があると言う事だけだ――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれから驚く事に何も無く終わり、放課後になった。
マルギッテは終始王貴に敵意のある視線を送っていたが、何もしなかったのは意外と言っては意外だった。
帰る途中にエリカに王貴は速く帰って来るように言われる。その言葉を察するに、エリカは王貴と一緒に住むようだ。
荷物であるダンボールの山も王貴の居間に積みっぱなしなので手伝わせるのだろう。

王貴は鬱陶しいと言わんばかりに深いため息を吐くと、

「それで、王（オレ）をここに呼んだ理由はなんだ。もしつまらぬ理由であれば殺す」

自分の座っているソファーの向かいに、寝っ転がっている人物を睨みつけながらそう言った。
寝っ転がっている人物――――――――――――風間翔一は物騒な言葉に呑気な声色で、

「別にー。お前と仲良くなりたいから一緒に遊ぼうと思って誘ったんだ」

「よし、殺す」

「何故に！？」

そう言って翔一は、近くにあった週刊少年ジャソプを片手で持ち顔の前らへんに持っていく。どうやら盾のつもりらしい。

彼らがいるのは風間ファミリーの拠点となっている廃ビルの中。彼らが言う所の秘密基地の中だ。

翔一が王貴に何か用があるとか言うので付いて行ったのだが、理由がこれだ。

王貴は直ぐに帰ろうとソファーから腰を浮かせるが、あるモノが目に止まりその考えを改める。

それは本棚だった。その本棚に並べられてある本は王貴が見た事のないモノばかり。

王貴は立ち上がりその本棚に近づくと近くにあった本を適当に手に取る。そしてパラパラとページをめくり始めた。それは自分がいつも見ている字だけの本ではなかった。絵と吹き出しが同時に書かれた本。一般の者がそれを見れば漫画だと直ぐにわかるだろうが、王貴に漫画という存在を知らない。だから分からなかったのだろう。

彼は本から目を離さずに、

「道化、これは一体何だ？」

「何って……、マンガに決まってるだろ？」

盾にしていたジャソプの影からそーっとゆっくり顔を出しながら言う翔一。そして、王貴を見る目線はそんな事も知らないのかよ、と訴えている。

一方王貴も、首を傾げながら「まんが？」と呟いている始末。そうして、王貴は漫画を改めて読み始める。

「ん～、何か違うよなー」

「何がだ？」

王貴は読んでいるマンガから目を逸らさずに言う。

そんなに面白いのだろうか、マンガを黙々と読み始めている。

「いや、お前の雰囲気っつーのかなぁ？　旅行の時はそうでも無かったんだけど、今は何つーかとげとげしいというか……」

「アレは少々はしゃぎ過ぎただけにすぎん。それよりも本当の要件は何だ？　王（オレ）に三度目は無いぞ？」

横目で翔一を見ながらそう言った。
もし、もう一度「別にー。お前と仲良くなりたいから一緒に遊ぼうと思って誘ったんだ」などと言ったら間違いなく八つ裂きにされるだろう。

翔一は子供のような笑顔で、

「実はさー、俺たちの仲間になってほしいんだよ」

「何だと？」

そう言うと王貴は読んでいた本を閉じて、翔一を睨みつける。殺意や殺気といった類が籠ってはいないものの、王貴の紅い瞳には怒気が含んだものだった。
下手な事を言えば、何をされるか分からない。

そんな中でも、翔一は子供のような笑顔を浮かべたまま、

「だーかーらー、お前を仲間に入れたいんだよ！　俺たち風間ファミリーの一員にーーーーーー」

「断る」

翔一の言葉を遮るようにして、王貴は睨みながらそう言った。

そして、続けるように、

「王（オレ）が貴様の軍門に下れだと？　王（オレ）は王であるぞ。貴様の軍門になど死んでも入らんわ」

「軍門とかじゃなくて、対等な仲間になりたいんだよ」

「王（オレ）と対等にだと？」

その言葉が意外だったのか。王貴の表情がキョトンと、鳩が豆鉄砲をくらったかのような表情時なる。

そして、次の瞬間。

「ク――――――ハハ、ハハハハハハハハハハハ！！」

大声で笑い出した。

淫らに、限りなく下品に、ありとあらゆるモノを足蹴にするかのように何の戸惑いもない笑み。人しきりに笑った後。

「王（オレ）と対等だと？　何だその冗談は、王（オレ）を笑い死にさせるつもりか？」

「冗談じゃねぇよ！　俺は本気で言ってんだ！」

「何と、よもや本気だったとは。流石は道化、王（オレ）を笑わせるのが上

手いな」

ククッと、喉を鳴らす様にして笑う。
それはとても、嫌な笑みだった。人が生きている実感すら拭い去るかのような笑みのまま、

「王（オレ）と並び立とうなど、身の程知らずにも程がある。王とは万物全ての頂点に君臨する者。故に、王（オレ）と並び立てる者など後にも先にもおらぬ。あまりふざけた事を言うなよ道化。次は、ない」

そう口元を歪めながら言う王貴。だが、目は笑っていない。両眼にある紅眼は怪しく光、先ほどとは違い殺意が籠っていた。

第一、王貴は翔一が気に入らなかった。
自分と真逆の考えの男。
仲間などいらぬ、と考える王貴。仲間は大事、と考える翔一。自分にはどうやっても価値を見出せないガラクタをガラクタと言って切り捨てる王貴。どうにかして価値を見出してそれで最大限楽しもうとする翔一。

自分の瞳に無意味で無価値なモノが映っても、この男からの光景ではそれを意味があり価値あるものに映るのだろう。

あぁ、本当に気に入らない。と、王貴は思う。
自分にはどうしても感じてしまうつまらなこの日常。この男からしてみれば、痛快で心底面白いのだろう。

それが気に入らない。自分と、霧夜王貴とは正反対の価値観を見出してしまう風間翔一が心底気に入らない。

そう思うと、王貴は手元に持っている本を本棚に戻し、秘密基地を出ようと歩く。

もはやここにいる意味は、無い。

そうして、部屋の出口であるドアの前まで歩き、ドアノブを掴むと、

「それでも、俺は諦めないぜ」

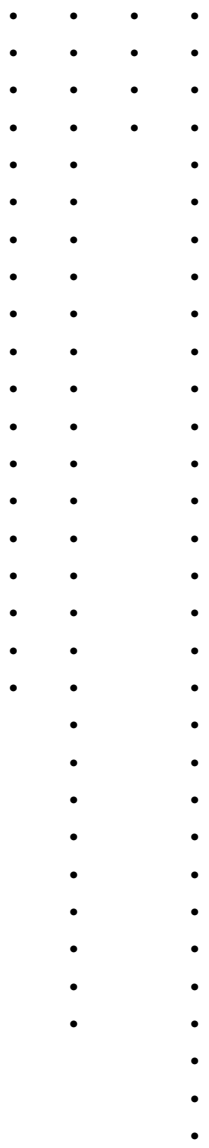
と、後ろから翔一の声が聞える。

「絶対お前を俺たちの仲間にしてやる。決めたんだ」

その声は真剣なモノだった。どうあっても折れない信念を孕んだ声が聞えた。

あぁ、本当にこの男が気に入らない。

そう思いながらも、王貴は部屋から出ていった――――――――――――。



その夜島津寮ではマルギッテの歓迎会が開かれていた。
クリスの知り合いとあってか、歓迎会を開いているらしい。
島津寮の食卓には鍋があった。

それを島津寮の面々とマルギッテが囲んでいた。
ちなみに、師岡卓也と島津岳人はここにいない。卓也は友達の大串スグルと世界のヨンパチこと、福本育郎と共に遊んでいる。岳人は用事があるらしいが、大方些細な用事なのだろう。

鍋もあらかた食い終わったのだろう。鍋の中にある具材がほとんど無くなっている。
宴もたけなわというヤツなのだろう。

そんな中、

「ふー。鍋美味かったなー」

風間翔一が満足そうに声を上げる。
それに同意するようにして大和が満足そうに、

「確かに美味かったなー。確か北陸の海の幸鍋だっけ？」

「はい、そうですよ」

「どうだーい。美味すぎて１ＵＰするとこだっただろ？　……馬だけに」

故郷である北陸の海の幸鍋が美味いと言ってもらえて嬉しかったのか、由紀江が嬉しそうに顔を鉾ばらせながら言い、松風が軽い口を叩く。松風の発言にみんな当然のようにスルー。

そんなに鍋が美味かったのだろうか。

あのツンデレに定評のある、皆のゲンさんこと源忠勝もどこか満足そうだった。

京も無表情ではあるが、美味かったのだろう。どこか表情が柔らかい。

「美味かったなー、マルさん」

と、隣にいるマルギッテにクリスが笑顔で言う。

だが、マルギッテは何か考え事をしているようで、返事が無い。

「マルさん……？」

「何でしょうお嬢様」

「いや、何か考え事かマルさん。自分でよければ相談に乗るぞ？」

そのクリスの言葉に「お嬢様……」と、感動するようにして目を潤ませるマルギッテ。正に親バカならぬ姉バカ状態だ。
だが人が見ている手前、その状態も直ぐに解けてしまう。

マルギッテは一つ咳払いをして、

「お嬢様、ここに霧夜王貴はいないのでしょうか」

「王貴か？　うん、いないぞ？」

「そうですか。連絡先は？」

「生憎知らないんだ。大和はどうだ？　そう言うの詳しいだろ？」

「俺も知らない。そう言えば、旅行でアイツだけ連絡先交換しなかったなぁ……」

そうか、とクリスは言葉を区切り、

「王貴に用でもあるのか？」

「はい。先の戦いの借りを返したいと思いまして」

マルギッテはそう言うと、獰猛な顔つきに変わる。
先の戦いの借りというのは、この前の連休の事を言っているのだろう。箱根の山の中での戦い。勝敗は王貴が勝ったと大和は聞いている。
大和は時計を見る。
夜の８時を回っていた。確かに、この時間帯なら、多分ではあるが王貴は起きているだろうと思う。

クリスは真剣な目つきで頷くと、

「リベンジか。だが、王貴の連絡先は誰も知らない。マルさん、ここは違う日に――――――――」

「――――――――それなら私に任せろ！！」

クリスの言葉を遮るようにして、１人女性の声が聞えた。
その人物は１人で。いや、２人で島津寮に上がり込み、寮の食堂に現れる。
そして、かっこよくポーズを決めながら、

「「川神シスターズ、参☆上！」」

背景が爆発するかのような決めポーズをとる２人の女性――――
――川神百代と川神一子。
それはどこかの戦隊ヒーローのようだった。

そのトンデモ姉妹に大和は口元を引くつかせながら、

「どうしてここに……？」

「美味しそうな匂いがしたので川神院らへんからマッハで来ました。それよりも、弟〜。私達を除け者にするとは覚悟できてるんだろうな〜？」

「そうねー。こんな美味しそうな鍋を食べてるなんてー」

「食材が足りなかったんだよ！　それよりも姉さん。王貴の連絡先を知ってるの？」

「話を逸らしたか、まぁいい。エリーに言えば一発だろう。ちょっと待ってろ」

大和が「エリーって誰だ？」と百代に問いかけるが、当人の百代はそれを無視するように携帯電話を取り出し、エリーなる者に電話をかけ始める。

それから数秒。

「ＯＫだってさ。場所は多摩川の土手だそうだ」

百代が不敵な笑顔とともに、マルギッテにそう言った。

マルギッテは嬉しそうに笑いながら、

「――――――――協力感謝する」

獰猛な顔つきになる。

今夜また、マルギッテ・エーベルバッハと霧夜王貴が激突する――

――――――――――――――――――。

第17話　姉、襲☆来！（後書き）

どうも、兵隊です。

この作中に出てきた“ショートヘアーの青髪の女性”つよきすファンならわかると思ってしまう今日この頃。

次はマルさんとの戦闘シーンです。
楽しんでいただければ幸いです。

それではご意見ご感想よろしくおねがいしたします！！

第１８話　螺旋乖離す大嵐の風（前書き）

『螺旋乖離す大嵐の風』の『大嵐』は『たいらん』と読んで下さい。

第１８話　螺旋乖離す大嵐の風

多摩川の土手に２人は対峙していた。
軍服を身にまとったマルギッテ。私服を着ている王貴。
そして、多摩川の土手の上方から２人を見守るようにして立っている島津岳人と師岡卓也以外の風間ファミリーの面々と源忠勝。

「それで？　屑が王（オレ）に何の用だ？」

「……」

霧夜王貴とマルギッテ・エーベルバッハが多摩川の土手で対峙するかのようにして立っている。
片や愉快気に笑みを浮かべ、片や敵意丸出しの視線。まるで正反対な２人が対峙していた。

その距離数十メートル。
この程度の距離なら瞬時に距離を詰められるであろう距離でも、王貴の余裕の表情は崩れない。何があろうと絶対に負けないという自信があるからだ。

王貴は愉快気に笑みを浮かべたまま、

「もしや、あの時の再戦か？　そんなつまらん些事に王（オレ）を呼んだと？」

マルギッテは答えない。
どうやら王貴の言う通り、再戦がマルギッテの望みらしい。
王貴を見るマルギッテの目がそう語っている。

王貴はそれに、失望したと言わんばかりにため息を吐き、

「やれやれ。本当にそのような茶番の為だけに呼んだとは……。屑め、王（オレ）にここまで足を運ばせた非礼をどう詫びる？」

王貴の口元は歪み、紅い瞳からは殺意が滲みだす。
あの口元の笑みは、目の前の者を倒すと決めた時のモノだ。

そうして、少年は片腕を無造作に上げる。
それと同時に少年の背後に出現する無数の武具。その剣先が全てマルギッテに向けられていた。

だが、マルギッテはそれに臆せず、左目の眼帯に左手を持っていき、

「今回は私も全力でいきましょう」

眼帯を――――、

「だから、貴方も全力で来なさい」

取った――――。

それと同時に、2人が対峙していた空間が変わる。

ただ、マルギッテの左目にしていた眼帯を取っただけ。

ただそれだけで空間が変わった。いや、空間だけではない。風が死に、音が死んだ。

「……」

王貴も何かを感じ取ったのか。

目にまで見えていた余裕の表情が消えた。何かを警戒するような、そんな表情に変わる。

そうして、不敵な笑みを浮かべながら、

「なるほど、ただ眼帯を取っただけではないと言う事――――――――!?」

王貴がいきなり後ろの大きく飛ぶようにして後退した。

そして、王貴が立っていた場所にはマルギッテが右拳を突き出し

ていた。マルギッテの両手にはいつの間にか出していたトンファーが握られている。

王貴は舌打ちをし、更に大きく後退をする。『障壁』を張らずに後退する。

今のマルギッテに『障壁』は無意味だと判断したからだ。もし『障壁』を張っていたのなら、最初の一撃で『障壁』は破られ王貴は殴り飛ばされていたからだ。

今のマルギッテならそれぐらい可能としていた。

王貴は後方へ飛ぶ。それと同時に武具の投擲をするが、マルギッテはその悉くをトンファーで弾き、文字通り一瞬で王貴との距離を詰め寄り、両手に持っているトンファーで襲いかかる。

その攻撃は、正に猛攻。

高速のコンビネーション。

「Ｈａｓｅｎ――――――、」

人間業とは思えないそれが、

「Ｊａｇｔ――――――――！！」

王貴に襲いかかった――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「速いね……」

「それに強い。まるで竜巻みたいです……」

それを見ていた、京と由紀江がそう感想を漏らした。

マルギッテの今の戦い方。それは竜巻。ありとあらゆるものを巻き込みながら戦う。正に暴風のような存在。
マルギッテが走り出せば地面は抉れ、トンファーを振えば風が巻き起こる。

「あの２Ｓの野郎が押されてんのか……」

忠勝がマルギッテと王貴の戦いから目を逸らさずにそう言う。

王貴の強さはかつて行った、翔一との決闘で分かっていた。
翔一を圧倒させた力がある霧夜王貴。その霧夜王貴をマルギッテは圧倒している。
現に、王貴はマルギッテの攻撃に手も足も出ない。ただ、後退をしながら武具を投擲しているのみである。
誰もがそう思うだろう。だが、川神百代だけが違った。

「アイツ、また遊んでるな……」

一同が「えっ？」と、百代を見ると直ぐに王貴とマルギッテの戦闘に目を移す。
どう見ても、王貴がマルギッテに押され、何とか攻撃をかわしているようにしか見えない。
そう思ったが、

「笑ってる……」

「笑ってるわねー」

「笑っていますね……」

「笑ってるな……」

武士娘である京、一子、由紀江、クリスがそう言った。

彼女たちより数段劣る武術に男連中からは確認できない。

だが、彼女たちは間違いなく確認した。王貴は愉快そうに笑っていた事を。苦戦していたのなら、眉間にしわを寄せ、苦しそうに奥歯を噛みしめている事だろう。

だが、王貴にあったのはそんなモノではない。口元を歪ませるように笑い。武具を投擲している。

それにどうやって苦戦していると見れるだろうか。

クリスはその戦いを面白くない様に見る。

それもその筈。クリスは正々堂々と言った戦いを好む。他人を馬鹿にするような戦いは彼女が一番嫌いとしている戦い方だ。今の王貴の戦い方は正にそれ。他人を馬鹿にするような戦い方。

クリスの心情を知ってか、百代はクリスに視線を送りながら、

「クリは面白くなさそうだな？」

「当たり前だ！　マルさんは全力で戦っていると言うのに、あの男は人を馬鹿にするように戦っている！」

「でもなー、アイツが本気で戦っていたら――――――――――マルギッテは死んでるぞ？」

「え？」

その言葉にクリスは百代を見る。

だが、百代はそれ以上口を開かず、マルギッテと王貴の戦闘に視線を送っていた―――――――――。

…………………………

‥‥

………………………

………………

人間である限り、１人で戦争には勝てない。マルギッテはそう思っていた。

それは当然だろう。１人で戦争に勝つと言う事は、１対多という事。つまり１人で千人以上を相手にし、尚且つそれに勝利すると言う事だ。マルギッテは軍人。それが何より難しいかよく分かっている。

１人では戦争に勝てない。故に、戦争は数の勝負という事になる。

マルギッテは自分の力に絶対の自信を持っている。ドイツでは神童とも言われてきた。ヨーロッパでは眼帯を取ってしまえば、１対１で自分に勝てる者はいないだろう。

そんな自分でも、神童とも言われた自分でも戦争には、数の暴力には勝てない。

そう思っていた。

霧夜王貴と出会うまでは――――――――――。

５月の連休での事だった。

自分が敬愛する中将の娘であるクリスティアーネ・フリードリヒを見守ると言う大切な任務に付いていた。クリスの父親であるフランク・フリードリヒと総勢３０人程の隊を率いてクリスを見守っていた。

その３０人はただの精兵ではない。フランクが選んだ選りすぐりの精兵だ。簡単にはやられないし、そんな鍛え方もしていないとマルギッテは思う。

――――――――――だが、自分が鍛えた精兵が、１人の少年によって悉く蹂躙される。

紅眼金髪の少年。顔は整っており、黒色のライダースーツジャケットを着こなす少年。

マルギッテとフランクが来た時には全て終わった後だった。

３０人の精兵は地面に転がり、その中央で少年は威風堂々と立っている。

精兵たちは息をしており、生きている事が分かる。

そうして、少年はゆっくりとマルギッテ達に振り向いた。

少年は不敵に笑い、

「ほう、まだ残っていたか」

その一言。

マルギッテに何かが駆け巡った。軍人としての本能がそう告げているのだろうか。

この少年こそが、1人で戦争に勝てる程の武力を有している。そう、例えるなら自分が戦士としての強さなら、この少年は戦争そのもの。比べるカテゴリーが違う。

そんな少年と対峙してもマルギッテに恐れは無い。むしろ、歓喜していた。

1人で多人数と渡り合える人物の出現に、少年の強さに、マルギッテは歓喜する。この少年に勝てば、自分はもっと高みへ行けると今確信したから。

そうして、マルギッテは少年に挑んだ。

結果惨敗。手も足も出なかった。

次戦う時は全力で行くと、マルギッテは誓った――――――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

マルギッテと王貴の戦い。
傍から見れば、マルギッテが圧倒的に押していた。
マルギッテの猛攻に王貴は後退するばかり。素人から見ればそう思うだろう。
だが、そんな中でも、王貴は楽しげだった。
マルギッテの攻撃は生半可なものではない。当たれば王貴の体は容易く吹き飛び、下手したらそこでこの戦闘は終わるだろう。それでも、王貴は楽しげに笑っていた。

そんな中、王貴は後ろに飛びながら、

「なるほど。――――――――貴様は強い」

そう感想を漏らす。

だが、マルギッテには関係ない。

ただ目の前の敵を倒すのみである。

前回は負けたが、今回は違う。今回は全力中の全力。眼帯まで外して挑んでいる。

（貴方に感謝しよう、霧夜王貴）

――――――踏み込む。

（貴方を倒して私はさらに高みへと登る――――――！）

胸元まで下げた右手に持つトンファーを、王貴の横腹、肝臓めがけて撃ち抜いた。

この一撃に王貴は逃げられない。

王貴はまるでボールのように吹き飛んで行った。数十メートルは吹き飛んでいった。

手応えはある。なければ、あんなに吹っ飛ばないだろう。

今の一撃、誰が喰らっても再起不能になるだろうそんな一撃でも、

「――――――フン、ただの屑ではないと言う事か」

霧夜王貴は立っていた。

マルギッテは目を見開く。

確かに殴った感触があった。踏み込み、全力の力で殴った。なのにも関わらずどうして立っているのか。

ふと自分が殴った場所に視線を送る。

そこには放射状にひびが入っている盾があった。それも3枚ぐらい重なっている。

なるほど。あれで防いだようだ。そう認識すると、マルギッテは構える。今度こそ、容赦なくトドメを指す為に。

王貴はマルギッテを見据えたまま、

「だが、所詮は雑種だ。王（オレ）の敵ではないと言う事を教えてやろう」

少年がそう言うと、風が少年の佇む足元より吹き上がった。炎にも似た黄金の風が一陣。金の髪を揺らぐ。そうして、次の瞬間。煌びやかな黄金の鎧が少年の身に、一分の隙もなく纏われていた。

それは、黄金の鎧だった。月光に輝く、光が零れ落ちるような輝きを放つ黄金の鎧。腰を覆った緋色の布が風に揺らぐ。

これはただの氣で具現させた鎧ではない。少年の操る『五行』の

中の『金行』で造られたものだ。ちょっとの攻撃ではビクともしない最堅の鎧。正に、絶対防御。

あの霧夜王貴を武装させた。
今のマルギッテはそこまで脅威だと言う事。

王貴は不敵な笑みを浮かべたまま、

「王（オレ）と貴様の間にある超えられぬ壁というものを見せてやる。かかって来るがいい」

右手に銀色に輝く長剣を片手にそう告げる王貴。
苦手とも言える接近戦をするつもりらしい。

マルギッテもそれに応じ、暴風のような速度で王貴との距離を詰める。
その距離は直ぐに詰められた。

王貴はそのまま、マルギッテに長剣を縦に振う。
見え見えの軌道。
そんなものマルギッテに当たり道理もない。

マルギッテは重心を横にずらし、それをかわす。
だが、王貴の左手にはまた新しい紅い長槍が握られていた。

王貴はそれをマルギッテの腹部目掛けて突く。
マルギッテはそれを右に重心をずらしかわす。
そうして、踏み込み王貴のわき腹にニーで攻撃――――、
「――――――ガッ！？」
出来ない。
マルギッテは真横に吹き飛び、地面に転がる。５０メートルは吹き飛ばされた。
何が起きたのだろうか。
確かに、マルギッテは長槍をかわした。それは絶対とも言える。
ならば、何故吹き飛んだのか。
それは簡単。
長槍の剣先がマルギッテに向かって“曲がった”からだ。
そんな攻撃あり得ない――――。
「ありえない――――――。と言った顔をしているな？」
黄金の鎧に身を包まれた少年が愉快気にそう言った。
少年は続けて、
「ありえぬ話ではあるまい。王（オレ）は武具が造れる。“精製”できるの

だからそれを“変化”出来るのは当然であろう？」

そう言って、王貴は紅い長槍を捨て、一振りの刀を造り出す。
王貴が構えると、その刀の刃が一気に１００メートル以上の長さに伸びる。

そして、

「そらっ！」

マルギッテ目掛けて水平に斬る。
マルギッテはそれを地面に身を預ける様にして、何とかかわす。

ガードすればいいと考えるが、マルギッテはクリスから王貴が『五行』の力を使い、武器に力を付属させれる事を知っている。
そんな能力を有する者の攻撃を受けるなど考えられない。受けてしまっては何が起こるか分からないからだ。
加えて、自身の造り出した武具の形状を変化させる能力。とてつもなく、厄介極まりない能力だった。

どうする、と。思考する彼女だが、

「さて、随分と距離が開いてしまったな？」

王貴はそんな思考する事ですら許さないと言わんばかりに、少年の背後に武具が次々と展開されていく。
その全ての武具の剣先がマルギッテに向けられる。

これこそが、霧夜王貴の本来の戦い方。
先程、マルギッテを接近戦で退けてみせたものの、王貴は本来接近戦が出来る部類ではない。
王貴の背後に展開された無数の武具が弾丸となって、目の前にいる敵を蹂躙する。

これこそが、霧夜王貴の本来の戦い方であり、王貴が最凶であらんとする由縁だ。

王貴不敵に笑いながら、

「では、失せるがいい雑種――――――――――」

号令一下。
高速で放たれる無数の武具。
それぞれが必殺の威力を誇るそれを、

「ハァァァァァァッ！！」

弾く。

避ける余裕などない。トンファーを自在に操り弾く。

正面には槍。
左翼からは剣。
右翼からは大鎌。
下方、及び頭上からは同時に三枚刃。
弧を描いて後方から奇襲する戦斧。
そして、マルギッテの体を上回るほどの大きな巨大な鉄槌。

それら全てを弾く弾く弾く弾く弾く――――――！

だが、それも数分と持たなかった。

「グッ！」

次々とマルギッテに着弾する武具の魔弾の雨。
そして、彼女はたまらず後方に、

「グァァッ！！」

吹き飛んだ。
マルギッテの体が勢いよく後方へと吹き飛ばされた。ゴロゴロと転がるマルギッテは、何メートルも後方に吹き飛ばされてようやく止まる。

マルギッテの体に走るのは尋常では無いほどの激痛。
立ってられるモノではないほど激痛だった。

それでも、よろめきながらもマルギッテは立つ。
フラフラと体をよろめかせながも、マルギッテは二つの足で力強く立ち上がる。

「ほう……」

王貴にとって、立ち上がってきたのが予想外だったのか、思わず声を漏らした。
そして、背後に一艇の銀色に輝く長槍展開しながら、

「よもや立ち上がるとはな、立っているの苦しいだろうに。どれ、王(オレ)が楽にしてやるとしようか」

そう言って、片手をマルギッテに指さす。
それと同時に、銀の長槍がマルギッテに向かって放たれた。

今のマルギッテに銀の長槍一艇ですら防げる気力が無い。
何とかアレをかわそうと後方に下がろうとするが、

「これは――――――――――!?」

マルギッテは驚き、目を見開く。
マルギッテを四方から囲う様にして出来た鎖が、マルギッテの行く手を遮る。
退路が、ない。
マルギッテは自分の目の前に、クロスするようにトンファーでガードを固めるも、

「ぐはっ！」

そのガードをぶち破って、銀の長槍がマルギッテに襲いかかった。
マルギッテはそのまま吹き飛び、胸を打つような衝撃に、肺の中から全ての酸素を吐き出される。
世界最硬の木を素材に、最高の職人が造り出したトンファーも砕かれた。
この戦い。誰の目から見てもマルギッテの負けだった。

王貴はマルギッテを見ながら、

「まだ、立ち上がるか。呆れた胆力よ」

呆れたような口調でそう言葉を漏らす。

そう、マルギッテはまだ立ちあがっていた。
誰の目から見ても、戦いが続行できる怪我ではない。

それでも、マルギッテは立っていた。
両目も諦めておらず、不屈の闘志が燃えている。

「フン……」

王貴はそれを見て、今まで見せていた楽しげな表情が消える。
そして、王貴の表情が戦士の顔つきにかわる。これまで川神へ来てからこんな顔つきになったのは初めてだろう。

「王（オレ）の必殺の攻撃を受けてもなお、まだ立ち上がるか。――――――貴様名は何と言ったか？」

「マルギッテ。マルギッテ・エーベルバッハ」

「その気概に免じ貴様を認めよう、マルギッテ・エーベルバッハ。貴様のような戦士にこそ、我が剣の初陣に相応しい」

そうして、王貴の背後から金色の柄が現れる。
それを王貴は引き放つ。

王貴は王（オレ）の剣と言ったが、それを剣と言ってもいいのだろうか？
柄も鍔も金色。刃渡りはおおよそ長剣程度。
だが、肝心の刀身に当たる部分が、刃物として形状を逸脱しすぎている。三段階に連なって出来ている円柱。その色は黒色。そして、赤色の線のようなモノが入っている。その切っ先には螺旋状に捻く

れた鈍い刃。
どう見ても人を斬るという概念がない剣。

この円柱の剣こそ、王貴の最強の一振りに他ならない。

だがこれだけは言える。あの剣は不味いと。それが王貴以外のこの場にいる人間の感想だった。
武に疎い大和でも、世界最強の百代でもそう感じた。あの剣は不味いと。

自身の造り出した“円柱の剣”を構えながら、王貴は続ける。

「この剣こそ王（オレ）の造り出す最強の剣。螺旋剣よ！」

螺旋とは基本的には繰り返しの構造でありながら、同じ位置をたどらず、例えば無限に上昇する構造を歴史や生命になぞらえることも表す。
王貴がこの剣を“螺旋剣”と名付けたのはそれが理由だ。
この剣があれば、その“螺旋”も打ち壊すという意味も込めてつけられた名前。それが“螺旋剣”。

「さぁ、出番だ螺旋剣（エンリル）！！　お前に相応しき相手が今ここに現れた！　我らの力を知らしめてやろうではないか！」

螺旋剣、エンリルが吼える。
王貴の声に従い、３段階に連なった円柱はひき臼のようにゆっくりと、交互に回転する。
一回転ごとに疾く、なお疾く。
音を立てて回転するエンリル。それは風を巻き込み、暴風を造り出していた。
回転するごとに激しさを増す暴風。そして、エンリルから漏れ出す膨大な気力。

王貴はエンリルを構えながら一言、

「加減はする。が、一切の容赦はせぬ。王（オレ）の一撃、見事耐えきって見せよマルギッテ！！」

エンリルから、赤い光が漏れ始める。

「螺旋乖離す大嵐の風（エレ・シュキガル）――――――――――――！！」

紅の閃光がマルギッテに放たれる。
マルギッテは己に流れる気を全て防御に回すが、それは無意味。

王貴が造り出した“螺旋剣（エンリル）”それは『五行』の力で造られた剣。
反発し合って出来た属性は『無』。それは全てを破壊する属性に

他ならない。『エンリル』の一撃を防ぐには相殺するか、それ以上の出力を用いてぶつけないければならない。

防御を選んだマルギッテは、紅い閃光につつまれ、そのまま吹き飛ばされた。

レーザーでも撃たれたかのように地面は抉られている。

その中、マルギッテは仰向けで倒れていた。

だが、マルギッテはまだ立ち上がろうとしていた。誰がどう見てもズタボロ。満身創痍なのにもかかわらずだ。

そんなマルギッテに王貴は傲岸に踵を鳴らしながら近づく。そして、倒れているマルギッテを見下ろしながら、

「此度の戦い、中々に楽しめた。故にまた幾度なりとも挑んでくるが良いぞ。マルギッテ・エーベルバッハ。貴様の挑戦ならば、王（オレ）はいつでも受けよう」

全身にくまなく武具の雨に穿たれながらも立ち上がり、ついに王貴の持ちうる最強の剣まで抜かせた好敵手に、霧夜王貴は最大限の称賛を送る。それは偽らざる称賛の念だった。

マルギッテはそれを口元に血をたらしながらも、

「フン、良いでしょう。精々首を洗って待っていなさい……」

不敵に笑うと、その場で意識を失った。

その後、マルギッテは川神院へ搬送され（全治一カ月）。
興奮した百代が王貴に喧嘩を売り、そのまま戦闘になった。
止めようと介入したルーと鉄心は大怪我を覆い（王貴と百代は無傷）。
戦う時は一日一時間といった決まりが設けられる――――――――――――――――――――――。

第１８話　螺旋乖離す大嵐の風（後書き）

どうも、みなさんおはこんばんちは。兵隊です。

この小説２度目の戦闘シーン。

美味く表現が出来ていれば良いのですが……。不安に思う今日この頃。

エンリルだとかエレ・シュキガルの由来は『ＰＶ２０万記念　王貴の一問一答』に書かせていただきましたので、興味ある方は読んでいただければいいなーと思っております。

では、ご意見ご感想などがありましたらよろしくお願いします！！

～ＮＧシーン～

マル「トンファーキック！！」

貧弱王「それはトンファー使ってないぐはぁぁぁぁぁぁ！（蹴られる）」

ＰＶ２０万記念　王貴の一問一答（前書き）

なに？　このカオス？

ＰＶ２０万記念　王貴の一問一答

準「つー訳で始まりました『ＰＶ２０万記念　王貴の一問一答』。司会はハゲこと『子供は人類の宝。大人になったら肉の塊！』井上準です。それと――――、」

王貴「……」

準「隣でマンガを読んでいる『世界王』こと霧夜王貴でお送りしたいと思いまーす。つか、何で俺が司会何なんだろうね？」

王貴「さぁな。貴様は原作からそんなモノだろうよ」

準「苦労人って言いたいのかな！？　……まぁいいや。このコーナーは感想に書かれた質問、及びメールボックスに届いた質問にジャンジャン答えていこうって感じのコーナーでっす。まぁ、ぶっちゃけると本編で答えれないからここで答えていこうって感じだな」

王貴「ちゃちゃっと終らせるぞ。王（オレ）は速くマンガの続きが見たい」

準「へいへい。んじゃ早速行くか。えーと、ふと思ったのが、白玉蓮華さんの『王貴って氣で釣竿や一式って作れないのかな？』って質問だ。さぁ先生お願いします」

王貴「物なら何でも造れる。電化製品の類も造れるが、動かぬ」

準「ようするに、張りぼてみたいな感じか？」

王貴「そのようなモノだ。その電化製品の設計図があれば完璧に造れるがな」

準「ふーん、便利な能力だなーオイ。そう言えば、お前のねーちゃんも薔薇とか出しちゃうよな？　アレもそうなのか？」

王貴「知らぬ」

準「はいはい、そうですかー。んじゃ、次はあおいさんの質問『王貴は相性で、まゆっちには負けるけど単純な強さなら、王貴のほうが強い？　具体的な強いさが知りたい』だってよ。どうなんだよ？　黛に負けんの？」

王貴「相性の悪いというだけだ。本気で言ったのならば負けぬ」

準「あー、お前のあの不思議剣じゃ気が斬れても意味が無いわな。ところで“エンリル”って意味があるのか？」

王貴「うむ。シュメール語で『エンリル』、アッカド語『エッリル』。中空を司る偉大な神というらしい。ちなみに『エア』は大地を司る偉大な神らしい。詳しい事はわからん。自分で調べるがいい」

準「何と言う王様（オレ）。んじゃ、『エレ？シュキガル』も？」

王貴「正確にいえば、エレシュキガルだ。バビロニア神話では闇の女神なのらしい。詳しい事は知らん」

準「ふーん。んで、強さは？」

王貴「大体このような感じだ」

王貴（通常時）＝百代＞【人間としての壁】＞由紀江＞王貴（慢心時）＞クリス＞京＞一子＞翔一＝岳人＞大和＞卓也

準「ん？　ちょっと待て。慢心時でこんだけ強いのにどうして風間に負けたんだよお前」

王貴「主人公補正であろう。最近のは凄まじいらしいからな。コクピット付近が爆発しても余裕で生存と聞いている」

準「それどこのキラさんだよ。まぁ、利根川さんもいってたからなぁ。奴隷は何も持たぬが故に皇帝を倒すとか何とか。つか、主人公であるお前に補正かかってないとか結構鬼仕様だな」

王貴「ほら、次だ。さっさと終わらるぞ」

準「はいはい、えーとこれは要望か？　ユーキさんの要望『できれば、時々好感度表を載せてもらいたいです』だってさ。これは俺でも答えれるな。今はこんな感じだ」

川神百代	９０％
川神一子	５０％
椎名　京	－１５０％
クリス	－３０％
黛由紀江	３０％

榊原小雪　８５％
不死川心　８０％
忍足あずみ　－５０％
マルギッテ　５０％

霧夜エリカ　１８０％

準「つか、椎名に至っては前よりも下がっねコレ？　お前のねーちゃんに至っては上限振りきれてるし。これ、マイナスもプラスも１００％までだから！　ルール守れよ！！」

王貴「良いではないか」

準「良くねェよ！　つか、コレお前に対しての好感度表なのにどうして、我関せずなの！？　おにーさん分からない！」

王貴「ハーレム？オールオーケ。何の問題もない。一夫多妻性こそ王様の本懐よ！！」

準「身も蓋もねー！　あぁー、疲れた。何か疲れた。んじゃ、白玉蓮華さんのしつもーん『エリカはどれぐらいの強さなの？』だってさ」

王貴「大体これぐらいだろうな」

王貴（通常時）＝百代＞【人間としての壁】＞由紀江＞王貴（慢心時）＞エリカ＞クリス＞京＞一子＞翔一＝岳人＞大和＞卓也

準「結構強いのな？　そして、男連中の低さと言ったら……」

王貴「原作でもそんな感じだったであろう」

準「まぁな、んじゃ最後の質問か？　作者のメールボックスに届いてたヤツだ。モリアーティさんの質問『王貴はモテますか？』だってさ」

王貴「知らぬ」

準「あー、俺が答えます。ぶっちゃけるとモテる。エレガント？クワットロ並みと言ってもイイって若が言ってた。何でも、ドSのようで少年のようなあどけなさが魅力。変t――――――――――素敵淑女に大人気だとか。イメージしてくれるならアレだ。ネギまのエヴァンジェリンみたいな感じだってよ。可愛いよなーエヴァちゃん。

でもロリは俺の嫁だから！　アーニャとエヴァと双子ちゃんは俺の嫁ェェェェェ！！！（ＣＶ杉田智和」

王貴「おい、落ち着け雑種。取り合えず、ズボンをはけ」

準「おっ、悪い悪い。ちょっと取り乱したわ。ま、大体こんな感じか？」

王貴「まだ、質問がある輩は感想板かメールボックスにでも寄こすがいいぞ」

準「作者曰く、ＰＶ２０万記念とか言ってる間に３０万突破しちまったみたいだから、サイドストーリーも作るんだとさ」

王貴「あの屑もよくやる。ただの自己満だというのに」

準「ま、そう言う訳だから。んじゃーなー。バイビー☆」

王貴「古いにもほどがあるぞ」

ＰＶ２０万記念　王貴の一問一答（後書き）

改めてＰＶ２０万ありがとうございました！　これも皆さんのおかげであります！

まだ、何かご質問があるようでしたら遠慮なく感想なりメッセージボックスなりに頂ければ幸いと思っております！！

では、ご意見ご感想などがありましたら、よろしくお願いします！！

番外編アンケート（前書き）

アンケートでございます。

軽い気持ちで答えてくれますと幸いです。

番外編アンケート

番外編？
『王貴が庶民なるようです』

王貴「んー、何か王（オレ）もう王様に飽き飽き」

全てはこの王貴の一言で始まった。

王貴「王という身分にも飽きていた所だ。これより王（オレ）は庶民となる！」

王貴が王を止めて庶民になる発言で川神市は混沌に包まれた。

アイツがキャラ崩壊し、またアイツのキャラがぶち壊される。

さらには異世界から忍び寄る魔の手が……。

ネコアルク「どうもー♪　グレートキャッツガーデンからピザお届けに参りましたー♪　ヴァー、疲れた。ちょっとそこの兄ちゃん、マタタビくれんかねー？」

王貴「貴様……ネコ……なのか？」

番外編？
『王貴の花嫁』

川神市を揺るがす大事件。
それは秘密基地内部で起こった。

岳人「なぁ、王貴」

王貴「何だ駄筋？」

岳人「お前の好みって何だ？」

王貴「好みだと？　何のだ？」

岳人「ばっか。女の好みだよ！　なぁなぁ、お前はどんな女が好みなんだ？」

王貴「好みか。考えたこともない。そうだな……、王（オレ）を屈服させれる奴だな」

岳人「屈服って……。お前に勝てる奴が好みなのか？」

王貴「そうだ。何でもいい、王（オレ）に勝てたら喜んでそいつを嫁にして

やろう」

岳人「お前に勝てるやつ何てあんまりいないだろ……」

王貴「そうであろう？　ふはははははは！」

そうして始まった霧夜王貴狩り。

ある者は愛のため、ある者は脅すため、ある者は野望のため、ある者は掘るために、ある者は弟のため。

川神市は戦場となる。

王貴を我が物にするために戦う刺客たち。

はたして、王貴に眠れる夜はくるのだろうか。

番外編アンケート（後書き）

ＰＣサイトビューアーを使って何とか投稿出来ました。

番外編アンケートでございます。

番外編？が見たい場合は《１》もしくは《？》を。

番外編？が見たい場合は《２》もしくは《？》を。

感想の所か、メッセージ送信で答えてくれると自分が泣いて歓喜します！

尚、もし番外編？を書く場合は、物語の進行的にもう少し後になります。

それでは気軽に答えてくれると幸いですございます。

第１９話　箱入り娘と箱入り息子（前書き）

～前回のあらすじ～

マルギッテ「来なさい王貴！　螺旋剣なんか捨ててかかって来い！！」

王貴「螺旋剣など必要ない。ふはは、螺旋剣など必要ない！　ふはは、鎧も必要ない。ははは！　貴様など。貴様など恐れぬにたらぬ！！　下朗、ぶっ殺してやる！」

エリカ「コマンドー乙」

第１９話　箱入り娘と箱入り息子

早朝。
サラリーマンは仕事へ行き、学生は学校へ向かう。そんな時間帯。

「うーん」

親不孝通りにある高級マンションの７６５号室の一室。
霧夜王貴が住んでいる部屋の居間で、一人霧夜エリカ唸る。考え事をしているのだろう。眉間に右手の親指と人差し指を当てて、考え事をしていた。

何故エリカがここに、王貴が住んでいるマンションの部屋にいるのかというと答えは簡単。
王貴の部屋に居候しているからだ。
そのためか、居間にあった筈の王貴のベッドが無くなっている。
どうやら新しく自分の部屋を造りそこに置いてあるようだ。

「はぁ」

今度はため息をついた。

エリカをここまで悩ませている理由。それはキリヤカンパニーのこれからの経営方針や世界はこれからどう動いて行くのか、といった大きなものではない。

弟の霧夜王貴が原因だった。

自分がこの川神学園の教師をやって数週間がたった。
数週間もたった。それなのにも関わらず、王貴は一向に自分になつこうとしない。昔のように『お姉ちゃん』と呼んでくれない。

客観的に見たら心底どうでもいい悩みだった。
だが、彼女からしたら重要問題。死んでもどうにかしたい問題だ。

そうして、どうしたものかと再びため息を吐く。
すると、

「あら？」

テーブルの上に置いてあるケータイが鳴り始める。
エリカは折りたたみ式のケータイを取ると、小気味良い音でパカッと開き始めた。
ディスプレイには“よっぴー”と書かれていた。

エリカはニッコリと微笑むと、ケータイの通話ボタンを押し耳に当てる。

「グッドモーニング、よっぴー」

『うん、おはようエリー。そっちで不自由は無い？　ご飯はちゃんと食べてる？　夜ちゃんと眠れてる？　対人関係に不安は無い？　川神学園の生徒さん達に無茶な命令してない？　弟さんに迷惑かけてない？』

ケータイから女性の声が聞えた。
この女性こそ霧夜エリカの秘書であり、彼女の親友である佐藤良美だ。愛称はよっぴー。性格は心優しく、真面目で人望もある。だが、少々性格に難があるのだが、それは置いておく事にしよう。

まるで母親のように聞いて来る良美にエリカは苦笑いしながら、

「まるで母親みたいな言い草ね……。大丈夫大丈夫。問題なくやってるわよ。ご飯もちゃんと食べてるし、ちゃんと寝てるし、モモっちって言う友人も出来たし、生徒に命令はしてるけど、王貴には迷惑なんてかけてない」

自信満々に笑いながら言うエリカだが、最後の“王貴に迷惑なんてかけていない”という一点は嘘だ。迷惑かけまくり。

今朝だって、王貴の寝ている部屋のベッドに無断で入り、王貴が目を覚ますと「おはようからおやすみまで弟の暮らしを見つめるお姉ちゃんです」と、ニッコリ満面の笑みで微笑み、王貴に「死ね」とニッコリ満面の笑みで言われた始末。

ちなみにこのやり取りは何週間も続いている。

何と言うか、キャラが違う。霧夜エリカはこんなキャラじゃないだろう。

竜鳴館の旧生徒会メンバーが、今のエリカを見たら何と言うだろうか。……恐らく笑い転げるか、唖然と口をあんぐりと開けるだろう。

長年エリカと友人関係が続いている良美も、最後の“王貴に迷惑なんてかけていない”というのは嘘だなー、と思う。

だが、良美にはそれを咎める事は出来なかった。エリカが言う事を聞かないのもその理由だが、その理由が全てではない。彼女がどれほど自分の弟を大事にしているか分かっているからだ。大事にしているからこそ、そんなに王貴に迷惑はかけていないだろうと思う。だから、良美は咎めない。

そうして、エリカと良美は楽しそうに会話していた。
最後にカンパニーの事業の話や事務的な事を話すと、良美は思い出したかのようにあっ、と声を上げる。

「どうしたの、よっぴー？」

『うん……、あのね……？　エリーの親戚の人たちからエリーが今どこにいるのか聞かれたの……』

「……」

みしり、と手の中の携帯電話が軋んだ音を立てた。それと同時に奥歯をギリッと噛みしめる。
忌々しい。聞きたくもない。

今良美が言ったエリカの親戚たち。この人物たちこそ、彼女の弟である霧夜王貴を変えた人物に他ならない。

最初は王貴を手懐けようとするとして、あらゆる方面に王貴を連れ回していた。そのお陰で王貴は不死川家や九鬼家や川神家とも知り合いなのだ。
そして、王貴を連れ回していたの彼を手懐けるのが目的だけではない。当時キリヤカンパニーは急成長した企業だった。故に、由緒正しい格式も伝統もない。そして、付いたあだ名が“成り上がりのキリヤ”。そう呼ばれているからか、当然敵が多い。そんな連中に、

何とか自分たちが優秀なのを知らしめたかった。だから王貴を連れ回していたんだろう。

だが、数年して叔父叔母たちは気付いたのだ。霧夜王貴は自分たちが思っているよりも化物だと。それと同時に悟る。王貴は自分たちが手懐けれるモノではないと。そうして、彼らはおろかな選択をした。王貴を暗殺するという愚かな選択を。

弟が暗殺される。当時まだ幼かったエリカも何とかしようとした。だが、それも徒労に終わる。まだ彼女にはそんな“力”が無いからだ。

だから彼女は“力”を求めた。≪権力≫という力を。

そうして、霧夜エリカは成長し、キリヤカンパニーの重役という立場まで上り詰めた。

そこまで上り詰めた彼女が行ったのは王貴の安全の確保だ。

それが王貴を川神学園へ編入させること。川神市にはあの川神鉄心がいる。叔父叔母もそう簡単に刺客を放たないだろうといった考えだった。現に、刺客の数は減った。それでも刺客が無くなる訳でも無かった。１０～２０人程度から、１～３人程に減る。

本当に愚かな連中。と、エリカは思う。何度やっても無駄なのに。無駄だと分かり切っているのに叔父叔母は何度も何度も刺客を送り込む。

『エリー……、大丈夫？』

「……えぇ、大丈夫よ。ありがとうよっぴー」

叔父叔母への怒りは抑える。
この怒りは今はいらない。

『それじゃ、そろそろ切るよ？　乙女先輩によろしくね』

「えぇ、じゃあね」

そう言ってケータイを切り、パチンとケータイを折りたたみテーブルの上に置く。
そうして、彼女はテーブルの上に肘を乗せ、手を組む。

何はともあれ、自分が川神へ来たからには叔父叔母の好きにはさせない。姉とは弟を守る者だ。今度こそ今度こそ弟を守る。
そして、弟を共に世界の頂点に立ち、世界を牛耳る。

これこそ、エリカの夢であり野望だ。

そうエリカが考えていると、玄関のドアを開く音が聞える。

王貴はもう既に学校へ行っているので、王貴がドアを開けたのではない。忘れ物をしたので取りに帰る、という考えはエリカに無かった。何せ、自分が忘れ物は無いか何回も聞いたのだ。忘れ物をする訳が無い。何より、王貴の性格からして取りに帰る訳が無いと思ったからだ。

そして、王貴の住んでいるマンションは住民登録をしないと部屋に入るどころか、エレベーターすら動かない。

という事は、王貴の部屋には王貴とエリカの他にあと1人住んでいる事になる。

その人物が玄関から居間へと続く長い廊下を歩いて来る。

そして、居間のドアを開けた。

「ただいま」

それは女性だった。

青い髪をしたショートヘアーの女性。動きやすい上を白い胴着に身を包み、下には黒いスパッツをはいている。

今まで運動していたのか、頬が赤く染まり、火照っている。

凛とした顔つき。そう、まるで風紀委員でもやっていたかのような女性にエリカは笑顔で、

「随分と遅いですね乙女センパイ」

鉄乙女。

この女性こそエリカのボディーガードであり、王貴の部屋に住むもう一人の同居人だ。

“鉄”とは、一騎当千と名高い一族の名だ。彼女もその“鉄”の名の通り、身体能力が常人離れしており、武術にも優れている。かつては武道四天王に名を連ねていたが、今は引退している。

エリカの一言に乙女一つ頷き、

「あぁ、ちょっと熱が入ってしまった。……王貴がいないな？」

「えぇ、先に行っちゃいました」

胡散くさい笑顔で言うエリカに、乙女はジト目で見つめる。

これでも乙女とエリカは長い付き合いだ。エリカが胡散くさい笑顔を浮かべている時は彼女が何かした時だという事は分かっている。

乙女の視線に居心地悪く感じたのか、エリカはため息を吐き居心地悪そうに、

「今回は私何もしてないわよー？」

「姫、嘘はいけないぞ？　そもそも、だ。王貴がこうして姫に反抗的なのは何が原因だ？」

「……、」

思い当たる節が無いのだろう。

エリカは考えるが、原因が思いつかない。

乙女はエリカの反応に、うんざりしたように呆れながら、

「姫の担当の教科は英語だったか？　その時にやった小テストの答案を返す時、自分が何を言ったのか思い出してみろ」

「えーと、確か『では、今日はここまで。期末試験は、より筆記問題を多く増やすから頑張りなさい』だったわ」

「他には？」

「その後に『なお、通常は３０点以下なら赤点だけど、Ｓ組は５０点以下の場合から赤点追試だから。ちなみに霧夜クンの場合どんなに点数が高かろうが無条件で先生と個人面談だからそのつもりで』こう言ったわ。まぁその時不死川の小娘がうるさかったけど一蹴してやったわ」

「間違いない、それだ。いやそれも原因の一つか」

「？？」

乙女は呆れながら言い、エリカはこれのどこがダメなのだ？　と首を傾げる。心が気に入らなかったのは『ちなみに霧夜クンの場合どんなに点数が高かろうが無条件で先生と個人面談だからそのつもりで』の部分だったのだろうが、エリカは分かっていない。

王貴とは数週間程度の付き合いだが、束縛される事をあまり良しとしない事は乙女にもわかる。

だが、エリカの今のやっている事は王貴の好みとは反対。まったくの真逆。束縛しまくりだ。こんな事なら反抗もするだろう。

あの霧夜エリカがここまで暴走している理由。長い間弟と会話はおろか、会ってすらいなかった反動か、ここにきて弟を思う気持ちが暴走しているのだろうと、乙女は分析する。

家族――――いや、弟を大事に思う気持ちが分かるが、これはやりすぎだろう。現に、王貴も思わず乙女に愚痴っている始末だ。

「はぁ、王貴はどうして昔みたいに『お姉ちゃん』って呼んでくれないのかしら……」

　理由が本当に分かっていないのだろう。
エリカは憂鬱気ににため息を吐きながらそう呟く。
　何も分かっていない妹分を見ながら、しょうがないと思う反面。
もし、王貴に彼女が出来たらどんな事になるのだろうと思う乙女だった――――――――

……………………………

…・

…………………………

………………………

一方その頃、王貴は川神学園に向かうため、多摩大橋、通称変態大橋を歩いていた。
本来彼はこんなに朝早く登校するような優等生ではない。むしろ、授業には満足に出ないは、先生には上から目線で話すは、授業を余裕でエスケープするは、学長室に自分専用のソファー（約５０万円）を置くはでやりたい放題の問題児だ。

その問題児である彼がどうしてこのように朝早くから登校するのか、それは突然川神学園の先生になり、突如自分の部屋に居候する事になった姉に他ならない。

（あのたわけめ。何が『おはようからおやすみまで弟の暮らしを見つめるお姉ちゃんです』だ。満足に睡眠をとることすら出来ぬぞ…

…）

不機嫌そうに眉間に皺を寄せながら歩く王貴。

今の彼は誰が見ても不機嫌。いつもは“王（オレ）に話しかけるなオーラ”を纏っている王貴だが、今回は“王（オレ）の視界に入る屑は殺すオーラ”を纏っている。嫌な感じにエクステンドしているから洒落にならない。

さすがの王貴も白昼堂々暴れはしないだろう。多分きっと恐らく。

何はともあれ、危険なのは変わりない。

今も変態大橋には数多くの学生が歩いているが、誰1人王貴に視線を向けない。皆が皆、目が合いそうになったら明後日の方向を見て、何とかやり過ごしている。

そうして周囲の人間に多大なストレスを与えながら歩く王貴だったが、不意に後ろから、何者かにもの凄い速度で追い抜かれた。それは2人。

1人はブロンドの髪を腰の所まで伸ばした、川神学園の制服（夏服）を着ている女性。

もう1人は、これまた腰の所まで赤いい髪を伸ばし、軍服に身を包んだ女性。

その2名の女性が王貴を追い抜き、50メートル辺りの所で急停止する。

王貴は思う。またこいつらか、と。

だが、王貴の心情などお構いなしに、2人の女性は王貴の方へ体を向ける。

そして、ブロンドの髪の女性――――クリスティアーネ・フリードリヒが王貴に指さしながら、

「見つけたぞ王貴！　今度こそお前の性根を正してやろう！」

ズビシッ！　と音がつくように勢いよく王貴に指さすクリス。

王貴が“またか”と感じたように、こうしてクリスが王貴に積極的に話しかけるのはこれが初めてではない。

マルギッテとの戦いが終わって数週間。こうして、毎日のように王貴に話しかけてきているのだ。

クリスの性格からして、王貴の人を舐めきった態度が気に入らず、それを直そうとしているのだろう。だが、それも直る筈がない。

そして、そのクリスの傍らには絶対に赤い髪の女性――――マルギッテ・エーベルバッハの姿があった。

王貴との戦い全治1ヶ月の重傷だったのだが、それがたった1週間で戻って来たのだから驚きだ。

だが、王貴は「流石王(オレ)が認めた戦士よ」と言って嬉しそうだったのだ。そこは嬉しがる所ではなく、驚く所だろう。常識的に考えて。

ちなみに、クリスがマルギッテを連れているのは大和の策だ。王貴と何かあった時、クリスだけでは手に負えないと思ったからだろう。だったら、王貴が認めている人物でクリスとも仲が良い人物が傍にいた方が安全と考えたのだろう。

クリスの出現に王貴はこれでもかと言うほど顔を顰めるが、直ぐにマルギッテに視線を向けて不敵に笑う。

「マルギッテよ。貴様、傷は癒えたのか？」

「えぇ、完治しました。これでまたお前と戦える」

「よかろう。また幾度なりとも挑むがよい。貴様ならば王(オレ)に刃向かう事を赦す」

マルギッテと王貴が不敵に笑い合う。

だが、

「むー。自分を無視するなー！」

それが気に入らず、クリスが面白くなさそうに頬を膨らませる。

それに、マルギッテは直ぐに「申し訳ございませんお嬢様！」と慌てながら謝り、王貴は「ふん！」と不機嫌そうに腕を組みながら鼻をならす。

「女、今日は一体何だ？」

「言った通りだ。今日こそお前の性根を自分が正す！」

「他人を正そうとする心意気。立派ですお嬢様。……霧夜王貴、お嬢様に教育される事を喜びなさい」

自信満々に腰に両手を当てて、胸を張りながら言うクリスといつものようにクリスには蜂蜜のように甘く、他人には上から目線で言

うマルギッテ。

だが、王貴はそんなクリス達も歯牙にかけず、ズンズンと力強く歩みを進め、2人の間を邪魔だと言わんばかりに強引に引き離し追い抜く。

その後を、クリスは慌てながら付いて行き、マルギッテは慌てず早歩きで付いて行く。

「ちょ、ちょっと待て。今日は随分と機嫌が悪いな。何があったんだ？」

「貴様に話す謂れは無い。それとだ、王である王（オレ）に気安く話しかけるとは、貴様何様のつもりだ？　まぁ、マルギッテは別だがな」

「なっ！　どうしてマルさんがよくて、自分は駄目なんだ！」

「それは、マルギッテは王（オレ）が認めた戦士だからだ。対して貴様はただの女。ただの女風情が王に話しかける事など、この王（オレ）が許すものか」

堂々と胸を張り、得意げに言う王貴。

その態度と言動に当然、クリスは面白くなさそうにふてくさるような表情で、

「自分は女ではない、クリスだ！　いいかげん覚えろ！」

「口やかましい“女”だ」

「≪女≫を強調するな！　うー、自分を愚弄する気か！」

「ようやく気付いたか馬鹿め」

王貴の痛烈な一言に、クリスは王貴を目に涙を浮かべ上目遣いで睨みつける。

王貴もクリスの今の様が気に入ったのか、愉快気に唇を歪ませる。

その笑みはまさしくイジメっ子のそれだ。

だが、王貴のイジメっ子な笑みも直ぐに消え、つまらなそうな表情に変わる。

理由は一つ。“クリスイジメ”が飽きたのだろう。

「それで、貴様はいつまで王（オレ）に付きまとうつもりだ？」

「無論。自分がお前の性根を治すまでだ」

王貴は思わずため息を吐いてしまった。

王貴が力づくで、クリスをどうにかしてもクリスは“王貴の性根を治す”という行為は止めないだろう。王貴もそれがよく分かっているためやらない。この手の人間には“武力”と言ったもので抑えつけてもどうにもならない事をよく知っているからだ。

愚直なまでに真っ直ぐで、何度叩いても立ち上がって来る不屈の魂。

そう言う人物を彼は3人程知っている。どいつもこいつも厄介極まりなく、鬱陶しい連中ばかりだった。

「マルギッテ、この女をどうにかしろ。五月蠅いくて敵わん」

「お嬢様の決めたことです。あきらめなさい」

「そ・れ・に！　自分は女という名前ではない。クリスティアーネ・フリードリヒだ！」

「チッ、口やかましい小娘よ」

「ぐぬぬぬ……！　悪魔で自分を愚弄するか、霧夜王貴！　いいだろ、ならば自分と勝負だ！　勝って自分を認めさせてやる！」

「またか……、いい加減諦めろ。そう言って貴様は王（オレ）に何度敗北したか覚えているか？」

王貴の問にクリスは、

「2回だ！」

自信満々に答える。

だが、それは間違い。王貴は正しい回数を呆れながら答える。今度はクリスに視線すら向けず、歩く方向に視線を向けながら、

「17回だ。貴様は回数すら数えれぬのか？」

「違う違う！　自分はそんなに負けていない！」

「いいや、負けているとも。一回目は武力による戦いだったな。二、三回目も同じだ。四回目からは数学の小テストの点数。五回目は――――――、」

淡々とクリスが負けた勝負の内容を話していく。

何だかんだ言って、17回も勝負している王貴はお人よし。――――と言った訳ではない。

誰であろうと、自分以外の人間を見下しているのが霧夜王貴という人間だ。

その見下している人間に勝負を挑まれれば逃げるわけにはいかない。彼の言葉で言うならば、『屑に挑まれ逃げては、王の名折れ』。もっと分かりやすく、掻い摘んで言うのならば、『超超超超超超負けず嫌い』と言った所だろう。

そうして、感情を込めずに、勝負の内容を言っていく。

16回目の勝負内容が言い終わった。

「――――――――十七回目は……、アレだ、トランプによる神経衰弱だったな。どうだ？　間違っていないだろう？」

「うぐぐぐぐ……っ！」

「うぐ？　何だそれは、貴様の国の言葉か？　もう一度だけ聞くぞ小娘。間違っていないだろう？」

「――――――ない」

「何ぃ？　聞えんなぁ～？」

「間違っていないと言ったんだ！　ばーか、王貴のばーか！」

そう言って、クリスは目尻に涙を浮かべながら走り去っていく。
それはもの凄い速度だった。一介の女子高校生が、人間が出せる速度ではない。普通走る擬音が『ズダダダッ！』と言った音ならば、クリスが今出している走る擬音は『ギュイーン！』。戦闘機か、と突っ込まれるかのような速度。

マルギッテも慌てながらも「うろたえてはいけませんお嬢様！ドイツ軍人はうろたえない！」とクリスの跡を追う。勿論、クリス以上の速度で。

「……騒がしい屑どもだ」

こうして、霧夜王貴は川神学園へと向かった

彼の日常が変わり始めている。
そう。騒がしくも、退屈のしない日常に――――――――――。

第１９話　箱入り娘と箱入り息子（後書き）

どうも、みなさん。おはこんばんちは、兵隊です。
ようやく相棒、もといパソコンが直りましたので投稿していこうと思いますのでよろしくお願いします。

でも、それにしてもＳＩＲＥＮというゲームが面白すぎますねー。
ＳＤＫマジパネェッスｗｗ
皆さんも機会があれば是非やってみて下さい！
友人と一緒に騒ぎまくって、のどがかれましたｗ

それと、番外編のアンケートにお答えしていただきありがとうございました！
投票の結果、番外編？に決まりました。圧倒的でしたねー。

つきましては、本編が進み次第番外編？を書いていこうと思います。
まだハーレムとはいえないのでｗｗ

それではご意見ご感想よろしくおねがいしたします！！

第２０話　家族と姉弟の絆関係（前書き）

エリカ「王貴？風間……。いや、多分王貴は誘い受けだから、風間？王貴か……」

王貴「パソコンに向かって3時間。姉上は何をしているのか……」

第２０話　家族と姉弟の絆関係

クリスとマルギッテと別れた王貴は、無事に川神学園に着いた。
“無事”と言っても、風間ファミリー率いる某キャップや２年Ｓ組が誇るロリコン大臣と電波少女と男でも女でもイケる両刀使いやら色々な人物たちが絡まれていたのだが……。

何はともあれ、王貴にもその者たちにも危害が無かったから“無事”と言ってもいいだろう。

そうして、王貴は２年Ｓ組にある自分の席に着く。それも乱暴に、ドカッと音が出るかのように不機嫌に。

そして、自分の机を右手の人差指で叩く。不機嫌そうに眉間に皺をよせながら。その不機嫌そうな動作。彼の姉である霧夜エリカにそっくりなのを、彼は分かっているだろうか？　いや、恐らく知らないだろう。

明らかに、王貴は不機嫌オーラを纏っていた。

変態大橋で見せつけていた、“王（オレ）の視界に入る屑は殺すオーラ”よりも性質の悪い。“視界に入ろうが入らなかろうが殺すオーラ”。正に、暴君の塊。とても近寄りがたい存在に、王貴はなっていた。

現に、彼から5メートルに誰も居ない。

正に世紀末。2年S組の教室が恐怖政治の荒波にのまれようとしていた。

と、

「む？　不機嫌そうじゃな王貴。何かあったかの？」

1人の少女が、2年S組を恐怖政治に変えようとしている暴君に話しかける。

その少女こそ、不死川心だ。

いつも通り、色鮮やかな着物を着こなしている心。顔も、王貴の機嫌の悪さに不思議に思っているのか、可愛らしげに目をパチくりとしながら聞いている。

心に悪気はない。純粋に疑問に思った事を口にしただけなのだろう。

だが、2年S組の生徒たちは思ってしまう。どうしても思ってしまう。

――――――――空気を読めよ――――――――と。

個性が強すぎる2年S組が初めて心を合わさった瞬間だった。

王貴は心に視線すら向けずに、目をつぶりながらトントンと自分の机を右手の人差指で叩き、

「王(オレ)に話しかけるな。今の王(オレ)はかつてないほど立腹中だ」

「む。何じゃその言い草は。せっかく高貴なる此方が心配してやっていると言うに」

「それが目障りだと言っている。王(オレ)をあまり苛立たせるな」

「ムキ～～～！　何じゃ、何じゃ！　此方がせっかく心配してやっているというのにぃ～！」

王貴の突き放すような言い草に、心はたまらずダンダンと片足で地団駄を踏みながら、目尻に涙を溜めながら悔しそうに叫ぶ。

その姿に2年S組の生徒。主に男子生徒が小動物を守る保護欲のような衝動に陥る。

普段から不死川心という少女は、家柄で人を区別する性格だ。故に、大した出の者ならばそれ相応の対応をする。分かりやすく言えば、見下している。

そんな少女が、いつも上から目線で話している少女が、今1人の少年に泣かされようとしている。しかも、悔しがって弱みを見せまいと涙目になっている。このギャップに2年S組の生徒たちはやられたのだろう。いうなればツンデレのギャップに似ていた。

保護欲にかられている2年S組の生徒たちとは裏腹に、王貴は無関心を貫き通す。

心に視線すら向けなかった。

この男にとって、心が可愛い動作で悔しがっていようが、愛らしく目尻に涙を溜めていようが、道端の石ころと同義なのだろう。

王貴はただ無関心を貫き通していた。

そんな中――――――――、

「ふはははははは！　我、降臨せり！　おはよう皆の者！」

「みなさ～ん、おはようございま～す♪」

九鬼英雄と忍足あずみ（従者モード）が2年S組に入って来て、2年S組の生徒たちにいつもの朝のあいさつをする。

この2人の出現に、主に九鬼英雄の出現に2年S組生徒一同はギョッと体を堅くさせた。

いつもならば、九鬼英雄がクラスに入ってこようが何ら問題ない。何せ、このクラスに九鬼英雄は在籍しているのだ。2年S組に在籍している者が入ってこようが何の問題ないだろう。

だがそれは“いつもならば”だ。今回ばかりは勝手が違う。

何が違うと言えば、霧夜王貴が不機嫌だからだ。

それだけと言えばそれだけなのだが、霧夜王貴の場合は違う。

彼を怒らせれば先ずこのクラスが無くなるだろう。次に、このクラスの周辺。その次に、ここいら一帯の階。最後に学校を破壊するだろう。いや、それが最後とは言えないのかもしれない。川神市を破壊しつくすのかもしれない。それぐらいの規模だと2年S組の連中は思っている。

そして、霧夜王貴と九鬼英雄は超絶俺様至上主義。正に油と水のような関係とも言ってもいい。

そんな2人が今話しなどしたら、間違いなく王貴の方がキレるだろう。これは１００％とも言ってもいい。

ちなみに、“どちらも話しかけない”という選択肢は無い。英雄から王貴に話しかける。それが日常と化しているからだ。

英雄が空気を呼んで話しかけないという選択肢もない。

そのような殊勝な性格でも無い彼は、間違いなく王貴に話しかけるだろう。別に空気が読めていない訳でも無い。あえて空気を読まないのだ。

彼の性格を知って尚、2年S組の連中は願う。

――――――どうか、今回ばかりは空気を呼んでくれ。

と、

だが、そんな願いすら届かないようで、

「不機嫌そうだな王貴！　どうした、悩みでもあるのならば我に相談してみるがいい！」

我に空気を読ませるくらいなら、お前たちがこの空気をどうにかしろ。と、でも言わんばかりに笑顔で王貴に話しかける英雄。その2歩後ろに忍足あずみは控えるかのように立っている。
最初と比べ、王貴に対して敵意は無くなったが、それもゼロではない。どこか王貴の挙動を表情に出さず笑顔で警戒していた。

王貴もそれは分かっていたが、今更どうこうする気にならない。
理由は簡単。その方が面白いからだ。

「いや、相談せずともよい。我が当てて見せよう！」

英雄が王貴の顔の目の前で手のひらをかざしながら考える。要は待ったのポーズだ。

それから待つ事数秒。

「その苛立ちの理由。エリカ殿絡みと見た。どうだ？　正解であろう！」

「ふん。またあの女か……」

自信満々に、ふはははははは！　と高笑いをしながら言う英雄と忌々しげに眉を顰めながら言う心。

正に2者2様の表情だった。

その2人に対して、王貴はうんざりとした感じで、

「だったらどうした？」

「此方があの女にバシッと言ってやるのじゃ！」

何をバシッというのか分からないが、王貴は首をやれやれと言った感じに横にふる。それは王貴だけではない。英雄も首を横に振っていた。

2人の反応にやはり面白くなかったのか、心が口をへの字に曲げながら、

「何じゃ、その反応は！　此方では出来ぬと！？」

「愚問」

「我も王貴に同意見だ」

「何故じゃ何故じゃ！　王貴、理由を述べてみよ！」

王貴は机を右手の人差指で叩くのを止め、肘を立てながら心に視線を向ける。

その視線には、先程まであった“苛立ち”といった感情は無く、“呆れ”といった感情が籠っていた。

「貴様は昔から舌戦で姉上に勝ったことが無いであろう。それに、だ。この王（オレ）でさえ、姉上に舌戦で勝てるかどうかわからぬのだぞ？　王（オレ）でも勝てるかどうかわからぬ相手に、貴様が勝てるものか」

「むぐっ。わ、分からんではないか！　今回は此方が勝つかもしれぬぞ！」

「無理だ。誓ってもよい」

「ぬぐぐぐぐ！　英雄！　お前もこのわからず屋言ってやるのじゃ！」

「不死川よ。我もお前が負けると思うぞ」

王貴と英雄の言い分に、やはり面白くなさそうな顔をしている心。

それはそうだろう。彼女は他人よりも格下に見られる事を嫌っている。高貴なる者が凡百な者達に負けるなどありえないと言う様に。しかも、それが嫌い――――とまではいかないが、苦手としている人物ならばなおさらだ。

心は若干、涙目になりながら王貴と英雄を睨みつけながら、

「ふん！　今に見ておれよ。此方があの女をギャフンと言わせてやるのじゃ！　此方にだって……、此方にだってそれぐらい出来る！　そこでしかと見ておれよそこの馬鹿２人！」

目一杯、王貴と英雄を睨みつけ勇み足で自分の席に着く心。

心が睨んだ所で、彼らは恐れる事も怯むこともしなかった。ただ静かに“またか”と。心の中で思うのみである。

何せ、今の心の行動は彼らにとって初めてではないからである。

彼女をちょっといじったり、ちょっと意見すれば今のように面白くない顔。いわゆる涙目で睨みつけるかのような行動に出る。

不死川心とちょっとでも行動を共にすればこれぐらい直ぐになれるというものだ。

王貴は心に視線を向け、3秒ぐらい見てため息を吐く。そのため息の中には鬱憤のほかに、呆れといった感情も交じっていた。

ああやって、自分と英雄が忠告して心が自棄になって、忠告されたのにも関わらずそれを無視した結果失敗したのは何回目だろうか。

心がエリカに舌戦を挑むも、丸めこまれ後々それはおかしいと気付き泣くのは何回目だろう。

数えることすら馬鹿らしくなるぐらいだと、王貴は思う。

要するに彼女がエリカに舌戦で勝つのは無理なのだ。

それは幼い頃からの決定事項。昔から身長と体重ぐらいしか成長していない不死川心が、修羅場を超えてきた霧夜エリカに舌戦で勝つなど不可能。

だというのにどうして心はエリカに挑むのか。

王貴にとって不可解な事だった。

そんな事を考える王貴の視界の端。そこには九鬼英雄が居た。

ただ居たのなら別にかまわないだろう。だが、英雄は王貴を見ながらニヤニヤと面白可笑しそうに笑っている。その笑みにはどこか見覚えがある。その笑みは王貴が他人をイジメる笑顔にそっくりだった。

不愉快。王貴にとってその笑みは不愉快極まりなかった。

少年は机に肘を立て、頬に手を当てながら面白くなさそうに、

「何だ、その笑みは？　目障りだ」

「ククク、王貴よ。お前は相変わらず不死川に甘いな」

先程の会話を見て、どこをどうすればそういった結論に立てるのか。王貴は不思議でならなかった。

王貴はハッと鼻で笑う。何を馬鹿な嗤う。

「そう言う貴様は相も変わらず頭がめでたい男だな。先程の会話を聞いて、どこをどうすればそう言った結論に達するのか教授してほしいモノだ」

「フフン。我には分かっているぞ王貴よ。今のお前の物言い。アレは不死川を思っての事だろう。昔からアイツはエリカ殿と喧嘩をして泣いているからな。それに、お前は不死川とエリカ殿がケンカをする時、絶対に止めていただろう？」

昔とは違い、些か不器用になったな。と、英雄は自信満々に言う。

この目の前の男は、九鬼英雄は本気で言っているのだろうか。王貴は不思議でならなかった。

今の会話を第三者が見て、同贔屓目しても王貴が心を思っての発言とは誰も思わないだろう。それがどれだけお人よしな人物が見ても、だ。

確かに、昔の自分は心に甘かった。それは認めよう。だが、昔と今は違う。王貴は心に優しく接しているつもりも、そんなつもりもない。

となれば、これは。九鬼英雄が言う霧夜王貴の行動は、無意識から来るものなのだろうか。

（王（オレ）とした事が、何たるざまだ……！）

王貴は歯を噛みしめる。一瞬、自分を殺したくなった。

王を自称している者が、この世の万物の頂点に君臨しようとしている自分が、一介の女子生徒に贔屓目するという愚行に走ったからだ。

王貴にとって王とは、支配する者の事を指す。王が万物を認め、王が万物の在り方を背負う。王が世界の全てを背負う。“認める”と言う事は“裁く”と同義だと彼は思っている。平等に裁く自分が、1人を贔屓目に扱うとは愚かな事だ。

だが、今は悔いるべき時ではない。

王貴は直ぐに、英雄の言葉を否定しようと口を開きかけるが、

「おや？　英雄と王貴君は昔からの知り合いなのですか？」

こんな言葉が王貴を遮って来た。

言葉の発信源である主に、王貴はギロリと睨みつける。

そこには、色黒の眼鏡をかけて男。その顔には人の良さそうな笑みが張り付けられている。王貴風に言えば、胡散くさい頬笑みを男はしていた。

その人物こそ、葵冬馬である。

英雄は冬馬に視線を向けると、おぉー！　と嬉しそうな声を上げる。

「我が友トーマではないか！　随分と遅い到着だな」

「はい。少しばかり女性と“遊んで”いたものですから」

何を嬉しいのか、と。王貴は英雄と冬馬の会話を聞きながが思う。

王貴の表情は2人とは対照的でどこか面白くなさそうなものだった。

王貴の感情など露知らず、英雄と冬馬は会話を続ける。

「それで、英雄。王貴君とは昔からの知り合いなのですか？」

「うむ。我と王貴――――いや、霧夜姉弟と不死川とは昔からの付き合いだ」

「ほう、どこでお知り合いに？」

「社交界でだな。そこで霧夜姉弟と知り合い、彼女たちを通じて不死川と知り合ったのだ。言わばトーマよ。我等はお前たちと同じ幼馴染というわけよ！」

ふはははははは！　と、英雄は高笑いする。

王貴はどうでもいいと言った感じに、肘を机についたまま窓の外を見る。昔の話など彼にとってどうでもいい事。関心すら向かない些細な事だったからだ。

彼が関心を向けるのはこの後の話。

英雄は仕切りなしに高笑いをすると、「いや、」と言葉を区切る。

「幼馴染ではないな。そうだな……、我等は……そう！　家族の様なものだ！」

この言葉だ。この言葉に王貴はようやく“関心”を示す。

そうして彼はゆっくりと、視線を窓の外から英雄にずらす。

その視線の半分には敵意。もう半分には殺意が込められていた。

「王（オレ）の聞き違いか？　貴様がこの王（オレ）を“家族”と言ったつまらん言葉の一区切りに加えた気がしたが……？」

「……貴様と我等は家族だ。それは何があろうと違いは無い」

「いいや、違う。貴様等と王（オレ）は世界に取り合う敵だ。“家族”などと言った下らんモノではない。……あまりつまらぬ事を言って、王（オレ）を苛立たせるなよ、この屑め」

王貴はそう言うと、英雄に向かって嘲るように微笑みかける。

その笑みは万人が見ても英雄を馬鹿にした笑みであった。

その笑みが引き金となり、英雄の背後に控えていた、忍足あずみが自分の愛刀である小刀二振りを抜刀しかける。

自身の敬愛する主が馬鹿にされた。彼女が動くのはそれだけで充分なのだろう。

小刀二振りを抜刀するために、隠し持っていた小刀の柄に手を伸ばそうとするが、

「――――――待て、あずみ」

英雄が静止の声をかけ、その動きは止まった。
そうして、即座にあずみは、

「も、もし訳ございません、英雄さま！　出過ぎた真似を――――！」

「よい、それも我を思っての行動ならば許す」

英雄はそう言うと、王貴から視線を逸らさないまま、

「王貴よ。確かにお前の言う通り、我等は世界を取り合う敵同士である。それはこの先、どちらかが“世界”を諦めぬ限り終らんだろう。――――だがな、だがな王貴よ。我等は敵同士である前に、家族だ」

その言葉に、王貴は何を馬鹿な。と、鼻で嗤う。
だが、英雄は言葉を紡ぐのを止めない。

「お前に何があって、どうしてそこまでお前が変わったのかは知らん。だがな、王貴よ。この“家族”と言った言葉。お前から言い出した言葉だぞ？」

「……」

王貴は何も言わない。昔自分が言ったのを思い出したのだろうか。

英雄は続けて言う。

「確かに家族だというのに、我は――――我等は何もしてやれんかった。だが、今は違う。我も姉上も不死川もエリカ殿もお前を今度は助けれらる。――――お前が闇の中で苦しんでいるというならば助ける。お前が世界の悪意に押しつぶされそうになっていたのならば助けよう」

それが、と。言葉を区切り、王貴の瞳から目を逸らさずに英雄が堂々と告げる。

「――――家族というものだろう」

王貴はそれを、何を戯言を。と思う。

確かに、英雄も彼の姉である揚羽もエリカも心も一般人が見ないような悪意を見て、力を付けたのかもしれない。権力を持ったのかもしれない。

だが、王貴に言わせてみれば、まだまだその程度の悪意など序の口だ。世界には彼らが見た事もない悪意も、深い底が見えない闇が

存在する。政治家の汚職程度のちゃっちな悪意ではない。正にそれは“闇”。その闇を、霧夜王貴は数十年見てきた。最前列でそれを見てきた。“家族”程度がどうにか出来るものではない。

故に、今の英雄の発言も掃いて捨てる程度の発言に過ぎない。

――――だが、

（何故だ――――――――）

過ぎないが、

（何故、王（オレ）は何も言えぬ――――――）

何故か、否定しようとも思わなかった。

自分では説明できない感情が芽生えている。否定しようとしても言葉が上手く紡げない。

紡いでしまっては最後――――――何かが自分の中で壊れると思ったから――――――。

それから数秒。

王貴は舌打ちをすると、ドカッと乱暴に自分の席に座り、そっぽを向くようにして窓の外を見ながら、

「……やはり、貴様は頭の中がめでたい男よ。それに少々暑苦しい。――――ふん、貴様が勝手に思えばそれでよい。王（オレ）は知らぬ」

弟分の態度に、思わず英雄は苦笑いをしてしまう。

それと同時に王貴は変わったと思う。

以前ならば、川神学園に入学して間もなかった頃ならば、このように会話すら実現していなかっただろう。何せ、王貴は英雄に敵意――――いや、殺意すら湧いていたからだ。だというのにこうして会話すら実現している。

少年を変えた原因。少年が変わったきっかけ。それは間違いなく、2年F組の男子生徒との決闘が原因であり、きっかけなのだろう。

（風間翔一か……）

自分が愛する女性が加わっているグループのリーダーである男。

気に入らない。気に入らないが、弟分を昔のように。と、までいかないが変えた男。

本当に気に入らない。少年を変えるのは自分だと思っていたからだ。

だが、今はそんな事を言っても仕方が無い。

（貸し一か……。よもやこの我があの男に貸しを作るはめになろうとはな……）

それからしばらくして、２年Ｓ組の担任である宇佐美巨人が現れる。

ホームルームが終わると、直ぐに英語の授業が始まる。つまり、２年Ｓ組に霧夜エリカが現れるという事。

心は１人、闘志を燃やしていた。

だがしかし、勝敗は不変でエリカにボロ負けするのだった――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それで、英語の授業を抜け出して、エリカとエリカに連絡を受けた百代に追い回され、その仲裁に鉄が加わり、肝心のお前は学園長室に逃げてきたという訳かの？」

「たわけめ。王（オレ）は逃げてきた訳ではない。無理矢理ここに連れて来られたのだ」

と、王貴は不満そうに言う。

王貴が居るのは学園長室。英語の授業を受けていた彼が何故ここにいるのかというと、単純明快。またも、エリカに無茶な問題を出されたからだ。

どんな問題かと言えば、「先生に向かって『貴方が好きです』と言いなさい」とか「貴方が一番好きな女性は誰ですか？　親族でも可」とか「ＢＬに興味がある？　いえ、興味を示しなさい」とか他多数だ。

これでキレない王貴は王貴ではない。

こうして、王貴はキレて2年Ｓ組の教室を出ていく。エリカも予測していたのか、それに驚きもせず冷静にケータイを取り出すと川神百代を呼び、王貴を連れ戻そうとした。

百代がそれに応じたのも、王貴と戦えるといった理由の他。エリカに捕まえた暁には王貴を好きに使っていいといった理由だった。エリカが自分が以外の女性にこんな事を言うのは激稀だ。恐らく百代だから許可したのだろう。

そうして王貴と百代は川神学園を、いや世界を巻き込んだ戦闘を繰り広げようとしたが、そこに騒ぎを聞きつけ現れたのが鉄乙女だ。

乙女が取った行動は簡単。瞬時に王貴を抱える様にして走ると、学園長室に王貴を連れ込み鉄心に一言。

「王貴の監視をお願いします」

有無を言わさず学園長室から出ていった。

これが事の顛末である。

王貴は学園長室に置いてある自分専用のソファーに乱暴に深々と腰かける。

そして、天井を見ながらポツリと一言。

「腹立たしい……」

静かに怒気を含んだ声が学園長室に響く。

それから学園長室が、いや川神学園一帯が揺れる。

この揺れこそ、百代と乙女が戦っている証拠に他ならない。もしかしたら乙女以外にも百代と戦っているかもしれない。

その揺れが起きる度に、王貴はつまらなそうな表情に変える。

本来この揺れを起こしているのは自分と百代だ。だが今は違う。自分が起こしておらず、乙女と百代が起こしている。それが何故か王貴にとって気に入らなかった。

まるでそれは獲物を奪われた狩人のような気持ちだった。どこかやるせない。

しかもこれでは、まるで自分が逃げたみたいではないか。

そう思うと、勢いよく立ち上がり、

「それよりもあの愚姉だ！
何が、
【霧夜王貴伝説】
・テストの成績オール満点。
・運動ではオリンピック選手を軽く凌ぐ。
・誕生日には各国首脳から花束が贈られた。
・街で歩くだけで物価が上がる。
・王貴のおかげで身長が3センチ伸びました。
・地球に小惑星が激突しかけた時、王貴が空に向って小石を投げたら、小惑星の軌道がはずれた。
・エルニーニョの原因は、王貴がファンに手を振ったせい。
・生まれた時、一人で立ち上がり“天上天下唯我独尊”と喋った。
・実は女。
・日本が未だに核兵器を持たないのは、王貴一人が強すぎるから。
だ！
この王（オレ）を侮っているというのかッ！」

うがー！　と、手当たり次第に武器を造り出す。

エリカとしては全く侮っておらず、真面目に言っているのだろうが、王貴には伝わっていない。むしろ逆効果と言ってもいいだろう。

次々と武器を造り出していく。その数はざっと67を超えていた。
そして、右手には彼の愛剣である螺旋剣（エンリル）が握られている。マジギレである。こんな事で使われては真剣（マジ）で洒落にならんのだが、幸いな事にまだ本格的に起動しておらず、のようにゆっくりと、交互に回転するのみだ。

もっとも、螺旋剣（エンリル）が本格的に起動してしまえば武装しなくては使えない。最低限、螺旋剣（エンリル）を持つ手を手甲で武装しなくてはとてもではないが持てないだろう。何故なら高熱のガスが発生しとても素手では握られるモノではないからだ。

何はともあれ、螺旋剣（エンリル）を見て、鉄心は思う。

（何アレやっべー）

と。

顔から冷や汗が流れ、鼻からは鼻水が出る。軽くキャラが崩壊しているが、鉄心もそれぐらい螺旋剣（エンリル）をヤバい代物だと感じた。

あんなモノぶっ放された時には、この川神学園がどうなるか分からない。

自分自身ですら守りきれるかどうか分からないのに、川神学園生徒たちを守りきれるわけが無いと思い。何とか王貴の機嫌を直そう

とする。

「そ、そう言うがのぅ。エリカもお前の事を大事に思っとるだろう」

「ほう、それは興味深いな。では聞こう。王(オレ)を大事に思っている証拠はなんだ？」

「お前を川神学園に編入させたのはエリカじゃ。ここに来れば刺客に狙われる心配が無くなると思ったんじゃろうな！？」

鉄心の顔は汗でびしょびしょだ。

王貴を編入させた理由はエリカに口止めされていたが、エリカがこの川神学園に来たであるならばその約束も合ってないようなモノだろう。そう考えるぐらい、鉄心は必死だった。

「そんな事は――――、」

ゆらり、と。王貴は鉄心に振り替える。

その表情は魔王のそれ。人を恐怖させる顔だった。

鉄心は駄目じゃったか、と思い次の話題を考えるも。

「そんな事は、分かっている」

王貴が吐き捨てる様にして言うと同時に、王貴の背後に展開していた武器と右手に持っていた螺旋剣(エンリル)を消した。

「ほ？　じゃがお前、川神学園(ここ)に編入させられた理由を『霧夜の連中が王(オレ)を恐れここに編入させた。そんな理由だろう』といったとったじゃろう」

思わず驚いたようにして目を見開き、鉄心が聞き返す。

そう、確かに彼は言ったのだ。

『簡単な事だ。霧夜の連中が王(オレ)を恐れここに編入させた。そんな理由だろう。つくづく下らん理由だ。だが、王(オレ)にはどうでもいい話ではある』と確かに言った。だが、彼は自分が川神学園に編入させられた理由を知っていたと言っている。

それに自分を編入させたのがエリカだという事は知らないだろう。知っているのならば、エリカも鉄心に口止めなんて真似はしない。

鉄心の疑問に王貴は面白くなさろうに答えた。

「今まで王(オレ)を狙っていた者達が、今になって恐れるものか。現在も淡々と、王(オレ)の寝首を狙っているだろうよ。となれば、王(オレ)をここに編入させた輩は王(オレ)に近しく屑。且つ、王(オレ)が今置かれている事情を知っており、王(オレ)を編入させるだけの権力を持っているヤツに他ならぬ」

鉄心は王貴の説明に納得する。
それと同時に分からない事が一つ。

「じゃが、分かっているのならどうして『霧夜の連中が王(オレ)を恐れここに編入させた』と言った？」

「そんなモノ、あの女が。姉上がそう望んでいたからだ……」

「お前達、喋っていたのか？」

「いいや、会話したのも数年ぶりだ。だというのに分かってしまう。忌々しい事この上ないが、王(オレ)と姉上は姉弟だから分かってしまうのだろうな」

フン、と。王貴は鼻を鳴らして自分が座っていたソファーに深々と座り直す。

エリカがこの学園に来た時に交わした言葉。
『そうか。それでは――――――もう良いのか？』
『ええ、もう良いわ。ありがとう』
これは、こう言う意味が込められているのではないだろうか。

『そうか。それでは――――――もう姉上を恨む演技はもう良いのか？』
『ええ、もう良いわ。ありがとう』

そう考えると、この2人がどれだけ固い絆で結ばれているのかが分かる。
だが、意味を知っているのは当人だけ。これはただの想像でしかないのである。

深々と座る王貴は、ソファーに置いてあった巾着の様なものを持つと、無造作にそれを開け始める。

確か鉄に連れて来られてた時持っていたなー、と思いながら鉄心はそれを見ていた。

巾着の中から取り出されたのはタッパだ。時間的にまだ昼には程遠い。恐らく朝食なのだろう。

王貴はタッパを開ける。
そこには、少し形が歪なおにぎりが数個入っていた。これを作ったのは疑う余地なく、鉄乙女に他ならない。

ちなみに、王貴の部屋の家事と洗濯は乙女が行っている。家政婦もエリカが無理矢理止めさせられてらしく、エリカ達が王貴の部屋に来てからは来ていない。

王貴はおにぎりを取らずに、おにぎりを見ながらポツリと一言。

「また“おにぎり”か……！」

おにぎりのイントネーションがどこかおかしい。それはまるで覚えたての日本語を話す外国人のような発音だった。
だが、それはある意味的を得ているだろう。何せ、王貴は恐らく“おにぎり”と言った代物を知らなかったのだから。

鉄心はそれを見て、

「む？　美味しそうじゃのう」

「たわけめ、これで2週間連続おにぎりだ！　それも朝昼晩連続おにぎりだぞ！？　正気の沙汰とは思えん！」

そうして乱暴におにぎりを掴み、口の中に入れる。
何だかんだ言って食べるらしい。

それから半分ぐらい残して、おにぎりが入っているタッパを学園長の事務机に乱暴に置きながら、

「それをくれてやる。ありがたく思うのだな！」

学園長室を出ていった。
恐らく、昼は学食で食べるのだろうと思い。鉄心はタッパに入っているおにぎりを掴み。口の中に入れる。

「美味い……」

鉄心の声が静かになった学園長室に響いた――――――。

第２０話　家族と姉弟の絆関係（後書き）

最近熱く、スライムみたいなアメーバ状になっている兵隊です。

最近どうも、王貴をネギまやら恋姫やら東方シリーズやらにクロスさせるネタが思いてしまいます。

いけない。これではいけないですよー。しっかり本編を進めなければ。

ですがもし、学園黙示録に貧弱王が行ったら、武器の創造及び五行の力は使わせないでしょう。知恵と力（笑）で切りぬけて貰います。でも、これなら慢心スキル発揮しないかも……いや、彼ならするでしょうｗｗ

それではご意見、ご感想お待ちしておりますので、気軽にで良いですのでよろしくお願いします！

第２１話　王、雑音、食堂にて（前書き）

～前回のあらすじ～

王貴「前回を読め」

卓也「身も蓋もない……」

第２１話　王、雑音、食堂にて

あれから学園長室を出ていった霧夜王貴は何をするわけでもなく、ブラブラと歩いていた。

だが、騒ぎの原因である霧夜エリカや川神百代。そして、規則に厳しさに定評のある鉄乙女に見つかるわけにもいかないので、細心の注意を払いさまよっていた。

「む？」

そんな中ぐ～、といった音が聞こえてきた。その発信源は王貴の腹から聞こえてくる。

なんてことはない、王貴の腹が空腹を訴えているだけにすぎない。

考えてもみれば、もう昼だった。

（そういえば、あれから何も口にしておらぬ。……チッ、こんなことになるのなら鉄心におにぎりを渡さなければよかったわ……）

心の中で、悪態をつくが何も変わらない。

もう一度学園長室に行って、おにぎりを返してもらう。という、選択肢は王貴の中にはない。

どうも気が乗らないのだ。施しを与えたのに、やっぱり返せというのはどうも気が乗らない。プライド的な意味で。

はて、どうするか。と、王貴が考えていると、ふとあることを思い出した。

そう、川神学園には学食なるものが存在していることを。

「フム、」

そうして、王貴は考える。

学食に行くか、行くまいか。

「フン、殺伐とした食堂にこの王（オレ）が降臨するのもまた必定か。……決して、学食にある食物を食べたいわけではない。断じてないぞ」

と、ぶつぶつ文句を言いながら王貴は食堂へと歩いて行く。

まぁ、ぶっちゃけて掻い摘んで言えば、学食とはどんなものがあるのか、そして美味いのかといった興味本位の行動だった。

…………………………………

…

…………………………

………………

「どういうことだ……。肉がねぇぞ……」

そうシリアスたっぷりに呟いたのは島津岳人だ。

岳人の顔から冷や汗がだらだらととめどなく流れ始め、がくがくと体を震わしている。

……この男、どれだけ肉を食べたかったのだろうか。

「今日のランチは魚系だからね。仕方ないよ」

師岡卓也が岳人の呟きに適当に相槌を打つ。

卓也の視線は食堂のカウンターの上にあった。

そこには食堂のメニューがあり、でかい文字で『今日のランチメニューは魚系！』と書かれている。

川神学園の食堂にあるメニュー多い。

左からカレーコーナー、ランチ（日替わりメニュー）コーナー、麺類コーナーといったように別々に作る場所が決まっていることから、効率よく進められることからメニューの多さの由来とも言えるだろう。

「どうするの？　トッピングカレーでカツとか頼めば肉が食べれると思うけど」

確かに、カツは肉類であり、岳人の要望にも答えてくれるだろう。何せトンカツ、チキンカツ、唐揚げ、ハンバーグ、メンチカツ。これらはカレーのトッピングに出来る。何よりも肉だ。

だが岳人は、肩をすくめやれやれといった感じの表情で卓也を見下ろす。

小馬鹿にされているようで、腹の立つ仕草だった。

現に卓也は、むすっと渋い顔をしており面白くなさそうな顔だ。

岳人に馬鹿にされたと思い、面白くないのだろう。

そんな卓也にお構いなしに、岳人は慈愛と憐みを込めて卓也を見下ろす。

「いいか、モロ。あれは肉であって肉じゃねぇ。なんでか分かるか？」

「……僕にガクトの語る肉の美学なんて分かるはずないでしょ」

早く終わってくれ。そう卓也の視線が語る。

だが、岳人はそんなことはお構いなしに語り始める。

「確かに、あれは肉だ。豚のロースやヒレを揚げて作り上げられたトンカツ。日本独自のカツレツの手法で揚げられたチキンカツ。醤油とみりんから作ったタレに漬け込んで下味をつけて、片栗粉のみで揚げる『竜田揚げ手法』で揚げられた唐揚げ、おばちゃんたちが丹精込めて練り上げられたハンバーグ、そして豚肉や牛肉をミンチにするといった斬新な方法で作り上げられたメンチカツ。これらは立派な肉だ。俺様が認める、立派な肉たちだ。だがしかし――――、」

そこで言葉を区切り、視線を卓也から、カウンターの上に書かれている『今日のランチメニューは魚系！』と書かれている場所へとずらす。

「これらはあくまで、カレーのトッピング。メインはカレーであり、サブは精鋭なる肉たちだ。言ってみれば、ショートケーキの上のイチゴのような存在……！」

要するに、岳人はメインとなる場所にカレーが居座り、引き立て役に大好物の肉類があるのが気に入らないのだろう。

卓也にとってそこはツッコムところであったのだが、それよりももっと大事な場所があったので、岳人の意見に待ったをかける。

「待って、ちょっと待ってよガクト。ショートケーキはイチゴこそメインだよ？」

「何言ってんだ？　ショートケーキはスポンジとクリームがメインに決まってるだろ」

「いいや、イチゴこそメインだね。後はおまけだよ」

「スポンジとクリームがメインだ！」

「いいや、イチゴだね！」

「スポンジとケーキ！」

「イチゴ！」

「あ、あれだ――――。俺様が――――マッグに行くってことで――――いいよな？」

「う、うん。……あれ？　それにしてもどうして、僕たち言い争いしてたんだっけ？」

「……忘れた」

ほどなくして、二人の不毛な争いは終わり、岳人がマッグへ行き、卓也がそのまま食堂で食事をすることに落ち着いた。どうしてそう結論に達したのか甚だ疑問なのだが。

岳人と卓也がそれぞれ、肩で息をしている。

二人の表情はマラソンランナーが長距離を走り終わったそれだ。息を切らし、苦しそうに肩を上げ下げして呼吸をする。額にはうっすらと汗をかいているのが見れる。

この二人はどれほど激しく論争をしていたのか。

しかも、食堂にいる生徒はそれに全く触れておらず、いつもの学生生活を送っている。普通ならば、好奇な目線で岳人と卓也を見るのだろうが、流石川神学園生徒といったところだろうか。常識が全く通じていない。

「んじゃ、行ってくるぜ」

「はいはい。あっ、あまり食べすぎないでよ？　あれ、結構カロリー凄いからね？」

「そんなもん、全部筋肉に変えるから問題ねぇよ。じゃあな、モロ」

「午後も授業あるから速く帰ってきなよ――――――って、もう行っちゃったし。大丈夫かな……？」

卓也はそう言って、岳人が出て行ったであろう食堂の出入り口を見ながら呟いた。

そして、自分はどうしようかと考えてから、食堂の席を見渡す。

そこには、友達と楽しそうに談笑しながら食べている者。ケータイを片手に弄りながら食べている者。ただ一人黙々と目の前にあるラーメンをすすっている者。カレーうどんの汁を学生服に付けないように気をつけながら食べている者。様々な人たちがそこにいる。

結論。

見事に混み合っていた。

座る場所なんて、一つもない。

（あーあ、これは時間を置いてから来たほうがよかったかな――――

――って、あれ？）

席を見渡していた卓也が、ある一点を凝視するようにして、ジッと目を凝らすようにして見つめる。

席を見渡していた彼の眼に何が写りこんだのか。

そこには――――、

「ギャハハハハハ！　何それ、おまえバカじゃねぇの！？」

「違うってぇ～。あの野郎がミスったんだってぇ～」

「捨てちゃえ捨てちゃえ、そんな奴」

「だよね～。って、メール来た。――――げっ、またこいつ？　キープだったけど捨てよっかなぁ～」

そうして、またそこから「ギャハハハハハ！」といった下品な笑い声が聞こえた。

そのけたたましい声の発生元からは四人の女子生徒がいた。おそらくさっきの会話は彼女たちの話し声だったのだろう。

それはギャルだった。
その女子生徒たちの頭髪は金髪だったり、茶髪だったりと様々だが、化粧が厚いということだけは共通していた。口紅をし、まぶたにもアイシャドーのようなものがぬってある。誰が見てもケバイと言うだろう。

だが、卓也が気になったのはその化粧の濃さではない。
確かに化粧が濃いが、彼のクラスメイトである羽黒黒子よりもマシな方だ。
下品な会話も百歩譲って我慢できる。

彼が気になったのはその態度だ。
食堂にいるというのに、何も食べていない。何も食べていないというのに、まだ食堂に居座るその図々しさ。
それが気に入らなかった。

誰がどう見ても、食堂は込んでいる。
だというのに、彼女たちはどけようともしない。あまつさえ、かばんを自分の横に置き、四人で八席は取っている。完璧に彼女たちは邪魔だった。現に、非難するような目線で彼女たちを見る生徒もいる。
その中の、一人が師岡卓也だ。

(どうして、空気が読めないかなー？　明らかに食堂は混んでいるっていうのに……)

そうして、卓也は大声で下品に笑っている女子生徒たちに冷たい視線を送る。普段から優しい彼からは想像できない視線だった。

（こんな時、キャップ達は注意するだろうなぁ……）

まずクリスが注意しに行くだろう。彼女は自他とも認めるまっすぐな人間だ。ああいう人間を見たら注意するだろう。一子や翔一もそれに便乗するのかもしれない。百代と岳人はニヤニヤ面白そうに見守るだろう。京はどうでもよさそうにしているだろう。由紀江はおろおろとしていることだろう。大和は策を考えているのかもしれない。

そんなことを卓也が考え、自分はどうするかと自身に問いかける。

おそらく、いや絶対……何もできない。

仲間がいなければ何も出来ない。百代のように喧嘩が強いわけでもないし、翔一のようなカリスマ性もない。ましてや大和のように策を出せる人間じゃない。何の取り柄のない普通の少年。それが師岡卓也だ。

少なくとも、そう卓也は自分にそう評価を下す。

（ホント。僕一人じゃ何もできないね……）

そう口の中で呟き、表情に影を落とした。
そして、深い深いため息をついた。

時間が経ってからまた食堂に来よう。そうしたらあの女子たちもいなくなっているだろうと、思ったその時、

「フハハハハハ！　ここが食堂か！　随分と貧相な場所で食事をするのだな、庶民という者は」

「チッ、やかましい屑だ。黙って歩けぬのか」

「むっ、なんだ、王貴。不機嫌そうではないか。どうした？　我に相談してみよ」

「何が不機嫌そうではないかだ！　貴様がこの王（オレ）を無理やり連れてきたからであろうが！」

「お前もここに用があったのだろう？　ならば良いではないか」

「チッ、おのれ減らず口を……！　……まぁいい、それで？　王（オレ）の席はどこにあるというのだ？」

食堂の入口からそういった会話が聞こえてきた。

その人物は二人。

金髪の頭髪に、銀髪の頭髪。真逆のような二人だった。

金髪の少年は不機嫌そうに食堂を見渡し、銀髪の少年は高笑いをしながら機嫌よさそうに金髪の少年の後ろを歩いてくる。

頭髪もそうだが、行動も表情も対照的なこの二人こそ、霧夜王貴と九鬼英雄だ。

川神学園を代表する俺様キャラの二人が突如現れたからか、周囲がざわつき始める。

それもそうなのかもしれない。この二人はどう考えても、食堂に来るようなキャラじゃないからだ。そんな二人が突如食堂に現れたのだから、周囲が戸惑うのも無理はない。

だが二人はそんな周囲の気持など露知らず、ズンズンと力強い足取りで歩を進める。

二人が歩みを進めるたびに、道を譲るようにして周囲が二つに割れる。

卓也から見れば、それはさながらモーゼの十戒のようなモノだった。

「む？」

何かが気になったのか、王貴はそんな声をあげると一点を見つめてそこにぴたりと止まった。

英雄も王貴と同じ方向を見ながら歩を止める。

そこには食堂では絶対にある、“ある物”があった。

二人は進んでいた方向に行かず、“ある物が”ある場所に同時に方向転換し歩き始める。

「……何だこれは？」

「我にもわからん……」

“ある物”がある前に立つと、王貴と英雄はそんなことを呟いた。

そして、二人は上から下まで、“ある物”を訝しむような目線で観察する。

その“ある物”こそ、食堂などといった施設には絶対にある食券

販売機だ。
食券販売機というのは、お金を入れて、食べたいものがかいてあるボタンを押して、食券を買う。大半の誰もが知っている代物だ。

だが、この霧夜王貴と九鬼英雄は食券販売機の使い方をまったく知らない。
前にも言ったが、この二人は食堂で食事をとるといったキャラではない。英雄は従者の忍足あずみが頼んだ出前（すべて高級品）で、王貴は以前雇っていた家政婦の弁当（これもすべて高級品）で、家政婦を解雇した後も、乙女の作ったおにぎりで食事を済ませていた。

よって、二人にとって食券販売機などといった機械は見たことがない。
世間知らずにも程がある。

もしも、この二人がマッグなどに行けば注文を取りに来るだろうと思い、一生席に座り続けるだろう。
現に、王貴は以前小雪と松屋に行ったが、注文の取り方を知らなかったのだ。

そんなこんなで、王貴と英雄は食券販売機を観察する。

卓也にとってそれはあまりにも滑稽なモノだった。
あの暴君二人が食券販売機を前にして手も足も出せていないのだ。
なるほど、真の王者はあの食券販売機のようだ。

教えてあげたいのも山々だが、面倒なことになりそうだ。
卓也はそう考えると、食堂から出ようとする。

だが、

「む？　これはこのボタンを押すのではないか？」

英雄の呟きが、卓也の足を止める。

（何か嫌な予感がする……）

そう卓也は考え、二人を囲んでいたヤジ馬に近づく。

「……何も出てこぬぞ」

英雄は手当たり次第にボタンを押しまくるが、食券販売機はうんともすんとも言わない。
それは当然。食券販売機はお金を入れなければ動かない。ボタン

を押せばいいというものではないのだ。

「おのれ機械の分際でぇ……！　解体してくれようかっ！」

「ハァーッハッハッハッハ！　ざまぁないなヒデオ！　機械に馬鹿にされるとは、貴様それでも王かっ！？」

と、英雄を馬鹿にするようにして、王貴が英雄を押しのけるようにして、食券販売機の前に立つ。その姿は無駄に堂々としており、これから戦いに行くかのような面構えだった。

遠巻きから見ていた卓也は思わず、王貴の発言にツッコミを入れそうになったが、何とか押しとどめる。

「この王（オレ）自ら相手をしてやろう。光栄に思うがいい、機械風情が。誰であろうと、この王（オレ）に組み伏せ蹂躙される運命になるという事を教えてやる」

そうして、王貴は不敵に笑う。その不敵な笑みのまま、食券販売機のボタンをゆっくりと優雅に押した。

無論。何も起こらない。起こるはずがない。だって、お金を入れてないのだから。

そんなことも知らずに、王貴は手当たり次第にボタンを押しまくる。英雄と同じだ。

そんなことを繰り返し、数分が経った。

「ヒデオ――――――、」

王貴は呟く。

もうボタンは押しておらず、プルプルと肩を震わせながら、食券販売機を真正面から見つめる。

卓也のいる位置からは王貴の表情が見れないが、多分怒っているだろうということは想像がつく。あの震えも屈辱からきているのだろう。

「貴様、これを解体するといったな……？」

「うむ」

英雄は腕組をしながらそう答えた。

「それでは生温い。このような駄物は破壊してくれるわ！　この世にチリも残さぬぅ！」

「我が許す！　やってしまうがいい！」

「その不遜な態度許すまじ！　機械風情が王（オレ）を馬鹿にしよってぇ！！」と王貴が怒気を含みながら大声でそういうと、その背後からおよそ３９艇ほどの武器が現れる。いや、まだまだ増え始める。

英雄もそれを止めない。むしろ王貴を煽っている始末だ。

たかが機械如きの食券販売機に無視（お金を入れているのだから動くはずがない）されたと思っているのだろう。無駄にプライドの高い二人だった。

誰がどう見ても、二人は怒り狂っている。

二人を無視した食券販売機のほかに、食券販売機はまだ2台あった。

つまり、計3台の食券販売機があることになる。

だが3台あろうが、１０台あろうが王貴には関係ないだろう。
王貴がやろうとしているのは、自身の気を武器化し、空中から撃ち出される無数の武具による飽和攻撃。それは正に“雨”とたとえても問題のない数。そしてその威力は一級品の火力を誇る。
故に、3台だろうが１０台だろうが取るに足りない物なのだ。

だが二人が今やろうとしているのはあまりにも理不尽な行為。
少なくとも、卓也の目からはそう見えた。

一般人が食券販売機を壊そうとしているのを見れば、冗談と見えるのだが、今やろうとしているのは霧夜王貴と九鬼英雄。
理不尽ランキングで言えば、世界の5本の指には入っているであろう二人が壊そうとしている。

本気だ。本気であの二人は食券販売機を壊そうとしてる。

そう考えると、卓也は慌てながら人垣をかきわけ、二人の背後に躍り出た。
人前に出るの事をあまり好まない卓也だが、そんなこと気にしてられない。気にしては食券販売機の命はないからだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ二人ともっ！」

突然の卓也の登場に二人は驚きもしない。
英雄は卓也の方を振り向き、王貴は肩口から卓也の方を見ている。
体は食券販売機の方を向いたままだ。勿論、武具の展開も忘れていない。

「お前は……、確か一子殿の取り巻きの一人だったか」

川神一子を基準に言う、英雄らしい対応だった。
それから英雄は少し頭をひねり考える。卓也の名前を思い出しているのだろう。

「お前の名は……モロコシだったか！」

「馬鹿め、それは植物であろうが。そこの屑の名はモロボシだ」

自信満々に言う英雄と、これまた自信満々に言う王貴。
自信満々な二人には悪いが、それまた違う。モロコシでもモロボシでもない。

「どこのウルトラセブン？！　モロボシでもないから！　師岡だから！」
「英雄たる者、細かいことは気にせん」
「細かいことを気にしないのが、王の証」
「君たちホントは仲いいでしょ？　どうでもいいから僕の話を聞いて欲しいんだけど……」

何はともあれ、食券販売機の命を救うとしよう。
そうしなければ、食券が買えないということになるし、昼御飯が食べれない。
卓也はそう考えたのだった――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「――――――――こうして、食券と交換してもらうわけ」

食堂の食券と交換するカウンターの前で、卓也は二人に言う。

あれから何とか卓也は、暴君二人に食券販売機の使い方を教え、一台の命を救った。

ついでに、全校生徒の昼飯事情も救い、自分にしては上出来だろうと卓也は思う。

説明の仕方も、自分にしては分かりやすく丁寧だったと思っている。話の筋道も順序良く説明したし、老人が聞いても大丈夫だったろうと自負している。

だが、その問題の暴君二人の反応はいまいちだ。

二人は眉間にしわを寄せ、どこか面白くない表情である。

今の説明でもわからなかったら、自分にはお手上げだ。最悪、大和を呼んで何とかしてもらおうと思いながら、

「どうしたの？」

「ひどく原始的だな……」

「面倒だ」

英雄、王貴の順で文句を言っている。王貴に至ってはもはやただの我儘だ。

思わず、卓也はため息をつきながら、

「それぐらい我慢してよ……」

「チッ、まぁよいわ。ところで、モロボシ。何がお勧めなのだ？」

「いやいや、師岡だって……」

王貴が忌々しげに舌打ちをし、卓也はまたため息を吐く。

もはや、否定する気持ちにもなれなかった。

「お勧めはカレー。カレーの種類の多さは、この学園の美点の１つだよ。ビーフ、ポーク、チキン、ベジタブルの４つからルーを選べるのもいいね。トッピングは、トンカツ、チキンカツ、唐揚げ、ハンバーグ、メンチカツ。コロッケ、チキンソテー、ポークソテー、スコッチエッグの全９種類。中でも、スコッチエッグは値段も高くて数が少ないから、滅多に食べれない。僕も、これが入学してから５度目の体験。あの卵と挽肉とカレールーと米のハーモニーといったら……。毎日食っても、向こう半年は飽きない自信があるよ」

と、最初は嫌々で、それから徐々に説明する事に熱を覚えてくるような話し方だった。

正に、今の卓也はハイテンション。これは機械類の説明をしているような話し方だった。実はこういう才能があるのかもしれない。

そのままでテンションを維持するのだろうと思いきや、

「――――――アレ？」

突然、卓也のカレー紹介が止まる。

いきなり止まった説明に、英雄は不思議そうに、

「どうした？」

「う、うん。こんな説明の仕方をどこかのネット小説で読んだことがあるんだ」

「ほう、この学園と同じという事か？　面白い。なんて名だ？　王（オレ）を楽しませた暁には、王直々に感想をつけてやろう」

王貴は不敵にニヤリと笑いながら、腕組をしながら傲岸に言う。

卓也は、首をひねり考えながら、

「えーと、確か『真剣でアイツに恋してる！』って題名だったけ。某エロゲーの二次創作で、中でも面白いのがね――――――、」

「待て。待つのだ師岡」

と、英雄が卓也に待ったをかけた。

その瞳は真剣そのもので、どこか必死だった。

英雄は卓也の両肩をガシッと掴み、卓也と目を合わせながら、

「これ以上、世界が崩壊するような話は止めるのだ。流石に我もこの話はどうかなと思う」

「う、うん。そうだね。僕もそう思うよ」

英雄に気押されながらそう答える卓也。

考えてもみれば、いつ世界が壊れてもおかしな話題だった。うん、これ以上は止めよう。卓也はそう思った。

何はともあれ、この話は忘れて昼御飯を決めよう。そう思い、卓也は何にしようか考える。

さっきまでは時間を開けて、食堂にこようと思ったが、その考えは捨てる。

この二人を放っておいたら何をするか分からない。ストッパーになれるか疑問であるが、監視していよう。そう考えたのだ。

英雄の方を見ても、何を食べるか考えているのか、食堂のメニューを見ながら考えている。

王貴の方を見ると――――――笑っていた。

その笑みは、邪悪とまでいかないが、何か悪い笑み。例えるなら、悪戯っ子のような笑みだ。小学生がいいこと考えたような笑みによく似ている。

卓也は嫌な予感がした。

「おい、九鬼英雄」

そんな卓也の予感など気にしないと言わんばかりに、王貴は傲岸に英雄に話しかける。

口元にはやはり不適な笑み。そして顎を少し上げ、見下すように英雄を見る。

これに蔑むような視線が加われば、その手の男女には効果てきめんなのだが、幸い英雄はそんな男ではない。

「なんだ?」

「一つ勝負といこうではないか」

「勝負だと?」

「そうだ。アレの早食い勝負だ」

そう言って、王貴はとある場所を指さす。

そこには一つの写真。真っ赤で真っ黒な物体が写っている写真。

それを見た英雄は「ほう……」と言葉を漏らした。
卓也も何か気になり視線をその写真に向ける。

「ゲッ……！」

普段の卓也なら使わないような声を出した。それだけ、ショッキングだったのだろう。顔も引きつっていた。

その写真には、麻婆豆腐が写っていた。
しかしその麻婆豆腐は普通ではない。とても辛いのだ。いや、辛いなんてものじゃない。あれは痛い。トッピングご飯を付けなければとても食べれない代物。それぐらい辛い麻婆豆腐だ。

卓也の知るところでも、あれを食べれたのは椎名京しか知らない。
幾千幾万の兵（つわもの）が挑み敗れた代物に、王二人が挑まんとしている。

卓也は限りになく、必死に。限りなく、真剣に止める。
みすみす、犠牲を作る必要もないからだ。

「止めときなよ二人とも！　アレは――――――」

「止める？　無理であるな！　これは奴のれっきとした王の挑戦であるが故」

英雄は卓也の声を遮り、王貴と同じように不敵に笑う。

卓也の制止の声の意味を、英雄は『戦いを止める』といった意味合いで捉えたようだがそれは違う。全然違う。
卓也はあの麻婆豆腐を食べるのを止めろといった意味で言った。
その意味合いは全然違う。

これも、二人が食堂といった場所に無縁だったのが原因だったのだろうか――――――。

こうして、川神学園食堂にまた二人犠牲者が出た。
川神学園の麻婆豆腐を食した霧夜王貴は後々にこう語る。

「食事の後に、もうお腹が痛くなるのは嫌だ。唇が腫れるのも断る！」

そして、見事に麻婆豆腐は霧夜王貴の嫌いな食べ物に名を連ねることに成功したのだった――――――。

第２１話　王、雑音、食堂にて（後書き）

みなさんおはこんばんちは！　兵隊です！

何とか新しいパソコンを買ったので更新できました。これから更新していこうと思いますのでよろしくお願いします！！

作中にあった『真剣でアイツに恋してる！』のカレーネタですが、モーディスさんから許可をいただき使わせていただきました。
この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。
モーディスさん、本当にありがとうございました！

この食堂マーボー事件に全貌はまたの機会に書こうと思っております。
カオスになるでしょう～。

これから更新していくので皆さんよろしくお願いします！

それでは、ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします！

第２２話　学園革命伝キリヤ（前書き）

エリカ「今回のタイトルちょっとコアすぎない？」

王貴「なに、分かる奴には分かるであろうよ」

第２２話　学園革命伝キリヤ

前にも言ったかもしれないが、霧夜王貴は朝早くに起きる人間ではない。気ままに起きて、気ままに行動する。言ってしまえば自由な人間だ。猫といってもいいかもしれない。
フリーダム。ストライクでフリーダムな人間。それが霧夜王貴だ。

そんな人間が、朝早くの川神学園の廊下を傲慢に踵を鳴らしながら歩いている。
これはありえない光景だった。

今の川神学園の廊下には誰も歩いていない。いや、歩いている方がおかしい時間帯。
そんな時間帯に王貴が起きて、尚且つ川神学園の廊下を悠然と歩いている。

王貴を知る人物が今の彼を見れば、“頭でも打ったのではないか？”とか“昨日変な食べ物でも食べたのではないか？”とか“天変地異の前触れか？”とか“空から核弾頭でも降ってくるのではないだろうか？”とか言ったことを考えるだろう。

何せ、本人ですらありえないと思っているのだ。
朝早くに学園に来るといったような優等生のような行動など、霧夜王貴のキャラではないと。

だが、この行動にも理由がある。
いくら気まぐれで《人類最強》に喧嘩を売りに行くことはあれど、理由もなし朝早くに登校などしない。一般人からすれば、『いくら気まぐれでも理由もなしに朝早くに登校することはあれど、理由もなしに《人類最強》に喧嘩を売りに行くことはしない』となるのだが、生憎王貴は普通ではない。一般人の観点から考えるのがそもそも無駄である。

そして、何より、

「クックククク……」

関係ないが、

「ハハハハハハ……」

今の彼は、

「ハァーッハッハッハッハッハ！！」

ご機嫌だった。

それも頭に超がつくようなご機嫌。超ご機嫌。

先にも言ったが、今彼が取っている行動はありえない行為。それは本人ですらありえないと思っている行為だ。

と言う事は、王貴以外の人間が王貴の行動を読めるはずもない。

そう。

王貴が悩まされていた、霧夜エリカの“寝込みを襲う”といった事もされていないことになる。

「何だ！　朝とはこんなにも清々しいものだったか！？」

そういうと、もう一度「ハァーッハッハッハッハッハ！」と声高々と笑う。歩きながら、一人で高笑い。顔も、ものすっごい笑顔だ。

正に今の彼は、テンションがハイってやつだ。槍でも鉄砲でもガンダムでもなんでもかかって来い状態。

今、王貴に喧嘩を売っても腕の一本で許してもらえるぐらい、今

の王貴はご機嫌だ。

「この辺りなのだが……」

辺りを見渡しながら、王貴はそう呟いた。歩く速度も遅くもなく、速くもないちょうどいい速度。彼らしいマイペースな速度で歩き、視線をキョロキョロと動かす。

王貴の周りには、彼以外いなかった。

誰もいない学校で一人。そう考えると、なんだか不気味に覚えてくる。怪談話でも、墓地と学校とトンネルといった場所は頻繁に出てくる。何か惹きつけるものでもあるのだろうか？

だが、王貴にはそんな不安はないといわんばかりに、どんどん歩を進める。

彼にとって幽霊でも人間でも、自分の下の連中といったカテゴリーに属されているのだろう。良い意味で平等。悪い意味で唯我独尊名考えだ。

「む？」

と、歩を進めていた王貴が突如足を止める。
そしてある場所を見つめ、ニヤリと不敵に口元を曲げる。

その場所を紅色の両目の眼球で確認すると、その場所めがけて歩き始める。
その場所は一つの部屋のようだった。
だが、ただの部屋ではない。教室のようで、教室のような作りではない部屋。

この部屋こそ、王貴が朝早くから学園に来ている理由だ。

王貴はその部屋の通じる扉の前に立つ。
その扉は、川神学園の教室で使われている引き戸ではなく、ドアノブを使ったごく一般的な開き度だった。
扉もなんだか、高級感あふれている。なんだかリッチに造りだった。

「少々安っぽいが、まぁいいだろう――――――――ん？」

と、ドアノブに掴もうとして、止まった。
扉の奥を見るようにして、ジッと見つめる王貴。

「部屋に1……、いや2人か。クックック、いや好都合だ」

そう面白そうに、喉を鳴らすように笑う。

それは、嗜虐の笑み。今から始まることが楽しみだと言わんばかりに笑う。

そして王貴は扉を思いっきり開いた。

鍵はかかっておらず、簡単に扉は開く。

その部屋の中には王貴の見立て通り、人物が2人いた。

一人は背の高い黒髪スポーツ刈りの男性。大体１９０～１９５ｃｍあたりだろう。いかにもスピードよりもパワー。柔よりも豪といった筋肉質な男だった。人のよさそうな顔立ちをしており、縁の下の力持ちとは彼のことを指すための言葉といっても過言ではないのかもしれない。

もう一人は背の低い女性。１４５～１５０の間くらいの背で、髪は艶のある黒色で腰まである長髪。右目が髪で隠れて見えない。瞳の色は黄緑というより翡翠色といえるだろう。一目見て、美少女だという事が分かるが、彼女の纏っているオーラがその判断を鈍らせる。彼女は暗いのだ。その暗い雰囲気がマイナスであり彼女が美少女である事実を打ち消している。

そして、何より彼と彼女は正反対だった。

王貴の登場に、背の高い男は飛び上るほどびっくりし、片目が髪で隠れている彼女は椅子に座っており、半眼で無表情に王貴を見る。だが、無表情ながらもびっくりしているのかスカートの裾をギュッと握りしめている。

2者2様の反応に王貴は満足したのか、口元を愉快気に歪め、口を開く。

そう、今王貴が言おうとして言う事こそ、王貴が朝早くからここに来た理由にならない。

王貴は居丈高に口を開く。

「今この時を持って、この場所は王(オレ)のモノだ」

この場所は、

「この王(オレ)自ら生徒会長とやらになってやろう」

生徒会執行部。つまり、

「この王（オレ）に従うがいい。生徒会役員共めが！」

生徒会の部屋であった。

彼がこんな暴挙に出た理由は、昨日の出来事である――――――
―――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

これは昨日の風間ファミリーが使っている、廃ビルの中にある秘密基地内部での会話だ。

ここにいるのは、５人。

風間翔一と島津岳人と師岡卓也と黛由紀江の４人。そして、もう１人。

「そういえば、“虎が如く”っていう極道ゲーム新作発売されるらしいぜ？」

「らしいね。しかも、敵はゾンビらしいよ？　ホント、ＺＥＧＡはやってくれるよ」

と、ソファーに身を預けながら、岳人と卓也がいつも通り雑談をしていた。

“虎が如く”というのはゲームのことだ。

主人公はなんと極道関係者という、稀に見ない設定で注目を集め、今ではスピンオフ作品を含めて7作品のシリーズが出ている。映画にもなるくらい有名な作品だ。

何といっても、その主人公がめちゃくちゃで、１００mを１１秒で走ったり、虎との力比べに勝ち、その2頭の虎を素手で殴り殺したりと、一般人からしたら到底無理なことをやらかす主人公なのだ。

ちなみに、愛称は“４代目”だったり“きりゅうちゃん”だったりと高い支持率を誇っている。

その虎が如くの新作の話を彼らはしているのだろう。

その話に食いついてきたのが、風間翔一だ。

翔一はソファーの上でねっ転がりながら読んでいた、マンガの読んでいた場所を指で挟むと、身を起こし岳人と卓也のいる方向に視線を向ける。

そして、子供のような笑顔で、

「何それ、おもしろそーじゃん！」

「うん。僕も最初見たＰＶはどうかなって思ったんだけど、だんだん見てくると面白そうに見えてきたよ。マンネリ化してきたアクションも新しくなってたし面白そうだよね」

「それに何より、まじまの兄さんが使えるってことが一番いいよな！　俺様絶対ドスを装備させるぜぇ！」

翔一の言葉を卓也、岳人の順に答えた。
どうも彼らの言葉を察するに、“まじま”といったキャラは人気があるらしい。岳人の言葉に翔一も卓也もしきりなしに頷いている。

「確か大和の奴、ＰＳ３持ってたよな！　くぅー！　またひとつ楽しみが増えたぜぇ！」

翔一が本当に楽しそうに言う。

「確かに楽しみなんだけどよぉ……」

岳人も同意するように言うが、どこか様子がおかしい。
岳人の視線は翔一の方を向いておらず、真横に視線を向けている。
それは岳人の隣に座っている卓也も同じだ。岳人と同じ方向に彼も視線を向けている。

翔一もそこに視線を向ける。

そこにはソファーがあり、その傍らには黛由紀江が控えているかのように立っていた。

由紀江がいるのは別にいい。何故なら彼女もまた、風間ファミリーの一員だからだ。いても気にしないだろう。

しかし、明らかに秘密基地にいることが明らかにおかしい人物が一人。

その人物こそ5人目。由紀江が控えるようにして立っている傍らのソファーに、寝転がりながらマンガを読んでいる少年が1人。

その少年の今の恰好はふてぶてしく、マンガを悠然と読んでいた。

岳人は少年をジッと見ながら、

「なんでお前がここにいるの？」

しかし、少年は我関せず。岳人の方を見ようとはしない。ソファーに寝転がりながらマンガを読んでいた。恐らく自分に言ったのではないと思っているのだろう。性質が悪かった。

「もしもーし！　聞こえてますかー！　もしもぉぉぉぉぉし！」

再度、岳人が大きな声でそう叫ぶ。だが案の定、その少年は顔をマンガから目をそらさない。
そして、あろうことか

「おい、質問されているぞ腹話術師」

「えぇー！　わ、私ですか!?」

「おぉ、すごいキラーパス来たよー。さぁ、まゆっち。見事ここからアメリカンに切り返すんだー」

少年のキラーパスに慌てる1人（と1頭?）の少女。
誰がどう見ても、由紀江に言ったのではなく寝転がっている少年に言ったとわかるのだが、由紀江には分からなかったらしく慌てている。そしてどう言ったらいいのか分からなくなり、あぅあぅと顔を真っ赤にさせてあたふたしていた。

「あ、あのですね王貴さんに連れられてですね私もなんだか分からなくて正にドナドナの歌詞に出てくる子牛の心境とでも言うのでしょうかでも決して嫌だったと言ったわけではなくむしろ嬉しかったのですが――――――」

「お、落ち着け。俺様が聞いたのはまゆっちじゃねぇって！」

「ふぇ？　ち、違うんですか？」

「俺様が言ったのは、王貴てめぇだ！」

しどろもどろになり、早口で言う由紀江を何とか落ち着かせて、岳人は再度少年に質問した。

そこで初めて、少年――霧夜王貴は視線をマンガから岳人の方へと移した。

その顔に色濃くある、感情は不快一色。読んでいたマンガの邪魔をされて不愉快なのだろう。顔もしかめている。

「この女は侍女として使えるからな。故に王（オレ）がここに連れてきた。ようはそれだけの話だ」

次は邪魔をするな。と、王貴が言うと一方的に会話を切り、またもマンガを読み始める。

もちろん、これは岳人の欲しかった答えではない。

それよりも先ず会話のキャッチボールが出来ていないと言える。

岳人が取りやすいボールで投げても、王貴がそのボールをグローブで取らず、バットを使って思いっきり打っている。正に“会話のドッヂボール”といったものか。

「だからぁ！　まゆっちじゃなくて、どうしてお前がここにいるのかって聞いてんだよっ！　つか、どうして俺様がツッコミ役やってんだぁ!?　これはモロの仕事だろ！」

「僕の仕事でもないよ！」

岳人の発言に、卓也が否定する。

こうして聞いてみると、岳人のツッコミよりも卓也のツッコミの方がキレがいいように聞こえる。多分気のせいではないだろう。

「ふん、王（オレ）がどこにいようが勝手であろう」

そんな二人を前にして、王貴は態度を崩さずにそう偉そうに告げた。

確かに王貴の言うとおり、彼がどこにいようが卓也と岳人には関係ないだろう。だが、それはそれこれはこれである。どうして王貴が秘密基地に入り浸っているかも知りたいし、何故この秘密基地内に王貴専用ソファーがあるのかも知りたい。いつ運んだのだろうか。

ここにいる理由はマンガを読むためなのだろうが……。

しかし王貴がそんなことを説明をするわけでもなく、再び、読みかけのマンガに視線を向け、テーブルに置いてあっる“王”と書かれた湯呑（これも王貴専用）を掴む。

こう言っては何だが、趣味が悪い。何故ならこの湯呑の色が普通ではない。黄金でできているからだ。王貴といい、エリカといい。霧夜家の人間はこうも美的感覚が鈍っているのだろうか。

「む？　お茶が入っていないではないか。おい、腹話術師」

「はい！　ただいま！」

由紀江は王貴の持っていた“王”と書かれた金色の湯呑を手に持ち、その湯呑にお茶を入れていく。

「む、無駄がないしどこか自然の流れだ……」

卓也の言うとおり、由紀江のお茶を汲む姿勢に無駄はなかった。

それに、普通は「おい、腹話術師」と言われて何事か聞くのが普通である。だが、由紀江はそれをお茶のお代わりだと思うと、すぐにその行動に移していた。

そして、命令する側と命令される側が自然すぎる。
命令する側でも、ここまで様になっている男はこうはいないだろうし、命令される側でもこうまで様になっている女もいないだろう。

いつの間に、由紀江は王貴の侍女と化したのだろうと聞きたいぐらい自然な動きに卓也と岳人はただただ呆然とするばかりである。
ちなみに翔一は楽しそうに笑っている。恐らく岳人と卓也の顔が面白かったのだろう。

「粗茶ですが……」

湯呑を置く姿にも無駄がなかった。
それは一つの芸術といってもいいぐらい無駄がない。
侍女スキルがあるとしたら、侍女Ａ＋ぐらいあるだろう。

王貴はテーブルに置かれた湯呑を、マンガを持っていない片方の手でつかみ飲む。

「熱くもなく温くもない。相も変わらずいい仕事だ腹話術師。褒めてやろうではないか」

「褒められましたよ松風～」

「やったなまゆっち。今日は記念日だぜ～」

嬉しそうにしている由紀江と松風を見てながら「あぁ、こういった適度な飴と鞭が奴隷を作り上げていくんだな」と思う岳人と卓也であった。

由紀江もかけがいのない風間ファミリーの仲間だ。助けてやりたいと思っている。だが、これは手遅れ。何もかも遅かった。

「あっ、松風の言っていた記念日で思い出した」

と、翔一が唐突にそんなことを言い出した。

それに岳人が視線を王貴から翔一にずらして、

「記念日で何を思い出したのか分からんが、聞こうじゃないか」

「おう。何だかな、今年の体育祭中止になったらしい」

その一言で岳人、卓也が固まる。由紀江は要領を掴めていないのか首をかしげて、王貴は我関せずを貫きとうしマンガを読んでいる。

「す、水上体育祭も？　球技大会も？」

フリーズかた一番早く立ち直った岳人は翔一に詰め寄りながらそう聞いた。

誰がどう見ても岳人は動揺していた。

「あぁ、水上体育祭も球技大会も中止らしい」

「何でだよ！　俺様が唯一活躍できる行事だぞ！　何故そんな中止なんて暴挙に……ハッ！　まさか俺様の活躍をねたんだ誰かの陰謀か――――っ！？」

「それしか活躍できる場所ないって思ってるんだ……。まぁ、運動苦手な僕には関係ないけどおかしいよね。毎年やってるのに今年は中止とか。何で中止になったかキャップ分からないの？」

この世の終わりが来たような悲痛な叫びをあげる岳人と、岳人に容赦のないツッコミを見舞う卓也。

だが確かにおかしな話だった。

川神学園は体育祭限らず、行事ごとには力を入れる学校だ。その

学校が行事ごとを中止にするとは考えられないことだったからだ。

「俺もそこまでは分からねぇよ。先生の話を立ち聞きした程度だし」

と、口元をとがらせ面白くなさそうに言う翔一。
翔一も行事ごとには本気で楽しむ性格なので、体育祭が中止になるのが面白くないのだろう。

「待て、何やら面白そうな話ではないか」

そしてここにも、行事ごとが大好きな人間がもう一人いる。
その人間こそ王貴だ。

王貴は寝転がっている状態から体を起こし、マンガから翔一に視線を向ける。
体をソファーの背もたれに身を預けながら、

「その“たいいくさい”とは何だ？」

「あー、あれだよ。簡単に言ったら体を動かす行事だ」
「ほう、それが今年は中止になると？」
「そうらしい」

そこで、言葉を区切る。
王貴は翔一から視線をずらし足もとに視線を向ける。
そして、ぽつりと一言。

「気に入らんな……」

そう呟いた。
それから視線を翔一に戻す。

「誰に聞いたら分かるのだ？」
「え？　……生徒会長とかに聞けば分かるんじゃね？」
「チッ、面倒だ。鉄心に直接聞けば速い――――――――ん？　その“せいとかいちょう”とは何だ？」

「何だよ。そんなことも知らないのかよ。アレだ、生徒の頂点に立つ人間のことだよ」

今度は岳人が王貴に説明した。

その口調はどこか馬鹿にしたような感じがある。

だが、今の王貴にしてみたらそんな事どうでもよかったのだろう。

岳人の発言に無視し、面白そうなモノを見つけたと言ったように笑う。

「フム、凡愚共の頂点か。フフン、言いことを聞いた。ついでに“せいとかいちょう”なるものにでもなってやるとするか」

そんなことを呟きながら、ソファーから立ちあがり、王貴はこの部屋の出口である扉まで行き、そこから何を言うでもなく出て行った。

それから7秒位、岳人と卓也と翔一と由紀江の動きを止まる。

「もしかして、俺様まずいことを言ったか?」

「多分言ったね。王貴の様子だと本気で生徒会長にでもなるつもりだよ……」

岳人の呟きに、卓也が相槌を打つ。視線は王貴の出て行った扉を向けたままだ。

卓也の言うとおり、王貴は本気で生徒会長になる様子だった。そして何より、この場にいる全員が王貴は言ったことを実行する奴だと分かっている。

「で、でも川神学園の生徒会長って直ぐになれるものなんですか？」

由紀江がどこか慌てながら言うが、このことを疑問に思うのも無理はない。

何せ、入学してまだ半年もたっていないのだ。その疑問はあって当然だろう。

卓也が由紀江に視線を向けながら、

「いいや、生徒の投票で決まるらしいけど、そう簡単にはなれないと思うよ？」

「何にしても面白ぜ！　あいつが生徒会長になったらどんなことやらかすんだろうな！」

翔一はいつも通り、どこか楽しそうに笑っていた。

卓也にも岳人にも由紀江にも、確かに興味はあった。

あの天上天下唯我独尊で傲岸不遜な男が生徒会長になって何をやらかすのか。

多分平穏は訪れないだろう。もしかしたら全校生徒があの男に振り回されるかもしれない。

一同そう考えていると、

「やぁ、みんな居たんだね？　ところで、さっき階段ですれ違った男の子は誰だい？」

王貴と入れ替わるようにして、何やら大きな卵型の物体が入ってきた。

言うまでもない。その物体はクッキーだった。

翔一は、クッキーに王貴を紹介するの忘れて居たことを思い出し紹介することにする。

「あいつは霧夜王貴だ。ほら、前に俺が決闘した相手だよ」

翔一はそういうと、クッキーが何ていうか予想を立てる。
怒るだろうか。驚くだろうか。それとも笑うだろうか。
だが、どれもこれも翔一の予想は外れる。

「へぇーあの子がそうなんだ。てっきりマスターと同年代だと思ったよ」

クッキーは感心するかのように言った。

別に翔一の予想が外れようが、クッキー感心しようが驚きはしない。翔一がいや翔一達が驚いたのはそれではないからだ。翔一たちが驚いたのは、

「ね、ねぇ、クッキーそれってどういう意味？」

卓也が驚きながらもクッキーに質問をする。
卓也は動揺しているが、クッキーはなんてことはないと言わんば

かりに、

「えっ？　王貴って子年下でしょ？　あっ、ひょっとしてまゆっちのボーイフレンド？」

そんな素敵なことを言い出した。ちなみに由紀江は驚きながら顔を赤面させて照れるといった上級的なことをしていた。恐らく、王貴が一つ上ではなかったこととクッキーのボーイフレンド発言が原因だろう。

さらにクッキーは、さらにこの場を混沌に染め上げる。

「でもどう見ても、王貴はまゆっちよりも一つ下か二つ下だよねー。どうして川神学園の制服を着てるの？」

「ちょ、ちょっと待て！　俺様混乱してきた！」

岳人が混乱しながら言うが、混乱しているのは岳人だけではない。この場にいるクッキー以外の全員が混乱していた。

クッキーの言う事が本当なら、王貴は年下ということになる。しかも由紀江の一つ下か二つ下。

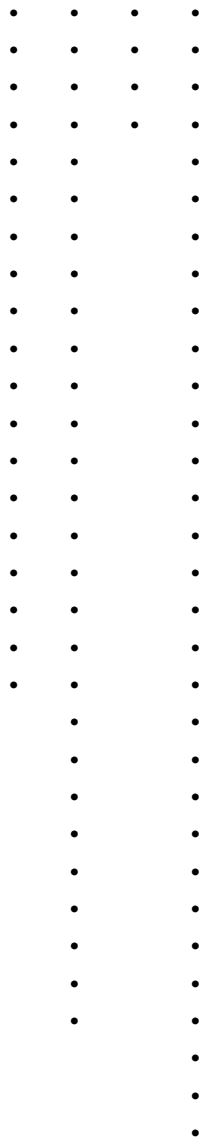
だが、それはありえない。単純に考えて、年齢的にありえないからだ。

「ねぇ、クッキーそれってホントなの？」

卓也が恐る恐るといった感じにクッキーに尋ねる。
だが、帰ってきた答えは変わらなかった。

「ホントだよ。機械である僕が言ってるんだから間違いないよ！」

その一言で、再び部屋一帯が驚愕の色に染まった――――――――――。



「てな事があったんだよ！」

そう翔一が興奮気味に昨日の出来事を、大和と一子と京に教えた。

場所は2年F組の教室。時間は昼休みの時間帯だった。

翔一と大和と一子と京が机同士を向い合せにして昼食を食べている。

翔一の言葉に、大和が驚き、一子が感心していた。京は興味がないといったようにして自分の真っ赤に染まった弁当を食べている。

「へぇー。王貴って年下だったのね～」

「飛び級って……本当にあるんだな……。つか、生徒会長になるってホントか？」

各々思った感想を漏らすが、京一人だけ何も言わずに昼食を食べている。

翔一はそんな京に質問するかのように言う。

「京は驚かないんだな？」

「別に……どうでもいいし」

心底どうでもいいのだろう。京は興味すら示さなかった。

だが、そんな京に一子はにんまりと笑いながら。

「京も難しいお年頃なのねー」

「むぅ、ワン子にそれを言われるとなんだか腹が立つ。……おしおき」

「わきゃーーーー！　たーすーけーてー！」

京と一子のじゃれ合いが始まった。

いつものことだし、周りには迷惑もかけていないし、とりあえず翔一はそれを見守ることにする。

「それで大和はケータイ何か弄って何やってんだよ？」

「いや、王貴が生徒会室に行ったのか調べてたんだけど――――――うわっ、あいつホントに生徒会室に乗り込んでるよ……」

大和がケータイを見ながら言った。

恐るべき情報の早さである。この辺りは、常日頃人脈を大事にしている大和の力といえるだろう。

思わず、翔一は関心をしながら、

「凄いなぁ。大和は情報屋とか向いてるかもな？」

「嫌だ。池袋の情報屋とキャラが被る（声優的な意味で）」

「大人の事情って奴か……。大変だな……」

二人はしみじみそう言う。

王貴の暴挙と真実には驚いたが、とりあえず昼食を食べるとしよう。

二人はそう思い、箸を持ち自分の弁当を食べようとした。一子と京がじゃれあっている横で。

だが、その時。

黒板のスピーカーから音楽が流れ始める。

『ハァイエブリバディ！　みんなどういう昼休みをお過ごしかな？　ＬＯＶＥ川神をはじめるよー』

音楽が一通り流れ終わると、スピーカーから2年Ｓ組の井上準の声が聞こえてきた。

その声はどこか投げやりで、いつもの声質ではない。

というよりも、

「あれ？　大和ー、ＬＯＶＥ川神って水曜日だよなー？」

「確かそうだったと思うけど。……うん、今日は水曜日じゃない」

大和がケータイで確認すると今日は火曜日。本来ならばＬＯＶＥ川神が行われるのは明日のはずだ。

このラジオ放送は何回も聞いているのだ。間違えるはずもない。

『本来なら、明日にＬＯＶＥ川神が始まるんだけど今回は特別版だ

ー。司会はこの俺《2ねんS組の苦労人》こと井上準で始めるぜー！』

明らかに空元気に言う準。

だが、2年F組の全員がスピーカーに耳を傾ける。

ある者は好奇から。ある者は不安そうに。またある者は鬱陶しそうに耳を傾けており、人様々にそれを聞いている。

『今日放送する理由は、とある人物がみんなに宣言したいからなんだってさー！　……つか、これホントに言うの？　えっ？　早くやれ？　いや、やっぱり止めた方が……いや、分かった！　分かったからそれしまえ！　あーもう！　どうなっても知らないからな！』

準は切羽詰まったようにして言うと、一つ咳払いをしてから、

『川神学園98代唯一生徒会執行部会長霧夜王貴のお言葉』

「生徒会執行部……」

「会長霧夜王貴……？」

翔一、大和がそう言葉を漏らす。

さらに、ざわついていた周囲の騒音もぴたりと止まる。
誰も彼もがスピーカーにくぎ付けだった。

『人はぁ！　平等ではない。生まれつき足の速い者。美しい者。親が貧しい者。病弱な体を持つ者。生まれも育ちも才能も皆ぁ！　違っているのだ』

「あいつ、何を言ってるんだ？」

大和がそう呟くが、誰も答えない。
誰もわかっていないからだ。

王貴の演説は続く。

『そう、人は差別されるためにある。だからこそ人は争い、競い合い、そこに進化が生まれる。不平等はぁ！　悪ではない。平等こそ悪なのだ。平等を訴えたゆとり教育はどうだ？　今では脆弱者ばかり。だが、川神学園はそうではない。争い進化を続けている』

「進化……いい言葉だ」

大串スグルがそんなこと言っているが、勿論みんなスルー。

『川神学園が前へ！　未来へと進んでいるのだ。この王（オレ）、霧夜王貴が生徒会執行部会長に着任する事も、進化を続けている証。戦うのだ！　競い奪い支配する。その先に未来がある！』

演説も終盤に差し掛かってきたのか、王貴の弁にも熱がこもり始める。

『オールハイル――――』

『はいはい、そこまでー。王貴回収係のエリーでーす♪』

『同じく小雪でーす♪』

『ぬおっ！？　貴様ら何をしに来た！　ここからがいい所なのだぞ！？』

『アンタのそれはやりすぎ。という事でコユッキー？　この馬鹿を

回収してー』

『あいあいさー』

『待て！　ええい、掴むな！　引っ張るな！　離せぇぇぇぇぇぇぇ！！』

『ハッハー！　あのエリカ先生凄いよぉー！　流石王貴のお姉さんんんん！！』

準が嬉しそうにそう言う。

そこから、声が聞こえなくなった。

それからしばらくして、井上準の声が聞こえてくる。

『ふぅー。回収班を呼んで正解だったな。まったくあの我儘王子ときたらよー。俺だってあの演説の内容が書かれた原稿を渡された時聞いたんだよ？　「こんな演説で大丈夫か？」って。そしたらアイツ「大丈夫だ、問題ない」って言いやがって……。色々、問題ありまくりだよなぁ？　でも、生徒会にいたあの小さい子は可愛かったなー。チャーミングで可愛らしい。何よりも小さい！　いやー、この一点につきるね。あー、メアド交換しておくべきだったなー。マジで。いや、今からでも遅くないか？　ダッシュで行けば間に合ーーーーーーー』

『そこまでですよ、準』

『げぇっ、若！』

『さぁ、帰りますよ』

『ちょっと待って！　俺にはあの子のメアド交換っていう大事な役目が――――――』

そこで、ぷつんとスピーカーが切れた。

そこで、大和はため息をつきながら翔一に話しかける。

「さぁ、キャップ速く食べようぜ」

「いいなー。俺もＬＯＶＥ川神ハイジャックやりてぇなー！」

（駄目だこいつ。早く教育しないと……！）

目を輝かせて興奮気味に話している翔一を見て、素直にそう思う大和だった――――。

第２２話　学園革命伝キリヤ（後書き）

みなさん、おはこんばんちは。兵隊です！

なんか、原作であまりにも生徒会が空気だったので登場させてみました。

それにしても王貴のやっていることはあまりにも王様（オレ）。こんなのが主人公でいいのかと思ってきた今日この頃。いつぞやにご感想にあった「風間主人公じゃね？」とありましたが、正にキャップが主人公ですよねこれ……。

それにしても、最近「真剣で私に恋しなさい」の二次創作が増えてきてますねー。いやー皆さん凄い発想ＡＮＤ執筆力です。思わず嫉妬の炎がメラメラｗ

というのは冗談で、本当に勉強になりますｗ

次回の話はオリキャラを入れる予定なので、よろしくお願いします。多分近いうちに更新する予定です。……多分。

それではご意見ご感想よろしくお願いします！！

第２３話　雑談する五人（前書き）

王貴「さぁ、始まるザマスよ！」

雷太「行くでガンス！」

風子「ふんがー……」

由紀江「あ、あの、あ、あれ？」

エリカ「まゆまゆったらぁ、おどおどしちゃってかーわーいーいー！」

第２３話　雑談する五人

王貴の川神学園生徒会執行部会長就任挨拶を終えてから一日が経った。

時刻は１２時を回っており、今は昼休みだということが分かる。

そんな中、王貴がいるのは生徒会執行部の部室。大企業の社長が座っているかのような椅子に深々と腰をかけ、これまた大企業の社長が使っているかのような専用机に足を乗せて偉そうしていた。これで王貴が葉巻などを口にくわえていれば、どこかのマフィアのボスにクラスチェンジ出来るのかもしれない。

その大企業の社長が使っていそうな机の上には、会長と書かれた三角錐置物が置いてある。

そこで王貴は天井を見上げながら退屈そうにしていた。

思ったより、生徒会執行部会長というのが暇だったのだろう。何もすることがないのだ。

だがこれも自業自得。彼が会長に就任したその放課後に生徒会長がやるような仕事はすべて終わらせてしまったのだから。何を隠そう、この霧夜王貴は張り切っていたのだ。柄にもなく、真面目に仕事をやってしまった。結果、今日やる仕事だった予定のことも昨日

やってしまい、やることがない。

よっぽど暇なのか、椅子についているローラーを使って、椅子を行ったり来たりと遊び始める。本来ならこんな子供じみたことをやらない。凄く暇なのだろう。

ちなみに、生徒会執行部の部室にいるのは彼だけではない。

昨日、王貴がここに奇襲をかけたときに見た背の高い男性と背の低い女性もいる。どうやら決められていた自分の机で仕事をしていた。

そして、部室にあるソファーの上には霧夜エリカが寝転がっている。

何故彼女がいるのかというと、この生徒会執行部の顧問になったからだ。いつなっただとか、元々の顧問はどうしただといった質問は不明である。王貴が会長に着任し、部室に入ったときにはもう彼女は生徒会執行部の顧問になっていたからだ。

さらにもう一人。

王貴の傍らでお盆を持ちながら、オロオロして立っている女子生徒がいた。

黛由紀江である。

何故彼女がここにいるのかといえば、勿論王貴が無理やり連れてきたからだ。

以上五名が、この川神学園生徒会執行部に各自自由に過ごしていた。

いや、あともう一人……。

「俺の名前は暑苦蔵！　生徒会で学園を盛り上げたくて志願した！　どうか俺を使ってやってくれ！」

その人物は、無駄にさわやかで、無駄に暑苦しく、そして無駄に体をテカらせながらそう言った。

正にボディービルダーのような出で立ち。あの筋肉で有名な島津岳人よりも暑苦しかった。

「失せろ。無能は必要ない」

王貴はその暑苦しい男に、視線すら向けずにただ天井に視線を向けたままそう告げる。

それは視線を向けることすら、暑苦しいと言わんばかりの態度だった。

「へへっ！　流石《暴君》とまで呼ばれる人物だねー！　それでこそ落としがいあるってもんさっ！　見てろー？　いつかアンタの口から入って言わせてやるぜー！」

と、暑苦蔵は無駄にさわやかな笑顔を浮かべて去って行った。
最後まで無駄に暑苦しい男だ。

「チッ、暑苦しい。おい、ライタ。外で塩を撒いてくるがいい」

「はいはーい了解だもんねー」

王貴に“ライタ”と呼ばれた人物は自分が座っていた席を立つと、戸棚に向かって歩き始めた。そこに塩があるのだろうか。

この“ライタ”と呼ばれた少年は“本多雷太”。王貴が奇襲をかけたときに驚いていた男性こそこの本多雷太だ。顔は素朴で、人を安心させるような雰囲気を漂わせている。体も大きく、１９０ｃｍはあるだろう。

そしてもう一人。今黙々と自分の仕事をこなしている少女の名前は“服部風子”。黒い髪の毛を腰のあたりまで伸ばしており、右目の片目を髪で覆っている。この少女も王貴が奇襲をかけたときに生徒会執行部にいた。椅子に座っていて、無表情でスカートの裾を両手でぎゅっと握りしめ王貴の奇襲を驚いていた。

ちなみに、この二人は幼馴染だ。

雷太は王貴の指示通り、戸棚にある塩を取るために、戸棚をあけるが、

「会長ー。塩ないもんねー。砂糖ならあるけど」

「何でもよい。とりあえず撒けるだけ撒いてくるのだ。もう二度とあのような暑苦しい屑が来ないようにな！」

あいあいさー、と。雷太は言うと、そのまま部室を出て行った。恐らく部室の外で砂糖を撒いているのだろう。そしてあらかた撒き終わったら、撒いた砂糖を片付けるのだろう。本多雷太という男はそういう男だった。

「チッ、何故こうも生徒会の志願者が来る。生徒会とはそういった場所なのか？　まったくもって鬱陶しい！」

「それはあんたが雷太と風ちゃん以外の生徒会のメンバーを止めさせたからでしょうね。生徒会の椅子が空いたもんだからそれを狙ってきているんでしょ？」

王貴の愚痴に答えたのはエリカだ。その姿勢は寝転がったまま、視線は王貴に向けられている。

王貴は得意げに、椅子の背もたれに身を預けながら、

「当然だ。この王（オレ）の部下に無能な人間など必要ない。必要とするのは使える屑だけよ……」

「まぁ、私も学生の時は同じことをしたし、強くは言えないわねー」

正にこの姉にしてこの弟ありといったところか、確かにエリカが学生の時にやっていた事と、王貴の今やっていることは似ていた。

「いいじゃない、暇しないし。多分これからまだまだ訪問者は来るわよ～」

「こんなもの暇つぶしにもならぬわ。こんなものはただの雑務にほかならん。王である王（オレ）がやる仕事ではない」

その言葉に、エリカはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた。

ああいった笑みをしているエリカは人を弄ろうとしている時の笑

みだ、と王貴は思う。厄介きわまりない笑み。

「あら？　謁見も王としての大事な仕事だと思うけど？」

くそ、やはりかと王貴は心の中で毒づく。
しかも、王貴が絶対反論できない言い方でそう切り返してきた。
王貴も謁見は王としては当たり前な仕事だと思っているからだ。だからこそ王貴には反論できない。反論しようがない。

王貴は思わず舌打ちをした。

それと同時にこの部屋と廊下をつなげている扉が開いた。
現れたのは雷太。
どうやらあらかた砂糖をばら撒き、ばら撒いてしまった砂糖を片付けて戻ってきたようだった。

雷太は笑顔を浮かべている。
その笑みは人を馬鹿にするかのような笑みではなく、自分のことを褒められて嬉しいといったような笑み。どうやら、王貴の「当然だ。この王（オレ）の部下に無能な人間など必要ない」といった発言が聞こえたようだ。

「オイラ達有能だってさっ！　やったもんね風子」

「……風子感激」

と、風子がいつも通りの無表情でそう呟く。

風子と初対面の人物なら、口を合わせて言っているのだな、と勘違いをするだろうが、真実は違う。風子のことを分かっている人間が今の風子をみたら、とても喜んでいるという事が分かる。

「はっはっは、この王（オレ）に仕えるがそんなに嬉しいか。だが、そんな見え透いた態度で王（オレ）の気を引けんぞ？　だが、その嗜好はよし。このビスケットをくれてやろう」

そういうと王貴は席を立ち、自分のポケットから袋詰めされているビスケットを2枚取り出し、雷太と風子にそれぞれ投げ渡した。

何故ビスケットなんてものが入っているのかは簡単なことだ。川神一子の餌のためだろう。

「わーい！　会長、ありがとうだもんねー」

「……わーい」

雷太はそのビスケットを笑顔で受け取り、風子は無表情で受け取る。

正反対な表情だが、感情は2人とも同じで喜んでいる。

その2人の反応を見て、王貴はさらに袋詰めされたビスケットを投げる。

楽しくなってきたのだろう。先ほどまで退屈そうにしていたが、今は笑顔だ。だが普通の笑顔ではない。どこか邪悪で、まるで貧乏人をあざ笑うかのような悪徳貴族のような笑顔。本当に楽しそうで何よりだ。

「そういえば、あのゴメズさんがアンタに遊びに来いって言ってたわよ？」

「なに……？」

だが、エリカのこの一言で王貴の笑みは消え、どこか考えるかのような表情に変わる。それと不快。この2点が王貴の顔を作り上げていた。

一通り考え、結論が出なかったのだろう。

紅い瞳をエリカに向けながら質問した。

「“ゴメズ”とはあの“ゴメズ”か？」

「そう、あの“ゴメズ”さん」

「あの“アダムス”の？」

「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）」

「Ｏｈ……」

エリカと問答をし終え、王貴は両肩をガクンと落とした。本当に残念そうに、絶望に打ちひしがれながら。

そんな王貴を見て、エリカと王貴以外の人間は彼の姿を見て疑問に思う。あんな姿など見たこともないからだ。あの唯我独尊で傲岸不遜を地で行く男があんな態度をとるなんて。会話に出てきた“アダムス”やら“ゴメズ”とやらは何者なのだろうか。

さらに王貴の不幸は続く。

「ま、まさか……。王（オレ）一人か……？　王（オレ）一人が招待されたのか……？」

「……残念ながら」

本当に残念そうにつぶやくエリカ。その口調はまるで、どこかの戦場に行くことを告げるような口調だった。

その一言がスイッチとなったのだろう。

王貴の体が震え始める。それはもうガクガクと。ブルブルと震え始めた。ちなみに今は冬ではない。もう夏だ。部屋はそんなに寒くはない。むしろ熱いといえるだろう。だが、王貴は震えていた。

「お、おおお王（オレ）は行かぬぞ！？　誰があんな異端者どもの巣窟になど行くものか！！　絶対に！　絶対に行かぬからな！」

「か、会長！　落ち着くもんね！　と、とりあえず深呼吸を――――！？」

暴れる王貴を、雷太が後ろから羽交い締めする要領で捕まえる。勿論王貴も暴れるが相手が悪い。相手は１９０ｃｍ近くもある大男で、王貴のような貧弱ボディじゃその拘束は破れない。

「ええい、離せライタ！　い、嫌だ！　絶対に行かぬぞ！」

王貴は完全にテンパっていた。

いつもの不遜な態度はなく、欲しいおもちゃの前で地団駄を踏む子供のようだった。とにかく尋常ではない王貴の反応。益々、その“アダムス”や“ゴメズ”なる人物に興味がわいてきた。

「え、エリカせんせー。その“アダムス”さんとか――――ご、“ゴメズ”さんて誰なんだもんよ？」

王貴を羽交い締めながら聞く雷太。その間にも王貴は暴れている。だが、雷太にはその抵抗はびくともしない。所詮王貴は気を使えなければ、この程度。自分よりも筋力がある人間には手も足も出ないのだ。

なお暴れている王貴を横目で捉えながら、エリカは寝転がりながら呟き始める。

「私たち、キリヤカンパニーが《成り上がりのキリヤ》と呼ばれているのを知っているわね？」

雷太、風子、由紀江がうなずくのを見ると、エリカは体をソファーから起こし、

「誰であれ、最初から金があるわけじゃない。それは霧夜も同じこと。ならば、どうやって《成り上がりのキリヤ》と呼ばれるまでに成長したか。……答えは簡単よ。出資してもらったの。その“ゴメズ・アダムス”にね」

ふぅ、と深くため息を吐き、続けた。

「その一家が、“アダムス一家”が普通の金持ちならよかったんだけどね。その一家は普通じゃなかった」

「奴らは“異端者ども”だ……」

エリカの話に割り込むようにして王貴が呟いた。もう暴れておらず、いつもの傲岸不遜な王貴だった。

「あ、会長。元に戻ったもんね！」

「たわけめ、さっさと離せ」

「ご、ごめんなさいだもんね！」

雷太は王貴を拘束していた羽交い締めを解除した。

「話を戻す。奴らは“異端者”だったのだ。人とは真逆の人間。そうだな、例を出すとしよう。時に貴様ら、人殺しはどう思う？」

「だ、駄目だと思います！」

「駄目」

「いけない事だもんね！」

由紀江、風子、雷太の順番で答える。

「一般人の考えでは、そういう考えになるだろうな。だが、アダムス家は違う。奴らは喜んで人間を殺すし、楽しんで人間を殺す」

エリカ、王貴以外のこの場にいる人間が絶句する。

それを見ると、王貴は顔を顰めながら、

「だが殺し屋の類ではない。それが厄介きわまりない。時に身内を殺し、時に他人を殺す。それがアダムス家だ。……家族仲はよいみたいだがな」

「昔、霧夜家とアダムス家の親睦という事で、私と王貴がアダムス家に1週間ほどホームステイしたことがあったのよ。そこで……、」

エリカは王貴をチラっと見ると、

「王貴が気に入られちゃったのよ。あの時ほど、1週間という期間が長く感じたことはなかったわ……」

「姉上はまだよいではないか……。王（オレ）は拷問されかけたのだぞ……」

2人の顔は憔悴仕切った顔になっていた。それにどこかやつれている。2人の反応が尋常ではない。

「ご、拷問ですか？」

由紀江が素っ頓狂な声を上げた。無理もない。そんな言葉など日々聞いている人間ではないだろう。

それをエリカはヤケクソ気味に、

「だから言ったでしょ？　“異端者”だって。彼らにとっては拷問は遊びと同じなのよ。しかも驚くことに、ドSのくせにドMなんだもの！　まぁおかげでこっちは多少なことには驚くことはなくなったけどね！　貴方達も“アダムス家”には喧嘩売るんじゃないわよ。……死ぬから」

「とにかくだ。王（オレ）はあんな所、もう二度と行かぬからな！　絶対にだ！」

「別にいいけど、日本（ここ）にまで来そうなんだけど……」

「いや、だがそこまで……」

「いいえ、絶対に来るわね。得に“ウェンズデー”はアンタのことを、ものっっっ凄く気に入ってたし」

「――――――――――、」

エリカの言葉を聞くと、王貴は崩れ落ちる。膝は地面につき、手も地面に着く。そこからブツブツと「止めよ。そこは入れるところ

ではない。出すところだ」とお経のように呟き始めた。
今のような王様（オレ）ではなかった頃だったとはいえ、王貴のこれほどのトラウマを刻みつける“アダムス家”というのはそれほどに恐ろしいものなのか。

「そ、そう言えば、どうして私がここにいるんですか？」

何とか、この場の空気を何とかしようと由紀江が空元気にそう問いかけた。

王貴はその場に跪きながら、エリカは両肩を落としながら由紀江を見る。両者共通して言えることは生気のない眼をしていることだった。

「雑務に使えるからだ」

「色々有能（特におっぱい）そうだったから？」

と、それぞれバラバラに答える。王貴は雑用をさせる気満々だし、エリカに至っては生徒会に関係ない。もはや私利私欲の塊の願望だった。

だが、その一言で、エリカの眼が生気を取り戻していく。その視線はどこか一か所に釘付けだ。それは由紀江の胸にそびえたつチョモランマ。それは現代の神秘。男の夢が詰まっている袋。いわゆるおっぱいだ。

「ちょ～とまゆまゆ～？　お願いがあるんだけど～」

「な、何ですか？」

エリカが両手をワキワキと開いたり閉じたりと繰り返し、由紀江に近づく。その両手の仕草はどこかエロい。エロエロだ。

由紀江もエリカの何とも言えない雰囲気に押され、エリカが近づくたびに、一歩後ろに下がっていく。

エリカが踏み出すたびに由紀江が一歩後退し、さらに踏み出すたびに一歩後退する。正に一進一退の攻防。

だが、その攻防も呆気なく終わりを告げる。由紀江はもう一歩も下がれない。何故なら背後には壁。追い詰められたからだ。

「御託入らないでしょう。ちょっとそのけしからんおっぱい揉ませなさい。大丈夫大丈夫。最初はくすぐったいと思うけど、後々気持

ち良くなっていくから～♪」

「えっ、えっ？　えっ！？」

「ん～その表情いいわね～。何だかよっぴーを思い出すわ～」

ぐへへへへ、と笑いながら由紀江を追い詰めるエリカ。表情といい、笑い方といい女性がするようなものではない。

「か、会長！　どうするもんね！？　このままじゃ、この二次創作がＫＥＮＺＥＮじゃなくなるもんね！　インモラルだもんね！　レズビアンだもんね！？」

「ハッハッハ！　良いぞ、もっとやるがいい！」

「あ、アレ～？　さっきまで落ち込んでたのにもう元気に――――って、それどころじゃないもんね！　１８禁になってしまうもんねぇぇぇ！？」

トラウマを刺激されていた王貴は華麗に復活を遂げ、雷太は何とかしようとあたふたしている始末。

男連中は役に立たないことが分かった。

その間に、エリカは己の目的を遂げるために、着々と歩みを進めた。

「ご、後生だ〜、エリカの姉さんー！　まゆっちの代わりにオラを好きにしてくれー！」

その間に、松風が立ち塞がる。
だが、そんな防壁など今のエリカには効かない。

「邪魔よこの駄馬」

「あれー」

「ま、松風ーーー！？」

エリカは松風を掴みあげると、そのまま適当に放り投げた。
もうこうなったエリカは止まらない。そのまま、由紀江に襲いかかる――――――、

「……」

「あら？」

「ふ、ふうちゃん……？」

が、服部風子がその間に割り込み阻止した。風子は両手を広げ、まるでそれは由紀江を守っているようだった。勿論、表情は無表情で、半眼だ。

そんな健気な態度に、揺れ動く霧夜エリカではない。むしろ、邪魔されて不愉快と言わんばかりに顔を顰め不機嫌そうにしている。

「ちょっと退きなさいふうちゃん。いくらアンタが、可愛くてプリティーでも許さないわよ？」

「……っ！」

だが、風子は首を横にフルフルと振り、エリカの要求を拒否した。

「駄目……」

「えっ？」

「駄目……」

風子は無表情のまま、か細い声で、

「由紀江、生徒会。仲間。駄目」

と、言葉を紡ぐ。
だが、エリカは諦めない。

「ちょっとだけ」

「駄目」

「ほんの少し」

「駄目」

「先っぽだけでも」

「駄目」

勿論、風子も引かない。
ライオンと犬の戦い。いや、ライオンとチワワのような戦いだった。

それから見合いこと数秒。

「はぁ、わかったわよ。今日は諦めるわ。まったく、学生の時は力づくで揉んだって言うのに……。大人になったわね～私も」

エリカは肩をすくめ、首を横に振る。
何と驚くことに先に折れたのはエリカの方だった。だが、視線は由紀江の胸に集中しており、まだ揉むことを諦めていないようだった。何て執念深いのか。彼女はこれからも、虎視眈々と狙い続けるだろう。狙った獲物は逃がさない。それが霧夜エリカという女性だ。

「風ちゃん、ありがとう」

由紀江もニッコリと、風子に笑顔を送る。傍から見れば、２人は友達のようで、どこかほほえましい光景だった。

風子も由紀江の謝辞に、無表情ではあるがフルフルと静かに首を横に振ると、おもむろに由紀江に近づき、片手でチョイチョイと片手で顔を近づけるようにジェスチャーを送る。

「……？」

由紀江は風子の行動を疑問に思いながら、顔を近づけた。風子が何をするか本当に分からなかった。何せ風子は無表情で感情を表情に出すことはない。正に川神のミスポーカーフェイスといってもいいぐらいの人間だった。

風子は由紀江の顔が自分の顔ぐらいまで来るのを確認すると、おもむろに由紀江の両頬に両手を添えるようにして自分の顔に引き寄せた。

そして、

「……」

「――――――ッッッ！？」

自分の頬を、由紀江の頬に擦り寄せ始めた。突然のことに由紀江は驚き、次第に由紀江の顔が真っ赤に染め上げられる。その反応は無理もなかった。何せ風子がこんな行動を起こしたのは本当に突然だったのだ。しかも風子の見た目からして、こんな行動に移すわけもない思っていたのだから驚くのも無理はない。

風子は由紀江に頬ずりすると、それから一歩二歩下がり、いつも通り無表情で、

「風子友達……」

その発言で、固まっていた由紀江はバッと風子の顔を見る。その表情は、驚いているのだか泣きそうなのか分からない表情だった。だがとりあえず驚いている事が分かる。

「ほ、本当ですか！？　風ちゃん！」

最速のスピードで風子に近づき、その両手の手を取りながら風子に興奮気味に質問をする由紀江。誰がどう見ても由紀江は興奮して

いた。

風子は由紀江が最速のスピードで詰め寄ろうが彼女は変わらず無表情で、一つ縦に首を振った。その答えはイエス。つまり風子は由紀江の友達という事。

「そ、その！　え、えっと！　ありがとうございます！！　私頑張りますね！！」

何を頑張るのか分からないが、由紀江はブンブンと風子に向かって頭を下げていた。それはあまりにも早すぎて、残像が見えるぐらい。まったくもって身体能力の無駄遣いである。

「何だか分からない人もいるみたいだし、オイラが説明するもんね！　風子は自分が仲好くなりたいと思った人に頬ずりをする癖があるもんね。つまり人懐こい性格なんだもんね」

「だから王（オレ）にもあのような行動をとった訳か。ふん、馴れ馴れしい奴め。おい、腹話術師。それをやられたのは貴様だけではないからな。勘違いをするなよ？」

「そうよ。私たちだってやられたんですからね」

雷太の解説を聞き、霧夜姉弟が各々好き勝手発言した。とりあえず彼らが言いたいことは、何もお前が特別じゃない。勘違いをするな。と言いたいのだろう。姉弟そろって負けず嫌いな連中だった。

だが霧夜姉弟の悪態も、今の由紀江に効果はない。正にこの世の春が来たと言わんばかりにハイテンションだ。それは今にも飛び跳ねそうだった。

「えへへへ……。これでお友達が１２人に増えましたよぉー。サッカーで交代が出来る人数ですぅ」

蕩けそうな笑顔で言う由紀江。本当にうれしそうだった。

「へぇー。それって誰なのよ？」

エリカが興味を持ったのかそう聞いてきた。恐らく彼女が興味が湧いたのは１２人の友達というところだろう。その中に風子が含まれているとして、あと１１人。誰が彼女と友達になったのか興味が湧いた。

「えっとですねぇ。風間ファミリーの皆さんと、大和田さん、不死川さん、総理さん、そして風ちゃんです！」

「へぇー。あの不死川の小娘がねぇ……」

エリカは含み笑いをしながらそう聞きいれる。思わず奇妙に感じた。そう彼女がそう思うのも、不死川心という人間を理解してのことだった。心は自ら友達を作るといった性格ではない。それも意地を張って作らないのだ。だが、由紀江が友達だというからには、本人にも了解を得たのだろう。

はたして、不死川心は黛由紀江の性格を気に行って友達になったのか。はたまた家柄で判断し友達になったのか。恐らく後者だとエリカは思う。だがまぁ、どっちでもいいし、由紀江からしてみてもどっちでもいいのだろうと思い口をはさまない。ツッコムだけ野暮と思ったのだろう。

「由紀江ちゃん……」

男の声が聞こえた。

この生徒会室に居る男は、王貴と雷太のみ。その内、王貴は興味

がなくなったのかエリカが寝転がっていたソファーに座りこみマンガ（王貴が生徒会室に持ち込んだ）を読んでいたので、その声は王貴のものではない。というよりもこの声質を出せるのは一人しかいない。

雷太だった。

雷太はまるで、泣きそうな声と悲しそうな表情でいる。

「オイラの名前がないもんね……」

そうだった。今さっき由紀江が上げた『友達になった人達』に雷太の名前はない。そのことが、今の雷太が泣きそうになっている原因なのだろう。何て涙もろい男なのだろうか。

「ら、雷太さんもお友達になってくれるんですか！？」

「当たり前だもんね！　オイラは由紀江ちゃんの友達だもんね！」

「あ、あの！　よろしくお願いします！」

「こちらこそだもんね！」

そうして、両者が同じタイミングで頭を下げる。そのお辞儀の仕方はほとんど一緒。ただ違うのは由紀江の方が頭を下げるスピードと数が勝っているぐらいだ。

王貴はそれに見向きもしないで、マンガを読んでいる。彼にとって由紀江に友達が出来ようが出来まいが関係ないからだ。そして友達を作るといった行為も否定する気もない。何せ、彼はその友情で一度風間翔一に敗れているからだ。それを否定するという事は、それに負けた彼を否定すると同じである。だから否定をしない。馬鹿馬鹿しいと思いつつも否定しない。

そんなこんなで、マンガを見て気を紛らわせようとしていた。

そうしていると、コンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。だが、王貴はそれに応対する気配もする気もない。ノックされたドアを見ようともせずに、視線はマンガにくぎ付けになっている。

だから、仕方なく、

「はいはーい。開いてるもんねー！」

雷太が応対することにした。

というよりも、応対せざるを得なかった。王貴はマンガに夢中で、風子は無口、由紀江は舞い上がっておりヘブン状態、エリカに至っては生徒会メンバーではなく顧問といった立場だ。ともなれば必然的に雷太が対応せざるを得ない。

「失礼する」

入ってきたのは、川神学園の女子制服に身を包んだ女子生徒だった。髪はブロンドでその髪に赤いリボンをつけている。
疑うまでもない、クリスティアーネ・フリードリヒだ。
ヘブン状態から帰ってきた由紀江は、クリスの姿を見ると少し驚いた声で、

「クリスさん！」

「おっ、まゆっち。まゆっちも生徒会メンバーなのか？」

「え、えぇ。まぁ一応です。クリスさんも生徒会メンバーに？」

「いや、自分は少し違う。……霧夜王貴はいないのか？」

クリスは生徒会室をきょろきょろと見渡した。
王貴を探しているのだろう。現に王貴のいるソファーに視線が止まると。つかつかと王貴の元まで歩みを進める。

「霧夜王貴」

クリスに呼ばれるが、王貴はクリスの方を見ない。クリスよりもマンガなのだろう。マンガは王貴の視線を独り占めしていた。
その反応にクリスはやはり面白くないような顔をし、むすっとしながら、

「おい、呼ばれているときは顔ぐらい上げたらどうだ……？」

だが、それでも王貴は顔を上げない。気づいていないのか、はたまた気づいているのだがクリスにわざと視線を送らないのか。恐らく、いや絶対後者なのだろう。
クリスは王貴の反応にプルプルと怒りに震えるが、何とか押しとどまり首をブンブンと横に振る。そのあと呪詛のように「自分は大人自分は大人自分は大人自分は大人自分は大人自分は大人自分は大人」と呪文を唱えるが如く繰り返す。

王貴はそれを聞くと笑いを堪えるよう体を震わせていた。これで絶対気づいているのだが無視しているという事が分かった。

「霧夜王貴。自分を風紀委員にしてくれ」

それからしばらくして、笑いが収まったのか。
ようやく王貴はクリスに視線を送る。上から下へ、下から上へ。
その視線はまるで観察するような視線だった。そして――――――、

「却下」

「な、何故だ！」

クリスは身を乗り出すかのように王貴に詰め寄るが、

「たわけめ、どこの世界に馬で登校してくる風紀委員がいるというのか」

「うぐっ！　し、しかしアレは偶にだぞ……？」

「偶にでも駄目だ。貴様は馬鹿か」

「ば、馬鹿とは何だ！」

「いや馬鹿だ貴様は」

「倒置法で言われた！？」

何だか分からないがショックを受けるクリス。何だか涙目になっているが、王貴には関係のないこと。視線をクリスからマンガへと戻す。判定は下した。もはや意見を聞くことすら億劫になったのだろう。

「う、うぅぅうう……！　こ、これで勝ったと思うなよ！　次も来るからなー！」

クリスはそのまま走って出ていく。泣いていたのは王貴の見間違いだろうか。

「泣ーかしたー。泣ーかしたー。せーんせいに言ってやろー」

と、エリカがニヤニヤ笑いながら言う。本当に泣いていたようだ。王貴の見間違いではないらしい。

「誰が泣こうが、喚こうが王（オレ）の知ったところではない。それよりも腹話術師。あの女はもういないか？」

マンガを放り投げ、由紀江に顔を向けながらそう聞く。

由紀江は少し驚きながら、

「は、はい。今クリスさんはこの階にはいません」

「そうか。おい、フウコ。風紀委員の空欄の場所にあの女の名前でも書いておけ」

そういうと、王貴は立ちあがり会長の専用机まで歩き、椅子に腰を下ろす。そして、そのまま机に両足を乗っける。

その様子をエリカは、これまた意地の悪い笑顔を浮かべたまま、

「あら？　あの子を風紀委員にするの？　却下したのに？　随分とお優しいのねー？」

「勘違いするな、アレは使えると思い採用したまで。使えぬ愚図であるのならば、容赦なく切り捨てる。それにあくまで仮だ」

ぶっきらぼうに王貴はそういうが、エリカの意地の悪い笑顔はやまない。むしろ、笑顔が増している。

王貴はそんな姉を視界に入れないようにして、生徒会室から見える窓の景色を見る。

空は晴天――――――とまでいかないが、晴れている。これから曇りになることはまずないと言えるぐらい晴れていた。

「あっ、そういえば」

雷太が思い出したかのように、声を上げる。

「最近、工業地帯方面が物騒らしいもんね。近々そこらへん方面に

行かないように会長に呼び掛けてほしいもんね」

「ほう、それは中々面白そうな話であるな」

そういうと、王貴は考えるそぶりを見せて、

「よし、王直（オレ）々に出向き、危険かどうか見極めてやろうではないか」

ご機嫌にそんなことを言い始めた――――――――――。

第２３話　雑談する五人（後書き）

どうも皆さん、おはこんばんちは。兵隊です！！

我ながらスピード更新であります。
いやぁー頑張った。頑張ったｗｗ

この話で出てきた謎の一族“アダムス一族”。知っている人は知っているのではないでしょうか。
はい、大変ユーモアなファミリーですよ？ｗ
ユーモア過ぎて、クレイジーです。
詳しくは、アダムスファミリーで検索してみてくださいｗ

さぁ、ここから物語は加速していきます。
本多雷太と服部風子の紹介を載せましたので、よかったら見ていってください。何だか貧弱王の紹介よりも頑張ってしまったｗ

それでは、お気軽にご意見ご感想をお待ちしております！！

あぁ、それにしても何だか疲れたな……。
もう、ゴールしてもいいよね？

第二回　王貴の一問一答（オリキャラ紹介編）

準「さーて突然始まりました紹介コーナー。みなさんのアイドル井上準です」

王貴「愚民ども王（オレ）を崇めろ！　霧夜王貴だ！」

準「コラコラコラコラ！　いきなり何言いだすかなこの馬鹿王は！？　もう少し、自重しろよ！　そんなんだから『風間の方が主人公やってる』とか『主人公（笑）』とか言われるんだぞ？」

王貴「まったくだ。誰が主人公（笑）だと言うのか！　王（オレ）は主人公（王）だ。決して（笑）などではない！　これだから屑は分かっていない」

準「あっ、おこるところそこなの……。まぁいいけどさ、俺はお前が年下といった真実にびっくりだよ」

王貴「アレか？　実のところ言うとな、第一章で伏線を引いていたぞ？」

準「えっ？　うっそ。俺全然分からなかった……」

王貴「ふん、仕方ない。王（オレ）自ら直々に教えてやろう。まずは――――、」

＜＜鉄心が王貴を２年Ｓ組に編入させたのは至極簡単な理由だった。

＜＜個性の塊。いや、個性の爆弾のような王貴を１年生が扱いきれるわけがない。

＜＜ならば３年生ならいいのではないかと、疑問があるだろうがそれも同じ。川神百代以外に３年生に目立つ存在など、鉄心には心当たりがまったくなかったのだ。

＜＜そう言う理由で２年Ｆ組か２年Ｓ組のどちらかに王貴を編入させようと鉄心は考えた。

＜＜しかし、２年Ｆ組と王貴の相性はすこぶる悪いだろう。いや、悪いってモノではない。それはもう、水と油のような関係と言っても言い。

＜＜そのため、鉄心は王貴を２年Ｓ組に編入させたのだ。

＜＜しかし、それでも鉄心は心配だった。

＜＜何せ２年Ｓ組だ。

＜＜定期試験で上位３０名だけが入れる特進クラス。そのためかほとんどの者達がプライドが高い。そんな場所に王貴を入れる。それがどれほどの事か、鉄心は考えるだけで身震いする。

王貴「ここだ。まず、貴様らと同じ年齢ならば、鉄心が一年生のクラスに入れようとしたのはおかしいだろう」

準「まぁ、確かにな……。普通はしないけど……」

王貴「まだあるぞ」

《第一章　2年S組にて》

＜＜その少年に英雄は見覚えがあった。いや、それはよく知る人物だった。

＜＜昔、それは少年がまだ他人を信じれた頃。英雄を“兄”と慕ってくれていた少年。

王貴「ここだ。まだ、幼かった頃とはいえ何故この王（オレ）が同じ年齢の男を“兄”呼ばわりせねばならぬのだ」

準「いや、確かにそうだけどさ。何か、分かりにくくね？」

王貴「うむ。作者も『あまりに分かりやすいと面白くないだろ。常識的に考えて』と思い、わざと分かりにくくしたようだ」

準「何が面白くないの?!　いいよ!　分かりやすくしようぜそこはさ!　……それで他には?」

王貴「む?　まぁ、無いな」

準「少なっ!　えっ、これだけ?　これだけで伏線って言い張るのか!?　馬鹿だろ!　こんなもん伏線でもなんでもねぇよ!」

王貴「だが、分かる奴は分かったらしいぞ?　メッセージボックスで『王貴って大和たちより年下なんですか?』といったツッコミが来て、作者も驚いたそうだ」

準「何で、作者が驚くんだよ!　一応伏線なんだろ?!」

王貴「王(オレ)が知った事か!　あまり度が過ぎると串刺しにするぞ!」

準「やってみろよバーカ!　ここは本編となんら関係ないし、ギャグ補正で何とかなるんですぅー!」

王貴「ぬぅ、何だか腹が立つ……。まぁ、ギャグ補正があるのならばいたしかたない」

準「つー訳で、ちゃちゃっと終わらせようぜ」

王貴「うむ。今回紹介するのは王(オレ)の下僕。本多雷太と服部風子だ」

本多雷太
ｃｖ：無し（皆さんの脳内再生にお任せします）
身長：１９１ｃｍ
体重：１０１ｋｇ
血液型：Ｏ
誕生日：５月５日
一人称：オイラ
あだ名：ライ、お父さん
武器：拳
職業：川神学園１年Ｂ組（自宅住まい）、川神学園生徒会執行部書記
家庭：父母健在。弟、妹がいる
好きな食べ物：グミ
嫌いな食べ物：なし
趣味：おいしい紅茶作り
特技：重ねたトランプの一部だけを千切る事
大切なもの：友達、家族
苦手なもの：辛い食べ物
尊敬する人：強い人（例：川神百代、川神鉄心、霧夜王貴など）

川神学園生徒会執行部の書記。口癖は「～もんね」
服部風子とは幼いころからの知り合いで、腐れ縁でもある。
人を安心させるような雰囲気を纏っており、クラスの中ではお父さんとも呼ばれていたりする。文武両道でなんでも一通りこなせる
ある意味完璧超人。しかし、女関係は“頼れる人”から脱すること

が出来ず、良い人止まり。だが本人もあまり気にしていない。ある意味で島津岳人とは正反対な人物。
その外見とは裏腹に、手先が器用であるため、裁縫も得意としている。

戦闘スタイルは無手勝流。戦い方もド素人だが、結構強い。腕力では島津岳戸に負けるも、握力では本多雷太の方が勝っているだろう。この二人が戦うことになれば、おそらく怪獣映画にも匹敵する迫力になることだろう。

霧夜王貴になついているのは、霧夜王貴が不良を叩きのめす現場に偶然に見て、そこから憧れるようになる。といっても、彼が憧れているのは霧夜王貴だけではないので、何だか希少価値が下がっている気がしないでもない。

最近では侍女スキルＡ＋の黛由紀江と友達になり、家事を教えあっている模様。そのためか益々本多雷太の主夫スキルが上がっているようだ。この二人の会話は団地妻のそれらしいことで有名らしい。

準「とまぁ、こんな感じか？」

王貴「ちなみに、当初のライタのキャラはこんな大柄ではなかったらしい」

準「んじゃ、どんなんだよ？」

王貴「うむ。巷で流行っている“男の娘”だったらしいぞ？　分かっていると思うが、身長もこのような大きさではない」

準「ふーん。それで、何で変えたんだよ？」

王貴「作者が言うには『それじゃ、あまり面白くないだろ。常識的に考えて』らしい」

準「……あいつの面白いの基準は何なんだ？」

王貴「知らんし、どうでもいい。さぁ次だ」

服部風子
ｃｖ：無し（皆さんの脳内再生にお任せします）
身長：１４５ｃｍ
体重：３９ｋｇ
血液型：Ｂ
誕生日：１１月１１日

一人称：風子、わたし
あだ名：風ちゃん
武器：ハルバート
職業：川神学園1年B組（祖母の家に居候）、川神学園生徒会執行部会計
家庭：父母健在。祖母が1人いる
好きな食べ物：お菓子（特にアポロ）
嫌いな食べ物：コーヒー
趣味：読書（マンガのみ）
特技：ステルス
大切なもの：霧夜王貴、本多雷太、霧夜エリカ、黛由紀江
苦手なもの：おばけ
尊敬する人：霧夜王貴、本多雷太、霧夜エリカ、黛由紀江

川神学園生徒会執行部の会計。
本多雷太とは幼いころからの知り合いで、腐れ縁でもある。
間違いなく、美少女の部類に入るのだが、雰囲気で損をしている。だがそれがいいというマニア層もいるようだ。
毎日髪型が違うのだが、それはいつも本多雷太がやっているため。霧夜王貴が生徒会長になってからは、霧夜エリカと黛由紀江も服部風子の髪型を変えるのに参加している。ちなみに霧夜王貴は面白半分で髪型を弄っている。
暗い雰囲気を纏っているくせに、人懐っこい。他人の頬と自分の頬を擦りよせる癖があるが、誰にでもやるわけではなく、仲良くなりたいと思っている人物のみ行っている。

どこかの有名な忍者の一族で、幼いころから訓練を受けている。

そのためかしゃべり方も独特で、すべて漢字を使うようにして喋る。普通に喋れるには喋れるのだが、舌足らずのような喋り方になる（全部ひらがな）。

忍者の一族なのだが、忍術の才能がない。だが、両親との仲は悪いわけではなく、むしろ仲がいいと言ってもいいだろう。武器はハルバートを使用している。力任せに振るわれるハルバートは、正に嵐のごとし。以外に力が強い。

外見を見れば、頭がよさそうに見れるが、実はバカ。小説を読むような外見をしているが、実はマンガしか読まない。字を追うのがだるいのだろう。手先も不器用だが、運動だけはピカイチと悉くこちらの予想を裏切ってくっる人物である。

本多雷太とは正に凸凹コンビといったところだろうか。

そんな将来の夢は、日本から試験というものを無くすことらしい。

準「キタ――――（ﾟ∀ﾟ（ﾟ∀ﾟ。（☆∀☆）ﾟ∀ﾟ）∀ﾟ）ﾟ）――――！！！　マイ　スウィート　エンジェル・ズ！！」

王貴「（ウザい……）貴様２Ｆ委員長とやらはどうしたというのだ

？」

準「ばっかオメェ！　エンジェル、ズ！　“ズ”だよ坊や。複数形なの！　委員長も天使であり、風ちゃんも天使なの！」

王貴「（これが終わったらこいつにエンリル一発ぶち込むとするか）フウコも当初とはキャラが違うらしい。今のような黒髪ではなく、ピンク色の髪で“ツンデレ”だったらしい。どこぞのキャラを彷彿とさせるな」

準「ピンク色でツンデレとかどこにでもいるしな！　それで、取りやめた理由は？」

王貴「うむ。『それでは面白くないだろ。常識ｔ（ｒｙ』といった理由らしい」

準「ホント、面白いの基準が分からないが、風ちゃんが可愛いからいいか！」

王貴「次は好感度表だ。安治薄　寺とやらが気になると言うのでな。王(オレ)が仕方なく教えてやるとしよう。王たる者、サービス精神は大事にせねばならんからな」

準「おいぃぃぃぃぃぃぃ！！！　なんてこと言いやがる！　おまえちょっとそれは失礼すぎるだろ！　すいません！　ホントすいません！」

王貴「これが現在の好感度表だ」

川神百代　９０％
川神一子　６０％
椎名　京　－１５５％
クリス　－４０％
黛由紀江　７５％

榊原小雪　８５％
不死川心　８０％
忍足あずみ　－５０％
マルギッテ　５０％

霧夜エリカ　２３６％
？？？　１０８％

準「川神と黛が上がって、クリスと椎名が下がってるな。後は変わらないままか？　――――――あ、いや一人だけぶっちぎりな人がいたな。相変わらず凄いなお前の姉ちゃん」

王貴「何でも、あと三回変身を残しているらしい」

準「ところでこの？？？って誰だよ？」

王貴「さぁな。どうでもよい。どうでもよいのだが……」

準「ん、何だよ？」

王貴「その？？？を知っては最後、ＢＡＤＥＮＤ逝き確定というか。ＤＥＡＤＥＮＤというか。そんな感じがするのだ」

準「んん？　何かわかんねぇなぁ。それにしても、風ちゃんが入ってないのが、ちょっと驚きだわ」

王貴「奴は所詮モブだからな。攻略対象にはならんらしい」

準「うんッ！　グッジョブッッ！　良い仕事したぜ作者よぉ！」

王貴「まぁ、新顔はこんな感じか」

準「あっ、そういえばお前とお前の姉ちゃんが恐れている“アダムス”って――――――」

王貴「さぁ、裁きの時間だ――――――――」

準「あれ？　何だか体のいたるところが鎖で縛られているよ？　んん？　王貴君。何、その円柱の剣。グルングルン凄い勢いよく廻るもんだからめっちゃ怖いんですけど……」

王貴「少し、頭冷やそうか」

準「ちょっと、まっ――――――――――」

第二回　王貴の一問一答（オリキャラ紹介編）（後書き）

？？？については秘密という事でｗｗ

第２４話　クリスと王貴（前書き）

準「皆さ～ん♪　ロリこんばんは～！　元気がないな～。もしかしてこんにちはの方かなぁ～？　皆さ～ん♪　ロリこんにちは～！」

王貴「五月蠅い。黙れ」

第２４話　クリスと王貴

授業もすべて終え、放課後になる。
時刻がちょうど放課後が終わる時間帯のせいか、川神市には学生が数多く居た。ある者はそのまま帰宅する者。ある者はそのままゲームセンターに行く者。ある者は七浜市へ遊びに行く者。他にも多数の目的があることだろう。

だが霧夜王貴のように、自ら進んで危険な場所へ行こうとする者はいないだろう。
彼は川神市の工業地帯に居た。学生の大半は親不孝通りが川神で最もアンダーグランドの場所というが、それは間違いだ。この工業地帯こそ、川神市でもっともアンダーグランドの場所だ。
辺りは薄汚れ、空気も汚れているかのような場所。街並みも普通の街並みではない。家の窓ガラスが破られている家もあるし、炉端には倒れている人もいる。
そして、何よりも空気が違った。ギスギスと刺さるかのような気配は悪意ある視線のようで、ここから歩きだせば、抜け出せない底なし沼のようにも見える。

正に無法地帯というのはこのことを言うのだろう。

（まるで、サファリパークだな）

王貴は鼻で笑う。

空を見上げると、さっきまで晴れていた青空も雲に覆われ、太陽の日差しすら見れない。辺りに工場から出る煙が原因なのだろうか。

だがその程度、問題ではない。

（見られているな……）

そう。王貴がこの工業地帯に足を踏み入れてから、誰かに見られている気配を感じていた。それも数人ではない。おそらく10～20の間ぐらいだろう。気配は路地の奥から、廃ビルの窓から、廃工場の中からといたるところから気配がする。そのどれもこれもが、殺気を帯びていた。

だが、この程度の殺気では王貴を動揺させるにはまだ足りない。所詮は子供のお遊びのような殺気。この程度で王貴が動揺する道理も理由にもならないからだ。しかしこの殺気は異常すぎる。一般人が出すような代物ではない。これはどこか、そう。“何かの秘密を守る”かのような“何かを見られたくない”ようなそんな殺気。守るための殺気というのだろうか。

ここには“何か”があるらしい。

そう考えると、王貴は薄く笑っていた。

辺りを見渡す。

この周囲の屑どもを、組み伏せ蹂躙してやってもいいと考えた。

だが、それはただの一時しのぎにすぎない。やるには兵隊だけではだめだ。完璧に完全に十全に駆逐しなくては、王貴の気が済まない。倒すのはあのような屑ではない。やるからには親玉を倒し、そのまま芋づるで残りの者どもも蹂躙してやる。

それが王貴の考えだ。

何はともあれ、情報を聞き出さないことには始まらない。

そして丁度良く、王貴の周りには情報を持っていそうな屑どもがいる。

「では、開演と行こう」

ザワリ、と複数の人間の気配が浮き上がる。

今までのように隠れているのではなく、臨戦態勢に入るかのように。

それを前にして、王貴は口元を左右に引き裂くような笑みを浮かべる。この屑どもは愚かにも自分と戦おうとしているようだ。そう思うと笑いが止まらない。

楽しい。あぁ、楽しい。ここまで楽しいのは一体イツグライダッタカ？

「まぁ、よいわ。屑ども、飽きが来るまで遊んでやる。それまで王（オレ）を楽しませろ」

そう言い放つと同時に、王貴の背後から武器が次々と展開していく。

これより始まるのは、戦闘という名の蹂躙。これに逃れられる術も、逃がす理由もない。あるのは霧夜王貴の気まぐれで終了されるのみである――――――――――。

……………………………

…

…………………………

…………………

クリスティアーネ・フリードリヒが生徒会執行部へ向かうため、放課後になりほとんどの生徒がいなくなった廊下を歩いていた。

彼女が生徒会へと行くのは、至極簡単な理由だ。自分を風紀委員として認めさせるためだ。

そもそも彼女が、どうしてここまで風紀委員という立場に固執するのか。彼女の性格上、これは仕方ないことなのかもしれないが、それ以上に固執している理由があった。それは霧夜王貴という存在。

川神学園の委員会の仕組みは、生徒会執行部を頂点に置き、その下に美化委員、体育祭実行委員、学園祭実行委員、風紀委員と階層構造で作られている。何を決めるのにも、最終決定権を持つのは生徒会執行部という事になる。

つまり、どれかの委員会に入れば必然的に王貴とも顔を合わせるということだ。

加えて、風紀委員の役職には誰もいない（先日、王貴が「無能ばかりだ」という理由にクビにした）。それにクリスは以前、直江大和に風紀委員とは素行の悪い生徒を罰する役職だと聞いていた。王貴の性格も直し、素行の悪い生徒も注意できる。正に風紀委員とは、一石二鳥の役職だ。これがクリスが風紀委員に入りたがっている理由だった。

そもそも、彼女が王貴に突っかかっていくのはどうしてなのだろうか。

きっかけは、5月の連休が終わったときのこと。つまりは、マルギッテと王貴が戦った時のことだ。最初はマルギッテと戦っている王貴の姿勢に腹が立った。マルギッテは真剣に、左目の眼帯を取り本気で戦っているのにもかかわらず、王貴はそれを嘲笑うようにして戦っていたのだ。王貴の態度はどう見ても、相手を敬意するような戦い方ではなく、自分が楽しむかのような戦い方だった。騎士道を重んじるクリスにとってそれが気に入らない。何より、姉のような存在であるマルギッテ・エーベルバッハが馬鹿にされているような感じで怒りを覚えていた。

だが、それも百代の言葉で疑問に変わる。

あの時、百代は「王貴が本気で戦ったら、マルギッテは死んでいる」といった。それが疑問に思う。マルギッテがそんな簡単に破れるのか、といった疑問ではなく。どうして王貴は本気で戦わないのだろうと言った疑問に。

彼の性格上、自分に逆らう者は老若男女皆殺しだ。クリスから見てもそれは間違いないだろうと思う。しかもマルギッテが王貴に挑むのはこれが初めてではない。箱根の山中を合わせて2度目だと聞いている。だというのに、マルギッテは五体満足でいる。風間翔一と戦ったときだってそうだ。どうしてわざわざハンデ何て代物を自分に課したのだろうか。自分が楽しむためという理由であるならば、痛めつけその様子を見ていると言った理由の方が、彼の性格を考えてその方が合っているだろう。

そうして、クリスは王貴への感情が変わる。怒りから疑問へと、不快から疑念へと。

人は分かりあいたいと思うが故にぶつかり合う。ぶつかり合ったおかげで風間ファミリーの仲間になることもできたし、今の自分があるのもぶつかり合ったおかげだとクリスは思う。

だからこそ、王貴ともぶつかり合う。霧夜王貴を知りたいから、霧夜王貴を解りたいから。

クリスは、生徒会執行部の部屋へと続く扉を前にする。そしてそこで一回二回と深呼吸をした。

彼女の横には、マルギッテの姿はない。朝に彼女の父であるフラ

ンク・フリードリヒに呼ばれたからだ。いつもは横にいる筈の姉がいない。そう思うと、クリスは何故か緊張していた。何故緊張しているのかは、自分には分からない。

（大丈夫、大丈夫だ。昼休みのときだって大丈夫だったじゃないか……）

そう自分に言い聞かせると、ドアノブに手をかけた。

「失礼する。霧夜王貴入るか？」

そのまま一気に扉を開け、無駄に気配を殺し部屋に入る。

緊張のあまり、ノックすることを忘れていた。だがもう遅い。開けてしまったのもはしょうがないので、そのままやり過ごすことにした。

部屋を見渡せば、いるのは3人。

机に座って、小さい指で一生懸命電卓を動かしている服部風子。

その横で計算方法を教えている本多雷太。そして風子と真向かいに座り、風子が計算し終わったであろうプリント用紙を見て間違いがないかチェックしている黛由紀江。生徒会執行部の部屋にはこの3

人がいた。

昼休みに、偉そうに座っていた男もソファーに寝転がっていた女性もその場にはいなかった。

「あっ、クリスさん。どうしたんですか?」

「おう、クリ吉〜。よく来たなー」

座ってプリント用紙を見ていた由紀江と由紀江のお伴である松風が、クリスの方に体を向けて話しかけた。どうやらクリスがいることに今気づいたのだろう。無理もない、無駄に気配も殺しノックもなかったのだから。

由紀江の声に反応して、雷太も風子もクリスの方に顔を向けた。

「いらっしゃいだもんね!」

「歓迎……」

雷太はにっこり笑い、風子は両手を広げて歓迎するように言う。雷太は満面の笑顔で言うが、風子の場合、無表情なので歓迎しているのか分からないところであるが、恐らく歓迎しているのだろう。

「んじゃ、紅茶の用意をするもんね。お茶は由紀江ちゃんに負けるけど、紅茶は負けないもんね！」

そういうと、雷太は台所（何故台所何て代物があるのか疑問だが）に向かった。

「紅茶、紅茶、紅茶、紅茶」

風子は目を輝かせて「紅茶」という単語を連呼している。
あの風子が目を輝かせて言う、雷太の紅茶。それはどれだけ美味いのだろうか。だが目を輝かせてといっても、無表情には変わりないのだが。

そんな風子はどこか保護欲をそそられる。
由紀江も、クリスも微笑ましく風子を見ていた。だが、昔馴染みの雷太は違う。雷太は風子のいる方向に体を向けると、風子にとって死刑にも等しい言葉を浴びせる。

「風子は仕事が終わるまでお預けだもんね」

「――――――――――、」

口を開けたまま、固まった。

雷太の言葉がなければ、その口で紅茶、紅茶と連呼していたであろう、風子の口が閉じることないまま固まった。輝かせていた目も光を失い、どんよりと濁った眼に変わる。それだけで怖いのだが、無表情なだけにもっと怖い。

紅茶が飲めないことに絶望したのか、まだ計算という名の仕事をしなければならないことに絶望したのか、恐らく、いや絶対両方だろう。

「お、おい。紅茶ぐらいいいんじゃないか？」

風子の反応が尋常でないことから、クリスが慌てながら言うが。

雷太は首を横に振る。その姿は何だか、肝っ玉母ちゃんのようだった。

「会長とエリカせんせーに言われたもんね。あまり甘やかすなって。これも、風子の事を思ってだもんね」

そういうと、雷太は台所に引っ込んで行った。
残されたのは、クリスと由紀江と現在テンション暴落中の風子である。言わずもながら雰囲気最悪。その雰囲気の出所は言わずもながら風子だ。部屋には風子がカタカタと操作している電卓の音しか聞こえない。それも先ほどクリスが聞いた音とは違い、子供がいじけながら電卓を弄っているような音しか聞こえない。

ここは上級生である自分がこの空気を変えるしかないと、クリスは思う。
彼女はＫＹ（空気が読める）女なのだ。

「と、ところで、霧夜王貴とエリカ先生はどうしたんだ？」

「あっ、はい！　エリカ先生は会社の会議に出ていて、王貴さんは出かけています。工業地帯の方に」

「工業地帯……？」

クリスは眉を顰めた。

川神市にある工業地帯。
その場所をクリスは知っている。知っているというよりも、大和やマルギッテから聞いているといった方が正しい。曰く、川神市でもっとも治安の悪い場所で、一歩踏み出せば身ぐるみを剥がされる

と言った無法地帯らしい。というよりも、直接見たわけでもない。大和やマルギッテから聞いた話なので、真実かどうかは怪しいところである。

兎にも角にも、危険であることには変わりない。

そんな場所に王貴は出かけたという。一体何をしに、一体どういった目的があっていったのだろうか。

うーん、と。唸りながらも、クリスは頭を捻る。

そんなクリスの心情を察してか、由紀江は、

「何だか最近、工業地帯が物騒なので王貴さんが見てくるようですよ？」

今日中に戻られるかどうか分かりませんが、と由紀江が付け足した。そしてそのまま、クリスが風紀委員になったことを言おうとするが、

「フッフッフ。そうかそうか……」

「えっ……？　クリス……さん……」

クリスの様子がどこかおかしい事に気付く。クリスは肩を震わせ顔を俯き、不気味に笑う。というよりも、笑い声（？）が聞こえるだけで、表情までは分からない。何せ顔を俯かせているのだ。分かるはずもない。

クリスはそうして、バッと勢いよく顔を上げた。その瞳は輝かせており、何だかとても嬉しそうだという事が分かる。思わず由紀江も驚きのあまりびくっと体を震わせる。いきなり顔を上げたことと、クリスの様子。この二重の意味で驚いたのだ。

「そうか、そうか！　弱き者のために動くんだな！　正に騎士道！霧夜王貴もようやく分かったか！」

由紀江は否定しようと口を開くが、クリスの様子を見て否定することが出来ない。クリスはハイテンションだった。それはもう、由紀江が引くぐらい。まぁ、クリスの心境を考えると仕方ないかもしれない。クリスの今の心境は、不良の更生に成功した先生といったところだろう。長年の努力を実を結んだとか、そういった類いだ。そう考えると仕方ないかもしれない。

「まゆっち！」

「は、はいぃ！？」

思いがけないキラーパスに、由紀江は再度体をびくっと震わせる。
あまりの唐突さに素っ頓狂な声を上げてしまったが、クリスは気にしない。それどころか、由紀江の方へと近づき、

「霧夜王貴は工業地帯に行ったんだな？」

「は、はい。そうです……」

「フフフ、こうしてはいられない。自分も手伝いに行かねば！」

クリスはそのまま勢いよく出て行ってしまった。
止める間もない、高速の出来事だった。

「おいおい、どうするまゆっち。あのままじゃクリ吉行っちゃうぜ～？」

「わ、私のせいでしょうか……！　とりあえず止めないと！」

「だよなー。あのまま、王貴坊ちゃんとはち合わせたら喧嘩になっちまうぜー」

由紀江と松風はとりあえず止めると言った結論に達した。だが悲しきかな、これは所詮脳内会議。複数で行われている会議ではなく、一人で行われている会議なのである。

とにかく、すぐにでもクリスの後を追う。由紀江の脚力ならば、何とかクリスに追いつける。

だが、

「由紀江……」

由紀江と扉の間にそびえ立つかの如く現れる刺客。その刺客は、由紀江のスカートの裾をひっぱり、由紀江を引きとどめていた。その刺客こそ、服部風子。

「どうしたんですか、風ちゃん？」

「助力、要望」

風子はどちらかというと、アホな子だ。頭がいいような容姿をし

ている癖に、馬鹿なのだ。よって、計算とかそういった類いは不得意。そして今、風子がやっているのは部活の予算の計算。思いっきり計算の類だった。今までどうにかなっていたことだって、雷太や由紀江の助けがあってこそできていたのだ。

だからこそ、風子は由紀江に助けを依頼する。

だが、由紀江もクリスを追わなければならない使命がある。だが、目の前の友達を放っておくことも出来ない。何というジレンマ。簡単にクリスを止めた後に、風子の仕事を手伝えばいいのだが、そんなことを考えている余裕は由紀江にはない。クリスを止める、風子を手伝うと言った考えが頭の中でグルグルと回り始める。

そして、次第に起こることは、

「きゅ～～～～～」

オーバーヒート。

由紀江は目を回しながら、その場に倒れながら気絶する。処理が追い付かなかったのだろう。簡単にいえば処理落ちだ。

「はいはーい。紅茶の用意が出来たもんね――――――って、うおっ

！　由紀江ちゃんが倒れているぅ！？　コラ、風子！　何したもんね」

「ふうこ、も、わからない……！」

紅茶を載せたお盆を持ちながら、雷太が現れ驚き、風子も首をフルフルと横に振りながら驚く。

焦っているのだろう。風子もいつもの機械的な喋り方ではなく、舌足らずのような喋り方になっている。無理もない、友達が突然倒れたのだ。驚かないのも無理はない話だ。

慌てながらも、雷太はお盆を近くの机の上に置き、懐から携帯を取り出す。

「と、とにかく救急車だもんね！　えっと、何番だっけ。確か１１……駄目だ！　思い出せないもんね！」

「らい、た……！　９、１１……！！」

「それだもんね！　９、１、１っと……ウボァ！？　英語だもんね？！」

「は、やく……！　ゆきえしん、じゃう……！」

「わ、分かってるもんね！」

由紀江に縋るようにして抱きついている凪子。携帯を片手にあたふたしている雷太。そして目を回しながら倒れている由紀江。

　クリスが来て、最初に見ていた光景とは全く違う、カオスな光景がそこにあった————————。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

王貴の戦いは呆気なく終わった。

呆気なくとはいえ、戦っている間ずっと武器の射出をし続けていたわけではない。最初は武器の射出を雨霰と浴びせて、その次には『五行』の中にある『木行』の風を操る属性を付けた短剣を出し風を操って倒した。その次は『火行』の炎を操る紅い槍を、『水行』の水や氷を操る大鎌を、次々と『五行』の力を出して倒していった。それはまるでその力を確かめるようだった。

倒れている不良はところどころ斬れていたり、髪が焦げていたり、頭からは血を出していたり、服が凍っていたりと傷の付け方はバラバラだが、とにかく死者は出ていない。

だが、王貴は死人が出ているかどうか何て確認するような真似はしない。そんなもの、“見なくても分かる”からだ。何より、死人というモノを1万は見てきたのだ。どのようにすれば、人は死なないか。逆にどうすれば人は死ぬかなど王貴には手に取るように分かる。だからこそ王貴は確認をしない。死なないようにしたのだから、死ぬ筈がないのだ。

「フン、この程度か。戯れにもならぬ」

王貴は周囲を見渡し、工業地帯のさらに奥へと進む。歩みを進め

るときに、不良どもを踏みつけ苦悶の声が上がるが知ったことではない。

そうして、彼は思考する。

あの不良たちから聞き出せた情報は『マロード』『ユートピア』のみだ。聞き出せたのはその単語だけで、『マロード』とは何なのか。そして『ユートピア』とはどういったモノなのかは分からず仕舞い。

恐らく、あの不良たちの話しぶりからすると、『マロード』が人物名で、『ユートピア』が何かのモノの名前なのだという事が分かっていた。

一体何が、何を使って、何をするのか。そこまで詳しいことは分からない。

ただ、これだけは分かっていた。工業地帯（ここ）の屑どもが何かを始めるつもりだという事が。

王貴は歩きながら忌々しげに舌打ちをした。

不良たちはこれから何かをするつもりだ。それは不良たちの間のでのことかもしれないし、関係のない者たちへ危害を及ぼすことかもしれない。

ただ言えることはその何かをして、混乱に乗じて周辺の人間へ無差別に攻撃を行うのだろう。しかし、それは何の成果も生まれないし、川神市を制圧するほどでもない。

だから、その暴力の矛先は目標から大きく外れ、自分たちでも倒せる適当な“敵”へと変更される。

手ごろな人間へ。脆弱で弱い人間へと。
前者であろうが、後者であろうが結末は同じ。

――――関係のない者たちが傷つく。

この一点のみだ。

その事が、王貴にとって気に入らなかった。
この世の全てを背負う。そう断言したのは霧夜王貴だ。そんな彼から、何かを奪うもしくは、何かを傷つけようとしている。それが気に入らない。屑どもから奪おうが傷つけようが、それをしていいのは支配者たるこの自分だけだ。だからこそ、許し難い。だからこそ裁く。王であるが故に。

それが王貴の考えだった。それには他人の笑顔が見たいからだとか、誰かのためになりたいだといった優しい考えではない。傲岸で不遜で高慢で傲慢な暴君のような考え。

裁くためには、首謀者を探し出すしかない。
王貴は手頃な不良を見つけ出して、また情報を吐かせるとしようと思うと、周囲を見渡した。だが、獲物は見つからない。

「おい、ウチらの兵隊をぶっ殺したのオマエか？」

と、王貴の背後から声が聞こえた。
考え事をしていた王貴には何を言ったのかは分からなかったが、自分を呼びとめたのだろうという事は分かる。

振り返ると、１５３ｃｍほどの女性がそこに立っていた。手にはゴルフクラブ。
赤とピンクの中間のような髪の色で、長いツインテール。毛皮のような髪飾りをしている。
服装は黒と白を基調にした服で、腰にはコウモリのようなベルトをしバッテンを作っている。

「王（オレ）の事か？　何だ下郎」

王貴がその少女に視線を合わせて言うと、

「――――――――ッッ！？」

少女はトマトのように顔を真っ赤に染め上げた。
先ほどのように王貴を睨みつけるよう視線ではなく、どこか弱々しく視線を泳がせる。

その様子を見て、王貴は思わず眉を顰める。
最初と態度が全然違うからだ。

「おい、何だ貴様は」

「あ、あのーさ。あっちに転がってる奴らやったのオマエ？」

先程とは打って変わって態度が違う少女は、王貴の歩いてきた方向に指さしながら問いかける。その方角は王貴が歩いてきた方角で、そこには先程叩きのめした不良たちがいることだろう。

王貴は顔を真っ赤に染めて俯いている少女を見ながらほくそ笑む。
こいつがあの不良たちの親玉なら、ここに来たことも納得がいく。
親玉でなくても、『マロード』や『ユートピア』が何たるかを知っているのかもしれない。

「そうだと言ったらどうする？」

王貴は挑戦的に引き裂くようにして笑う。
少女は口を開いた。それは王貴が望むものとは違うものだった。

「い、いや。違うんならいいんだ。悪ぃな勘違いしちまって」

拍子抜け。

王貴は何とも言えない表情で、少女を見る。あての外れた。あの不良たちの関係者ならこんな反応はありえない。という事は、『マロード』『ユートピア』といったものをそこまで深く知っていないことになる。どこかやるせない気持ちになっていた。お預けをくらったかのようなそんな気持ち。

「ウチは板垣天使って言うんだ。オメーの名前なんつーんだ?」

ようやく、視線を合わせるようになった少女――――――天使（エンジェル）は王貴に視線を向けてそう言ってきた。視線を合わせるようになったが、顔は真っ赤なまま。視線もどこか熱を帯びている。

王貴はそれをつまらなそうに見る。今更、鈍感を気取るわけもない。彼はこの天使と名乗る少女が自分に惚れていることを分かっていた。恐らく一目ぼれだろう。民衆の考えすら見抜けずして、何が王か。というのは彼の考え。そんな彼が、一人の少女の考えを見抜けぬ道理などない。

「貴様に名乗る謂われはない」

「そ、そこを何とか教えて欲しんだ」

王貴は適当に、少女に視線を向けずに、周囲を見渡しながら、

「……範馬刃牙」

最近読み始めた、マンガのキャラクターの名前を言うことにした。

「ハンマ、ハンマバキか。強そうな名前だな！」

そんなこととも露知らず、天使は満面の笑みで褒める。

当たり前だ、と王貴は思う。この名前の主は何かと凄いことをやっているキャラクターの名前だ。強そうな前なんて当然なのだ。というよりも、目の前の少女は本気で王貴の名前を『範馬刃牙』だと信じているらしい。王貴にとってはそっちの方が驚きである。

そして、王貴は自分のペースで工業地帯の道を進む。勿論、天使

の事なんて気にも留めていない。彼は興味がないモノには、とことん無視する人間だからだ。そうとも知らずに、天使は王貴の後ろを慌ててついてくる。

「と、ところでさ。バキはウチの名前の事、何とも思わないのか？」

「どういう意味だ？」

王貴は天使に視線すら向けずに、前を向いている。そんな状態だから、天使の表情など分かるわけもない。何となくだが、こちらの表情を窺うようにしていることは分かる。他人の機嫌を見るようなそんな感じだ。

「だって……さ。ウチの名前って変じゃん。天使って書いて“エンジェル”だぜ？　どこのＤＱＮネームだって感じだよな……」

先程のような、興奮しているかのような喋り方ではなく、どこか意気消沈したかのような声質で天使が喋る。

天使は自分の名前にコンプレックスを抱いていた。コンプレックスとは言っても、笑われれば傷ついたら、泣き喚いたりとそこまでのモノじゃない。ただ、笑われればキレる。それだけのモノだ。それに天使本人、そこまで自分の名前に誇りを持っているわけでもない。むしろ、こんな名前にした親が憎いくらいだ。姉や兄の目つきや素行が悪いからせめて、この子だけはと希望を持って天使（エンジェル）と名付けられた。

大きなお世話だと天使は思う。

自分がどう生きようが、何をしようが勝手だろうと思う。まして天使（エンジェル）なんてお笑いもいいところだ。そんな両親のおかげで、この名前でどれだけ笑われた事か。だが、笑われた分だけ血祭りには上げた。笑われた分だけ、黙らせた。

今まで生きてきて、後悔したことなんてないし、自分の行いを省みたこともない。ただ、天使という、名前だけは大っ嫌いだった。

そんな天使の心情も知らずに、王貴は、

「それがどうした」

この一言で、切り捨てる。
無情に容赦なく、平坦で冷淡に。

天使は思わず、俯かせていた顔を上げた。驚きのあまり、顔を王貴に向ける。
王貴は変わらず、前だけを向いており、天使の顔など見ていない。だからこそ、この言葉は天使の姿に同情してではなく、王貴の素直な感情として天使は受け取っていた。

「貴様の名が何であろうが、王（オレ）には関係のないことだ」

聞く限り、限りなく冷たい言葉であったが、天使にとってはその言葉が嬉しかった。
何故か、この目の前にいる男にだけは、自分の名前で笑われたくなかった。馬鹿にされたくなかった。
彼女はこの感情が、何なのか分かっているのだろうか。いや、おそらく分かっていないだろう。

天使は笑う。嬉しそうに笑う。

「そっか……。そうだな！　そうだよな！」

王貴が先の言葉を口にした事に他意はない。

さっきも言ったが、王貴は興味のないモノにはとことん興味を湧かない性格なのだ。これが、風間翔一ならば興味がなかったこのにも、興味が示し何故天使が嬉しそうに笑っているか聞いていることだろう。だが、生憎彼は風間翔一ではなく霧夜王貴だ。興味がないものにはとことん無視する。そういう性格。だからこそ、王貴は関係ないと言う。この発言が勘違いを招き、非常事態にまでなるとは露と知らずにだ。

そうして、調子を取り戻したのか、天使はドンドン話しかけ、王貴はそれを気のない相槌を打つ。そんなやり取りをしながら、彼らは進む。

そうすると、見たことのある場所にたどりついた。

そこは王貴が初めて、ここに訪れたときに足を踏み出した場所。つまり、不良たちを叩きのめした場所だった。倒れていたはずの不良たちの人影はそこにはない。おそらく誰かが回収をしたか、もしくは自分で目を覚まして去っていったのだろう。

王貴はそのまま工業地帯から出ようと、歩みを進めた。

得た情報は『マロード』『ユートピア』といった情報だけ。これだけでは圧倒的に情報不足だ。また、ここには足を運ぶことになるだろうと、考えると、

「あ、あのさ。またここに来るか？」

後ろの方から、声が聞こえた。

王貴は振り返ると、天使が顔を赤く染めながら立っていた。赤く染めていると言っても、頬をほんのり赤く染めているだけで、最初の頃よりもマシだと言える。

まだ居たのか。王貴はそんなことを考えながら適当に、

「それがどうした」

「また来るんだったら、今度ウチがここいら一体を案内してやるよ！　オマエも初めてだったんだろ？」

王貴の天使の言葉を聞き、その真紅の双眸を上から下に、下から上にと観察するように天使を見る。

確かに、天使の言う通り王貴が工業地帯に足を踏み入れたことなんてこれが初めてだ。どこに何があるか、どの道を歩けばどこに出るかなど知る由もない。

その事を踏まえて、ガイドは必要なのかもしれん。と王貴は結論付ける。勿論、ずっとガイドさせるつもりもない。あと、ここを2、3回歩けばある程度は回れるし、道などそれだけで覚えられるので天使を連れて歩くのは2回と考えていいだろう。

「フム、貴様が言う事にも一理あるか。……いいだろう、王(オレ)を案内をすることを許す。精々、励むがよい」

そう言い放つと、王貴は去っていく。

他人の返事など知らんと言わんばかりであったが、天使はそんなことを気にも留めず「来るんだったら、連絡してくれよー！」と大きな声でそう言った。

ちなみに、彼らが連絡交換などした形跡はない。天使が言う連絡がどういった連絡なのかは知りもしないことであった――――――。

…………………………………

…………

…………………………

…………………

赤い夕暮れの中、王貴は一人で歩いていた。

自分が工業地帯にいてから何時間経ったのか。そう言った疑問に思ったが、別にどうでもいいか。といった結論に達していた。何時間かかろうが、何十時間かかろうが彼には問題ないからである。

夕暮れであっても、川神市の気温は変わらず暑いままだった。道行く者たちは熱い、死ぬ。などといった言葉を出しながら歩いてい

るが、王貴は顔色一つ変えずに歩いていた。『水行』の力を使い、自分の周りだけ適量な温度に変えているのである。勿論、『火行』で温かくも出来る。いわば、今の王貴は歩くエアコン状態。電気を使わないあたり、何てエコロジーなのだろうか。

そんなこんなで王貴は歩いて行く。

多馬大橋。通称、変態大橋に差し掛かった。ここを超えれば、あと少しで王貴の住むマンションに着く。そうしたところに、

「む？」

前方に人影が見えてきた。

その人影はブロンドの髪の色でロングヘアー。さらには川神学園の女子生徒の服。あろうことか、こちらに向かって全力疾走してきている。

王貴はため息をつく。

本当にここの橋には、何かと厄介事が起きるようだ。そんなことを思いながら、歩いて行った。

変態大橋の中枢に差し掛かった所に、王貴とその走ってきた女子生徒は止まる。

そして、王貴が口を開く前に、走ってきた女子生徒が口を開いた。

「霧夜王貴。自分は感動している！」

嬉しそうに言う女子生徒――――――――クリスティアーネ・フリードリヒを見ながら、王貴は困惑しながら眉を顰める。

一体この女は何を言っているのか。と思いながら。

クリスはそのまま嬉しそうに続けた。

「まゆっちから聞いているぞ。お前、川神の治安のために工業地帯まで赴いたそうじゃないか！　お前にも義の心があったんだな。自分も加勢しようと、行動したんだが迷ってしまった。すまない」

目の前の少女が一体全体何を言っているのか分からないが、王貴は概ね理解できた。取りあえず、もの凄い勘違いをしているという事は分かった。

恐らくクリスは、王貴が他人の事を思って工業地帯の治安を良くしようと思って行動しているのだと思っているのだろう。だが、それは大きな間違い。王貴の思っていることはその真逆。むしろ、王

貴は他人の事なんてこれっぽっちも考えていない。
ただ自分以外の人間が、好き勝手動いているのが我慢にならなかっただけだ。
クリスの言う義とは、そんな理由で動くことを指しているわけではない。

クリスが何を思って、何を考えていると分かった途端。

「クッ、ハハハハ、」

王貴は、

「フ――――ハハハハハハハハハハ！！」

笑いを我慢することが出来ず、爆笑した。
その笑みは、人を全力で馬鹿にしているかのような笑い声。誰もがこの笑い声を聞いたら不快に思う。そんな笑い声だった。

勿論、クリスもその一人。

彼女は不快そうにしながら、

「……何がおかしいんだ？」

「クク……ッ！　貴様はッ……！　ほ、本気でこの王（オレ）がそのような偽善をすると思っているのか……！？」

笑いに息切れしながらも途切れ途切れに言葉を漏らす王貴に、クリスは不快そうに顰めていた眉を益々顰める。

「偽善だと？　他の人たちを思ってする行動が偽善だって言うのか……？」

この言葉を切っ掛けに、王貴はもう抑えが効かぬと言わんばかりに笑う。彼ら騒ぎに、周りには野次馬が出来るが、そんなことなどお構いなしだ。

王貴は一しきりに笑った後、

「そんなモノなど、ただの偽善だ」

「違う！　偽善じゃない！」

「では問おう。貴様は何を以て正義だと決めつける。何を以て悪だと決めつけるのか」

「他人に迷惑をかける者が悪で、それを懲らしめるのが正義だ！」

クリスの反論は速かった。

恐らく、これは彼女が幼いころから思っていることなのだろう。

言わば、彼女の生き方そのものといってもいい。

だが、王貴はそれを真っ向から否定する。

「違う。そもそも、“正義”“悪”などと仕分けすること自体が間違いだ。よいか、女。この世界に正義も悪もない」

「なっ！　それは――――――」

王貴はクリスの反論を遮るようにして、

「いいや、違わない。……フン、そうだな。強いて言うのならば、勝者が正義で敗者が悪だ。世界はそうして成り立っている。何より、

歴史がそれを証明している」

王貴の愉快気だった口調が、いつしか荒げるような口調に変わっていた。

「敗者は惨い死にざまを晒され、勝者は栄光楽土を築き上げる！　敗者は泣き叫ぶことすら許されん罰を与えられ、勝者はそれを快楽を覚えながらも高みで見物している！　そうして世界は廻っているのだ。分かるか女。貴様の謳う正義では、何も変えられん！」

「ち、違う！　義とは、義というモノはそんなものではない！」

「ほう、ならば問う。貴様は力づくで、その武力を以て貴様の言う悪を叩き伏せたことはないのか？　一度もないと言えるのか！」

クリスは口を閉じた。悔しげに、拳を握りしめながら。そう、彼女には心当たりがあった。それは五月に入る前の事。川神学園でガラスが破られる事件があった。その時、風間ファミリーはガラスを破っていた犯人を捕まえた。結果的には捕まえたが、その過程で何もなかったわけではない。彼女たちは武力を用いて犯人たちを捕まえたのだ。

王貴の言う通り、そこで勝者が正義。敗者が悪の図が出来ていた。

だから、クリスは何も言えない。
言う事が、出来ない。

「フン、何も言えんのか。そうだ、そうだとも。人とは争いでしか何も生み出せんからな」

そうして、王貴は続ける。
最初にあった余裕のある表情などない。あるのは悲痛で、痛みを我慢するような顔のみだ。

そして、思い出すのは幼い時の事。
まだ自分が、“人”で世界に希望が溢れていると信じていた時のこと。
傍から見たら、世界は綺麗なもので埋め尽くされている。だが、蓋を開けてみてみればどうだ。そこにあるのは、欲望、嫉妬、憎悪、憤怒。汚いものばかりだ。

それを自分は見てきた。最前列でそれらを見てきた。
目の前にいる女とは違う。そんな綺麗で純粋な生き方なんて出来ない。

王貴にとって、クリスは昔の自分だ。まだ、世界に絶望していない頃の自分。
だからこそ、王貴はクリスの言葉に怒りを覚える。何も知らない

で、と怒りを覚える。

今の王貴は“王”ではない。ただの“人”だった。

言わば、これは“人”としての霧夜王貴の八つ当たりだ。自分勝手で、空しく悲しい八つ当たり。

「この世界は、貴様が思っているような世界ではない！　世界は有能に厳しく、無能に優しい！　世界は優秀に厳しく、劣悪に厳しい！　それが、世界だ！　何も知らん屑が、綺麗事を口にするな！」

言い終わると、肩から息をし始める。

そして、クリスを睨みつけ、帰り道を歩き始めた。野次馬がいるが、関係のないこと。野次馬は王貴に道を譲るようにして、人垣が割れて行くのだから。

そうして、変態大橋に残ったのは、クリスと野次馬たちのみである――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翌日になった。

王貴と霧夜エリカは川神学園へと続く道を歩いている。

王貴は昨日の事を思い出す。変態大橋でクリスと口論になったことを。

恥だった。大恥もいいところだった。何も、あんな感情的になる必要もなかったと王貴は思う。いつもの屑の戯言だと聞き流せばよかった、と。

だが、聞き流せなかった。何故か、癪に障った。まるで昔の自分を見ているようで、腹が立った。

「不機嫌そうね？」

彼の姉が、王貴の顔を覗き込みながら、そう呟いた。
王貴はそれを何でもないと、首を横に振る。

昨日の事なんて、思い出しても仕方ないと思ったのだろう。

とりあえず、話題を変えることにした。

「昨日、何か会議でもあったのか？」

「あったわよー？　近々、面白い催し物をキリヤカンパニーと九鬼財閥でやるわ」

「フン、その“催し物”のせいで、体育祭とやらがつぶれるとは腹立たしいことだ」

「あら、アンタ知ってたの？」

「それが何なのか知るために、生徒会長とやらになったからな」

「アンタも出場すればいいじゃない」

「茶番に王（オレ）が付き合えと？　それは笑えん冗談だな」

そうして、二人は変態大橋に辿り着いた。

ここを渡り切れば、あとは道なりに沿って川神学園を目指すだけ。

なのだが、

「……チッ」

多馬大橋の中央には川神学園の制服を着たブロンドの女子生徒がいた。

クリスだ。

クリスは、王貴を見つめている。

その目の下には、隈が出来ており寝ていないことが何となく分かった。

王貴とエリカはクリスの待っている中央まで進む。
そして、余裕のある表情で、王貴はクリスに話しかけた。

「何のつもりだ。また問答でもするつもりか？」

どこか人を馬鹿にするかのような笑み。
だが、クリスは静かに。ただ、静かに口を開く。

「お前に言われてから、ずっと寝ないで考えていた」

たかが、一日と他人は言うかもしれないが、王貴はそうは思わない。同じ人間が一日かかろうが一年悩もうが答えは同じ。それが王貴の考えだからだ。

クリスは続ける。

「お前の言う事も正しいのかもしれない。この世には正義も悪もないのかもしれない」

でも、と言葉を区切り、王貴の真紅の双眸に視線を合わせる。

「自分は義を捨てられない。偽善でも構わない。自分は最後まで義を貫き通す。それが、クリスティアーネ・フリードリヒであるからだ」

王貴は目を細める。それはまるで眩しい物を見るかのようだった。王貴から見て、今のクリスは輝いて見えていた。自分が捨てた希望を、目の眼にいる女は受け入れたうえで、尚手放さず貫き通すと言い切ったからだ。

彼から見えたら、何て浅ましい考えだろう。どんなに気高ろうと、どんなに志を持とうと、世界の悪意というものは彼女を何なく飲み込むだろう。一切の躊躇もせず、一切の手加減もせずに押しつぶすことだろう。

それを知っている王貴も、クリスの決意を何なく否定できるだろう。

だが、否定する気が起きなかった。

否定することを、彼自身が拒んでいた。

「貫き通せば、偽善も本物になる、か。……フン、その通りだな」

王貴はそのまま、口元を歪めながら、

「貴様、名は何と言ったか？」

「クリスティアーネ・フリードリヒだ」

クリスは臆面もなく言い放つ。

王貴は何度も覚えるようにして、クリスの名を口ずさむ。

そして、

「よかろう、クリスティアーネ。貴様の偽善、この霧夜王貴が見届けてやる。偽善の先に何があるのか、この王（オレ）に見せてみるがいい！」

そうして、王貴は歩き始める。

いつもの王（オレ）様な弟にため息を吐きながら、エリカも歩き始めた。

その後を慌てて追いかけるクリス。

王貴は思う。

人も、世界もまだ捨てたものじゃ無いと。

こんな正義馬鹿が居てくれている。それだけで、愉快痛快だ。

こうして世界は廻り続けている。休むことなく――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おーう、稽古始めるぞ――――って、天の奴どうしたんだ？」

川神市郊外の原っぱ。
そこには一人の男性。三人の女性の姿があった。

男性の名前は釈迦堂刑部。
女性の名前は板垣亜巳。次女である辰子。末っ子である天使が居た。彼女のほかにも竜兵という辰子の双子の弟がいるのだが、ここにはいない。どうやら、どこかに出かけているのだろう。

天と呼ばれる少女。つまり、天使は何をやっているのかというと、ニヘラーと蕩けるかのように笑いながら、ゴルフクラブを素振りしている。バットを振るかような素振りではなく、ゴルフの素振り。どちらにしても、奇妙であることは変わりない。

「おい、あの野郎どうしたんだ？」

釈迦堂が話しかけたのは亜巳だ。辰子は生憎昼寝中で、お話にならない。天使はとても話せる状況じゃないし、消去法で亜巳となった訳だ。

「あぁ、師匠来てたのかい」

「おう。んで、あいつどうしちまったんだ？　見てて不気味ったらありゃしねぇぞアレ」

釈迦堂の視線には、今だ蕩けきった笑みで素振りをしている天使の姿。

亜巳もその姿を見て、ため息を吐き、

「天の奴。何でも一目惚れしたらしいのさ。それで、昨日からあの調子」

「ずっとか？」

「ずっと」

最初は微笑ましかったんだけどねー、だんだんウザくなってきた。

と亜巳はぼやく。
確かに、あの様子を一晩中見せられたら嫌にもなってくるだろう。

釈迦堂も天使を見て、一つ縦に頷くと、

「フラれちまえ」

「師匠は機嫌は悪いねぇ。どうかしたのかい？」

「どうもこうもねぇよ。折角昨日、俺の狙ってる獲物が工業地帯に来たってのに、大将の奴戦うなって言うんだぜ？」

「へぇ、師匠がそこまで執着するなんてねぇ。それで誰なんだいそいつは？」

「教えねぇよ。言ったらテメェらちょっかいかけに行くだろ？　あの坊ちゃんは俺の獲物だから駄目だ」

釈迦堂はそういうと、辺りを見渡す。
寝ている辰子。蕩ける笑顔で素振りをしている不気味な天使。そして、いたって普通の亜巳。

今日は稽古の日なのだが、稽古できる状態ではなかった。
というよりも、こんな状態では稽古もできない。というよりも、やったら絶対怪我をする。釈迦堂も破門になったとは言え元師範代

だ。今稽古をやって、どんな有様になるかなど目に見えている。

今日は中止か。と釈迦堂は考えていると、

「あん？」

どこからともなく、軽快な音楽が鳴り響いた。

しかも、それは自分の懐から、聞こえてきた。その音を出している物体を取り出してみると、携帯電話だった。だが、こんな着信音にした覚えがない。

「また、お前らか」

「今回変えたのは天さ」

釈迦堂の疑問に、亜巳が答える。

釈迦堂の携帯の着信が変わったのは、これが初めてではない。この三姉妹は暇さえあれば、釈迦堂の携帯の着信を変えているのだ。前回は亜巳だったが、今回は天使が変えたようだ。

釈迦堂は携帯のディスプレイを見る。
そこには曽我といった文字があった。
釈迦堂は通話ボタンを押して、耳に携帯を当てる。

「何ですか曽我さん。私はもう内閣捜査室を辞めた身なんですがね……。……あー、仕事です、か。いや、私には正式な雇い主がいますから、そういう話は、ね？」

釈迦堂は少し耳を傾けた。
どうやら、曽我という人物が話しているらしい。

「……確かに、曽我さんには借りがありますがね」

最初は乗り気じゃなかったが、次第に釈迦堂の様子が変わっていく。

「……それ、ホントですかぃ？　そんな楽しそうなことが……。分っかりました。こっちとら好都合ですわ。引き受けましょう」

そう言い終わると、携帯の電話を切る。
そして、肩を震わせ、

「いいねぇ、いいねぇ！　楽しくなってきたぜオイ！」

笑い始めた。
楽しそうに、愉快そうに釈迦堂は笑う。

「師匠、どうしたんだい？」

「おう、亜巳。オメェらも参加しろ。腕試しだ」

亜巳は訳もわからず、首を捻る。だが、釈迦堂はそんな亜巳にお構いなしに、楽しげに笑い始めた。

「大将は坊ちゃんと戦うなって言ってたけど、戦わざるをえない状況に持ってきちまえば良いわけだ！　ハハッ、最高だ！　楽しくなってぞぉ」

そうして、獣は嗤う。

今ここに、川神の闇ともいえるモノが胎動していることに、誰も気付けなかった――――――。

第２４話　クリスと王貴（後書き）

皆さん、おはこんばんちは。兵隊です！！

今回はめっちゃ、長くなってしまいました。
もし、前篇後篇に分けた方がいいと思いの方がいるのならば、言ってくださると幸いです。

先ず、天使ファンの方々すみません！
この天使、めっちゃ誰ですよね。ホント、板垣三姉妹は本編にちょっとしか出てこないので、キャラが掴めない。でも、これだけは言わせてください。天使ちゃんマジ天使。

次に、クリスファンの方々すみません！
こうなってしまったのは、王貴の性格上こうなってしまいました。
王貴の自論は思いっきり我儘の塊です。というよりも、王貴が成長するにあたって、これははずせなかったのです。本当にクリスファンの方々には申し訳なく思っております。

そして、この度ｙｏｕｋｅｙさんの主催するコラボ企画に貧弱王が参戦させていただくことに決まりましたｗｗ
ｙｏｕｋｅｙさん、本当にありがとうございます！！
多分、貧弱王は呆気なく退場することでしょうｗｗ

最後に、釈迦堂がさんがアップを始めました。

それでは、ご意見ご感想お待ちしております。

気軽に書いてくれると、幸いであります。

コラボ広告　霧夜王貴ｖｅｒ（前書き）

王貴「何だか知らぬが、コラボすることになったらしい」

雷太「うっし、頑張るもんね！」

風子「ん……！」

王貴「貴様らの出番はないぞ？」

雷太「え？」

風子「え？」

王貴「え？」

コラボ広告　霧夜王貴ｖｅｒ

川神鉄心の気まぐれで行った。
魔術儀式よって呼ばれた平行世界の7人の戦士

「悪いが、俺の相棒のために死んでくれ」
襲いかかるは野獣を身に宿した、闇の王者

「屑がその程度の力で王（オレ）に挑むとは片腹痛いわ！！」
五行を統べる王の軍勢が敵を殲滅する

「そんな読みやすい攻撃、僕の技のいい餌だよ……」
策略の柔術使い手の青年の技が冴える

「私のマスターに指一本触れさせない！」
戦闘一族の末裔の不屈の護り手が、主の最強の盾となり

「へ？戦争？じゃあ俺巻き込まない方向で、見学してっからさ」
まったりのほほんとは真逆の現状に、格闘士としての血が騒ぎ出す。

そして、出会うことのなかった光と闇か今、交差する

「俺は、お前みたいな武術を使う偽善者が嫌いなんだよ！！」
孤独な悪意が牙をむき

「コイツとの絆を護るために、お前を撃ち殺す！！」
銃弾の拳を持つ青年が結んだ絆のために拳を振るう

そして現れる最強の敵
「お前が最後の生き残りか……。さぁ私の渇きを満たしてくれぇぇぇ！！！！！！！！！」

鎬を削る武の狂宴

その先にはなにが待つのか

運命の『死の遊戯（バトル・ロワイアル）』今開演する

『問おう。汝が、王（オレ）を招きしマスターか？』

マジこいＳＳ作家７人による、真剣で私に恋しなさい！！コラボ企画

『川神聖杯戦争』（企画原案ｙｏｕｋｅｙ）

近日公開

参加者募集は既に締め切りました。

コラボ広告　霧夜王貴ｖｅｒ（後書き）

この度、コラボさせていただくことになりました！

えっ？　貧弱王ｖｅｒのくせに、最後だけしか変えてないじゃんですって？

……ええそうですよ！　そうですとも！　思いつかなかったんですよ！　格作品の主人公の紹介文が！

くそぅ、モーディスさんもＳＥＩＭＡさんもうしおなとらさんもよく思いつきますよ！　ええい、化け物か！

そんな訳で、貧弱王も出させていただきますので、よろしくお願いしますｗ

彼には面白おかしな死にざまを期待することにしましょうｗｗ

第２５話　オウキ～川神に降り立った貧弱～（前書き）

王貴「納得がいかん」

エリカ「何が？」

王貴「王（オレ）のどこが貧弱だというのだ！　ステータスを見たか？　筋力Ｂだぞ！　どこが貧弱だというのだ！」

エリカ「でも、アンタ殴り合いで風間クンに勝てないでしょ？」

王貴「……」

第２５話　オウキ～川神に降り立った貧弱～

世界は興奮と熱気に包まれていた。
その理由は、数日前の夜に九鬼財閥と霧夜カンパニーが合同で開催する武道大会、キングオブソルジャーズが発端だ。キングオブソルジャーズ、通称ＫＯＳは野に埋もれた戦士たちの発掘が目的として開催される大会だ。そのため参加資格はなく、誰でも参加できる。参加形式は、４人１組のチームを組みエントリーしなければならない。

そして、開催場所は七浜と川神だ。

ルールはこれと言ってない。参加していない、一般人に危害が及ばなければ何をやってもいい。
そう、ロケットランチャーを使用しようが、ダイナマイトを使用しようが何をやってもいいのである。

これだけを聞けば、ただの強さ比べをするための武道大会に聞こえる。これだけでは“世界中”が興奮と熱気に包まれることはないだろう。他にも理由があった。

その理由が、優勝チームには１０００億円という大金だ。
この大会に、優勝した暁には大金のほか、名声も名誉も付いてくる。だからこそ、世界は興奮の渦に巻き込まれていた。自分も、俺も、僕も、私もと世界各国の人間がＫＯＳに夢を見て、続々と参加

することだろう。

人は夢を見て、野望を抱いて、名声を渇望し、戦いたいという欲求を満たすために、ＫＯＳに参加することだろう。

そんな、世界で。

ＫＯＳが開催される場所の一つでもある、川神市にあるとある学園の生徒会一室では。

「ツモだ屑ども」

「はぁ？　マジかよ！？」

「うむ。天和　四暗刻というヤツであろう？」

麻雀をしていた。

メンバーは、霧夜王貴。島津岳人。井上準。そして直江大和の４人だ。さらに、準の後ろで見学するようにして見ている葵冬馬。ソファーで寝転がりながらマンガを読んでいる風間翔一。計６人が生

徒会室にいた。何とも、暑苦しい空間である。

先の会話を見るに、王貴がツモってしまい、岳人がそれに反応したのだろう。

ちなみに、ここまで王貴は負けなしである。黄金律Ａ＋は伊達ではないということだろうか。

ところで、どうして彼らがこんなところで麻雀をしているのか疑問に思う。

何てことはない。単純明快で、至極簡単な理由だった。読んでいたマンガの影響で、急に麻雀をしたくなった王貴が無理やり呼び寄せた。そんな理由だった。

「ククク……！　さぁ、夜はここからだ……！　行ける所まで行く……！　限界まで毟り取る……！」

そう言うと王貴は、近くに置いてあったラジカセの再生ボタンを押す。そこからは「ざわ……ざわ……」といった声が。さらに言うと、まだ夜ではなく昼である。

「だぁぁ！　ざわざわうるせぇ！　それに、今は昼だ！」

「つか、お前のその豪運とか理不尽すぎるだろ！　少しは自重して下さい！」

ラジカセから流れる『ざわ……ざわ……』といった音に岳人がキレて、王貴のあまりの豪運に理不尽を感じてキレる準。

この二人がキレるのも仕方のない。それほどに王貴は理不尽に運が良かったのだ。運だけは良かった。王貴は素人だ。何を待っているかなど、岳人も準も大和にも分かっている。だからこそ、王貴の待っている待って牌を持ち封殺する。だが、その待ちを王貴自信が引いてしまっては太刀打ちが出来ない。つまりはこういうことだった。封殺しても、王貴が自力引いてくるのだから意味がないのだ。

2人の怒りの矛先である少年は、ラジカセから流れる音を停止しながら、

「む？　なんだ、負け惜しみか屑ども。……やれやれ、哀れな者どもよな？」

「うるせぇよ！　毎回毎回、マンガの影響を受けやがって！　付き合わされるこっちの身にもなってみろ！　前回は格闘マンガにあったトリケラトプス拳を試され？　そのまた前回は遊戯皇カードやらされ？　んで、今回はアオギの真似事か!?」

「戯けめ、王（オレ）の暇つぶし付き合えるだけ光栄に思え」

「私なら何時でも付き合いますよ？」

「……やかましい、両刀使い。王（オレ）の視界に入るな」

王貴と岳人の言い争いに、冬馬がニコニコ笑いながら言うが、王貴は一蹴するかのように吐き捨てた。

どうにも、王貴は冬馬が苦手のようだ。生理的に受け付けないというか、そんな感じだ。

王貴が不機嫌そうにしているが、冬馬はおや？　と言いながら、

「私は、王貴君を尊敬しているのですがね？」

「ええい、やかましい。黙れ。口を開くな。死ね」

「おや、手厳しい」

王貴の苛烈な言い草にも、冬馬には効果がない。むしろ、益々笑みを深めるのみである。

そうして一局が終了して、積み上げていた麻雀牌を崩し、一同はジャラジャラと混ぜる。こういう作業が嫌いそうな王貴もやっているところを見ると、結構楽しんでやっているのだろう。岳人も岳人で文句を言いながらも楽しんでいるのか、ジャラジャラと牌を混ぜている。

混ぜながら、大和は口を開いた。

「そう言えば、ＫＯＳの事なんだけどさ」

「あぁ、見た見た。何か総理も出るみたいだぜ？」

「総理って、あの総理か？　凄いなオイ」

それに岳人が反応し、準が驚きながら声を上げた。

そのままＫＯＳの話に変わり、いつしか麻雀牌を混ぜる手が止まっていた。

「俺の知ってる所だと、ワン子と京とクッキーと麗子さんで出るらしい」

「げっ、母ちゃん出んのかよ……」

「らしいな。んで、クリスはマルギッテと親父さん。まゆっちは不

死川と“そうり”って人と出場するらしいよ？」

「へぇ、あの不死川がねー？」

準が意外そうな声でそう言った。

確かに、彼が意外そうに思うのも当然と言えば当然だろう。

不死川心という少女は、協調性がない。これは絶対といってもいいぐらいだ。だが、そんな少女が誰かと戦いぬくという。それに、先にも言ったがＫＯＳは４人１組のチーム戦だ。という事は、誰かに背中を預けながら戦わなければならない。つまり、不死川心にとって黛由紀江は、背中を預ける相手ということに他ならない。

そう考えると、準は頭の中で思い浮かべる。内容は、由紀江と心の関係。

３秒ほど考えると、すぐに頭を横に振った。呆れている感じで。

考えるもでも無かったのだ。彼女たちの関係は傍から見たら、主君と従者。心が由紀江に我儘を言って、それを由紀江は笑顔でこなしていく。彼女たちの関係はこんなものだろうと、準は考える。心に友達が出来たのかと思ったが、それは違うと彼は判断したのだ。

そして、準は王貴の方を向きながら、

「ところでさ、そこの我儘王子は出場しないのか？」

王貴は『アオギ～闇に降り立った天才～』というマンガを読んでいた。

態度を見るからに、王貴はＫＯＳに何ら興味を示していなかった。それもその筈、彼はこの大会が開催されるのを知っていたからだ。生徒会長に就任した後に、彼が最初に行ったことは、川神学園体育祭が何故中止になったのかという調査だ。そして、その調査が進むにつれて浮き彫りになってきた真実が一つ。それがＫＯＳだった。

ＫＯＳと川神学園体育祭が何故関係しているのかというと、丁度ＫＯＳが開催される日と体育祭が行われる日程が重なっていたからだ。そして、ＫＯＳには多くの川神院の修行僧たちが駆り出されることになっている。川神学園体育祭も他行とは違い少々過激だからか、川神院と使う事になっている。つまり、ＫＯＳで出払う修行僧が多いため、同時に体育祭を行えるほど余裕がないのだ。よって、体育祭がつぶれたという訳だ。

とはいっても、王貴も全てを知っていた訳ではない。どんな対戦方法でＫＯＳの優勝者が決まるのか、何人出場する予定なのか、といった情報は全く知らないのである。ちなみに、霧夜カンパニーが九鬼財閥と合同で開催するという事も知らなかった。

霧夜王貴はただ単純に、ＫＯＳだと言ったモノに興味がない。

他者と戦い、それに勝利し覇を競い合う。そんなものはただの茶番にすぎない。誰が強かろうが、誰が最強であろうが自分には関係のない。どんな者であろうが、自分に平伏し道を明け渡す。その事実は揺らぐことがない。そう彼は考えているからだ。獣は獣達同士、

共食いをしながら殺し合っていればいい。

「おーい、聞こえていますかー？　お前は参加しないのか？」

反応がない王貴に、準が再度問いかける。

そこでようやく、王貴はマンガから視線を準に向けた。その表情にはありありと「邪魔をするな」と語っている。

「フン、下らんな。王（オレ）は――――――、」

と、口を開くがいきなり生徒会室の扉が勢いよく開き、中断された。

「王貴入るか？」

「す、すみません！　いきなり入ってしまって……！」

一人の少女が悪びれもせず堂々と生徒会室に入ってくると、その後から一人の少女が申し訳なさそうに入ってきた。

悪びれもせず堂々と入ってきた少女は艶やかな着物を着ていた。一目見れば、素人でも高級だという事が分かるほどの着物。

申し訳なさそうに入ってきた少女は、川神学園指定の女子生徒制服を着ていた。ただ、他の女子生徒とは違うところが一つ。大事そうに両手に抱えながら、刀袋を持っていたのだ。刀袋には何かが入っていた。恐らく刀だろう。

着物を着た少女は不死川心。

刀のようなものが入った刀袋を大事そうに抱えているのが、黛由紀江だ。

その二人は一体何をしに来たのか。

心は王貴の直ぐ背後らへんに立つ。その心の半歩ほどの位置に、由紀江が立っていた。

「随分と真っ暗じゃな～？」

心は辺りを見渡して、そう口を開いた。

彼女の言うとおり、今の生徒会室は暗い。カーテンは閉められ、太陽の光すら入る余地などなかった。

王貴は心に視線すら向けず、再びマンガに視線を向けながら、

「雰囲気というモノは重要だからな。それで、一体何の用だ？」

「お前、ＫＯＳに出場するのか？」

ＫＯＳと王貴に何の関係があると言うのか。

王貴は心の方を向き、怪訝そうな顔つきでその問いに、答えようと口を開きかけるが、

「失礼する。王貴は居るか？」

新たな来訪者が現れ、またも中断された。

その来訪者は、由紀江と同じ女子制服を着ている少女。髪はブロンド色の長い髪。顔つきはいかにも外国人といった感じの少女だった。

その少女こそ、クリスティアーネ・フリードリヒだ。その右腕には、風紀委員と書かれた腕章がある。どうやら、彼女は正式に風貴委員長に就任したらしい。

クリスはキョロキョロと辺りを見渡し、探し人を見つけると一直線でその方向に歩いて行く。

そうして、心とは反対の位置に立つと、

「王貴。自分と一緒にＫＯＳに出場しないか？」

満面の笑みで、そんなことを言ってきた。

「待て、クリス。最初に誘ったのは此方達じゃ」

クリスの言葉に、反応したのは王貴ではない。

心だ。ちなみに言うと、まだ彼女たちは、王貴を誘っていないし、王貴もそれに承諾していない。

心は面白くなそうな顔で続ける。

「ポッとでのお前が、横取りするでない！」

「む？　王貴はそれに了承したのか？」

「そ、それにとは何じゃ！」

「一緒にＫＯＳに出場することだ。それで、どうなんだ？」

「……まだじゃ」

「何だ、まだ決まっていないじゃないか。じゃあ、自分が王貴を誘っても何の問題ないな！」

「うぐぅぅ……、駄目じゃ！　駄目なのじゃ！　王貴は此方達と出場するのじゃ！」

それから彼女たちは、言い争いを始めた。彼女たちと言っても、言い争っているのはクリスと心だけで、由紀江に至っては止めようと右往左往している。

そして、その言い争いのある意味原因である霧夜王貴は、

「さぁ、麻雀を続けるぞ」

麻雀の山を作ろうとしている始末である。

あまりの我関せずっぷりに大和がツッコム。

「……放置するのか？　あいつらが言い争いしているのも、ある意味お前が原因だろ」

そんなことを言いながらも、大和の前には山が出来上がっていた。大和だけではない、岳人の前にも準の前にも山は出来上がっていた。文句を言いつつも、何だかんだいって王貴の我儘に付き合うようだ。

王貴も自分の前に、山を作り終えると、

「そんな事は知らん。あいつらが勝手に言い争いを始めただけであろう。そもそも、王（オレ）は――――、」

と、口を開きかけるが、生徒会室に現れた謎の来訪者にまたも中断される。

「頼むよエリー……。私もＫＯＳに出場したいんだ～」

「アンタが出ると、間違いなく１０時間で終わるでしょうが。だから駄目――――って、アラ？」

入ってきたのは２人だ。

１人目は教師のような黒いスーツを着て、王貴と同じく金色の頭髪の女性。２人目は川神学園で指定された女子生徒のスカートを穿き、上には川神学園で指定された男子用の上着を羽織ってきているかのような、黒い髪色でロングヘアーの女性。

霧夜エリカと川神百代だった。

百代は何だか情けない声を出しながらエリカに頼んでいるが、エリカはその頼みごとを却下する。

２人が生徒会室に入り、最初に目にしたのはクリスと心の言い争いだ。この２人の言い争いは初めの頃よりもヒートアップしており、もはや誰が仲介しても収まりそうにない。最初は由紀江も止めようとしていたが、今では止める術がないのかワタワタと慌てているのみである。

その様子を見て、エリカが一言。

「シュラーバ？」

「そうみたいだな。……何だか、面白くない」

エリカはニヤニヤしながら言うが、百代はどこか面白くなさそうだった。対照的な2人は麻雀卓へと歩いて行く。

麻雀卓の近くまで行くと、エリカが口を開く。

「それで、王貴はこの惨状をどうするつもりなのかな～？」

「どうするとは、何だ？」

「あの子たちの言い分を聞くと、アンタがどのチームに入るかで揉めてんでしょうが。となれば、アンタがどこに入るか言えばあの子たちも止まるでしょう。それで、我が弟はどこに入るのかな～？」

クリスと心の言い争いをＢＧＭに、エリカはニヤニヤとからかう様にして言う。

エリカの言う通り、それしか解決策はないだろう。というよりも、

王貴がさっさと自分はどこに入るのかを言ってしまえば、この問題は早急に収まる。

王貴は、そんなこと分かっていると言うかのような忌々しげな表情で、

「貴様らが邪魔をしなければ、もっと早くに終わっていたものを……！　チッ、まぁよい」

そう言うと、王貴は口を開く。

中断され続けていた、言葉の続きを紡ぎ始める。

「王（オレ）は、ＫＯＳとやらになど参加せぬ」

その一言で、場の空気が止まった。

心とクリスの言い争いが止まり、由紀江は驚きながら王貴の方に顔を向け、エリカはニヤニヤと笑い、翔一は変わることなくマンガを読んでおり、百代は意外そうな顔をしている。

麻雀卓を囲んでいる3人と冬馬は、やっぱりなといった表情をしていた。

それから数秒、時は流れ、

「「なにいいいいいいいいい！？」」

クリス、心が王貴に詰め寄り始めた。

「こ、此方は聞いておらんぞ？！」

「それはそうだろう。王（オレ）も今日初めて言ったからな」

「どうして出ないんだ！？　てっきりお前なら出ると思ったのに……」

「興味がない。祭事なら興が乗ったが、こんなものは祭以下だ。欲に目がくらみ、踊るなど道化のすることだ」

そう言うと、王貴は山から麻雀牌を取っていく。

王貴の牌は言わずもながら良い手だった。これならば、いきなりリーチも出来る。

「はぁ、また我儘王子に振る作業が始まるお」

「あぁ、自給とか出ねぇかなー？」

「何だ何だ？　お前ら暗いぞ！　もっと明るく行こうぜ！」

普通の順番なら準、岳人、翔一の声が王貴に耳に入ってきた。

王貴は視線を上げる。

大和の座っていた席に、翔一が座っていた。

「……何のつもりだ、道化？」

「いやぁ、楽しそうだったからさ。大和に代わってもらったんだ」

「貴様如きが、王に刃向かうか？」

「あぁ、よろしく頼むぜ！」

翔一が笑顔でそう言うと、王貴は口元の笑みを引き裂くようにして笑う。

「よかろう。王（オレ）に刃向かう権利をくれてやる。王（オレ）を楽しませて見せるがいい」

傲慢にそう告げた。

だが、忘れてはいけない。王貴に致命的な弱点があることを。それは慢心スキル、それもA＋。これがあると、彼は慢心し始め全てのステータスを2段階下げ、スキルを3段階下げる。正に持っていて損しかないスキルだ。

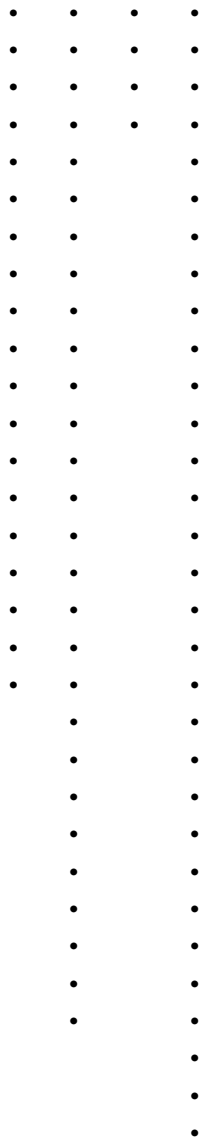
スキルが3段階下がるという事は、彼自慢の黄金律も3段階下がるということ。

という事は、つまり、

「あっ、ツモだ」

「天和　九連宝燈……だと……？　おのれ、道化……貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ギャンブルで、翔一に勝てないことを意味していた――――――――。



「殺し合い～♪　殺し合い～♪　楽しみだな～っと」

釈迦堂刑部が、不吉な歌詞を口ずさみながら親不孝通りを歩いていた。

本人はとても、ご機嫌なのだが歌詞があまりにも不穏なモノだからか微妙だった。

何はともあれ、釈迦堂本人はご機嫌であるのには変わりない。

彼がここまでご機嫌なのも、ＫＯＳが理由の一つだった。

世界各地から猛者を集めて行われる武道会。そんな楽しいイベントを楽しまない釈迦堂ではない。

それに、彼が楽しみにしている理由はもう一つ、理由がある。

「あん？」

突然、釈迦堂のズボンのポケットから、ポップな感じの音楽が流れ始める。彼はポケットから、音が流れているであろう物体を取り出した。

その音楽の発生元は、携帯だった。

「また、曽我さんかぁ？　おいおい、俺は言いつけ通り黛も藤原もやってきたぞ？　また俺に仕事させる気かねぇ、あのおっさんは？」

おっと、俺もおっさんだった。と適当なことを言うと、釈迦堂は携帯を二つに開いた。

そのディスプレイには曽我ではなく『マロード』といった文字。

それを見ると、釈迦堂はにやりと口元を歪め、

「どうした、大将。何かあったのか？」

『いえ、釈迦堂さんがＫＯＳに参加すると聞いたので、確認の電話をしたんですよ』

「止める気かい？　俺も今回ばかりは仕方ないんだよなぁ～。何てたって、これは依頼だしよぉ」

釈迦堂は白々しくそう言った。

『マロード』も、分かっているのか、

『えぇ、分かっていますよ。私は貴方を止めるために電話をしたわけではありません。――――報告があります』

「報告？」

『えぇ、良い報告と悪い報告。どちらから先に聞きます？』

「良い報告だけを聞きたいねぇ。ま、いいや。んじゃ良い報告から頼むぜ」

『近々、『カーニバル』を始めます。時期的にはＫＯＳが終わってからでしょう』

「ククククッ！　ようやくか。待ってたぜぇ……」

釈迦堂は笑う。その笑みは、獰猛で野蛮で獣のようなそんな笑みだった。

彼が、ここまで待ち焦がれていた『カーニバル』という単語。それがどんな意味をしているのかは分からない。

さらに、『マロード』が続ける。

『では、悪い知らせです』

「あまり聞きたくねぇけどなー」

『貴方が入れ込んでいる霧夜王貴。どうやら、ＫＯＳには参加しないそうですよ……？』

「なんだと……？」

呟くようにして言う。
彼の表情は、先とは違い笑みはない。
あるのは落胆。御預けくらったような子供のような表情だった。

それから、釈迦堂の口元が歪むかのような笑みに変わる。
その笑みは何を意味しているのか。
それは、まだ誰も知らない。

言える事は、霧夜王貴に何かが起きると言う事だけだった――――――。

第２５話　オウキ～川神に降り立った貧弱～（後書き）

ボンジュール、兵隊です！！

真剣で王に恋しなさい！

何だかんだで、３０部突破することが出来ました！自分の事だから、どうせ飽きて終わるんだろうなー。と思っていましたが、ここまで続けられる事が出来ましたｗｗ自分でもびっくりです！

原作をプレイしたことがある人はお分かりだと思いますが、ＫＯＳに突入します！

ですが、貧弱王は全く興味がない。ホント困った主人公（笑）です。

それでは、ご意見ご感想お待ちしております。

気軽に書いて下さると、幸いであります。

短編集　王（オレ）の姉がこんな可愛いわけがない（前書き）

※注意！　この話はキャラが崩壊しています（特に貧弱王と乙女さん）

そんな話など見れるか！　という方は、御戻りすることをおすすめします。と、兵隊は殊勝な気持ちでそう告げてみます。

短編集　王（オレ）の姉がこんな可愛いわけがない

川神市の親不孝通り。
そこには、大きな声では言えない店がいくつも存在している。同じ親不孝通りながらも、そんな場所とは、正反対の位置に存在している豪華なマンション一室に、とある少年、霧夜王貴がいた。

当然ながら、その部屋は彼の住んでいる部屋だ。
しかし、その部屋にいるのは彼だけではない。長い金髪に蒼の瞳、熱いのだろうか、上半身はノースリーブ、下半身にはホットパンツをはいたラフな格好をしている女性がいた。

そんな女性、霧夜エリカは現在テレビの前を独占していた。

映っているのはお昼のワイドショー。
司会なのであろうサングラスをかけた中年ぐらいの男性が喋っていた。

ソファーに座っていた王貴は、テレビから窓の外へと視線をずらした。
空は快晴といってもいいぐらいだった。太陽も太陽で、休み気がないぐらい照りつけている。それに加えて、蝉が休み暇もなく鳴いている。これが拍車をかけて、王貴のみならず、川神市に住む人々の機嫌を損なわせていた。

そうすると、再び王貴は視線をエリカに戻す。

エリカの服装はノースリーブと言ったが、ただのノースリーブではない。背中が大きく開き肌をあらわにしていた。

簡単に言ってしまえば、健全な十代の男子を前にして、その格好は無防備すぎる。

しかも、王貴は思春期真っ只中の男子だ。欲情もするだろう……

……と、思われがちだが、王貴もただの十代の男子ではない。

「姉上……」

「なによー？」

エリカは振り返らず、テレビを見ながらそう言った。

その声質はどこかつまらなそうで、どこか惰性で見てる感じがふしふしと伝わってくる。

だが、王貴はそんなことを気に留めずに、口を開いた。

「姉上……ペロペロしてもよいか？」

――――――――――瞬間、時が止まった。

先ず、エリカが考えたのは、王貴が何を考えているかだ。
誰でもそう思うだろ。弟がいきなりペロペロしていいか？　と言って来やがったのだ。固まりもするし、どういうつもりか考えもする。

エリカは自分の頭脳をフル動員させて考える。
これでも、頭の回転は速い方だ。《久遠寺の麒麟児》とまではいかないが、速い方だと自負している。それでも、王貴がどんなことを思って発言をしたのか分からない。

理解不能だった。

エリカはゆっくりとした動作で、振り返る。
そこには王貴の姿があった。

取りあえず、聞いてみよう。
もしかしたら聞き間違いかもしれない。そんな望みを願いながら、

「……アンタ、今何て言ったの？」

「姉上、ペロペロしてよいか？」

「どこを？」

「背中をだ」

一体弟は何を言っているのだろう。エリカには訳も分からなかった。

自分の弟である、霧夜王貴はこんな発言をする男でもない。というよりも、こんな発言をする訳がないのだ。そう、言う訳がない。言う訳がないのだが……。

「どうした姉上、急に黙りこんだりしよって？　無言はＯＫと捉えてよいか？　よいのだな！？」

「ちょ、アンタ何でいきなり立ち上がって、おもむろに屈伸とか準備体操するのよ！」

「戯けめ、ペロペロする準備体操に決まっているではないか」

「何、誇らしげに言ってんのよ！　この、戯け！」

そう言うと、エリカは立ち上がり、一歩下がる。

傍から見ても、エリカの危機的状況だった。

そんな彼女に、

「ただいまー」

救世主が現る。
その者こそ。

「お、乙女センパーイ！」

鉄乙女だ。
彼女も、王貴の部屋の居候だ。そして、エリカと同じく川神学園の講師でもある。
乙女の片手には、買い物袋が握られており、どうやら買い物に行ってきたらしい。
服装もTシャツ短パンととてもラフな格好だった。

何はともあれ、エリカは突然現れた自分の救世主に縋りつくような勢いで駆け寄る。

「乙女センパイ、大変なのよ！」

「む、どうしたんだ姫？」

「王貴ったらいきなり、ペロペロさせろって言ってくるのよ？！
どうにかしてよ！　そういう変態な発言は私の専売特許でしょ！？」

「なんだ、そんなことか。あまりペロペロするなよ～？」

「えぇー！？　まともな人が私しかいない！？」

思わずツッコム。

エリカはよろめきながらも、一歩二歩と後退していく。
彼女の今の気持ちは、どうしてこうなった。といった言葉のみ。

冷静に分析すると、この猛暑で二人とも頭がおかしくなったのだろう。それしか考えられない。

今、悩みの種である二人は、

「チッ、それにしてもやかましい蝉よな。誰ぞ、あの蝉を捕まえてくるがいい。天ぷらにして食ってやるわ」

「王貴。この中で揚げ物なんて言う、高等技術（ハイレベル）なことが出来る奴なんていないぞ？」

「おっと、そうであった。王（オレ）、ついうっかり」

「「はーっはっはっはっはっはっは」」

何がおかしいのか、笑い合っている。

エリカから見ても、本当に何が面白くて笑っているのか理解できない。

というか、二人ともそんなキャラではないだろう。

「そう言う訳で、行くぞ姉上」

「行くって……どこによ？」

「さぁな。取りあえず、姉上の可愛さを衆愚どもに伝えねばならん」

「はぁ？　何を言って――――――キャァァァァ！！？」

王貴は空間から鎖を取り出し、エリカの体をグルグル巻きに拘束すると、そのまま連れて行った。

この時を以て、カオスの権化は川神へ解き放たれたのだった――――。

「あつーい」

「あちー」

「あついわねー」

大和、翔一、一子が寝っ転がりながらそう呟いた。
彼らがいるのは、島津寮の大和の部屋だ。

外の気温はすでに４０度を超えていた。加えて、大和の部屋にはエアコンなどと言ったハイテクマシンなどない。あるのは、蒸し暑い風を出す扇風機のみだ。

「あついなー。図書館でも行くか？」

翔一がごろごろと転がりながらそう呟く。

確かに、図書館だと冷房も効いて涼しいだろう。だが、少なからず翔一と同じ考えの人間はいるわけで、恐らくかなりの人間が涼みに言っていることだろう。
だが、それでも、今のようなダラダラしている状況よりはマシだ。

そう考えた大和は、

「そうだな、そうするか」

「アタシもさんせー」

一子も賛成した。

その姿はだれが見ても元気がないように見え、犬のような耳やしっぽもあったら萎れているだろう。

何はともあれ、彼らはのろのろと立ち上がる。

図書館へと行くために。

だがそれは、いきなり大和の部屋の窓から入ってきた来訪者に阻まれることになる。

「うおっ、ベガのしゃがみ強キックみたいな感じに入ってきた！？」

「火急の用件で窓からすまぬ――――――いいや、謝らんぞ。むしろ貴様らが王（オレ）に謝れ」

「うわぁ、しかもやりたい放題ね……」

その来訪者こそ、霧夜王貴だ。

王貴の後には、霧夜エリカが申し訳なさそうな感じに、入ってくる。

「すいません。ウチの弟が本当に迷惑をかけて」

「あっ、これはご丁寧に」

普段の様子とは全く違うエリカに、思わず大和もかしこまる。

そんあ姉心も露知らず、

「道化。貴様らこれからどこに出かけるつもりだ？」

「どこって、図書館に涼みに行くつもりだけど？」

「熱いのであれば、皆まとめて服を脱いでしまえばよかろう！　なっ！！」

「アンタは黙ってなさい！　何かすいません。この子、暑さにやられちゃったんです。図太いくせに、こんなところが弱いんです」

エリカが必死にフォローに回るも、王貴の発言でプラスマイナス０にしている。いや、むしろマイナスだろう。

王貴は顎に手を添えて、

「……図書館かそれもアリだな」

「は？」

エリカが声を上げる。

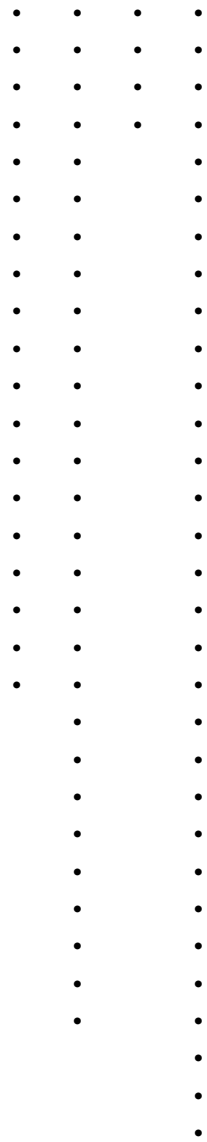
だが、王貴はそんなものなどお構いなしだ。

「姉上、図書館に行くぞ。そこで、姉上の可愛さを衆愚どもに（ｒｙ」

「絶対嫌よ！　って、またこれぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

王貴は空間から鎖を取り出し、エリカの体をグルグル巻きに拘束すると、そのまま連れて行った。

彼が目指す先は図書館である――――――――。



「という、夢を見ました」

「何を言っているのだ、姉上」

「アンタねー。タイトルに『王（オレ）の姉がこんな可愛いわけがない』って書いてあるんだから、ちゃんと私にメロメロになりなさいよ。それが何なのよ、ぶっ飛んでるだけじゃない。もっとこう、ガツンガツン来なさいよ！」

「何故、王（オレ）が何の謂われもない怒りをぶつけられねばならん！　貴様こそ何なのだ！」

「おーい、喧嘩もいいが、おにぎりが固くなってしまうから速く食べろよー？」

そんな感じで、いつもの霧夜家の日常が始まった。

ただ言えることは、何故にエリカはあんなカオスな夢を見たのかという事だけである――――。

短編集　王（オレ）の姉がこんな可愛いわけがない（後書き）

ニーハオ！　兵隊です！

何やら、過去の感想で《エリカと王貴の話を》といった言葉や、《王貴の我が崩れるところを見たい》といった意見があったので即興ながら、作ってみました。

しかし、本当に書きたかった理由は、これ以降シリアス（笑）が始まるので、ギャグは最後って感じに始めたのが最大の理由です。

それでは、皆さん！
ご意見ご感想がありましたら、ご気軽によろしくお願いします！！

死後の世界という者がある。

あるとはいっても、それを現実に見た者はいない。それは当たり前のことだろう、なんせ死後の世界だ。文字通り、死んだ後の世界。それを見た者は、死んでいるという事だ。

だが、もし。

そんな世界があるとしたら、その世界に一人の少年が迷い込んだとしたら。少年はどうするのだろうか？

「グッ……！」

少年は苦しげに声を発すると目を覚ました。

その瞬間、激しい頭痛が少年に襲いかかる。

突然の激痛に、少年は目をギュッと閉じ頭を片手で押さえる。

それからゆっくりと瞼を開けた。

暗い。
辺りは暗闇に包まれ。空にあるのは太陽ではなく月。それから察すると夜だという事が分かった。

そうして、少年は辺りをゆっくりと見渡す。
すぐ近くには建物があった。その建物は学校のような作りで、どこか真新しい。自分の服装も、この学校の制服の物なのだろう。黒い学生服のようなものを着ていた。
そこで、自分はこの学校の生徒なのだろうかと思う。

だが、どこか違和感があった。
自分が仮にこの学校の生徒だというのなら、“なのだろう”といった曖昧な言葉になる。
そもそも、自分は――――――誰だ？

どこから来た、何故ここにいる、ここはどこだ、そんな疑問が頭によぎる。
考えられるのは、記憶喪失。

何を馬鹿な、と鼻で笑うが、これしか思いつかない。

少年は困惑していた。

「あっ、気がついた？」

声が聞こえた。
それは男性にしては高く、すぐに女性だという事が分かった。
少年は目を凝らして、その声が聞こえた方向を見る。
少女がいた。
だが、その少女は何やら細長い物体を持っていた。それはライフルだった。少女の容姿とは不釣り合い極まりないモノだった。
その少女の登場に、少年は益々困惑する。
何せ、いきなりライフルを持った女子が現れたのだ。いや、少女の口ぶりからすると、少年が目を覚ますまでそこにいたのかもしれない。どちらにしても、困惑するのだから変わりない。
少女は持っていたライフルを肩で担ぎながら、少年に近づいていく。
そして、少年を見下ろすような形で観察する。
「……うん、大丈夫そうね」
「……ここはどこだ？　それにお前は……」
「ここは死後の世界。んで、私はゆり」
「死後の……世界……？」
「そ。アンタは死んだからここに来たの。自覚ないの？」

意味不明だった。
目の前の少女――――ゆりが言うには、少年は死んでしまったらしい。だから少年は死後の世界であるここにいる。

少年にとっては訳も分からない状況だった。
いきなり目を覚ました場所には見覚えがなく、自分が何者であるかもわからない。あまつさえ、ライフルを持った女には自分は死んでいると告げられる。まったくこれっぽっちも状況が飲み込めなかった。

「んで、アンタは何て名前なの？」

「なまえ……？」

「そうよ、名前よ。もしかして、分からないの？」

いや、と少年は言葉を区切り、少し考えると、

「“おうき”だ。名字なのか名前なのか分からんが、そう呼ばれていた気がする……」

少年がそう呟くように言うと、ゆりは満面の笑みで、

「そうオウキね。んじゃ、ようこそオウキ！　この死後の世界へ！」

そうオウキに手を差し伸べた――――――――――――。

ＩＦ～もしも、貧弱王がＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！の世界に迷い込んだら～（後

昨日、友達の家でＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！を見て、閃いたので書いてみました。
一発ネタだと思ってくださいｗｗ

第２６話　獣と王の会合　前篇（前書き）

王貴「学校でエロゲをやったら驚かれたのだが……」

エリカ「それぐらい大丈夫でしょ。私だって、学校のパソコンでホモ小説書いたり、エロサイト回ったりしたし」

第２６話　獣と王の会合　前篇

「そうか、駄目だったか……」

川神市にある多馬川の川岸。その土手で、一人の男が落胆するかのような声でそう言った。

その男はスーツを着ていた。だが、サラリーマンとは違う雰囲気を醸し出している。

その男の近くに、黛由紀江の姿があった。

由紀江は申し訳なさそうに、

「すみません、総理さん。私の不甲斐ないばかりに……」

スーツを着た男――――総理は由紀江の言葉を、慌てながらも否定する。

「謝らなけりゃならねぇのは、俺の方だ。由紀江ちゃんのお父さんを怪我させちまってからよぉ……」

「そんな！　総理さんは何もやっていませんよ！」

今度は、由紀江が慌てながらそう言った。

由紀江が総理といったこの男こそが正真正銘、日本の総理大臣に他ならない。

そして、彼女とＫＯＳを出場するメンバーは不死川心、総理。この3名で出場するらしい。

そもそも何故、日本の総理大臣がＫＯＳなどと言った、格闘大会などに参加するのだろうか？

それは、優勝者に与えられる１０００億円という大金が理由だ。

勿論、総理はこの大金を個人で使うといった考えは、微塵も考えていない。獲得した優勝賞金は全て地方活性化の資金にすると考えているようだ。つまりは、“政策”のために総理はＫＯＳに出場するらしい。

総理が格闘大会に出る。

そんな、前代未聞な行動に反対の声が上がらなかったわけでもない。勿論、大多数の人間が反対した。ＫＯＳは世界大会だ。日本の

中で行われるものではない。その世界大会で、もし日本の代表者である総理が他国の者に負けてしまったら。

間違いなく、他国から日本は格下と見られるだろう。

確かに総理は、射撃は上手いが武術家ではない。そんなものは他国では知れ渡っている。

だが、総理は日本を代表する人間だ。そんな人間が負ければ日本が安くみられるのは当たり前だ。

正にこの戦いは、国家の存亡を賭けた戦いと言う訳だ。

そんな訳だから、当然周囲の人間は反対する。

しかし、総理も勝算がないわけではない。世界中の猛者がつどう大会だ。出場した気合いで勝つ、と言った考えなしではない。

ＫＯＳはルール上１人では出場できない。４人１組で出場しなければならないルールだ。

ならば、総理の他の３人が豪傑であればいい。汚いと言われるかもしれない。卑怯だと言われるかもしれない。だが、総理にはそれまでして勝たねばならない信念があった。

総理は思う。汚いと罵られようが構わない、と。それでこの国が元気になるのならそれでいい、と。

そうして、集められた豪傑は２人。１人は天才柔術家と謳われている藤原。もう１人は北陸の剣聖と名高い黛だ。

そしてこの黛は、黛由紀江の父親でもあった。

総理は勝てると思った。何せ日本でも、世界でも武術家として名

高い2名が味方に付いたのだ。誰でも勝利を確信するだろう。彼らに対抗できる人間がいるとしたら、武道四天王クラスか川神鉄心クラスの武術家でなければならないのだから。

だが、事件が起きた。

この2人が何者かに、全治2週間の怪我を負わされたのだ。犯人の目星は付いている。恐らく、彼の失脚を狙う人間の仕業だろう。そう考えると、誰が依頼したのかは自ずと分かってくる。

しかし、証拠がない。

全治2週間と言ってら、どこかをねん挫したといったレベルだろう。だが、そんなレベルでも命取りになる。彼らが戦いに臨むのは世界規模の大会だ。そんな軽い怪我でも甘く見れない。

そうなってしまえば、藤原と黛は大会に出られなくなる。

総理は途方に暮れる気持だった。今更、大会を辞退することもできない。そうすれば、彼と敵対する野党がここぞと言わんばかりに、彼を責めるだろう。そうなっては、ここまで政策を進めてきた意味がない。全ては水泡に帰してしまう。

何より、ここで大会を辞退する行為は、ここまで自分について来てくれた者たちを裏切ることにつながる。これこそが、総理にとって我慢ならなかった。

そんな総理に救世主が現れた。

それは由紀江だ。

由紀江は言った、怪我をした父に代わって総理さんのお役に立ちたい、と。総理はそれを断ろうとした。何せ、世界規模の大会だ。当然、強豪たちが現れるだろう。それに、総理を狙う刺客も現れる。そんなことに、友達である黛由紀江を巻き込むわけにはいかない。

だから、総理は断ろうとした。だが、出来なかった。その時の由紀江の眼を見て断ることが出来なかった。その時の由紀江は真剣そのもの。正に、侍といってもいいぐらいの信念がそこにあった。

そして、由紀江の実力を見てみれば、侮っていたのは自分だと言う事が思い知らされた。

強い……、何てモノではない。由紀江の強さは圧倒的というよりは透明。強いというより、綺麗なモノだった。獲物である刀から繰り出される絶技の数々。あの最強と呼ばれている川神百代が剛の強さなら、黛由紀江は柔の強さだと言ってもいい。

そんな、由紀江が推薦する柔術の使い手。

それが不死川心だった。心も、由紀江ほどではないが、かなりの手だれだと言う事が分かった。

そして、由紀江はまた一人推薦したい人物がいると言う。しかも、それは由紀江だけではない。不死川心も推薦するという。

その者こそが、霧夜王貴。

その名前が挙がった瞬間、総理はキリヤカンパニーを思い出す。

だが、霧夜に長女がいると聞いたことがあれど、長男がいるとは聞いたことがない。関係者か、それとも他人なのか。それは会った時にでも聞けばいいかなどと考えた。

総理はそんな事をぼんやりと考えると、由紀江に視線を戻す。
由紀江は目線を地面に落とし、両肩も下がらせて、落ち込んでいた。

それを見て、いたたまれない気持ちになる。
自分のために、ここまでしてくれる友人を見て、総理は申し訳ない気持ちになった。

元はと言えば、自分が彼女の父に一緒に出場してくれと頼み込んだからこうなったのだ。自分が黛大成に頼みこまなければ、彼女はきっと友達と一緒にこの大会に出ていたのかもしれない。

そんな事を、考えて総理は、

「由紀江ちゃん。確かに、俺は由紀江ちゃんのお父さんを怪我させちゃいねぇ。でもな、間接的に怪我させちまったのは俺なんだよ。だから、俺は由紀江ちゃんにも由紀江ちゃんのお父さんにも謝なければならねぇんだ。悪いことしたら謝なけりゃならねぇだろ？　……すまねぇな、由紀江ちゃん。落ち着いたら、由紀江ちゃんのお父さんにも謝りにいくからよ」

そうだ。
悪いことをしたら、謝なければならない。それが友達だったら尚更のことだ。
由紀江は友達だ。相手が一介の女子高生であろうが、そんなものは関係ない。
そう。立場なんて関係ないのだ。

そうして、由紀江に総理は頭を下げた。
そこには恥も外聞もない。純粋に謝罪をする男の姿だった。

「……頭を上げて下さい、総理さん」

総理は下げていた頭を上げる。
そこには優しく微笑んでいる由紀江がいた。

「父もきっと気にしてません。一緒に優勝して、父に自慢しちゃいましょう！」

敵わないと思った。
そして同時に、この子の友達で本当に良かったと思った。
今の言葉でどれだけ救われたか、由紀江は分かっているだろうか。
分かっていないだろう。何せ、今の由紀江の顔は１００％善意の顔だったからだ。

「あぁ、そうだな。自慢しなきゃな」

「はい！　そうですよ！」

「と、くりゃあ。当面は４人目確保だな。王貴って坊主が断っちまった以上、誰かを探す必要があるしなぁ」

「あ、あの。そのことなんですが……」

由紀江はどこか申し訳なさそうに、

「心さんが『王貴の説得は此方に任せておけ』と。それから『絶対に４人目は開けておけよ』とも言っていました……」

「おいおい、説得するのはかまわねぇが無理強いは駄目だぜ？」

「多分大丈夫だと思います……。おそらく、きっと……」

だんだんと小さな声に変わる。
霧夜王貴と不死川心は昔から知っている者同士。いわゆる、幼馴染だと言う事は分かっていた。
だが、２人とも良くも悪くも強引なところがある。磁石で例えるなら、由紀江はＮ極で。２人のような人間はＳ極だ。つまり反発してしまう。
まぁ、王貴に対する心の心境を考えて、そんな事はないと思うのだが、心配になってくる由紀江であった――――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

授業も終わり放課後になった。
川神学園には多数の部活動が存在する。この学園はそれほど部活動に力を入れているわけではないが、これだけの数があると言う事は、行動的な生徒が多数いると言う事なのだろう。

そんな行動的な生徒の中に島津岳人という少年がいる。
彼は１８８センチメートルの体を大きく揺らし、スキップをしながら進んでいた。
その横には師岡卓也の姿もあった。

卓也は横にいる、自称ハンサム筋肉を見る。
顔はにんまりと嬉しそうに笑い、スキップをしながら進んでいた。
そうして思う。不気味だ、と。
何が不気味かと言うと、全てと答えるしかない。
鍛え抜かれた筋肉。男らしい骨格。上腕二等筋の美しいライン。
腹筋もカブトムシの裏側のような形をし割れている。だと言うのに、
何故スキップなのか。

「ガクト……、頼むから普通に歩いてくれない？」

「なんでだよ？　俺様がスキップしてちゃ悪いのか？」

「うん。凄い気持ち悪いと思うよ？　現に、ガクトとすれ違う女子何か顔引きつっているし」

「はっはっは。何言ってんだ、このもやしっ子モロは。俺様のようなハンサムとすれ違って、嬉しさで卒倒することは分かるが顔が引きつるはないだろう。それじゃ嫌がってるみたいじゃねぇか」

嫌がっているみたいも何も、嫌がっているようにしか見えない。

いくら何でも、今の岳人は機嫌がよすぎる。

今だかつてない、ポジティブシッキングだ。前向きすぎて、偶に後ろも振り返ってほしいレベルだ。

「……何でそこまで上機嫌なの？」

「ん～？　聞きたいか～？」

にっこり頬笑みながら言う岳人。

思わずイラっと来る衝動を我慢して、卓也は顔をひきつらせなが

ら、

「き、聞きたいな～」

「しょーがない、教えてやるよ。俺様、前に王貴と麻雀したことあったろ？」

「あー、惨敗したって言っていたね。それがどうしたの？」

「フフフ、俺様よぉちょっと復讐がてら、スグルから借りたエロゲをアイツに貸したのよ」

「ツッコミ満載だけど一応聞いておくよ。何を貸したのさ？」

「学校日和だ」

「えぇ！？　あの学校日和、略して“スクイズ”を！？」

アダルトゲームである、学校日和。通称“スクイズ”。主人公とメインヒロイ２２人を中心に据えた、ＴＶアニメ７０話分以上の膨大なアニメーションと共に物語が進行する学園アドベンチャーゲーム。ある程度まで話を進めると表示される１つか２つの選択肢の選び方次第で、物語が分岐していく。なお、選択肢によるヒロインの好感度の上下は視認できるゲージとして画面内に存在はしているものの、それが物語内で唐突に影響を及ぼすわけではない。

と、言うのは建前で、本当は鬱ゲーでも有名なゲームだ。
何といっても“修羅場”と呼ばれるシーンが多く、バッドエンド時の陰惨な描写からも、プレイすると鬱な気分になる“鬱ゲー”として注目を集めた。

浮気なんて日常茶飯事。終いには、親友の彼女をレイープしたり寝取ったりとハチャメチャに展開するゲームだ。
続編も出ていることから、それなりに需要はあるようだが、卓也としてはアレをそこまでやりこめる気力がない。

と言うよりも、何故スクイズを王貴に貸したのだろうか。

卓也は不思議そうに、

「それで、何で王貴にスクイズを貸したの？」

「仕返しだよ」

「仕返し？」

「あぁ、仕返しだ。如何に、ハンサムでマッスルに定評のある俺様でもあの野郎には勝てない。と言う訳で、アイツを鬱らせてテンションを下げさせようって訳だ」

卓也は思わずため息を吐く。

いくら、鬱ゲーに定評のあるスクイズであろうと、王貴が落ち込んでいる姿なんて、想像が出来ないからだ。

そもそも、想像するにはイメージが必要だ。イメージするのは簡単だ。頭の中でその光景を思い描けばいいだけの事。

しかし、卓也はそのイメージすら湧いてこない。

王貴が両肘を立て、腕を組み「鬱だ死のう……」とか言っている光景が思い浮かばない。

むしろ、「おのれぇ……！　王（オレ）の嫁である○○がこのような扱いとは……！　このような駄作を作った会社などぶっ潰してくれる！」と言うだろう。卓也にとって、こっちの方が安易にイメージが出来る。

しかし、岳人はそんな卓也の思っている事とは真逆の事を考えているようだ。

そう。王貴が落ち込んでいる方に想像を膨らませている。

だからこそ、彼は上機嫌にスキップをしているのだろう。

そうこうしていると、王貴がいるであろう、生徒会執行部の扉の前まで来てしまった。
はてさて、生徒会室にいるのは、卓也の想像通りの怒り狂っている王貴か。はたまた、鬱で落ち込んでいる王貴か。

岳人がドアノブに手をかけると、ノックもせずに勢いよくドアを開けた。
岳人のような無駄に力がある奴がドアを思いっきり開けたのだ。
勿論、バンッ！という大きな音が響き渡る。

霧夜王貴ただ1人がそこにいた。馬鹿でかく、高そうな机と馬鹿でかく高そうな椅子に座りながら何かを操作していた。
それは、パソコンだ。
大きな画面でで、これまた高そうなパソコンを操作している。
王貴の表情は退屈そうで、惰性でパソコンを操作してる感がある。
つまり、暇だったからやると言った感じだ。

そこで初めて、王貴は岳人たちの方へと顔を向ける。そうした瞬間、不機嫌な表情に変わる。
この自分の居城である、生徒会室に自分の許可なく勝手に入ってきているのだ。自分本位の彼が不機嫌になるのは、想定の範囲内ともいえる。

「貴様ら、一体なんだ？」

「いやぁー、お前に貸したゲームやり終わったかなー、と思ってよ」

岳人が白々しく笑いながら言うが、王貴はそれに気づいていない。パソコンに視線を向けているのだ。岳人の表情なんて、見てすらいなかった。

「アレか……」

そうして、王貴はマウスの右クリックをした後、

「今、終わった」

「……今？」

「そうだ、今だ」

その瞬間、エンディングを迎え終わったであろうＢＧＭが流れ始めた。

それも、ＢＡＤＥＮＤに流れることで有名なＢＧＭ。みんなそれを処刑用ＢＧＭと呼んでいる。

それはつまりこの男は、川神学園の生徒会長という役職についているこの男は、学校でエロゲをしている、しかもあろうことか学校の備品である、パソコンでエロゲをしていたことになる。
馬鹿なのか、常識がないのか。恐らくは後者だろう。

卓也はおもむろに近づき、王貴のパソコンを横から覗く。

「あれ？　これ、《鮮血の結末》だよね？　もしかして、また最初からやってたの？」

卓也が言う、《鮮血の結末》というのは、初期の段階で見れるエンディングの事だ。
始めたての頃ならば、誰でも通るであろうエンディングだが、王貴はもう終わったと言っている。と言う事は、つまりまた最初からやっているという事だ。

それに岳人は顔を引きつらせながら、

「ゲェッ、マジかよ。俺様でも途中で断念したのに、もう一回やるとか……。まぁ、聞くまでもねぇけどよ。どうだったよ、そのゲーム？」

「うむ、行動が突発的な点を除けば、存外に楽しめるモノであったぞ。中でも、修羅場と言うのか？　それが愉快であった。やはり、人間の欲望というのはこうでなくてはいかんな」

悠々と、作品の感想を言い放つ王貴に、岳人は駄目だったかと落胆を禁じえない。

しかし、

「だがな……、」

王貴はそう言うと、

両肘を立てて、手を組みながら、

「強姦は駄目だろう……」

凄い勢いで落ち込み始めた。

その姿にはいつもの、王貴の姿はない。どんよりと、重い雰囲気を身にまとっていた。

（あ、そう言う系駄目なんだ。と言うか、どうするのさ岳人。凄い、落ち込んでるよ？）

（あー、これは俺様の思惑通りって感じなんだが、ここまで落ち込まれると流石に気が引けるな……）

２人は、ぼそぼそと話す。勿論、王貴には聞こえない音量でだ。
そして、どうするか考える。
岳人は王貴を馬鹿にするか、それとも小馬鹿にするか。
卓也はどうやって岳人のフォローをするか、それとも王貴の方へフォローに回るか。

そんな事を２人は考えていた。

だが、王貴は直ぐに調子を取り戻して、

「む、時間か」

パソコンの電源を切ると、高級そうな椅子から立ち上がった。

「どこかに行くの？」

「百代から果し状が届いているのでな。退屈しのぎに相手をしてやるのだ」

なんてことはないというかのようにそう告げる。

王貴の今のニュアンスは、“近所の子供が暇だと駄々を捏ねるから遊びの相手をしてやってくる”と同義だ。それも、あの川神百代を相手にしてその発言。

卓也は目の前に君臨している男に戦慄を覚える。

百代の強さは、間近で見ている卓也が知っている。一騎当千、人類最強、川神の怪物、頭の中に溢れるのはそんな単語たちだ。その相手に、王貴は“退屈しのぎに相手をしてやる”と言い放ったのだ。

何て、不遜。何て、傲慢。何て、傍若無人なのだろう。

百代を相手に、こんな発言が出来る人間がいるだろうか。仮にいたとしても、それは強がりだ。王貴のように純粋に“退屈しのぎ”なんて思っている奴はそうはいないだろう。

岳人は、思わず王貴に問いかける、

「お前、モモ先輩と何回戦ってんだよ？」

「フム……、かれこれ３４回ほどか」

「その中で勝敗が付いたのは何回？」

「全て引き分けに終わっている。一日一時間しか戦ってはいけないという制約があるのでな。勝敗が付く前に時間切れになるのだ」

ということはつまり、王貴と百代は互角という事になる。

３４回も戦っているのだ。両者に力の差はないだろう。

だが、王貴は、

「此度の戦いは王（オレ）が勝つであろうな」

傲岸にそう言い放った。

無理だと岳人と卓也は思う。

百代と相対すると言う事は、敗北が約束されているのだ。つまり、勝ち負けという領域ではない。

そして２人とも、霧夜王貴と言う人間ははったりを言う人間では

ない事も知っていた。

「モモ先輩には“瞬間回復”っていうチートがあるんだぜ？　お前にそれを何とか出来んのかよ？」

そう、岳人の言うとおり、百代には疲労も傷も瞬時に回復してしまう“瞬間回復”がある。こそこそが、百代を最強とする武器の１つでもある。

この“瞬間回復”をどうにか出来ない限り、王貴の勝利はありえないのだ。

だが、王貴の自信は揺るがない。

彼は唇を皮肉気に曲げて、

「瞬間回復？　だからどうしたのだ」

「だからどうしたって……」

今度は卓也が困惑しながらそう呟く、

その姿に、王貴は肩をすくめて、ため息を吐くと、

「王（オレ）にしてみれば、何故貴様らがあの女をそこまで高く買っているのか分からん。あの女は良くも悪くも人間だ。人間であるが故に弱点はある」

例えばだ、と言葉を区切ると、

「人間は呼吸が出来なければ死ぬ。ならば、『火行』を使い、あの女の周りの酸素を燃焼してやればよい。『木行』の電撃の力を使い、酸素をオゾンに分解させ窒息させればいい」

百代もいくら最強であろうと、ただの人間だ。

ならば、人間の弱点を付けばいい。それが王貴の出した結論だった。

「だが、そのような勝利など面白くもない。何より王（オレ）の美学に反する。勝利するからには、堂々と、圧倒的な武力を以て勝利してこそだ」

「どうやってだよ？」

「奴の意識を刈り取る一撃を放つ。そうすれば、奴は何もできなくなり、地に倒れるだろう」

王貴は当たり前のように言うが、それがどれほど困難だと言う事かは、彼が一番よく知っている。

百代は強い。そんなこと、３４回も戦っている彼が一番よく知っているのだ。

しかし、百代も無敵ではない。

だが、岳人や卓也などと言った人間たちは百代を無敵だと思っている。

王貴が百代を買いかぶりしすぎている、と言ったのはそこだ。人間である以上、無敵であることは絶対にあり得ない。これが、王貴の持論だからだ。

だからこそ、王貴はそれを証明しに行く。

百代と言う、無敵の象徴を倒し、それを証明しに行く。

だが、そんな時、

「王貴は居るか？」

高そうな着物を着た、川神学園の女子生徒が生徒会室に入ってくる。

不死川心。

息を切らし、走ってここまで来た事が分かった。

「何の用だ？　王（オレ）は忙しいぞ」

王貴の言葉を聞いていないのか、心はムフフと笑いながら近づく。

何やら嫌な予感がする。

王貴はそれを瞬時に感じ取り、一歩距離を開けようとするが、心の両手が王貴の片手を掴みそれを阻んだ。

そして、心は満面の笑みで、

「此方に付き合え！」

王貴はその言葉に、眉がぴくっと動かす。
そして、こめかみに青筋を立てる。
どうやら、自分の目の前にいる幼児体型は人の話を聞いていなかったようだ――――――――――――。

第２６話　獣と王の会合　前篇（後書き）

どーも、皆さーん。
知ってるでしょー？　兵隊でございます。
おいパイ食わねぇか？

と言う訳で、皆さんおはこんばんちは！　兵隊です！

はい、御覧の通り作中にあった“スクイズ”多分皆さんがご想像している通りだと思いますｗｗ
誰でもプレイしたら鬱になるあのゲーム。しかし、貧弱王は格が違った。何ともないです（最終的には鬱になりますが）。

さて、いよいよ行動に移しましたね、我らが心タソ。
これからどうなっていくのか。
でも、これデートじゃね？　と思われますが、ご安心を。
次回はシリアス（笑）になると思いますので、その要素は一つまみしかないと思いますｗ

あまりにも長くなると思うので、前篇後篇と分けさせて頂きました。
後編は今週中に更新できればいいなと思っておりますｗ

スランプではありますが、頑張っていきたいと思っておりますので、
ご意見ご感想がありましたらよろしくお願いします！
皆さんの意見が、兵隊の力となりますので！

第27話　獣と王の会合　後編

川神院。
それは、関東三山の一つで厄除けの寺院として名高く、市の名前になるほどに有名な場所だ。中でも、武道家の鍛錬上としても有名で、《田尻耕》《橘平蔵》と名高い武道家を世に送り出してきた。

その川神院で、一人の女性が闘技場のような場所で立っていた。
名は、川神百代。
曰く、人類最強。曰く、古今無双。曰く、一騎当千。と、数々の異名を持つ女性だ。

その異名と実力になんら遜色はない。類い稀なる腕力、強靭な脚力、蓄積された稀に見ない量の気。そして、天性の格闘センス。正に、戦うために生まれたかのような人間だった。彼女は文字通り、最強なのだ。

だからだろうか。
彼女は孤独だった。あまりに強者であるが故に、孤独だった。
彼女には友人がいる。かけがいのない友人がいる。だが、真に彼女を理解している者はいるのだろうか？恐らくいないだろう。彼女を本当に理解できる者は、彼女と等しく孤独でなければ出来ないだろう。

そうして、彼女は腕を組み始める。
恰好は川神院の白い胴着を着ており、これから戦うような格好だった。それはまるで、挑戦者を待っているかのような。
現に、彼女は待っていた。今日戦う相手を。自分を打倒しうる力を持っている、一人の少年を。

その者は、霧夜王貴。
曰く、人類最凶。曰く、歩く暴虐。曰く、暴君。
彼の戦闘スタイルは、百代の真逆と言ってもいい。比較的近距離で戦う事が多い百代とは違い、王貴は遠距離で戦うロングレンジタイプだ。その攻撃方法も特殊で、気で武具を造り出しそれを相手に投擲するスタイル。
そう言う事からか、引く力、押す力、バネ、瞬発力、体の柔らかさ。そして、格闘センス。全てが百代の方が勝っている。唯一、負けていると言えば、気の容量だけだ。

だと言うのに、どうして彼女は霧夜王貴に勝てないのか。
それはただ単純に、霧夜王貴の戦い方が上手いからだ。“強い”ではなく、“上手い”のだ。

彼の戦い方は、ただ武器を投擲するだけではない。
相手はどう向かってくるか。相手はまず最初に何をするか。相手は何を考えているか。などと言ったことを予測し、相手の動きを計算しながら武具を雨霰と投擲するのだ。
勿論、相手の動き何て何十通りものパターンがある。それを一通

りになんて、絞り込むなんて不可能だ。しかし、それが出来るからこそ王貴は百代と渡り合えている。

じゃんけんで例えるなら、百代がグーで王貴がパーだ。このままでは勝てない。グーはなんぼやってもパーには勝てないし、パーも負けることはないのだ。

ならばどうするか。どうやったら百代は勝てるか。

簡単な話だ、チーに変えればいい。

王貴は頑張っても、グーは出せない。彼の戦闘スタイルから考えて、グーは絶対出せないのだ。

王貴にも弱点はある。彼の致命的な弱点である、接近戦は使えない。何故なら、百代の行動を計算して、先読み武器を投擲するため近づくことが出来ず、接近戦など出来ないのだ。

接近戦を持ち込もうにも、百代の行動は計算されて、近づけない。

ならば、王貴の計算外の動きをすればいい。

簡単に言うが、それは容易な物ではない。相手を動きを一級の観察し、それを予測、どの確率でその予測通りに動くか計算し、それを同時進行する思考速度。これらを欺き、騙すことは安易なものではない。

だが、それが出来るのが川神百代だ。それが出来るからこそ人類最強なのだ。

だが、王貴の計算外の動きをしても、それがずっと効くわけではない。

王貴も直ぐに、修正しその動きに合わせてくるだろう。

つまりは、チャンスは一度っきり。それで仕留めれなければ、手段はないし、チャンスも来ないだろう。

だからこそ、百代は興奮していた。

自分ともあろう者が、最強である自分が、一度っきりの博打をしなければ勝てない。

未だかつて、そんなものはなかった。チャンスなどいくらでもあった。力づくでチャンスを生み出してきた。だが、それが出来ない相手が霧夜王貴なのだ。

百代の体が、興奮と熱気が溢れる。

それと同時に、一凪の風が吹いた。

それは生温かく、初夏を感じさせる。

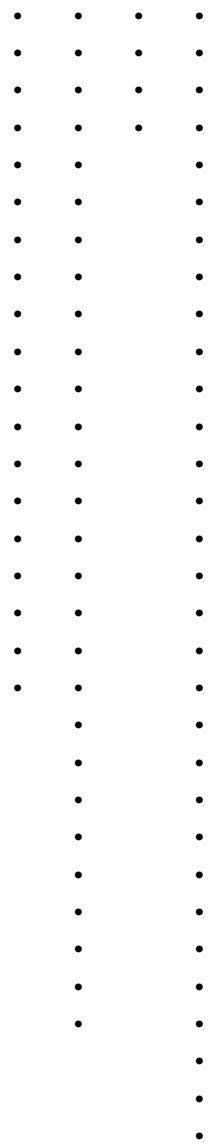
そんな風でも、百代は涼しく感じさせるには十分だった。

そこまでに、彼女の体は熱く、そして興奮していた。

そうして、唇を舌で舐める。

速く来い王貴。早く早く早く早く早く――――――。

彼女は一心に、そう唱えた――――――。



「うわー、姉さん凄いワクワクしてるなぁ……」

闘技場から少し離れた場所で。

直江大和が仁王立ちしている百代を見て、そう呟いた。

そこにいるのは大和だけではない。

師岡卓也と島津岳人と黛由紀江を除く、風間ファミリーがそこいた。皆が皆制服で、下校していたことが分かる。

彼らがいるのは百代に、これから王貴と決闘をするからお前らも見に来い。と呼び出されたからだ。

そして、百代の立っている闘技場のような場所を川神院の門下生たちが取り囲むようにして立っている。

彼らは何をしているのかと言うと、百代と王貴の戦いに備えて、結界を張っているのだ。

しかも、門下生総動員。

その中には、総代である川神鉄心と師範代のルー・イーの姿もあった。

この陣容を見て、川神院はどれだけ本気かということが分かる。

川神院門下生の中には、やる気満々の顔の門下生もいれば、何だか涙目になっている門下生もいるし、もう泣いている門下生もいる。

多分、恐怖で泣いているのだろう。

何はともあれ、大和が思う事は一つ。
――――ご愁傷さま。
それだけだった。

「ねぇーねぇー大和ー」

「何だよ、ワン子？」

「ガクトとモロには連絡したの？」

「あぁ、さっきな。直ぐ来るってさ」

大和がそう言うと、川神一子はふーん、と言葉を漏らす。

ここに由紀江がいないのは、皆知っている。
理由はＫＯＳ関係だと言う事も知っている。それをどうこう言うつもりもない。仲間に友達が出来るのはいいことだ。だからこそ、風間ファミリーの皆は何も言わなかった。

そうして、クリスティアーネ・フリードリヒは川神院の入口を見ながら、

「それにしても、王貴は何をやってるんだ！　まったく、こんなに人を待たせて！」

「まぁまぁ、クリス落ち着いてぇ。どぉーどぉー」

椎名京はプンスカプーと怒るクリスを宥めるように言う。仕草は、馬を落ち着かせるかのようだ。

勿論、クリスはそれに、自分は馬じゃない！　と、怒りを露わにしながら言うが、地団太を踏みながら言っているので、ちょっと説得力がない。

だが、クリスの言う通り、王貴の到着は遅かった。

百代が言うには、学校が終わったらまっすぐ川神院に集合らしいのだが、王貴の姿はない。

先にも言ったが、彼らがここにいるのは、百代に呼び出されたからだ。しかも、呼び出された時間は、学校が終わった時間をゆうに超えており、もう始まっていると思っていた。

だが、今だ始っていない。

あろうことか、王貴がまだ到着していない。

そして、大和は一つの結論に達する。

あいつ、わざとだ。と、言う結論に達した。

この結論は、王貴の行動と性格を視野に入れて出した結論だ。大和も、これには間違いないと思っている。待っている百代もそう思

っているのか、ただ静かに待っている。

「でも、アイツ遅ぇな。多分わざとだろうなー」

風間翔一が、川神院の入口を見ながらそうぼやく。
そのぼやきに、反応したのはクリスだけだった。ということは、他の者たちは気付いていたという事になる。

その反応を見て、大和は思わずにやりと唇を曲げる。それは、人を弄る時の笑みだった。

「あれー？　クリスー、まさか気付かなかったのかー？　アレだけ、アイツに付き纏ってたのにー？　何も気付かなかったのかー？」

「い、いや。自分も分かっていたぞ！　それよりも、付き纏っていたとは何だ。失礼だぞ！」

「でも、付き纏ってたでしょ？　性根を叩き直すとか言って」

今度は京がそう言う。
京も、大和と同じ笑みで、人の悪い笑みをしていた。

クリスは思わず、うぐっ、と言いつつ一歩下がる。そして翔一の方に視線を向けるが、翔一もニヤニヤと笑っており、クリスを助ける気は毛頭ないようだ。

そうして、クリスは翔一から一子に視線をずらす。

そこは流石一子だ。一子はどこか、興奮しているかのように百代に視線を向けていた。どうやら、これからの決闘に興奮しているようだ。

クリスから見たらこれは好機。ちょうどいい逃げ道だ。

クリスはすかさず、制服のポケットから、一つキャンディーを取り出すと、

「お、おい犬。ヴェルタースオリジナルでも食べるか？」

「えっ、いいの？」

「あぁ、マルさんにたくさんもらったんだ。一緒に食べよう！」

「うん、食べるー！」

二人はヴェルタースオリジナルを舐め始める

何はとも言えることは、クリスは大和と京の口撃から逃げたということだった。

そうしていると、

「おーい！」

川神院の入口から、声が聞こえてくる。
風間ファミリーから聞けば、それは慣れ親しんだ声だった。

全員、声のした方へと視線を向ける。
そこには、走ってくる岳人と卓也の姿があった。
だが二人の様子がどこかおかしい。その様子はどこかあわてており、顔には汗らしきものが流れていた。それに、顔色も悪い。

岳人と卓也は風間ファミリーの面々の場所に到着する。
やはり二人の様子はおかしかった。二人とも冷汗は流れ、視線も横目でチラチラと百代を見ている。

そんな様子で、岳人は片腕を上げて、

「や、やぁ、みんな。元気～？」

声が裏返っていた。

様子がおかしい。絶対におかしい――――。

岳人、卓也意外の、ここにいる風間ファミリーの心が一つになった瞬間だった。

皆の心を代弁するかのようにして、キャップである翔一が岳人に心配するようにして、

「ガクト。お前どうしたんだよ？　何か、変な物でも食ったか？」

「馬鹿だな～。俺様はいつも通りだぜ？　なぁ、モロ？」

「うん。そ、そうだね！　ガクトはいつもかっこいいよ！」

岳人だけでなく、卓也も様子がおかしかった。

何が変化と言うと、いつものツッコミがない。いつもの卓也なら「いやいや、様子がおかしいから」といったツッコミが来るだろう。だが、今回はそれがない。それだけで、重傷だと言う事が分かる。

翔一たちは、問いただそうとするが、次の一子の発言によりそれも止める。

「それにしても、王貴遅いわねー。どうしたのかしら？」

その言葉を聞いて、二人はビクッと体を震わせる。
それは明確な反応で、王貴がここに来ない理由。そして二人の様子がおかしい理由にもつながると、大和は確信する。

大和は、薄く笑いながら、

「お前ら、何か知ってるな？」

二人は案の定、うっと言葉に詰まると、大和は逃がさないと言わんばかりにたたみかける。

「速くゲロった方が身のためだと思うぞ～？　見てみろ、あの姉さんの様子を。どうだ？　ものっ凄いワクワクしてるだろ？　しかもさ、別にガクトとモロに危害が及ぶ訳でもないだろ？　被害をこうむるのは全部王貴だ。そう考えたらさ、別に話してもいいだろ？」

そう言われ、二人は考える。
別に、王貴に危害がこうむることを悩んでいることではない。王貴が来ない理由を言ったあとが怖いのだ。と言うか、絶対に百代が暴れる。彼らにはそういった確信じみた理由があった。

そんな時、

「おーい、キリキリ話せー。王貴は何で来ないんだー？」

百代（死刑執行人）の声が聞こえた。
卓也と岳人。その時の心境は、死刑執行の前の死刑囚の心境だったと語っている。

そして、二人は王貴が来ない理由を話した。
放課後に生徒会室にいったら、王貴がパソコンを操作（エロゲをやっていたとは言っていない）していたこと。それも終わり、川神院へ向かおうとしていたところを不死川心につかまり、そのまま心についていったと。

それを聞いた百代はブルブルと体を震わせる。
百代の様子を見て、風間ファミリーと鉄心とルーは直感でヤバイ

と悟った。アレはマジでキレる5秒前だ、と悟り始める。
そうして、風間ファミリーは全速力で走り始める。出来るだけ遠くに、これから起きるであろう惨劇に巻き込まれないように。後ろなんて、振り向いている余裕はない。そんなタイムロスをしている暇もないのだ。

それから案の定。百代はブチ切れた。

「がぁぁぁぁぁぁぁ！！　私と戦うよりもラブコメがいいのか！？　そんなに、ラブコメがしたいのかアイツはぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「こりゃ、モモ！　暴れるな！」

「さぁ、百代が暴れ始めたヨー。門下生の諸君、決死の覚悟デ止めるよォォ！」

「門下生Aよぉ。これが終わったら、酒のみにいかね？」

「おっ、いいねぇ。俺、良いバー知ってんだ」

「おいおい、水臭いぜ。俺も連れて行けよ」

「俺もいるぜ。お前らに良い格好させるかよ」

「さぁ、頑張るぞぉ（ＣＶ桑島法子）」

「まぁ、ぶっちゃけ百代さんだけだからましじゃね？（ＣＶ西川貴教）」

鉄心とルーを先頭に、勇ましく百代を取り押さえようとする門下生たちだが、どこか死亡フラグを乱立しているのは気のせいだろうか。

いや、恐らく気のせいではないだろう。

何はともあれ、このことに関しては約束を破った王貴が全面的に悪い。

この事だけは、はっきりと言える――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ひゅい！？　何じゃ今のは？！」

「ただの地震であろうが。何を驚いている？」

「お、驚いたわけではないわ。こ、この馬鹿者」

「その割に、腰が引けているぞ貴様」

突然の地震に、心が声を上げて、王貴がどこか意地の悪い顔でからかう。

霧夜王貴と不死川心はイタリア商店街を歩いていた。

あれから、王貴は心に連れてこられここにいる。正確にいえば、心に引きづられ様にしてここに連れてこられた訳だが。

勿論、王貴も抵抗はできた。だが、抵抗をすれば、心は間違いなくへそを曲げる。心がへそを曲げる。別に、曲げたら曲げたでそれでいいだろうと思うが、心の場合はそれからがメンドクサイ。

恐らく、心は王貴にネチネチと文句を言うだろう。あの時、此方の誘いに断った癖に。とか、お前がそうするなら勝手にしろ、此方も勝手にするのじゃ。とか、ネチネチと文句を言い続けるだろう。もしくは、涙目になりながら、王貴の後をひたすらつけてくるか。そのどっちかだ。

どちらにしても、メンドクサイ事には変わりない。

だから、仕方なく。心に付き合っているという訳だ。

王貴は辺りを見渡す。

彼らがいる、イタリア商店街。

それは、イタリアな雰囲気が漂っているためそう名付けられた、複合商業施設である。映画館、ライブハウスを中心として、ショップ、レストラン施設などが集まっているためか、学生にも若者にも人気となっている。

イタリア商店街には王貴たちのほかにも、川神学園の学生や若者が歩いていた。

その中で、歩いている王貴と心はやはり浮いていた。
何が浮いているかと言うと、服装（片方の人物は着物）もそうだが、やはり雰囲気だろう。
どちらも、どこか庶民とは違う雰囲気を纏っている。王貴で言うなら王気
オーラ
。心で言うなら高貴なる者と庶民の違い。
そんな二人が歩いているのだから、当然周囲の視線は二人に投げられる。

鬱陶しい。
王貴はそう思うと、ある所に視線を向けた。
そこには、夏限定チョコレート販売、と書かれたビルにかけられた横断幕。それを見て、思わずもう夏か、とぼんやりと考えた。

川神に来て、もうそんなに経ったらしい。

「随分と、経ったな……」

王貴は適当に空を見上げて呟く。

それから、嘲笑するかのように唇を曲げる。その笑みは自分に対してだ。
自分らしくもない。霧夜王貴とあろう者が何と言う様だと。

随分と経った。と、彼は言った。だが正確にいえば、まだ数カ月しか経っていない。それだけ彼にとって川神にいた時間は、瞬きするほど速かったと言えるだろう。

有意義に過ごせていたのか、はたまた無意味に時間が過ぎていたのか、それは彼にしか分からない。

ふと、彼は心に視線を向ける。

心は心で、何かを考えているらしく、ブツブツと何かを呟いていた。

王貴はめんどくさそうに、

「おい」

「ひゃっ！？？」

心は飛び跳ねるかのようにして驚く。顔も真っ赤に染まっている。

その様子を見て、王貴は呆れながらも、

「貴様、王（オレ）に何の用だと言うのだ？　わざわざ足を運んでやったというのだ。さっさと用件を言え」

「え？　あ、そうじゃな。では、此方に付いてくるがよい！」

心は勇み足で先行する。
その後に、王貴も続く。
王貴は心の耳に視線を向けると、彼女の耳が真っ赤になっていることに気付く。
何か、恥ずかしいことでもあったか？
王貴はそう疑問に思いながら、心の後に付いて行った――――――。

……………………………

…………………………

…………………

霧夜王貴は、恐ろしくマイペースな人間だ。
絶対に、他人にペースを合わせようとしない。超我儘な人間だ。

そんな事、心は熟知している。
だからこそ、王貴のペースを惑わせる必要があった。
それも、王貴をＫＯＳに出場させるためだ。何とかして、あの男のペースを握り一緒に出場させると言わせる。ペースを握ろうが、握っていなかろうが同じかもしれないが、成功率が何パーセントかあがるだろう。気休めだろうが、何パーセントでも上がるだけマシと言える。

何はともあれ、王貴のペースを乱す。
言葉にするのは簡単だが、行動に移すのは難しい。何せ、相手は霧夜王貴だ。超王様（オレ）を地で行く男だ。何をどうやってペースを乱すというのだろうか。

そこで、心は考えた。そして、ひらめく。
黛由紀江に借りた本に、こんな展開があった気がする。
その記憶を頼りに、心は自身の頭脳をフル回転させ、思い出した。
主人公らしき人物と、ヒロインらしき人物は自分たちのように出かけ、ある場所へと赴いた。そこで、主人公は慌て始め、ヒロインが主導権を握っていた。

そう、その場所へと行けばいい。
だが、

（は、恥ずかしいのじゃ……）

そこは、女の場所。
どんなモノを穿くのか。また、どんなものを付けるのか。それらがバレてしまう。
しかも、そのバレる男が王貴ならなおさらの事だ。他の男ならいざ知らず、王貴にバレると考えるだけで、顔に熱が帯び始める。

恐らく、今の自分の顔は真っ赤だろうと考えていると、

「おい」

「ひゃっ！？？」

心は飛び跳ねるかのようにして驚く。

王貴もめんどくさそうだったが、心の反応を見て呆れた感じに変えて、

「貴様、王（オレ）に何の用だと言うのだ？　わざわざ足を運んでやったというのだ。さっさと用件を言え」

「え？　あ、そうじゃな。で、では此方に付いてくるがよい！」

そう言って、心は勇み足で先行する。

場所は、以前由紀江に連れてこられたから分かっている。

女は度胸。これからは、自分と王貴の戦。負ける事の出来ない大勝負。

そう意気込みながら、心は力強い足並みで、先に進んだ――――。

…………………………

…

………………………

………………

王貴が連れてこられたのは、イタリア商店街のビルの中。

１０階あるうちの５階のとある場所だ。

その場所は、何やらマネキンやら、マネキンの上半身だけの模型やら、マネキンの下半身だけの模型やらが飾られていた。

それだけなら、まだいい。

だが、問題なのはそれからだ。その模型にはあるモノたちが付けられていた。

それは“下着”。それもただの下着ではない。女性用の下着が付けられていた。

マネキンの上半身だけの模型にはブラジャーが。マネキンの下半身だけの模型にはショーツが。

それらを見て、王貴は思わず呟く。

「何だここは」

「ランジェリーショップじゃ……」

心はか細く呟いた。顔は真っ赤で、羞恥心に溢れている。
それから、勢いよく顔を上げて、王貴に視線を向けると、

「い、今からここで、お前は此方の下着を選ぶのじゃ！」

自棄になったのか。
心は涙目になりながらも、王貴にそう叫ぶようにして言う。

王貴も王貴で、マイペースにランジェリーショップの中を見渡して、心に視線を戻す。再び、ランジェリーショップに視線を送り、心に視線を戻す。

それからやっと王貴は口を開いた。
その言葉は残酷で、女性に対して、その言葉はどうなのだろうかといった、感じのものだった。

「貴様には、下着はいらんだろう」

「ど、どういう意味じゃ！　この馬鹿者ぉ！」

勿論、心は怒る。涙目になりながらも、怒り始める。
その反応は当然とも言えた。身体的な事を、しかも女性として王貴の発言は何だか負けているような感じがすると思ったのだろう。

王貴も訂正する気がないのか、心に視線を向ける。上から下へ、下から上へ。上から下へ、下から上へ。そうした後に、

「やはり、いらんではないか？」

「お前、喧嘩売っているのか！？　売っているのじゃな！？　よかろう、高く買ってやるぞ！」

そう言って、心は王貴に挑みかかるが、王貴の造り上げた障壁に

阻まれる。
心も、障壁一つに阻まれた程度で諦めなかった。何せ、女としての矜持を傷つけられたのだ。この程度では諦めない。

このまま王貴を殴りかかろうとしても、障壁に阻まれて殴れない。そう、判断した心は、王貴から５０メートルほど離れると、そこから一気に助走をつけて、王貴にとびかかるようにして蹴りつける。要するにライダーキックだ。
ちなみに、心は着物を着ている。だがその動きは、着物を着ているとは思えないほど素早かった。心の身体能力が高いのか。はたまた、火事場のクソ力のの影響か。まぁ、この際どちらでもいいだろう。

王貴の障壁は揺るがない。心の女の意地と誇りを乗せた渾身のとび蹴りでもびくともしなかった。飛び蹴りをした影響で、王貴側から見たらパンツ丸見えだったので、意地と誇りの他に、羞恥がプラスされる。正に、やって後悔するとは、このことだろう。

心は、羞恥に身を震わせて、顔を真っ赤に染め上げながら、

「ムキィ～～～！　腹の立つ、腹の立つ奴なのじゃ！」

「やかましい女だ。下着の一つや二つ見られたからと言って、何だと言うのだ」

「ししししししし下着じゃとぅ!!?　見たのか、お前見たと言うのか!?」

「見たから、何だと言うのだ?」

王貴はにやりと意地の悪い顔で言う。

彼は心が何故、恥ずかしがっているのか知っている。ここまで、彼女が恥ずかしがっている理由のうちに、男に見られたというのも含まれているだろう。だが、その他にも霧夜王貴に見られたという部分の方が大きかった。

勿論、王貴もそれは知っている。

だからこそ、彼は意地悪く笑う。それは、とても趣味が悪く、大半の男を敵に回すような仕草だった。

そんな二人に、

「お客様、どうなされました?」

話しかける女性が一名。

女性が王貴達に話しかける態度、仕草、雰囲気から察してランジ

エリーショップの店員だと言う事が分かる。
その店員は、１００％の笑顔を王貴たちに向けていた。アレだけ大騒ぎをしてたのにもかかわらず、マニュアル通りの笑顔。流石、川神市にある店の店員だと言えるだろう。マニュアル以外のアクシデントにも見事反応して見せた。

王貴は適当に、心に視線を向けながら、

「この女に合う下着を見繕うがいい。無論、全額コイツが支払う」

「ふ……普通逆じゃろう！　こういうときは、お前が此方に奢るのではないのか？！」

心が慌てながら言うが、王貴は聞こえないふりをする。

心については来たが、奢るともいってないし、そんな義理も謂われもないからだ。

心がぎゃーぎゃーと騒ぐ横で、店員は黙って王貴を見つめている。
それから一言、

「あの……カップルですか？」

途端に、心の罵声がぴたりと止むも、王貴は即座に、

「それはない」

正に一瞬。
考えるそぶりすらなくそう言い放った。

心は金魚のように口をパクパクとしながら、王貴に指をさし始める。

色々、王貴に言いたいのだろう。此方を辱めておきながら、此方をコケにしておきながら、此方の下着を見ながら、此方を侮辱しておきながら。その他にもこの男には言いたい事がある。だが、上手くまとまらないのだろう。

王貴と心。
二人の様子を見て、店員は両目をキラリと妖しく光輝かせ始める。
その目は、獲物を見つけたハイエナと似ていた。

「しかし、お客様。女性とこのような場所に来たからには、甲斐性を見せなければ器が小さいと見られますよ？」

ここの店員は、予期せぬアクシデントに対応できる力はあれど、社員教育と言うモノが出来ていないらしい。客に話しかける言葉使いではないだろう。

普通の客ならば、大きなお世話だと激怒するだろう。

だが、この男を“普通”の客と一緒にしてはいけない。王貴が気に入らなかった場所はそこじゃなかった。

「貴様……。この王（オレ）の器が小さいだと？」

王貴の気に入らなかった場所はそこだった。

自分は王を名乗る身だ。その王たる自分が、屑如きに器が小さいと言われて黙っているわけにはいかない。と、思ったのだろう。何にしても、そこで目くじらを立てるのだから器が小さいと言われても仕方のないことかもしれない。

店員はにやりと笑うと、

「お客様が器が大きい男性だと言うのならば、彼女に下着の一枚や二枚はプレゼントなされると思うのですが？」

店員が王貴に下着を買わせようとしている事は、誰でも分かる事だ。普通はそんなものでは釣られない。

だが、王貴は違う。この男は、ひどく乗せられやすい。頭が良いくせにバカなのだ。

「フン、下着の一枚や二枚だと？　たわけめ、王（オレ）が買うからにはそれだけでは済まさぬ」

「……何枚追い求めでしょうか？」

王貴は一呼吸置くと、

「全部だ。この店にある、下着を全て持ってこい！」

「お買い上げありがとうございますぅぅぅ！　カードでのお支払いでしょうか！？」

「無論、現金（キャッシュ）だ！」

「現金入りましたー！　おい、下着全部持ってこい！　カモがネギ背負って来たぞぉぉぉ！」

「「「お買い上げ、ありがとうございます！」」」

川神市のイタリア商店街にあるビル。その中にあるランジェリーショップ、そこだけがバブルのような動きを見せていた。店員たちは、ひゃっほー！　と飛び跳ねるかのような喜び方をしていた。

ただ一つ言える事は、心の目論見であった、王貴のペースを乱すという作戦は見事失敗に終わり、何十枚、何百枚ともいえる量の下着が心のモノになったと言える事だけだった――――――――。

・・・

「おい、貴様。何を面白くなさそうに歩いている」

「……別に、此方がどうしようがお前に関係ないであろう」

あれから二人は、ビルから出てイタリア商店街を歩いていた。
時刻は午後６時を回り始めたからか、王貴たちが来た頃よりも学生が少なくなってきている。学生は少なくなったが、サラリーマンやらＯＬやらが増え始めているため、人ごみの数はあまり変わっていなかった。ちなみに、購入した下着は業者に頼み、不死川家本家に運んでもらったため、今手元にはない。

心は面白くなさそうに歩く。
今日は散々だった。幼馴染にはバカにされるは、幼馴染には下着を見られるは、幼馴染にはカップルか？　と聞かれて速攻で否定されるは。とにかくキリがない。

（うぐぅ……！　こんな予定ではなかったと言うに……！）

心は頭の中でブツブツと呟く。

彼女にとって、こんな内容でイライラしている事自体が不快だった。どんな感情であれ、どんな動機であれ今日振り回されていたのは自分だ。

そうして、心はチラリと後ろを歩いているであろう男を盗み見する。

王貴はキョロキョロと辺りを見回しており、もう心には興味がないようだった。

（おにょれぇ……！　もう此方には興味がないと!?　飽きたと言うのじゃな?!）

そう思うと、ため息が出た。

霧夜王貴は気まぐれな人間だ。気まぐれで他人をからかい、気まぐれで場を引っかき回し、気まぐれで他人に話しかけたりする。まるで猫みたいな人間だ。今だって、気まぐれで自分に付き合ったのだろうと心は思う。

そうなると、心は一人だけ緊張し、一人だけはしゃいでいた事になる。

間抜け。あまりにも間抜けだと思った。

こんな気持ちになるなら、王貴を連れ回さなければ良かった。最初は舞い上がるほど嬉しかったが、何だかんだで損をしている気がする。

今の心は、部屋の隅で膝を抱えていたくなるような心境だった。

（フ、フン！　それもこれもこの“バカ”のせいなのじゃ！　まったく、昔とは違い捻くれおって！）

心はもう一度、王貴をチラリと盗み見する。

王貴は立ち止っていた。そして、ある一点を見つめている。

それは、今沈みかけているオレンジ色に染まった夕日だった。その夕日を、いつもお尊大な表情とは違い、何だか切なそうな表情で見つめていた。

そこで、心は何かを思い出すと、王貴の横に静かに近寄り、

「覚えておるか？　昔遊んでいた頃、夕焼けになるとお前はいつも泣いておったのじゃ」

昔、彼らは遊んでいた。その遊び方は独特で、決して一般人が子供の頃彼らと同じ遊びをしたことのあると答える者は、ごく少数だろう。

だが、彼らと一般人に同じ共通点が一つある。

それは、空が夕焼けに染まったら、家に帰らなければならないと言う事。そして、彼らはまた明日と言って別れるのだ。

そこだけは、一般人と共通していた。

王貴は夕焼けを見ながら、

「勝手に記憶の捏造をするな。泣いていたのは、貴様だけだ」

「むぅ？　でも、お前だって『まだ、遊びたい！』と駄々をこねた事があるではないか」

その一言で、王貴は黙りこくる。彼の反応を見ると、心が言っている事は本当のようだった。

心は思わず、笑った。
霧夜王貴は変わった。いや、昔のころに少しだけ戻ったと言った方が正しい。さっきの夕焼けを見ている表情だって、昔とそっくりだった。似ているからこそ、心は昔のころを思い出したのだ。

「何を笑っている？」

心の反応に、王貴は訝しむような視線を投げかける。

彼女は嬉しそうに、

「お前は変わったな」

「王（オレ）が……変わっただと？」

「うむ、昔に戻ってきたと言った方が正しいのじゃ。最初、川神に来たお前は……正直怖かった。他人を寄せつけておらんかった。今は、何だか優しくなった。そんな気がするのじゃ……」

そう心は嬉しそうに語る。

だが、王貴は困惑していた。
以前に榊原小雪に指摘され、彼は“この世の全てを背負う”といった決意を固めた。しかし、王であるが故に、孤高であるべきだと言った考えを変える気はない。王とは支配する者だ。他人を支配するからこそ、王は孤独になる。だからこそ、王貴は孤高になろうとしている。

だが、今はどうだ。
気が付けば、自分でも気が付かないほどに、今の状況をよしとしている。馴れ合いを良しとした、ぬるま湯の様な状況。

思えばそうだ。
川神へ来た頃の王貴なら、心と出かけるなんてありえなかった。他人に話しかけられすらさしなかった。他人を認めるなんて真似はしなかった。九鬼英雄とも会話と呼べる事なんてしなかった。小雪が攫われようが助ける事なんてしなかった。

今の状況を見て、自分は孤高と言えるだろうか？
答えは、否だ。
どこが、孤高だと言うのか。堕落しきっている。
もう自分は、孤高ではない。
――――――と、言う事はつまり。王ではないと言うのか？

王貴の心が激しく揺らぎ始める。

今まで、彼は王になるために生きてきた。他人を支配するために生きてきた。だが、孤高ではない今を以て王と言えるのか？
王貴は王としての生き方しか知らない。昔の頃どういった人間だったか何て、覚えていないのだ。

今の自分は王でないというのなら、これからどうやって生きてきたらいい。
“王”という、ＧＰＳを頼りに砂漠を進んでいたのに、いきなり表示が消えてしまったかのような感覚だった。目指すべきものが見当たらない。

「ど、どうしたのじゃ王貴。何か変じゃぞ？」

心の声に我に還った。

心の方へ視線を向けると、心配しているかのような表情で、王貴の顔を下から覗き込んでいる。

「……大丈夫か？　何だか様子が変じゃぞ？」

「貴様には関係のない事よ。それで、何か言いたそうだな？」

「う、うむ。此方達とＫＯＳに――――――」

そう、心が口を開くもそれ以上の言葉が紡がれる事はなかった。

二人は、バッと勢いよく後ろを振り向く。

そこには、一人の男性が立っていた。

グレーのポロシャツに、黒色のズボンを着ているこの男。一見普通の男性だが――――雰囲気だけは違った。

その男の立っている周りだけ、別世界のような感覚。

いや、その男だけが、周りの人間と違うような感覚だった。

あの男は、化け物だ。強いなんてものではない。“暴力”といった言葉が人間の姿をするのなら、あの男のような形になるのだろう。

――――――アレは、川神百代と同等。いや、それ以上の化け物だ。

男は無造作に、心と王貴に近づいてくる。

だが、その歩き方に隙はなく。重心もぶれていない。

男が動いたと同時に、王貴も動いた。心を守るようにして、一歩踏み出す。

そこで、彼は自嘲気味に笑う。勝手に足が動いた、他人を守るために。自分はもう、王ではないというのか……。

二人に近づき、男は口を開く。

「よう。お前さんが霧夜王貴クンで合ってるよな？」

「貴様、何者だ？」

王貴は油断なく、男を見ながらそう言う。

彼がここまで警戒するのは、稀な事だ。誰にでも、尊大に接してきた彼が警戒する。そこまで、この男は脅威と言う事か。

男はにやりと唇を曲げて、

「俺は釈迦堂刑部って者だ。お前さん、ＫＯＳに出ねぇって聞いたんだけどホントか？」

「そ、それがどうしたというのじゃ！」

身を乗り出すようにして、心は釈迦堂を睨み付けた。

「こっちにも事情があってよ。ようやく霧夜の坊ちゃんと戦える機会が巡ってきたんだ。坊ちゃんには何としてもＫＯＳに出てもらわねぇと、俺もわりに合わねぇんだよなぁ」

口元を引き裂くようにして釈迦堂は笑った。

王貴は、その笑みを、どこかで、見覚えがあった。

釈迦堂は続ける。

「だから、坊ちゃんにはＫＯＳに出てもらうぜ。それによ――――――そこじゃ、他人なんて関係なく戦り会えるだろ？」

違和感。釈迦堂の一言でその違和感に納得がいった。

アレは自分と、川神へ来た頃の自分と同類だと。

他人何て関係ない。やりたい事をやり、気に入らない人間は殺す。

アレはそう言った人種だ。強すぎる故に孤高。強大な力を持つが故に孤独。

王貴はそう思うと、決断は速かった。

「よかろう。王（オレ）もＫＯＳとやらに出てやる」

「……おいおい、随分と早くに決まっちまったぞ。まぁ、こっちは願ったり叶ったりだけどよ」

「刑部……と言ったか？　貴様は王（オレ）の手ずから倒してやる」

「いいねぇ、その殺気。楽しみにしてるぜ」

そう言って、釈迦堂刑部は文字通り、その場から消えた。

釈迦堂は願ったり叶ったりと言った。

それは王貴にとって同じ事。釈迦堂刑部はかつての自分と同じだ。他者を省みることなんてない。己の欲望のままに行動する。

自分が変わったきっかけは恐らく、“あの男”との負けた事が原因だろう。それが、きっかけというのなら、釈迦堂刑部に勝利したというきっかけを以て、霧夜王貴は再び元へと戻る。他者の事なんてまったく顧みない、孤高の支配者に戻る。そうでもしないと、王貴は自分を保てなかった。

「心」

「……何じゃ？」

「貴様のチームに王（オレ）を入れるがいい。これは命令だ」

そうして、少年はまた堕ちてゆく。

ようやく掴みかけていた、光を投げ捨てて、闇へと堕ちて行った――――。

その少年の後ろには、少年を心配そうに見つめる、不死川心の姿があった――――――。

第27話　獣と王の会合　後編（後書き）

みなさん、おはこんばんちは。兵隊です！

この話の前半部分はコメディーチックで後半部分はシリアス（？）になってしまいました。

また、貧弱王が悩み始めましたねー。

そのまま、ダークサイドに堕ちて行ってしまうのか。はたまた、持ち直すのか。

ここが、王貴の正念場と言った感じでしょうか。

ここで、一つ雑談を。

実はこの『真剣で王に恋しなさい！』の他に、もう一つ考えていた作品がありました。

主人公は、悪党を目指す少年で、名前は釧路川
くしろがわ
悪人
あくと
。

勿論、“悪人”といった名前は偽名で、本名は亜久斗と言った名前です。

彼の名字である釧路川一族は、代々悪党の家系で主人公も清く正しい立派な悪党を目指すと言ったストーリー。

そんな彼の一族は川神一族に2つ呪い（嫌がらせ）をかけられており、まず一つは、ありがとうといったお礼を言われると吐血する。

二つ目は、悪い事をしても因果を歪められ最終的に良い事になって

しまう。と言った呪いです。
そのため、主人公は川神鉄心をものすごい嫌い。でも、百代と一子とかは別といった、変な感性を持っている。
キャップや英雄のようなヒーロー気質な人間が嫌いかと言ったら、そうではなくむしろ「オレ（悪党）の引き立て役」と言った感じで好意的

といった、作品を考えていました。
まぁ、没になってしまったんですけどねｗｗ

この辺で雑談は終わりにしようと思います。長々と付き合わせてすみませんでした。

では、ご意見ご感想がありましたらよろしくお願いします！
皆さんのご意見ご感想が、兵隊の力となります！

第２８話　ＫＯＳ開催前～前篇～（前書き）

雷太「最近、オイラ達の出番ないもんね」

風子「風子、遺憾」

第２８話　ＫＯＳ開催前～前篇～

世界規模で行われる、武の祭典ＫＯＳもあと一週間となった。

開催地となった川神市と七浜市はその影響を受けてか、かつてないにぎわいを見せていた。それもその筈ともいえるだろう。何せ、世界規模の大会の開催地となっているのだ。これでにぎわいを見せない道理なんてない。

そのためか、川神市と七浜市ではＫＯＳにあやかったグッズ販売などをしていた。その種類は様々。定食やら応援グッズやらパンフレットやらポスターやら何でもあった。

中でも売れたのがトレーディングカードだ。世界中の格闘家がプリントされて販売されている。中でも、川神百代はレア中のレアらしく、とても高価な代物だった。

そうして、舞台はにぎわいを見せている、川神市や七浜市ではなく、隣の市である松笠市へと移っていく――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

松笠市。

人口約４５万人の都市。戦前には関東一の軍港として栄え、今も松笠公園には戦争で連合艦隊の旗艦として活躍した、戦艦《松笠》が展示されている歴史ある街だ。米海軍、自衛隊の基地もあることから国際的。戦艦《松笠》もあることから、外国人の観光客が数多く訪れている。

こういった伝統もあるほかにも、若者に人気の《ドブ坂通り》もあるため、古くからの伝統と新しい魅力をあわせ持つ街こそが、松笠市だ。

その若者に人気のドブ坂通りを歩く4人の若者がいた
見た目は大学生ぐらいだろうか。

4人は何をする訳でもなく歩いていた。3人は男性、1人は女性といった構成。
1人は退屈そうに、もう1人も退屈そうに、もう1人は退屈そうに、最後の1人は退屈そうに。4人が4人ともつまらなそうに歩いている。
つまるところ、彼らは退屈だったのだ。

「あー、何か面白いことないかなー？　今ならトラブルとか大歓迎なんだけどなー」

4人の中の1人の女性――蟹沢きぬがそう呟いた。
彼女は口をとがらせ、腕を頭の後ろに組みながら歩いている。それから何故か急に、組んでいた両腕を解き始め、シャドーボクシングをし始めた。
ここで言うが、彼女の恰好はTシャツにスカートといったラフな格好だ。つまるところ、激しく動いたらパンツが見え放題。その事

を彼女は分かって、シャドーボクシングをしているのだろうか？

「そんなトラブルが起きてたまるか。ま、トラブルンなら大歓迎なんだけどさっ！」

きぬの横を歩いている、眼鏡をかけた男性――――鮫氷新一が口を開いた。その男性はえっへっへっへ……と、笑っている。口元には嫌らしい笑みが貼り付けられていた。大方、ジャソプで連載中の漫画でも思い出し笑いしているのだろう。

新一はぐっへっへ、と相も変わらず横で笑っている。

彼とすれ違う人たちは皆、新一の顔を見てはぽかんとすると、くすくすと笑い始める。夏の日差しにやられた、ちょっと頭の悪い人だと思われているのだろう。

その新一の様子に、赤色の頭髪の男性が呆れたような口調で口を開く。

「フカヒレ。取りあえず、その笑い方は止めろ。……笑われてんぞ？」

新一をフカヒレといった声。それは、伊達スバルの声だった。
この４人の中で比較的まともな、スバルがこうしてフォローに回るのは珍しい事でもない。というよりも、４人の中で１、２位に入るフォローっぷり。

そうして、３人は会話を始めた。
いつも通りの取りとめもない会話をし始める。この光景はいつものことだ。彼らが小学生のときから、何も変わっていないコミュニケーション。それが彼ら、対馬ファミリーの有り方。

その様子を黙って見ていた、男性――――対馬レオがため息を吐いた。

先程きぬが言っていた通り、彼らは暇を持て余していた。
彼らは大学生だ。昼ごろには授業もあるから暇ではないだろうと考えられるのだが、今日は生憎昼からの授業は無い。だからこそ、彼らはこうして暇をしているのだ。

ならば暇つぶしになるような事をすればいいだろうと、考えるのが普通なのだが、彼らはそれも思いつかなかった。ゲームセンターは飽きた、カラオケも飽きた、ボーリングも飽きた、ビリヤードも飽きた、松笠名物の海軍カレーは飽きてないが、昼食はもうすましてあるので今食べるべきものでもない。

そう考えて、レオはうーんと頭を捻り、

「んじゃ、ダーツでもするか？」

「えー、やだよ。ボクそれ昨日やったもん」

直ぐにきぬから反対意見が飛び出した。

それから、対馬ファミリー４人は意見を出し合うが、悉く却下していった。

そうしていると、きぬが首を横に振りながら呆れた口調で、

「ボクのようなレディーの暇つぶしにもならないなんて。ホント、駄目駄目な男どもだよ」

「レディーとか外来語使ってんじゃねーよ甲殻類。使いたいなら、その平らなボデーをボンキュッボンにしてから言うんだね」

「人の身体的特徴を言ってんじゃねぇよ、このメガネザル！　お前なんか、将来会社で窓際族になって、月給ドロボウとか言われるにきまってるぜぇ！」

「お前だって人の身体的特徴いってんじゃねーか！　つか、月給ドロボウは親父のニックネームだよ！」

「どうせ、お前もそう言われるようになるって。蛙の子はパイナップルってことわざ知らねぇのかよ」

「くっそー……！　何か難しい言葉使いやがって！　意味は分からないが腹が立つぜ！」

それからきぬと新一はギャーギャーワーワー、と言い合いを始めた。

だが、それをレオもスバルも止めない。むしろまたかといった感じの方が近いだろう。それから2人は言い争いから、取っ組み合いの喧嘩にジョブチェンジするが、レオとスバルは止めない。これはじゃれ合いのレベルで、きぬも新一も本気ではないと知っているからだ。

このじゃれあいこそ、対馬ファミリーのお家芸といってもいいのかもしれない。

ちなみに、きぬが言っていた蛙の子はパイナップル何てことわざはない。

正しくは蛙の子は蛙だ。何を以て、パイナップルと勘違いしたのか分からないが、このさいどうでもいい事だろう。

「それにしても、やることねぇなー。俺らってこんな暇人だったっけ？」

「スバルは陸上あるし、暇じゃないだろう」

スバルとレオが、きぬと新一の取っ組み合いを見ながら、そう呟いた。

そうしていると、レオの視界があるものを捉えた。それは、掲示板に張られているポスター。そこにはでかでかと橙色で炎のようなフォントで『ＫＯＳ』と書かれている。

ＫＯＳ。

世界中の武道家達が集まる武道大会。優勝チームには１０００億円が贈られ、富と名誉が約束された大会。

最初は、対馬ファミリーの面々も参加する予定だったのだが、伊達スバルは陸上で忙しく、鮫氷新一は趣味の路上ライブが忙しいため参加を断念したのだ。

スバルの陸上が忙しいのは事実かもしれないが、新一の路上ライブが忙しいは本当なのかもしれないが、半分は嘘だろう。何せＫＯＳは、民間人に危害が及ばなければ、何しても良いルールだ。それはつまり、拳銃で戦おうが、ロケットランチャーで戦おうが良い事を表している。

銃弾やミサイルが飛び交うかもしれない、戦場に誰が好き好んで

いくのだろうか。

そう言った点では、新一のＫＯＳに出たくないと言う思いは、一般人の観点から言えば間違っていない事だと言える。

レオは、出たい出たいと騒ぐカニをなだめるの大変だったなー、とぼんやりと思いながら、

「そう言えば、スバルって乙女さん今どこでなにやってるか知ってるっけ？」

「乙女さん？　……あーと、確か姫の護衛かなんかしてるんじゃなかったか？」

「その通りなんだけどさ。今は川神学園って所の体育教師やってるらしい」

「はぁ？　体育教師？　姫の護衛はどうしたんだよ？」

スバルは驚いたような声を上げた。

無理もない。護衛をやっていたと思っていた先輩が、今や体育教師だ。護衛の仕事をどうしただとか、いつ教員免許を取ったんだと

か、姫の護衛はどうしたんだとか、色々と疑問が湧いてくる。

そんなスバルに、レオは肩をすくめながら、

「姫の護衛をやりつつ、体育教師をやってるらしい。ちなみに姫は英語教師だってさ」

「……姫も相変わらずだなぁオイ。どうせ、姫の思いつきの行動だろ？　乙女さんも大変だな」

「いや、結構充実してるみたいよ？　何でも最近、弟子出来たってさ」

ふーん、とスバルは相槌を打つと、

「充実してるならいいじゃないか」

それにレオは、だな。と答えて、二人は空を見上げる。

青空が澄みわたる、松笠の昼下がり。

今日も松笠市は平和であった――――――。

二人が見上げている途中、新一のようの声で「スバル〜。このちっこいのシメてくれよ〜。このズワイガニ、手加減ってもの全く知らないいんだぜぇ？」的な声が聞こえるが、二人は聞こえないふりをする。

どうせ、新一を助けるような発言をしたらきぬがへそを曲げてめんどくさい事になる。
そんなことなら、新一を生贄にしてしまおう。
そして、後でお礼に何か奢ってやろう。
そう思うレオとスバルであった――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「困ったわー」

「うん。まさかこんなことになるなんて……」

舞台は松笠から川神へ戻り、ここは川神学園。２年Ｆ組の教室。
そこで川神一子と椎名京の二人が考え込んでいた。

今は、昼休み。
二人は机を挟んで、向き合う形で座っていた。その机の上には、お弁当が乗っかっている。中身が赤い物と、色々な食材が詰まった物。前者は明らかに京の弁当という事が分かる。
教室には、寝ている者、弁当を食べている者、雑談をしている者、カードゲームをしている者と様々な人達がいるが、彼女たちのように、深刻そうに弁当を頬張っている人達はいないだろう。

昼休みは学生で言ったら、解放するべき時間であり、羽を伸ばして午後の時間に向けてリフレッシュすべき時間であるからだ。

一子と京が悩んでいる原因は、ＫＯＳが関係していた。
別に、一子と京が怪我をしたとか、用事があるからといった理由でＫＯＳに出れなくなったといった理由ではない。

一子が自分の弁当にある、天ぷらを口に放り込みながら、

「ホントまさか、こんなことになるなんてねー」

「うん。まさかだよ」

と、京が自分の弁当にある赤い物体（赤いのは七味だと考えられる）を口に入れる。

二人はもぐもぐと口にある物を噛みしめ、それを飲み込むと、

「まさか、麗子さんがぎっくり腰になるなんてねー」
「まさか、麗子さんがぎっくり腰になるとは……」

口そろえて言うと、そのままため息を吐いた。

麗子さんとは、島津麗子。つまり、島津岳人の母親に当たる人物で、島津寮の管理人でもある人物だ。

最初は一子、京、麗子、そしてクッキーの４人（？）でＫＯＳに出場するつもりだったのだが、ここにきて麗子が腰を痛めて、ＫＯＳに出れなくなってしまったのだ。

そいう事で、一子と京は考える。

何が何でも、もう１人補充しないと、ＫＯＳに出れないのだ。

だが、ＫＯＳまでもう１週間切ってしまっている今の現状で、目ぼしい人間はもうチームを組んでしまっている。

だからと言って、その辺の素人を入れる訳にもいかない。そんな生半可なものでは勝ち残れる大会でない事を、一子と京は分かっているからだ。

しかし二人に食わず嫌いをしている暇はない。

このままでは、出場する事はおろか４人目を見つけることも出来ずに終わってしまう。そうなっては困る。武士娘を名乗る以上、引けない戦いもあるのだ。

「どうしよう、京。弓道部とかにいないの？」

「いないと思う。幽霊部員の私が見ても、余ってる人はいないね。川神院はどうなの？」

「うーん、いないと思うよ？　渋川さんも出場するって言ってたし……、」

ここで一子の言葉が止まった。言葉だけでなく、表情も体の動きもぴたりと止まる。それは文字通り、石にでもなったかのようだった。

そんな一子の様子に京は不思議そうに首をかしげる。

それから、何だかよくない事が起こりそうだと思ったので、取りあえず自分の弁当と一子の弁当を持っておいた。

その瞬間、一子は勢いよく椅子から立ち上がり、ダンッ！　思いっきりと机に両手を振りおろす。その拍子に、大きく机が揺れた。京が弁当を持っていなかったら、２つとも地面に落下していただろう。

「いた！　一人いたわ！」

「え、誰なの？」

京が２つの弁当を持ったまま意外そうな声を上げる。

最悪出場できない覚悟をしていたのだろう。その顔は驚き一色。

まさか、いるとは思わなかった。

一子は興奮気味で、

「乙女師匠がいたわぁ！」

「乙女師匠？　……あぁ、ワン子が師事してる人だっけ？」

京はそう言うと、脳裏に乙女師匠と言われいる、鉄乙女を思い出した。

突如、霧夜エリカとともに体育教師としてやってきた女性だ。

真面目な女性で、少し頭が固いところもあるが良い先生だと京は思う。姿勢から歩く姿まで隙はなく、武道をたしなんでいる事は一目瞭然。川神百代も、あの人は強い。と言っていたぐらいの人物。

それが鉄乙女だ。

そう思うと、京は首をたてに振って、

「うん。あの人ならいいと思うよ？　でも、あの人ぐらいなら他にも声がかかってるんじゃない？」

「そうなのよ！　だから急がないと――――って、お弁当がない？」

ここで一子はようやく、自分の弁当がない事に気付いた。

まぁ、あれだけ興奮気味に喋っていたら無理はないかも、と京は

思いながら、持っていた2つの弁当を机に置いた。

「はい、ワン子」

「あれ、京持っててくれたの？」

「うん。そんなことより、早く食べよ？」

「うん、そうね！　乙女師匠もうチーム組んでるかもしれないし！」

一子はそう言うや否や、そのまま一気に弁当を平らげようと、自分の口の中に急いで入れた。勿論、よく噛む事も忘れない。よく噛まないで食べたら、消化に悪いと一子は知っているのだ。

その様子を見ながら、京は自分のペースで尚且つ、急いで弁当を食べた。その弁当の中身は、赤い物体が引きつめられている。誰がどう見ても、辛そうに見える物体を京は口の中に入れていく。その表情はとても美味しそうで、見てる方も食欲のそそるモノだった――――――――。

第２９話　ＫＯＳ開催前～中編～

直江大和は一人、川神学園の食堂で後悔していた。

食堂とは、食事をする場所だ。という事は、大和が高確率で食物関係に後悔していると言う事に分かってくる。

そして彼の前には、大きな丼に入っているかつ丼がおかれていた。中身は3分の1ほど無くなっている。それを大和は青い顔をしながら、恨めしそうに見つめる。

彼の様子、かつ丼の中身を察すると、大和はこの目の前にあるかつ丼の事で後悔している事が分かった。何に後悔しているのかは、大和の丼を見ればわかるだろう。

大和が後悔している理由は、この大きな丼にかつ丼が入っている量だ。育ち盛りとは言え、大和のキャパシティにこの量はきつい物がある。

別に大和は普段から大盛りを頼むほど、食欲旺盛の人間ではない。どちらかというと普通。よく食べすぎる事もなく、よく食べる方でもない。

だと言うのに、今日に限って大盛りを頼んだのは、気まぐれだとかそういったモノではない。少し寝坊をしてしまって、朝食を抜いて学校に来たのだ。そうなってくれれば、当然いつもよりも腹が減るのは確実。だからこそ、大和は大盛りを頼んだのだが、

（こんなに、量が多いなんて聞いてないぞ……）

かつ丼大盛りは、大和の予想を遥かに上回っていた。

こんなの大盛りなんてレベルじゃない。ギガ盛りだ、と大和は思う。普通の量では足りないから、大盛りを頼むのだが、これはやりすぎだ。

思わず大和は、心の中で愚痴る。

そうして、自分の迎えに座っている島津岳人を見た。

「うめっ！　これめっちゃうめっ！！」

大和と同じ量の大盛りを口にかっ込んでいた。その様子は、正に豪快の一言。体全体を使って食べているかのような食べっぷりだった。

食欲をそそられるかのような食べっぷりなのだが、今の大和にはそんなものは通用しない。岳人の食べ方を見て、空腹になるようではこんな苦労はしないのだ。

このまま丼とにらめっこをしていても始まらない。

そう思った、大和はゆっくりとした動作で箸を進めた。

そんな大和の横では、

「なぁ、虫歯ないのに歯医者行ったら『こいつやるな』って思われるんじゃね？」

「いやいや、虫歯ないのに歯医者行ってどうするのさ」

風間翔一と師岡卓也が下らない話をしていた。

二人はもうすでに昼食を済ませている。翔一の前にはカレーが盛られていた皿が、卓也の前にはラーメンが入っていたであろう丼が置いてある。

つまり、まだ食べていないのは大和と岳人の2名という事になる。

「んじゃさ、おもむろに口の中にマウスピースとかは？」

「それ、治療させない気満々だよね！？　歯医者に何しに来たのさ！」

今日もモロのツッコミは冴えわたっているなー、と大和は感想を

思考の隅で思う。

大和の余裕などない。

目の前のかつ丼に思考の全てを集中しないと、この目の前にある化け物の全て持っていかれる気がしたからだ。

だがそれも。

「何だ大和？　もう腹いっぱいなら俺様が食ってやるぜ？」

岳人の一言で、全てが解決した。

勿論、大和は岳人の好意（？）を受け、丼を岳人の前に置いた。

しかし大和の顔に安堵の表情は無く、驚愕一色に顔色を染め上げる。

岳人の発言に、この大盛りを体験していない人間からすれば「ガクトは育ち盛りだなー」の一言で片付くのだが、大和は大盛りの脅威を先程味わったばかりだ。大和からしてみれば、あんなものをお代わりする考えが信じられない。

当の本人の岳人は、そんな大和の感情など露と知らずに大和の大盛りを食い始める。

大和は恐る恐る、

「ガクト……。腹大丈夫なのか……？」

「あぁ。ご飯もカツも筋肉に変えていくから問題ねぇさ！」

そう言うと岳人は、再度「うめっ！　これめっちゃうめっ！！」と言いながら豪快に食べ始める。

なるほど、筋肉ある奴はそれだけ燃費が悪いのか、と大和は冷静に分析していると、

「大和も考えようぜっ！　お題は、歯医者でこいつできるな、って思わせる方法だ」

翔一が明るい声で誘ってきた。

それに翔一の向かいに座っている、卓也が疲れたようにして、

「どうして、この中にツッコミが僕しかいないのかなぁ？　捌ききれないよ……」

と、憔悴しているかのような顔つきになる。精も根も燃え尽きたような感じ。

だがこの程度で燃え尽きてもらっては困る、というかのように大和は追い打ちをかける。その顔はいじめっ子のような顔つき。とても、好青年とは言えない表情だった。

「そうだなー。んじゃ、痛いときの合図がモールス信号というのはどうだろう？」

「それはやるなぁ」

「やるなぁ、じゃないでしょ！　誰も分からないよそれ！？」

「女医さんの乗せられたおっぱいに全力で顔をうずめる、とかどうよ！」

岳人がどこか自信満々になって言ってくる。

どこか、岳人らしい発言に卓也は一度頷いて、

「岳人はポンデリングの中心でも食べていれば良いと思うよ？」

ニッコリと、頬笑みながら言った。

もはや、ツッコミ疲れたのだろう。卓也は少し投げやりな感じだ。

卓也がそうなったとしても、風間ファミリーの議論は止まる事を知らない。

大和が少し考えながら、

「うがいした水を悉く飲む」

「甘いぜ、大和！　歯を削るドリルの回転を歯で止める。これしかねぇよ！」

「大和もキャップもお子様だぜぇ。受付のお姉さんも予約。これっきゃねぇ！」

「あぁ、もう！　大和のは汚い！　キャップのは痛い！　ガクトは自重してよ！　そろそろ、ガンジーでも助走つけて殴るレベルだよ！？」

そうして、卓也が全力でツッコミを入れた。

傍から見れば、下らない事で騒いでいるのだが、この下らない会話こそが風間ファミリーが風間ファミリーである事の所以と言えることなのだろう――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれから昼食を終えた風間ファミリー一行は、食堂を出て廊下を歩いていた。

その中で、ガクトはニコニコと満足そうな笑みで、

「いやぁ、食った食った。育ち盛りの俺様も満足」

「大和の分も食べたんでしょ？　しかも大盛りだし。食べすぎじゃない？」

卓也が心配そうに言うが、当の岳人は何でもないかのように、

「心配ねぇって。いったろ？　全部筋肉に変わるから問題ないって」

岳人は自信満々な感じで答えた。根拠もない自信だが、岳人が言うと何故か説得力がある。多分、岳人が筋肉モリモリマッチョだからだろう、と卓也は結論付ける。

そうして大和は折りたたみの携帯を開き、現在の時刻を確認する。見てみると、もうすでに昼休みの時間が2分の1過ぎていた。そんな長い時間食堂で喋っていただろうかと大和はぼんやりと考えていると。

「おっ、アレってワン子たちじゃね？」

翔一が声を上げる。大和は考えるのを止めて、翔一の方に体と視線を向けた。

そこには、歩くのを止めて廊下の窓かの外へと視線を向けている翔一の姿があった。

窓の外には川神学園のグランドが見えている。どうやら、ここの窓からグランドを一望できるようだ。

グランドには、部活動をいそしんでいる者や、一般生徒がボール遊びをしている者と色々な生徒たちがいた。部活動をやっている生徒はともかく、一般生徒が積極的に外に出て遊んでいるのは、この川神学園を入れて数も少ないだろう。

その中で、川神一子と椎名京が緑色のジャージを着た女性に頭を下げている。アレは、謝るといったモノではなく、どちらかというと、お願いといったニュアンスだと言う事が分かった。

岳人が翔一と同じ方向に視線を向けて、

「ホントだ。しかもワン子たちと一緒にいるのって、乙女センセーじゃね？」

岳人の言うとおり、緑色のジャージを着た女性は鉄乙女だった。

乙女はどこか困ったかのような表情を浮かべて頷くと、一子と京は何をそんなに嬉しいのか、飛び跳ねるかのように喜んでいる。

卓也は困惑気味に、

「何があったんだろう？」

「多分、ＫＯＳ関係じゃないか？　麗子さんが腰をやっちゃって、一人欠員出たって言ってたし」

昨日京が言っていた事を思い出して大和が答える。

京と一子の様子から見ると、乙女をＫＯＳに誘ってＯＫが出たのだろう。このままじゃ出れないと京は言っていたが、これで何の心配もなく出場できると言ったところだろう、と大和はそう考えていると。

「ＫＯＳかぁ……」

「ＫＯＳねぇ……」

不穏な空気が流れてきた。

その発生元は翔一と岳人の２人から。

２人とも、メンバーが決まって嬉しがっている一子と京から視線を外さず呟いていた。ピクリとも身動きせずにいる２人に何となく、嫌な予感がする大和。

大和だけではない。卓也もそれを感じ取っているのか、大和の方に視線を向けている。

そんな２人が、ここで行動に出た。

翔一と岳人。２人はお互いを見つめると、

「――――やるか、ＫＯＳ」

「――――やろう、ＫＯＳ」

そんなことを呟き始めた。

「いやいやいや、２人とも本気なの？」

卓也がそれに、慌てながら聞いた。

卓也がこういう反応をするのも無理はない。
ＫＯＳとは世界各国から、武道家達が集まる世界規模の大会だ。
しかもルールは民間人に危害が及ばなければ何でもアリ。
武道家でもない素人の翔一たちが参加すれば、結果なんて目に見えていると、卓也は思っているのだ。

「まぁ、戦闘形式なんて今のところわかってないしな。やりようによっちゃ、１０００億円も夢じゃないぜ！」

ギャンブルのような思考な翔一に、卓也から苦笑いがこぼれる。

だが、翔一の言う事は間違っていなかった。
開催地、ルール、戦闘方法、賞金の金額。色々と明確になっているＫＯＳだが、実は戦闘形式の発表がまだされていなかったのだ。
１体１の勝ち抜きのトーナメント戦かもしれないし、出場者ごちゃ混ぜのバトルロワイアルかもしれない。前者なら、翔一たちの勝ち目は０にも等しいが、後者なら勝ち目はある。
そう考えると、翔一の考えも一理あると言えるだろう。

とにもかくにも４人メンバーがいないと、話にもならない。そう思った卓也が、

「出場するのはいいけどさ、キャップとガクトってメンバー決まってんの？」

「おう！　俺とガクトと大和とモロの４人だ！」

「えぇ、僕も？！」

卓也は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

ＫＯＳは世界規模の大会だ。自分みたいな何の取り柄のない人間が、一緒に出場しようなんて誘われるとは思ってもみなかったから。

だからこそ、卓也は素っ頓狂な声を上げた訳なのだが、翔一はそんな卓也の考えを無視するかのように、

「俺たちは風間ファミリー。一緒に出場するのなんて当たり前の事だろ？」

「そうだぜモロ！　心配すんな、銃弾が来ても俺様の筋肉ではじき返してやるさ。ほら見ろよ、このカブトムシの裏側のような腹筋ッ！　そして、なんと胸もピクピク動くッ！」

「ちょ、ガクト上半身裸にならないでよ！」

今も上半身裸で、胸筋をピクピク動かしている岳人に、反射的な速度でツッコミを入れる卓也。

しかし岳人は、そんなツッコミを無視するかのようにポージングを取り始める。

この事を何と言うのだったかと卓也は考えて、直ぐに思い出した。

カオス。

卓也はため息を吐くと、大和の方へと視線を向ける。

「ハァ、どうする大和？　僕たちこのままだと――――」

「戦闘形式は謎か……。姉さん辺り知ってるか？　でも、交渉材料が……借金返済とかで何とかなるか？　いやそれとも――――」

「うわーい。出る気満々だー」

今の卓也の心境は、難攻不落に定評のある城が敵になんなく攻め滅ぼされた時の状況と似ている。
そうして、少年はまた一つ学んだ。この世に絶対という言葉は無いと言う事を。

再び卓也はため息を吐く。

その様子を翔一は面白かったのか笑っている。
いつもと同じ騒がしくも、楽しい1日。

だが、どこか違和感を感じた。

いつもと同じ騒がしい日常。だが、何かが足りない。
そう考えると翔一は思い出した。
最近、金色の傲岸なあの少年に会っていないと言う事に――――。

第３０話　ＫＯＳ開催前～後編～

川神学園の生徒会室。
昼休みのこの時間。生徒会室を尋ねると、決まってこの部屋に居座っている人物がいる。その人物は生徒会長の椅子に堂々と座り、マンガを読んでいたり、もしくはパソコンを操作していたりと気まぐれに暇を潰していた。
その人物は勝手気ままに行動し、傲岸不遜を体現したような少年。
その少年の名前は――――――霧夜王貴。
だが、その少年はこの場に今はいない。
いるのは、霧夜エリカと不死川心と九鬼英雄とその姉である九鬼揚羽の４人だ。
エリカが座っているのは、生徒会室にある来客用のソファー。その向かいの長机を挟んで、来客用のソファーがもう一つ置いてある。そのソファーに不死川心が座っていた。
そして、エリカの座っているソファーの左側に九鬼揚羽が、心が座っているソファーの九鬼英雄が、それぞれ向い合せで立っている。

この場にいない王貴を除く、４人は幼馴染だ。昔、共に遊んでいた関係。王貴を除く４人が会ったのは何年ぶりだ。懐かしいと昔の事を思いだす会話が１回２回はあってもいいだろう。

だが、４人に懐かしむ会話は無く、４人が４人とも口を閉ざしている。黙れも一言も口を開けず、黙りこくっていた。

そのためか、生徒会室を包み込む場の空気が重いものへと変わり始める。

そんな中、霧夜エリカは重苦しくため息を吐いた。

そして、視線を心へと向ける。それは睨みつけるようなキツイものではなく、どこか優しく温かい視線だった。

「アンタのせいじゃないわ。あのバカがわからず屋なだけよ」

「……此方があの日王貴を誘っていなかったら、こんなことならなかった筈じゃ」

心はそう言うと、視線を下に下げる。

王貴の姿が川神学園から消えて１週間になる。それは、心と一緒に出かけた日から丁度１週間。つまり、心と出かけたあの日から王貴は川神学園で姿を現さなくなった。彼の住居でもある、親不孝通りにあるあの高級マンションにも帰ってきていない。

どうやら、川神市にあるビジネスホテルに宿泊しているらしいのだが、それがどこにあるかも不明だ。

あくまで王貴の様子がおかしくなったのは自分のせいと、断言している心に、エリカは思わずため息を吐いた。

心と王貴が一緒に出かけて何があったかは、この昼休みの中でもうすでにエリカは聞いている。イタリア商店街に一緒に赴き、王貴のペースを乱そうとランジェリーショップに行ったこと、その帰りに王貴が変わったことを指摘した事、そして釈迦堂刑部に会った事、そのすべてをだ。

それを聞いてなお、エリカは断言する。

王貴の様子がおかしくなったのは、心のせいではない、と。

だからこそ、

「アンタのせいじゃないって。これは起こるべくしておこった事よ。遅かれ速かれ、王貴がこういった事になるのは分かってたわ……」

エリカはそう言い放った。

霧夜王貴は、孤高こそ王。と考えている人間だ。そして彼にとっ

て、王とは生甲斐と言っても良いぐらいに重要な物になっていた。
そんな少年が、孤高こそ王と言い放っていた少年が、無意識のうちに自分ですら気付いてすらいないうちに、なれ合いを良しとしていたらどうなるだろうか。それが今の霧夜王貴の状態だ。

悩み、怒り、何としてでも過去の自分に戻る。それこそ、生きるためだ。
王でなくなったら、霧夜王貴ではない。と考えているから――――。

別にエリカは、その考えに反対などしない。
堕落している自分に活をを入れて、直そうとするのに間違っていないと考えているからだ。
だが、今の王貴は間違っていると行っても良い。今の王貴は、現実と理想に駄々をこねているガキだ。
孤独と孤高の違いを分かっていない。

人は孤独では生きれない。孤独な人間は絶対といっていいほどに自滅するものだ。
だからこそ“友”を、気を許せる人間を作ろうとするのだ。
エリカと佐藤良美のように、英雄と葵冬馬のように、揚羽と久遠寺夢のように、心と黛由紀江のように。

「あの子は、孤独と孤高を履き違えている。孤独の人間は王になれない。そこら辺をきっちり分からせなくちゃ駄目なのよ……」

「確かに、孤独と孤高を間違えているかもしれん。編入初日にアイ

ツも言っておったわ。『王とは孤高であるべき存在。絶対者にして君臨者の事を人は“王”と言う。そこに臣下などと言った不純物は不要』だ、と」

英雄が思い出すようにして、呟いた。

エリカの言う通り、王貴は孤独と孤高を履き違えていた。

揚羽はエリカに視線を向けながら、

「エリカどうするつもりだ？　我々と英雄は運営側故、簡単には動けんぞ？」

「そうなのよねー。しかも、王貴に目を付けた男が、えーと何て名前だっけ？」

「釈迦堂刑部だ。川神院元師範代。元というている通り、今は破門されている」

「そうそう。そいつ、明らかに強いでしょ？　だって、川神院の元師範代よ？　あーもう、王貴も変な奴に目を付けられたわねぇ」

揚羽とエリカがどうするか、考え始める。

王貴がＫＯＳにでる理由は、以前の自分と同じ雰囲気を纏っている釈迦堂刑部を倒し元の自分に戻るため。釈迦堂刑部がＫＯＳに出る理由と遠からず一致していた。となれば、両者が戦闘になるのは必定。

この両者が戦闘になる前に、王貴の考えを何とかしなければならない。

時間制限。

手詰まり。

方法が見つからない。

そんな時、

「此方が何とかするのじゃ」

心が口を開いた。

その声にエリカが心の方に視線をやる。

力強い目だった。

さっきまで、此方のせいだと嘆いていた弱い彼女はいない。何としてでも王貴を連れ戻す、といった目的のもった彼女がそこにいた。

エリカはそんな心を見ながら、

「……言っておくけど、あのわからず屋を説得するのは容易じゃないわよ？　下手したら私も八つ裂きにされかねない。それでもやるの？」

これは、脅しではない。

今の王貴は、以前とは違い危うい状態だ。何とか元の自分に戻ろうと足掻いている状態。そうでもしないと、霧夜王貴という人間が死んでしまう。と考えいるから。だからこそ、王貴は本気だ。本気で目的を果たそうとしている。邪魔をする人間は、容赦しない。一片の躊躇もなく、一片の慈悲もなく、一片の容赦なく、立ち塞がる者を――――殺す。

それが心も分かっているのか、両手が震えている。

無理もない。幼いころから恋憧れている人間に殺されるかもしれないのだ。心の反応は正常とも言えるだろう。

その様子を見て、エリカは優しげに心に微笑むと、

「安心しなさい。あの子はこっちで何とかするから。最悪、あの子

に棄権でもしてもらって、モモっちと鉄心センセーにＫＯＳが終わるまでの間、あの子の相手をしてもらいましょう」

エリカのその頬笑みに、計算染みたモノは一片も見られなかった。
幼いころから知っている妹分を心配しての言動と頬笑み。
それだけだった。

だが、

「此方が何とかするのじゃ！」

心は曲げなかった。
己の言動を、曲げなかった。

心は恐怖に、震える体に活を入れるかのように立ち上がる。

「ここであやつに逃げては……、王貴に逃げては、もう二度と此方は王貴と向き合えないのじゃ！　だから、王貴は此方が何とかするのじゃ！」

体は震えていても、目に迷いはない。

エリカは心に視線を送る。

それは、真剣そのもの。さきほどの優しげなものはどこにもない。

「今の王貴は何をするか分からないわよ？　例えアンタといえど邪魔をするなら八つ裂き。下手をすれば死ぬかもしれない。それでも、アンタはやるの？」

「くどいぞ。高貴なる此方を誰と心得ておるのじゃ！　此方はやると言ったらやるのじゃ！」

誰がどう見ても、強がりをしている心にエリカは「そう……」と呟くと、思考を擦るかのように目を瞑る。

しかしすぐに目を開くと、心に視線を向けて、いつもの意地の悪い顔を心に向けながら、

「なら、殺されないようにしなさいよね。不死川家に説明するのめんどくさいから」

「な、何じゃ！　その言い草は！　義弟（おとうと）を頼むと言った言葉は無いのか？！」

「はいはい、頼むわね～」

「ムキィ～～！　腹の立つ女じゃ！」

心はそう言うと、足早に生徒会室の出口でもあるドアまで歩くと、涙目で振り返って、

「見ておれよ！　お前に吠え面をかかせてやるのじゃ！」

と、エリカを指さして、生徒会室を出て行く。

その瞬間、廊下から何かが走り去る音が聞こえたが、恐らく心だろうとエリカは結論付ける。

その走り去る音が聞こえなくなったときに、

「どういうつもりだ、エリカ殿？」

英雄が訝しむようにしてエリカを見つめた。

「あんな事を言えば、不死川がここから出て行くのはお分かりであろう」

「まぁね。アレは私からの激励半分よ」

「激励半分？　ならば、もう半分は？」

「その前に、揚羽。この5キロメートル付近に怪しい人間はいない？」

不意に話を振られた、揚羽は少し困惑しながら気配を探知するために、気を集中させる。

「――――――おらぬな。それがどうしたのだエリカ？」

「ならいいわね。さて、まず英雄の疑問から片付けましょう。心を追い出すような形をしたのは、あの子にこれ以上プレッシャーを掛けたくないからよ」

そう言うと、エリカは手を組み、真剣な表情で揚羽と英雄の交互に視線を送る。

今のエリカに先程、心に言い放った冗談のようなモノは無い。今エリカにあるのは、上に立つ者としての風格のみだ。

そんなエリカに英雄は困惑する。彼女が真剣になる事なんて、稀だと言っても良い事だ。
彼女が真面目になると言う事は、それだけ重い話だと言うのだろうか。

「プレッシャー？　どういう事だ、エリカ殿。話が全く見えんぞ」

「これから話すのは、他言無用よ。下手したら命も狙われかねないかもしれないわ」

その言葉に、九鬼姉弟が眉を潜ませる。

ことの重大さが、まさかこれほど重いとは思わなかったのだろう。

だが、九鬼家の人間は命を狙われるかもしれない。といった警告にも戸惑いはしない。上に立つ心構えというやつが出来ているからだ。

揚羽は英雄に視線を送る。
英雄もそれに頷くと、揚羽がエリカに視線を向けて、

「聞こう」

「いいのね？」

「我々は九鬼家ぞ。凡百の者たちと一緒にされては困る」

揚羽が自信満々に答えた。見てみれば、英雄も自信満々に腕を組んでいる。

それを見ると、エリカは思わず苦笑いを零した。

心強い、幼馴染たちだと心の中で呟きながら、

「今から話すのは、王貴を狙っていたヤツらの犯人の話よ」

「む？　待ってくれエリカ殿。王貴の命を狙っていた者は霧夜の叔父叔母ではなかったのか？」

英雄が思わず待ったをかけた。

王貴を狙っている刺客。アレは霧夜の叔父叔母とエリカ本人に説明されたからだ。聞き違えたなんてとんでもない。はっきりとエリカは、霧夜の叔父叔母が王貴を狙っていると断言していた。

揚羽もエリカの言動に、疑問に思っているのか眉を潜ませ、エリカの次の言葉を待っている。

「あのくそったれの叔父叔母も一枚噛んでいるでしょうね。でも、それ以上の黒幕がいるのよ」

エリカはため息を吐いて、足を組む。

それから、忌々しそうに、

「考えてもみなさいよ。私たち霧夜が“成り上がりの霧夜”なんて呼ばれるようになったのは最近なのよ？　そして、あの子が命を狙われ始めたのはざっと7年前。時期的に考えておかしいわ。その時は私たちも叔父たちも、金があるなんて言えなかった。しかも周りには敵だらけ。だからこそ、アンタ達九鬼家や不死川家っていうパイプが欲しいために、王貴を使ったのよ？　そう考えれば、叔父叔母に手助けをしたやつがいると言う事になるのよ」

揚羽、英雄が考え始めた。

彼女たちは、王貴とエリカと初めて知り合った時の事を思い出す。

初めて、九鬼姉弟が王貴と出会ったのは、社交界の時の事だ。当時のキリヤカンパニーは良くて中小企業。今のように大企業ではなかった。味方もそんなに多くない。キリヤカンパニーがこのまま大企業になってしまえば、敵が増えるばかりだ。

だからこそ、叔父叔母は社交界に霧夜王貴を連れて行っていたのだ。目的は一つ。一つは王貴の力を使って、霧夜カンパニーが成長した時の見方を作るため。もう一つは霧夜王貴がどれだけ優秀な存在かを知らしめるため。どれだけ、優秀かが分かれば下手にキリヤカンパニーに手出しができないと思ったためである。

そして、叔父と叔母は王貴の力に恐れて、暗殺を始めた。

2人はそう思っていた。

だが、エリカの言動からして、叔父叔母の背後に黒幕がいると言う事になる。

英雄は怒りに震える。

あの男が、王貴が何をした。と怒りに震える。ただ人より優れていただけではないか。ただ人より優秀だっただけではないか。

そういった感情が、英雄の胸を渦巻く。

揚羽を見てみれば、英雄と同じように拳を握りしめていた。揚羽は拳を握りしめたまま、

「不死川にプレッシャーがかかると言う事は、その者たちはＫＯＳに……」

「間違いなく出てくるわ。これほど暗殺に適した所は無いもの」

ならば、ＫＯＳ自体を中止してしまえばいいのだが、もう遅すぎる。ＫＯＳを中止するには遅すぎる人数になってしまっているのだ。今、中止を宣言してしまっては、最悪暴動が起きるかもしれない。

手段がない。

英雄は怒りに震えながら、

「エリカ殿！　一体誰だ、その王貴を狙っている黒幕という者はっ！！」

「……正確に言えば、そいつが盟主をしている秘密組織よ。どういった組織なのか、普段どういった事をしているのか、何人で構成されているのかも一切不明。分かっている事は、叔父叔母に暗殺者を雇わせるための資金援助。暗殺者が返り討ちにされた時の情報遮断。そして王貴の命を狙っていると言う事だけ」

「その者たちの名前も分からんのか？」

揚羽が苛立たしげに口を開く。

揚羽とは逆に、エリカは静かに、ただ静かに、

「名称は“ウルク”と言われているらしいわ。その他は一切不明だけど」

そう、口を開いた――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

オープンカフェに、1人の女性が座ってカップに口を付けていた。
空を見てみると、若干空が夕焼けに染まっている。だが、日本は昼時であり、これだけでここが日本とは違う場所だと言う事が分かる。

女性の容姿は、美女と言えるだろう。この世のものとは思えないほどの美貌、妖美と可憐があわさったかのような雰囲気を纏っていた。

それに合わさって、薄い赤色の眼をしており、綺麗な蒼い髪の毛で、ウェーブのかかった腰辺りまでのロングヘアー。その綺麗な髪の毛も輝く薄い赤色の眼も、女性の付属品と呼ばれても過言ではないほど、女性の容姿が際立っていた。

服装も、赤色の綺麗なドレスを身に纏っている。見るからに高級そうな一品だった。

女性は口を付けていたカップをテーブルに置く。中身は紅茶か何かなのだろう。

いや、テーブルではない。

正確に言えば、“テーブルの上に乱雑に置いてある大量のコピー用紙の上にカップを置いた”だ。

カフェのテーブルには、大量のコピー用紙が乱雑に置かれていた。

そのコピー用紙も内容がバラバラで、ダイヤグラムのような図形が書かれたモノや、数値が大量に書かれたモノと色々な内容。

その中で、女性は数値が大量に書かれたコピー用紙を手に取り、開いた手でカップを掴み口に持っていく。

コピー用紙を片手に、紅茶を飲んでいる女性は、傍から見ればとても絵になっていた。

そんな女性に、

「盟主様。ご報告があります」

1人の白いスーツを着た肥満体型の男が楽しそうに女性に話しかけた。

その男の笑顔は不吉。何か嫌な物を感じさせる笑顔だった。

だが、盟主様と呼ばれた女性はそれを気にすることもなく、コピー用紙から白いスーツを着た男に視線を向ける。

「あら、それはなんでしょうか将軍」

将軍と呼ばれた、白いスーツを着た男の笑顔がより濃く増す。

もう、我慢できないっといった感じの笑みだった。

「悪い報告と悪い報告がありますが、どちらから聞かせましょうか？」

「では、悪い報告から。――――あぁ、後者の方の悪い報告からお願いしますわ」

では、と将軍と呼ばれた男は言葉を区切り、

「霧夜エリカが我々の存在に感づきました。どうなされますか？」

「捨て置きなさい。あのお方に縁があるとしても、問題ない存在です。他には？」

「もう一つは、１週間前に行われる予定だった、あのお方と川神百代が戦う予定でしたが、あのお方が戦われるのを放棄し、両者戦闘しておりません」

将軍の言葉に、女性は「まぁ！」と驚きの声をあげ、次には笑顔が。その笑みはまるで少女のようなモノだった。

女性は持っていたカップを置いて、両手を広げる。

「あぁ、流石あのお方！　流石我が君！　私（わたくし）の想像を遥か上を行かれるなんて……！　素晴らしいですわっ！」

それから、落ち着いたのかテーブルの上に乱雑に置いてあるコピー用紙を、もう片方の手に持ち、

「では、プランを９４７から９６３に変更しなければなりませんね。ウフフ、私（わたくし）の計算外の動きを取るなんて、あのお方は本当に素晴らしいですわぁ」

頬を紅潮させて、女性はそう呟く。
口からは、熱い吐息が漏れた。
そんな女性に、将軍は不吉な笑顔のまま、

「それなのですが、問題ないかと」

「どういう事ですか、将軍。答えなさい」

「はい。盟主様は日本で今ＫＯＳといった大会が開催されている事をご存知ですか？」

「知りませんわ」

女性の素っ気ない答えに、不吉な笑顔だった将軍も苦笑いをこぼす。この女性は、本当に“お方”しか目に行かないようだと思いながら、

「世界中から武道家を集めて戦わせる。といった、武道大会です」

「そのお遊戯が、あのお方と何か関係が？」

「あのお方もその大会に出られるようです。さらに言うと、出場者

の中に面白い男が」

女性は怪訝そうな顔で、将軍を見る。

自分が敬愛する“あのお方”がそんなお遊戯大会に出るとは思ってもみなかったのだろう。

「あのお方が、お遊戯に？　まぁいいでしょう。そして、その面白い男とは？」

「名を釈迦堂刑部、日本人です。この男なら、川神百代の代わりが務まるかと」

「何ですって？」

女性が知る上に、川神百代は最強の人物だ。川神百代に並べく者はいない。世界中を探しても、そんな人間見つからなかったのだ。

だからこそ、女性は顔を驚愕に染め上げる。

将軍の顔を見ても、自信に充ち溢れており、そこには一片の迷いも疑いもなかった。

女性は口元を、綺麗な手で蔽い隠し思案しながら、

「貴方が言う男はそこまでの者？　とてもではありませんが、川神百代の代わり且つ、“孔”を開けられる者とは思えませんが……」

「教授の計算ですと、釈迦堂刑部と川神百代に強さの差は無いとのことです。ですから、釈迦堂刑部も“孔”が開けられるとのことです」

彼女たちが言う“孔”、それはとてもよくない事を感じさせる単語だった。

川神百代クラスの強さを持ち、“あのお方”と激突して、ようやく開かれる“孔”どういった代物なのだろうか？

「将軍、その男の名は何と言ったかしら？」

「釈迦堂刑部です、盟主様」

女性は、釈迦堂刑部の名前を何度も口の中で呟き始める。何度も何度も何度も繰り返して、覚えるように。

そして、女性は口元を引き裂くような笑みで、

「よくてよ、よくてよっ！　でしたら釈迦堂刑部をあのお方の供物とし、“孔”を開けてもらいましょう」

笑った。

それはもはやただの笑みではない。いうなれば、狂喜。

先程のような、少女のような笑みはない。口角は左右に釣り上がり、笑う女性の狂喜。

こうして、誰も知らないところで、女性の計画が進められる。

それがどういった結末を生むのか、“あのお方”と呼ばれている人物はどうなるのか、ＫＯＳは一体どうなってしまうのか。

今は、誰も、分からなかった――――――――――――――。

第３０話　　ＫＯＳ開催前～後編～（後書き）

みなさん、おはこんばんちは！　兵隊です！

ようやく更新する事が出来ました。
書いた文字数がなんと２０００１文字！　いやー、自分もビックリ仰天でしたｗ内容はともかくですが……。

今回、初ではないでしょうか。
そう、貧弱王の出番がないのですｗｗざまぁーｗｗと笑ってやってください！
そして、最後に出た謎の組織はまだ秘密という事で、ここはひとつお願いしますｗ

次回には闇☆王貴が登場するかもですｗ

では、ご意見ご感想がありましたらよろしくお願いします！
皆さんのご意見ご感想が、兵隊の力となりますので！

第３１話　武の祭典の開幕（前書き）

王貴「（前の３話分を見つつ）王（オレ）主人公なのに、出番がないとはどういう訳だ？　主人公なのに……主人公なのに……」

雷太「会長～！　元気出すもんね！」

風子「風子、仲間（出番ない的な意味で）」

第３１話　武の祭典の開幕

７月２７日月曜日。ＫＯＳの開催日でもある。
つまりは、今日。

朝から、七浜市では花火が打ち上げられてり、パレードが始まったりと大変なにぎわいを見せていた。それも当然と言えよう。何せ、ＫＯＳは世界規模の大会。一種の祭りのようなものなのだから。

とはいっても、今日は平日で早朝でもあるこの時間帯。
いつもなら、そんなに人が溢れかえらないこの七浜市も、今回ばかりは勝手が違うようだ。平日の早朝であるにも係わらず、街はＫＯＳ参加者やその見学者やらで溢れかえっていた。そのためか、道路は本来の機能である“車が走る”といった機能がなさられておらず、歩行者の道とかしていた。

こんな時は、車を使わないで歩いた方が早い。それほどなまでに七浜市は人で溢れかえり、道路に車なんて走ってたら、歩行者が歩けない。そんな事態になっていた。

その対応策として、ＫＯＳの運営委員。つまり、キリヤコーポレーションと九鬼財閥は列車や地下鉄の臨時便を出すと共に、バスなども用意した。

バスに至っては運転手が足りなくなり、臨時でよその地方からかき集めるまでになっているほどだ。

あっちを見ても、こっちを見てもラッシュアワーの駅のホームのように人人人で溢れかえっている。これを見て、どれだけＫＯＳが世界から注目されているかが分かる。

そして、視点は七浜市から七浜公園へと移る――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うわー、強そうな人たちがいっぱいだわー……」

川神一子が、周辺を見渡しながら途方もない感じで呟いた。
今の一子の恰好は、動きやすいのを重視したのか川神学園指定の運動服。つまりブルマだ。

七浜公園にいるのは、一子だけではない。彼女のチームメイトでもある椎名京や鉄乙女、そしてクッキーがいる。それ以外にも、世界各地の強敵たちが七浜公園に集まっていた。

というのも、ＫＯＳ参加者は七浜公園へと集合することになっている。よって、否が応にも七浜公園へと集まらねばならないのだ。

一子は辺りを見渡す。
どいつもこいつも強そうな気や雰囲気を醸し出しており、一筋縄ではいきそうにない様子だった。その中に、明らかに銃を携帯していそうな奴もいれば、ロケットランチャーのようなモノを装備している奴もいる。恐らく、ああいったやつから始末されることだろう。
そんなことを一子は思いながら、とある人物を見つけた。

その人物は、腕を組み1人で立っている。
周辺には、彼に近づこうとする人間は1人もいない。警戒されているのか、それとも近づけない危険な雰囲気を醸し出しているのか。
恐らくは前者だろうと、一子は決定づける。

あの腕を組んでいる男は、警戒されるほどの実力の持ち主なのだから。

「アレはメッシだな？」

いつの間に近づいたのか、一子の隣には乙女が立っていた。視線は腕を組んでいる男――――メッシに向けられている。
乙女の恰好は、上には胴着を着ており、下はスパッツととても動きやすい格好だ。

乙女が言うメッシ。
通称“太陽の子”とも言われているアルゼンチン出身の武道家だ。
その知名度は武道家の中でも知れ渡っている

乙女は視線をメッシから、一子へと向ける。

「一子。約束通り、私はこの大会では一切手を出さないからな？」

「分かっています乙女師匠！　出場してもらう条件を忘れるなんて、アタシそこまでバカじゃないです！」

乙女はＫＯＳのような、賞金が想定されている大会に出場するような人間ではない。というよりも、ＫＯＳに彼女は興味がなかったのだ。その彼女がこの大会に出た理由が、一子と京の理由からきている。

一子と京がこの大会に出る理由は、ただ単純に己の腕が世界にどこまで通用するかといった腕試しだ。その理由のためか、彼女たちは賞金などといったモノには興味がない。

そんな理由だからこそ、乙女は彼女たちが出場することに協力したのだ。

そして、大会に出る上で乙女が出した条件が二つある。一つ目は、大会に出るのはあくまで腕試し。二つ目は、ＫＯＳで乙女は本気で戦わない。

一つ目の条件は物欲に目を眩むなという、乙女なりの注意なのだろう。

問題は二つ目の条件だ。乙女は本気で戦うどころか、戦わないつもりでいた。それも前に合った通り、これは一子と京の腕試し。その場所で、自分が戦うのはお門違いと考えているからなのだろう。真面目な乙女らしい考えだった。

つまるところ、このチームで戦うのは一子と京とクッキーだけである。

そんな事も知らずに、一子は両手に握りこぶしをつくり張り切っている。

そんな一子を見て、乙女はどこか嬉しそうに頷いている。弟子のやる気に充ち溢れる態度が、嬉しいのだろうか。

そんな時、

「クッキーどうしたの？」

「うん、何だか変な感じがするんだ……」

「変な感じって？」

「僕と同じ識別信号が流れているんだけど、それはおかしいんだ。だって、この信号をだせるのはクッキーである僕だけの筈なんだよ。僕一台しか作られていないのに……」

乙女の後ろの方で、そんな話し声が聞こえてきた。

振り向くと、弓道着を着た椎名京とクッキーが何やら不安そうに会話している。

それを見て、乙女は自分の視界が揺れている事に気付く。それは京ではなく、クッキーを見て発症した。

正確に言えば、眩暈だ。そして、何だか吐き気もしてきた。

ここで言うが、乙女は筋金入りの機械音痴だ。それも病的に弱い。携帯ゲーム機である任天堂某ゲーム機や、ソニーの某携帯ゲーム機でさえ、“ピコピコ”と名称してしまうぐらいに機械に疎い。

しかも、長時間機械を見続けていたら、眩暈や吐き気が襲ってくるのだ。そう、まるで今のように。

そんな状態になりながらも、乙女は京とクッキーに視線を向ける。どこか、2人は不思議そうであり不安そうだった。

この中で、最年長の自分がしっかりしなければどうする。

乙女はそう自分に活を入れて、気合いも入れる。今の乙女はどこか、試練に立ち向かう勇者のような雰囲気を醸し出していた。

そうなるのも無理はない。話しかけようとしている片割れが、乙女の宿敵である機械なのだから……。

そうして、乙女はクッキーと京に話しかける。

できるだけフレンドリーに、親しみやすい感じを心がけながら、

「お、お前たちどうしたんだ？　何か、不安でもある、のか？」

「く、鉄センセーこそどうしたの？」

逆に京に心配されてしまった。

クッキーも続けて、

「心拍数がドンドン下がってるよ？！　乙女は横になって休んでて！」

表情は変わらないが、目の色が赤くなりどこか焦っている事が、乙女にも分かった。

なさけないが、クッキーに従うのが一番だ。

そう思った乙女は顔を右手で覆う様にして、地面に座り込む。

学生の時よりも機械に弱くなっていないか？　そんな事を考えながら、

「すまない、デジタル酔いだ。心配するな、休んだらすぐに……治る」

弱々しくそう呟いた。

何はともあれ、自分がこんな醜態をさらした事をエリカには内緒にしておこう。

乙女は断固とした決意を以て、そう思った――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

同じく、七浜公園に４人の人影がいた。
１人は眼鏡をかけた男性で軍服で身を固めている。胸には勲章のようなモノがあることから、上の階級の軍人だという事が分かった。
もう１人は左目に眼帯を付けた女性で迷彩色の迷彩服を着ていた。その迷彩服の形を見るに、狩猟用の迷彩服だという事が分かる。
もう１人は女性で黒いスーツを着ている。下はスカートにハイヒールととても動きやすい格好とは言えない服装だった。
最後の１人も女性で川神学園の指定の体操服であると思われるもので身を固めていた。つまりはブルマだ。

この４人が七浜公園にいるという事は、ＫＯＳの参加者だという事が分かる。
だが、この４人。格好に統一性がない。軍服や迷彩服を見てみると、軍人関係なのだろうか。と思えてくるのだが、他の２人がスーツにブルマだ。

一般人が見たら、どういった関係なのだろうかと疑問に思うだろう。

ブルマの少女――――クリスティアーネ・フリードリヒが七浜公園を見渡す。
その視界には人人人。ＫＯＳの参加者で埋め尽くされていた。

「凄い人数ですね、父様！」

クリスは隣にいる人物に満面の笑顔を向ける。

そこにいたのは、軍服で身を固めている男性――――フランク・フリードリヒだ。

フランクは娘の様子を見て一回頷く、

「うむ、思う存分やりなさい。この大会はクリスにとっていい腕試しになるだろう」

そうして、ＫＯＳ参加者の面々へと視線を向けた。

それと同時に、眼鏡の奥にある双眸が射抜くかのような目つきに変わる。

フランクが見ているのは、娘の敵になるであろうＫＯＳ参加者ではない。

彼が見ているのは、彼と同業者の人間。つまり、銃を武器にして

戦う人間だ。

この大会は愛娘の成長を促進させる舞台と彼は考えている。だからこそ、娘がどこぞの馬の骨に負けてしまおうとも、それを親として見守っていよう。そうフランクは考えているのだ。

だが、同業者は別だ。この連中だけは自分も積極的に狩っていこうと考えている。自分と同業者、つまりは銃を使う人間は危険だ。下手をすれば、関係のない市民に危害が及んでしまう。

それでは後味が悪い。

折角の祭りなのだ。何もわだかまりもなく終わらせようと考えるのは、至って普通の事だ。フランクが軍人であろうが、それとこれとは関係のない話しである。

とはいっても、フランクも人の子だ。可愛い愛娘が傷ついてしまったら、何をするか分からない。自分でも保証が出来ないあたり、彼も危険人物と断定してしまっても良いのかもしれない。

そんな親の気持ちも、露と知らず。

クリスは愛武器である、レイピアを片手にＫＯＳ参加者を見つめている。

彼女の表情は凛々しく、やる気と気合に充ち溢れていた。

そんな彼女に、

「お嬢様、」

左目に眼帯を付けた女性――――――マルギッテ・エーベルバッハが話しかけた。

その表情は、厳格そのもの。まるで戦争に向かう軍人のような顔つきになった彼女がそこにいた。

その表情を見て、クリスは悟る。今目の前にいる女性はいつも自分の世話を焼いてくれるマルギッテ・エーベルバッハではなく、戦場で生きているマルギッテ・エーベルバッハだという事に。

クリスは、いつもと違う姉変わりの女性に戸惑いながら、

「どうしたんだ、マルさん」

「この中に同業者がいます。銃弾に当たらないように注意しなさい」

その一声で、やはりマルギッテはマルギッテだという事が分かった。

この女性は、何も変わらない。

自分の姉変わりのマルギッテ・エーベルバッハだ。

それが頼もしくなったのだろう。

クリスは、満面の笑みでそれに答えた。

「あぁ！　自分なら大丈夫だ！　マルさんは安心して見ていてくれ！」

「ふむ、気合いが入っているな。良い傾向だ」

それを見て、黒いスーツを着た女性――――――小島梅子が感心するようにしてそう呟いた。

マルギッテの件もそうだが、クリスはいつも以上の気合の入れようでＫＯＳに臨んでいた。

その理由も、最近川神学園で見なかったとある金髪紅眼の少年が関係している。霧夜王貴だ。

最初、クリスは王貴を誘うために、生徒会室へと赴き少年を誘った。その答えはＮＯ。少年はそんな児戯に付き合うほど酔狂ではない。と言って断った。その答えに説得の余地などない。明確な拒否が示されていたのだ。

だからこそ、クリスは霧夜王貴をチームに入れるのを断念したのだ。

だが風のうわさでその少年が、自分の誘いを断った霧夜王貴がＫＯＳに参加すると聞いた。百歩譲って心変わりしたという事でならまだ許せる。しかしよりにもよって王貴が入ったチームには不死川心がいた。クリスが生徒会室へと赴き王貴を誘った時、心もその場にいたのだ。王貴をＫＯＳに誘うために。

クリスがそれが気に食わない。自分のチームに入る事を拒否したくせに、心のチームに入るのか。とクリスは自分でも分からないが、何か気に食わなかった。

自分の誘いを蹴った事を後悔させてやる。

そう言った目的を実現させるために、クリスは今やる気に満ち溢れていた。

彼女ははたして、その気に食わない理由が“嫉妬”といった感情だと自覚しているのだろうか？　いや、自覚なんてとんでもない。気付いてすらいないだろう。

はたして彼女はそれに気付ける事が出来るのだろうか――――――。

…………………………………

…………

……………………………

…………………

七浜公園。

のどかな昼下がり。この公園はいつもの日常のようなほのぼのとした雰囲気ではなく、殺伐とした気配で包まれていた。仕方のないことだろう。今の七浜公園には、子供連れの家族や犬の散歩をしに来ている者といった公園には定番の人間はいない。

いるのは、それらの日常的な人物たちではなく、胴着や軍服といった非日常な人物たちだ。

というのも、ＫＯＳ参加者は集合場所を七浜公園で、と義務づけられているので仕方ない事だといえるだろう。

その中で、ＫＯＳ参加者が集まる七浜公園で、一人の少女が誰かを探すように人垣を掻き分けて進んでいた。

その少女がこの七浜公園にいるという事は、ＫＯＳの参加者だという事がわかるが、何かがおかしかった。

何がおかしいのかと言えば、少女の服装だ。ＫＯＳは武道大会だ。だからこそ、胴着や軍服といった動きやすい格好をしている者たちがいるのだ。しかし少女の恰好は、色艶やかな一目見て高級だという事が分かる着物。

今から、武道大会に臨む格好とは言い難い。

その点で言えば、少女は圧倒的に周りから存在が浮いていた。

その少女――――――不死川心は七浜公園を見渡していた。

その眼には、対戦者がどれほどのものか。といった探るような眼ではない。誰かを探すような、そんな眼を彼女はしていた。

表情も、普段に見せている余裕のある表情は無い。どこか焦っているかのような。そんな表情を心はしていた。普段では絶対見せない表情だ。

心が探しているモノ。それは人だ。

とある金髪紅眼の少年――――霧夜王貴。

心が王貴を探しているのには理由がある。

その理由は、早く王貴の顔を見たい。だとか、王貴と話がしたい。といった、甘酸っぱいモノではない。もっと深刻で、複雑な理由だ。

今から１０日前。

彼女と王貴はイタリア商店街に遊びに出掛けた。出かけた理由に、王貴と出かけたかったといった理由も多少はあるが、本来の目的は大まかに言えば、ＫＯＳに誘うためだ。

途中までは、計画通りといった内容ではなかった。むしろ、アクシデントの方が多く想定の範囲外の事が起こりすぎてしまっていた。しかしそれでも、心は楽しかったのだ。

そして、いざ王貴を誘おうとした時。

――――１人の、男が彼女たちの目の前に現れた。

名前を釈迦堂刑部。その男は異質で異常な男だった。

その男が目の前に現れた瞬間、王貴の様子がおかしくなったのだ。川神学園に来た時のような、どこか危うい状態に。

そんな状態である少年を救うために、心は探し回っているのだ。あの二人が、釈迦堂刑部と霧夜王貴が出会ってしまったら、もう二度と王貴が戻ってこない気がしたから。だからこそ、心は焦っている。

それに心にもどこか責任を感じていた。

あの日、自分が王貴を無理やり連れ出さなければこんなことにならなかった、と思っているから。だが、霧夜エリカはそれは違うと言った。これは起こるべくして起こった事だ、と。

それもそうなのかもしれない。

人間誰しも、価値観が変わったら戸惑うだろう。それも、王貴のような人間だったら何とかして以前の自分を取り戻そうと躍起になる。そうでもしなければ、霧夜王貴という人間は死ぬ、と考えているから。

起こるべくして起こった。

仮にそうだとしても、心には納得がいかなかった。

だから、王貴は自分の手で何とかしたい。助けてやりたい。救ってやりたい。心の心中を占めるのはそんな気持ち。

だから心は探し回った。広い広い七浜公園を走り回った。

だが、いるのはＫＯＳ参加者であろう者たちのみ。金髪紅眼の人間なんて、どこにも存在していなかった。

その事もあってか、心は焦りを増していた。いる筈の人間が、見つからない。

募るのは、焦りと不安の２つだけだ。実りのあるモノなんて何もない。

「心さ～ん！」

後ろから、自分を呼ぶ声が聞こえてきた。振り返ずともわかる。

それが友達の声なのだから尚更の事だ。

心は振り返る。

刀袋を持っち、川神学園の制服を着た女性――――――黛由紀江が走ってくる。

その後ろには、黒いスーツを着た男性――――総理も居た。

大方、自分を心配して来たのだろうと、分析して口を開いた。

「何じゃ黛。此方はしばらく、別行動をとると先程言ったぞ？」

心は八つ当たり気味に言う。

別行動をとる、と心は言った。

それはこの七浜公園に来て直ぐに言った言葉だ。別行動をとる理由は、心一人の方が動きやすいと考えたから。もう一つの理由は、黛由紀江と総理を巻き込みたくなかった。この2点だ。

王貴は今危険な状態だ。

この二人が彼の目の前に立てば、どうなるか何て分からない。軽くて大けが。最悪死んでしまうかもしれない。だからこそ、心はこの二人と別行動を取った。

自分のせいで死なれてしまっては目覚めが悪い。それに、由紀江は友達だ。友達は、死なせたくない。そう心は思った。

そう考えると、心は視線を由紀江からＫＯＳ参加者へと戻す。
金髪紅眼の少年を探すために。よく目を凝らして、寸分の隙間もなく見渡した。

「あの、王貴さん探してるんですか？」

だが、それも由紀江の一言で中断される。

心は勢いよく由紀江の方を見た。
自分が王貴を探しているのなんて、由紀江に言っていない。知っているのは極少数の人間、幼馴染の人間のみ。だが、由紀江は知っている。

何故？　どうして？　何で？
頭によぎるのはそんな言葉達。何故、由紀江が探している事を知っているのか、理解できなかった。

知っているのは極少数という少ない情報の中、心は推測を建てた。
それは、

「誰から聞いたのじゃ？」

由紀江は誰かから聞いて知っている。

そう考えれば、全て辻褄があう。というよりも、それしか思いつかないのだ。そう言う事を話す人間。その人間は直ぐに特定できた。

「エリカじゃな？」

びくっと由紀江の肩が震える。どうやら、図星のようだ。

心は情報を漏らした、エリカに呆れると同時に怒りが湧いてくる。今の王貴がどれだけ危険か、彼女は知っている筈だ。だというのに、由紀江のような関係のない第三者を巻き込むとはどういう了見だというのか。

そう考えると、心は舌打ちをする。

怒り心頭。

心は不機嫌そうに、由紀江を見つめる。何も由紀江は悪くない。だが、どうしても心には己の感情を制御できなかった。

心の不機嫌そうな視線を浴びせられつつ、由紀江はおずおずと申し訳なさそうに、

「エリカさんを怒らないで下さいね……？　私が無理を言って聞かせてもらったんです。……心配でしたから」

「心配？　誰の心配をしているのじゃ？」

「心さんと王貴さんです。最近、心さんの様子はおかしいし、王貴さんも最近学園に来てないので、何かあったのかなって思って霧夜先生に事情を聞きました……」

由紀江は深呼吸をして、一気に言葉を紡ぐ。

「私も手伝わせて下さい！」

心はそれに戸惑った。

確かに、由紀江が手伝ってくれるのは心強い。何せ、剣聖黛大成の愛娘だ。剣術にだって秀でているし武道四天王でもある。並大抵の人間になら勝てるだろう。だが、相対するかもしれないのは霧夜王貴。

あの、川神百代相手に３４回も引き分けている怪物だ。

いくら強い由紀江でも、無事では済まないかもしれない。
心は由紀江には傷ついてもらいたくなかった。何せ、霧夜姉弟や九鬼三兄弟の他に出来た初めての友達だ。友達は傷ついて欲しくない。真っ当な感情だと言えるだろう。

「不死川の譲ちゃんよぉ。由紀江ちゃんは絶対曲げないぞ？」

どうするか悩んでいる心に、総理が声をかける。
それは、迷える若者を導く指導者のようだった。

「由紀江ちゃんにとって、譲ちゃんは大事な友達だからな。友達は助け合うもんだろ？」

そうして、総理の大きな手は心の頭へと乗せられ、ニカッと太陽のような笑みで、

「当然俺も力になるさ。俺ちゃあ、仲間（チーム）だからな」

「最悪、死ぬかも知れんぞ？　それでもお前たちは此方に協力するというのか？」

心はうず向きながら呟く。
これは脅しではない。疑う事なき現実だ。最悪死ぬかもしれない。

だが、由紀江と総理の二人の返答は速かった。

「勿論です！」
「当たり前だってんだよ」

何を今更。
二人はまるでそういうかのような表情で即答した。

この二人は馬鹿だと心は思う。
死ぬかもしれないのに、自分を助けようと言うのだ。しかも友達のためにという、自分本意ではない考えで。
だが、その馬鹿のおかげで心は一人で戦わなくて済む。何よりもそれが心強かった。

そう思いながら、心は不敵な笑みを浮かべて、

「まったく、馬鹿は死んでも治らんとはこの事じゃな。それと総理、いつまでその汚らしい手で此方の高貴なる頭に触っておるのじゃ！」

いつもの調子で文句を言い放った。

そこには焦りを浮かべていた心はどこにもいない――――――――。

こうして、ＫＯＳは九鬼揚羽が開幕を告げた。

戦闘形式は、バトルロワイアル。舞台は七浜と川神。期限は一週間。優勝者には１０００億円。

あまたの欲望と思惑。そして、目的が入り混じったＫＯＳ。

今、七浜公園は地獄と化す。
その中心地。地獄の中心部にいる金髪紅眼の少年が謳う様にして呟く

――――さぁ、開演といこう――――

――――と。

第３１話　武の祭典の開幕（後書き）

皆さん、おはこんばんちは。
兵隊ですよー！

ここから、ようやくＫＯＳに入っていきます！
そして、凄いサプライズも用意しておりますので、皆さん楽しみに待っていてくださいねｗ

それでは、ご意見ご感想がありましたら、遠慮なくこの兵隊にお願いします！
皆さんの貴重なご意見ご感想は兵隊の力となりますので！

第３２話　暴君（前書き）

風子「会長、不在？」

雷太「会長ならさっき行っちゃったもんね。何でも出番みたいだもんね！」

第３２話　暴君

太陽の子メッシは七浜公園にいた。

七浜公園にいると言う事は、ＫＯＳに参加しているのだろう。
そして、彼がＫＯＳに参加した理由は別に賞金が欲しかった訳ではない。

自らの力がどれほどのものか。という腕試しだ。世界で見る己はどれほどの存在なのか。世界各地で集まる格闘家はどれほどの者達なのか。

そうして、メッシはＫＯＳに臨んだ。勿論、メッシは五体満足でＫＯＳを勝つつもりなど毛頭なかった。何せ、世界各地から強豪が集まるのだ。自分以上の使い手が現れるだろうと、彼は思っている。

メッシに、慢心は無く、己の力を過信している様子もなかった。
しかし自信はあった。人一倍鍛錬を積んでいる自信があった。だからこそ、メッシは誰にも負けないという自信を持っている。

その自信を胸に、彼はＫＯＳへと臨んだ。
戦闘形式は、バトルロワイアル。ルールは何でもあり。

だからだろうか、ＫＯＳが始まってから七浜公園は阿鼻叫喚としていた。
強者たちが己の武を最大限に奮い、己がこの戦場にいる事を証明する。自分はここにいるぞ、と。自分は誰よりも強いのだ、と。

メッシもその中の一人だ。

メッシが取った行動はシンプルである。
銃や手榴弾などを持った、参加者を倒していく。参加者にとっては、己の武がどこまで通用するかの真剣なモノだが、一般人からすれば、ＫＯＳは祭りの類。その祭りで、死者や重症者を出す訳にはいかない。何より、流れ弾に一般人が当たるかもしれない。

だからこそ、メッシは銃や手榴弾などと言ったモノを持っている者たちを片っ端から潰していった。

それをやっている武道家は、メッシだけではなかった。
他の強者ともいえる武道家も、メッシと同じことをしていた。彼らの中で、暗黙の了解と化していた。

一人一人。
銃や手榴弾などと言ったモノを持っている者たちを潰していくメッシ。

相手が銃の引き金を引く前に、一瞬で距離を詰め一撃で沈める。
相手が手榴弾のピンを抜く前に、コマのような遠心力を以て蹴り

を側頭部放つ。
相手がロケットランチャーを構えようとする事さえ許さない。電光石火の速度を以て拳を叩きこむ。

一人二人三人四人五人。
危険な因子を排除していくメッシ。その拳に迷いはない。一切の容赦なく拳を放っていく。

十人ほど倒してから、数える事を止めた。
今、自分がどれほどの敵を倒したのかは分からない。三十人倒したかもしれない。五十人は倒したかもしれない。はたまた二十人も倒していないのかもしれない。

だがこれだけは言えた。
――――彼は一度も傷を負っていない。

この事実だけで、メッシが一流の武道家と言う事が一目瞭然だった。
だとしても、メッシに油断も慢心もなかった。これこそが、彼を一流の武道家としての所以なのだろう。その間にも、メッシは危険な者たちを沈めていく。

それからしばらくして、あらかた片付いた。
彼の周りにも、七浜公園にも危険人物は見なくなった。

メッシは一息もつかないで、次の標的に視線を向ける。
危険な因子を駆逐した彼らに、もはや暗黙の了解は無い。という

のも、もはや危険因子なんてこの七浜公園にはいないのだ。暗黙の了解を守る必要もないし、そんなものを守っていてはこの武の祭典に参加した意味がない。

メッシの視線の先には、数多の数の参加者が居た。どいつもこいつも、強い意志を秘めた眼をしており、ちょっとやそっとじゃ倒されない者たちと言う事が分かる。

その中で、その参加者の中で、メッシはある少年に目を止めた。

金髪紅眼の少年。

その少年は呆れるほど黄金の頭髪で、眩しいほどの艶のある金色の髪。

瞳は、鮮血のように赤く、炎のように紅く、地獄のように朱い、その双眸。

衣服は黒いTシャツに、黒いレザーパンツのズボンを穿いている。それらは遠くから見ても一級品の者だと言う事が分かった。

メッシの瞳には、その金髪紅眼の少年が強烈に映った。

別に少年が何をしている訳でもない。ただただ、参加者の中で黒いレザーパンツのズボンのポケットに両手を突っ込んで佇んでいるだけだ。おかしな事などしていない。

いや、おかしな事をしていないからこそ、強烈に映ったのかもしれない。

今、七浜公園は地獄と化している。戦場と化しているとも言っても良い。その中で、少年は何もせずにその場に君臨していた。戦闘

態勢もとらずに、構えもせずに、防御態勢もとらずにその場に君臨していた。

敢えて言うのなら、地獄のような公園で、何もせずに少年は佇んでいる事が異常。

少年はあまりにも隙だらけだった。

このような、バトルロワイアル方式なら真っ先に狩られる。それがセオリーであり、それが戦いと言う物なのだから。

だが、メッシは何故か少年と相対しようとは思わなかった。むしろ、逃げようとも思っていた。

少年から感じるのは恐怖。純粋なる恐怖。今だかつてない感情がメッシの体を駆け抜けた。

「……っ！」

メッシは思わず息を飲む。顔の額からは汗が滲み出て流れ始めた。

少年との距離は数十メートル。メッシほどの使い手ならば、一瞬で距離を詰められる距離だ。

この距離を詰めてしまえば、メッシの独壇場。何せ相手は隙がある。黒いレザーパンツのズボンのポケットに両手を突っ込んで、無防備の状態で立っているだけだ。少年自身の力で、メッシの行動など対処できはしないだろう。

だが、それでも。分かっていても、メッシは近づく事が出来なかった。
それは理性というより、武術家としての本能がそう告げている。
――――アレと、相対してはならない。と。

他の参加者も同じ心境なのか、メッシのようにその場で少年の動向を窺い、体中からは汗が流れ始める。
誰も彼も、少年に近づこうとしなかった。

そのためか、少年から数十メートル離れた場所に人で作られた囲いが出来ていた。

異様な光景だった。
名のある武道家達が、一人の少年を囲う様にして様子を窺っている。
あまりにも奇妙。あまりにも異様。あまりにも異質。

「……、」

そこで、少年が初めてアクションを起こした。

首を動かし、辺りを見渡すだけの行動。
それだけの動作だと言うのにも係わらず、武道家達は息を飲む。

逃げればいいのだが、それは武道家達の本能がプライドが許さない。

辺りを見渡して、少年は一言、

「さぁ、開演といこう――――」

少年は嗤う。
口元を左右に引き裂くかのような笑み。まさに、不吉を想像させる笑み。狂喜とも言っても良い笑みを少年は浮かべていた。

メッシ他、少年を囲んでいる者たちは息をのむ。恐怖のあまり、中には小さく悲鳴を上げる者もいた。
少年の笑みからはただの恐怖しか見えない。

「さてと」

少年は小さく首を傾げる。何気ない動作でも、その動き一つ一つが脅威に感じられた。

それから少年は、片足を軽く上げて軽く地面を踏みつけた。その動きは本当に軽い物で、リズムを刻むかのような軽い足取り。
それだけで、ただそれだけの動作だけで。
――――――固い地盤が下から突き上げられたかのように振動するかのようにする。

「そんな……っ！」

メッシはその現象に目を丸くする。

ありえない現象だった。
あの細身で、しかもただ軽く地面を踏みつけただけで、ここまで振動する訳もないのだ。
凄まじい揺れに、立っている事さえできない状態。それはメッシだけではない。少年を囲っていた武道家達が、地に膝をつき誰一人立っていなかった。

しかし、一人だけ例外が居る。
あの少年だ。ただ口元を引き裂くようにして笑い、己を囲んでいた武道家達が地に膝を付いている様を楽しげに見ている。

愉悦。
少年の今の感情はそう言ったところだ。

少年はもう一度、たん、と。
リズムを刻むかのような軽い足取りで、地面を片足で踏みつける。

その瞬間。地面が、少年の周りの地面が下から上へと炸裂する。
それはまるで地雷でも踏んだかのような現象だった。
勿論、ここに地雷何て代物が埋まっている訳でも無し。火薬すら使っていない爆発だ。まるでそれは、地面から風が、噴き上げたかのような現象だった。

四方八方へと大量の砂利が飛び交った。それはさながらショットガンを連想させられ、メッシ達に容赦なく襲いかかり穿たれる。
その衝撃で、少年を囲っていた者たちは上空へと投げ出されていった。

正に、自然の猛威。天災の類ともいえるモノがメッシ達を襲った。
普通の“技”なら、メッシ達ならば対処できただろう。対処できるほどの技術を彼らは磨いてきた。しかし、これは技と言った技術ではない。言うなれば、圧倒的な力。暴力の類である。

メッシはその砂利のショットガンから身を守り、上空へと高々と舞う。
他の者たちを見てみれば、メッシのように体制を立て直し、上空へと舞い上がっている者たちはいない。皆が皆、砂利のショットガンを食らったまま上空へと身を投げられている。

メッシは他の者たちには目もくれず、視線を下方へと向ける。向

ける先は例の少年が居た場所だ。
しかし残念ながら、衝撃で俟った砂埃が邪魔をして、少年を確認できずにいた。

（いない……？　いや、あの少年はあそこに必ずいる。問題は着地した後どうするかだ……！）

それでも、メッシは必死にこの後のプランを建てる。
幸いにも、ここは上空。地に落ちるまで考える時間はあった。
だがそれが間違いである。確かにここは空だ。普通の者が自力で飛べる高さではない。
――――だがしかし、例外と言う者は必ず現れる。

（え……？）

頭が真っ白になった。
必死に組み上げた、プランが全て吹っ飛んだ。

「クハ！　ギャハハハハハハハハァハッハァ！！」

砂埃を消し飛ばすかのように、あの少年が核弾頭の様に上空へと突き抜ける。

その足には左右一つずつ小型の竜巻のようなモノが接続されており、背中には強大な暴風の竜巻のようなものが四つ接続されている。あの力で、空を飛んでいるのだろう。

そして、少年はそのままメッシ達に目もくれず、猛スピードで突き抜けた。通り過ぎて、１８０度転換させた。ようは、メッシ達を見下ろすようにして、少年は上空へと君臨していた。

衣服に汚れは無く、あんなに砂埃が俟っていたのにも係わらず、その汚れさえなかった。

少年は何をするでもなく、右手の手のひらをメッシ達に向けた。その瞬間、少年の手のひらの前からに球体が現れた。丸い丸い球体。その中身は嵐のように荒れ狂い、大気が渦巻いている。

まだ大きく、更に大きく。

直径十メートルほどになった風の球体。それはさながら、砲弾のようだった。

その球体を造り上げた少年は一言、

「殺せ――――――――」

狂笑の笑みとともに、無慈悲にそう言い放ち、メッシ達に大気の砲弾を放った―――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

金髪紅眼の少年――――霧夜王貴はクレーターの中心部に立っていた。
このクレーターは少年が造ったモノ。自分を愚かにも囲んだ身の程知らずな連中を制裁した時に造ったモノだ。

先ず、土行を使って出鼻を挫き、風の力で地面を爆発させる。その後は、空中に飛び出し風の力で殲滅させて、こんなクレーターが出来た。

こんなものか。と言うかのように、王貴は己の右手の手のひらを見つめてそう結論付けた。
以前は武器に付属させることによって操れた五行の力も、こうして武器を出さずとも行使できるようになった。大方、心象が変化して使えるようになったのだろうと思う。

辺りを見渡した。
地面にめり込んでいる者もいれば、腕やら足やら曲がらない方向に曲がっている者もいる。
その光景を見て、悲惨な光景を見て霧夜王貴は、

「ク、クカカカカ！　ギャハハハハハハハハハァ！」

――――嗤っていた。我慢できない、と言うかのように少年は嗤い転げる。
それは嗜虐の笑み。人が傷つ居ている様を見て、少年はただ嗤っている。

「何だ、その程度なのか？　つまらん、つまらぬぞ屑ども。その程度の力で、この王である王(オレ)を打倒しようと考えていたのか？」

返答は、沈黙。
誰も、王貴の問答に答える人間は、誰一人いなかった。

王貴は、高揚するかのような気持ちだった。
まるで昔の自分に戻っているかのような、孤高である頃の自分に戻っているかのような。気分は最高。かつてないほど、王貴は高揚としていた。

その中で、

「む……？」

どこからか、うめき声が聞こえてくる。クレーターの中から、王貴の近くからそれは聞こえてきた。

その場所に視線を向ける。
そこには、何とかしてここから逃げ出そうともがき苦しんでいる男が一人いた。
その男の片足は、通常では曲がらない方向に折れており、片腕も似たようなモノだった。その姿はまるで毛虫。手足を懸命に使いもがいている毛虫のようだった。

王貴はそれを見て、嬉しそうに口元を引き裂くような笑みに変える。
気絶している事は分かっていた。殺してはこの大会が危険になってしまうから、殺さないような出力で風を操りそれを放った。

だが、この男は気絶もせずに意識を保っている。

普通は感心するような笑みに変えるが、王貴はそれとは違う。獲物を見つけたかのような、そんな危険な笑みだ。

ゆっくりとした動作で、王貴は男に近づいた。
男からしてみれば、王貴の足音は死神のそれだ。追いつかれてはどうなるか分からない、暴虐の代物。
王貴もそれは分かっている。分かっている上で、ゆっくりとした動作で男に近づいた。出来るだけ恐怖を与えるようにして、出来るだけ怯えさせるようにして。

そして、男の真後ろに立つ。

「屑め。逃走する事を、誰が許可した？」

男が口を開きかける。

だがその前に、王貴は男の折れている足を踏みつけた。そこに一片の慈悲は無い。発言すら許さないと言うかのように、

「ギィィィイィィィィイイイィガァァアアアァァアアッッ！！！？？」

「誰が発言することを許可した？　ふざけるなよ、屑風情が。貴様は王（オレ）と会話する気でいたのか？」

男は怯えきった眼で王貴を見つめた。

許してくれ、助けてくれ、見逃してくれ。そういった感情が、眼で訴えている。

だが暴君はそんな眼をしていようが、許しはしない。

むしろ、愉悦を深める。

「そうだ、そうだ！　その眼だ！　情けない眼をしながら命乞いをしろ！　豚のように悲鳴を上げていろ！　家畜のように迫りくる恐怖に怯えていろ！　貴様に出来る事はそれだけだ！」

ガチガチ、と男の歯が震わせる。
それは純粋な恐怖。男は生きている心地がしなかった。

不意に、

「……いいや、貴様にも出来る事はあったな」

少年は自分の顎先に手をやって、考える素振りを見せる。
それから直ぐに、男の方に視線を向けた。

そして嘲るようにして、

「せめて、王（オレ）が早く飽きるように祈れ。貴様に出来る事はただ、それだけだ」

そう言い放つと、再度王貴は足を振り上げた。
狙っているのは、男の曲がらない方向に曲がっている足。その足は先程、王貴が踏みつけた足だ。その足を彼はまたもや、踏みつけようとする。無慈悲に、容赦なく、憐みもなく。

通常の人間なら、こんな事はしない。
だが、この少年は違う。平気で踏みつけ、蹂躙する。だからこそ、男は恐れる。この少年を、霧夜王貴を、歳も十数年しか取っていない少年を、男は一心不乱に恐れた。

男は顔の至る所から、脂汗が滲み出た。歯もガチガチと震える。
王貴はそれでも、慈悲の一欠けらすらけない。この屑を踏みつけて、支配する。それが王なのだ、と考えているからだ。

口元を左右に引き裂いた笑みとともに、男の足を踏みつぶそうと振り下ろした――――、

「王貴！」

が、声が聞こえて王貴の足が空中で停止する。

興が削がれた。
と、言わんばかりの気だるい表情で、空中に停止していた足を元に戻し、声のした方へと顔を向ける。

それは女性。
金髪のブロンドの髪で、クレーターの上から王貴を見下ろすような形で、その女性はそこにいた。

女性、クリスティアーネ・フリードリヒがそこにいた――――――。

第３２話　暴君（後書き）

おはこんばんは！
兵隊です！

遂に開幕しましたＫＯＳ！
王貴も本格的に戦いますよー。今の王貴は暴走状態な物ですね。いうなれば、マジキチ王貴？

戦闘描写がグダグダになるかもしれませんが、皆さんどうかお付き合いして頂ければ幸いであります。

では、ご意見ご感想がありましたら遠慮なくお願いします！
皆さんの、ご意見ご感想が兵隊の燃料となりますので！

第３３話　キリヤオウキ（前書き）

雷太「本編は殺伐としてるけど、ここではのほほんといくもんね！」

風子「風子、賛成」

第３３話　キリヤオウキ

――――爆音が聞こえた。

今、不死川心がいるのは七浜公園から少し離れた繁華街。距離は、走れば１０分ほどで七浜公園につくであろう距離だ。

アレからも、心は王貴を探していたのだが、見つける事は出来ず七浜公園を離れていた。公園にはもういないと判断したのだろう。

何せ、仲間（チーム）である、黛由紀江が気で探知できなかったのだ。金髪紅眼の少年が公園にいないと判断しても仕方のない事だ。

心は爆発が起きたであろう、七浜公園へと視線を向ける。

それは一般的な爆発とは違ったモノだった。まるで爆薬を使わずして、爆発したかのような。自然の現象を使って、爆発をしたかのようなそんな不思議な爆発。

「おいおい、凄い事になってんなぁ……」

総理が呆れ混じりに感想を述べる。

本当に凄まじく、馬鹿馬鹿しいぐらい不可思議な現象だった。
先程の爆発のせいか、人が空中へと高く舞う。その数は約５０人ほど。もしかしたら、もっといるかもしれない。そんな数の人間が空高く巻き上がっていた。何とも非現実の光景。

「そんな事よりも、王貴を探すのじゃ。あぁもう、あやつはどこに居ると言うのじゃ！」

何はともあれ、心にとってはそんな非現実は光景よりも、王貴を探すことの方が先決と結論したようだ。

心からは焦りの色が見える。
彼女からしたら、王貴と釈迦堂が会う前に止めなければならない。いわば時間が勝負なのだ。こうしている間にも、王貴はでに釈迦堂と戦っているかもしれない。その気持ちが、心を焦らせるのだ。

だが探しようにも、情報がない。
まるで、雲をつかむかのような心境だった。

心はその心境を振り払う様にして、七浜公園の方へと視線を向けた。
そこには、一つの人影が、勢いよく上空へと飛び出していた。

それは、見覚えがある人影。

思わず、心はそれを見つめる。
ジッと。動くことなく、その人影を見つめた。

「心さん！　王貴さんがどこいるか分かりました！」

由紀江の声が心の耳に入ってくる。気の探知をしていたのだろう。

だが、心は由紀江に視線を向けずに、七浜公園の上空に勢いよく飛び出していった人影を見つめる。

探し求めていた人物と何だか、よく似ている人影。金髪で金色で黄金の人影。

やっと見つけた。ようやく見つけた。

嬉しくて、心から思わず笑顔がこぼれる。

「七浜公園か？」

「え、心さん知っていたのですか？」

由紀江が目を丸くさせて少し驚いた。

心が気を探知する技術がないにも拘らず、王貴の居場所が分かった事に驚いたのだろう。

別に心は気を探知して、王貴を見つけた訳でもない。そもそも、心にそんな技術は無いのだ。だと言うのに、どうして分かったのか。

それは例の人影。空高く飛び出した一つの人影のおかげで見つける事が出来た。

その人影こそ、霧夜王貴。探していた少年だった。

「分かってんなら、さっさと行こうじゃねぇか。不死川の嬢ちゃんは王貴って坊主を探してたんだろ?」

総理の言葉に心は頷く。

王貴に会い、救い出す。

子供の頃、王貴を助ける事も出来ず指をくわえてみていた頃の自分とは違う。今度こそ、今度こそ霧夜王貴を救ってみせる。

不死川心は自分にそう誓いながら、走り始めた。

目指すは、七浜公園――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

七浜公園でクリスティアーネ・フリードリヒと霧夜王貴が対峙していた。

クレーターの中で王貴を見下ろすようにしているクリス。王貴はそれを面白おかしく口元を歪める。

クリスがここにいるのは、至って簡単な理由だった。
突然の爆発が気になって、その爆心地に来てみれば王貴がいた。ただそれだけの理由だ。クリスの周りには彼女しかいない。父の制止の声を振り切って、ここまで来たのだろう。

もはや、王貴の関心はクリスのみだけに向けられており、彼の足もとに転がっている男になど微塵も関心を向けていない。言うなれば、王貴から見て今の男の存在価値など、道端で転がっている石ころと同価値であった。

クリスは眉を吊り上げるようにしている。
怒っていた。誰が見てもクリスは怒りを王貴に向けていた。

「王貴、お前何をしているんだ」

「何を――――とは何だ?」

「とぼけるな！　お前、勝負がついたのにも係わらず追い打ちをしていただろう！」

怒号
表情が怒り一色に染め上げたクリスは、落雷のような怒号の声を

上げた。
右手に持つレイピアを握りしめる。
王貴が下手な事を言えば、瞬時にその獲物を王貴に向けるだろう。
それほどに、彼女は怒り狂っていた。

彼女は、外道な人間を嫌う。
先程の王貴が行っていた敗者を踏みつけるような真似は、クリスから見たら怒りの対象とも言える。敗北した人間の尊厳を踏みにじる王貴の行為。それがクリスは気に入らない。

王貴もそれは分かっている。
分かっている上で、彼は嗤った。

楽しそうに、愉快そうに、クリスの怒りを愉悦にしながら、

「あぁ、貴様の言いたい事はつまり――――――、」

王貴は片足を軽く上げる。標的は、自らの足元に倒れている男の折れた足。

クリスも今王貴が何をしようとしているのか、分かると口を開きかける。恐らく止めるように言いたかったのだろうが、もう遅い、

クリスが停止の声を上げる前に、王貴は男の足を踏みつけた。
それと同時に、男が叫び声を上げる。

「ギィィィィィィィィイイイイイィィ！！？？？」

「こういう事を言っているのか？」

「お前――――――――！！」

「おいおい、何を怒る必要がある？　敗者は勝者に逆らえぬ。それは昔から分かり切った事であろう？」

その発言に、クリスは怒りよりも先に疑問を抱く。

今の発言にどこか違和感。
今までの霧夜王貴では絶対に言わないと思ってしまう。
そう、今の霧夜王貴はまるで、川神学園に来たばかりの頃の様で――――――。

「――――ときに女」

突然の声に、クリスはハッと我に変える。

声のした方向に目を向けると、王貴が居た。
その声は、楽しそうに軽く謳うような声質だった。

だが、次の瞬間。
その声質が変わる。

「貴様、誰を見下しているか分かっているか？」

低く、限りなく低く静かな声に混じってようにして殺気が周囲の空気へと漏れていく。
この世のすべてが何億もの眼球となってクリスを睨みつけるような、絶大なる殺意。

クリスの体に震えが走る。
今だかつて、こんな濃密な殺気、強大な殺意を体験したことなどないからだ。初めての体験。初めての殺意。人間はこれほどの殺気を出せると言うのか。

その様子を見て、王貴はブチブチと引き裂くような笑みに変わる。
だが瞳は嗤っていはいない。冷たく、人を人とも思わない絶対零度の紅色の眼光がクリスへと向けられた。そこからは掛け値なしの

殺意が、濃密な殺気が流れ始める。あの眼は人を殺すと決めたときの眼だ。

殺される。

間違いなく、自分は殺される。と、クリスは理屈ではなく人間の本能で理解した。

だが、それでも。

「――――――っ！」

それでも、彼女は金髪紅眼の少年を睨みつける。

足はおろか、腕が、体中に震えが走る。それでも、右手に持っているレイピアを固く握りしめ、口も固く閉じ、霧夜王貴を睨みつけた。

己の誇りを守るように、己の矜持を守るように、そして何より霧夜王貴に負けないために。

あの少年は以前と違い、自分を何の躊躇もなく八つ裂きにするだろう。最悪死ぬかもしれない。

だが、それでも。今の霧夜王貴に負ける訳にはいかない。

負けてなるものか。と、クリスは己を鼓舞するかのように王貴と対峙した。

「ほう、随分と気丈に頑張るな？　貴様程度の女でも、この王（オレ）と相対すればどうなるかわかるだろうに」

理解に苦しむ。と言わんばかりに王貴は呆れ混じりに肩を竦める。

クリスの返答は、沈黙。

もはやお前と交わす言葉もないと言わんばかりの、表情で王貴を迎え撃つ。

「やれやれ、馬鹿は死なないと治らんと見える」

芝居がかった素振りで、両手を広げて、

「では、貴様に勇猛と蛮勇の違いを教授してやる」

その瞬間、彼の足もとから強風が吹くと、体が上空へと飛び立った。

それは一般的な“跳躍”とは違う。跳躍とは膝を曲げることから始まるのだが、王貴に至ってはその工程を無視して、跳躍したのだ。

つまり、彼は立ったまま跳躍したことになる。

ありえない。

クリスの頭の中にそんな言葉が浮かんでくる。確かに、王貴は他の人間より身体能力は高い。だが、あんな跳躍が出来るほど身体能力が高いモノではない。

ならばどうして、どうやって？

クリスは頭が混乱していた。

そして気がついてみれば、クリスが王貴を見上げる立場に。先ほどと違い、立場が逆転していた。

ふと、王貴の足元に視線を向けた。

そこには小型の竜巻のようなものが接続されている。なるほど、アレを使って跳躍をしたのだろう。

クリスがそう分析するのも束の間、王貴は空中で両足を蹴りつけるようにして、直進する。

標的は、クリス自身。

「クカカカカッカァ！　何を呆けている、女ぁ！」

速度は高速。
目にも止まらぬ速さで、クリスへと突撃する。

反射的にレイピアを握りしめる。
カウンターでも狙おうとしたのだろう。霧夜王貴は接近戦に弱い。
それは風間翔一と霧夜王貴が戦っている所を見ていたクリスにはわかっている。だが、それは出来ない。カウンターは出来ない。

王貴がクリスへと突撃しようとしているスピードは正に高速。
クリスでは捉えきれる速度ではなかった。

そして、王貴の片手には手の平から球体。その球体の中には風が荒れ狂っており、それは嵐で出来た球体だった。そして、それはクリスに向けられている。あんな球体を食らってはひとたまりもない。
そう感じさせる嵐出来た球体。

「ぐっ……！」

たまらず、クリスは真横に転がるようにして避ける。
その刹那、王貴がクリスのいた場所へと突撃した。

その瞬間、轟！！　っと、暴風が荒れ狂い風と砂埃が舞い始める。
視界は最悪とも言っても良い。

だが、ゆらりと立ち上がる人影を見つけた。それはまるで蜃気楼のように、中心の芯を失ったかのような人影。
無造作に立ち上がるそれは、疑う事なき霧夜王貴に他ならない。
そして、その人影はまだクリスを確認しきっていなかった。

チャンスである。
クリスは力強く踏み込み、満身の力を以てレイピアを王貴に付きたてる。

「セェイ！」

渾身の一撃。
クリスの力を最大限に使った一撃だった。今だかつて、ここまでの力でレイピアを突きたてた事がないと言っても良いぐらいの威力。

王貴の体に突きたてられたと思ったその時。
謎の金属音が響き渡る。この音をクリスは、聞き覚えがある。
その音は障壁の音だ。王貴を守る守護の壁。何度も聞き覚えのある、絶対守護の壁。

「なんだ、それは攻撃のつもりなのか女？」

砂煙の向こうから、嘲るような声が聞こえる。
霧夜王貴は、健在だ。

砂埃が晴れる。
王貴の足元は斬撃でもあったかのように、地面が抉れていた。これが、あの嵐で造り上げられた球体の威力なのだろう。

だが、驚くべきところはそこではない。
王貴を守るようにして立ち塞がる壁。障壁にレイピアの先が突き立てられていた。本来なら、半透明で造り上げられている障壁。

だが今は、そのような色ではない。

「な、なんだこれは……！？」

クリスが目を見開き、驚愕の声を上げる。

今彼を守っている障壁の色は黒。墨よりも黒く、闇よりも黒い障壁がそこに現れた。以前の半透明の障壁とは違う。
その色はまるで、今の王貴の心象を表しているかのような、光を

呑み込む黒い障壁。

クリスは大きく後退をした。
それは体制を立て直すといった類ではない。どちらかというと、必死の後退。生きるためにとるがむしゃらな後退だった。

毛穴という毛穴から汗がにじみ出て、身の毛が粟立った。
それは純粋な恐怖だ。あの黒い黒い障壁と、王貴の紅眼と自分の眼が合わさった瞬間、クリスは心が握りつぶされるかと思った。

クリスは胸部の部分の服をギュッと握りしめる。顔色は悪く、呼吸も荒い。心臓は小刻みに速く、なお速く鼓動する。まるで、心臓を掌握されたような気分だった。

そんなクリスを見て、楽しそうに嗤う王貴。

（あの、男は一体、誰だ?）

クリスは再度、自らに問いかけるように
彼女は、今の王貴はまるで川神学園に編入した頃の様だと結論付けた。だが、アレは違う。何もかもが間違いだった。

今の霧夜王貴はその頃よりも恐ろしい。得体の知れない、化け物だった。

「一体何があったんだ王貴！」

たまらず、彼女は叫んだ。

あんな眼で、あんな怖い目で自分を見て欲しくない。いつものように呆れ交じりで、馬鹿にしたかのような眼で自分を見て欲しい。いつもの王貴に戻ってほしい。と、クリスはそう願いながら叫ぶ。目尻に涙まで浮かび始める。どうして泣きそうなっているのか、彼女にも理解できない現象だった。

涙が、ただただ、溢れるばかり。

だが、彼女の悲痛な叫びの前でも。

「王（オレ）に何があったのか、か。存外に愉快な戯言をほざくのだな女。仮に、王（オレ）に何かあろうが、貴様にそれは関係のあることなのか？」

暴君は冷たい瞳のまま、紅色の双眸をクリスに向けて言い放つ。人を人とも思わない瞳のまま、冷たく限りなく冷たく言い放つ。

そして足元からは、土色の太い棒のような物体が伸び始める。その数４本。

それは、土行で造り上げられているようだ。どんどん、まだまだ土行で造り上げられた大地の棒は伸びていく。６メートルほど伸びて、ようやくそれは止まった。

そして、大地の棒は頭を垂れるようにして曲がる。

その頭が狙うは、クリスティアーネ・フリードリヒ。

少年はゆっくりとした動作で片腕を上げる。

あと数秒したら、あの大地の棒で突かれるかもしれない。容赦なく、彼女の体中の骨が粉々になろうとも執拗に突き刺さるかもしれない。そう思っても、クリスは抵抗をする気が起きなかった。戦意損失。彼女の腕は力なく下がり、回避動作すら取ろうともしていない。

「どうした？　もう抵抗しないというのか？」

力なく、クリスは王貴を見つめていた。

それを見た王貴の口に嘲りが浮かぶ。

「王（オレ）の統轄するこの世において、貴様の脆弱な存在など必要ない。

故に――――死ね」

片腕をクリス目掛けて振り下ろした。
それと同時に、土行で造り上げられた大地の棒がクリスを貫かんと殺到する。
必殺の威力を持った、大地の棒の鈍器にクリスは身動きせずにただ見つめていた――――。

第３３話　キリヤオウキ（後書き）

どうも、おはこんばんちは！
兵隊です！！

まず初めに、クリスファンの方々すみません！
貧弱王が生意気なことを言っていますが、気にしない方向でお願いしますｗ

そしてなに、この主人公。めっちゃ悪役なんですけど。
もう、本当に悪役補正かかってそうですねｗ
こんな主人公ですが、よろしくお願いします！

では、ご意見ご感想がありましたら、遠慮なくお気軽にお願いします！
皆さんのご意見ご感想が、兵隊の力となりますので！！

第３４話　強大な天災、もう一人の獣（前書き）

王貴「遂にマジこいがアニメ化するぞ！　貴様ら見るがよい！」

風子「風子、期待……！」

雷太「楽しみだもんねー。オイラ達は出る訳無いけどー」

王貴「え、出ないの？」

風子「え？」

雷太「え、出る訳無いもんね」

第３４話　強大な天災、もう一人の獣

霧夜王貴が土行で造り上げた、四本の大地の棒は確かにクリスティーネ・フリードリヒに殺到した。角度も速度も硬度も完ぺきなそれは間違いなくクリスに目掛けて放たれていた。

万全の状態のクリスならば、あの程度難なく避けるだろう。

だが、今のクリスは万全の状態ではない。王貴に精神的に呑まれ、戦意損失しているのだ。

両腕は力なく下がり、絶対の意思を持っていた双眸も力なく王貴を見つめているだけであった。抵抗するそぶりすら見せない。

避けた形跡もなかった。

何より、クリスに放たれた大地の棒は粉々に砕け散っていた。

それだけで、何かに当たり砕け散ったということが分かる。その“何か”というのは言うまでもなくクリス。彼女に向けて放たれていたのだから、間違いなく彼女に当たる筈なのだ。

だが、クリスティアーネ・フリードリヒは健在だった。

足の膝を地に付けることもなく、体を大地に伏す訳でもない。自らの両足でその場に立っていた。

「フン、」

嘲るようにして王貴は嗤う。

「主の危険をその身を挺して守るか。番犬らしい姿よな？」

その視線の先には、赤い頭髪の女性の背中。軍服を身に纏い、眼帯をつけていない左目からは王貴を睨み殺すかのような殺気を漏れ出し、四本の大地の棒からクリスを守るかのように立っている。

その両手にはトンファーが握られている。それでクリスを守る己も守ったのだろう。

「まる、さん……？」

その女性に守られて、クリスが力なくそう呟いた。

自分の愛称を呼ばれたにも拘らず、彼女は――――――マルギッテ・エーベルバッハは王貴にだけ視線を向けて、クリスの方を見ようともしなかった。

いつ攻撃されてもいいように、いつ奇襲されてもいいように油断なく王貴を見つめている。

低く、いつでも動けるように腰を低く重心を沈めながら、

「霧夜王貴。貴様、お嬢様に何をしようとした！　答えなさい！！」

その怒り、落雷の如し。

マルギッテは、王貴に怒りの感情を露わにする。眉は吊りあがり、犬歯はむき出しに彼女は吠える。

無理もない。

親愛なる妹のように接していたクリスが、今何をされようとしていたか彼女は知っているからだ。だからこそ、ここまで彼女は怒りを露わにする。

マルギッテの怒り様には、長年共に過ごしてきたクリスも驚愕する。

こんなに激怒したマルギッテを彼女は見たこともない。こんなマルギッテをクリスは知らなかった。

今のマルギッテに一睨みされれば、誰でも震えるであろう鋭い眼光。

その視線の先には霧夜王貴。しかし少年は生きた心地をさせない

であろう、その視線を受けても、

「何をしようとしたか、だと？　狗よ貴様は面白いことを吠えるのだな」

クツクツ、と。喉を鳴らすようにして嗤う。
そんな怒り、取るに足らないモノだ。と言わんばかりに嗤う。

それから急に眉を顰め、王貴の瞳の色が愉悦から、失望のそれへと変わる。
王（オレ）が言わないと分からないのか？　と言わんばかりの視線で、マルギッテを見つめて、

「殺そうとしたに決まっていよう。王（オレ）の前に立ち塞がる屑どもは、須らく同じ末路を辿るということを教えてやろうとした。ただそれだけのことだ」

それから王貴はつまらなそうな口調で、

「何を今さら確認をとる必要があるというのだ？　一々教えてやらねば判らぬのか？」

その一言で、その言葉だけで十分だった。マルギッテが王貴と敵対するには十二分だった。そもそも、王貴はクリスを殺そうとしていたのだ。その事実だけでマルギッテが敵対するには十分すぎる。

マルギッテはトンファーを構える。

その瞳には先ほどまであった、紅蓮のような怒りはない。あるのは絶対零度のような冷たい瞳。目の前の標的を完膚なきまでに叩きのめすと決めた瞳をしていた。

マルギッテの紅蓮の瞳と、王貴の真紅の瞳が交差する。

片やトンファーを構え臨戦態勢を取り、片や両腕を目一杯に広げ、まるで恋人でも迎えるような仕草を取る。

異様な光景だった。

マルギッテの方はともかく、王貴のそれはこれから戦いが始まる仕草ではない。王貴がマルギッテを侮っていることは目に見えて明らかだった。

少年からしてみれば、目の前にいるマルギッテと戦闘を行うこと自体余興なのだ。初めから勝つと分かりきったものに、警戒も緊張もある筈がない。

「お嬢様、お下がりください」

だがマルギッテは違う。

彼女は警戒も緊張もしていた。絶対零度のような冷たい瞳であるのにも関わらず、彼女は緊張をしていた。

霧夜王貴がやる気になる前でないと、彼女が勝利する可能性など無い。自分を舐めている今しかあり得ない。

それは以前戦った時に証明されている。

数多の武器を雨霰と射出される武具の魔弾。そして王貴の持つ最強の剣エンリル。

これらの前に、マルギッテは手も足も出なかった。眼帯を外し、本気の全力で挑んだのにも関わらず、だ。

しかも今はあの時と状況も違う。

背後には守るべき存在でもあるクリスもいるし、王貴は武器に付属させることなく五行を行使することができる。圧倒的不利。マルギッテの勝ち目は無いと言ってもいい状況だった。

しかし彼女は闘志を消すことなく、王貴と対峙する。

目の前にいる男は、親愛なる妹分を下そうとした怨敵だ。

その事実だけで、マルギッテが立ち向かうには十分すぎる理由である。目の前の男は倒す。たとえ己の命と引き換えになろうとも。

それだけの覚悟であった。

「マルさん……」

「この近くに中将殿も居られます。お嬢様はそこへ向かいなさい」

反論することも許さないと言わんばかりに、早口で伝えた。

だが背後にいるであろう、クリスの気配は消えない。

しかもあろうことか、その気配はマルギッテの右側へと移動していた。

「なっ！」

「ほう」

マルギッテは思わず自分の右側へと向いて驚き、王貴は口元を愉快気に歪ませている。

二者二様の反応だった。

だが共通して言えることは、二人の視線の先にはクリスがいるということ。

マルギッテと並び立つように、共に少年に立ち向かうようにして二人は少年と対峙していた。

そう。

彼女は、クリスティアーネ・フリードリヒは逃走などせずに、マルギッテ・エーベルバッハと共に霧夜王貴に対峙していた。

右手にはレイピア。左手は力強く握りしめ、視線は王貴へと向けられている。

「お、お嬢様……！」

視線をクリスへと向けた。

敵を目の前にしているというのに、マルギッテは思わずクリスへと視線を向けてしまう。それほどなまでに、クリスの行動は衝撃的だったのだ。

クリスは震えていた。

無理もない。彼女は先ほどまで、マルギッテが来るまで王貴と対峙していたが精神的に呑まれ、少年を恐怖していたのだ。強大な殺意を向けられ、掛け値なしの殺気を込められていた。

しかし彼女は、こうしてマルギッテと共に王貴と対峙している。

対峙しているということは、王貴の恐怖も薄らいだなこと言えば。

答えはＮＯだ。彼女は今も体を震わせている。

それでも、だがそれでもクリスは王貴と対峙している。体を震わせながら、心を恐怖に染め上げられながら、視線をそらせることなく気丈に王貴を見つめる。

「お嬢様どうして――――――！」

逃げないのですか？　とマルギッテが問う前に、

「マルさん。自分はアイツから逃げる訳にはいかないんだ」

遮るようにして、クリスが言う。

その彼女の視線の先には変わらず、霧夜王貴の姿があった。

王貴は冷たい視線のまま、人を人とも思わない非情な視線のままクリスとマルギッテを見つめる。

クリスの体に震えが走る。

だがそれでも、彼女は必死に言葉を紡いでいく。

「今の王貴は怖い。さっきだってマルさんが守ってくれなければ死んでいたかもしれない。今のアイツは人を殺すことだって躊躇わない」

クリスは先ほどの光景を思い出す。

王貴の冷たい双眸。暗黒の障壁。強大なる殺意。自分の心を掌握させた殺気。どれもこれもクリスが経験したことがないものだった。

確かに王貴は恐ろしい。

だがそれでも、それでもだ。

「それでも自分は逃げるわけにはいかないんだ。ここで逃げてしまえば、自分はもう二度と王貴と向き合えない。対等にはいられない」

だからこそ彼女は、クリスティアーネ・フリードリヒは霧夜王貴と対峙する。

恐怖に震える体に活を入れ、恐怖に掌握されていた心に鞭を入れる。

恐怖もある。恐れだってある。霧夜王貴の何もかもが恐ろしい。

しかしクリスは逃げる訳にはいかないかった。王貴とこれからも向き合う為に。王貴と対等であるためにも、彼女は逃げる訳にはいかないのだ。

「だから、……すまないマルさん。自分は逃げることは出来ない」

マルギッテは思わずクリスを見つめた。正確に言えば、マルギッテは何か眩しいものを見るように目を細くした。

忘れていた。彼女はクリスという少女がどんな人間かを少しばかり忘れていた。王貴という凶悪を前にして忘れていた。

呆れるほど真っすぐで、呆れるほど青臭い。真っすぐすぎる少女。それがクリスティアーネ・フリードリヒだ。

（本当に貴女は馬鹿だ……）

思わずマルギッテはそう思った。

父親のような立派な軍人になる。

それこそ、クリスの願いだ。だと言うのなら、彼女は軍人になるということだ。

軍人になるのなら、最低でも敵の戦力の把握ぐらいしなければならない。

そして一流の軍人でもあるマルギッテから見て、王貴と戦って生き残れるものは少ないと判断する。

ここで、自分が本気で王貴と対峙しても負けるし、クリスと自分が共に戦ったとしてもそんなもの彼には取るに足りない戦力だ。何より霧夜王貴は一対一より一対多といったけ形式の方が戦いやすいだろう。

つまりクリスの父親のような立派な軍人を目指すのなら、再起を図りここは逃げることが正解なのだ。

しかしクリスは王貴とこれからも向き合っていくために戦うという。

その選択は馬鹿馬鹿しいにもほどがある。王貴と対峙する。それはつまり死ぬかもしれないという事なのだ。

クリスは間違った選択を選んだ。それでも、

「分かりました、お嬢様」

それでも、マルギッテは、

「共に戦いましょう」

クリスが眩しかった――――――。

愚かかもしれない。選択を誤ったのかもしれない。愚鈍かもしれない。

しかしそんなだからこそ、そんなクリスだからこそ、マルギッテはクリスを守ると決めたのだ。あらゆる外敵から、クリスティアーネ・フリードリヒという存在だけは守る、と。心に、決めたのだ。

共に戦う。

その言葉を聞いて、クリスは力強く頷いた。そこには先ほどまであった、恐れなどといったものはない。

あるのは決意。もう二度と心を呑まれるものかといった決意がそこにあった。

「あぁ、行こうマルさん。アイツを叩きのめして、説教してやるんだ！」

「そうですね。霧夜王貴を叩きのめすとしましょう」

負ける気がしなかった。

クリスとマルギッテ。二人とも負ける気など微塵も感じなかった。

誰が相手でも、どんな者が相手でも、それ以上に心強い味方が隣にいる。

そう思いながら、クリスとマルギッテは前方へと視線を向ける。

そこには怨敵。霧夜王貴が立ちはだかっていた。

少年は先ほどのような、両腕を目一杯に広げて恋人でも迎えるような仕草はしていなかった。

左手を腰に当てて、右手は力なく垂れ下っている。その表情は子供が飽きた玩具を見つめるが如し。もはや貴様らに興味はないと言わんばかりの表情だ。

だが他人を委縮するような威圧感、途方もない殺意だけは健在であった。

膨大な殺意を紅い瞳から漏らしながら、クリスとマルギッテに言葉を投げる

「三文芝居は終わったか？」

力なく垂れ下っている右腕を無造作に上げる。それと同時に出来上がったのは、

「ならば疾く王（オレ）の前から消えるがいい。ゴミ共が――――――！」

壁。

土行の力で造られた砂の壁が、王貴の背後に出来上がっていた。

その砂の壁は圧巻の一言。アレがクリス達に襲いかかれば、容易く彼女たちを呑み込んでしまうだろう。そう断言できるほどの規模の壁が出来上がっていた。

クリスとマルギッテの両者が身を沈める。何が起きても素早く行動できるように。

王貴の戦い方は、正に何が起きるかわからない常識では考えられない戦闘スタイル。だからこそ彼女たちは、こうして身構えて警戒するのだ。

その彼女たちの警戒すら嘲るかのように、王貴は傲慢に唇を曲げる。

そしてポツリと一言。

「――――喰らい尽くせ」

上げていた右腕を下げ、傲慢に傲岸に不遜に命令を下した。

その瞬間。

背後の砂の壁からゴバッ！　といった炸裂音が聞こえた。

それと同時に砂の壁は砂の触手へと変貌を遂げる。

砂の触手の数は十本や二十本といった数ではない。その数――――五十本以上。

そのすべてがクリスとマルギッテへと標準を合わせる。絶対に外さないと言わんばかりに砂の触手はクリス達に狙いをすます。

その五十本のうちの十五本がクリス達へと襲いかかった。

その様子はプレス機を思わせる。あの触手の一本でも触れてしまえば、身動きできずに潰されることだろう。

大量の砂を用いた圧殺。それが王貴の狙い。王貴のやり方。

クリスは落ち着いた様子で短く、酸素を吸い上げて肺から吐く。

その様子には迷いなど無い。あるのは王貴を倒すという一点のみだ。

「行くぞ――――――！」

クリスが短く言い放つ。
それが合図だったのか、クリスとマルギッテが一斉に駆け出した。
その動きは直進するような動きではなく、左右に分かれて縦横無尽に走りだす動きだ。

標的を失った十五本の触手はクリス達がいた位置に胡散すして活動を停止した。

だがそれでも、王貴の余裕の態度が崩れることはない。
むしろ鬱陶しいといわんばかりに顔を顰めて、

「無駄な足掻きを……」

背後に展開していた。残り三十五本の触手がクリスとマルギッテに襲いかかった。

雨霰と襲いかかる触手の雨をクリスは避ける避ける避ける避ける避ける――――――！
縦横無尽に走り、時には跳び、時には転がり避ける。

砂の触手に、王貴のいつもの戦闘スタイルでもある武具の雨のよ

うな威力はない。クレータを作る威力もないし、何もかも吹き飛ばす破壊力もない。だが殺傷力は折り紙つきだ。止まれば圧殺。触れれば身動きを封じられ圧殺。結果は変わらずに圧殺だ。

だからこそクリスは、必死に回避動作を続ける。回避動作を続けつつ、王貴に近づいていく。それはマルギッテも同じだ。

その動作も永遠と続かない。

突然、砂の触手の雨が止んだ。それは触手の弾切れを意味していた。

（好機……っ！）

クリスは王貴へと駆け出した。回避動作に使っていた全神経を今度は接近へと変更する。

勿論これは王貴の誘いだということは理解している。それはクリスと同じく、逆方向から駆け出しているマルギッテも理解している、とクリスは思う。だがそれでも、誘いだったとしても接近しなくては王貴には勝てないことも、彼女は同時に理解していた。

クリスとマルギッテに遠距離から王貴と対峙できる術はない。

だからこそ彼女たちは接近戦を行う為に駆け出した。

それもこれも勝利するが為だ――――。

「ヤァァァァァッ！」

「Ｈａｓｅｎ Ｊａｇｔ！」

クリスの刺し穿つレイピアとマルギッテの蹴り穿つような跳び蹴りの左右同時攻撃。

その二人の一撃は王貴には届かなかった。

ガギィィン！　といった甲高い音が七浜公園に響き渡る。

王貴の黒い障壁が二人の攻撃を防いだ音だった。

そう。

霧夜王貴にこの障壁がある。何人から守護するかのように展開される障壁。

どんな攻撃でも防ぐことができる。だからこそ彼は攻撃を防ぐ努力もしないし、攻撃を見切る術を磨く努力もしない。そもそも彼にはそのようなことなど必要がないのだ。

王貴の障壁は強固だ。

だからといって、それで諦める彼女たちではない。もう一度攻め立てんと、レイピアとトンファーと素早く構える。狙うのは同じ個所。さっき攻撃した場所だ。

「フン、」

狙うのはいい。
それを実行に移させてやるほど、王貴はお人好しではなかった。

彼は不機嫌そうに鼻を鳴らすと、力なく垂れ下げていた右手の人差し指を軽く曲げる。
それだけで、その動作だけで――――、

「グッ――――！」

「あぐ……っ！」

大地がせり上がった――――。

これは物の例えではない。本当に大地がせり上がったのだ。
それと同時に、クリスとマルギッテの体が打ち上げられる。それは大地のアッパー。その大地の形は円柱形。それが彼女たちの全身を、に打ち付けた。

（自分は一体何をされた……？）

腕、足、顔と体の至る場所からは激痛。だからだろうか、己の体は思うように動かない。それはまるで浮遊しているかのような感覚。

――――呼吸も、上手く出来ない。

クリスには自分が何をされたのか理解できずにいた。

あの時攻撃していたのは自分たちだ。だというのに一体何をされたのか？　体に走るこの激痛は何なのか？　この謎の浮遊感はなんなのか？

浮かんでくるのは疑問、疑問、疑問。

「お嬢様！」

声が聞こえた。クリスの耳によく知る人物の声が聞こえた。

それはマルギッテの声。何の疑いようもない、親愛なる姉のような存在の声だ。

クリスはマルギッテの声がした方向を見ない。

それよりも気になる視線がある。それは背筋が凍るかのような感覚。マルギッテなんかに視線を向けず、クリスのみ注がれているその視線。

クリスは確認するように、その視線の方向へと目を向ける。

その視線の先にいたのは霧夜王貴だ。

王貴は無表情にクリスを見つめている。

激突する前に見せていた狂気的な笑みもなければ、絶対零度のような視線でクリスを見つめているわけでもない。

もう興味がないと言わんばかりの、そんな表情でクリスを見つめていた。

一言。

「たわけ、この王（オレ）が消えろと言ったのだ。疾く死ぬが礼であろう」

そう静かに呟くと、右手の掌をクリスに向ける。

その動作だけで、クリスの体中のありとあらゆる場所で警報が鳴り響く。

アレは不吉だ。

あの右手は……いや、今の霧夜王貴は万物すべての現象を操ることができる。でなければ、先ほどに見せていた風を操ったり、砂を操り圧殺させたり、大地をせり上げさせて攻撃なんて出来る筈がな

い。

それもすべて、五行思想を巧みに操って出来る代物だ。
ありとあらゆる手段を使い、生き物を殺す事が出来る悪魔のような攻め。

右手の掌をクリスに向けるだけの行為。ただそれだけでも危険なのだ。
彼女と王貴との距離と言えば、おおよそ５０メートル前後だ。それでも、安心などできる訳がない。王貴にはその程度の距離など関係ないのだ。

大気を操りクリスを圧殺させるか、それとも窒息させるか、はたまた武器を展開し串刺しにするか。ありとあらゆる手段がある。

だからこそ不吉。だからこそ最悪なのだ。
加えて、クリスは空中にいる。身動き一つ取れない状況だ。

川神百代のように遠距離からの起死回生の一撃も打てなければ、黛由紀江のように空を飛行する能力もクリスには無い。

正に、八方塞。王貴の攻撃をただ待つだけしか出来ない。
だがクリスはまだ諦めていない。力強い意志を秘めた目で王貴をただ見つめている。

その瞳を向けられている王貴は不審に思う。あの女にこの状況を打破する為の一手は無い。そう思っているからこそ、彼は不審に思

う。現にクリスには無い。
だがあの目は、王貴に向けられているあの目は、まったく諦めていない。むしろ反抗するかの如く力強い視線だ。

だからこそ不審に思う。
それと同時に不快感を感じていた。

あの諦めないかのような目。あの誰と対峙しても諦めを知らないかのような目。
その事から“あの男”を思い出した。
幾度も幾度も叩き潰したにもかかわらず、向かってきた“ある男”を。唯一、自分に勝利した人間を王貴は思い出していた。

王貴は忌々しげに舌打ちをすると、

「不愉快だ」

そう一言呟くと、眉を顰める。
これでもかというほど嫌悪感を滲みだしながら、

「屑の分際で、王(オレ)を直視するな」

そう言うと、王貴は右手に力を込める。

そのことから、意味するのはクリスティアーネ・フリードリヒの死。

物を言わない肉になることを意味していた。

だがクリスは五体満足でいる。血も出ていない。

良く見ると、王貴の右腕に鞭のようなものが巻きつけられている。そのおかげか標準をずれ、王貴の邪魔をしたのだろう。何はともあれ、クリスは無事だ。

クリスは何とか地面に着地すると、王貴の攻撃を鞭を使って邪魔をした人物に視線を向ける。

それは黒いスーツを着た女性。その女性は油断なく王貴を見つめている。

「小島先生！」

「無事だったかクリス。まったく、そう一人で突っ走るな」

小島梅子は安堵の表情を浮かべると、すぐに王貴へと油断なく視線を向ける。
それは突き刺さるような視線。油断なく見ているそれは、武士が敵を見つめているかのような視線だった。

梅子の後ろからは、フランク・フリードリヒが姿を見せた。
そして左手に持つ拳銃の銃口を向けている。

その顔つきは戦士の顔つきそのもの。決して、愛娘を傷つけた対象が許せない。といった私怨では無い。軍人としての彼がそうさせているのだろう。

「父様！」

クリスがフランクに向かって言葉を投げかけるが、フランクは頷くだけ。それだけのアクションしかとらない。
無駄口が叩けない。それほどまでに、フランクを警戒させている一人の少年。

少年は、地面へと着地して見せたクリスティアーネ・フリードリヒ。同じく地面へと着地したマルギッテ・エーベルバッハ。自分の右腕を拘束している小島梅子。そして自分に銃口を向けているフランク・フリードリヒ。
その四人へと視線を順番に向ける。

その瞳は怒り一色。嫌悪感を隠しようともせずに、

「ゴミ共が。次から次へと湧きおって……」

そう言うと、彼の右腕を縛り付けていた鞭が炭化するがようにして消し炭になった。

恐らく、火行を使ったのだろう。

「そうまでして、王（オレ）に消されたいか――――――！」

一喝。

王貴は怒号を上げると、背後に次から次へと武器を展開する。

その武器の色も、障壁と同じく墨よりも黒い漆黒の色。剣も槍も短剣も大鎌もメイスもすべてが墨よりも黒い漆黒の色。

標的の心を掌握するが如く圧迫感を放つそれらは、クリス達に向けられている。それらが発射されれば、命すら奪うことを約束されたそれらの引き金は王貴が握っている。そして王貴はその引き金を躊躇なく引くだろう。今の少年はそういう人種だ。

そうだとしても、クリスには何ら恐れはない。

自分は一人ではないと分かっているから。自分には頼もしい仲間がいると理解しているから。だからこそ、クリスは王貴の圧倒的な暴力に絶望をせずに立っている。

　そうしてクリスは再度、王貴に向かって走り出す。

　彼の性根を正す為に、彼女は走り出した――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

七浜駅前――――。

そこには、たくさんの人が溢れかえっていた。それもこれも、七浜市と川神市で行われている“ＫＯＳ”が原因と言えるだろう。

そこら中には、屋台の山、山、山。よく夏祭りで見かけるフランクフルトだったり、焼き鳥だったり、唐揚げ棒だったりが売られている。中には金魚救いまである。これだけを見た人は今日七浜で祭りがあるのでは？　と考えてしまうほどだ。

そんな光景が広がっているからだろうか。

七浜駅前は大変な活気を見せていた。右を向いても人ごみ、左を向いても人ごみ。上を向けば気球まで浮かんでいる始末である。

お祭り騒ぎと言うのは、このことを言うのだろう。

そんな中で、三人の男女がそこに立っていた。
その三人の腕を見てみると、ＫＯＳ参加者の証である腕輪をしていることから、彼らがＫＯＳ参加者だということが分かる。
一人は男性。そして二人は女性の構成だ。

その中の一人の女性があたりを見渡しながら、気だるそうに呟く。

「呑気なもんだねぇ。この“祭り”の参加者がどんな連中かも知りもせず騒げるんだから」

鋭い視線のままそうつぶやいた女性。左目は前髪で隠れて、服装は黒を強調としたパンクな恰好をしている。肩を大きく露出しており、何かを誘っているかのような格好だ。
その片手には、棒のようなものが握られいてる。それが彼女の獲物と言えるのだろうか。

この女性の名前は“板垣亜巳”。板垣家を指揮する長女だ。

「あー、今すぐこいつらのニヤケ面を滅茶苦茶にしてやりてぇなぁ……」

亜巳の言動に賛同するかのように、一人の男性が感想をこぼす。

その男性の今の表情は正に獣。肉食獣を連想させるかのような笑みと、雰囲気を彼は醸し出していた。その雰囲気を彼はまったく隠しようともしない。

そしてその両腕は丸太のような太さ。類まれなる一撃を放つことを約束された両腕を持っている彼の名前は“板垣竜兵”。ここにはいない“板垣辰子”の双子の弟にあたる。

そしてもう一人の女性こそ板垣天使だ。

天使はボーっとその場に立っている。心ここにあらずと言ったところか。

どうして天使がそんな状態になっているか、亜巳も分かっているからか何も言わずに放置を決め込んでいる。

「なぁ、アミ姉。ちょっくら暴れてもいいか？」

「リュウ……。あんた数日前に言われたことも忘れちまったのかい？　マロードに表立って行動するなって命令が来てるだろう」

「うぐ……！　チッ、そうだったな」

亜巳が竜兵をたしなめる為に使った、“マロード”という言葉。その言葉だけで、獣のような男である竜兵が言う事を聞いた。亜巳の言う事を聞いたのもあるが、それ以上に“マロード”といった言葉の方が影響力を持っているのだろう。

竜兵すら言う事を聞く、“マロード”と言う人物。一体何者なのだろうか。

「それよりもよぉ。アイツどこ行ったんだ？」

竜兵はそう言うとあたりを見渡した。大方、彼が言う“アイツ”を探しているのだろう。

だが、探しても“アイツ”と言われる人物は見当たらなかった。

「さぁね。どこかで買い食いでもしてるんじゃないかぃ？」

亜巳が適当に相槌を打った次の瞬間、

「おっ、いたいた！　お前ら探したぜ」

その人物は現れた。
灰色のTシャツと、下は黒いボンテージパンツを穿いた少年。右腕にはKOS参加者たる証の腕輪をしていることから、KOS参加者だという事がわかる。

その少年の両手にはフランクフルトやら、焼き鳥が入ったパックやら、バナナチョコやらを大量に持っていた。
とても、これから戦いに行くといったスタイルではない。

少年の姿を見て、亜巳は思わずため息を吐いた。亜巳の反応を見て、この少年が竜兵の言っていた“アイツ”で間違いないようだ。
そして彼女の予想は的中していたのだ。

「豪、アンタ随分と買い込んだじゃないか。それ一人で食べるつもりかい？」

「おぉ、この程度余裕だろ」

亜巳に“豪”と呼ばれた少年――――渡辺豪は満面の笑みでそう答える。

彼は余裕と言った、両手に持っている大量の食べ物。普通の人物

なら、こんなには食べれない。そこまで言うであろう食べ物を彼は食そうとしていた。

「おい、豪。俺にもフランク寄越せよ」

「やだね。欲しかったら自分で買ってこいよ」

竜兵がそういうも、取り付く島もない。豪は数秒も考えずにそう答えた。

そして竜兵が欲しがっていたフランクを頬張り、天使の方へと視線を向ける。

「天の奴どうしたんだ？」

「あー、天なら思い人からまったく連絡こなくて、絶賛テンション急降下中だ」

豪は竜兵の説明を適当に聞きながら、今度はチョコバナナを頬張って、

「めんどくせぇなー。好きなら好きってさっさと告ればいいんだよ」

「アンタは自分に正直だねぇ」

「そりゃそうだ。我慢して良いことなんて一つも無いからな」

だからさ、と豪は言葉を区切ると不敵に笑い、

「釈迦堂さんの獲物も横取りする気だから、俺」

「……師匠に殺されるよ？」

「だってさ、あの釈迦堂さんが興味を持つ獲物何だぜ？　俺だって興味がある。だったら横取りしなきゃな」

そう言って、豪は嗤う。

それは正に獣。竜兵とはまた違った、獣の笑みだった。

言葉で表すのなら、それは“獰猛”。

犬歯を剥き出しにして少年は嗤う。

「んで、釈迦堂さんの獲物の名前って何だっけ？」

「……お前、頭が良いくせに馬鹿だよな？」

そう竜兵が呟いた。

こうして、役者がそろったＫＯＳ。

混沌と化した、この武道大会において、一人の獣はどういった行動を取るのか。

それはまだ誰にも分からない――――――――――――――――――――。

第３４話　強大な天災、もう一人の獣（後書き）

おはこんばんちは！　兵隊です！
いやー、お久しぶりであります！　正直忘れられていると思いますが、また真剣で王に恋しなさい！をよろしくお願いします！

更新が遅くなったのは、モンハンのせいですｗ
こいつがちょっと楽しいばかりに、更新できませんでした。カプコンさんめ！　なんてものを造ってくれるんだ！ｗ

読者さんもお気づきだと思いますが、この作品コラボっちゃってますｗ
そう！　“闇に咲く花たち”からのゲスト出演として、渡辺豪クンに登場させてもらいましたｗ
いやー、本当にｙｏｕｋｅｙさんには頭が上がりません！　こんな頭の悪いコラボを受託していただきありがとうございます！

豪君にはアグレシブに働いてもらいますので、よろしくお願いしますｗ

それでは、ご意見ご感想がありましたらお気軽によろしくお願いします！
皆さんのご意見ご感想が兵隊の力となります！

第３５話　クリスにとっての霧夜王貴（前書き）

※この今の主人公は悪役補正がかかっております。

そして、最近の魔法少女って怖い……。

第３５話　クリスにとっての霧夜王貴

――――とある世界に一人の少年がいた。

その少年の毎日は充実していた。

勉学を学ぶことだって楽しかった。自分の知らない知識を学べることが嬉しかった。義姉と遊ぶ事だって楽しかった。義姉は自分が想像もつかない事をやってのけるので楽しかった。幼馴染達と遊ぶことが嬉しかった。外国にあるとある一家の家にホームステイすることが楽しかった。母と会話するのが嬉しかった。父親の仕事内容を聞くのが楽しかった。

そしてなにより――――。

叔父と叔母の手伝いができる事が何よりも嬉しかった――――。

少年にとって叔父と叔母は家族のようなもの。言ってみれば、もう一人の父親と母親と言っても良い存在だったのだ。

少年がそんな感情を抱くのも無理はないと言ってもいい。

少年の母親は病弱。少年の従者が付きっきりで看病しなければ危うい状態なのだ。よって、母親と会う機会も週に一度あれば良い程度。

そして少年の父親は多忙。無理もない。そのときの少年の父親が経営する会社には余裕なんてない。暇な時間などある筈がない状況

だったのだ。

義姉も付きっきりで少年と遊んでいる暇はない。彼女も彼女で予定があるのだ。

そうなると、少年は本当に一人だった。

そこに現れたのが、少年の叔父と叔母だ。

叔父と叔母は優しい笑みを浮かべ、片手を差し出しながらこう言う。

「これからは私たちが共にいよう。お前に寂しい思いはさせないさ」

その言葉を聞いた瞬間、少年の瞼から涙が溢れた。

コップに注いだ水がこぼれおちるかのように。我慢していた何かが溢れかえるかのように。少年は叔父にしがみつきながら、泣いた――――。

それからというもの、少年は叔父と叔母と行動するようになる。

少年がそれを苦に感じたことはなかった。しかし幼い少年にしてみれば大変なこともあったのかもしれない。疲労もあったのかもしれない。

だが、それ以上に少年は叔父と叔母の役に立てることが嬉しかった。何よりも、叔父と叔母の役に立てることが嬉しかった――――。

そのおかげで“幼馴染”という絆も手に入れる事が出来たのだ――。

そしてそれから数年後、少年は命を狙われることになる。
少年は必死に抵抗し、辛くもそれを撃退することに成功した。

それから少年は独自に、命を狙って来る者の黒幕を調査し始める。
一人で調査するのは怖かった。でもやるしかない。
病弱の母に迷惑をかける訳にはいかない。多忙の父に迷惑をかける訳にはいかない。義姉や幼馴染たちを不安がらせる訳にはいかない。何よりも彼が嫌だったのは、叔父と叔母の手を煩わせる事が嫌だった――。

そうして少年は一人で調査を始めた。
ここで不運だったのは、少年が自分が思っているほど優秀だったという事だ。

頭でパズルを組み立てる要領で、自分を狙った黒幕を調査し始める。
あらゆる知識を頭の隅から隅まで自己検索してパズルを組み立てる。
頭から知識を引っ張り出してパズルを組みなおして、頭から知識を引っ張り出してパズルを組みなおして、頭から知識を引っ張り出

してパズルを組みなおして、頭から知識を引っ張り出してパズルを組みなおす。

――――――止めろ。

そのうち頭の中で声が聞こえてきた。
その声は黒幕が分かるにつれて、明確に聞こえてくる。

――――――絶対、後悔することになる。

少年は止めるわけにはいかない。
黒幕を暴けなければ、一生命を狙われ続ける。そんな恐怖に少年は耐えられなかった。

そして少年は黒幕を暴くと同時に、後悔し絶望した。

脳内に反復する言葉は、どうして。何故といった疑問。
少年の命を狙ったのは――――叔父と叔母だったのだ。

もし少年が有能でなければ、優秀でなければ、無能であったのならこんな答えを導き出すこと無かっただろう。

だが良くも悪くも少年は優秀だった。優秀すぎた。

「どうして僕が命を狙われなければならないの……？」

少年は静かに呟く。

「僕は……、僕はただ……叔父上と叔母上の言う事を聞いていただけなのに」

少年の疑問に誰も答える者はいない。いる筈がない。いる訳が、ない。

「怖い……怖いよ……。どうして僕なの……？」

少年は静かに膝を抱え始め、体を震わす。それは現実から目をそむけるようにして膝を抱え、恐怖から体を震わせていた。

信じていた者に裏切られた現実に目をそむけ、命を狙われる恐怖に体を震わせる。

それから少年は限りなく小さな声、そして震えながら、

「もう嫌だよ……。誰か、誰でもいいから……、僕を……、」

――――助けて。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ぐぅ……っ！」

七浜公園中央。

そこで人間の呻き声が聞こえた。それは男性よりも高い声質で女性と言う事が分かる。

その女性は自分の頭を二、三度振って己の意識を覚醒させようとする。

頭を振るたびに、その女性のブロンド色の髪の毛が宙を泳ぐ。

女性――――クリスティアーネ・フリードリヒはそうして意識を覚醒させた。

「自分は……。そうだ、自分は父様達と王貴に対峙してそれで……」

確認するようにクリスが呟くがそこで止まる。

そう。

彼女は後からやってきたフランク・フリードリヒと小島梅子と共に、霧夜王貴と対峙したところまでは記憶にある。

問題はその後だ。

その後からすっぽり記憶がない。まるで王貴と対峙していなかったというかのような。

そうして考えてある結論に達した。

（自分は……一撃で沈められたのか……？）

そんな馬鹿な。と、クリスは否定するように頭を左右に振るが、そうとしか考えられたなかった。

思い出してみれば、王貴の攻撃に不意打ちというものはなかった。
正体不明の“力”を上から叩きつけられ、クリスティアーネは意識を失ったのだ。

その正体不明の“力”が一体どういったモノなのか。どういった攻撃でやられたのか。クリスティアーネには分からなかった。
それを認識する前に彼女は倒れたのだから当然ともいえる。

彼女は何とか立ち上がろうと、傍らに無造作に落ちていたレイピアを右手に取り、ノロノロと起き上がる。

（う……あうっ……！）

頭の中で痛みが走るような感覚に、頭をレイピアを持っていない左で押さえる。

クリスは周囲を見回す。
地面は大きく抉れていたり、小さい傷のように抉れていたりと様々。
七浜公園に植えてあったのでろう、木々は悉く薙ぎ倒されている。
木々だけではない。遊具のようなものまで壊しつくされていた。

まるでそれは台風が通過したかのような有様。徹底的に破壊され、壊しつくされていた。

だがしかし……、

「まる、さん……？」

茫然と呟く。
返事は、ない――――。

「父様！　小島先生！」

彼女の声だけが、公園に響く。

これにも、答える者はいない。
それでもクリスは、もう一度震える唇を何とか動かした。

「マルさん！　父様！　小島先生！」

この声にも誰も答える者はいない。いくつかの呻き声は聞こえたが、明確な返事は返ってこなかった。
それにその呻き声も、マルギッテや梅子やフランクの声質ではない。

クリスは再度辺りを見渡した。
――――大勢の人が、倒れていた。

土の中に埋まっているかもしれない。木々の下敷きになっている人までいる。どれもこれも全員ＫＯＳの参加者だ。腕に参加者たる証拠の腕輪をしているのがその証拠となっている。

正にその光景は、“悲惨”。
クリスにとってその光景は、正体不明の“力”に打ちのめされた体のダメージ以上に衝撃なものだった。
それと同時に胸に込み上げてくるものは怒りといった感情。

倒れている者たちが、クリスやマルギッテや梅子やフランクだったというのなら、彼女は怒りを覚えなかっただろう。王貴に挑んだのは自分たちだ。それが返り討ちにされた。それだったらまだ納得がいった。
だがその倒れている者に、関係のない人たちまでいる。自分たちの戦いに何ら関係のない者たちだ。

関係のない人間が倒れている。それがクリスにって、納得がいかなかった。

その悲惨になった七浜公園の中で、超然と立つ人影がある。
川神学園最凶、霧夜王貴――――。
ズボンのポケットに手を入れた少年は、

「しぶとい。本当にしぶとい女だな貴様は？」

そう言って、王貴はクリスに視線を向けた。ニヤリと笑う笑みとともに。

その不遜な態度に、クリスは右手に持つレイピアの剣先を王貴に向け、

「何故だ！　何故関係のない人まで攻撃した！」

勿論、王貴がやったという確証なんてない。その光景を見る前にクリスは倒れたのだ。
だがあんな光景を、現実に出来る力を持っているのは王貴以外にいないのだ。

そういう意味では、クリスは確証を持っていた。

そのクリスの問いに答えるのは嘲笑。
認めるかのような笑みだった。

「何故だと？　貴様はいつまでその下らん正義感を振りかざしているつもりだ？」

彼は右手をポケットから出すと、“風”をその掌に集める。
そうして出来上がったのは、ソフトボールほどの大きさの球体。
風の力が凝縮された球体だ。

「何故この王（オレ）が、王（オレ）以外の屑の事まで考えてやらねばならんのだ？」

そうだな、と王貴は言葉を区切る。
そしてその口元には引き裂くかのような笑み。

「理由があるとすれば、邪魔だった。そう答えるほかあるまい。王（オレ）の戦い方は周りを巻き込まずに戦う、といった軟なものではないか

らな」

「王貴ィイイイイイイイ！」

「五月蠅いぞ女。貴様に吠える余裕があると思っているのか！」

王貴が一喝する。

それと同時に、先ほど造られた風の球体をクリスに下から放るようにして投げつける。

大きさはただのソフトボール並みの大きさ。しかしそれでも、クリスを倒すには十分なものだ。

「グッ……！」

王貴の一喝に返答している余裕はない。

彼女の体にはまだダメージが残っているのだ。つまりいつまで満足に動けるかわからない状態にいる。

そんな体でも、クリスは抵抗する。

だが、放たれた風の球体はそんなクリスの状態など知った事ではない。

問答無用で襲いかかる。

クリスはその球体を転がりながらも必死にかわす。それこそ、生きる為の回避運動。

（くっ、かわし――――――――!?）

彼女は敵の――――王貴の背後を見た瞬間、体を固める。蛇に睨まれた蛙のように体を固めてしまった。

見えた光景は、薙ぎ倒れていた木々が彼の背後で浮んでいる光景。異様だった。まったくその場所だけが、王貴の背後だけ重力が聞いていないのではないという光景。

何てことはない。

風の力を操って、木々を浮かしているのだろう。

だが木々を浮かせるだけの風力を精密に操れるという事実に、クリスは驚愕させられる。

そこに、

「ハッ、どうした豚が！　家畜でももっと抵抗するぞ――――！」

一切の容赦なく、背後で浮遊していた木々がクリスのもとへと殺到する。

どうするかなんて考えている余裕はない。

体が自然に動くかのように、その木々の雨を転がりながらも回避行動へと入る。

それもこれも、日々の鍛錬のおかげとも言えるだろう。そうとも言えるくらいの自然の回避運動であった。

だがそのクリスの必死の回避行動でも、

「そうだな。ああやって攻撃されては、そう避けるほかあるまい。だが、それは愚策だ」

その動きに合わせるかの如く、王貴は自身の片足を軽く上げて踏みつける。

瞬間。

ドンッ！　と、クリスの足元の地面が踏んだように爆発した。
いや爆発したと。というのとは少し違う。何せ火薬の類を一切使っていないのだ。すべては土行と木行の風の複合技。
メッシ達が受けた技だ。

あの太陽の子ですらも防げなかった技を、一介の学生であるクリスに防げる道理など無い。

クリスの体が不規則に下から上へと軽く数メートルは飛ばされ、そのまま不規則に地面へと落ちていく。

「あぐ……ッ……ッ！」

背中から落ちたせいか、満足に肺に空気を送り込む事が出来ず、軽い呼吸困難に陥っていた。

体のどこも折れていない状態が不思議の状態だった。クリスは蹲りながらも、視線を王貴へと向ける。苦しんでいる様を見て、攻撃を躊躇する男ではない事を知っているからだ。次も何らかの一手を講じてくる。

だが王貴は、嗜虐的な笑みを浮かべたまま。
右手の掌には風の渦を作ったり、指から炎を出したりと力を確かめるかのようにしている。

（っつ……ッ！　どう、する……！　まともに相対できる強さじゃない……。どうする、一体どうすれば……ッ！）

プランも練り勝てる見込みがない状態でも、クリスは起き上がる。意識していないというにも関わらず足が震える。ダメージの影響か、それとも恐怖からか。

だがクリスはどっちらでも構わなかった。重要なのはそこじゃない。どうやったら、王貴の目を覚ます事が出来るか。その方が重要だった。

「クカカカカッギャハハハハハハッ！　何だ、その滑稽さは。もっと必死になってはどうだ？　これでも加減をしているのだぞ」

狂気的な笑みを王貴は浮かべる。そしてその口からは狂熱とした笑い声。

そしてその視線はクリスへと、信じられない目で王貴を見つめている彼女へと注がれる。

「あれで、加減だと……？」

「ククッ、なにを不思議がる必要がある？　王たるこの王（オレ）が、貴様のような矮小な存在に本気を出してどうするというのだ？」

何てことはない。

とでもいうかのように、王貴の口元から嗜虐の笑みがこぼれる。

「そもそも貴様が、王（オレ）に勝てると考えた時点で勝敗は決している」

王貴がそう言うと。背後で何かが展開されていく。

その背後に展開されるは、武器武器武器――――――。

漆黒に染められた武器。その数６７艇。クリスのとどめをさすには十分すぎる。

「一介の屑にしては力があるとはいえ、たかが屑如きが王（オレ）を打倒しようなどと考えただけでも、無礼にもほどがある」

クリスと相対する少年の背後には“死”といった言葉よりも分かりやすい、死の象徴が浮かんでいる。

だというにもかかわらず、クリスは王貴から視線をそらさない。

瞳も――――諦めていない。

王貴は続ける。

「貴様と王（オレ）の力の差は埋める事が出来ぬ開きがある。それこそ生命（いのち）をかけたところでは埋める事の出来ぬ開きがな――――」

王貴は片手を上げる。

それが合図となった。少年の背後に展開されていた武器のすべての剣先がクリスへと向けられる。

もはや遊びは終わりだ、と言わんばかりにすべての武器の剣先がクリスへと注がれる。

「貴様が考えるべきは、王（オレ）をどうやって打倒するかではなく、王（オレ）とどうやって敵対しないかだ。選択を誤ったな女……」

歯向かう者は容赦しない。

王と敵対する者には、それ相応の罰を与える。それに対して敵対したものが行える行動は、ただ平伏し、王の怒りを収まるようにしている事のみ。

戦うという前提から間違っているという考えだ。
だがその考えを現実の物に変える事が出来る男こそが――――霧夜王貴ほかならない。

恐れるだろう。恐怖を抱くであろう。
何せクリスの目の前にいる男は、躊躇もなく容赦もなく慈悲もなく歯向かう物を八つ裂きにする。だからこそ、霧夜王貴に恐怖し恐れるのだ。
だがそれも、普通の一般人だったらという話だ。

クリスティアーネは違う。
彼女は――――、

「フフ……、ははははッ！」

――――笑っていた。

クリスは、王貴の発言の見当違いさに思わず笑ってしまう。

王貴は言った。“貴様が考えるべきは、王（オレ）をどうやって打倒するかではなく、王（オレ）とどうやって敵対しないかだ”と。

それこそ間違いだ。打倒するだとか敵対するだとか、そんな前提が間違っている。

彼女はそんなこと思っちゃいない。

確かに、勝負がついたのにも関わらず追い打ちをかける。といった行為や、何の関係もない人物まで巻き込む攻撃をした事にはクリスも怒りを覚えた。

だがそれとこれとは、話は別だ。

彼女は王貴を打倒しようなどと考えた事はない。彼女が思っていた事はもっと別の、もっと違う事だった。

「なんだ？　いよいよ、気でも狂ったか？」

ニヤリ、と。唇を左右に曲げて王貴が問いかける。彼の表情に変化があったとしても、背後に控えている武器の剣先が変化するわけでもなかった。その剣先は真っすぐと、クリスに向けられている。

クリスの気が狂おうが、狂っていなかろうが王貴に関係ないのだ。王貴の中でクリスの死はもはや決定していた。

それでもクリスの表情に恐怖はない。

「ははは。いいや、自分は正常だ。何も可笑しな所なんてない。自

分が笑ったのは、お前が見当違いなことを言っていたからだ」

「なんだと……？」

見当違い。

そう言われて、王貴は顔の表情を不快そうに顔をする。同時に湧きあがってくるのは疑問。何を持って見当違いと言ったのだろうか。王貴にはそれが分からずにいる。

理解できない。

霧夜王貴はクリスティアーネ・フリードヒリを理解できずにいた。

「自分はお前と敵対しようだなんて、一度も考えてないぞ」

不可解だった。

クリスが何を言っているのか、王貴には理解できない。

彼女は自分と敵対するからこそ、打倒したいと考えているからこそ目の前に立っていると思っていたからだ。これまで彼の目の前に立ち塞がる者は、皆が皆彼に敵意を持っていたから。

だがここにきて、彼女は王貴を敵と認識していない事を、彼は理解する。

驚愕よりも、彼にとって憤怒の感情が先行したらしい。

嘗められた。敵とも認識されていなかった。

そう思うと、王貴の真紅の双眸を怒りの色に染め上げる。その輝きは紅蓮の如き。

それとは逆にクリスは冷静だ。

怒りに燃える王貴を見つめる視線は、とても穏やかなモノ。

視線を王貴に向けたまま、クリスは自分の右手に握られているレイピアを地面へと突き刺す。

その行為は、戦闘放棄そして、クリスティアーネ・フリードリヒの人格から考えられない行為であった。

考えられない行為。だとしても、彼女のやりたい事に武器と言った物は不要なのだ。

だからこそ、クリスは自分の武器を放棄する。

「何の真似だ？」

王貴が問いかける。

怒り一色に染め上げられた双眸はクリスへと向けられている。

対してクリスは恐怖を抱いていない。
それどころか、王貴に向けて左手を差し出し、

「自分はお前を、霧夜王貴を助けたいんだ」

――――――お前の事が、好きだから。

その後に続くであろう単語を、口の中で呟いた。

考えてみれば、どうして王貴に惹かれたのかクリスにも分からない。
第一印象は最悪と言っても良いだろう。王貴が仲間の夢を笑ったあの多馬川の土手が二人の出会いの場所だ。正に最悪の出会い。
クリスから見ても王貴は最悪の男だ。

次に王貴の印象が変わったのは箱根旅行だ。
王貴は釣りのやり方も餌の付け方、さらには餌とは何だ？　と聞いてくる始末だ。そこまで王貴が世間知らずだとはクリスも思っておらず、驚いた事を彼女は思い出す。

それから色々あった。
マルギッテとの決闘に彼が手を抜いている事に激怒した。それと

同時に何故本気で戦わないのだろうと疑問に思った。
その性根を正そうと彼を付け回した。風紀委員にもなった。彼が年下と知った時は驚いた。

彼に惹かれるきっかけがあるとすればあの時だ。
多馬大橋で彼に言われた『よかろう、クリスティアーネ。貴様の偽善、この霧夜王貴が見届けてやる。偽善の先に何があるのか、この王（オレ）に見せてみるがいい！』この言葉がきっかけだ。

自分の“義”が認められた気がして嬉しかった。
後押しするかのようなこの言葉。これこそが、彼に惹かれるきっかけだったのだ。

もう一度彼と、王貴と笑いあいたい。
しかし、今の王貴は以前の王貴とは違う。

何故王貴がこうなってしまったのか、どうしてこうなってしまったのか。彼女には分からない。
だが、これだけは言える。

――――王貴をこのままにしてはいけない。

これだけは、絶対とも言えた。

「王を助ける、か……」

静かに呟く。限りなく静かな声で、限りなく穏やかな声質で。
今の王貴の双眸は固く閉じられており、そこからは何ら一切の感情が読みとれない。

それから王貴は静かに目を開けた。

そこからは、先ほど両眼に宿していた怒りとも悲しみとも憐れみとも違う。
どこか諦めたかのような目をした王貴がいた。

「生憎だがな、」

そうつぶやくと、おろしていた片腕を再度上げ、

「王は今だかつて、助けを願った事はない」

クリスに目掛けて片腕を振り下ろす。

その瞬間、彼の背後に展開された数多の武器がクリスへと殺到――

――

「王貴っ！！」

――――――しなかった。

第三者の介入に、王貴とクリス。両者の視線がその第三者へと注がれる。

それは約１６０ｃｍほどの少女。艶やか黒色の髪に、可愛らしい顔立ち。

艶やかな高級そうな着物を着た少女は、戦争でもあったかのような七浜公園へとやってきた。息も切らしている事から、走ってここへと来たのだろう。

彼女の後ろからは、黛由紀江と総理が走ってきた。

彼女は探している人物がいた。

ようやく見つけたその人物を前に、彼女は臆しなかった。彼女が現れなければ、一つの人間だった物が転がっていたであろうが、彼女は臆しない。

彼女は――――不死川心は、王貴とクリスの間の位置に向かって歩いて行き、その場所へと立つ。

クリスも心に来るなと声を掛けそうになる。王貴が以前の王貴ではない事を、何よりも彼女が知っているからだ。

だが、声がかけられなかった。心の雰囲気に声がかけられなかった。

「ようやく、ようやく見つけたぞ」

心はなおも武器の展開を続ける王貴へ近づく。

対して王貴は背後に展開されている武器を消すと、一息に後ろへと飛び下がった。そして間に生まれた距離はざっと１０～２０ｍほど。

「何を、しにきた……」

俯いたまま、彼は心へと問いかけた。

その様子から、彼の表情は読めない。だが、何か違和感があった。

クリスから見て、今の霧夜王貴は何か違和感があった。自分と対峙していた時とは違う雰囲気。それが今の王貴にはあった。

その王貴の様子を見て、心は呆れたようにため息を吐いて、

「チームメイトに随分な挨拶じゃのう。ＫＯＳはチーム戦じゃぞ？それを忘れたのかお前は。これはお笑いじゃのう」

ほっほっほ、と。心はそう笑う。
それは、昔馴染みの失態を笑うかのような笑い声。なんとも軽いものだった。

王貴は俯いたまま、

「姉上にそそのかされたか」

「エリカは関係ない。お前の前に現れたのは此方の意思じゃ。今のお前は見るに堪えんからのう」

「王（オレ）がどうなろうと、貴様には関係なかろう」

霧夜王貴はゆっくりと顔を上げる。
大層な動作もない、素早いアクションもない、特殊な動作もない。
ただ、顔を上げるという動作。

その表情からは何の感情も読みとれない。言うならば無表情だ。

彼は片腕を上げる。
それと同時に出来上がったのは、一本の長槍。

その片腕を振り下ろすと同時に、長槍が心へと投擲される。
そして着弾した。

心の体ではなく、心の足元の地面へと。

「消えろ。次は当てる」

「それは脅しか？　だとしたら、笑えるの～」

心の子馬鹿にした態度に、王貴の双眸が再び怒りの炎が灯り、殺気を滲みだす。

そうして彼の背後に出来上がったのが、おおよそ１４艇の武器。
それだけで、武器が現れただけで、心と王貴の勝敗が決していた。
確かに、心は優れた柔道家だ。彼女と同年代で彼女に勝てる女性な

ど数少ないモノだろう。

だが、それとこれとは話が別だ。

たとえ彼女が優れた柔道家であろうが、王貴が近接戦闘で来ない時点で勝敗は決している。

一人がどう頑張っても戦争では勝てなように――――。

だがそれでも、心には臆することはなかった。

いや、そうではない。手の指先を見てみらば、小さく震えている事が分かる。それは恐怖でだ。

だとしても、心は王貴と向き合わなければならない。

そうでもしなければ、王貴を救う事が出来ないから。

心と王貴の対峙に何分掛かっただろうか。それははたして数十分か。数秒か。

永遠とも続く時間に、どちらかが動いた。

それは王貴だ。

彼は背後に展開された武器をすべて消すと、心の方向へと向けて歩いていく。

それはゆっくりとした動作。

そして王貴と心が交差する。道で人と人ごすれ違うかのように。

王貴は止まって一言。

「――――――――――」

そうつぶやくと、王貴は風に舞い上がりどこかへと飛んで行った。

心はその方向へと顔を向ける。

先ほど王貴の言った言葉を思い出しながら。

――――心。もう、王（オレ）に構うな。

それは霧夜王貴から不死川心への、明確な拒絶を意味していた――

――――――。

第３５話　クリスにとっての霧夜王貴（後書き）

こんばんはの人こんばんはー。
こんにちはの人こんにちはー、兵隊でございます

ようやく更新する事ができましたー
これからバシバシ更新するので、よろしくお願いします！ｗ

今連載中のコラボ、〇〇男の方もよろしくお願いします！

～おまけ～

王貴「心。もう、王（オレ）に構うな。さもなくばマミることになるぞ？」

心「ま、マミる言うでないわー！」

第３６話　獣道、ウルクの暗躍（前書き）

王貴「久しぶりに王（オレ）の出番かっ！」

○「まてぇぇぇい！」

王貴「む、貴様はっ！？」

←続きは本編にて……

第３６話　獣道、ウルクの暗躍

――――――ドリームチーム。

カラカル・ゲイル。そのゲイツの弟であるゲイツ。そして、アメリカの軍事計画の一つでもある“スーパーソルジャー計画”の申し子でもあるワンとツー。

アメリカではいや、アメリカ市民はこの四人をドリームチームと呼んでいた。

英雄視されているカラカル兄弟はさることながら、ワンとツーは最高クラスの遺伝子をかけあわせた。尚且つ最高の指導者や器具を使ってトレーニングを重ね手作り上げられた戦士。それが、ワンとツーである。

この二人は正に戦闘の申し子とも呼べるだろう。

そのアメリカの秘密兵器とも呼べる二名がＫＯＳに参加している理由は、ワンとツーがどこまでやれるか。そしてアメリカの戦士の実力を世界中に知らしめるためである。

カラカル兄弟が参加しているのは、ワンとツーのサポートもかねてだ。

もし、想定外の状況になってしまった時の保険。それがカラカル兄弟の依頼でもあった。

そして、カラカル兄弟は本気でＫＯＳに取り組んでいなかった。
それはワンとツーが敗れる筈がないと思っているからだ。彼らと腕試しをし、二人の実力を良く知っているのだ。

ワンとツーのコンビネーションの攻撃になすすべも無く倒されたゲイル。ゲイツがコンピューターで予測しようとも、ワンとツーはさらにその上を行く動きを見せる。

この戦いから、ゲイルとゲイツは“ＫＯＳに優勝するのは、我々アメリカチームだ”と信じて疑わなかった。
慢心でも油断でも過信でもない。これは“確信”。この二人と我らカラカル兄弟が手を組めばＫＯＳ優勝も夢ではない。本気で挑まずとも、勝ち上がる事など造作もない。――――そう思っていた。

優勝賞金でもある１０億ドルを手に入れた暁には何をしようか――――？
本気で、考えていた。

――――その夢も優勝を確信した何かも、一匹の獣に噛み砕かれると知らないまま

――――彼らは夢を見ていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

――――カラカル兄弟は七浜市にある人通りの少ない大通りを逃走していた。

かつて、ドリームチームと呼ばれていたチームは、壊滅寸前にまで追いやられていた。それも一人の少年。いや、一匹の獣によって、だ。

その獣は突然現れた。前触れもなく、ただ突然四人の前に現れた。

そして、カラカル兄弟とワンツーの四人を見るや否や、その少年

は犬歯を剥き出しに笑うと。襲いかかってきた。正確にいえば、ＫＯＳ参加者たる腕輪を見るや否やだ襲いかかってきた、だ。

その行動は問答無用。

その問答無用で容赦のない行動が功をなしたのか、獣の無謀な攻撃は奇襲の物に昇華する。

少年はその奇襲を持って、ツーを一撃のもとで沈めた。

だが、二度目の攻撃（それ）は奇襲ではない。ただの暴力だ。

ただの暴力ではワンを地に伏せる事はでない。

それからのワンの指示は早かった。まず彼は、カラカル兄弟に逃げるように指示を出す。一回、ただの一回の奇襲でアメリカチームの体制はズタズタに噛み砕かれていた。このままでは敗北してしまうかもしれない。ワンはそう判断したのか、カラカル兄弟に撤退を命じていた。

ゲイル、ゲイツの二人もワンの心情を理解し納得したからこそ逃走したのだ。

――――獲物に逃げられる。

その事実があっても、少年は両目の双眸を殿を務めているワンから背けなかった。

それはなぜか？　いや、考えるまでもないだろう。逃げたのなら、目の前にいるヤツをぶっ潰してまた追いかければいいだけの事。顧慮するまでもなかった。

「ゲイツ！　あの少年の行動パターンの分析は終わったのかっ！？」

「もう少しだ、兄さん。あと……２０秒！」

こうして、カラカル兄弟は一人の獣から逃走していた。

この逃走は無様なのかもしれない、惨めなのかもしれない。

何がドリームチームなのか。一人の少年の、２０代にも満たない少年のたった一度の奇襲で、そのドリームチームはボロボロだ。現にこうして逃走している始末だ。

だとしても、

（私たちは、負けていない……！）

そう、負けていない。
世界大国の代表である、ドリームチームは負けていない。
早急に殿を務めたワンと合流して再起を――――――――！

とその時――――――。

「……！　ゲイツ下がってるんだ……」

「に、兄さん……」

彼らは逃走を停止する。
あともう少しで、人気のある大通りに出てそこから5分足らずで、合流のホテルがあるのにも関わらす、彼らは足を止めた。

がりがり、がりがり。と、何かを引きづる金属音が聞こえる。
しかしそれはただの金属音だ。彼らが足を止める理由にはなりえないし足りない。

彼らが足を止めたのは、謎の金属音のせいではない。――――少年だ。

目の前には悠然と少年が歩いてくる。片手には自動販売機。自動販売機を右の五指にめり込ませて、引きずるようにめり込ませながら、ゲイルとゲイツ目掛けて歩いてくる。

その少年を例えるなら“獣”。ライオン、虎、ワニ、様々な獣よりもずっと“獣”らしい少年。

この獣染みた少年こそ、先ほど彼らを問答無用で襲った少年だ。

「ハハッ、見つけた見つけたぁ」

少年は楽しそうに笑う。

よく見れば、顔には痣や殴られた跡が残っていた。ワンの付けた攻撃の痕ということ。そして、ワンはここにいなく、少年がここにいる。

つまりは――――ワンは敗北したという事なる。

「……少年のデータは？」

「完ぺきだよ。いつでもいける……」

カラカル兄弟の選択肢に逃走はなかった。

目の前に立つ少年が壁として立ち塞がるのなら、それを叩いて壊して先へ進むのみだ――――――。

「この国には、仇討ちというものがあるらしいな？　少年、悪いが君を全力で倒させてもらう」

ゲイルはゆっくりと、両手の拳を軽く握りしめ構える。
それはボクシングの基本姿勢そのもの。これこそが、ゲイルの本来の構えとも言えるのかもしれない。

対して少年は、

「あー、いいよいいよ。何でもいいよ、戦う理由なんざ。アンタは俺の敵で、俺はアンタの敵。戦う理由なんざそれだけで十分」

何も持ってない、空いている方の左手を首に添えて、ゴキと関節を鳴らす。
ゲイルと対照的に、少年は無構え。圧倒的に不利な構えだ。

そんな不利な状態にいるのにも関わらず、少年は笑みを深める。

何もかも楽しむ年相応の笑みから、戦闘という行為のみを愉しむ獣染みた獰猛な笑みへと、変貌する。

「それじゃ、行くぜぇ？　かーくーごーしー、」

少年は、自販機を両手で持ち上げる。
左手右手の五指に食いこませていた自動販売機を大きく振りかぶり、

「ろォォォォォォォ！」

ゲイル目掛けて投げつける。

その弾道は弧を描く綺麗なモノではなく、それは直線状。
暴力染みた速度で、砲弾の如くゲイルに襲いかかる。

先ほどの奇襲といい、少年の攻撃は型破りな攻撃ばかりだ。
だがその攻撃でも、ゲイルは驚くそぶりすら見せない。

ゲイルの体に着弾するや否や、彼は自動販売機目掛けて右手の拳

を振り下ろす。
自動販売機はバギィィィィ！　という音を発しながら、真っ二つにひしゃげてしまった。

――――少年の攻撃は終わらない。

少年の型破りな攻撃は、ゲイルの己の肉体のみで打破する。というパフォーマンスのもと水泡に帰した。
もとより、少年の頭の隅に“後退”という二文字はない。ただ、愚直なまでに前進するのみである。

だからこそ、少年はゲイル目掛けて疾走する。
ゲイルと少年。この二人の間にあった距離はざっと１０メートルほど。それを少年は一気にあと３メートルくらいまで縮めた。

そこに、

「兄さん！　右ストレートが来る確率９９パーセント！　テレフォンパンチだ！」

ゲイツの声が聞こえる。
これこそが、カラカル兄弟の戦術。ゲイツがコンピュータで相手の手の内を看破し指示を出し、ゲイルがその支持を元に行動する。
兄のゲイルの超人的な肉体を弟のゲイツが補佐をする。

ゲイルの耳に聞こえたように、少年の耳にも入ったであろう声。
だというのに、少年は疾走を止めない。
表情も、何故分かった？　といった顔ではない。アレは、止めれるのなら止めてみろ。とった表情だ。

そしてついに、両者の距離は腕を伸ばせば届く距離へとなる。

そして、ゲイツの言う通り。
少年は右手の拳をゲイルの顔面目掛けて、突き刺した。そこには容赦も躊躇いもない。

その攻撃も、ゲイルには効かなかった。
彼は顔を少しずらして、その攻撃をかわす。正にそれは紙一重。
少年の攻撃が予想よりも早かったのではない。ゲイルが紙一重を狙ってかわしたのだ。

そうして、少年の腕が伸びきったのを確認すると、ゲイルは左フックを被せるようにして、少年の顔面目掛けて振り下ろす。
ボクシングで言うところの、クロスカウンターの要領だ。

打ち合わせしたかのように、カウンターが綺麗に決まった。
世間ではカウンターの威力は2倍とも言われている。だが、ゲイルは超人的肉体の持ち主だ。その威力は4倍にも6倍にも跳ね上が

る。威力が計り知れない。

現に、少年はそのまま後ろへと吹き飛ばされる。
そこに少年の隙は生まれた。

戦いに勝機があるとしたら今だ。ここで追撃した方が、一気に勝率が高くなる。いちいち計算せずとも、武道家なら分かる事だ。

だが、ゲイルは――――退いた。
後ろに飛び退くが如く、退いた。

「え、兄さん……？」

困惑する弟の声が聞こえる。
データを重視する弟にとって、今の兄の取った行動は愚策の愚策。
勝機を逃したと映ったのだろう。

それ以上に困惑するのは、ゲイルの方だ。
不可解。少年を殴った時の不可解な感触。拳が痺れる……あの感触。

（まるで、鉄を……いや、鉄以上の硬い物を殴ったかのような……）

超人的な肉体を持つゲイルにとって、これは初めてな体験だった。
今だかつて、己の拳が痺れるといった事など皆無だったのだ。

今のカウンターも完ぺきに決まっていた。
だというのに、少年は後ろに吹き飛ばされはしたが、体勢を立て直しその場に超然と佇んでいる。

意識が朦朧としても、おかしくない筈なのに、なんともない。

「あー、くそっ。口切った」

少年の口内から勢いよく吐き出される赤い液体。それは血。
あの見事なカウンターが決まったにも関わらず、負った傷は口内を切ったのみ。

規則外。
あまりにも少年は規則外であった。

「コンピューターで予測して戦う、か。そんなヤツとなんて戦った事無かったけど、」

少年は言葉を区切る。
その口元には笑み。

「案外面白いもんだな。こっちの動きが丸分かりなのはアレだけどよ」

少年は充実していた。

最初カラカル兄弟の戦い方を聞いて、彼は釈然としていなかった。コンピューターで予測して敵と戦う。そんな戦法の何が面白いのか、と。彼はそう思っていた。

だが、相対してその考えは変わった。
面白い。こっちの動きを完ぺきに予測している。さらには、戦う係のゲイルの個の力も十分にある。
この完ぺきな戦法をどうやって、崩そうと考えただけで、少年の気分が高騰する。

初手は完ぺきにしてやられた。それこそ完膚なきまでに。
だからといって、最後までやられるかと言ったらそんな訳がない。
最後はカラカル兄弟を出し抜いて、自分が勝つ。

彼は実感していた。
カラカル兄弟を出し抜いたその時こそ、自分はまた一歩“頂点”へと歩を進めた瞬間であると。

だからこそ、

「もう少し付き合ってもらうぜ……」

彼は愚直なまでに、進み続ける――――――――！

そうして、両者の距離は１０メートル程。先ほど対峙していた時のように、巻き戻したかのような状態だった。

ただ変更している点と言えば、イルの左拳が痺れ、少年の口内が切れてしまった。といった、二点のみ。

――――どちらも動かない。

ゲイルは先ほどの不可解な感触に、動けずにいる。

生まれてこの数十年間、味わった事の無い不可解なモノを感じさせた得体の知れないモノを目の前にしているため。必要以上に、彼は少年を警戒していた。

だとすれば、先に動くのは少年だ。

「行くぜェェェェェ！」

少年の体が弾ける。

この距離なら数秒ともたたずに、少年ならばゲイルに接近しうる。

それは、初手の攻防で分かっている事だ。

――――否。

少年は先ほどよりも疾い疾走を以て、接近する。

先ほどよりも低く尚低く。

先ほどよりも疾く尚疾く。

獣染みた速度を以て、彼は疾走する。

「兄さん！　掴みに来る確率９０パーセントだ！」

ゲイツの言うとおり、少年は左手の五指を大きく広げている。

９０パーセントなんてことはない。彼がゲイルを掴もうとしている確率は“１００パーセント”だ。

弟の言葉に、ゲイルは目の前の戦いに集中するべく、再び本来の構えを取る。

警戒をしてもいいが、戦闘で敵を前にして委縮するなど本来ならばやってはならない事だ。

ゲイルは、少年の魔手から逃れるべく、片足を半歩下げてかわす。

その手が伸びきったところを、少年の顎へと右手を振り上げる。

言ってしまえばショートアッパー。

それなす術もなく、少年は顔を上げる。

今度は逃さなかった。

ゲイルは顎を攻撃するや、今度は腹部に左拳を見まう。

上下のコンビネーション。

「がっ……！」

少年はくの字に体を折った。さらに、苦しそうに息も吐く。

これが、少年の隙。

その絶好の隙を逃す訳がなく、ゲイルは渾身の右ストレートを少年の顔面へと突き刺した。

（手応えは……十分……！）

いや、十二分すぎるくらいだ。

本気の右ストレート。今だかつて、これほど本気で放つ事が無かったというくらい、綺麗に鮮やかに決まった。

そのまま少年は後方へと吹き飛ぶ。ゲイルはそう確信していた。

だが、

「ガ――――――ァアアアァァ！」

後ろに流れていた体を一気に戻し、少年はゲイルへと襲いかかる。

右手の五指を大きく広げ、切り裂くようにして――――――。

「ぐッ！」

その魔手はゲイルの左腕の肉を抉り、鮮血が飛び散った。

だが、その攻撃は大振り。

体全体を使った、大振りだ。そのような攻撃をした後に、体勢を立て直せる道理もない。

ゲイルは右手の拳を握りしめる。

この男に、データなど使えない。使えるカテゴリーに属していない。現に、本来ならば先ほどで終わっているにも関わらず、こうし

て反撃している。
この少年は、間違いなく規則外だ。

故に、全ての力を少年にぶつける――――――！
拳を硬く握りしめ、少年の顔面へと――――――！

それを見て、少年は、笑っていた。
それを待っていたというかのような、全力で攻撃するのを待っていたかのような。
ゲイルは気付くが、もはや拳は放たれた。戻す事などできない。

「フッ、ガァァ！」

気合い。
少年はゲイルの拳を自らの額で受け止める。
その瞬間。

ばぎんっと。
彼の拳が砕けた。

「――――――――――――！？」

ゲイルが悲鳴を発する前に、

「ハッハッハぁ！　オラァァァァ！」

少年は彼の右腕をつかみ、そのまま真横の壁へと叩きつけるようにして、投げつけた。

その状態で、受け身を取れる筈もなく。ゲイルは壁へとめり込んだ。

「ハッ、まだまだァ！」

少年はそこから一息に、後方へと跳ぶ。

距離は１５メートル程。

そこで、少年は力を溜めるかのような身を沈める。

その様子は獣の臨戦態勢そのもの。後退という選択肢など無い。

敵を完ぺきに蹂躙するための体勢。

そして少年はゆっくりとした動作で、両手の五指を広げて手首へと合わせ、

「世界樹（ドゥラスロール）を食す牡鹿ゥゥゥ！！」

ゲイルへと、牡鹿の雄々しい角が襲いかかる――――――！

壁にめり込み、身動きが取れないゲイルには、防御態勢など取れる訳がない。

少年の五指の指が、ゲイルの腹部へと突き刺さった。

少年のこの、最高の一撃が勝敗を別った。

「……少年」

「何だよ？」

ゲイルが静かに、尋ねる。

「なぜ君は、私の攻撃を全て受けたにも関わらず、平然としているんだ？」

「アンタって頭いいくせに、そんなことも分からないのか？　単純に俺の体は硬いんだよ」

少年は、自慢げにに語るのでもなく、ただ、当り前とでもいうかのよう口ぶりで話す。

単純な話だった。

少年は硬い。だからこそ、自分の拳は痺れたのだ。だからこそ、拳が砕けたのだ。

少年は、最も、硬いのだ――――。

「なるほど。最硬だな……」

「あ？　何か言った？」

「いいや。……そうだ。最後に一つ聞いてもいいか？」

「いいぜ。何だよ？」

「君の名前は？」

「渡辺豪」

「ゴウ・ワタナベか……。いい経験をさせてもらった。楽しかったよ」

少年――――渡辺豪は、笑う。

その笑みは、先ほど浮かべていた獣染みた笑みではなく、年相応の子供の笑みであった。

「おう、俺も楽しかった。またやろうな――――」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「アンタ少し、先の事を考えなよ」

いきなりそう言ってきたのは、板垣亜巳だ。
しかも、若干顔は少し呆れ顔だ。

あれから、豪はアメリカチームを撃退した後、板垣亜巳と合流し現在に至るという事だ。
ちなみに、板垣天使と板垣竜兵は別の場所で行動を共にしているため、今ここにはいない。

「アミ姉、いきなり何だよ?」

「何だよじゃないよ。アメリカのチームに喧嘩売るなんて……。どう考えてもアンタの方が分が悪いだろっ！」

「でも、何とかなったじゃん」

「アンタは……。脳味噌まで獣になっちまったのかい？」

亜巳はそう言い放つと、一人で歩きだす。

彼女が豪と行動を共にしている理由は、彼女たちの同士であるマロードにそう指示を出されているからだ。

豪の暴走をなるべく抑えるように、と。

だが実際問題。

こんな獣の手綱など握れるはずもない。

人間を調教するのならお手の物であるのだが、獣は専門外だ。……いや、やろうと思えばやれるのかもしれないが。

そんな事を考えて、亜巳は歩を進める。

ふと、背後の気配が消えたので、後ろを振り返る。

――――豪が立ち止まっていた。

亜巳はため息を吐くと、つかつかと豪に足早に近づく。

「……何してんだぃ？」

「わからねぇ」

「分からない？　自分の事だろ？」

「いや、違う。どうしてアミ姉があんな事を言ったのか、分からねぇんだ」

亜巳は目を丸くする。

豪が何を言っているのか、分からなかったからだ。

豪は続ける。

「だってよ。先の事を考えても仕方ないだろ？　無謀でもそこに“頂点”の道があるんだ。険しいかとか登れるかとか関係ない。ただ登る。それが最強の近道だからさ」

それを聞いて、亜巳は理解した。自分と渡辺豪は何もかも違う。

自分はもっと他者をいたぶるために先の事を考えて行動する。

負けたら、いたぶれないからだ。故に、相手を見て行動する。

だが渡辺豪は違う。勝とうが負けようが関係ないのだ。最強になる条件に負けてはならない、なんて条件はない。
だからこそ、彼は無謀なまでに挑戦する。強者に牙を向く。その罵を以て噛み砕く。最強になるために。これが、近道だと信じているから。

その事実を知って、亜巳はため息を吐いた。
そして、

「好きにしたらいいさ」

「え、マジ？！」

「あぁ。ただし、目立った行動はするんじゃないよ？」

「おうよ！　んじゃ、言って来るぜっ！」

そいうと、豪は猛ダッシュで走り出した。そうして、人ごみに消える。

その様子を見て、亜巳はどうしようもない獣だ。と思い空を眺めて、

「それじゃ、私も仕事しようかねェ。確か、風間ファミリーの力量を調べろだったっけ？」

そして、板垣亜巳は歩き出す。

顔にはサディスティックな笑みを張りつかせ、唇を舌で怪しく舐めながら――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

秘密結社ウルクという組織がいた。
連中がいるのは、とあるビルの屋上。
風が勢いよく吹いており、肌に突き刺さるかのような感触。

「いや～、いいな～いいな～。彼は実によいな～」

双眼鏡を片手に、メガネをかけて白いスーツに身を包んだ肥満体形の男性がそう声を上げた。

その表情はとても嬉しそうに、まるで新しいおもちゃを買ってもらうかのような子供のような笑顔を浮かべていた。

そこにいるのは、彼だけではない。
メガネをかけた男性の後ろには、彼とは対照的に黒いスーツに身を包み、口をマスクで抑えている。

もう一人は、

「でもさーショーグン。アイツ、盟主“様”から消せって命令じゃなかったっけ？」

“様”の部分を強調した少年。いや、はたして彼は少年と言えるのだろうか。
服装は、上に着物のような長袖の服をきており、下は半ズボン。足には雪駄を穿いている。髪はエメラルド色で肩口から外へと跳ねている髪型。

何よりも、少年を際立たせているのは少年の容姿だ。
あまりにも繊細で、あまりにも端正。一目見れば、少女と間違えてしまうだろう。

ショーグンと呼ばれた男性――――将軍はニヤリ。と、楽しそうにそれこそ、不吉な笑みを浮かべる。

「サード。サード、サード、サード。どうして私が盟主様の言う事を聞かないとならないんだ？」

サードとは例の中性的な少年の事を言っているのだろう。

秘密結社ウルク。
将軍という人物が盟主の命令を無視しているあたり、どうやら一枚岩の組織ではないようだ。

将軍は両手を広げて話を続ける。

「彼は私の部下にすると決めた。今決めた。だから殺さない。絶対殺させない」

「でもさ、アイツより川神百代を部下にした方がいいんじゃないの？」

「彼女はいらん。我が強い」

歯に着せぬ物言いに、サードは思わず苦笑いを浮かべる。

それから両肩を竦めて、

「まぁ、アレだよね。いざとなれば、ショーグンが完璧な兵士を≪作れば≫いいんだもんね？」

「サード。私は完璧という言葉が何よりも嫌いだ。これは嫌悪の類だよ」

みしみしみしみし。と、将軍が持っている双眼鏡から悲鳴があが

る。

ここまで将軍が怒りを曝け出しているのは、何時振りだろうか。

いや、恐らく見た事がない。

そこまで、彼は完璧という単語を嫌悪しているのだろうか。

「だってそうだろう？　“完璧”ということは、それ以降の向上がない。それは生物として死んでいるのも同然だ。人間とは、完璧になりたいからこそ抗う素晴らしい生き物だよ。だが言ってしまえば、それしかない。唯一の美点を無くすなんて……。馬鹿馬鹿しいと思わないかい？」

だからこそ、と将軍は言葉を区切り、

「だからこそ、私は彼を――――渡辺豪を求めるんだ。彼は素晴らしい……。頂点に立とうと足掻いている。あれこそが、人間だ――――！　人間であるべき姿ッ！　素晴らしい、本当に素晴らしい！　彼は獣なんかじゃない、人間だよ！　純粋で天然な人間だっ！」

目を見開き、狂熱な笑みを浮かべる。

もはやそれは狂気。狂おしいまでに人間への想いでもあった。

サードはそんな将軍を見て、神妙そうな顔で口を開く。

「喜んでいるのは良いんだけどさ。このままだと盟主“様”に殺されるよ？　あのワタナベゴウとかいうのは異分子だ。本来なら僕たちと同じ“この世界には存在しない人間”。アイツが存在すると、≪あのお方≫の復活に影響が出かねないらしいじゃない？　どうするのさショーグン」

「フム、盟主様が渡辺豪を殺しかねないか……」

口元を片手で覆い隠して考え込む。

その将軍の様子を見て、サードは両手を頭の後ろに組み、してやったりとほくそ笑う。

現にサードの言っていた事は本当なのだろう。

だからこそ、渡辺豪の抹殺命令が出ていたのだ。盟主から将軍への命令。

どうやらこのサードという人物。人の困った顔を見るのが大好きのようだ。

考えがまとまったのか、将軍は晴れやかな笑顔を浮かべる。

サードは思わず、この性格破綻者が何を言い出すのか期待していた。

将軍は口を開く。

「だったら、盟主様を殺そう」

その答えは、サードすら予想だにしない答え。

「ちょっとちょっと。正気かい？　いくらアンタでも、盟主様には勝てないって」

「あぁ、私は正気だ。私は、私が気に入ったモノを壊されるのが何よりも嫌いなんだ。盟主様が壊すというのなら、私は盟主様を殺そう」

それに。と、将軍は言葉を区切る

「ワタナベゴウという異分子が１つ程度であったから波状する計画は、最初から立てない方がいいさ」

「ふーん。まァいいけどね別に。将軍が死ぬことは確実だし。だって盟主様の命令に背いちゃったわけだし」

「私は死なないとも。殺されない――――理由がある」

そう言うと、将軍は双眼鏡をビルの上から放り投げる。
後ろに立っていたマスクを付けた男に向きなおって。

「さて、行こうかセカンド。サード」

「……」

マスクの男――――セカンドは頷く。

「言っておくけど、ボクは計画に賛成した訳じゃない。誰があんなクソ野郎を認めるか」

サードはぶつくさ文句を言う。

「それじゃ、サード初めてくれ」

「はいはい。どこ行くんだっけ？」

「釈迦堂刑部のところだ。彼がどこまでやるのかテスト、と言ったところかな？」

将軍がそう言うと、彼らは――――――消えた。

文字通り、忽然と消えたのだ――――――。

第３６話　獣道、ウルクの暗躍（後書き）

みなさん、おはこんばんちは！　兵隊でございます！
お久しぶりでございます、兵隊でございます！

誰も待っていないであろう思いますが、恥を忍んで戻ってまいりました……！
どうか皆さん、これからよろしくお願い申し上げます……！
色々ありましたが、これからも頑張らせて頂きます！

久しぶりの投稿なので、不安な点は多だありますが、楽しんでいただければ幸いであります。

最後に、この物語の主人公は霧夜王貴であって、渡辺豪クンではないので足らからずｗ

それでは、ご意見ご感想をおまちしております。お気軽にかきこんでやってくださいませ！

ＫＯＳ　チームステータス表（前書き）

※近いうちに、ステータス表を挿絵で投稿しようと思いますので、よろしくお願いします。

ＫＯＳ　チームステータス表

※ＥＸ、Ａ＋、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅの順番のランク

チームワーク：チームとしての絆の強さ。高ければ高いほど連携が取れる

総合攻撃力：チームとしての攻撃力。実力があるやつがいれば高いといったモノではない。

拠点防御力：拠点としている場所の防御力。

戦略力：策を考えられる知恵があるか。

経済力：チームを総合しての財力。

潜在能力：チームとしての潜在能力。

総理チーム

メンバー：総理、不死川心、黛由紀江、霧夜王貴

チームワーク　Ｄ

総合攻撃力　Ｃ

拠点防御力　Ａ

戦略力　Ａ＋

経済力　Ｂ

潜在能力　Ａ

総合評価

日本を背負う総理と女子高生２名、男子高校生１名と異端のチーム。

霧夜王貴の存在が影響してか、チームワークがＤにまで下がって

しまう。もし仮に、王貴を抜きにして考えたらBにまで跳ね上がる。
武道四天王クラスの由紀江。川神学園最凶と名高い王貴がいるにも関わらうず総合攻撃力が低いのは、総理、心の存在があるからだろう。

風間ファミリー

メンバー：風間翔一、直江大和、島津岳人、師岡卓也
チームワーク　A＋
総合攻撃力　C
拠点防御力　B
戦略力　A
経済力　C
潜在能力　A＋

総合評価
幼い頃からの友達の四人組。
だからか、チームワークは今大会でトップクラス。
総合攻撃力と経済力が低いのが否めないが、それを策で覆せるであろう。
潜在能力も高いことから、油断できないチームである。

女性格闘家チーム

メンバー：川神一子、椎名京、クッキー、鉄乙女

チームワーク　C
総合攻撃力　A
拠点防御力　B
戦略力　C
経済力　C
潜在能力　B

総合評価

風間ファミリー＋一子の師匠である乙女のチーム構成。
本来なら乙女ではなく岳人の母親である麗子がメンバーに入っていたのだが、ぎっくり腰で棄権。変わりに乙女が入った。
そのためか、チームワークは下がったが総合攻撃力が跳ね上がった。
弟子である一子と師匠である乙女が正面から堂々と、といった戦法を取るからか戦略力が並。
防御でなく、攻撃に特化したチームとも言えるだろう。

軍人チーム

メンバー：クリスティアーネ・フリードリヒ、フランク・フリードリヒ、マルギッテ・エーベルバッハ

小島梅子

チームワーク　B
総合攻撃力　B
拠点防御力　A
戦略力　B
経済力　B
潜在能力　C

総合評価

フリードリヒ親子とクリスの担任である梅子、そしてマルギッテで構成されたチーム。

攻撃力、防御力、戦略力とバランスのいいチーム構成となっている。

中でも、フランクの軍隊を使った攻撃は一たまりもない。

今はクリス以外今大会に参加は不能となっている。

ドリームチーム

メンバー：カラカル・ゲイル、カラカル・ゲイツ、ワン、ツー

チームワーク	C
総合攻撃力	A
拠点防御力	A
戦略力	A
経済力	A
潜在能力	D

総合評価

アメリカからドリームチームと名高いメンバー構成。

ステータスもその名に恥じないモノになっている。チームワーク、潜在能力以外トップクラス。

ワンとツーのコンビネーション攻撃、ゲイルとゲイツのコンピューター戦法と隙がない。

アンダーグランドチーム

メンバー：板垣亜巳、板垣竜兵、板垣天使、渡辺豪

チームワーク	D
総合攻撃力	A＋
拠点防御力	―
戦略力	D
経済力	C
潜在能力	A＋

総合評価

親不孝通りを縄張りとしているチーム。

各々が勝手に行動するためか、チームワークは最低ランク。また、拠点としている場所も存在しないためかランクがない。

だが、特化している総合攻撃力は目を見張るものがある。防御を捨て、攻撃に最大限特化しているこのチームは、今大会のダークホースとなるであろう。

また、このチームがＫＯＳに参加しているのは、目的があっての事だがはたして。

野党チーム

メンバー：蘇我、サイコクッキー1号、サイコクッキー2号、釈迦堂刑部

チームワーク	E
総合攻撃力	A＋
拠点防御力	A
戦略力	B
経済力	B
潜在能力	B

総合評価

野党の蘇我が日本の技術を結集させたサイコクッキーシリーズと金で雇った釈迦堂を引きつれて参戦。

利害一致で組んでいる関係だからか、チームワークが低い。

だが、それ以外のステータスは高い物とモノと言える。

このチームと、総理チームがぶつかるのは必然か。

KOS　チームステータス表（後書き）

ガタガタになる……
どうして……？

第３７話　心にとっての霧夜王貴（前書き）

～前回のあらすじ～

王貴「心がマミったｚ（ｒｙ」

心「そのネタはもう古いわバカめ！」

第37話　心にとっての霧夜王貴

七浜公園は悲惨な光景だった。
豊かな緑で生い茂っていた木々は全て薙ぎ倒され、子供たちが伸び伸びと遊ぶ為に作られた遊具も悉くを破壊しつくされていた。

数十分前まであった豊かで外観が綺麗だった公園は、今や何かの災害の類が通過したかのような悲惨な状態に変貌を遂げていた。

いいや、“悲惨”なんて生易しい代物ではない。
これはもはや“戦場”の類。
ところかしこに、絨毯爆撃でもあったかのように、地面がひっくり返っていたり、クレーターが出来ていた。

その災害を人力で引き起こしたであろう人物。
川神学園最凶、霧夜王貴はもうすでにこの場にはいない。

木行の風の力を使い、どこかへと飛び去ってしまった。
彼がどこへ向かったか、なにを考えているのか。それは彼以外にしか分からない。

不死川心、黛由紀江、総理は問題のあった七浜公園にいた。

心には“探し人”がいた。そして、その“探し人”も何とか見つける事が出来た。
だが問題のその“探し人”がどこかへ飛んで行ってしまったのだ。
その探し人こそ王貴。

「どうじゃ黛。あの馬鹿者は見つかりそうか？」

腕を組みながら、心は不機嫌そうに由紀江に問いかけた。
その問いに対し、由紀江は空を見上げる。その方向は、王貴が飛び去ったであろう場所だ。その場所の先には、七浜市のオフィス街があるだろう。

由紀江は首を横にやんわりと振って、

「すみません、不死川さん。見失っちゃいました……」

由紀江は優秀な武道家で、気を探知することにも長けている人物だ。彼女が探知できる気の距離はざっと2キロメートル。大抵の人物なら見つける事が出来るであろう距離だ。
だというのに、王貴が見つけられないという。
見つける事が出来ないのは、由紀江の力不足といった問題ではな

い。

これは王貴が意図的に姿を眩ませている事しか、考えられない行為だ。

その事実に、総理は難しそうに顔をしかめる。

「いいやぁ、これは由紀江ちゃんのせいじゃねぇよ。……不死川の嬢ちゃんよぉ、どうやらあの坊主はお前さんとは会いたくねぇみてぇだぜ？」

「ふん、お前に言われんでもわかっておるのじゃ！」

心が思い出すのは、先ほどここで王貴に言われた言葉。

――――もう、王（オレ）に構うな――――

この言葉だ。

どういう意図で、彼がそういったのか。何を思って、こんな発言したのか。心には分からなかった。

心が気に入らないなら、容赦なく叩きつぶせばいい。心が鬱陶しいのなら、慈悲もなく捻りつぶせばいい。

王貴にはそれが出来る力がある。心が仮に抵抗したとしても、そ

んなものなど羽虫のようなものだ。彼にとって歯牙にもかけない戦力。霧夜王貴にとって、不死川心がそれこそ死ぬ気で抵抗したとしても、何ら支障なく戦える。――――そして、圧倒的な力でもって殲滅できるのだ。

だというのに、彼はそれをしなかった。

“殲滅”という手段でなく、“忠告”という手段を取ったのだ。

（そうじゃ……。考えてみればおかしい。なぜ此方を手にかけなかった……？）

辺りを見回す。

その悲惨な光景は変わることなく、地獄が作りだされていた。

この地獄を作りだしたのが霧夜王貴だというのなら、不死川心は地獄の創造者と対峙していた事になる。

心にそんなヤツと戦力が拮抗するかといえば答えはＮＯだ。対抗できる筈がない。

何せ、不死川心は戦争と対抗できないからだ。

（ヤツは、此方にだけは手を出さなかった。アイツには手を出したのにも関わらずじゃ……）

彼女はそう考えると、ある方向に視線を向ける。
そこには、クリスティアーネ・フリードヒリが立っていた。
立っている人影は彼女唯一人。チームメイトであるフランク・フリードリヒもマルギッテ・エーベルバッハも小島梅子もいない。恐らく治療のために、川神院へと配送されたのだろう。

クリスの瞳に絶望の色は見えなかった。
あれは絶望といった負の感情の類ではない。――――アレは、決意。

そして、その視線の先には王貴が飛び立っていたであろう方向。
七浜ミナトミライの方角。

あの様子を見ると、まだ王貴の事を諦めていないらしい。

（あの馬鹿め……。何が『もう王（オレ）に構うな』じゃ。構うに決まっておろうが……！）

心は拳を思いっきり握り締める。

そうだ。放っておくわけにはいかない。あんな強力でめんどくさいことこの上ないライバルができたのだ。ここで退く訳にはいかな

い。

そして何より、これは不死川心と霧夜王貴の過去に交えた“契約”。

恐らく、彼の姉である霧夜エリカ。幼馴染である九鬼三兄弟も知り得ない事だ。

彼女は思い出す。

『心……』

あの頃の状況はよく覚えている。

昔、大好きだった祖母が死んで、悲しみに明け暮れていた頃だ。

『心……』

風の日も、雨の日も、雪の日も。

今の“霧夜王貴”ではない『霧夜王貴が』いつもそばに居た。
彼女を励ますかのように、彼女を悲しませないように。いつも、
そばにいた。

ある時、少年はこう言う。

『心。僕と、契約をしよう』

その時の言葉を彼女はよく覚えている。

『辛いとき、悲しいとき、独りでいるとき、僕は君のそばにいるから。だから君も、僕がそんな風に見えたら、そばにいて欲しい』

恐らく、少年は必死だった。
今でも思い出す、少年の泣きそうな顔。
少年の目から見た心はどこかに行ってしまいそうで、すぐに死んでしまいそうだったから、こんな言葉を言ったのだろう。

現に、少年は“契約”の内容を口にした瞬間。わんわんと泣きはじめた。

年相応とはいえ情けなく、とてもかっこいいとはいえない姿だった。

だが、心にとってその言葉は救いとなる。

この“契約”があったからこそ、自分は独りではないと分かる。

この“契約”があったからこそ、――――変わってしまった霧夜王貴を好きでい続ける事が出来た。

この“契約”があったからこそ、今の彼女がここにいる。

だからこそ、王貴を助けたいのだ。

昔、彼女が彼に救われたように――――。

「何だ、元気そうじゃねぇか」

心に声をかける人物が一人。どうやら男性のようだ。

振り返る。

心に声をかけた男性。それは総理だった。

総理は嬉しそうな表情で、

「俺ぁてっきり、あの坊主に拒絶紛いの言葉を言われたもんだから、落ち込んでると思ったぜ？」

「ふん、あの程度で高貴なる此方が落ち込む筈ないのじゃ」

嘘だ。

実際の話、心は落ち込みかけた。

あの“契約”がなければ落ち込んでいただろう。

心はこの話は終わりだ。と言わんばかりに、総理から視線を外しクリスの方へと歩みよる。胸を張り、自信満々に堂々と。

クリスも心気配を察知したのか、ミナトミライがある方向から視線を外し、体と視線を心へと向ける。

「クリス。お前はまだ、王貴を説得する気でいるのか？」

心の問いに、

「あぁ、アイツの性根を叩き直すのは自分だからな」

クリスは少し微笑みながら答える。その微笑みは、出来の悪い教え子に微笑むかのような表情。
勿論、クリス本人には悪びれなど微塵もない。悪意なの無いのだ。悪びれなどある筈もない

だというのに――――、

「い、いや。お前は帰った方がいいのじゃ」

心は口元を引くつかせ、腕を組みながら発言する。
何とか笑顔で対処しようとしている様子なのだが、無駄に終わっている。
これが霧夜エリカならば、完璧な作り笑いを作りだすのだが、生憎彼女は不死川心だ。霧夜エリカではない。なんちゃって作り笑いなど、無駄に終わっている。

しかもだ。正直に言えば、彼女は今機嫌が悪い。

それは至極簡単な理由だ。
心にとって、クリスは恋敵に等しい存在だからだ。
クリスが王貴に明確な好意を抱いている、といった発言を聞いたことはない。だが、心にはわかる。彼女の目は恋する女の目だ。―

――自分と同じ目だ。

「“王貴”は此方が何とかする。お前は棄権した方がよいのではないか？」

“王貴”という部分を無駄に強調する。

少し、アレなことに定評のあるクリスも心が言わんとしている意図が分かったのだろう。

ニッコリ１００％。無駄に綺麗な笑みを浮かべて、

「いいや。“アイツ”は自分が何とかする。不死川は総理の優勝だけを考えればいいぞ？」

「いいや、俺の目的は二の次に――――――」

「総理は黙っててくれ」

「……」

総理が口を挟もうとした瞬間。

クリスが遮る。

日本の将来を背負う男が、一介の女子高生に命令される。
なんとも言えない光景だ。

二人の口論は、益々ヒートアップして行く。

「大体、此方は“あのバカ”をが小さい頃から知っているのじゃ！」

「知っているから何だ！」

「知っているからこそ、“あのバカ”が何を考えているのかわかるのじゃ！　故に！　“あのバカ”の事は此方に任せるのじゃ！」

心は得意げに腕を組みながら笑う。視線はどことなく見下すような形で。ちなみに、今の王貴が何を思っているのか心には皆目見当が付いていない。
疑うべくもない。ただ単純な強がりである。

それに対し、歯がゆい気持ちでいっぱいなのか、クリスは悔しさに身を震わせる。

そうしてすぐに何かを思いついたのか、感情を悔しさから嬉しさに切り替える。

彼女は笑顔で、

「それを言うなら、自分は風紀委員だ！」

「だから何じゃっ！」

「フフン、まだわからないのか？　自分が風紀委員でアイツは生徒会長。つまり――――――！

クリスは一端そこで溜めて、心を勢いよく指さす。

「――――アイツと接する時間はお前より多い！」

「――――――――ッ！？　にょ、にょわーーーっ！　しまったのじゃぁ！」

その瞬間。

心の背後に稲妻のようなエフェクトが現れる。そして顔を驚愕の色に染め上げる。

攻守逆転。

クリスが得意げに腕組みしながら笑い、心が悔しさに身を震わせる。
先ほどと立場が逆転した。そっくりそのまま。ただ違う点を言えば、彼女たちの動作が入れ替わっただけ。
その様子を見て、由紀江が慌てて仲裁に入ろうとする。
「お、お二人とも落ち着いて下しあ――――」
「黛！　お前はどっちの味方なのじゃ！」
「まゆっち！　勿論、自分の味方だよな！」
「ふぇぇぇぇぇ！？！？」
「ど、どうするまゆっち！？　どっちに味方してもデッドオアダイだぜー！」
その様子を総理はじっと観察していた。
彼の眼に映るのは、再び喧嘩をする心とクリス。その仲裁に入ろうとするも相手にされず、ストラップと相談し始めた由紀江。
本当に個性的な奴らだ。と、彼は思う。

それと同時に感じるのは、負い目だ。総理は、心と由紀江に負い目を感じていた。

そもそも彼女たちがこのＫＯＳに出場する理由は、総理の願いがあったからだ。

その願いのせいで、由紀江の父を傷つけてしまった。その願いのせいで、彼女たちをＫＯＳに出場させてしまった。

それもこれも、自分のわがままのせいで。

だからこそ、彼は彼女たちの要望を叶えたいと思う。

彼女たちの要望。つまりは、霧夜王貴の救出。

総理が一目見た限り、アレを助け出すのは容易ではないと感じた。

彼の眼は自分以外の生き物を認めないかのような眼。まるで、物を見るかのような眼だった。何百人と人を見てきた総理なら分かる。アレはそういった類の眼。

だがその考えも、心が間に入った時に変わった。

（あの坊主は不死川の譲ちゃんが間に入った瞬間、明らかに動揺していた）

少年は、完全に“堕ちた”訳ではなかったのだ。

どうして不死川心の存在で、霧夜王貴が動揺したのかは定かではない。

ただ言える事は、

（あの嬢ちゃんが説得し続ければ、坊主を助け出せるかもしれねェっ事だけだ）

彼はそう結論付けると、空を見上げる。

そこには、青い青い空が広がっていた。

それから、視線を心達へと戻す。

そこには、同じ光景。

喧嘩をする心とクリス。その仲裁に入ろうとするも相手にされず、ストラップと相談し始めた由紀江。

彼はため息を吐いてから、

「平和だねー」

と、苦笑いを浮かべるのだった――――――――――。

第37話　心にとっての霧夜王貴（後書き）

皆さんおはこんばんちワニ！
兵隊です！

徐々に明らかになっていく貧弱王の過去！
はい！　どうでもいいですね！ｗ

次回はようやく主人公（笑）が登場します！ｗ

第３８話　霧夜の思案、暗躍の将軍（前書き）

～前回のあらすじ～

心「契約なう」

第３８話　霧夜の思案、暗躍の将軍

霧夜王貴は七浜にあるビル街である、ミナトミライで歩みを進めていた。

場所は広場といっても良い場所である。恐らく、この場所が待ち合わせになるであろう場所だ。

ミナトミライは七浜ランドマークタワーなどいった高層ビルが立ち並んでいるが、ななはまコスモワールド・コスモクロック２１娯楽施設がある。

だからだろうか。広場には、多くのカップルと友達同士で遊びに行く者。多くの若者がその場にいた。

その中にいる王貴はやはり異彩の雰囲気を醸し出していた。

少年のの意識は高層ビルだとか、大勢の他人だとかに向けていなかった。いや、言うのであれば外側に意識を向けておらず、内側に意識を向けていたといった方が正しい。

内側――――自分自身に意識が向いていた。つまりは思案。

思案するのはつい数分前の、七浜公園での出来事だ。

少年は自分を直視した無礼者を残さずまとめて殲滅した。まだ足掻いていた者を痛めつけた。その最中、邪魔してきた娘とそのチームメイトを沈めた。さらに娘は自分を助けたいと言ってきたが歯牙にもかけず殺害しようとした。

ここまでは予定通り。まさに自分らしい対応だったと思う。

問題はその後。今まで正常だった彼の行動に異常がきたす。不死川心の乱入でだ。

（あの瞬間、どうして王（オレ）は心を殺そうとしなかった……）

邪魔してきた娘――――クリスティアーネ・フリードヒリを彼は本気で殺害しようとした。ＫＯＳのルールだとか倫理だとかもはや彼にはどうでもよかった。

王である自分の前に立ち塞がったのだ。殺されても文句など言わせない。彼は本気でそう思っていた。

クリスだけではない。誰であろうと、自分の目の前に立ち塞がる輩は蹴散らし蹂躙する。そう、誰であろうと――――。

だが、心だけは――――手を下せなかった。

いや、心だけではない。
あの乱入の瞬間、殺せない人間が何人いたのか考えたところ心以外に5人いた。
九鬼英雄。九鬼揚羽。九鬼紋白。霧夜エリカ。そして、――――
自分と間逆の考えを持つあの男。

なぜ殺せないというのか？

彼は何人もの人間をその手にかけてきた。それこそ掃いて捨てるほどだ。先ほどだってクリスを本気で殺害しようとしていた。
だというのに、この6人だけどうして殺そうとする気が起きないのか。いや、むしろためらいがある。

もう一度問いかける。
なぜ殺せないというのか。
――――分からない。
分からない分からない分カらない分からなイ分かラナい――――
分カラナイ

（何故だ。何故、王（オレ）はこやつらを殺そうとする気が起きない……！）

この茶番に参加したのだって元の自分へと戻るためだ。
この堕落しきった状態から、以前の孤高の状態へと戻るためだ。

そのためなら手段など問わない。立ち塞がる者は蹂躙する。そして釈迦堂刑部を殺し、以前の孤高の自分へと戻る。
それこそが、王貴がＫＯＳに参加した理由なのだ。

だというのに、また一つ新たな問題が出現した。

王貴は苦い顔になる。
他人を殺せないなんて王貴の人格じゃない。一体どこの歯車が欠けたというのか。

そこで、ふと思う。
――――あの男なら、自分に勝利したあの男なら、この状況をどうしていたのだろうか。

「王（オレ）は、何を考えている……」

奥歯を深く噛み締める。

どうしてここで、あの男が出てくるのだろうか。
あの男がどう動いたとしても、自分には関係の無い事柄だろう。

（何かが足りない……）

そう何かが足りないのだ。

王になるのにあたって、何かが足りない。

問答に問答を重ねる。それはまるで螺旋。答えが見つかるかどうかわからない螺旋。

（一体何が足りないというのだ？　王（オレ）は……何を望んでいる――――）

と。

そこで、彼は思考を中断した。

ガン！　と。

何かが彼を守護する黒い障壁へとぶつかった音がした。それから遅れて、下から甲高い音が落ちる音が聞こえる。

王貴は甲高い音が聞こえた方へと視線を落とす。

足元にはライフル弾の形状らしきものが落ちていた。

そのライフル弾は間違いなく彼の後頭部へと狙われて放たれた一撃。完全に彼の意識の外から放たれた奇襲だ。だというのに彼は防いだ。

王貴は五行の力を用いて、大気を操る事が出来る。そして、その弾丸は大気を切り裂いて直進してくる。

簡単な話だ。彼は大気を用いて索敵する。故に、霧夜王貴に奇襲は無意味。

だが今はそんなことはどうでもいい。

王貴は弾丸が放たれた速度、角度、威力を瞬時に計算し狙撃手がいるであろう場所に視線と体を向ける。その視線の先には高層ビル。距離でいえば２００ｍほど。

休む間もなく第二射が王貴へと放たれる。

しかし、悉くを闇よりも黒い障壁で阻む。今度の狙われた場所は額だ。

その一撃で、完全に狙撃手の場所が索敵される。

（アレか……）

狙撃手を索敵した瞬間――――。

カキン、と。

金属がコンクリートにぶつかった音が、王貴の足元から聞こえてきた。

しかもその音が聞こえてきたのは、一回だけではない。何回も何回も聞こえてくる。

王貴は視線を落とす。

物体があった。

それは王貴も何度も見ている物体。――――手榴弾。

パイナップル型の手榴弾が転がっていた。

しかもそれらは全てピンが抜かれており、いつでも爆発が出来る状態。その数――――１０。

しかし、王貴に取り乱している様子はない。

こんなことは、日常ともいえるくらいあるからだ。

（……無駄な事を）

そう考えると、彼はぼんやりと辺りを見渡す。

アレだけ人ごみで賑わっていた広場が、今は誰もいない。
カップルも家族連れも友達連れも誰もいない。
どうやら、完璧に人払いが済んでいるようだ。

いや１０人ほど広場にいる。
それらはすべて、各々動きやすい恰好で、頭をスッポリと覆う黒色のマスク。目元も黒いゴーグルで隠している。その事から表情は見えない。
さらには、どいつもこいつも腰にはアサルトライフル、ＡＫ－４７の獲物がある

（霧夜に雇われた屑か、王（オレ）に恨みがある屑か……）

王貴の笑みが横に裂ける。

（どちらでも結果は同じだ）

結果は同じなのだ。
自分を狙った屑はどちらでも同じ末路を辿る事になる。つまり―

――――死。

王貴は例の狙撃手がいるであろうビルの屋上へと視線を戻す。
彼は楽しそうに。それは楽しそうに笑いながら。

「――――殺してやる」

呟いた瞬間。
足元に転がっていた手榴弾が炸裂する。
その爆発が新たな爆発を生む。

それはまるで、爆心地の一角。
黒煙が大量に舞い、コンクリートが粉々に砕かれる。
その大量の黒煙の影響で、霧夜王貴の姿が確認できなかった――
――――。

…………………………

……

…………………………

………………

「あーあ、これはヒデェ……」

王貴が視線を向けていたビルの屋上。
そこで一人の男が声を上げた。
彼は双眼鏡を両手に持ち、王貴がいたであろう場所を観察している。

男の足元には、ライフルのスコープを覗きこんでいる少女がいる。
その少女は桃色の髪で長さは肩口に切りそろえている。その頬にはそばかすがある事から、幼い印象が見受けられる。

少女の持つ獲物は、戦車ライフルのデグチャレフＰＴＲＤ１９４１。そしてその腰には拳銃が二丁。

いや、それよりも銃口が長いことから、さらに遠い遠距離の標的を撃てる構造になっていた。

少女の体格から、まったくもって不釣り合いの獲物だ。

少女に油断はない。

標的は間違いなく粉々になったであろう状況でも、寝そべるかのように身を翳めスコープを覗きこんでいる。いつでも銃撃できる状態だ。

「バラバラになっちまったら、賞金とかどうなんだろうな？　確かに殺せば賞金は出るんだろうが、肉片になっちまったら本人確認すら出来やしねェ……おい、レヴィ。聞こえてんのか？」

男の軽口に、彼の足元にいる桃色の頭髪をした少女――――レヴィと呼ばれた少女は、

「油断しないで。貴方は周りの状況確認に専念して。あと、レヴィと呼ばないで」

取り付く島もない。
レヴィは事務的な口調でそう告げる。

本来狙撃というものは、標的を狙う狙撃手。狙撃手を狙撃に専念させる為に、周囲の状況把握や命令伝達、場合によっては接近する敵の排除などを受け持つ観測手。この2名で行動する。
この状況を見るに、少女が狙撃手で男が観測手のようだ。

「へいへい。……横風が吹いてきたな。標準を右へ4クリックぐらい修正しておけ」

「了解」

男の指示通り、少女はスコープ側面についたネジを回し修正する。
男も少女の指示通り、油断なく双眼鏡で標的のいるであろう場所を見つめる。

そうこうしているうちに、黒煙が晴れた。
そこにはクレータが出来ており、正に爆心地が起きた戦場のようだ。

正に予想通り。
だが、そこにはバラバラに引き裂かれた肉片も。赤色のペンキを

ブチ播いたかのような真っ赤に咲いたザクロもない。あるであろうと予想していた物が、無くてはならない物がそこにはない。

「おいおい、どうなって――――――、」

男は慌てた口調でそう言いかけるが、そこから言葉が紡がれることはなく、

「――――――ギ」

紡がれたのは、

「ギャァァァアアアァァァァァッア！！？？」

――――悲鳴。

少女はスコープから男の方へと視線を向ける。

男の腹部に、黒い剣が刺さっていた。
それだけではない。

「ハッ、刺し抉っただけで悲鳴を上げるとは。随分と脆い屑なのだな？」

男の腹部を黒い剣で刺している少年。
それは狂おしいほど黄金で、憎々しいほど金色。そして息の詰まるかのような漆黒。

「ァ」

少年を見ただけで、少女の瞳が揺れる。少女の瞳の瞳孔が開く。
瞳は――――憎悪の色に染め上げられる。

「ァァァアアアアアアア！！！」

絶叫。
少女は狙撃手たる自分の獲物を捨て、腰にある新たな獲物を引き抜く。
両手には2丁の拳銃。

2丁の拳銃の銃口は金色の少年へ。
そのまま迷わず引き金を引いた。

「アアアアアアアアアアアアァァァ！！」

口から恐怖、憤怒、憎悪と様々な感情を吐き出しながらも引き金を引く。
何度も何度も何度も何度も何度も何度も。
集中豪雨的な銃弾の雨が少年へと降り続ける。

そうして銃声が止む。
辺りには硝煙の独特の匂い。空の薬莢が地面に散乱する。

少年は――――無傷。
漆黒に染め上げられた“壁”が銃弾の進軍を阻むかのように立ち塞がっていた。

「貴様が王（オレ）を狙った狙撃手か」

少年は男に刺さっていた漆黒の剣を引き抜く。その引き抜き方は、男の蹴りつけて引き抜くやり方だ。

そして、男の血がついた剣を投げ捨て、また新たな剣を造り始める。その真新しい剣も漆黒。

少年は改めて、桃色の頭髪の少女に視線を向ける。

少女の手首にはＫＯＳ参加者たる腕輪がなかった。という事はつまり、参加者ではない。

「これは確認。お前が霧夜王貴？」

少女の問いに、

「いかにも。何だ、知っていて王（オレ）を狙ったのだと思ったぞ？」

少年は――――王貴は狂気的な笑みで答える。

その反応に少女も笑った。

その笑みは王貴並の狂気。とまではいかないにしても、どこか歪んでいる笑み。

そして笑みから悪鬼の表情に変わり、憎悪で目を染め上げたまま、

「知っている。知っているわよ！　忘れるものか！　貴方が、お前が父の敵！！」

その言葉を聞いても、王貴の表情が変わる事はない。

狂気的な笑みのまま、

「そうか」

と、一言。つまらなそうに呟き、無造作に少女へと近づく。

彼は此処まで、幾多の人間を殺してきた。それこそ掃いて捨てるほどだ。彼に父が殺されたという事は、彼を狙った刺客だったのだろう。

自業自得だ。
他人を不幸にして自分だけ幸せになろうとした罰。殺されても文句は言えないだろう。

そう考えると、王貴の足は止まることなく、少女に近づいていく。
少女も応戦しようと、2丁の拳銃の引き金を引こうとするが無意味の終わる。
弾がないのだ。そこから弾丸が飛び出る訳がない。

そうこうしているうちに、王貴は少女の目の前で足を止める。
右手に持っている漆黒の剣の剣先を少女の胸部へと向けられ、顔を無表情に変える。それは仮面のようで、感情に蓋をしているようで、まったく表情が窺えない。

「貴様がどんな存在であろうが、結末は同じだ。――――では娘よ、ヴァルハラへ向かう旅路の支度は済ませたか？」

王貴はそう言うと、彼の持っていた剣を少女の胸部へと刺す――
――こともなく、一息に後ろへ跳び下がる。

それと同時に、王貴がいた場所に何かが現れる。
それは上から現れた。

王貴は“それ”をよく知っている。
曰く、世界最強。曰く、川神学園最強。曰く、武神。曰く、一騎当千。

その存在が何かを理解すると、王貴は口元を引き裂くかのような笑みへと変える。
それは愉しそうに、愉快そうに。

「川神――百代――――！」

川神院が誇る世界最強が、霧夜王貴の眼前に君臨した――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「釈迦堂君！　総理はまだ見つからないのか！？」

ヒステリックな声を上げたのは蘇我だ。

彼ら、野党チームがいるのは七浜市にある住宅地。どこにでもある住宅地に巨大なロボ２体。成人をとうに超えている男性２名。なんとも奇妙な組み合わせだろう。

「あー、スンマセン。探してるんですが、見つからんのですわ」

と、釈迦堂刑部が適当に発言する。

彼は最初から、総理チームを探していない。
釈迦堂がＫＯＳに出場した理由はただ一つ。霧夜王貴と殺し合う為にほかならない。
言ってしまえば、蘇我の『総理チームの敗北』という依頼もどうでもよいのだ。蘇我と釈迦堂が一緒にチームを組んで参加しているのは、利害一致にほかならない。

釈迦堂は考え始める。

王貴の気は索敵出来た。
だが、余計なヤツがもう一人いる。

（どうして百代がいやがる……。百代の方は知らねェが、坊ちゃんの気の状態は明らかに敵対状態だ。……おいおい、百代のヤツ獲物横取りする気かよ）

そう考えると、釈迦堂は自分の後ろを歩いている蘇我の方へと意識を向ける。

これは予想外。

自分と同じようにチームで行動しているかと思えば、霧夜王貴は単独で行動している。

これでは、総理チームを探そうと王貴と殺し合いが出来ることはないだろう。

（そうなると、チームで行動する理由もなくなっちまうな……。――――消すか？）

このＫＯＳは４人１チームであるが、―人が戦闘不能になっても失格とはならない。

分かりやすく言えば、たとえ一人になっても『蘇我チーム』となれる訳だ。

となると、彼の後ろにいるガラクタと男はいらない。

依頼を遂行出来れば金が手に入る。だがその金よりも、殺し合いがやりたい。釈迦堂刑部はそういう人間だ。

釈迦堂はズボンのポケットに突っこんでいた片手を無造作に出す。

その片手を軽く握ったり、開いたりと簡単な運動をする。何時でもやれる。

釈迦堂は立ち止まる

「む？　どうしたんだね、釈迦堂君」

蘇我は警戒をしている様子もなく近づく。

釈迦堂から見たら、彼はつくづく滑稽だ。釈迦堂を信頼しているのだろうが、彼の本質をまったく見ぬけていない。彼が今から何をしようとしているのかも分かっていない。

釈迦堂はどことなく、童話の赤ずきんを思い出す。

なるほど。オオカミもこんな気持ちだったのか、と。

そうこうしているうちに、釈迦堂と蘇我の距離が縮まる。

釈迦堂が裏拳を蘇我の顔面へと放てる距離まで。

が、

「君達。ちょっといいかな？」

声が聞こえた。
それは背後から。野党チームの背後から聞こえた。

“今まで気づけなかった”。

振り返る。
そこには肥満体形で白いスーツを着たメガネの男。その男とは対照的に黒いスーツで身を固め、口元をマスクで覆っている男。そしてもう一人、中性的な少年とも少女とも呼べる人物が一人。計三人がそこにいた。

奇妙な組み合わせだ。
何を目的として行動しているのか分からない組み合わせ。

「……あ？」

釈迦堂の顔から、一気に表情が消えた。

彼らがどんな目的で話しかけてきたのか。何をしようとしている

のか。
どんな理由であろうが、釈迦堂にとってはどうでもいい。

今重要なのは、釈迦堂ほどの手だれ彼らの接近に、“まったく気がつかなかった”という事。

彼らは文字通り“突然現れた”。

釈迦堂はめんどくさそうに片目を閉じる。
左手はズボンのポケットに、右手だけを出している状態。

彼は右手の手首に気を集中させる。
そうすると、右手の手首に現れたのはリンク状の気弾――リング。釈迦堂刑部の必殺技だ。

それを生成するやいなや、釈迦堂は無造作に腕を振るう。クモの巣を払うかのようなしぐさで、限りなく力を入れずに。

リングは蘇我とサイコクッキー達の合い間を縫って直進し、奇妙な三人組に着弾する。

刹那。
その三人組がいたであろう場所が爆破する。
自然で考えれば、三人組は無事では済まない。

が、

「やれやれ、危ないな。敵と判断するや否や攻撃とは。だがいい反応だよ」

三人組は無傷。
それもあろうことか、元いた場所から真横に移動している。

白いスーツの男がメガネの縁を片手で上げながら続ける。

「サードがいなければ助からなかった。礼を言うよサード」

「何言ってんのさ。心から思って無いくせに。それにアンタなら問題なかったでしょ？」

サードと呼ばれた中性的な人物が皮肉気に笑いながらそう答えた。

どうやら今までの“突然現れるかのような移動術”はこのサードと呼ばれる人物の能力のようだ。と、釈迦堂は分析する。

白いスーツを着た肥満体形の男性が口を開く。
不吉な笑みとともに。

「君が釈迦堂刑部で当ってるかな？」

「何もんだァ？」

ここにきて釈迦堂が口を開く。

「何者……か？　……そうだな、しいと言えば君の協力者だよ」

「協力者だと……？」

釈迦堂は顰める。
この男が何を言っているのか本気で分からなかった。

「そうだ。私たちは君の協力者。霧夜王貴と戦いのだろう？　だったら協力しようじゃないか――――」

だが先ずは、そう言葉を区切る。

「少し、実力を試させてもらおう。サードあとは頼む」

「ハイハイ。あーあ、面倒なことは全部ボクの仕事か。こういうのは一番下っ端のフォースにやらせなよ」

「フォースなら“彼の監視”をしている。そうなれば、だ。この役目はこの中で一番の下っ端である君の役目だろ？」

「チッ、腹の立つデブだ」

「おいおい、デブをバカにするなよ。私（デブ）だって傷つくんだぞ？」

サードは白いスーツを着た男性の戯言を無視して一歩前に出る。

そして不敵な笑みとともに一言。

「それじゃそう言う事だから。――――殺されても文句言わないでよね？」

サードのあまりにも挑戦的な自信。あまりにも不敵な笑み。

それに対して釈迦堂は、

「文句なんざ言わねェよ。それが殺し合いだ。まぁそれはそうと、俺が勝ったらお前のその移動術を教えやがれ」

獰猛な笑みで迎え撃つ――――――――。

第３８話　霧夜の思案、暗躍の将軍（後書き）

みなさんおはこんばんちは！兵隊です！

ようやく、ようやく登場しました貧弱王！
いやー、何か知らないですけどエライ時間がかかった気がしますｗｗ
どうしてなのだろうか……。

関係ありませんが、ちょっと名前が出ました九鬼紋白嬢。
えぇ、大好きです。紋様可愛い。
お兄ちゃん大好きであり、お姉ちゃん大好きでもある彼女（ロリ）。
可愛いですねー。
抱きしめたいな、ガンダムゥ！

次回は世界最強が活躍する予感。

それでは、ご意見ご感想をお待ちしておりますので、お気軽によろしくお願いします！

第３９話　人類最強と人類最凶の対峙（前書き）

岳人「京極先輩の声ムカつくな……。何かキツネとか言いてぇ……」

王貴「そんな事を言いつつも、最後にはハイタッチをかますのであろう？」

第３９話　人類最強と人類最凶の対峙

「空が青いなー」

そう言葉を漏らしたのは風間翔一だ。

彼は空を見上げながらそう呟く。上空は満天の青空。風も丁度いい感じに吹いていていいい感じ。

大きく空気を吸う。肺に酸素が供給されているのが感じる。

「心なしか、空気も美味い」

こんな日に外で昼寝でもすれば、いい夢でも見れそうだなー。と、ぼんやりと考える。

実に微笑ましい思考であろう。だがそれも、時と場所による。

今はＫＯＳまっただ中。油断していると他のＫＯＳ参加者に狩られる立場にいる。

今の翔一は、ライオンの狩り場に放り出された野うさぎに等しい。

もしくはスラム街で無防備に歩いている美女だ。

と、

「キャップ、恨むぞ？」

背後から声が聞こえた。

翔一は後ろへと視線を向ける。

そこには直江大和がいた。

彼は文字通り、恨めしそうに翔一を見つめている。

その視線から翔一は目をそらす。顔中冷や汗を垂らしながら。

「な、何が？」

「よくもやりやがったな？」

大和は翔一と肩を並べて歩く。

「な、なんだよー？　何か不満でもあんのかよー？」
「ありありだ」

二人はちらっと前方を見る。

そこには、和気あいあいと会話している島津岳人、師岡卓也、鉄乙女、川神一子、椎名京、そしてクッキーの姿があった。
岳人にいたっては、完全に乙女に鼻を伸ばしている。

「いいじゃん！　これでワン子達のチームと組める訳だし！」
「だからって……普通、俺を売るか？」

ちらっと、大和は京に視線を送る。

翔一達と一子達がチームを組んだ理由は大和にある。
簡単に大雑把にいえば、翔一が「大和好きにしていいから組もうぜ？」と持ちかけ、京が「了承」と答えた。
その間、たったの1秒弱。チームメイトに相談する時間も無い。

独断で、なおかつワンマンな采配だ。とても、チームプレイしているとは思えない。

「え、嫌なの？」

「嫌だね。最悪俺の貞操が無くなるんだぞ……」

「いいじゃん、減るもんじゃねーし」

「減るだろ、確実に！」

こうして彼らは歩いていく。

ＫＯＳのまっただ中、大声を上げて。

非日常の中を日常のように、歩いて行った――――――――。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

高層ビルの屋上で、霧夜王貴と川神百代が対峙する。

百代の背後にいた桃色の頭髪の少女と、腹部を抉られた男の姿はない。どうやら逃げ出したようだ。

それに気にかける二人ではない。

王貴は最初からあの二人は眼中になく、百代はあの二人に構っている余裕はない。

王貴と百代。二人が二人とも、己が目の前に立っている標的に意

識を向けている。

片や余裕。
片や警戒。

実に対照的な二人だった。

――――突然の突風。
高層ビルの屋上だからか、地上よりも風が強い。
その突風に両者の表情は変わることなく――――――、

「何故邪魔をした？」

王貴が口を開く。

その表情から百代の行動を咎めている様子はない。彼が浮かべている表情は愉絶に近い物だ。

対して百代は、

「ＫＯＳ参加者が一般人に危害を加えてはならない。……確かそういったルールの筈だ」

真剣そのもの。

普段では他人をからかったり、おちゃらけている彼女はどこに存在しない。

王貴の目の前に立っている人間。それは疑う事無き人類最強――川神百代だ。

そこで王貴はぼんやりと思い出す。

考えてみれば、彼を狙った襲撃者の手首にＫＯＳ参加者の証である腕輪がなかった。つまり、襲撃者達は一般人と言う枠組みになる。

ＫＯＳ参加者が一般人に危害を加えた場合、執行者たる人物達がＫＯＳ参加者を武力で以て排除する。

執行者とは九鬼揚羽、川神鉄心、ルー・イー、そして川神百代だ。

なるほど。

彼女は自分を排除するために来たらしい。

王貴はぼんやりとそんなことを考えていた。

彼は顔に張りつかせていた笑みを益々深める。
今から始めるであろう闘争に心を躍らせていた。

「一応確認しておくが、先に刃向かったのはあの屑どもだ。それなのに、貴様は危害を加えるなと。殺すなというのか？」

「そうだ」

即答。
百代は考える間もなく言い放つ。

王貴は思わず拍手して、彼女を称賛する気持だった。
貴様こそ法の番人だ、と。非常識である川神百代が遂に常識を身に付けたか、と。
これは傑作だ。非常識が常識を身に付けた。

あと一言。
百代が妙な事を言わば、大笑いしてしまうほどの状態だった。

その様子を見てか、百代は眼を瞑り一言。

「お前は何か勘違いしているようだが、」

言葉を区切ると彼女は閉じていた両目を開ける。

眼光、眼に宿る意思、何かを決意している様子。
王貴は彼女の様子をどこかで見た事がある。

百代とは違う誰か。
その誰かが、彼女とまったく同じ眼をしていた。

彼女は続ける。

「私は執行者としてきた訳じゃない。――私はお前を想う一人の女としてお前を止めに来たんだ」

そこで王貴は思い出す。

この眼。川神百代が自分に向けているこの眼。どこかで見た事のある眼。

それは数十分前。
自分を止めようとした少女――――クリスティアーネ・フリードリヒ。
自分を説得しようとした少女――――――不死川心。
この二人の眼にそっくりだった。

何故。
何故コイツも、心も、クリスティアーネもこんな眼を向けてくるのだろうか、と王貴は思う。
絶対に折れることはないであろう意思を宿した瞳。
その瞳は、まるで、あの男の眼のようで。――――――酷く癇に障る。

百代は右拳を突き出し、不敵な笑みで、実に彼女らしい笑みで、

「もうお前に誰も殺させない。これ以上、“そっち側”に墜とす訳には、いかない」

「ハッ、面白い」

一言。

彼はそう言うと、犬歯を剥き出しに獰猛に嗤う。
本当に愉快そうに、本当に禍々しく、彼はただ嗤う。

少年は右手に持っていた漆黒に染まった長剣を真横に放り投げて、挑戦的に告げる。

「止めてみろ」

それが合図となったのか、彼の背後に数多の武具が展開されていく。

１０、２５、３７、５７、――――１２４艇。
まだまだ増えていく武具。最強を相手にするのにこれだけでは足りないというかのように、次々と具現していく。

その数、１５７艇。

その魔弾を王貴は容赦なく、

「死ね」

百代へと投擲する。

それはなんとも言えない光景である。

生き物を殺す為に生まれた武器の大群が、最強へと進軍する。

圧倒的な光景だ。人間ならその大群に呑み込まれ即死するだろう。

だが生憎、彼女は普通ではない。普通ではないからこそ、最強と名乗れるのだ。

百代は真横に大きく跳んび、武器の大群をかわす。

その跳躍はまさに飛躍。足場の少ない高層ビルでは考えられないほどの飛躍だ。故に、百代の着地点は地面ではなく、足場の無い空となる。

しかしその程度、最強にとって微々たる物なのだろう。

彼女はなんと、そこに足場があるかのように、もう一度空中で真上に飛んだ。

大げさな動作ではなく、ただトンッと。軽い足取りで真上に飛ぶ。

これで、彼女に転落死はないと断言できた。

王貴もそう避けると分かっていたのか、１５７艇の武器の中から、１３８艇程の斧、鎌が猛スピン軌道を変え、百代へと殺到する。

彼は、最初から百代が真横へと避けると分かっていたのだ。

「チッ」

百代は思わず舌打ちをする。

こちらの動きを予測し先手を打たれる。

この戦術こそ、霧夜王貴の真骨頂。これがあるから最凶は最強と渡り合える。

だがそれは、最凶の計算を波状させれば最強の勝利という事実も意味していた。

確かに王貴の攻撃力は並じゃない。

武器を次々と具現化し高火力の物量で他を圧倒する多激必殺の戦法。

さらに、彼の最強の剣であるエンリルを放てば、それでこそ詰みだ。つまるところの王手。

さらに防御力も堅硬なもの。

全てを拒絶する気で造り上げられた障壁。

五行の金行で練り上げられた強硬の鎧。

だが、百代にとってそれらはエンリル以外は“多少厄介なもの”でしかない。

やはり、問題なのはこれまでの動きを計算し、予測出来る彼の頭

脳。

これを何とか出来れば勝機は――――十二分にある。

（それが出来れば苦労しないんだけど――――なッ！）

すれすれのところで、武具をかわす。

それは紙一重。いや、皮一枚と言ったところだ。

しかし、避けたところで、

「クソっ、また……ッ！」

再び、武器は高速で回転し軌道を変え百代に襲いかかる。

恐らく、また避けても三度襲いかかってくるだろう。

そうなるように計算して王貴は投擲している。

ならば迎え撃つ。

彼の計算を超えない限り、引き分け。最悪敗北するのみであるから。

「ツァァアアァァッ！」

身体を気で強化し、飛来し来る武器すべてを叩き落とす。
時には拳で、時には蹴りで、時には気弾で悉く叩き落とす。

拳に足に夥しい切り傷が刻まれるが、何てことはない。
そんな切り傷も百代だけが使用できる瞬間回復。この奥義で問題は解消される。

そんな中、飛来する武器もあと５０艇ほど減ったそんな中、

彼女は少年の背後にあるソレを見た。

「な――――――」

息を呑む。

霧夜王貴の背後。
既に展開されている武具。実に６９艇。

その剣先全てが、百代へと向けられている。
つまりそれは王手。アレが放たれては最後。飛来する５０、新たに展開された６９。その同時にさすがの百代も捌ききれない。

その動揺が原因か。

百代へと飛来していた５０艇の中の１艇の鎌が彼女の太股へと突き刺さる。
それを皮切りに、次々と被弾する。

二の腕に斧が食い込み、太股には鎌が刺さり、腹部には曲刀がめり込む。
それと同時に咲き乱れる紅い鮮血。

百代の表情が苦悶に曇る。
傷が瞬間的に治ろうが、痛みはあるのだろう。

窮地において尚、致命傷を避ける百代の眼に、最悪の光景が映り込んでくる。

王貴の背後に展開されていた、６９艇の武器。正に今、射出されようとしていた。

そして迫りくる、５艇の武器――――。

「グッ――――ォオオォォォ！！」

咆哮しながら、飛来する2艇の武器を皮一枚で避ける。

残り3艇――――。

「――――――ッ！」

その全ての刃先は頭、首、顔といった致命的な部分を狙っている。

着弾すれば致命傷。いくら瞬間回復があるからといって、無事でいられる保障など無い。なにせ、致命的な部位に攻撃をもらった事が無いのだ。

もっと厳密にいえば、彼女は生まれ始めて死ぬかもしれない。そんな境地に立たされている。

ここで分かった事がある。

霧夜王貴は、川神百代を殺しに来ている――――。
それも容赦なく、慈悲もなく――――。

（何を今更）

百代は心の中で自嘲する。

今の少年がおかしい事は少年と対峙してから、いや少年の姉から事情を聞いてから理解している。
だから自分の命が狙われようが、自分が特別だと思っていた相手に命を狙われようがどうでもいい。
そう“今”はどうでもいい。

（今は……、今はアイツを止めることだけを考えろ。余計な事は考えるな。全神経を集中させろ――――！）

飛来する3艇の凶刃。
その軌道は一糸乱れず、百代へと飛翔する。

彼女はその様子が、スローモーションのように見ていた。
それと同時に、高速で思考する。

防ぐのは――――不可能。
どう早い動きをしても、あの速度の攻撃は避けられない。それは同時に叩き落とす、破壊するという選択肢も消えた事を意味している。

ならば、避ける――――否、不可能。
仮に避けたとしても、その後の攻撃が待っている。少年の背後に展開している６９艇の魔弾。それがすでに装填されている。あとは、少年の意思だけで発射される。

そこで詰み。そこでチェックメイト。そこで王手だ。
６９艇の武器を百代が防いだとしても、さらに武器が展開され発射される。避けたとしても、また武器が展開され発射される。

百代だけが使用可能とされている“瞬間回復”。あれは使用回数が決まっていて、気が無くなってしまえば使えない。
長期戦では圧倒的不利。物量作戦に潰されてしまう。

――――百代は、そう考えていた。

「終わりだ」

百代の思考を遮るかのように王貴が告げる。

「貴様如き障害があろうと、王（オレ）は停止することなく進み続ける」

百代はその言葉に意識を向けず、迫りくる凶刃にのみ意識を向ける。

そして――――。

「さらばだ最強。中々愉しかったぞ」

人類最強、川神百代は――――――。

第３９話　人類最強と人類最凶の対峙（後書き）

何やかんやで小説書き始めてから1年経ちました兵隊です！

さぁ、そんなわけで次回から後書きに簡単な人物紹介をしていこうと思います。

兵隊がやるのですから、真面目ではありません。

むしろ、ネタなことしかやらないので、安心（？）してくださいｗ

それでは、何かご意見ご感想がありましたらお気軽によろしくおねがいします！

第４０話　気道（前書き）

～前回のあらすじ～

王貴「勝った！　第三章完！」

第４０話　気道

霧夜エリカは車のハンドルを握っていた。
その隣、つまり車の助手席には九鬼揚羽が乗っている。

その車の見た目は赤。これでもかというくらいのワインレッド。真っ赤だ。
さらにその車はやたら高級感の溢れるスポーツカー。正に金持ちが金持ちによる金持ちのための車だと言わんばかり。

色も相まってか、その車はとてもエリカに似合っていた。

「チッ」

エリカは不機嫌そうに舌打ちをする。
それから、右手の人差し指をこれまた不機嫌そうにハンドルに軽く打ち付ける。

その仕草は、彼女が不機嫌になった時にする動作のようである。
いや、動作そのものだ。
現にエリカの眉を顰め、不機嫌そうに前方を見ている。

その前方、フロントガラスから見えるのは、車で出来上がった道――――渋滞だ。

少し進んでは止まり、少し進んでは止まりを繰り返す。

そのたびに、エリカの不機嫌度は増す。この悪循環は車に乗っている限り続くであろう。

さらに言えば、この気温。３５度以上はあるのかもしれない猛暑だ。不機嫌度は湯水の如く際限なく増すだろう。

とはいっても、車内の中はエアコンが効いているためかさほど関係ないのだが。

「あー、もう！　ちんたらしてんじゃないわよ！」

理不尽にそう言い放つと、エリカは前の車へとクラクションを鳴らす。

厳密にいえば前の車ではなく、自身の前を走っている車達にだ。

鳴らしてもモーゼの十戒のように道が出来る訳でもなく、ただただ渋滞は続いている。

「ちょっと、揚羽。気弾でも撃って前の車スクラップにしなさいよ。鬱陶しいったらないわ」

「歩道が広いではないか……行け」

と、世界を代表する金持ち2人組はそんな不穏な事を言っていた。しかも、一般人が口にする冗談ではなく、本気で行っているのだから性質が悪い。

彼女たちの頭の中では、壊したら弁償すればいい。としか考えてないのだろう。

さすが九鬼財閥とキリヤカンパニーを代表する者たちだ、と感心しても良いくらいだ。

「む？」

揚羽がある場所に視線を向ける。

そこにはオフィスビルが立ち並ぶミナトミライ。

もっと詳しく言えば、ミナトミライにある高層ビルの屋上を揚羽は見つめている。

その場所には見知った気配が。揚羽がよく知っている気の気配があった。

人類最強と人類最凶。
川神百代と霧夜王貴だ。

二人はその場所に君臨していた。

百代も王貴も自身に溢れ出る強大な気を隠そうともしない。
この二人の気配を隠すなんて、この世界じゃ狭すぎる。

百代が自分たちより先に先行して王貴を止めに行った事を揚羽は知っているし、エリカも知っている。
だからだろうか、揚羽は百代と王貴が対峙してしていようが驚いた様子はない。

そして、

「……始まったな」

神妙そうな顔で呟いた。

揚羽は百代の実力、王貴の脅威のどちらも知っている。
百代も王貴も同じく等しい天災の類だ。

人間に台風や地震などといった自然災害が防げないように、彼女たちと相対しては無事でいられる保障など無い。

だからこそ。
二人の実力を熟知している揚羽だからこそ、彼女はこういった判断を下した。

この戦い、百代の敗北だと――――。

百代の破壊力。そして瞬間回復は驚異的だ。

だが、それ以上に勝るアドバンテージを王貴が持っている。と、揚羽は分析する。
高火力の出力で射出される武器。
相手の動きを計算し予測する頭脳。
強固な守りの壁と鎧。
そして、エンリルの存在。

これらをフルに使いこなせられれば、いくら百代といえど敗北を喫すると思っていた。

だというのに、

「そうねー。それよりもこの渋滞よ……。まったくウザい！」

エリカは普段通りに。
いつも通りの態度を取っていた。

揚羽は高層ビル屋上から、運転席に座っているエリカへと視線を向けて、

「……心配ではないのか？」

「どっちのよ？」

「百代だ。心配じゃないのか？」

「へぇー、アンタは王貴が勝つって思ってるんだ？」

エリカは意地悪く、正面を向いたまま笑う。

どうやら彼女は揚羽とは違う答えを持っているようだ。

そうして、エリカは路側帯へ車を寄せて停車する。
広い道路だったからよかったものの、普通の一般道路でこんな行動をしたら他の車の迷惑で邪魔極まりない。
それに、今は渋滞だ。

だが、そんなことを気にしないのが霧夜エリカという人種だ。

エリカは車を止めると、シートベルトを外し車のエンジンを切る。

「私の予想では逆ね。王貴はモモっちに負ける」

揚羽は戸惑った。

あの弟にこれでもか、というくらい甘いエリカが王貴が敗北すると断言したのだ。
しかもそれは、エリカが公平な判断で分析した結果だということにもなる。

エリカは続ける。

「モモっち――――いえ、川神百代は強さの上限がないわ。相手が強ければ強いほどモモっちも強くなる。ああいうのを、天才っていうのでしょうね」

でも、と言葉を区切り、

「王貴には上限がある。上限があるからこそ、あの子は知恵を頼るの。とはいっても確かにあの子は強い部類よね？　大抵の相手なら太刀打ちできない。でも、モモっちみたいな本物なら別の話よ」

「百代のような本物が相手なら負けると？」

「多分ね。“今”の何も分かってない王貴がモモっちに勝てる道理なんてないもの」

“今”といった部分を強調してエリカは断言する。

人類最凶と人類最強が戦った場合、負けるのは人類最凶だと。

揚羽が王貴を過大評価しているのか、エリカが王貴を過小評価しているのか。

それはまだ分からない事だ。何せ、出ていない結果を論じている

のだから。

論より証拠だ。

実際に勝敗結果を見た方が早い。

エリカはそう考えると。

「と、言う訳でちょっと見に行きましょうよ」

「……どうやってだ？　いや行くのは分かっていたが、車が止まっているではないか」

「アンタが私を担いでよ。言わせないでよ恥ずかしいッ！」

「どうして恥ずかしがるのか我にもわからんが、やはりこうなったか……」

彼女たちはそんな会話をすると、二人とも車を降りる。

二人が目指すは、高層ビルの屋上。

つまるところ、百代と王貴がいるであろう場所だ。

と、エリカが何かを思い出しかのような表情で、

「あ、車どうしよっか？」

「フハハハハ！　案ずることはない。小十郎に任せるが故、安心するがいい」

「あー、彼って免許持ってたっけ？」

「無いぞ。持っていかせる」

「持っていかせるって……こうやって？」

エリカは何かを持ち上げるようなジェスチャーをした。

それに揚羽は満足そうに、両腕を組みながら、

「無論。我の従者であるからには、それくらいのことはしてもらわねばな！」

「……彼も大変ね」

九鬼揚羽のハチャメチャぶりを再認識しながら、エリカは小十郎に同情をせざるをえなかった。

そして、二人は目指す。

例の高層ビルの屋上。百代と王貴が戦っている場所へと――――――。

猛攻が止んだ――――。
川神百代に容赦なく襲いかかっていた猛攻が突如として止んだ。
その猛攻を例えるのなら――“雨”。

文字通り、雨の如く絶え間なく掃射される猛攻。
しかもその破壊力は折り紙つきである。一般人がその猛攻の一撃でも喰らえば、体の一部は消し飛び生命活動を停止ところまで至るものだ。

その魔弾の投擲者こそ、霧夜王貴だ。

王貴はある場所を見つめている。彼の背後には６９艇の武器が控えており、まだかまだかと命令を待っている。

王貴が見ている場所。それはすなわち、先ほど百代が立っていた場所、最初に対峙した時の場所だ。

その場所に百代はいるのだろうか。

先ほども言ったが、彼の背後には６９艇の武器が展開されている。

それはつまり、百代を襲った３刃の凶刃から武器は射出されていないという事になる。

ということは、百代は３艇の凶刃の前に散ったのか。

彼の目の前には、３箇所ほど穴のあいた奇怪なオブジェのような百代だった物体があるのか。それとも、自らの血で作り上げた血の海の上でおぼれているかのようにうつ伏せで倒れている百代がいるのか。

否、どちらも違う。

その答えは、王貴の今の表情で簡単に読み取れる。

王貴は何か信じられない物を、まるでこの世のものではない物を見ているかのような顔つきをしていた。

「貴様、一体、何をした……」

己が動揺している事すら気付かず、王貴は前方に佇む相手を睨みつける。

「川神百代――――――！」

川神百代は、人類最強は健在だった――――。
今まで受けた傷も、瞬間回復で全快している。

あの攻撃をどうやって凌いだのか。

王貴は川神流の技である『人間爆弾』『大爆発』で凌ぐものだと思っていた。
彼と百代は３４回ほど制限時間付きとはいえ、私闘を行っている。

その中で、３４回中３４回とも『人間爆弾』『大爆発』で武器の投擲を凌いでいたからだ。
もしくは、『星砕き』『星殺し』といった収束型の気砲でまとめて薙ぎ払う。

そう分析していた。

だが、ここにきて。

彼女は気も何も使用せずに、凌いで見せた。

対峙していた王貴自身、どうやってあの攻撃を凌いだのか理解できない。

アレは、人間が出来る動きではない――――――。

「答えよ！　貴様、一体何をした!?」

「……別に何もしてないさ。私が死なずにここに立っているということは、あの攻撃を“避けた”ってことだろ?」

誇るのでもなく、驕る事もなく。

百代は当たり前のことを言うかのように言う。不敵な笑みを顔に張りつけながら。

あの攻撃を避けた――――――。

それこそ、ありえない。

あの攻撃は死ぬ気で避ければ避けられる、気で身体を強化すれば回避できるといった類の攻撃ではない。

川神百代が絶対に避けられない速度と角度を計算して射出された魔弾だ。
彼女とは３４回戦っているのだ。その計算に誤差が生じる訳もない。

だというのに、彼女は回避して見せた。
気という物を使わずに、己の身体能力一つで。

「お前の攻撃は気を主体としている」

百代はゆっくりと歩みを進める。
一歩一歩着実に、力強く進行する。

「私がやった事は簡単なことだ。お前の気を把握して読み取って、進むべき道を見極めた。あとはその道を無意識に進むだけ。私のこの道を≪気道≫と名付けている」

王貴は彼女が何を言っているのか分からなかった。

百代が言う、相手の気の動きを把握し読み取り、進むべき道を見極める術――≪気道≫はそう簡単にできるものではない。

王貴の放った武器はバラバラだ。
斧であったり、曲刀であったり、大鎌であったりだ。籠められている気の量と質だって違ってくる。
故に、見極める事など不可能なのだ。

そして彼女は無意識でその道を進むといった。それはつまり無意識を“意識”して実行している事になる。
それこそ不可能だ。

無意識になるように意識しているのにもかかわらず無意識なれる。
無意識だからこそ、通常では考えられないような速度で体を動かせる。

無意識を意識してやるなんて川神鉄心、釈迦堂刑部、九鬼揚羽、ルー・イー、霧夜王貴の誰にでも出来ない芸当だ。
そんなことが出来るのは川神百代のみだろう。

そんな怪物を目の前にして、王貴は動かない。
一歩でも動けば、一歩でも後ろに下がれば食いつぶされると理解しているからだ。

少しでも躊躇えばやられる。
少年の目の前にいる存在はそういう類のものだ。

「気道を身につけるのには苦労したんだぞぉ？　ジジィの毘沙門天何発、何十発、何百発喰らってようやく編み出したんだからな」

そのときの事を思い出したのか。
百代はとても嫌そうに首を横に振る。

そうして不敵な笑みで、

「何はともあれ、これで私に気の攻撃は効かん」

「貴様……。王（オレ）の気を、王（オレ）の何もかもを掌握したと？　何もかもを見極めたというつもりか……！」

その言葉が引き金になったのか。
王貴の背後に展開されていた６９艇の武器が増え始める。
７８艇――――まだ増える。
９４艇――――まだ増える。
１５０艇――――まだ増える。
２３４艇――――まだ増える。
３１４艇――――まだ増える。
その数――――３４９艇。

今まで３４回戦ってきて、これほどの数を展開された事など無い。
これからは未知の領域。百代も体験した事の無い展開だ。

だというのに、百代は笑う。楽しそうに笑いながらこう言った。

「来い」

川神百代は人差し指を動かし、誘いながら宣言する。

「次も、きっと避けられる」

その言葉がトリガーになり、王貴の殺意が破裂した――――――。

虚空に装填されていた３４９艇の武器が、百代へと殺到する。
空を斬るかの如く飛来する刃は空間を歪めるような速度で飛来し、ビルをも破壊しかねない轟音が鳴り響く。

まさにそれは大破壊。
火薬もなにも使用していない唯の刀剣槍といった武器の投擲だというのにもかかわらず、高層ビルの屋上は絨毯爆撃に晒されたかのような有様だった。

その有様に満足できないのか、王貴の猛攻は止まらない。
落雷のごとき武器の落下は、百代が立っていた場所もろとも消し飛ばせるかのような勢いで飛来する。
猛攻は間断なく、それどころか激しさを増す。

そうして、ようやく最後の武器が地面へと着弾した。
全てが終わった頃には、アレだけ立派に建てられていた高層ビルも一部が削り取られ、見るも無残な姿に変わっている。まるで、爆撃にでもあったかのようなものだった。

俟っていた粉塵が、一凪の風で晴れた。
と、王貴の真横から――――――。

「川神流――――」

声が聞こえた。
王貴にとってその声は、死神と同じくらい不吉な声。

視線を向ける。
そこには百代がいた。

あの攻撃を避けきったというのか、かすり傷一つ負わずに。

その事実も、今の王貴にとってはどうでもいい。

百代が構えている。

左右の手をこぶしに握り、左手を突いた状態にまっすぐ伸ばす。

右手はあばらの下まで引き手を取り、突きができる状態で構えている。

空手の正拳突きに、よく似た構え方。

そこから、どういった技が繰り出されるのか。

王貴はよく知っている。

百代が得意としている技――――無双正拳突きだ。

王貴は5枚ほどの障壁を展開する。

今までに彼が5枚もの障壁を張った相手は彼女だけだろう。

無双正拳突きは脅威であるが、そこまでの代物ではない。

少なくとも、王貴の中ではそう思っていた。

何せ今まで、この防御方法で防げていたのだ。

今までの経験がある。故に、防げると確信を持っている。

だが百代に戸惑いはない。

彼女はそのまま、

「無双正拳突き――――――！」

拳を迷いなく突きだした。

その攻撃の結果は、王貴の予想していたものとはまったくの別物だ。

「ゴ、ガァ……！？」

ガラスが砕けるかのような音がしたかと思えば、胸部で何かが炸裂する。それは次第に痛みへと変わる。

激痛なんてものじゃない。王貴が今まで経験した事の無い痛みが彼を襲う。

痛みを認識したと思ったら、あらゆる攻撃を気の障壁で防いでいた彼の体が勢いよく吹き飛ばされ、数十メートル先にあるフェンスに激突し、ようやく停止する。

「ァ、グッ……ッ！！」

（馬鹿な……！　障壁の五枚重ねだぞ！？　あの女、こうも容易く……！）

幸い、王貴の胸骨は折れていなかった。ヒビもない。

だが五体満足というものでもない。口の端からは微量な紅い鮮血が垂れていた。

人類最強の一撃を喰らったのだ。

五体満足で無事にいる事こそ、ありえない事だ。

王貴が張った気の障壁が五枚ではなく、四枚三枚だったらどうなっていただろうか。

王貴にとってそんな“危機感”よりも屈辱が先だったのか、片膝をつきながら百代を睨みつける。

紅い双眸を怒り一色に染め上げ、人類最強を睨み殺さんと言わんばかりに見つめる。

――――百代の攻撃は止まらない。

「ツァァァアアアアアァ！」

数十メートル離れた場所で、百代は虚空を思いっきり蹴りつける。
それだけの動作で生まれたものは――――竜巻。

全てを呑み込まんと、竜巻が王貴へと襲いかかる。

王貴が気を用いて五行を使い風の力を使うのなら、百代は身体能力一つで風を呼び起こす。

対する王貴は、気を使い木行へ働きかけ風を操り暴風を作りだす。

百代の生み出した竜巻と王貴の作りだした暴風はいとも簡単に激突破裂した。
その余波で出来上がった衝撃は凄まじく、彼らが立っているビルを大きく揺らす。

「それにしても派手にやらかしたな？　まぁ、ビルにいた連中は避難させたし最悪な状況にはならないが」

辺りを見回し、その感想を百代は口にする。
王貴はそれを憎悪の視線をもって返答する。

「王貴。私はな、お前を止めたいんだ」

「止める？　この王（オレ）をか？　ハッ、それは不可能な願いだ。王（オレ）はもはや止まらぬ」

「それでも――――止める。止めてやる」

「――――ッ！　不可能だと言っている！　そんなに王（オレ）を止めたければ王（オレ）を殺せ！　頭骨を踏み砕き、胸部を突き刺し、心臓を抉れ！　それでようやく王（オレ）は止まる」

その凶悪な言葉の前に、百代の顔に落胆の表情はない。

むしろあるのは、やっぱり。といった確信じみた表情だ。

「そうだな。私は言葉で誰かを説得できるほど頭もよくない。お前の言うとおり、力づくで止めるしかないみたいだ」

人類最強は宣言する。

視線の先で片膝を地面についている、人類最凶に向かって。

「覚悟しろ。両手両足をへし折ってでも止めてやる。そして連れて

帰ってやる」

対する、人類最凶は――――、

「屑が……。図に乗るな――――」

ダメージが抜けきっていないのか、体をふらつかせながら立ちあがる。

口の端から垂れていた紅い鮮血を右腕で拭って、

「貴様、いつまで見下している、」

そういうと、王位の背後に木行の風で作りだした竜巻が接続されるかのように現界する。

墨よりも黒い禍々しい気を身に集めて、鎧を纏う。

その鎧の色も黒。武器や障壁と同じ真っ黒なものだった。

それはまるで、今の王貴の内面を表しているかのようで――――。

「頭が高い――――」

「――――ッ！」

漆黒の鎧を纏った王貴が空へと勢いよく飛びあがる。

それに遅れて、百代も同じく空中へと飛び出した。

戦場は高層ビルの屋上から、空へと変化する。

人類最強と人類最凶の対峙は、まだ続く――――。

第４０話　気道（後書き）

みなさんおはこんばんちは！兵隊です！

王貴が百代を倒したと思ったけど、そんなことはなかったぜ！
な回だったと思いますｗ
というか、あんな怪物どうやったら倒せるのでしょうか？ｗ
ＭＯＭＯＹＯという化け物を倒してきた、オリ主が恐ろしく思い始めた今日この頃ですｗ

そんなこんなで前回言っていた、簡易的（ネタも含めて）な人物紹介をやっていきたいと思いますｗ

それでは、どうぞー。

霧夜王貴（制服）【人物】

本編の主人公。
唯我独尊で傲岸不遜。昔はいい子だった……らしい。
顔はいいのに性格で損をしているといった典型。でもそんな俺様がいいという淑女と紳士がいるとか。
姉であるエリカの計らいで川神学園に入学した。

霧夜王貴（私服）【人物】

王貴の私服姿。
ライダースーツジャケットを愛用していたり、胸元が開いた七分

丈のシャツを愛用していたりと多彩。
半分は王貴が選んで買っているが、もう半分はエリカが買っている。
そして、着ている。エリカが選んだ物も普通に着ている。文句を言いながらも着ている。
着なければいいのに。

霧夜エリカ（スーツ）【人物】

王貴の義姉。ブラコンパワーを有する。
どれだけブラコンかというと『おはようからおやすみまで、弟の暮らしを見つめる』をガチでやっちゃうくらいブラコン。
それでも、王貴の関係は良好のようだ。
学生の頃からのおっぱいセクハラ大魔王だが今でも健在。
今の標的はまゆっちで、将来は百代の体も狙っているとか。頑張れ超頑張れ。

第４１話　最凶の黒と最強の白（前書き）

～前回のあらすじ～

王貴「もうやだ、この化け物」

第４１話　最凶の黒と最強の白

――――人類最強と人類最凶の空中戦は佳境を迎えていた。

純白の制服を着た百代と漆黒の鎧に身を包んでいる王貴が舞うかのように大空を飛ぶ。

時に最凶が武器を雨霰と射出し、時に最強が拳で殴り飛ばし。

瞬きしている暇さえ無い。

「この、いい加減に――――、」

王貴の背後に二メートルを超える大剣が展開される。

姿形全てバラバラのそれは全て百代へと標準を合わせている。

その数８９艇。

「堕ちろ屑がァ！」

その全てが百代へと放たれる。

だが百代にとってそれは、もはや脅威ではない。
気道を見つけて、それ道を無意識に進めば問題ないのだ。問題ないものをそれは脅威とは呼べない。

百代は飛来する武器の悉くを避け、王貴へと迫る。

理解できない――――。
彼女の使う気道と言う原理、仕組み、からくり。そのすべてが王貴には理解できなかった。

どうやって、こちらの気を読み取っているのか。
どうやって、意識して無意識になっているのか。
まったく理解できない。

彼女は言った。
彼女が使う気道、それは気を把握して読み取って、進むべき道を見極めはその道を無意識に進む。それこそ気道。

ならば進むべき道とやらすら見えないように武器を打ち込めばいいだけの話だ。
つまり点ではなく、面で攻めればよい。だが――――――、

（奴はそれすら悉く避ける……）

自分の得意な戦法を潰され、混乱しかかった頭を必死に動かし、王貴は分析する。

（人間が決してい動けようのない体制でも奴は避ける。これが無意識における恩恵と言ったところか。つまり、奴に気はもはや通じぬ）

あと一歩で追い詰められるこの状況になっても、王貴は己の愛剣“螺旋剣（エンリル）”を抜いていなかった。

木行で練り上げ背中に接続された風を操作し、小刻みに高速移動し百代の攻撃を辛うじて避けている。それは避けると言うより、逃げるに近いものだった。

王貴が螺旋剣（エンリル）を抜かないのは慢心しているからでも、油断しているからでもない。

ただ単純に、そんな暇がないからだ。

そんな造っている隙を見せれば、百代は一片の容赦なく王貴を蹂躙する。

王貴とて、出来る事なら目の前にいる化け物をバラバラにしてやりたい。螺旋剣の供物としてやりたい。

売られた喧嘩は買う。そしてそれ相応の罰を与える。霧夜王貴は博愛主義でも何でもないのだから。

それに百代も、王貴が螺旋剣を造りたくても造れない状況にあると言うことはわかっていた。

何しろ、この展開は彼女が作ったもの。

気道を身につけた。技も鍛えなおし強化した。負ける要素などないが、螺旋剣を抜かれては話は別になってくる。アレだけは不味い。

初めてあの剣を見たことは忘れない。体のありとあらゆる場所で警報が鳴り響いた。まるで“世界そのもの”と対峙しているかのような感覚。百代は忘れることができない。

故に――――、

「もうお前に何一つやらせはしない！」

８９艇の武器を突破し、王貴へと目にも留まらぬ速さで迫る。そのまま殴りつけるのかと思いきや、

「……ッ！」

消えた。
その場で忽然と消える百代。

いや、彼女は王貴の真上にいた。
そこから縦に回転しながら王貴へと垂直落下する。

「川神流――――天の槌！」

そのまま王貴の頭部めがけて踵が振り下ろされる。それを例えるなら斧なんてレベルじゃない。言うなればミサイル、いやそれ以上の破壊力を持った凶器が振り下ろされた。

それを王貴は頭上で両腕を交差するようにして紙一重で防ぐ。
勿論、見えていたわけではない。百代の攻撃が見えるほど彼は接近戦に特化しているわけでもない。
ならばなぜ防げたか。
答えは単純明快だ。百代のこれまでの攻撃を分析し、次にどんな攻撃が来るのか読んだだけに過ぎない。

だが、威力まで殺しきれなかったのだろうか。
王貴はそのまま大砲の弾が発射されたかのような速度で落ちていく。

そのまま落ちるかと思いきや、そのまま９０度無理やり方向転換し、猛スピードで飛翔する。
百代もその後を追うかのように高速で追走する。

七浜市の空に黒い線と白い線が飛び交う。
彼らは平行しながら、恐ろしい速度で街並みを駆け抜けていく。
彼らが通ると、その衝撃の余波でビル街のガラスは砕け散り、鉄筋コンクリート製の建造物はぎしぎしと頼りなく揺れ始める。

王貴と百代。
両者が飛んでいる様子は戦闘機さながらである。

そうして、両者は高度を上げ始めた。
そこは上空５００メートル。決して通常の人間が生身で、己の力で到達できない場所へ。

「ホント出鱈目だよお前！！」

百代は無数の気弾――――川神流、致死蛍を王貴に放ちながら叫んだ。

「お前みたいに鎧とかで身を固めている奴には、虹色の波紋（ルビーオーバードライブ）がいいんだが、その鎧にはまったく効かない！　まったくどうなってる！？」

「貴様が言うか、この化け物が！！　気道、無意識を意識して可能にする。これらを可能とした貴様こそ出鱈目ではないか！！」

百代から放たれた致死蛍を障壁を持って防ぎ、王貴はそう叫んだ。

「化け物……、いくら美少女の私でも傷つくぞ！！」

王貴はその言葉に答えることなく、武器を再度展開する。その数はざっと３６艇。百代にとって、さして脅威ともいえない数だ。

それらを百代へと投擲する。

この程度の数なら、無意識になる必要もないと感じたのか、彼女は不敵な笑みを口元に携えてそれを迎撃する。
その瞬間――――――、

「――――――なんッ！！？」

爆発した。
武器が百代の拳に当たった瞬間、それは間違いなく爆発を起こした。
百代の体はその余波で吹き飛ばされる。

（爆発……！？　どういう――――――！）

百代が状況を冷静に分析しようとするが、そんなことお構いなしに王貴の造り出した武器は襲い掛かる。
放たれた武器すべてが着弾すると同時に爆発する。火薬といった類のものを使った痕跡もない。

傷を受けても、瞬間回復で回復する。
だが、こうしていても埒が明かない。何をするにしても、ここは

仕切り直す。

百代はそう判断し、右手に気を収束させる。その瞬間紫電が彼女の右手から迸り始める。
その右手を王貴に向けて、

「川神流、星殺しィ！！」

容赦なく気泡を放つ。

その気泡を前にして、武器はすべて破壊され、王貴へと襲い掛かるも、

「フン、」

障壁に阻まれ、攻撃は王貴へと届くことはなかった。

両者は再び対峙する。

「なるほどな。確かに貴様には気で造り上げた武具は通じん。だが森羅万象の類である、五行は違ってくるようだな？」

ここにきて、王貴はとても嬉しそうに、表情をとても邪悪なものに変える。笑顔とは違う、もっと歪んだものに、変えた。

対する百代は、先の攻撃が気になっているのか、警戒するかのような表情に変わっている。

無理もない。

火薬といった類を使っていないにも関わらず、武器が爆発したのだ。

彼女が警戒するのも無理はない。たとえ瞬間回復と言った奥義を使えようとだ。

王貴も百代の心情を理解したのか、不敵な笑みで、

「武器に熱風と烈風を宿し、物体に着弾すとそれらが破裂する、そういう仕組みだ。木行と火行を練り合わせることで可能とした擬似爆物。なんら不思議がる必要もなかろう」

「確かにな。あの訳のわからない剣を造れるんだから、その程度のことを出来ても不思議ではない」

対して百代も不敵な笑みで返答する。

王貴が用いる五行。

それらは言ってしまえば、森羅万象のようなものだ。

例えるなら、台風、地震、雷といった類のもの。世界の、星の力のようなもの。そこには“気”といったものは存在しない。

故に、川神百代は五行の攻撃を見極めることは出来ない――――。

「形勢は逆転された。もはや、貴様に勝機はない」

「あの程度でか？　私にとってさっきの爆発など、棒火矢と同等程度のダメージか与えられないんだぞ？」

「御託はよい。こい、最強。既に貴様の底は見えた」

王貴は宣言する。もはや、百代に勝ち目はない――――と。

それと同時に展開される、２５艇の武具。

そのすべてが、先のような爆発を使用可能としたものであることは言うまでもない。

それにしても、あの川神百代にこの程度の武具しか展開しないのは、明らかな王貴の判断ミスと言えるのではないのだろうか？

油断しているのか、それとも油断させようとしているのか。

どちらにしても、奇妙なことだ。

油断しているのか、それとも油断させようとしているのか。

どちらにしても、

「どっちにしても……私のやることは変わらない」

王貴の凶行を止める。

どんな手を使っても、彼を止める。

百代の行動原理はそこにある――――。

彼女はそう思うと同時に、行動に移す。

空を蹴るかのように飛び、王貴へと飛翔する。

空気を切り裂き、ソニックブームを生み出しながら、最短距離で彼女は飛来する。

目にも止まらぬ速さ。
王貴との距離は軽く75メートルはある。その距離を詰めるのに、おおよそ一秒もかからないだろう。
彼の細身を打ち砕くには十分な速さ。その脅威の速度に、王貴は成す術もない。

接近して、ただ殴りつけるだけで必殺になる百代。獲物に標準を合わせて、発射するまでに計算し、ようやく必殺と呼べる物になるものを撃ち出せる王貴では百代の速度に何も出来ない。

それでも、王貴は武具を投擲する。

勿論、それらは百代には届かない。
彼女は体を捻り、決して触れないように避ける。

飛来する武具と百代が交差し、すれ違う。
それだけで彼女の背後で爆発が起きる。百代が切り裂いていった空気の壁。その余波で生まれた衝撃波が、武具を何もかも薙いでいく。

王貴から見たら、百代は白い線だ。それしか、肉眼で捉えることしか出来ない。
さらに言えば。それは、もう自分の目の前に迫っていた。

「ォ――アァァあァァ！」

百代の右手が唸る。

驚異的な速度を維持したまま、百代の拳は王貴の胸部へと差し込まれる。その威力は計り知れない。まさに悪魔染みた一撃。

いくら、王貴の鎧は強固と言えど、この一撃でダメージは入るだろう。そういったものを確信できる一撃だった。

だが、――――王貴の鎧はビクともしない。

「王（オレ）は言った筈だ。もはや、貴様に勝機はないと」

あろうことか、王貴は健在。

無傷に等しい。

「な――――に？」

百代はそこで止まる。

この一撃で決まるはずだった。王貴の鎧を砕き気絶させてＫＯＳを棄権させる、そういうプランだった。

だと言うのに、王貴の体には傷一つついておらず、鎧も砕けてはいない。

動揺している百代に、王貴は薄く笑う。

「言った筈だ。――――底はもう見えている。と」

その声を聞いた百代は距離をとろうと、空中を蹴ろうとしたその時、真上から正体不明の力が百代に襲い掛かる。

どういった攻撃なのか、百代には皆目見当が付かない。

まさに、意識していない場所からの攻撃。言うなれば百代は死角を突かれた。

押さえつけるかのようなこの感覚。体の四肢が引き裂かれるかのような激痛。

これはまさに、

（竜巻――ッ！）

そう。
百代の頭上から襲い掛かった正体不明の力。それは木行で造り上げた風。かつてクリスティアーネを一撃でたたき伏せて意識を失わせたモノ。
クリスティアーネに向けた時よりも、何倍も強くなっている風が百代を襲っている。

しかし、気付いたときには遅い。
彼女はもはや脱出不可能。

上空５００メートルから叩き落され、地面に叩き伏せられることが約束されている。
この状態で百代に出来ることがある言えば、威力を半減するためにすべての気を身体の強化に回すか、少しでも早く体を回復させるために瞬間回復の準備をするか。これらくらいしかない。

――否。
人類最強はその上を行く。
彼女がこのまま落ちていく訳がない。このまま落ちていく道理がない。

「グッ――ダァァァああァ！」

裏拳一線。
百代はそれだけで、己に襲い掛かっていた竜巻を薙ぎ払う。

と、百代の視界に――――59艇ほどの武具の剣先が見えた。
そのすべてが先ほどの擬似爆発が出来る武具。

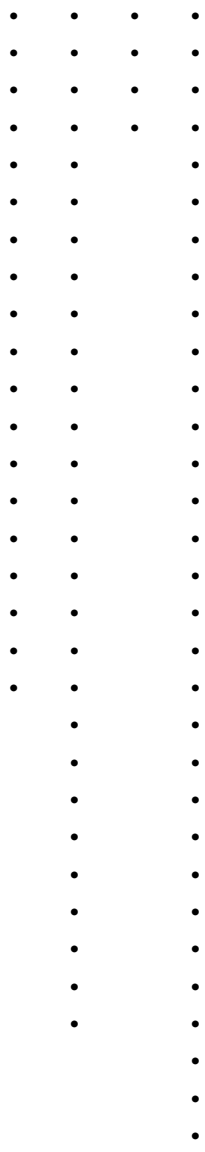
王貴は一片の容赦がなかった。
彼はあらゆる可能性を潰しにかかる。勝ち目が99%であろうが妥協はしない。1%でもあるのなら、負ける可能性があるのならそれすらも見落としはしない。

徹底的で、容赦なく、執拗な、完全主義者。
今の王貴に、慢心は――――ない。

そんな王貴に、百代は落ちながら呟く。
限りなく、小さい声で。

「この、頑固者」

瞬間。
七浜市の青空で、大きな爆発が起きた――――。



右腕は、動く。
左腕も、動く。
両手を握り締め、開く。
右足と左足の感触もある。
五体満足だ。

爆発され、勢いよく地面に叩きつけらてもなお、百代は意識があった。
そのときに出来た怪我はすでに完治している。

たいした威力だった。
川神鉄心の毘沙門天レベル――――とまではいかないが、それに迫る威力。

さて、どうしたものか。と、百代は思案する。

今の彼女の状態はうつ伏せに倒れている状態。傍から見れば、気絶しているようにも見える。

このまま王貴が近づいて、不意打ちをするのが理想の展開なのだが、

（今回はそんな上手くいかないか……）

百代はそう結論付ける。

いつもの王貴なら、油断して近づいてくるだろうが、今回はまったく違う。

気絶していようが、敵対したものは息の根を必ず止める。

彼も必死なのだ。

以前の自分に戻ろうと、必死なのだ。この戦いに負けられないのは、百代だけではない。王貴も同じ思い。

やる気になったアイツほど厄介なものはないな。と、百代は心の中で愚痴る。

そこへ、散歩帰りのような足取りで、もう一人の“サイキョウ”がやってきた。

「いい様だな」

王貴の声に、百代は答えない。

「起きろ。意識はあるのだろう？　貴様のことだ。これからどう戦うか打算しているのだろうが、それは無駄なことだ」

「やっぱり、バレてたか」

答えて、最強は跳ね起きる。そして、ようやく辺りを見渡した。

酷い有様だった。

まるで、戦場の後のような、そんな有様。

アスファルトは砕かれ、看板や信号機などと言ったものは薙ぎ倒されていた。高層ビルの全てのガラスが割れている。

ボロボロになったスクランブル交差点、そこに彼らはいた。

彼らが相対している距離はざっと７５メートル。

しかし、と。

王貴は辺りを見渡して、

「屑が一人も居らぬとはな。これも貴様の演出か？」

「あぁ、一般人に怪我させるわけにはいかないだろ？」

構える。

どんな攻撃が来てもいいように、百代は構える。

対して、王貴は嘲笑を持って返す。

彼からしてみれば、百代の反応は愚か極まりない。勝ち目のない戦いに、まだ抗う彼女が滑稽に映ったのだろう。

だからこそ、彼は嗤う。ただ嗤う。

「まだ、抗うか」

片腕を上げる。

それと同時に、砂の球体が百代の左足に纏わり付く。

恐らくそれは砕かれたアスファルトをさらに砕いたもの。それを、土行で操っているのだろうと予想できる。

「――諦めろ」

彼はそういうと指を鳴らす。
パチンと、乾いた音が聞こえた。

その瞬間、バギンと音を立てて百代の左足が折れる。砂の球体を操り、圧力をかけて折ったのだろう。

次は顔。
王貴は意識を百代の顔に向けた――――が、百代はもう彼の間合いに入っていた。

振るわれた拳の一打。まさに、閃光が如く。

その拳は胸部に振るわれた。
不意を突かれた一撃。王貴にその一撃が防げるはずもなく、彼はそのまま後方へ殴り飛ばされる。

左足はすでに、完治している。

百代の猛撃は止まらない。
彼女は己が飛ばした王貴に瞬時に追いつき、その拳を再度、振りかぶる。

「チッ――――」

舌打ちをして王貴は両腕で顔面を守る。

だが狙いが違う。

百代の狙いは、彼の胸部。つまり、最初と同じ箇所。

そこを、容赦なく拳を打ち付ける。

あまりの衝撃。たまらず王貴の体は地面に打ち付けられる。

その衝撃は、地球（ほし）を揺らし、地面には亀裂が走る。

それでもなお、王貴の鎧は健在である。

「それで終わりか？」

「アホ。そんなわけないだろ」

そう答えると、最強は問答無用で拳を振り下ろす。

同じ箇所。またも胸部。

（この女――どういうつもりだ――？）

狙うのなら、王貴の顔面だ。そこが王貴の致命傷、唯一武装していない部分。

勝つためなら、迷わずそこを狙うべきだ。

だというのに、百代は狙わない。あろうことか彼女は胸部を、金行で固まれたフルプレートの上から殴りつけている。

川神百代は、本気ではない――――――。

（馬鹿な女だ）

怒りを通り越して、呆れを覚え始める。

この女はまだ自分のことを救おうと言う気のようだ。そう認識するだけで、笑いがこみ上げてくる。

王貴は言った。

王（オレ）を止めたくば殺せと。そう忠告したにも関わらず、彼女は王貴を殺さない。あまりにも愚かなことか。

それに王貴は知っている。
百代が全力で殴るたびに、その拳は砕けていることを。
当然だ。王貴の鎧は金行で造り上げられている。言ってしまえば、世界の一部が王貴を守っているのだ。
いくら化け物とはいえ、百代は良くも悪くも人間だ。人間が世界に勝てる道理もなく、拳が砕けるのも当然の結果と言えよう。

そんな事実を省みることなく、百代は愚直なまでに攻め続ける。
度し難いにも程がある愚かしさ。王貴はそう結論を下す――――が、

（――なんだ？）

眉をしかめる。
王貴の中の何かが告げる。これ以上攻撃されるのは不味い、と。
間違いなく何かが警告する。

――何を馬鹿な。

己の鎧の強度くらい熟知している。

この武装こそ最硬の守りだ。何人たりとも破壊することは出来ない城壁。

何を不安がる必要があろうか。何を警戒しなければならないと言うのか。

彼の計算では、このまま消耗戦だ。

百代は拳を砕き、その傷を瞬間回復するために気を回す。その繰り返す。最後には気が枯渇し、彼女は瞬間回復できなくなる。そこを叩く。こういう計画だった。

完璧な計算なのかもしれない。

だが、王貴は忘れている。相対しているのは人類最強。それは、自分の計算すら軽く超える化け物だと言うことを――――！

「なに――――――？」

呆然と言葉を漏らし、己の鎧を見る王貴。

絶対強度だった武装に、漆黒に染められた鎧に、一本の亀裂が入っていた――――――。

ありえない。こんなことありえない。

「あと、もう少しだな……」

「貴様――――！」

「なぁ王貴、もうやめないか？　いい加減、目を覚ませ」

そう言うと、百代は拳を止め、王貴を抱き寄せる。

いつ消えるかもわからない陽炎のような存在を百代は抱きしめる。

もう離すまいと、強く。ただ強く。

「お前がどうして、王になりたいかなんて知らない」

呟いて、彼女はより一層強く抱きしめる。

鎧越しでもわかるくらい、彼は幼く弱弱しい。

「王になりたいなら勝手にすればいい。だが、孤独にならないと王になれないのなら、そんな夢捨てろ」

「――――戯言はそれだけか？」

言葉と同時にあるのは、腹部への衝撃。
そこから、焼けるような灼熱へ、体中に走る激痛。と、めぐるましいほどの変貌を遂げる。

王貴を静かに離し、百代は視線を下に向ける。

腹部からは一本の剣が生えていた。だがしかし、それは生えているのではなく刺さっているのだと嫌が応にも気付かされる。

「ゴッ……！」

口から赤い鮮血が溢れ出そうになるも、彼女は何とかそれを飲み込む。血が持つ特有の鉄のような味がした。

ゆらりと立ち上がり、王貴は口を開く。

「ハッ、そうやって王（オレ）から油断を誘おうとしているのであろうが、そうは行くものか。王（オレ）に同じ手が通用するわけがなかろう」

「何を……ッ」

言っている。

そう百代が言葉を続けようとするが、彼が何を言っているのか分かってしまった。

恐らく彼が言っているのは、命を狙っていた暗殺者たちのことを言っているのだろう。

誤解だ。私はそんなつもりはない。と、百代は否定したかったが、

「死ね、女」

腹部に刺さっていた長剣がゴッ！　と爆音が鳴り響く。

その威力は凄まじく、何もかもが粉々に吹き飛ばされた。

その余波で、建造物の軒並みは頼りなく揺れ始め、粉塵が舞い始める。

――――勝った。

確信した。彼は間違いなく勝利を確信した。
あの爆発は内部からのもの。いくら川神百代といえど、内部からの爆発にはひとたまりもない。しかもこの威力だ。生きている筈がない。

と、前から気配。

目を見開く。
王貴の視界にはありえないものが、映されていた。

川神百代――。
彼女は健在だった――――。

「川神流、禁じ手――――」

構える。
そして、

「――――富士砕きィ！」

悪魔にも勝る一撃が放たれた。
狙いは勿論、胸部。
その途方もない一撃が、何することもなく突き刺さる――――。
その刹那、百代は確かに王貴の鎧を砕いた手応えを感じ取った――――。

第４１話　最凶の黒と最強の白（後書き）

皆さんこんばんわ！　こんにちは！　おはようございます！　おやすみなさい！　兵隊です！

ようやく更新することが出来ました。
そんなこんなでＶＳ百代戦。次回で終了ですｗ無駄に長いと言う。
次回は釈迦動さんが乱入するのか、はたまたゲストキャラの豪くんが乱入するのか。それは次回のお楽しみと言うことでお願いします！

霧夜王貴（マジキチｖｅｒ）【人物】

疑うことなき本編の悪役。
通常の王貴をダークサイドに落とした感じ。ヒロインすらニッコリ笑ってオーバーキルするとんでもない奴。
瞳孔が若干開き気味。悪い子街道驀進中の反抗期。厨二病。

九鬼英雄（川神学園）【人物】

九鬼家の長男で、霧夜姉弟の幼馴染。
エリカをエリカ殿と慕い、王貴を弟分と面倒を見る。さりげなく心にも世話を焼くナイスガイ。
王貴に劣らずの唯我独尊っぷり。九鬼家だけに色々とぶっ飛んで

いるが、常識は少しわかっている。
クリスとは違う意味でのＫＹ（空気を読まない）。おでこに×印の傷があるのは言うまでもない。

九鬼揚羽（スーツ）【人物】

九鬼家の長女で、霧夜姉弟の幼馴染。
お姉ちゃんツートップの一角。
とはいっても、揚羽はどちらかというと“我が子を谷底に突き落とし～”的なアレなので、英雄には甘くない。勿論、王貴にも甘くない。
しかし、妹である紋白には甘い。というか、甘かったらいいな。と思うのは兵隊だけだろうか？
エリカのキリヤカンパニー乗っ取り計画に賛同している。

九鬼紋白（？）【人物】

九鬼家の末っ子で、霧夜姉弟の幼馴染。
金持ち幼馴染軍団のロリ担当。お姉ちゃん＆お兄ちゃんＬＯＶＥという大変すばらしいスキルを持っている。
王貴との関係はまだ明かされていない。

不死川心（着物）【人物】

霧夜姉弟の幼馴染。
金持ち幼馴染軍団のヘタレ担当。
作中でも結構な被害にあっている人物。王貴にパンツ見られるは、

彼女か聞かれて速攻で否定されるは、挙句の果てにエリカに脅されるはと散々。

意外と尽くすタイプのようで、マジキチ王貴にも怖がりながらも立ち向かっていく。

王貴と契約中で、幼いころに惚れる。ヘタレ可愛い。

予告　まじこいにはツイッターがあると思う

――――“Ｔｗｉｔｔｅｒ”

それは、個々のユーザーが“ツイート（ｔｗｅｅｔ）”と称される短文を投稿し、閲覧できるコミュニケーション・サービスである。“ミニブログ”“マイクロブログ”といったカテゴリーに括られる。

もっと詳しく説明すると、Ｔｗｉｔｔｅｒは、ブログ・ＳＮＳとチャットの中間のようなシステムを持つ。

自分専用のページ“ホーム”のタイムラインには、自分の投稿とあらかじめ“フォロー”したユーザーの投稿が時系列順に表示され、各ユーザーが自分の近況や感じたことなどを投稿し、時に他のユーザーがそれに対して話しかけたりすることで、メールやＩＭに比べてゆるいコミュニケーションが生まれる。

一方“キーワード検索”をするとキーワードを含んだ投稿のタイムラインが生成され、キーワードを含んだ投稿でつながったグループが自然発生する。同じキーワードを含んだ投稿をすれば、グループに参加することもできる。“トレンド”により、いま多く投稿されている“キーワード”を知ることができる。トレンドの範囲を国別に、または主要都市別に絞り込む機能もある。日本は日本全国と東京のみ。

投稿や閲覧は公式サイト上で行うほか、便利な機能を備えた各種のクライアント・クライアントウェブサービスや、ｉＰｈｏｎｅや

ａｎｄｒｏｉｄといったスマートフォン用のアプリも多数公開されており、またＵｂｕｎｔｕ　１０．０４以降では標準でマイクロブログクライアントのＧｗｉｂｂｅｒが搭載され、デスクトップ環境に統合されるなど、様々な環境で使うことが出来る。

マスメディアでは、Ｔｗｉｔｔｅｒの説明として簡易投稿サイトなどと表現される。（ウィキペディア参照）

人類最強　１ゲット！
２０１１／１１／１１　００：００：００

人類最強　これから寝ないでツイートするなう
２０１１／１１／１１　００：０１：０１

人類最強　でも普通に辛い。どうしよう
２０１１／１１／１１　００：０２：０５

人類最犬　@人類最強　お姉様、私がいるわ！
２０１１／１１／１１　００：０２：０７

自由人　ここは風間ファミリーが占拠したー！なう！
２０１１／１１／１１　００：０３：１０

ＳＵＧＵＲＵ　さて、けいおん！！！！見て寝るか
２０１１／１１／１１　００：０７：１１

人類最強　同志エリーから写メが来たなう
２０１１／１１／１１　００：１０：５０

人類最犬　素振りは基本！
２０１１／１１／１１　００：１１：３７

愛しい人の鞘　こちらスネーク。お嬢の部屋に侵入した。指示を頼む。
２０１１／１１／１１　００：１３：５９

ＳＵＧＵＲＵ　@愛しい人の鞘　パンツうｐ
２０１１／１１／１１　００：１４：００

自由人　@愛しい人の鞘　京なにしてんだ？
２０１１／１１／１１　００：１５：４３

人類最強　ちょっとトイレ行って来る
２０１１／１１／１１　００：１５：５８

筋肉マイスター　俺様みたいなイケメンマッスルになりたい奴は豆を食え
２０１１／１１／１１　００：１６：１５

筋肉マイスター　@愛しい人の鞘　おっぱいうｐ
２０１１／１１／１１　００：１６：２０

人類最犬　次は腕立て！
２０１１／１１／１１　００：１７：３１

愛しい人の鞘　ＯＨ……勘付かれたｗｗ

２０１１／１１／１１　００：１８：２０

ＳＵＧＵＲＵ　@愛しい人の鞘　無茶しやがって……

２０１１／１１／１１　００：１８：５４

自由人　暇だから散歩するぜ！

２０１１／１１／１１　００：２０：５４

愛しい人の鞘　すごい怒ってるｗ本気で逃げてくるｗｗ

２０１１／１１／１１　００：２２：３１

自由人　お、あれ王貴じゃん

２０１１／１１／１１　００：２３：５８

自由人　ちょっと、話しかけてくるぜ！

２０１１／１１／１１　００：２４：３２

人類最強　帰還。あれは衝撃な写メだった

２０１１／１１／１１　００：２４：３５

人類最強　@自由人　待て！今話しかけるのは危険だ！

２０１１／１１／１１　００：２４：５９

ＳＵＧＵＲＵ　あずにゃんぺろぺろ

２０１１／１１／１１　００：２５：３９

人類最犬　今日の鍛錬終わり！

２０１１／１１／１１　００：２８：２７

ＳＵＧＵＲＵ　さて寝るか。けいおん第五期も楽しみだ

2011／11／11　00：30：51

自由人　めっちゃ怒ってた
2011／11／11　00：35：15

人類最強　@自由人　何て言ってた？
2011／11／11　00：35：25

自由人　@人類最強　「姉上はどこだ！」「八つ裂きにしてやる！」って言ってた
2011／11／11　00：37：39

人類最強　@自由人　エリー、無茶しやがって……
2011／11／11　00：38：55

筋肉マイスター　誰だ、このイケメンでナイスガイは……
2011／11／11　00：40：12

筋肉マイスター　ハッ、俺様か！
2011／11／11　00：41：35

――――ただいま、作成中。

予告　まじこいにはツイッターがあると思う（後書き）

ふざけてやりました。
ツイッター名とかは、まじこいファンならわかると思いますw

第４２話　最凶の意地、最強の想い（前書き）

将軍「君たちはガチャ子というキャラクターを知っているかね？
知っている君、ウルクに内定おめでとう。存分に働いてくれたまえ。
知らない君、ご縁がなかったということで、次の活躍に期待しているよ」

第４２話　最凶の意地、最強の想い

結果は見るより明らかだった――――。

百代の最高の一撃を受けた王貴は後方へと吹き飛ばされる。そのまま彼は、道に面したファミレスの店内へと突っ込み、内装が壊れる音とカップが割れるかのような音が連続した。

手応えは、あった。

彼を守っていた漆黒の鎧を間違いなく砕き、痛手を負わせた。

そう確信できる一撃だった。

彼が吹き飛ばされたであろうファミレス店内を見つめる。それから一言。

「このわからず屋め」

そういうと、百代はその場に座り込む。

疲れという疲れが百代を襲った。

「さすがに、疲れた」

肩で息をしながら、そう呟いた。
呼吸を整えると、ありとあらゆるものをため息となって吐き出す。

そうして再びファミレスに視線を向ける。

馬鹿な奴だ。と、彼女は思う。

人間は孤独になれない。
そんなものは王貴自信が知っている筈だ。人は仲間を作りたがる。
だからこそ、彼もマルギッテやクリスを認めたし、生徒会執行部で部下を作ったし、――――翔一との決闘に負けたのだ。

だというのに、霧夜王貴はそれを認めようとしない。
孤高こそ王と考えているが故に、彼は絶対に認めない。彼を止めるには、王になることを諦めさせるか、考え方を変えるしか方法がないのだ。

そこは、自分の戦闘衝動という性（サガ）に似ていると、百代は思う。

だからこそ、彼女は何とかしてやりたいと思った。
何よりも――――惚れた男が落ちていく様なんて見たくなかった。

昔から知っている、お人好しで、寂しがり屋で、争いごとを好まず、いつもニコニコしていた、霧夜王貴に戻ってほしかった。
だからこそ、彼女は王貴と戦った。ありったけの憎悪がこめられている攻撃を一身に受けた。あらゆる手段で攻撃されても、戦い抜いた。

結果。百代は王貴を止めることに成功した。
その過程がどんなものであれ、彼女は止めたのだ。

何はともあれ、問題なのはここから。
あのわからず屋を変えなければならない。まったくもって、骨が折れる仕事だ。と結論付けると同時に、やりがいがある。と思っている自分がいることを感じる。

空を見上げた。
いつの間にか赤みが差してあり、橙色に染まっている空を見上げる。いつの間にか、夕暮れだったようだ。

と、

「――――――――――え？」

右腕に、銀色の鎖が巻き付いていた。
それが引き金に、次々と百代の体に鎖が巻き付いていく。首に、足首に、太ももに、左腕に。
鎖は最強の両腕を締め上げ、あらぬ方向へと曲げていく。全身に巻きついた鎖は際限なく絞り拘束する。

抵抗する間もなく、認識させる隙もなく、突如現れたそれは百代を捕縛していく。

それは、ファミレスから。
王貴が吹き飛ばされたファミレス店内から鎖は伸びていた。

そう。
まだ、何も終わっていない――――。

「馬鹿が。言った筈だ、王（オレ）を止めたくば、息の根を止める他ないと……！」

店内から、そんな声が聞こえてきた。

「王（オレ）を気絶させて、この闘争を終結させようなどと、甘いにも程があるぞ川神百代！」

店から出て来た王貴は重症だ。

彼の身を守っていた胸部の部分の漆黒の鎧は砕け、頭から血が流れている。

霧夜王貴では決して許容できないレベルの痛手を受けているのは言うまでもない。

彼は無数ある百代を捕縛している鎖のうち、一本に身を預ける。

立つことさえままならない。

執念、情念の類に王貴は突き動かされていたである。本来なら重症、立っていることも出来ない傷を負っているのに立ち上がってきたのはそのためだろうか。

鎖が軋む音が鳴り響く。

百代の力なのだろうか。その音は喧々たく、この七浜市全域に鳴り響いているのではないか、と錯覚できるほどの大きな音だった。

それほどまでに、百代の力は凄まじい。

通常なら、こんな鎖など彼女を捕縛したことにすらならない。通常の鎖なら、瞬時に千切られることだろう。

そう、“通常の鎖”ならの話だ。

「無駄だ」

その抵抗する様を見て、王貴は頭から滴る鮮血を拭おうともしないでそう言った。

「その鎖はな、捕縛している対象の気の容量が多ければ多いほど、強度が増すものだ。名は王の鎖……ッ！」

急に咳き込む。

王貴の唇から何かが滴る。それを彼は乱暴に手の甲で拭う。それは血。真っ赤に染まる鮮血。

それに驚いた様子もなく、王貴は続ける。

「貴様が“気道”とやらを開発したように、王（オレ）も貴様の対策としてそれを開発した。百代、貴様だけが奥の手を有しているとは思わんことだ」

王貴が言うように、王の鎖が千切れることはなかった。力いっぱい抵抗しようが、びくともしない。むしろ、強度が増す一方だ。

本来の彼女ならば、何とかしてこの現状を打破できたのかもしれない。

だが今の百代は、疲労している。つまり、本来の力を十二分に発揮できない。

つまり、攻めるのなら今。

この今しかない。

だが百代の視界には、武器を創造している王貴の姿はない。螺旋剣（エンリル）を抜いている王貴の姿もない。

あるのは、崩れ落ちている。自分の体重さえ支ええることが出来ずうつ伏せに倒れている王貴の姿しか映らない。

王貴も、限界だった――――。

無防備だったところに、川神流の禁じ手である“富士砕き”を受けたのだ。無事であるわけがない。

もはや体は死に体。虫の息に等しい呼吸。あれだけ強度を誇っていた鎧も、上半身の部分が砕け散っている。

だと言うのに、だと言うのに、彼の眼は死んではいなかった。

ありったけの憎悪、嫌となるほどの殺気を百代に向けている。
怨敵を見るかのような、そんな眼を百代に向けているのだ。

視界がぼやけるのを彼は感じる。。

白くなっていく視界で、地面に流れていく自分の血だけが鮮明に鮮血に映った。
紅い血、紅い景色。

夕焼けは燃えるようで、突き刺さるような色合いで――――。

「まだだ、まだまだ……」

王貴は腕に力を入れる。
足に力が入らないのなら、手を使うしかない。

震えながら、ガクガクと痙攣するかのように震えながら上体を起こす。
そうして、彼は震える腕で鎖に手を伸ばす。

しかしその手は空を切り、ゴシャっと音を立てながら体をまたも

地面に伏した。
己のこの体たらくに嫌気がさす。立つことさえままならない、この体が憎々しい。

今が、今がチャンスなのだ。
あの化け物は捕縛されている。手も足も出ない状態。このまま悪戯に時間が過ぎれば、あの化け物はまた動き出す。加えて、自分はこの状態だ。もはや勝ち目などない。
千に一つ、万に一つ。

そう思考すると、王貴はまた動き出す。
蜘蛛の糸を手にするかのように、王の鎖に掴もうともがく。

「もういい……」

ぽつりを言葉を漏らす。
百代の言葉は震えていた。王の鎖に捕縛され、苦しんでいる。といった理由ではない。

「もういい、やめろ！　どうしてそうまでして戦う！　もう……、やめてくれ……っ！」

ただ、辛いのだ。
彼が今やろうとしている“立つ”と言う動作。そんな簡単な動作でさえ、痛々しく、弱々しく、とても見て入れるものではなくなっている。

そんな状態になっても、戦うことを止めない王貴。
百代にとって、まったく理解できなかった。

当たり前だ。川神百代は霧夜王貴ではないのだ。彼の思想、思惑、理念など彼女がわかるわけがない。

それを考慮しても、百代には理解できなかった。
そうまでして何故戦うのか、そうまでして何故立とうとするのか。

考えても考えても答えが出ない。だからこそ、彼女は問いかけた。
わからないから。理解しようとしたから、彼女は問いかける。

しかし、

「止まるものか、屈するものか。王（オレ）は進み続ける……。王になるために、孤高に戻るために――――！」

答えるどころか、聞く耳すら立てない。
もはや、王貴の耳には百代の言葉など入ってはいなかった。呪文のように、呪詛のように漏らした言葉。それは百代へ送ったものではなく、文字通り己に言い聞かせる。

呪いのような、得体の知れない何かに突き動かされるかのように王貴は“立つ”と言う動作を、一心不乱に行う。
対する百代も、拘束を解こうともがく。王貴を倒すためではない。止めるために、彼女は拘束を解こうと唯もがく。

そして、ついに――――、

「――――起きろ。出番だ、エンリル！」

王貴は立ち上がる。
あまつさえ、虚空から金色の柄が現れ、それを引き抜く。

その“剣”は柄も鍔も金色。刃渡りはおおよそ長剣程度。
刃と言っていいのかまったくわからない、三段階に連なって出来ている円柱。それはゆっくりと、三段階に連なった円柱の刃はひき臼のようにゆっくりと、交互に起動し始める。

世界最凶の一振り、“螺旋剣（エンリル）”がここに具現する――――――！

「何故、そこまで戦う。と、貴様は問いかけたな？」

鎖に身を預けて、彼は口を開く。

やはり、一人で立つことさえままならないと言うのか。

王貴は続ける。

「決まっている、王になるためだ。王（オレ）の王道に貴様が立ちふさがると言うのなら、問答無用で蹴散らし薙ぎ払う」

音を立てて、エンリルは回転する。それは風を巻き込み、暴風を造り出していた。

回転するごとに激しさを増す暴風。そして、エンリルから漏れ出す膨大な気力。

回転は激しさを増し、込めている気力も眼に見える量に。

マルギッテ・エーベルバッハを倒したときよりも激しい回転数。

マルギッテ・エーベルバッハを撃退したときよりも激しい閃光が柄

から噴出している。
王貴は、百代を殺す気だ。

「この身は王となるために、今まで生きてきた。この生き方を変えるつもりなど毛頭ない。元より、この生き方しか王（オレ）にはわからぬ

一呼吸おいて、

「――――王（オレ）の生きる邪魔をするな、川神百代ォォォ！」

震える声で、嫌厭するかのような声質で叫んだ。
彼が何を思い考えてそういったのか皆目見当がつかない。

対する百代は、

「そうか……」

と、一言。
そして静かに、限りなく静かな声質で。

「ようやく、ようやくお前の気持ちを聞いたよ」

――――鎖は断ち切られた。

それはあまりにも容易く、呆気ない。
百代にとっては絶対の天敵とも呼べる鎖を、彼女は難なく断ち切った。

王貴に驚いた様子はない。百代がアレから脱することなどわかっていた。螺旋剣を具現、起動させるだけの時間を稼ぐための拘束。
次に繋げるための一手。

だが、これは計算外だった。
百代は技の構えを取ることもなく、気を練ることもない。何するでもなく、その場に佇んでいた

困惑した表情で、王貴は問いを投げかける。

「それは何の真似だ……？」

「今更だが、お前がどう思っているのか、何を考えているのか私には何もわからない」

百代は答える。

そうやって、ようやく行動に移す。両腕を広げる百代。

それはまるで、迷子になっていた我が子を見つけたように、迷わないように道しるべになっているかのように。遠方から帰ってきた恋人を歓迎するかのような。

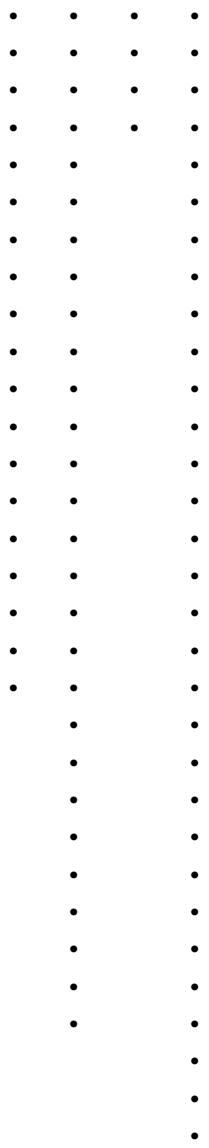
「だからお前の想い、思い切りぶつけてみろ。それで私が折れたのなら、私の負けでいい。あとはお前の好きにしろ。だが、私が折れなかったら――――」

「――――フン、貴様が折れぬ選択肢などない。王（オレ）の一撃を前にして死ぬのだからな」

そうして、両者の会話は終了した。

話すことなどない。語る言葉も出尽くした。あとは――――行動に移すのみ。

構える。
そこに一切の戸惑いもない。王貴の真紅の双眸は、殺意が込められた両目は視線を外すことなく百代を見つめる。
そして――――、
「螺旋乖離す大嵐の風(エレ・シュキガル)――――！」
一閃。
王貴が振るった螺旋剣から紅色の螺旋状の閃光が、数分狂わず百代へと直進する。
何もかもを飲み込み、何もかもを破壊せんとする螺旋。
空間そのものを食い破るかのような真紅の光。
そうして、遂にそれは百代へと着弾し、真紅の光に包まれると終わりを告げた。
それでも、最強は両手を広げたまま拳を握らなかった。
ただ、それだけの、話だった――――。



どさっ、と。
空から何かが落ちる音が聞こえた。

確認するまでもない。それは螺旋剣の一撃で宙を待っていた百代が地上に落ちる音だった。

だがあえて、王貴はそれを確認する。
――死んでいると思った。

腹部からの出血が酷い。
頭部からは鮮血が止め処なく溢れ、彼女の黒曜石のような豊かな髪は一部赤色に変わっている。
左腕はあらぬ方向に曲がり、片目はもしかしたらつぶれているのかもしれない。

百代は死んだ。
そう思ってしまうほど、彼女はズタボロだった。

「終わった……」

力なく呟くと、王貴はその場に座り込む。静かに、冷静に百代を見つめる。

彼の胸のうちには達成感、優越感、高揚感といった類のものはなかった。あるといえば、虚無感。何を感じるのもなく、無がその旨のうちに広がっていた。

この惨状を作り出したのは誰か。

考えるまでもない、霧夜王貴だ。だと言うのに、何故何も感じず、何も思わない。普段の彼なら高揚し、見下し、嘲笑う筈。

だと言うのに、今回は何もする気が起きない。

勿論、彼に後悔などない。

百代が目障りだったのは本当なのだ。だからこそ、王貴は殺す気で螺旋剣を放った。

だが、結果はこれだ。

何も楽しくないし、何も面白くもない。

そう思うと、胸のうちに何かが生まれる。

そう。これは――――失望。

「どうした。立て、百代……」

自然にそう言葉を漏らした。

自分は何を言おうとしているのだろうか。歯止めが、効かない。

「王（オレ）を止めるのだろう？　貴様はそう言った筈。ならば、何故そこで寝ている。立て――――王（オレ）を止めて見せろ！」

爆発した感情は止まらなかった。

ごく自然に叫んだ言葉は、王貴自身でさえ困惑するもの。

――――王（オレ）を止めて見せろ。

何故、自分がそんなことを言うのか本人でさえ理解できない。

あれほど、王（オレ）は止まらない。王（オレ）を止めたくば殺せ。と言っていた己は何を言っているのか。

ここで、王貴はある答えに行き着いた。

王（オレ）は、オレは、僕は本当は――――。

「――――――ッ！」

思考を中断した。中断せざるをえなかった。

閉じていた百代の瞳が、うっすらと開いたのだ。

ありえない。そんなことありえない。

どうして生きている。何故生きている。何故何故何故何故――――！

――――あれほど、百代の生存を渇望していた少年は、今度は困惑へと変化する。

「ぁ――――」

少年の困惑をよそに、百代は口を開く。

救いを求めるように息を吸い、それすら苦痛と、小さく咳き込んだ。

それからニッと笑うと、

「やっぱり、生きてた」

ゆっくりとした動作で、彼女は立ち上がった。
笑っても、体に走る激痛は抑えようがないのか、弱々しい印象を感じる。

そんな弱々しい印象よりも、王貴にとっては脅威のほうが先出た。

何故立ち上がるのか、何故生きているのか。
この女も、クリスティアーネも、あの男も。どうして痛めつけても立ち上がってくるのか。

「何故だ……何故貴様は立ち上がる！　あの男もそうだった。何度痛めつけても、何度倒しても立ち上がってくる。何故、貴様らは……っ！」

「簡単なことだ。譲れない想いって奴があるからだろ？　だから私たちは立ち上がる。何度でもお前に歯向かう」

百代の傷は癒えない。
自身の回復に回すほど、余裕がないということなのだろうか。
そのボロボロの状態で、彼女は構える。
戦いは、まだ終わってはいない。

「行くぞ……。感じさせてやる、私の想いを。そして見せてやる、川神の拳を……」

王貴はエンリルに身を預けて、立ち上がる。
視線は百代から外さない。

空気が変わる。
ピリピリと、突き刺すかのような。

百代がやろうとしていること。それは、気を圧縮して放つ砲撃といった類のものではないことは安易に予想が出来る。
アレはもっと、別の何か――――。

「川神流最終決戦奥義――――無―」

「はいはーい、ストップー」

王貴の耳に、ありえない人物の声が聞こえる。

決してこの戦場にいるはずのない人物。

こんな血生臭い場所に、いてはならない人物。その声が聞こえた。

王貴はゆっくりと、視線を百代からその人物の方へと向ける。もはや百代など、思考の隅にすら存在しなかった。

そこまでその人物の存在は、霧夜王貴にとって大きいものなのだろう。

その人物は口を開く。

いつもの悪戯を思いついたかのような意地の悪い顔つきで、

「えらいボロボロじゃない？　なに、誰かに虐められたの？」

「あね、うえ……」

王貴は呆然と呟く。

いつもと変わらない口調。いつもと変わらない不敵な笑み。

霧夜エリカ――――。

それが彼女の名前であり、霧夜王貴の義姉であった――――。

第４２話　最凶の意地、最強の想い（後書き）

おはこんばんちは、兵隊です！

作中であった、川神流最終決戦奥義。あれはオリジナルです。
最終決戦奥義って響き。かっこよくないですか？ｗ

次回は王貴の過去に少し触れますよー。

風間翔一（制服）【人物】

風間ファミリーのキャップ。
霧夜王貴より主人公らしい主人公。
決闘から王貴をファミリーの仲間に入れたいのか、しつこく勧誘する。どういうわけか、王貴は彼を道化と命名する。
誰よりも自由で、型にはまらない破天荒な人物。

直江大和（制服）【人物】

風間ファミリーの軍師担当
原作主人公
箱根旅行を経て、王貴の印象を変えた一人。
翔一に世話を役様を見て、王貴は彼を保護者と命名する。
王貴と仲良くなって、あわよくばキリヤカンパニーを利用しようと密かにたくらんでいる。

島津岳人（制服）【人物】

風間ファミリーのマッスル担当。
呆れるほどのマッスルな人物。武士娘しかいない女性陣の裸を覗き見しようとしたナイスガイ。
密かに彼は王貴に一度勝利している。（第２６話参照）

師岡卓也（制服）【人物】

風間ファミリーのツッコミ担当＆女装担当。
自分を卑屈に考えてしまう少年。
最初は王貴を快く思わなかったが、箱根旅行を経て印象を変えた一人。
それでも、あまり近づきたくない人物認定している。

第４３話　エリカにとっての霧夜王貴

――霧夜エリカの登場で、王貴の百代の闘争は突然停止した。
その隣には九鬼揚羽がいる。
揚羽は百代に駆け寄り、エリカは王貴から視線を外さない。それは王貴も同じこと。駆け寄っていった揚羽など見ず、エリカにのみ視線を向けている。

「派手にやられたわね？」

「かすり傷だ」

弟の最大の強がりに、思わず苦笑いをこぼす姉。

それからすぐに、真剣な表情に変わる。

「強かったでしょ？」

「……」

エリカの意味深な問いに、王貴は答えない。

彼が今何を考え、何を思っているのか。姉であるエリカにもそれはわからない。

ただ、一つ。一つわかっていることがある。

彼は自分の中に抱えている矛盾に気付いたと言うこと。

自分の邪魔をする輩は問答無用で蹴散らす。

だが止めるために立ちふさがるといった者に限ってはそうではない。しかし手加減などはしない。当然だ。王貴の価値観から、自分の邪魔をする屑は邪魔なだけだ。そんな輩を生かす理由も無い。

蹴散らしてところで、彼は失望をする。王(オレ)を止めるのではなかったのか？　と。

――――そこが、彼の大いなる矛盾。

止めてほしいと願っているにもかかわらず、全力で抵抗する。目障りだから潰した。でも、自分を止めてほしいと言う気持ち。

その二つの気持ちが、複雑に絡み合い鬩ぎあう。

何はともあれ、彼はようやく己の中にある矛盾に気付いたのだ。

そこで、エリカはこう評価を下す。

「臆病者」

「……ッ、姉上に何がわかる……！」

今度はすぐに返答が返って来た。

なんともいえない表情で、エリカを睨む。

今にも泣き出しそうな、泣き出すのを我慢するかのようなそんな表情に変わる。

過去に何が王貴の身に起きたのか、そして何を感じたのか、エリカはここにいる者の中で一番理解している。

知っているからこそ、あえてこう言う。

「わからないわよ。わかるわけないでしょ？　アンタが何も言わないんだから」

そうだ。

王貴は何も言わない。今も昔も、恐らくこれからも。彼は何も言わないで生きていくことだろう。助力を請うわけもなく、独りで彼

は生きていくことだろう。

そこが、エリカは気に入らない。

何が王は孤高でなくてならないだ。何が独りで生きていくだ。

王は孤高にならなくてもなれるし、独りで生きていく度胸も無いから、風間翔一との決闘に負け、今の川神百代との死闘でも自分を止めることが出来なかった彼女に失望したのだろう。

中でも一番気に入らないのが、周りに何も言わないで独りで背負い込んでいるということだ。

辛いのなら辛いと言えばいい、悲しいのなら悲しいと言えばいい、痛いのなら痛いといえばよいのだ。

だと言うのに、彼は何も言わない。

そういった泣き言をいえるから、肉親ではないのか。幼馴染ではないのか。家族ではないのか。

少なくとも、過去に自分はそう教わった。

それも目の前にいる、狂おしいほど愛おしい義弟にだ。

その当の本人が何も言わないのでは、話になどならない。

これほど、腹立たしいものは無かった。

「辛かったら辛いって言いなさい。泣きたいのなら泣けばいい。痛かったら痛いって叫べばいいのよ。一人でかっこつけて、何もかも背負い込んでじゃないわよ。それぐらい周りにも背負い込ませなさ

い」

エリカの言葉。

それは過去に言った、王貴の言葉そっくりのものだったことを彼は気付いているだろうか？

その言葉を聴き、王貴は思う。

もし、今からでも辛いと言えるのなら、泣くことができたのなら、痛いと叫べるのなら、こんな矛盾している道など歩まなかっただろう、と。独りでいることもなかったのだろう、と。――王になろうと決断することもなかっただろう、と。

幼馴染たちに囲まれ、自分を倒した“あの男”と笑いあっている自分の姿を思い浮かべる。

彼はそんな、正常で非現実な事を考えていた――。

――だが無理だ。自分はもう歩いてしまった。王の道を、もう二度と“特別”を失わない為の手段をとった。

もはや何もかもが手遅れなのだ。

霧夜王貴は、もう何も変わらないし、変わるつもりもない。このまま堕ちるのみである。

故に、彼はこう切り捨てる。

「諦めろ。王（オレ）は独りで生きていく。理解しろとは言わん、納得しろとも言わん。ただ、諦めてくれ」

――――頼む。

心の中で付け足した。
これ以上、王（オレ）に構わないでくれ、と。
もう二度と、王（オレ）に“特別”を作らせないでくれ、と。

対するエリカの返答は簡単でシンプルなもの。

「嫌よ」

それからすぐに真剣なものから、意地の悪い笑顔に変わり、

「アンタは私たちが諦めることを――――諦めなさい」

その言葉、その表情、その様子。
それらを吟味して、王貴の眉が釣りあがる。

殺気こそ放っては無いものの、今すぐにでも武器を投擲するような雰囲気に変わった。

「姉上……！」

「私が諦めるわけないでしょ？　というか、私だけじゃないわ。心だって諦めてないし、クリスだって諦めてない。モモっちだって諦めてない」

何を馬鹿な。
彼はそう思いながら、百代に視線を向ける。

その瞬間。
少年の纏っていた剣呑な雰囲気は、穏健な雰囲気へと変貌を遂げる。

川神百代は諦めていなかった。

まっすぐな視線で、憎むような視線でなく怯えるような視線でもなく、真剣な表情で王貴をまっすぐ見ている。

王貴にとっては予想外だったのだろう。

あそこまで痛めつけたのに、拒絶したのに、殺害しようとしていたのに。まだ自分を助け出そうとしている。

「馬鹿か……」

「私もそう思うわよ」

思わず呟いた言葉に、エリカも呆れ混じりに同意する。

拒絶した、殺害しようとした、痛手を負わせた。

諦めるようにありとあらうる、手段を尽くした。だが止まらない。あいつらは止まらない。停止することなく、自分を説得しようとする。

無駄だ。これ以上、何を言っても無駄なようだ。

王貴はそう判断を下した。

こういう連中は暴という力で組み伏したところで折れることを知らない。諦めを知らない連中に諦めろなんて聞くわけがない。

となると、

「……王（オレ）は釈迦堂という男に用がある」

「川神の師範代だった人だったわね？」

「そうらしいな。アレは、昔の王（オレ）だ。今のような弱い王（オレ）ではなく、独りでいた頃の王（オレ）。アレを殺せば、昔の王（オレ）に戻れる。だからこそ、王（オレ）はあの男に用がある」

「なら話は簡単じゃない？　アンタが釈迦堂って奴を殺すのが先か、私たちがアンタの馬鹿馬鹿しい考えを改めさせることが先か」

こうするしかない。

エリカ達は折れないし、王貴も素直に説得される気など毛頭ない。

王貴を光に戻すほうが先か、王貴が闇に堕ちるほうが先か、この2択しかない。つまるところ、王貴とエリカ達の勝負。

――――面白い。

あれほど鬱陶しかったものが、今はそれほどでもない。

むしろ王貴は笑っていた。先ほど、百代と戦っていた狂気染みたものではなく、年相応の少し捻くれた少年の笑み。

自分に構う何もかもが鬱陶しかったのに、彼は楽しそうに笑って

いた。
理由など考えるまでもない、王貴は嬉しかった。

アレほど痛めつけたのに、立ち塞がり。アレほど捻じ伏せたのに、抗うことを止めない者たちの存在に。
あの男といい、不死川心といい、クリスティアーネ・フリードヒリといい、川神百代といい、霧夜エリカといい、どうしてこうにも諦めの悪い人種がいるのか。
王貴から見たら、馬鹿馬鹿しく効率がいいとはいえない行動。たった一人に命を張るなど、愚かにも程がある。

だがその行動があるから、愚か者がいるから、霧夜王貴は嬉しかった。
この連中を見ていると、独りになろうとしていた己が馬鹿馬鹿しく思える。考えてみれば、もう独りに戻ることなど不可能なのかもしれない。

だって周りには、馬鹿で考えなしで阿呆で粗暴だけど――――こんな素敵な連中がいるのだから。

もう二度と“特別”を作らないと決めていた少年の心に、それは確かに生まれていた。
まだ“特別”とは言えないけれど、小さな小さな想い。幼いころに、もう二度と作るまいと決めていた“それ”が、少年の心に生まれていた。

「姉上」

「ん？」

少年は何か、吹っ切れた表情で宣言する。

「待ってる。だから――――」

その言葉の先は無い。

王貴は風を操作し、竜巻を発生させる。それを背に接続するかのようにして、一気に大空に飛び去った。

待ってる。だから――――。

この先の言葉はエリカには聞こえなかった。だが、それは確かにエリカの耳に聞こえた。

待ってる。だから――――。

「えぇ、しょうがないから助けてあげるわ――――」

待ってる、だから――――僕を助けて。

彼女にはそう聞こえた。

少年は助けを呼んだ。ならば助ける。そこに理由など必要ない。今度こそ助けてみせる。救えなかったものを、今度こそ救ってみせる――――。

…………………………………………………………

…………………………

………………………

――――最凶は飛び去った。

その軌跡を霧夜エリカは見送っている。

川神百代と九鬼揚羽は、霧夜姉弟が何を話していたのかは残念ながら聞こえなかった。

しかしこれだけは言える。あの二人は“会話”をしていた。百代と王貴がしていたあんな暴力的な会話ではない。本当の、会話。近しい者とするかのような会話を。

この事実に百代は、少なからず嫉妬していた。
アレだけやってきた王貴の説得。それをエリカはほんの数分でやってみせた。説得でなくても、前に一歩前進して見せた。自分が出来なかったことをエリカはやって見せた。
それほど霧夜王貴にとって、霧夜エリカはそこまでの存在なのか。
そう考えると、百代は嫉妬せざるを得ない。

エリカがこちらに歩み寄ってくる。

――――私は馬鹿か……。

揚羽に肩を借りながら思わず自分に呆れる。

何を考えているというのか。
こんな時に自分は友に嫉妬している。今はそんなことよりも、王貴を何とかするほうが大事だというのに。

そう思っても、感情は制御できない。
じじぃの言うとおり、心も鍛えておくべきだったな。とぼんやり考えていると、

「モモっち、怪我はない？」

いつもの調子で、エリカが百代に話しかけてきた。
アレほど酷かった、百代の怪我は全快している。
腹部からの出血はなく。
頭部からは鮮血もとまっている。
左腕も元のそれに戻っており、、片目にはいつもの赤い瞳の彼女の目。

それを確認すると、エリカは頷く。
そうして彼女はこんなことを言った。

「それにしても、さすがモモっちね。結構大変かもしれなかった、あの子の説得も簡単に片付きそうよ」

目を丸くする。
エリカが何を言っているか、百代は本気でわからなかった。

いや言いたいことはわかる。
だがその言い方だと、百代のおかげで簡単になりそうだ。と、聞こえてしまう。

簡単も何も、説得したのはエリカの方ではないか。
彼女はそんなことを考えていた。

そんな百代の心情を理解してか、

「人類最強が諦めなかったから、あの子をあそこまで追い詰めたから、次の段階に進めるの。私がいようといまいと変わらなかったでしょ」

「だが、エリカ殿。これからどうする？　考えはあるのか？」

百代に肩を貸していた揚羽が問いを投げた。

次の段階に進んだところで、それをクリアしないと問題は解決しない。

揚羽が疑問に思うのも無理もない。

「クリスが王貴の心の檻を見つけて、モモっちがその檻の鍵を壊した。あとは簡単よ。あの子をそこからこっちに連れ戻すだけ」

ね、簡単でしょ？

と、エリカは百代と揚羽に向かって可愛らしくウィンクする。

確かに聞く分には簡単で単純なものだ。
だが聞くのとやるのとはまるっきり別のものだ。

「おいおい、簡単に言うけどなエリー。さすがにそれは――――」

「大丈夫大丈夫。あの子って結構、意志弱いから」

百代の心配などどこに吹く風。
何ら心配することなく、エリカはそう言い放つ。

王貴を揺さぶりかけた、王貴を動揺させた、王貴の意思を折れさせた。
ここまでは計算どおり。こうなる展開にするために、ここまで行動してきた。クリスを利用し、参加者を利用し、友まで利用した。
最愛の弟を救うために、霧夜エリカはどんな手でも使う。

援護射撃は十分。
最後の手柄は、“彼女”に譲ることにしよう。

計算どおりに運んでも、ここまで王貴が想われているとは計算外だった。

ＫＯＳが始める前に、クリスをけしかけて王貴を説得させるつもりだった。百代をたくみな話術で操り王貴と戦わせる予定だった。
だがしかし、彼女たちはエリカが何をするわけでもなく、自分から王貴と戦っていた。

少年を助けるために、少年を救い出すために。

計算外で予想の範囲外。
この誤算は、肉親として嬉しいものだった。

「ん？　おいエリー。何を笑ってるんだ？」

百代が訝しむようにして、エリカを見やる。

そこで、エリカは気付く。
自分は知らず知らず笑っていた、ということに。

「何でもないわー」

適当にそういうと、彼女は夕暮れに染まった空を見上げた。

彼女は嬉しかった。
世界はどいつもこいつも自分勝手だ。
自分のために戦う癖に、自分が楽したから戦う癖に、誰も王貴のためには戦ってくれない。はした金を積まれ誰も彼もが欲に目が眩み、王貴を付け狙う。

どうしてあの子に万の悪意を向ける？
どうしてあの子に一の善意も向けてやらない？
どうしてあの子を誰も助けようとしない？
どうしてあの子に見向きもしない？
どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして――――――。

勿論、過去にエリカも何とかしようとした。
しかし一の善意が千の悪意に立ち向かったとしても、そんなものは微々たる物だ。さらに王貴自身、エリカを巻き込むまいとして戦っていた。
そんなだから、エリカは何も出来なかったし、世界は何も変わらない。

何も言わない王貴に腹が立ち、何も出来ない自分に嫌悪し、何もしない世界を憎悪する。

だからこそ、今回こそ助ける。
たとえ非人道的といえようと、必ず霧夜王貴を救ってみせる。た

とえ世界が敵に回ろうと、霧夜王貴を連れ戻してみせる。

しかし思っていたより、世界は優しかった。

エリカが言う前に、世界は王貴を救おうと動いていた。

そのことが、エリカにとって何よりも嬉しい。

あれほど憎悪していたものが、希望を見出している。自分は思ったよりも単純なようだった。

そうしていると、

「しかし改めて見て、王貴一人説得するのに凄まじい被害だなこれは」

揚羽が口を開いた。

周りを見てみると、確かに。と、思う。

酷いなんて問題じゃない。悲惨なんて目じゃない。それほどの光景が広がっている。

これを九鬼財閥とキリヤカンパニーが弁償すると考えると、どれだけの金が飛ぶことになるのか。密かにエリカは楽しみにしていた。

「あの子の心の檻を見つけて、鍵を壊して、連れ戻すって動作を一片に出来れば、ここまで酷い有様にはならなかったわよ。多分」

「だがそんなこと出来る人間なんているのか？」

百代の問いに、

「いたわ」

瞬時に答える。

霧夜王貴にとってそれは、他人で始めての“特別”。

その人物は王貴に戦う術を教えて、ある意味今の王貴の生き方を決めた人物。

今思えば、“彼女”がここにいたらどれだけ楽に王貴を説得できただろうか。いや、彼女がいれば王貴はこんな生き方などしていなく、性格も屈折せず、素直のまま昔のままに生きていただろう。

彼女がいなくなったから、現在の王貴がある。もう二度と“特別

”を失わないために独りでいることを決め、王になって何もかもを支配し裏切られない道を選んだ。

「エリカ、その者はどこに？」

「いないわ、死んだのよ。あの子を守ってね」

揚羽の疑問に、空を見上げながら答えた。

いた、とは過去形。
その人物とはもう二度と会うことが出来ない。
殺されたのだ。霧夜王貴を守って、その人物は死んだ。
陳腐でどこにでもある悲劇が霧夜王貴の胸を抉った。

王貴の侍女であった彼女。
その者の名は――――シュタル。

彼女の容姿ははっきり覚えている。
同じ女であるエリカが嫉妬するほどの美貌。
薄い赤色の眼をしており、綺麗な蒼い髪の毛で、豊かな長髪。
その笑顔は、人を安心させるものであった。

エリカはシュタルを思い出した。

いつの間にか空も暗みに変わりかけていた――――――。

「まぁまぁ、君たち待ちたまえよ」

釈迦堂刑部とサードが激突すると思った否や、将軍がそんなことを言った。

予期せぬ制止に、サードは停止する。

釈迦堂も握っていた拳を解いた。だが、その視線は油断することなくサードを見ている。

当然だ。

訳のわからない戦力を無視することなんて出来ないし、釈迦堂はそこまで馬鹿ではない。

「どういうつもりだよ、将軍。これからこいつを血祭りに上げて、計画をめちゃくちゃにしてやろうと思ったのに」

「ヒッヒッヒ、言うじゃねーかよ。じゃあ、早く血祭りにしてもら

いてぇもんだなぁオイ」

「え、なに？　アンタマゾなの？　うわぁ、引くわー。いいおっさんがそれはないわー」

大げさに、芝居かかったようにサードはそういった。
表情も人の神経を逆なでするかのような表情。つまり馬鹿にしたような表情だ。

釈迦堂はそれを見て何も言わない。
平常の人間なら、間違いなく嫌悪するそれを見て小バカにするかのように笑う。

そのやり取りを見て、

「サード、君は少し黙っててくれないか？　私はこの男と話すことがある」

将軍が割り込んだ。
メガネのブリッジを指で持ち上げるかのようにして上げる。
口元はいつもと変わらず、不吉を連想させるかのような笑み。

「嫌だね、僕はこの野郎を今ここで殺す。誰にも邪魔はさせないよ。たとえアンタでも――――」

「私は黙れと言った筈だ。それ以上命令に背くのなら、私は君を粛清しなくてはならない」

将軍の笑みが益々増す。

そしてサードに視線を向ける。たったそれだけの動作。それだけでサードはぶわっと体中から汗が滲み出た。顔色もどこか青ざめている。

釈迦堂から見ても、サードという人物は他人の言うことを聞かないし、自分がやりたいことをやるだろう。

だというのに、アレはどういうことだろうか。明らかに将軍という人物に怯えている。

弱みを握られているのか、それとも単純にサードよりも強いのか。

前者だったら殺す価値も無いが、後者なら願っても無い。強者と戦うことこそ、釈迦堂刑部の生き甲斐だ。だからこそ霧夜王貴と戦いたいし、サードとも戦いたいのだ。

だからこそ、釈迦堂は将軍に期待する。

自分に歩み寄ってくるアレが強者であることを、自分を満足させ

るに値する者であることを。

それに対して将軍は、サードの反応を見て満足そうに頷く。
サードから、釈迦堂に視線を移す。

「まったく申し訳ない。アイツも悪い奴じゃないんだ」

「あー、アンタも苦労してんだなぁ？　俺も似たような連中いるからわかるぜ」

思わず釈迦堂は、自分が武術を教えている面々を思い浮かべる。
一人はサディストで、一人はすぐに人間を血祭りに上げ、一人はすぐに寝る。極めつけのもう一人は野獣ときたものだ。まったくもって、心労が耐えない。
とはいっても、釈迦堂は放任しているので、心労などあってないものなのだが。

そこで釈迦堂はあることを思い出す。
こいつらは、自分を試すために戦いに来た。最初に本人から聞いたものだ。
だというのに、目の前にいる肥満体系の人物は止めた。
何故？

「何か疑問に思っているようだね？」

釈迦堂は思考を中断する。

目の前にいる肥満体系の男は何が面白いのか、愉快そうに笑っている。

「大方、何故私が戦いを邪魔したのか。と疑問に思っているのだろう？　そんなものは簡単だ。君は試すまでもなく強くなっていた、それだけに過ぎんよ」

「おいおい、その根拠はなんだよ？」

「なに、私はこれでも一国を率いてた身だ。人を見る目はある方だよ」

ここで違和感。

釈迦堂は肥満体系の男から何か違和感を覚える。

今思えば、最初から違和感を感じていた。

この男の口ぶりに、まるで“長年知っている知人に話をしている

かのような口調”。

無論、釈迦堂と彼は初対面だ。知っていたとしても、こんな強烈な男など忘れるはずがない。

馴れ馴れしいとはまったく違う。

人見知りをしないとも違う。

「お前、一体何者だ？」

最初と同じ問いかけをする。

お前は何者だ、と。

ありきたりで、何の捻りもない問いかけ。

その問いかけに将軍はこう答える。

「何者か？　ふむ、ではこう答えるしかないな。私はただの敗残兵、とある男に完膚なきまでに負けた負け犬だ」

「……答えになってねぇぞ？」

「そういうことだ。答えになってない、つまりはその質問に何の意

味も持たない」

そんなことより、と将軍は言葉を区切る。

「実のある会話をしようじゃないか？　そうだな例えば、霧夜王貴の話題とかどうだろう？」

「なに？」

釈迦堂の反応を見て、将軍の笑みは益々深まる。

「彼の本気、見たくないか？　いや、君なら見たい筈だ。私にはわかる、君以上に私は君をよく知っている。」

「……」

釈迦堂は沈黙を以って返答する。

確かに見たいが、将軍の言葉に同意するのは癪だったのだろう。

構うことなく、将軍は続ける。

「彼の本気を見たいのなら、彼の大事なものを壊すことだ」

「あぁ？」

抽象的で、意味がわからなかった。

彼の大事なものを壊す。

彼とは王貴のことを指しているのは言うまでもない。その大事なもの――――。

「ここで言う大事なものとは、人間を指している。つまり、彼の近しい人間を壊す。そうすれば彼の本気を見ることが出来る」

「おいおい……」

さすがの釈迦堂も耳を疑った。

目の前に肥満体系の人間は何を言っているのか。

今日初めて会った、初対面の人間に進める方法ではないだろう。

――イカれてやがる。
目の前にいる肥満体系の男を、釈迦堂はそう結論付ける。

「初対面の人間の言うことを聞けってか？　学はねぇが、俺もそこまで馬鹿じゃねぇぞ？」

「だが君はやる。霧夜王貴の本気を見たいから、自分の渇きを癒したいから。それに私は言った筈だ、君以上に君の事をよく知っていると――――君は、必ず私の言うとおりに動く」

将軍はそういうと、狂気的に爛々と光る双眸を釈迦堂に向ける。

正気じゃないと思った。
彼が何を考えているのか、皆目見当が付かない。

そにこの男は信用ならない。
根拠などないし、証拠もない。だがこの男だけは信用してはならない。そう言い切るに値する雰囲気を男は纏っている。

何より、この男は自分を利用する気だ。
どういう目的があって、王貴にけしかけるのかわからない。

利用されることは気に入らない。
それ以上に、王貴の本気を見てみたい――――自分がいる。

「お前の思惑に乗るのは気にいらねぇが乗ってやる。誰を殺ればいいんだ？」

「おいおいこれは君にとっても得だと思うがね？　何せ、雇い主の依頼でもある標的の戦力も削ぎ、自分の欲求も満たせるのだから」

将軍は一呼吸置いてから、

「総理チームの一員である――――不死川心という少女を壊す。たったそれだけの、些事だよ」

ニヤリ、と。

不吉な笑みと共に、将軍は告げた

第４３話　エリカにとっての霧夜王貴（後書き）

ボンジュール皆さん、兵隊です！

この回でどうして王貴が王を目指すことになったのかが明らかになった……筈です！わからなかった人がいたら、ひとえに自分の説明不足ですね……。

なんとも、情けない理由でしたｗ

そして王貴の師匠とも呼べる人物の登場シュタルさん（故）。

さらには将軍の暗躍と結構詰め込んだ話になっていると思います……。

脈略もない作品ではありますが、これからも末永くお付き合いくださいませ……！

何はともあれ、心理描写が難しい！

上手く書けたかどうか、不安になる今日この頃です……。

諸事情により、登場人物紹介はお休みします。

第４４話　似て非なる覚醒（前書き）

冬馬「せーの」
王貴＆小雪「「ジュンお兄さーん」」

準「あついし、さむいし、ダルイ。はぁ、俺今が超憎い」

王貴「おいこの生物、開幕早々愚図り始めたぞ？」

小雪「聞いてやろーそうしてやろー」

準「規制とか激しくなりやがって。ロリコンには世知辛い世の中になってよお兄さんロリコンじゃないけど。正直やってらんない訳よお兄さんロリコンじゃないけど」

小雪「それでそれで？」

準「お兄さん生まれた時代を間違えたみたいで、どうしようもなく未来が超憎い……なぁ、どうすればいいんだ？」

小雪「ジュンは前世で活躍しすぎたから、現世で休憩中なんだよー」

準「それ超納得！　説得力のある神秘のエナジー！　待ってろよ来世の俺ェェェェ！」

王貴「今のでか！？　今の適当な説明で納得するのか！？」

冬馬「よかったですね、準」

～オチはない～

第４４話　似て非なる覚醒

七浜市　某所　路地裏

――――つまんねぇ。

少年、渡辺豪は退屈を覚えていた。
昼間はいい感じだった。よく分からない外人２人、その２人とチームメイトらしい兄弟２人を倒した。
そこまではいい。想像していたものよりも強い相手と楽しめたし、幸先もよかった。

だがその後がよろしくない。
ケンカを売っても売っても、それらは皆雑魚ばかり。取るに足らないものだったし、豪を満足させるには至らない。

だからこそ、少年は退屈していた。
理想としていた戦闘と現実で行った喧嘩。その差は恐ろしいほどの開きがあり、もしかしたら埋めることの出来ないのかもしれない。

自分がこのＫＯＳでやってきた戦闘を振り返りながら、空を見上

げる。
豪がいる路地裏から見える、ビルとビルの間に広がって見える夜空。残念ながら星は見えないが、曇っていないことはわかった。

――――マジでどうするかなぁ
――――川神百代に喧嘩売りに行くか？
――――いやいや駄目だ駄目だ。“アイツ”に止められてたっけ。
――――それじゃ、“キリヤオウキ”って奴をぶっ倒しに行くか？　でもそれやったら、釈迦堂さんに殺されるかもだしなー。

豪は即時に頭の思考を切り替える。
川神百代と戦わない、という“アイツ”との約束を守るならまだしも、釈迦堂に殺されるから“キリヤオウキ”と戦わないという結論にはならない。

だってそうだ。
渡辺豪は臆病な人種じゃない。釈迦堂刑部は確かに恐ろしい人物かもしれない、暴力が人の形をして服などを着飾ったらああいう風になるのだろう。
そして釈迦堂形部は自分の獲物を横取りされて、黙っていられるような男でもない。己の欲望に忠実に、横取りした人物を血祭りにあげることだろう。例えそれが、自分の弟子達の行為であったとしてもだ。

弟子である豪にとってそんなことは百も承知。
だが彼は、釈迦堂の獲物を横取りしようという考えに至った。釈

迦堂に対する恐怖がない訳ではない、恐怖(それ)よりも彼の【師の獲物がどれほどのものか】といった興味と【その獲物と戦ってみたい】という欲望が勝っただけの簡単な理由だった。

考えが纏まった。
キリヤオウキをぶっ倒すという目的も定まった。
あとは標的を効率よく探して、それを叩くのみ。

「……駄目だ。俺キリヤオウキって奴の顔知らないじゃん」

だがそれはいきなり出鼻をくじかれる。
初歩中の初歩、というか常人ではしないであろうミスを彼は犯す。

――――標的の顔を知らない――――というミスを。

どうしようもない。
まったくもってどうしようもない、つくづくどうしようもない。

「がぁぁぁぁ!!　馬鹿か俺は、いやアホか俺は!　まぁどっちでもいい!　馬鹿だ俺はァァァ!」

彼は何をするでもない。
ただ八つ当たり気味に、近くに立っていたビルの壁を思いっきり殴りつけた。
それと同時にコンクリートで出来た壁に、握りこぶしくらいのへこみが出来た。
言うまでもなく、渡辺豪が殴りつけた場所である。

「何で顔知らねぇんだよ！　聞いてないからだよ、知らないのなんて当たり前だろォォ！　聞いとけばよかったド畜生ッ！」

「何やってんだよ豪？」

「こうなりゃ何が何でも探してやる。顔を知らなくても探してやる、見たことねぇが見つけてやる。どうせ名前からしてめっちゃ偉そう奴に違いねぇ！」

「おいってばさ。聞こえてんのかよー？」

「何だよ、聞こえてねぇよ！」

「聞こえてんじゃんこの馬鹿」

実を言うと、ビルの壁を殴った辺りから気配は感じていた。
反応しなかったのは、ただ構うのがめんどくさかっただけ。

豪はその声のした方向に振り返らない。
声質、喋り方、気配。この3点から誰が自分に話しかけたか分かっているからだ。
――――板垣天使――――
間違いなく彼女。

「それで何の用だよ？　俺は見ての通り凄い忙しいんだけど？」
「どこがだよ。思いっきり暇そうに八つ当たりしてたじゃん」

ケラケラと楽しそうに天使は笑う。
豪は振り返る。やっぱりそこにいるのは板垣天使だった。
片手にはゴルフクラブ。パンクファッションに身を包んでいる彼女にとってそれは不釣合いな獲物で、他人を攻撃するためのものだということはすぐに分かる。

「うるせぇなー、お前だって暇そうにしてんじゃん。それと見つけたのか？　お前の片思いの相手の……何だっけ？　ハンマーブロス？」
「ハンマバキだよ、この馬鹿！　もう一度間違えてみろ、ぶっ殺すかんね！」

「ちょっと名前間違えただけだろ？　そんな怒るなって」

「オメェのは明らかに狙って外してんだろ！？　ブロスどっから出てきた！」

「ハンマーといえば、ブロスだろ？　実はここだけの話、ハンマーブロスか室伏広治か迷ったんだけどな？」

「……オメェ本当に人類かよ？　人間と会話してる気になんないんだけど」

疲れ混じりにため息を吐く天使に、豪は首をかしげる。

この目の前にいる女は何を言っているのだろうか？　と不思議そうに首をかしげたが、深く追求せず“まぁ、いいか”と思考を切り替える。目的も定まっている。

【キリヤオウキを見つけ次第ブッ飛ばす】と【川神百代となるべく交戦しない】の２つ

前者は絶対に実行するが、後者は守れるかどうか分からない。相手から攻撃してきたらそれはしょうがない、喧嘩を売られたということになるのだからそれは買わないと失礼だ。そしてここで、豪も本意ではない。という言い訳も付け加えておく。

気合十分。

胸の辺りで思いっきり拳同士をぶつける。

楽しくなってきた。目的を見つけるというのは、かくも楽しいものなのか。

「んじゃ俺は行くけどさ、お前はどうすんの？」

「んー、どうすっかなー。マロードに頼まれたことがあった気がする――――」

そこで天使の言葉が止まった。

止めざるをえなかった。

何かが凄まじい速度で飛んできて、その何かが渡辺豪に直撃したのだから。

天使は驚いた表情もなく、吹っ飛んでいった豪を見る。

ざっと１５～２０メートルほどだろうか。いや、下手したらもっと長い距離を彼は飛ばされていた。

まるでダンプカーが突っ込んできたような、人間では許容し得ない衝撃を渡辺豪はモロに受ける。

その惨状を見て、板垣天使の顔が――――笑う。

無表情から笑顔に、常人なら真逆になるであろうそれに変わる。

いい気味だと、ざまぁみろと彼女は笑う。

異常すぎる反応。

「ギャハハハハハハ！　ざまぁ見ろ。アイツの名前で遊んだ罰が当たったんだよ！　いや、これは罰が振ってきたのか？　まぁどっちでもいいや。とにかくざまぁみろ！」

「当たってんだし、罰が当たったで合ってるだろ。というか、何だよ急に……」

“彼は何事もなかったかのように起き上がった”。

何事もなかったはずがない。得体の知れないものが猛スピードで飛んできて、それにあたり彼は吹っ飛ばされた。

比喩などではなく、その衝撃はダンプカーが突っ込んできたものと同じものである。

だというのに、彼は何もなかったかのように起き上がる。

まるで道端の石に躓き転んだから起き上がっただけ、といった動作。

彼の肉体はどこまで強固だというのか。

今思えば天使が笑ったのも、あの程度なら何ともないということが分かっていたからかもしれない。

現に天使は何ともなく起き上がった豪に驚きもせず、飛んできた物体をゴルフクラブで突っついている。

はなから、豪に興味などなかった。

「これが飛んできたんだ。つか、結構奇跡じゃね？　こんな狭い路地裏に、しかもそれが豪に真っ直ぐ飛んできたとか」

「そんなことはどうでもいいけどよ、ホントに何だこれ？」

その物体は鉄ようで。
何かの上半身部分のようで。
限りなく硬いものだった。

正体不明。
人間の目ではなく、ロボットの目のようなものがある。その目に光はなく、もし起動していたのなら光っていたのではないかという憶測が立てられる。
丸みを帯びたその物体。

「お、何か書いてんじゃん。サ……コ……クキ……ｖｅｌ１．５９。……何だこれ？」

天使が読み上げたそれはこの物体の名前だろう。
しかしその名前の部分も、正しく読み上げることも困難で正確に読み上げることは不可能となっている。

天使の疑問に答えることなく、豪は腰を下ろしその物体を片手で掴みあげる。

「結構硬いな……」

触った心地は鉄よりも硬い。

生半可では壊すことは出来ない。そう言い切れるほどの強度を有していた。

見る限りこの謎の物体は壊されている。ということはだ、この物体は破壊されどこからか吹っ飛んできた。

つまり、これを破壊できるものが存在するということになる――。

そう判断すると同時に――――！

「――――ッ！？」

「なっ！？」

強大な力が、途方もなく禍々しい気がとある場所から吹き出た。
こんな気配など最初からそこにはなかった。そう、それは唐突に現れた。何の予兆もなくそれはいきなり君臨した。

今だかつて味わったことのない強い気配。
そして奇しくも、その気配と謎の物体が飛んできたであろう方向は同じ。

――――あの場所にこれを飛ばした奴がいる……！

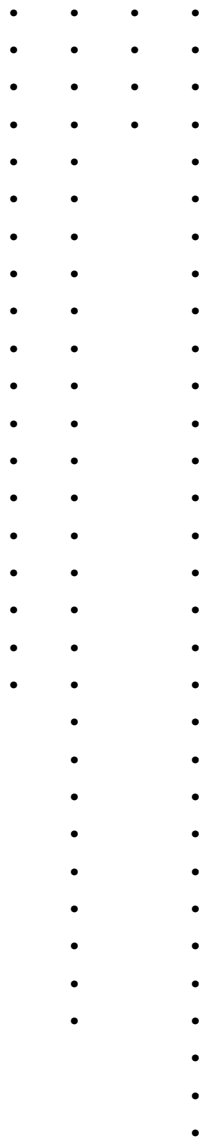
居ても立ってもいられなかった。
渡辺豪は駆け出す。反射的に、体が勝手に動いた。
熱いものを触って手を引くように、梅干を見ると、唾液が出てくるように。

板垣天使の驚いた声が聞こえる。
が、それに対して彼は止まる暇などない。そんな暇があったら前へ前へと前進する。
彼の胸に渦巻くのは、強者が現れたという歓喜。その強者の化け物染みた強さに対する期待。そして、その場に居ない自分への無念。
これらが彼の胸の中で複雑に絡み合う。

――――ちくしょう。

――――何がつまんないだよ。
――――ハハッ、面白い！
――――世界はこんなにも楽しい……！

こうして彼は己が待ち望んだ戦場へと赴いた。
愉快に楽しそうに狂笑を浮かべて、渡辺豪は夜の七浜市を疾走して行く――――――――――。



数時間前　七浜市　上空

上空１００００メートル。
外気温度はマイナス５５℃といったところか。風は激しく吹きすさび、地上では味得ないほどの寒さ。例えるなら文字通り、身を刺す寒さ。
加えて、ここまで高度が高いと酸素も薄くなる。

簡単に言ってしまえば、人間が何の装備もなしに居られる場所ではない。
それこそが、上空１００００メートル。魔の領域。

だからこそ。
人間が居られない場所だからこそ、一人で考え事をするのには最もだと言える。

いちいち考え事をするために、そんな身を危険に冒してまで人は上空１００００メートルまで上るだろうか。
答えは“存在する”だ。

世間一般的に言えば、そういった人物は“変人”もしくは“変わり者”あるいは“異常者”最悪“ただの馬鹿”といったカテゴライズされるのだろう。

変人――霧夜王貴は確かに上空１００００メートルに存在していた。

勿論、世間一般で使う登山者の装備を装着しているわけもなく、防寒着を着ているわけもない。

黒いＴシャツに黒いレザーパンツ。といった、普段街中で着るような格好。その場所には不釣合いな服装だった。とはいっても、少年がこの場所に居る自体不釣合いな訳のなのだが。

背中に２つ、両足の裏に１つずつ木行で造り上げた風の竜巻を接続して飛んでいる。

酸素も木行で補い、温度も火行を使って周囲を適度な温度にしているのだろう。

問題の王貴といえば、

「……」

何をするでもなく、光り輝く七浜市を見下ろしていた。

その表情からどんなことを思い、どんなことを考えているのかといったことが読み取れない。

少年の表情は、昼間にクリスティアーネ・フリードリヒ達と交戦

したときの狂笑でもなく、人類最強と殺し合いをしていたときの悪鬼染みた憎悪でもなく、霧夜エリカが登場したときの驚愕でもない。ただ少年は夜の七浜市を“見ていた”。

無気力に、無表情に、無行動に少年はただ見ていた。

理解できない事象が連続で起こった反動か、何もする気が起きなかった。

最大の目的である釈迦堂形部を探し出し八つ裂きにする、といった目的もどうでもいい。

実を言うと、すでに釈迦堂を見つけている。そのほかにもそこそこ強い気配が1人、人間ではない気配が2体、計1人と2体が一緒に行動している様子だ。あとは簡単な話、釈迦堂の前に飛んで行き、殺し合いを始めるだけだ。

だというのに、敵対する気が起きない。アレほど待ち望んでいたにも拘らず、行動に移す気が起きない。

霧夜王貴は自分の心象が理解できない。

理解できないといえば、今日は本当に理解できないことだらけだった。

クリスティアーネといい、不死川心といい、川神百代といい、霧夜エリカといい。どうしてこうも自分に構うのか。

考えるまでもない。

彼女達は自分が大切なのだ。だからこそ、構い続ける。

鬱陶しいと吐き捨てても、めげもしない。

頼んでもいないのに、必死で馬鹿馬鹿しいことに命を張る馬鹿ど

も。
あいつらは――――――。
「はは……」
そう評価を下すと少年は、
「ハハハ、ハハハハハハハハ」
いつものような他者を侮辱するような笑みでもなく、傷つけて笑う嗜虐的な笑みでもない。
心の底から笑う穏かな笑み、歳相応で霧夜王貴が本来の笑みがそこにあった。
今までいろんな人間と接した――――――。
王貴を救おうとしてくれようと動いてくれた人間はアレで初めてではない。
過去にも居た。だがそのこと如くが失敗し、救い出してくれようと人間はこの世には居ない。

偶然か必然か。
世界が少年を闇から連れ出すのを良しとしなかったか、誰かが仕組んだのか。少年にとってはどうでもいいことである。

問題はその後だ。何かが自分のせいで犠牲になる。
簡単な話である。何かが自分に関わって犠牲になるのなら、最初から関わらなければいい。
最初から独りでいればいい。独りで自分を標的にする連中を力で支配すればいい。

少年はいつしか割り切っていた。
ならばと、霧夜王貴は王を目指す。何もかもを支配するために、この世のすべてを支配するために。

「アイツらを見ていると、このようなことを考えている己がアホらしくなる」

王貴は自嘲するかのように呟き、

「シュタル――――」

下から上へと顔を上げる、今度は街ではなく丸い丸い満月に変化

していた月を見やる。
そして呟くのは、最初に犠牲になってしまった女性の名前。生きる術を教えてくれた女性の名前。かつて自分の最高の従者だった女性の名前。――――誰よりも愛していた女性の名前。

「もう、いいのかな？」

嬉しそうに嬉しそうに、少年は笑う。

「王（オレ）をここまで大切に思ってくれている者達がいる……」

楽しそうに楽しそうに、少年は笑う。

「オレを見捨てなかった奴らがいる……」

幸せそうに幸せそうに、少年は笑う。

「だから、もう、いいんだよね、シュタル？」

「もう、“僕”独りで頑張らなくても――――」

そこから先の言葉は紡がれる事はない。

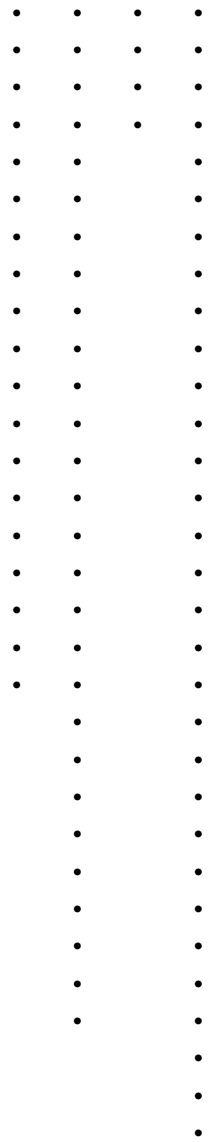
王貴は目を見開き、ある方向に視線を向けていた。
顔は青ざめ、嫌な汗が流れる。怯えているかのような、恐れているかのような表情に変貌する。

その方向には、釈迦堂形部の気配と――――――不死川心の気配がしたから。
想像するのは最悪の状況。血の海で立っている釈迦堂形部。その血の海に倒れ付している不死川心。

釈迦堂形部がどんな人間かなんて王貴はわかってはいない。
だがこれだけは言える。アレは昔の自分。目的のためなら手段など選びもしない、邪魔をするのなら容赦などしないといった人種。
そんな人種が、心の前にいる。

最悪な状況など、後から想像が何度でも出来る。
そんな男――――。

歯車は噛み合わない。
ギチギチギチギチと、歪に回り続ける――――――――。



七浜市　市街地

怪物――――釈迦堂形部の拳の前に、不死川心は倒れた。

総理、黛由紀江、不死川心の前に突如として現れた釈迦堂形部。
それは別にいい。今開催されているのはＫＯＳ、バトルロワイアルの一種だ。いきなり彼らの前に現れた釈迦堂、その腕にはＫＯＳ参加者たる腕輪。これを見る限り、ＫＯＳ参加者だということは一目瞭然だ。

問題はいきなり現れて取った彼の行動にある。
釈迦堂は総理ではなく、不死川心に標的を絞り攻撃した。

この中で一番実力者である由紀江でもなく、彼の仮の雇い主の標的である総理でもない。
ただのチームの一員である不死川心を狙ったのだ。

ありえない。

力の劣る相手から先に相手をするなど、釈迦堂形部の性格からしてありえない。

「釈迦堂よぉ、お前どういうつもりだぃ？」

総理が訝しげに口を開く。

対して釈迦堂は足元に倒れている心に視線を向けながら。

「どういうつもりも何も、ただ邪魔だっただけでさぁ――――」

言い終わる刹那。

由紀江の鋭い動きで釈迦堂に飛び掛る。

初歩から、彼女の持つ刀を振るうまでにいたるまで、無駄のない動作で刃の軌道が流れていく。

本気の速度ではない。

威嚇のつもりで振るわれた刃。心から遠ざけるための行動。

それを見越してか、釈迦堂は難なくその刃を右手の人差し指と親指で掴みあげる。

「威嚇のつもりか……？　遅すぎて欠伸が出るぜぇ」

釈迦堂は退屈そうに声を上げて、掴んでいる指の力と腕力で刀を持っている由紀江ごと後ろに放り投げた。

砲丸が発射されたような速度。

そんな速度で由紀江は投げられた。あまりにも理不尽な暴力。

そのままあわや街灯に頭から直撃するのではないかと思われたが、由紀江は体を反転させ街灯を足場にし着地する。

そうして地面に降り立ち、再び刃を構える。

それに対して、釈迦堂は挑発染みた言葉を投げかけた。

「【剣聖】の娘か……。俺とお譲ちゃんには少なからず因縁がある。でも悪ぃな、俺の関心はお前さんには向いてないんだわ」

「……不死川さんから離れてください」

「断るって言ったらどうするよ？」

「斬ります」

たった四文字。
だというのに、その言葉には色々な思いが詰まっていた。

同時に空気が張り詰める。
張り詰めるなんて生易しいものではない。突き刺すような、射抜くようなそれに進化する。

面白い、と釈迦堂は思う。
この歳でどうしてここまでの殺気を放てるというのか。
さすが【剣聖】の娘と褒めるべきか、この歳で大したものだと感心するべきか。

前者であり、後者でもあるのだろう。
あの斬撃も本気の速度はない様子。あれ以上速くなると考えるだけで――――楽しくなってくる。

とそこに、
その間に入るかのように、総理が口を開く。

「釈迦堂。オメェが腕輪(それ)ヲ付けてるってこたぁ、ＫＯＳに参加してたってことかよ？」

釈迦堂は由紀江から視線を離すことなく、総理の問いに答えた。

「当たり前でさぁ。こんな美味しいイベントに俺が参加しないわけないでしょう」

「ＫＯＳは４人１チームだ。お前と他に誰が組んでんだよ？」

「総理が良く知ってる人ですよ。アンタのことが大嫌いでな人で、俺の仮の雇い主ってところですわ」

恨まれることなんて数知れず。

自分の勝利を邪魔しようとしている者。恐らくその人物は政治関係の人物で、こんなＫＯＳという前線に立つような人物。自分と真っ向から対立している人物。

心当たりは――――ある。

「まさか、曽我か……？　アイツは――――」

「あの人なら、安全なところで大人しくしてもらってますよ。お喋りはここまでのようですぜ？　総理の相手は後ろに居る木偶がやっ

てくれますよ」

後ろを振り返る。
そこには丸いシルエットの2メートルほどあるロボットが居た。
見たことがある。九鬼財閥が開発したクッキーというロボットにそのロボットはそっくりだった。

ただ違うことがあるといえば、配色が違う。
その一点のみ。

なんということだ、これでは逃げられない。
前方には得体の知れない機械人形。後方には怪物。

元より、その怪物の足元には不死川心が倒れている。
故に、逃げる気など毛頭ない。逃げるときは、心を助け出した後だ。

と、

「此方を邪魔だと言うたな……」

足元から声が聞こえた。

釈迦堂は視線を足元に向ける。

予想通り。
不死川心だ。

心は釈迦堂の足を掴み、歯を食いしばり睨み付けている。
それは敵を睨み付けているものではなく、意識を途切れさせないようにと助命処置。

釈迦堂はそんな心をただ見ている。
“すぐにでも痛めつけれるというのにそれをただ見ている”。まるで何かが現れるのを待っているかのように、彼はただ心を見ていた。

「お前は、此方が止めるのじゃ……！　お前と、あやつが、会ったらあやつは……！」

「俺というどうしようもない相手に、止めると来たか、」

釈迦堂は言葉を区切り、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「いい度胸だな譲ちゃん。だが遅いみたいだぜ――――」

釈迦堂がそういい切る瞬間。
心の視線から釈迦堂の体が消えた。

正確に言えば、正体不明の力が釈迦堂にぶつかり、そのまま彼は吹き飛ばされた。といったほうが正しい。

釈迦堂は民家の塀の中に消えていった。

何が起きたのか心には当然理解できない。
彼女の近くに何かが降り立った。

黛由紀江が何かを言っている。
総理が目を見開いて驚いている。

しかし、心には何も聞こえないし、何も見えない。
近くに降り立った何かに視線を向ける。

黄金の頭髪、真紅の双眸、幼さが残る整った顔つき。
見間違うはずもない。

心はその何かの名前を呼ぶ。

「お――う、き――」

そこで心の意識が途切れる。
瞼が閉じ、体が沈むような感覚。

彼女は、不死川心はそこで完全に意識を失った。
想い人がどんな顔で自分を見ているのかわからないまま――――――。

第４４話　似て非なる覚醒（後書き）

おはこんばんちは、兵隊です！

この話で一気に進みそうな気がします！
お気づきかもしれませんが、真剣で王に～の釈迦堂さんは原作よりも強くなっております。
釈迦堂さんもちょくちょく修行していれば百代並だろうと思った自分の妄想の結果です。

次の話で豪クンに直撃したロボット（？）が壊れていたのか、謎の強大気の正体、霧夜王貴の変化などが新たになると思います。

それではこれからもよろしくお願いします！

第４５話　堕落

七浜市　市街地

霧夜王貴が釈迦堂形部を攻撃したのは、いたって簡単なモノだった。
ただ不死川心が危ないと思ったから。それだけの理由で、いたって当たり前のことをした。

だというのに、王貴の心の中にあるのは疑問、疑惑、不審。

『どうして助けたか？』といった疑問ではなく『どうして心が倒れているのか？』といった疑問だ。

王貴は無表情に心を見下ろす。
いや、無表情などではない。唇は震え、顔は青ざめ、目は見開き、とても無表情とは思えない表情。霧夜王貴有るまじき表情を顔に貼り付けていた。
有体で言えば、彼は動揺していた――――。

「何故だ……」

たった三文字。

少年はたった三文字を呟いた。その三文字に一体どういった感情が詰まっているのか。

少年の体が震える。

手が、足が、指先が、震えて止まらない。

脳裏によみがえるのは最悪の光景。かつて最愛の従者が倒れ息を引き取っている光景。――――シュタルという名の女性が死んだ光景だ。

――――死んでる？

――――馬鹿な。

――――冷静になれ。

――――生きてる。

――――分からない。

――――死んでる……？

冷静なれば心が生きているということが分かる、外傷も目立ったものは無いと認識できる。

霧夜王貴は数千、数万といった死体の数を見てきた。ともなれば、

人間はどうすれば死に、どうすれば無事でいられるかといったことを熟知している筈だ。

だというのに、少年は不死川心が生きていると認識できない。

――――川神学園最凶の怪物は明らかに動揺していた。

ゆっくりとした動作で、王貴は身をかがめて膝を地面につける。

手を伸ばし、心の顔を優しい手つきで触った。

暖かった。

そこでようやく王貴は心が生きていることを確認する。

そこで安堵する間もなく、何かが立ち上がる気配がする。

その気配はあまりにも暴力的で、嫌となるほど怪物的で、呆れる化物的で。

その気配を確認するまでもない。

「いきなり現れたと思ったら不意打ちとは、随分と粋な攻撃するじゃねぇか霧夜の坊ちゃんよぉ」

釈迦堂形部。

暴力が王貴へと近づいてきた。

王貴は立ち上がり、無言で釈迦堂の方へと視線を向ける。
その視線には殺気、殺意、憤怒、憎悪といった感情は込められてない。ただ王貴は見ている。

対する釈迦堂は無傷。
この男はつくづく化物だと再認識される。

「これは、何だ？」

王貴は釈迦堂に歩み寄る。
隙だらけで、ありえない行動。
アウトレンジからの戦闘を主体としている霧夜王貴が敵に歩み寄る。それこそありえない行動。
慢心や油断といったものから出る行動ではない。

だがその瞳には明確な意思があった。先ほどの無感情といったものはない。あるのは憤怒の感情。
いつものように激怒するのではなく、静かに少年は怒る。

例えるなら【氷】。
いつもの怒りが【炎】だとする。触れただけで、火傷するかのように熱く彼は激怒する。
だが今は違う。冷たく限りなく冷たく、触れただけで火傷すると

いうのは同じだが、彼の目線は冷たい。
だから例えるのなら【氷】。

釈迦堂も薄ら寒い何かを感じながら王貴に歩み寄る。
ここで逃げるわけのみいかない。

「何だって何だ？」

「何故、心が倒れているのだ？　貴様、この女に何をした……」

「どいつもこいつも、同じ事を何回も何回も……。――――邪魔だった、だから痛めつけてやった。これで満足か？」

そこで両者の歩みが止まる。

手を伸ばせばお互いの体に触れる位置。
つまりそれは、霧夜王貴の絶体絶命を意味していることになる。
だというのに、王貴は何をするでもなく、後退の動作に移るということもなく釈迦堂と対峙していた。

その危機的状況で王貴は思考する。
この男の判断は間違ってはいないと。
釈迦堂がこの戦いに望んだのは、元々は自分と戦うためだ。本人がわざわざＫＯＳに参加するのか確認したくらいだ。王貴と戦うた

めに参加したと考えて間違いないだろう。
そこに不死川心の登場は、確かに邪魔になる。だから釈迦堂は排除したのだろう。

釈迦堂形部の判断は間違いない。
自分も邪魔されたらそうするだろう。

間違いはない。
間違いないのだ。

力ない者が、力ある者に歯向かうから、それ相応の末路を辿るのだ。
この世は所詮弱肉強食。弱い者は強い者に嬲られ、蹂躙される。

だからこそ、不死川心は今も倒れ、釈迦堂刑部は君臨しているのだ。

何も変わらない自然の摂理。
当たり前のように、それは目の前に広がっている。

だというのに、だというのに――――霧夜王貴は目の前に広がっている光景が気に入らない。

気に入らない気に入らない気に入らない――――！
こんな陳腐で、どこにでもあるような悲劇を作り出した元凶を殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる――――！

渦巻く呪詛の言葉。
霧夜王貴は明確な意思を感情を視線に乗せ、釈迦堂にぶつける。

それは【殺意】。
氷のような視線が、炎のような殺気に変貌を遂げる。

拳を思い切り握り一言。

「死ね」

王貴の動作は速かった。
拳を握り、標的を目視し、殴りつける動作まで。
だとしてもそれは、素人では速い部類といっただけで、素人最速でもないし、ましてや釈迦堂刑部にその速度が通じるはずがない。

加えて、王貴の判断は間違っている。
彼は釈迦堂と対峙するにいたって、最初から間違っているのだ。

自分の戦闘スタイルを忘れ、怒りに任せて標的に近づいた。
それが最大の間違い。

それを証拠に――――。

――――何かの肉が砕ける音が聞こえ、何かが塀に激突した――――

その何かとは勿論、王貴自身。

釈迦堂はカウンター気味に、目にも留まらぬ速さで迎撃しただけに過ぎない。

「王貴さん！」

由紀江が一目散に駆け寄る。

自分でも見切れないほどの拳速で放たれた拳をまともに受けたのだ。

無事ではすまないと思ったのだろう。しかも王貴は接近戦に弱く、耐久度もない。

由紀江の判断は正しい。

今までの王貴であれば、無事ではすまないだろう。

そう、“今までの霧夜王貴であれば”だ。

「由紀江ちゃん、危ねぇ！」

と、総理が由紀江の肩を掴み、進路を妨げた。

――――離してください。と、振り払おうとした刹那。

――――何かが破裂した――――

それは、王貴が激突したであろう、場所から噴出している。
黒く、墨よりも黒く、闇よりも黒く、何よりも黒く、何にも染まらないそれが噴出している。

由紀江はそれを見て、体が震える。
純粋な恐怖。理由などない、それを見てありえないほど心が冷え切った。

総理も同じ。
由紀江の肩を掴んでいる手が震えている。
今まで出会ってきた何よりも怖く、何よりも恐ろしい。たった１５年ほどしか生きていない少年にどうしてここまで恐怖するのだろ

うか。

霧夜王貴はそんな二人の状態を余所に、手のひらを釈迦堂刑部にかざす。

それだけの動作で、“恐怖”が釈迦堂に襲い掛かった。

黒い黒い謎の本流が一つの束となって、釈迦堂を飲み込まんと進軍する。

釈迦堂は横に思いっきり跳ぶ。

次の攻撃の準備なんてどうでもいい、とでもいうかのような跳躍、逃げるための跳躍。

釈迦堂あるまじき行動。

だが“黒い本流（アレ）”はそれをするに値する。

――――アレはやべぇ。

漠然とした感情が釈迦堂を動かす。

理由などない。生物としての本能が釈迦堂をそうさせた。

釈迦堂は横に跳び、標的をなくした。
黒い本流は止まることなく、直進する。その先にあるのはサイコクッキー1号。

サイコクッキーは回避という動作をすることなく、迎撃と言う行動に移る。

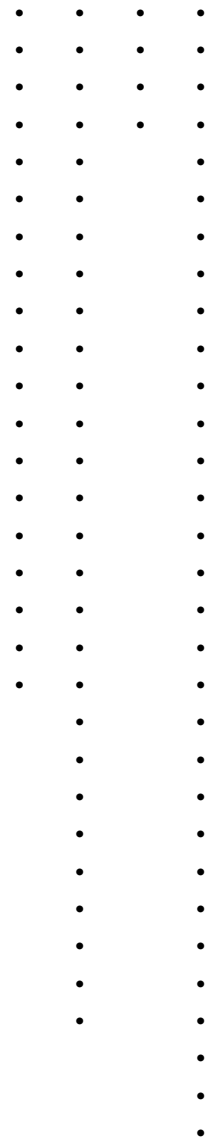
当たり前だ。
生物であるなら、誰もが恐怖し警戒する。悲しいかな、彼は機械。そんなもの持ち合わせてはない。

「な、何だよこれ！　ミサイルでガビビビビビビ！！！！！！！！！」

生物よりも優秀な機械であるサイコクッキー。
彼は呆気なく、黒い本流に飲まれ体を八つ裂きにされ、何の抵抗を許すことなく体がひしゃげた。

釈迦堂はそんなチームメイトに同情することなく、油断なく王貴を見る。

――――やべぇの目覚めさせちまったな……。



七浜市某所　ビル屋上

「霧夜王貴は実に弱い人間だ」

突風が吹きすさぶ七浜市にあるビルの屋上。そこで白いスーツを着た肥満体系の男性――――将軍は1人呟いた。

彼の視線の先には七浜市の市街地、恐らくそこには釈迦堂形部と

霧夜王貴が居ることだろう。
表情といえばやはり愉悦。実に楽しそうで、まるで良いことをした自分を褒めるような口ぶりで続ける。

「ああ、弱い。彼は本当にどうしようもないほど弱い人間だ。どうしてかわかるかな、サード？」

「何勝手に喋って、何勝手に話し振ってるわけ？　ボクがアイツのことなんて知るわけないでしょ」

心底どうでもいいといったサードの口ぶりに、将軍は思わず肩を竦めた。

そこで黙ってればいいのだが、どうしても彼は喋りたいのか、今度は近くに控えている黒いスーツで身を固めて口元にはマスクをした長身の男性、セカンドに話を振る。

「やれやれ、釣れないじゃないか。君は違うよなセカンド、私の話を聞いてくれるかい？」

「……」

思ったとおり。
自己主張をあまりと言うより、まったくしないセカンドは首を縦に振る。
将軍もそうすると分かっているのか、大した驚いた素振りも嬉しそうな素振りもしない。
「やはり君はいい子だなセカンド、どこぞの3とはえらい違いだよ」
サードが何か言いかけるが、将軍はその反論を聞き届けるということはせずに朗々と続ける。
「彼は他人に依存する人間だ」
【彼】。
つまりそれは、霧夜王貴のことを指しているのだろう。
それが分かっているのか、セカンドは黙って聞き入り、サードは反論しようとした口を閉じ、やはりつまらなそうに空を見上げている。

「家族に依存し、幼馴染に依存し、叔父叔母に依存し、今は亡き従者に依存し、最近では孤独に依存していた。依存することは別にいいさ、誰だって依存はしている。だが彼は度が過ぎる」

将軍は楽しそうな口ぶりで続ける。

「独りになりたい癖に、すぐにでも他者に依存する。これが弱く大きな矛盾を抱えた霧夜王貴の本質だ――――だからこそ、彼は壊れやすい」

「ホント趣味が悪いよねアンタ。釈迦堂って奴をけしかけたのも、それが目的？」

「当たり前だろう。ここで一気に壊した方が、後々計画が進みやすくなる。――――ほら、アレが霧夜王貴が壊れた結果だ」

将軍が言葉を漏らした瞬間。――――世界が震えた。

何が起きたのかサードには理解できない。だが確かに世界が震えている。いや、震えているのは自分自身か。

説明がつかない謎の力の本流、それは将軍の視線の先にある。

七浜市の市街地。
そこには――霧夜王貴。

離れた場所からでもわかるほどの、強大で凶悪な黒い気の本流。
その本流の中心、先ほどまで将軍が弱いと評価していた人物がこれほどまでの強大な力を出しているとは想像もつかない。

――――なんだよこれ……。
――――アイツは本当に人間かよ。
――――体の震えが、止まらない……。

これこそが恐怖。
混じり気なしの最大の負の感情。
細胞レベルの感情がサードは感じた。

「見たまえ！　アレこそが、我々【ウルク】の最高傑作にして集大成とも言えるものだ――――――！」

最大の恐怖に対して、将軍は両手を力一杯広げて向かえいれる。
この場で恐怖に震えていないのは彼だけ。彼だけが【恐怖】といった感情ではなく【歓喜】で震えている。

狂っているとしか思えない反応だ。
現に彼はまともじゃないとサードは思う。自分はおろか、感情の起伏が乏しいセカンドも震えているのにどうしてこんな反応が出来るというのか。

これこそが計画を推し進めている者の反応というのか。
このような反応するのは“盟主”と“将軍”のたった2人だろう。

――――いや、もう1人存在する。

「素晴らしい！　ハハッ、本当に素晴らしい――――むっ？」

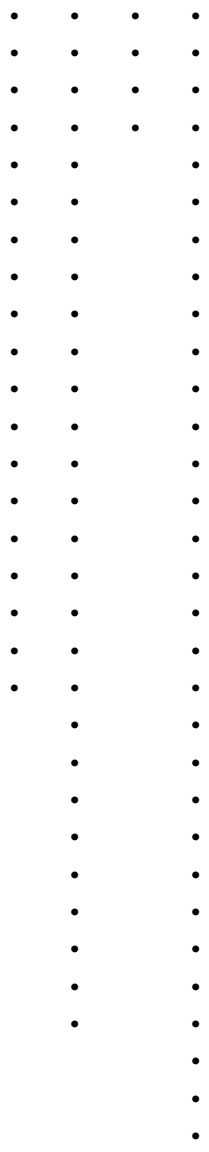
その存在に将軍も気付いた。

その存在は黒い力の本流の場所まで走っている。
その少年は誰よりも人間らしい、と。誰よりも足掻いている彼こそが人間であるべき姿だ、と。将軍は己が言ったことを思い出す。

その少年の表情もやはり【恐怖】といった感情ではなく【歓喜】。
本当に嬉しそうに駆け出している。

「彼もあの場に参戦しようというのか。やれやれ、これはこれは…」

「願ってもない展開だよ」



同時刻　某所

とあるカフェのオープンテラス。
そこに彼女はいた。

艶やかすぎる紅いドレス。
その艶やかなドレスすら彼女の付属品と言いかねないこの世とは

思えない美貌。
豊かな蒼色の髪の毛を掻き分ける。

彼女は紙を片手に、組んでいた足を組みなおす。

その紙の内容は意味不明。
どういった内容なのか皆目見当が付かない。
ただ、何かを研究し、それを記述した内容としたわからない。

数字とダイアグラムが表示されている用紙を見ながら彼女はカップを手に取ろうとする。
と、

「あら？」

カップに手を伸ばすが、それを止める。
カップは揺れていた。

いや、カップじゃない。
揺れているのは彼女がいるその場所、それよりも規模が大きい。
揺れているのは星そのものだ。

どうして揺れているのか。
彼女は考える間もなく結論付ける。

「将軍がやってくれましたか」

女性――――盟主は静かに呟いた。
その顔には微笑みが貼り付けられている。

将軍に【霧夜王貴を壊せ】といった命令など彼女はしていない。
彼の独断だと言うことは手に取るようにわかる。あの狂人のことだ、計画を早めようと動いているのだろう。

勝手に動いて、それ相応の成果を出してくれるのなら盟主も咎める気はない。
こちらの不利になることをするのなら消せばいいだけの話だ。将軍を消さないのは至って簡単な理由――――使えるからだ。

「後もう少しですわ、我が君……」

我が君。

秘密組織ウルクがいうあのお方。

盟主は思う。

永かったと。どれだけこの時を夢見てきただろうと。

あのお方の復活。

その目的で彼女はウルクと言う組織を造り上げた。

それは、あのお方への愛だけの感情ではない。

ただ一重に、彼女は共感したのだ。

あのお方の理想に、あのお方の思想に、あのお方の夢に。

「後もう少しで、貴方様はご復活を遂げ、貴方様の理想は形を成します」

愛する者の夢を叶えたい。

ただそれだけで、彼女はここまで来た。

永い時を積み重ねようが、どれだけの犠牲を払おうが、彼女は進んできた。

この道に後悔などない。

自分が選んだ道だ、悔いなどなかった。

もう一度、会いたい。
それだけで修羅の道に身を投じたこの生涯。一片の悔いもない。

「すべての計画は順調、器も完成間近。……あとは器が戦争に生き残り、耐え切れるかどうか……」

「どうか私を導いてくださいませ、征獅子王よ……」

第４５話　堕落（後書き）

みなさん、おはこんばんちは！兵隊です！

さていよいよ次回は王貴ＶＳ釈迦堂さんでございます！
王貴は壊れ、将軍はハッスル、盟主は恋する乙女と色々な話でした。

次回も次回で波乱の展開が巻き起こりますがよろしくお願いしますね！ｗ

第４６話　チカラの代償

――――少年は純粋に殺したいと思った――――。

目の前に居た怪物を、少年は殺したいと思った。

どうして、関係のない者を巻き込む。

あの女はこの戦いには関係なかったはずだ。少年はそう考える。

元より、この戦いは怪物と少年が利害一致として始まったものだ。

怪物は己の欲求を叶えたく少年と戦うことを望み、少年は元の自分に戻ると言う名目で怪物と戦うことを望んだ。

こうした理由で、彼らは敵対関係を築いている。

どこをどう見ても、不死川心という少女が入り込む隙などない。

だが少女は入り込んできた。

役を割り振られていないにも拘らず、不死川心は役を自分で作り舞台に上がってきた。

その舞台は、一般人が上がることの出来ない舞台。

怪物たちだけがあがることの出来る、血生臭く平穏といった言葉とはあまりにもかけ離れているもの。

その舞台に、たかが一般人があがってきたのだ。
それ相応の末路を、心は辿ったに過ぎない。
無謀で蛮勇で己の力量も考えない行為がこの結末だ。

いつもなら、ここで霧夜王貴は当たり前だと思考を停止することだろう。
己の力量も計れないからだ、と冷ややかな視線を送ることだろう。

だがしかし、今の彼の胸の内にあるのは純粋なる殺意しかない。

――――あの屑を殺してやりたい。
――――あの屑を八つ裂きにしたい。
――――あの屑を捻り潰してやりたい。
――――あの屑を燃やし殺してやりたい。
――――あの屑をあの屑をあの屑をあの屑を・・・・・。

少年の胸のうちにあるのはそんな呪詛のような言葉の羅列。

唯、殺してやりたい。
それしかない。今の王貴にはそれしかない。

孤高に戻らなくてもいい。
王として存在しなくてもいい。

――――自分は死んでもいい――――。

だがこの男だけは殺してやる。

すべての野望、願望、夢を諦めてでも成さなければならないことがある。

何もかもを捨ててでも、やり通さなければならない事情がある。

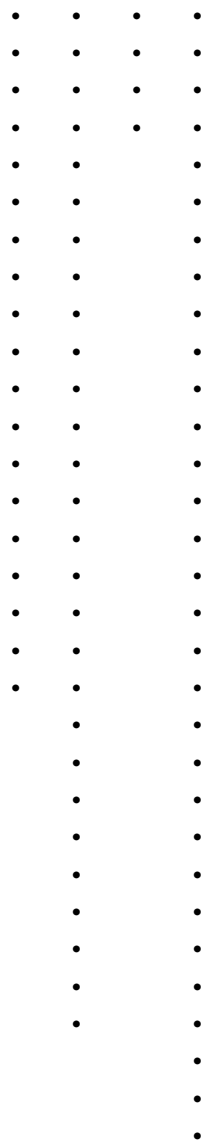
――――もはや、何もいらぬ。

――――だが、この男だけは王（オレ）が持ってゆく。

――――地獄に、持ってゆく……。

――――たとえ、王（オレ）が王（オレ）でなくなったとしても……。

「――――殺してやる」



七浜市　市街地

そこには異様な光景が広がっている。

その場にいる全員が全員、胸を何かに圧迫されるかのような感覚に陥る。

何かに胸部を押し付けれるかのような謎の圧迫。

加えて、体の底から震え上がる恐怖。
何もかもが正体不明だった。

釈迦堂形部も、黛由紀江も、総理も。
この場に居るすべてが恐怖している現象。

いや、全てではない。
上半身がなくなっているサイコクッキー以外に、1人だけ恐怖に震えていない人間が居た。

それこそが、この恐怖を造り出している元凶であり、容疑者でもある。

「選べ――――」

容疑者――――霧夜王貴は静かに口を開く。

自身に纏う、謎の黒い力の本流を束ねる。
その黒い本流は右往左往と、まるで生き物のように無秩序で、不規則に動いている。

王の視線は釈迦堂を見続けている。

もはや釈迦堂形部という人間しか視界に入っていない。

王貴は続ける。

「――――刺殺、絞殺、撲殺、蹴殺、焼殺、」

それは呪詛のように言葉を紡いでいく。

「煮殺、斬殺、圧殺、完殺、全殺、惨殺、狂殺――――どれでもよい選べ。今すぐ選べ。貴様の要望通りに殺してやろう」

「それはそれは、ありがたいねぇ」

突然現れて、あまりにも理不尽に現れて、凶悪な雰囲気を纏っている少年と対峙して尚、釈迦堂は笑う。

体の震えが止まらないというのに、彼は傲慢にも笑っていた。

彼からしてみればその体の震えは、武者震いなのかもしれない。

兎にも角にも、釈迦堂は楽しそうに笑う。

「今から殺そうって言うのに、わざわざ死に方を選ばしてくれるたぁ、お優しいことだな坊ちゃんよぉ」

――――その言葉が引き金となった――――。

王貴は黒い気の本流を二つに束ね、釈迦堂に向ける。

それに対し釈迦堂は――――。

「ハハッ、見え見えなんだよなァ！」

真横に跳び避けた。

それで王貴の攻撃は終わりではない。

直ぐに二つの黒い気の本流は停止し、撓る鞭のように横に薙いでいく。

縦横無尽に薙ぎ払っていくその様は、まるで蛇そのもの。

釈迦堂は、ときに塀を足場に、ときに街灯を足場に、ときに地面

を足場にして、飛び回るようにそれを回避していく。

アスファルトは砕け、電柱は真っ二つに折れ、電線は途切れていく。

その攻撃を食らえば即死、一掠りしても致命傷。

そんな乱撃の中、釈迦堂は冷静に分析を始める。

――攻撃速度も中々速い。

――けど避けられねぇって代物じゃねぇ。

――威力もバラバラだ。

――力任せに『アレ』を使ってるって訳か。

――あの坊ちゃん、制御仕切れてねぇな。

――問題は、攻撃の種類だ。

攻撃の余波で砕かれ、切り裂かられ、物体が溶け始めているものまである。

過程がどうあれ、結果がバラバラだ。

これではどう防げばいいのかわからない。捌けばいいのか、簡易的な気の障壁を張ればいいのか、同じ出力を持った気泡で相殺すればいいのか――――。

――――このまま、ずっと避けられる筈もねぇしなぁ。
――――後手に回んのも趣味じゃねぇし。
――――と、考えている余裕すらねぇか。

釈迦堂の目には、ある光景が写りこんだ。
それは彼にとっては、不利になる光景。

黒い本流の束が2つから、4つに増えている。
2つでさえ、攻略の糸口が掴めていないというのにそれが倍に増えたのだ。

だとしても、あの攻撃はもはや【視えて】いるし、【見切って】いる。
あのような予備動作の大きい攻撃など、釈迦堂刑部に通じるわけがないのだ。たとえ6つに増えようが、8つに増えようが自分には当たらない。

故に――――。

「ほらほらほらほらぁ！　どうしたどうしたよ、坊ちゃん！　そんな攻撃じゃ万回億回兆回京回、阿僧祇までやろうが当たんねぇぞぉ!?」

余裕。

あまつさえ、彼は挑発まで実行している。

そしてまた繰り返される攻防。

霧夜王貴が黒い本流を束ねた猛撃、釈迦堂刑部はそれを皮一枚で回避する。

ありえない攻防。

二人は人間なのだろうか、と思わず怪しんでしまう攻防に、不死川心を守るようにして観戦していた黛由紀江は息を呑む。

――――凄い、と。

こんな戦い、もはや武道やら武術といった言葉で当て嵌めていい領域（レベル）ではない。

有り体でいうのなら、もはやこれは戦争の類。もしくは人災の類の戦いだ。

一人の人間がどう足掻いても、どうにもならないものをこういった単語で当て嵌めるのかもしれない。

仮に、この戦いに自分が介入したとして何分立っていられるだろうか。“気を切り裂くことを可能”としたアドバンテージがどれだけ有効になるだろうか。

答えは目に見えている。
そんなもの、この戦いではまったく意味を成さないものだろう。
技量という術を用いたとしても、物量という力で押さえ込まれて終わるだけだ。

武道四天王である由紀江すら圧倒する物量を用いる霧夜王貴。その物量すら悉くかわしきる釈迦堂刑部。
この二人、つくづく――――怪物。

と、そこに。

「そろそろ、慣れてきたな……」

黒い気の本流の４本ば束の内の１本を紙一重で避け、釈迦堂は静かに笑う。

それに対して、王貴は戸惑う事はなく。
真上から、黒い気の本流を叩きつけた。
その威力に、星が一瞬揺らいだ。

避ける筈もない。人間では避けようのないそれは、間違いなく

釈迦堂の体を痛めつける。

手応えはあたし、確信もあった。

あの黒い本流の下には、釈迦堂刑部だった肉塊が散乱している筈だ。

王貴は粉々になったアスファルトの上に転がっているモノを想像すると、思わず笑みが浮かべる。

禍々しく、発狂したかのような笑み。

だがそれも――――。

「よしよし、大体は分かった」

この怪物の一声で掻き消された。

笑みは、再び憤怒の表情に。

そして確信は、疑問へと変わる。

「貴様、何故生きている……！」

今の一撃を食らって立っていられるのがありえない。
星を揺るがす威力だ。立っている、と考える事態間違っているだろう。

現実。
釈迦堂刑部は立っている。それが現実であり、間違いだ。

「何故五体満足で立っているのだ、貴様はァ！」

「どこをどう見て、五体満足なんだよ。見ろよこの野郎、左腕がイカれちまったぞ」

釈迦堂の言うとおり、彼の左腕はあらぬ方向に曲がっていた。
一目見ればわかる。折れている。

それに頭からは大量の出血。
このまま放置すれば、自滅しかねないほどの大量の血液が流れている。

傍目からは満身創痍。
だとしても、彼は楽しそうに、狂ったように笑っている。

「畜生。ありえねぇよ、お前。何だよ今の一撃、ここにきてこれかよ。ようやく慣れてきたってのによォ」

そう呟き、釈迦堂は笑った。

まるで、恋焦がれた女性に初めて出会った瞬間のように、狂気に満ち、どこまでも純粋な笑顔を浮かべて続ける。

「だがまだヤレる。来いよ、坊ちゃん。俺から血を出したんだァ、今度はお前の血を見せろォ！」

「吼えるな下郎――――。アイツを傷に負わせた時点で、貴様の死は決定している。足掻くことなく、無様な死に様を王（オレ）に見せてみよ、屑がァ！」

そして、戦争は再び繰り返される。

先ほどの焼き回しと言わんばかりに、霧夜王貴の猛撃が炸裂し、釈迦堂刑部の神業的な回避行動が展開する。

――――とは言ったものの、不味いなこりゃ。

自分の体の状態、自分の保有する戦力を計算して、釈迦堂は判断を下す。

彼にとって、あの攻撃はありえない一撃だった。

あの黒い本流には、斬激、打撃、溶解、焼失、凍結と様々な攻撃がある。

その中で、彼が受けた【打撃】は偶然食らったものではない。釈迦堂はすでに、どれが打撃かどれが斬激か読めている。

だからこそ、一番ダメージが少ない【打撃】を選び、甘んじて受けた。

その一撃に油断した王貴に接近し、肉薄にする。それが当初考えていた展開だ。

だというのに、ここにきてあの威力だ。

釈迦堂が思い描いていた、戦略は波状してしまう。

肉を切らせて骨を絶つ。

そうでもしないと、今の王貴に接近することすら難しい。

――――そこにこのダメージだ。

――――制御できない癖に、トドメで丁度良くあの威力かよ。

――――どんだけ、空気読めねぇんだよあの坊ちゃんはよォ。

――――にしても、アレはヤベェ。

――――余裕でジジィの毘沙門天超えてた。

――――こっちはこの様だ。長期戦なんざ出来ねェ。

さて、どうするか。
釈迦堂はぼんやりと、そう考えると何か違和感を覚えた。

――――攻撃速度が、遅い……？

それは速度。
黒い気の本流の攻撃速度にあった。

――――おいおい、今更手加減か？
――――いや、ありえねぇ。
――――野郎は本気で俺を殺しに来てやがる。

あきらかに速度が落ちているそれを避ける釈迦堂。

最初は、周りを足場にして飛び回り、何とか回避していた。
だが今は、身を屈め、横にサイドステップ気味に跳び、バックステップをして避けられている。
体に負担をかけない最小限の動作。

取るべき戦術はその逆だ。
本気で殺したいならその逆、標的を最大限動かし消耗させるべきだ。

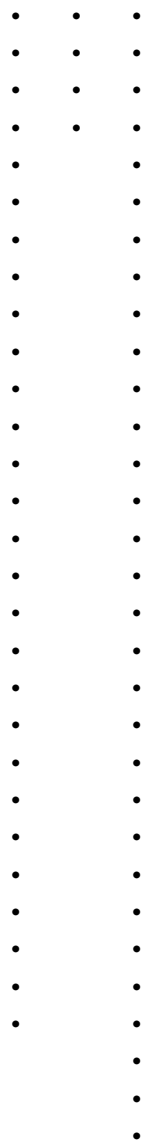
現に釈迦堂は満身創痍の身。
長くは持たない。

釈迦堂は視線を迫り来る黒い気の本流ではなく、それを操る霧夜王貴へと視線を向ける。

今間違いなくこの戦いに優位に立っているのは王貴で間違いない。
何せ対峙している者は満身創痍。出血多量で長期戦も不利な身だ。
普通に戦っていれば勝てる。

だというのに、王貴の表情は【余裕】ではなく【必死】。
顔は青ざめ、荒い呼吸音、倒れてしまうのではないかと錯覚してしまうほどである。

ここで、釈迦堂はとある仮説を立てる。
アイツもギリギリなのではないか、と――――――――。



――――どういうことだ……。
――――体が……重い……。

霧夜王貴はどうしてか、体の不調を覚える。

外面的なものではない。
これは内面的な、まるで何かに引っ張られていくような圧迫感。

今まで戦ってきて、このような状態になる事はなかった。
刺客と戦ったときも、風間翔一と戦ったときも、軍隊と戦ったときも、マルギッテ・エーベルバッハと戦ったときも、不良たちと戦ったときも、クリスティアーネ・フリードリヒと戦ったときも、川神百代と戦ったときも。

圧倒的な数と驚異的な破壊力の武器の掃射、巧みに五行を操り、敵対する者達は殲滅して来た。
今まではそうやって戦ってきた。
“今までなら”だ。

原因があるとするのなら、王貴の憤怒に答えるかのように発現した黒い気の本流だろう。

ヒトが扱いきれるか分からないチカラ。
ヒトの領分を越えたチカラ。
それが黒い気の本流の正体。

そんなモノ、いくら気を扱うのに長けているとはいっても、瞬時に霧夜王貴が使いこなせるわけがない。
元より、“このような戦い方”など王貴の戦い方ではない。

――――だとしても……。
――――だとしても、あの屑は殺してやる。
――――あの屑だけは……ッ！

と、急に何かがこみ上げて来た。
逆流するポンプのように突き上げてくる。抑えがたい嘔吐感。

それが口内まで達すると、王貴は堪らず吐き出した。
何とも言えない鉄の味のようなものが口の中に広がる。そして嗅ぎ慣れている匂い。

王貴は乱暴に口元を手の甲で拭う。

確認するまでもなかった。

王貴は大量に血液を吐血したのだ。

釈迦堂からの攻撃も受けてないし、先刻の川神百代との一戦が響いている訳でもない。

――――正体不明――――。

吐血した理由がまるで分からない、理解できない。

だが王貴は忘れていた。

対峙している怪物は、そんな思考をすることすら許してくれないということを。

「何をボーっとしてやがるかなァ！」

少年の状態を見て、好機と感じ取ったのか、釈迦堂は王貴に向け疾走する。

その疾さは、片手が折れていることを感じさせないモノだった。

「チィ――――――！」

忌々しげに舌打ちをして、王貴は目の前に黒い気の本流を展開する。
迎撃するためではない、自分を守るために。それは壁のように展開されていた。

釈迦堂はそれに構うことなく、体を回転させ、

「川神流　奥義――――地の剣！」

強烈な回し蹴りを見舞った。

人間の蹴りが起こしたとは思えない音が響き渡る。
爆発でも起きたのではないか。と、勘違いするほどの威力であるが、黒い本流の壁を破るほどでもなかった。

だが釈迦堂は、驚くことなくむしろ当然と言うかのように、次の攻撃の動作に移る。

黒い本流を足場に空高く、飛び上がり、

「川神流　奥義ィ！　天の槌ィ！」

回転し威力をつけながら落下する。

あの技は百代との戦いで一度見ている。

回転し威力を増した踵落とし。

威力もこの身で経験済みだ。ならば、防げる。

そう考えるが、悪感――――。

「――――隙だらけだぜ、坊ちゃん」

背後から声。

この世で一番憎い、敵の声。

一番聞きたくない場所から、声は聞こえた。

王貴は後ろを振り返る。

出来るだけ早く、最速を以って振り返る。

釈迦堂刑部が居た――――。

――――アレはフェイク。
――――この速度は。
――――構えている。
――――無双正拳突き。
――――来る。
――――障壁。
――――無駄、間に合わない。
――――防御。
――――不可、霧夜王貴の技量では不可能。
――――回避。
――――不利、この体勢では着弾する。
――――選択、選択、選択。
――――無。
――――無無無無無無無。

0．2秒の速度で何十通りの思考する。
が、どれもこれも結果は同じだ。

どの考えも、結界は収束する。
霧夜王貴の敗北という結果に――――。

そうして――――。

「無双正拳突き――――！」

この悪魔染みた一撃を以って、霧夜王貴の意識は完全に途切れた――――――。

第４６話　チカラの代償（後書き）

皆さんおはこんばんちは、兵隊です！

遂に始まりました、貧弱王ＶＳ釈迦堂さん
ここまでもってくるのに、どれだけの時間を消費したのかいざ知らず……。

そして、どうして貧弱の様子がおかしくなったのかは、次回とあるヒトから説明があると思いますのでよろしくお願いします！

あ、コラボですが
ＫＯＳ編が終わり次第書こうと思いますです
え、それは何年後だよですって？
……と、とにかく頑張りますのでよろしくお願いします！

第４７話　現世に蘇りし古の王

七浜市　市街地

夜の七浜市の市街地。
先ほどとは打って変わって、辺りは静寂に包まれていた。

その静寂が意味していることは、釈迦堂刑部と霧夜王貴の戦争が終結していることを意味していた。

さらに言えば、立っている者が勝者となるこの戦争。
疑うことなどない、立っているのは釈迦堂刑部。つまるところ、釈迦堂が勝者で、敗者は王貴。

勝者は静かな目線で、敗者を見つめる。

両者の距離は、ざっと１００メートルほどの開きがある。
これを見る限り、釈迦堂の拳――――無双正拳突きの威力の凄まじさが伝わってくる。

辛うじて見える王貴の状態は、塀に磔になっているかのような状態で、その下の地面には紅い大量の血痕。

微かにだが、痙攣もしていることが分かる。

文句などない。誰も疑う訳がない。
この戦争の勝者は、釈迦堂刑部だ。

――――あの、王貴さんが……負けた？

自分が考える限りではありえないと思える光景に、黛由紀江は己の目を疑った。

ありえない。
由紀江がありえないと思えるほど、王貴は強い。
少なくとも、自分が挑んでも勝てないと由紀江は認識している。

敗北したとはいえ、風間翔一を完膚なきまでに痛めつけ、箱根では選び抜かれた軍隊の先鋭中隊ほどの規模を無傷で撃破し、マルギッテ・エーベルバッハが本気で挑んでも敗北しなかった。
ましてや、あの人類最強と制限時間付きとはいえ、互角の勝負が出来る少年だ。

敗北することなど、ありえない。
考えすらしなかった事態だった。

しかし現実は非情である。
釈迦堂は勝ち、王貴は負けた。ただ、それだけである。

――――許せない……。

由紀江は静かに、鞘に収めていた刀を抜いた。

こんな気持ちで戦っては駄目だ、と理性が停止を施す。
が、そんなことよりも霧夜王貴を傷つけたこの怪物を斬りたい、と感情が叫ぶ。

彼女にとって、霧夜王貴は本多雷太、服部風子といった友人を作るきっかけをくれた人物だ。
王貴の思惑はどうあれ、彼女にとって王貴にはそういった恩もある。

だからこそ、由紀江は釈迦堂を許せない。
王貴のように【殺したい】とまではいかないものの、【敵を討ちたい】と思っていた。

「おっ、俺とヤル気か？」

由紀江のただならぬ視線に気付いたのか、釈迦堂が嬉しそうに声を上げた。

もはや彼の意識は王貴に向いていない。新しい遊び相手である、黛由紀江に向けられていた。

勝敗は決したのだ。いつまでも敗者に意識を向ける意味がないからである。

その戦いに飢えた野獣の視線を、由紀江は静かに受け止める。

由紀江の目から見ても、釈迦堂の姿は満身創痍もいいところ。

どうして立っているのかも分からない状態だ。だがしかし、標的がその姿になろうと、由紀江の答えは変わらない。

「はい、一手お手合わせ願いますか？」

友人である不死川心を傷つけ、恩人である霧夜王貴を叩きのめした敵を斬る。

ただそれだけの、単純な答え。

由紀江に迷いはない。

ただ自分の一刀を以て斬り捨てるのみである。

「ハァ、嬢ちゃんも甘いんだなぁ？」

その由紀江の覚悟も、釈迦堂にとっては退屈なものなのだろうか。
見て取れるように、落胆するかのように釈迦堂はため息をつく。

「目の前に敵が居るんだぜ？　殺し合いで相手の了解を待ってるんじゃねぇよ」

――――その一言で、由紀江の疾走は始まった――――。

全身の筋肉を使い、己の中に流れる気を強化に回し、尚且つ理に適っている走り。
ありえないほど速く、思わず見惚れる速さだった。

釈迦堂と由紀江の間にある距離は、数十メートルほど。
この距離を詰めるのに、２秒もかからないだろう。

距離を詰め、釈迦堂の体を一刀で斬り捨てるには十分すぎる。

だが、それでも暴力の権化には到底及ばない。

約2秒で距離を詰めて斬り捨てる。そんな簡単なことでさえ、釈迦堂が相手では約2秒という時間は遅すぎる。

「ヤァ！」

由紀江の斬激が横薙ぎに一閃される。

が、それは釈迦堂の体を傷つけることなく、空を斬った。

なんてことはない。

音速のスピードの太刀筋を、神速のスピードで背後に仰け反ってかわした。それだけに過ぎない。

この速度の斬激をよけた釈迦堂も十分に脅威だが、由紀江はそれに驚くことなく追撃を開始する。

今の釈迦堂の姿勢は大きく後ろに仰け反っている状態だ。とてもじゃないが、次の攻撃を避けれるとは到底思えない。

――――これは、チャンス！

そう考えると、由紀江は刀を上段に構えたかと思えば、まるで落雷のように両手に構えていた刀を振り下ろした。
狙いは当然、釈迦堂刑部の胴体。どうあがいても、避けられないであろう場所に振り下ろされる。

だが、釈迦堂はその刀が振り下ろされる速度よりも速く、右足を振り上げた。

そう。
避けられないのならば、迎撃してしまえばいいだけのこと。

――――直撃ッ！？

由紀江は攻撃を中断する。
このままでは釈迦堂のカウンターが直撃してしまうと判断したからだ。

――――この蹴りを受けては不味い。と、背筋が凍りつく。

釈迦堂の攻撃の狙いは由紀江の顎なのか。
真っ直ぐに彼の蹴りは底にめがけて進撃する。

防ぐのは不可能。
そう判断した由紀江は、何とか顔を上げて回避行動に移る。
決死の回避行動が功をなしたのか、釈迦堂の攻撃は空を蹴り穿った。
「安心すんのは、まだ早いと思うんだけど、なァ！」
最悪の危険は回避したかと思いきや、釈迦堂の蹴りはその場に急停止し、由紀江の頭部目掛けて振り下ろされる。
明確な“死”とはこういうものを言うのだろうか。
由紀江は全身の肉体のバネを使い、その場を後方へ飛び離脱する。
それから少し遅れて、ドンッ！　と、発破をかけた爆発音のような音が響き渡った。
釈迦堂の悪魔染みた一撃が、地面に突き刺さった音である。
とても、怪我人が放った一撃とは思えない。
この男、つくづく規格外――――。

由紀江の頭にあるのは、このような化け物にどうやったら勝てるのか。

どう展開しても、勝てるビジョンが映らない。

先ほどの攻撃だって、避けられたのはまぐれに等しいのだ。

加えて、釈迦堂の様子からして本気ではない。

どこか楽しんでいるかのような、そんな余裕が感じられる。怪我の具合を見ても、長期戦なんて出来る体ではないのに、彼は明らかに楽しんでいた。

と、そこに。

“怪物”は由紀江の思考を中断するかのように口を開いた。

「嬢ちゃんはこう思ってる筈だ、“この人には勝てない”ってなぁ」

「……」

由紀江は沈黙を以て返答をする。

返答せずとも、釈迦堂は分かっているからだ。

現に、釈迦堂は意地の悪い笑みを口元に張り付かせている。
彼は由紀江がどんなことを考えているか分かっていて、質問を投げかけているのだ。

「恥じることはねぇさ、お前さんじゃ俺には勝てねぇ。俺に勝てるとしたら、俺以上の力を持ってくるか、そこで血だらけになってる坊ちゃんのような一人で“戦争”出来る戦力を持ってくるしかねぇ」

釈迦堂は一度、王貴に視線を送る。
だがすぐに、視線を由紀江に戻した。

その表情からは、理解できないというかのような、そんな表情に変わる。
そして、こめかみの部分を右手の人差し指で掻きながら、

「そうだ、お前さんは俺に勝てねぇって分かってる。だって言うのにだ、どうして嬢ちゃんはまだ俺と殺り合おうとするかねぇ？　いや、俺としては願ったり叶ったり何だが」

釈迦堂が理解できないところはそこだ。

黛由紀江は間違いなく、釈迦堂刑部との戦力差を計りきっている。
由紀江がどうやっても埋まらない戦力差、どう足掻いてもどうしようもない差があることを分かっている。

だというのに、彼女は諦めることを知らない。
あの眼はまだ死んでおらず、あろうことか釈迦堂を出し抜こうとしている。そんな眼で由紀江は釈迦堂に向けている。

彼女が、川神百代や自分のような人種、つまり戦闘狂だったのならまだ納得もした。
だがアレは違う。むしろ、戦うことを良しとしない、実力を隠しなるべく戦わないように工夫をしている人種だ。

そんな人種がどうしてこうも、勝てない相手と相対するというのか。

釈迦堂も明確な答えは求めていない。
この質問は、言ってしまえば彼の気まぐれだ。答えたのならラッキー、返答がないのなら仕方ない。

それに、彼女の様子から考えてみれば、返答がない方が高確率だろう。

だからこそ――――。

「そんな事、簡単ですよ……」

由紀江が返答したことに、釈迦堂は驚いた。

そんな彼の様子などお構いなしに、由紀江は続ける。

「貴方に私の大事な人たちが傷つけられました。だから私は貴方を倒す、ただそれだけです」

驚く程、静かな声。

その声を聴いた瞬間、釈迦堂の心に正体不明の寒気が走った。

その原因は、由紀江の放つ迫力なのか、それとも別のモノなのか感知する前に、由紀江は口を開く。

「――――覚悟してください。私は、絶対貴方を、斬ります」

覚悟。

それが少女の覚悟なのだろう。

大事な物たちを傷つけた元凶。それを斬り捨てる覚悟。

殺しはしない。ただそれ相応の痛みを受けてもらう、たとえ刺し違えてたとしても、由紀江は必ず実行する。

それが、彼女の覚悟。

それを前にして、釈迦堂は笑う。

例の正体不明の悪感はまだ止まらない。

だが彼はそれすら楽しいと言うかのような、凶悪な笑みを張り付かせている。

笑いながら一言。

「いいねぇ、面白い」

己に流れる、邪悪に染まった気を開放する。

その刹那――――轟！　と。

釈迦堂を中心に衝撃波が発生した。

残り一つになった街灯は頼りなく揺れ、耐え切れなくなったのか

それは地面に落下した。
もうその場を照らす光は存在しない。

そんなことも気にせず、釈迦堂は意識を由紀江に向ける。

「その決意は面白ぇが、嬢ちゃん一人じゃ何も変わんねェぞ？」

「一人じゃねぇだろ」

声が聞こえた。
釈迦堂の耳には、それと同時に銃声が聞こえた。

その弾丸は、間違いなく釈迦堂を狙っていた。
着弾地点は眉間。

当たれば人間はおろか、生物で言うところの致命傷になりうる場所に迷うことなく弾丸は突き進む。

それでも、釈迦堂には脅威になりえない。
十分“見える”速度だ。

見えるのだから、避けられない道理などない。

案の定、釈迦堂は頭を振って避ける。
その弾丸は釈迦堂に着弾する訳がなく、折れてしまった街灯の柱に着弾した。

「随分とえげつないところを狙いますなァ？」

釈迦堂は“狙撃主”に視線を向けた。

狙撃主――――総理は由紀江の隣に並び立ち、改めて釈迦堂刑部と対峙する。
その両手には拳銃が握られていた。

「おめぇなら、避けるだろうと思ってよぉ」

「あの程度、眼を瞑っても避けれますわ。ところで、アンタが前線に出てきて良いんですかぃ？　負けちゃならない立場に居るんでしょうよ？」

「まぁそうだな……。この戦いに負けたら、俺には後がねぇよ。政権が交代するのも目に見えてやがる。お前の言うとおり、前線に出るべきじゃねぇやな」

ＫＯＳで勝者になるか、敗者になるか。
この戦いで、総理の今後が決まってしまう。勝者になりそのまま総理の座を維持できるのか、それとも敗者になり総理の座を追われるのか。

惜しかった、あと少しだった、では通用がしない。
勝つか負けるか。至極簡単で、残酷な現状。それが総理の今だ。

自分を信じてついてきてくれている者達のために、このＫＯＳでは負けることなど許されないのだ。

その現状から考えると、釈迦堂の言うとおり総理は前線に出るべきではない。
彼の得意である長距離からの射撃で、安全な立場で立ち回ることが正解であり正しいのだろう。

だが、

「俺が仮に頭が良い方だったら、こんな馬鹿な選択はしねぇんだろうよ。いいや、頭が良かったらＫＯＳに参加して賞金で政権立て直すなんて事態にはならねぇだろうなぁ」

呆れた口調でそう呟き、総理は片手に持っていた拳銃の銃口を真っ直ぐ釈迦堂に向ける。

安全装置など外しており、引き金に引っかかっている人差し指を少しでも引けば、銃弾は発射されることだろう。

総理も、そのことになんら戸惑っている表情はない。

「俺は馬鹿だからなぁ、だからこそ前線（ここ）にいる。それにだ、おめぇには仲間ァ二人もやられてんだよ。仲間がやられて黙って後ろで利口に狙い撃ってるほど、俺ぁ人間できちゃいねェ！」

「俺としちゃどうだっていい事ですわぁ……」

釈迦堂の体に纏う黒い闘気が色濃く染まり始める。

それと同時に、強く。尚強く、彼を中心に殺気が強まり始める。

そこまで威圧してなお、釈迦堂は何の気負いも感じられないかのような口調で、標的に言葉を投げる。

「さーて、これで2対1になった訳だぁ。加えて俺は怪我人。……それでもよぉ、これはハンデにもならねェ！」

轟！

と、釈迦堂を中心に衝撃破が展開する。

空気の壁を叩き、由紀江と総理の体を叩き潰す。

それでも彼らは立っていた。暴力に屈せず、目の前の怪物にも驚きもしない。

その二人の気迫に満足したのか、釈迦堂の笑みは益々増していく。

この2対1という不利の状況を楽しんでいるかのような、そんな笑みを浮かべている。

この男にとって、標的が2人に増えようが3人に増えようが関係ない。

立ち塞がるのなら叩いて潰すまで。己の欲望を叶えるために、撃滅するまでのこと。

その釈迦堂を前に、由紀江と総理は全神経を集中させる。

釈迦堂と言う怪物を前に、雑念に囚われていては一瞬で終わる。

由紀江は彼の体を斬ることを考え、総理は彼の体に銃弾を撃ちこむ事を考えなければならない。

そうでもしないと生き残れない。

そう。

例えこの場に“立っているべきではない者が立っていよう”と、“釈迦堂がその者に意識を向けていよう”と――――――。

「――――――」

瞬間。

目に見えていた釈迦堂の笑みが消えうせる。

正確に言えば、釈迦堂が視線をずらした途端、釈迦堂の表情と言う表情が消えた。

ありえないものを見つけたかのような、この世に存在しえないものを見つけたかのような表情に変わる。

いや、釈迦堂だけではない。

対峙していた由紀江、総理の動きも止まった。

目の前に釈迦堂がいるにも関わらず、“その者”に意識が向いてしまう。

“その者”が釈迦堂以上に脅威に映ったのか、はたまた釈迦堂以上に関心を示す対称だったのか。

こちらに“金髪紅眼の少年”が歩いてくる。
たったそれだけで、両者の動きが停止する。

そして遂に、彼らの前にそれは現れた。
金髪紅眼の少年――――霧夜王貴が。

「――――」

霧夜王貴は何をするでもなく、立ち止まると両手をじっと見る。
それから両手を握り締めたり、開いたりと簡単な運動を始めた。
まるで自分の体の調子を調べるかのような動き。

違和感。
あまりにも違和感。

あれだけ釈迦堂刑部に殺気を放っていた少年が、今度は無関心を貫き通している。

まるで――――あの少年が霧夜王貴でないかのような

「フン、ようやく謀が動き出したと言ったところか。余の臣下とし

ては随分と待たせたではないか」

由紀江も総理も釈迦堂も、少年が何を言っているのか分からなかった。

それと同時に感じるのが疑問。

――――この少年は一体誰なのだろうか？――――

という疑問だ。

姿形、声帯も霧夜王貴で間違いない。

だが雰囲気が違う。この世の全てを威圧するかのような雰囲気を醸し出していた。

二重人格とは違う。

まるで魂そのものが、違うかのような――――。

「誰だ、お前」

その口調には釈迦堂らしさなどかけらもない。

怪物は明らかに目の前の人物を警戒している。その体勢も、臨戦態勢。どんな攻撃がきても対処できるかのような、腰を沈めて警戒している。

そこでようやく霧夜王貴の姿をした人物は釈迦堂に視線を向ける。
釈迦堂の存在を今気付いた。といった表情で、

「塵芥風情が、誰の許可を得て余を見ている――――？」

一言。
この一言だけで、彼はこの場を制圧した――――。

特別な殺気も殺意も出していない。
にも拘らず、彼はたった一言で、この場にいる全員に恐怖を植え付ける。

いや。
一人だけ、たった一人だけ君臨者に刃向かう怪物がいる――――。

「人が質問してるんだからよォ、答えろってんだよなァ！」

釈迦堂刑部だ。
彼はようやく確信した。
先ほどまで感じていた正体不明の寒気。あれは黛由紀江に感じていたのではない、発祥現はこの男からだと――――！

釈迦堂の取った行動はシンプル。

彼は霧夜王貴の姿をした人物に駆け出した。

両者の距離はざっと５０メートルほど。
釈迦堂はその距離を一瞬のうちに詰める。その速さわずか０．５秒。まさに瞬の如く疾走。

その速さから繰り出されるテレフォンパンチ。
いくら大振りと言えど、ありえない速度で詰め寄られて繰り出される拳だ。
反応が出来る筈もない。加えて、霧夜王貴の接近戦の技能では反応も防ぐ術もない。

誰もが必殺を確信した刹那。

釈迦堂の拳が何かに着弾し、遅れて両者を中心に衝撃波が走る。
その何かとは、王貴が防ぐときに多用する気の壁でも、五行の金

行で作り上げた武装でもない。

“剣”。

右手に長剣程度の長さの剣を造り出し、それで釈迦堂の拳を防いでいた。

――――ありえねぇ。

釈迦堂に衝撃が走る。

霧夜王貴が自分の拳を剣で受け止める。といった単純なことで、彼は表情を驚愕に染め上げる。

違う。

それを受け止めた人物が川神百代クラスの武術の使い手なら納得がいく。

受け止められたのが霧夜王貴なのだ。しかも少年は受け止めるときに技術を用いていた。

ありえない。

霧夜王貴にそこまでの技量などある筈がない。

霧夜王貴に出来ないことを、釈迦堂の目の前にいる霧夜王貴はやってしまった。

――――このガキ、
――――誰だ？

「ほう、塵芥にしてはやるではないか？」

釈迦堂の思考を中断させるかのように、霧夜王貴の姿をした少年は言葉を漏らす。

彼はそれに答えることなく、地面を蹴って大きく後退する。

「ヒトの身の分際で、よくぞそこまで練り上げた。褒めて遣わそう」

その様子を見て、尊大に釈迦堂へと賛辞を送る。
そして、右手に持っていた長剣の剣先を釈迦堂へと向けて、

「貴様の力、王たる余にもっと見せてみよ」

霧夜王貴の姿をした謎の王が、一方的な開幕を宣言する――――――。

第４７話　現世に蘇りし古の王（後書き）

みなさんおはこんばんちは！
兵隊です！

前の話で王貴が血反吐はいた理由を話すといいましたね？
アレは嘘だ……！

ごめんなさい
思いのほか文字数が多くなってしまったので分けることにしました
とはいっても、次が更新されるのはいつになるのか……。

何はともあれ更新します！
皆さんお気軽にご意見ご感想などがありましたらよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8321l/

真剣で王に恋しなさい！

2011年11月2日02時13分発行